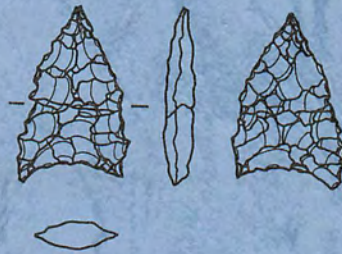


熊本県文化財調査報告 第142集

白鳥平 B 遺跡

九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設に伴う埋蔵文化財調査

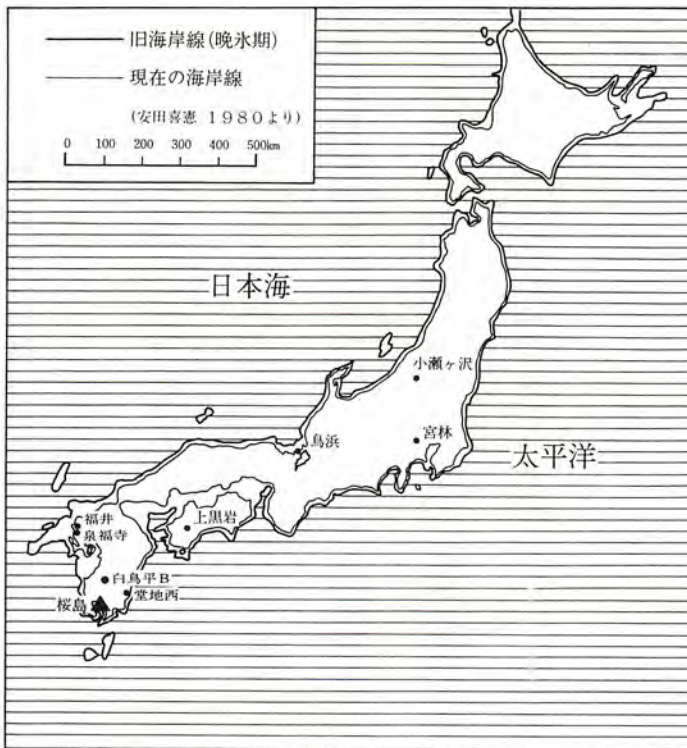


1994. 3

熊本県教育委員会

しらとりびら
白鳥平 B 遺跡

九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設に伴う埋蔵文化財調査



1994. 3

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、日本道路公団の九州縦貫自動車道（八代～えびの間）建設に伴い、昭和57年から路線予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を進めてまいりました。

ここに報告する熊本県人吉市赤池水無町字立山所在の白鳥平B遺跡は、平成3年度に発掘調査を実施し、平成5年度に報告書作成を行なったものであります。

調査の結果、熊本県内で初めて縄文時代草創期に属する爪形文土器・石器がまとまって出土したのをはじめ、先土器時代と縄文時代早期の良好な資料が検出され、大きな成果を得ることができました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術・研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査に際しましては、多方面で日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から御配慮を賜り、感謝致しております。さらに、専門調査員の先生方からは適切な御指導がありました。ここに心から厚く御礼を申し上げます。

平成6年3月31日

熊本県教育長 道 越 温

例 言

1. 本書は、日本道路公団の九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設計画に伴い、事前に実施した埋蔵文化財調査の調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、熊本県人吉市赤池水無町字立山に所在する白鳥平B遺跡で、日本道路公団福岡建設局からの委託を受けて、熊本県教育委員会が行なったもので、当初白鳥平II遺跡としていたが人吉市教育委員会刊行の「人吉市文化財地図」の記載にあわせ白鳥平B遺跡と改めた。
3. 当遺跡の発掘調査は、平成3年度に実施し、その整理・報告は平成5年度に行なった。
4. 本書は、層序に従って古い時代から順に報告している。
5. 本書に使用した地形図は、日本道路公団福岡建設局人吉工事事務所から提供を受けたものを基礎にしている。
6. 現地調査に関する実測及び写真撮影は調査員で行なった。また、遺構の製図は宮坂、日置正香・白井勝子が行なった。遺物の実測は、主として宮坂孝宏、植野治代がこれにあたり一部、日置、白井、戸田清恵が行なった。製図は宮坂、植野、日置、白井、戸田、宇都宮朋子が行なった。遺物の写真撮影は福田信子（整理嘱託）が行なった。
7. 本書の執筆は、主として宮坂がこれにあたり、一部を松本健郎（第I章第1節）が担当した。
8. 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行ない、宮坂が担当した。

本文目次

序文	
例言	
第Ⅰ章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第Ⅱ章 遺跡の概要	
第1節 遺跡の環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
第2節 遺跡の概要	10
第3節 遺跡の層位と包含層	11
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 先土器時代の遺物	13
1. 遺物の出土層位とその分布	13
2. 石器組成と分布の構成	14
3. 出土石器とその分布	19
4. まとめ	38
第2節 縄文時代草創期の遺物	
1. 遺構とその分布	41
2. 出土遺物とその分布	41
3. まとめ	79
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物	81
1. 遺構とその分布	82
2. 遺物とその分布	91
3. まとめ	178
第4節 縄文時代前期～古墳時代の遺物	
1. 遺物とその分布	180
2. まとめ	202
第5節 その他の遺構と遺物	
1. 遺構とその分布	203
2. 遺物とその分布	212
3. まとめ	212
第Ⅳ章 総括	
1. 近世の遺構・遺物について	213
2. 縄文時代前期～古墳時代について	214
3. 縄文時代早期について	214
4. 縄文時代草創期について	218
5. 先土器時代について	220
参考文献	
周辺遺跡採集の石器資料について	
図版	

挿 図 目 次

第1図	地形図	3	第41図	遺物分布図(尖頭器、細刃器)・	61
第2図	球磨川流域図	6	第42図	石器実測図	62
第3図	遺跡分布図	7	第43図	遺物分布図(削器・抉入石器・ 楔形石器・石錐)	63
第4図	地形断面図	10	第44図	石器実測図	64
第5図	土層図	11	第45図	石器実測図	65
第6図	白鳥平B遺跡調査区域図	13	第46図	石器実測図	66
第7図	先土器時代遺物分布図	15	第47図	遺物分布図(磨石・敲石、 石皿・台石)	68
第8図	遺物分布図1	16	第48図	石器実測図	69
第9図	遺物分布図2	17	第49図	石器実測図	70
第10図	遺物分布図3	18	第50図	遺物分布図(二次加工ある不定 形石器、使用痕ある剥片)	71
第11図	石器実測図	20	第51図	石器実測図	72
第12図	石器実測図	21	第52図	石器実測図	74
第13図	石器実測図	22	第53図	石器実測図	75
第14図	石器実測図	24	第54図	遺物分布図(石核)	77
第15図	石器実測図	25	第55図	石器実測図	78
第16図	石器実測図	26	第56図	遺構配置図	81
第17図	石器実測図	27	第57図	集石実測図	82
第18図	石器実測図	28	第58図	集石実測図	83
第19図	石器実測図	30	第59図	集石実測図	84
第20図	石器実測図	31	第60図	集石実測図	85
第21図	石器実測図	32	第61図	集石実測図	86
第22図	石器実測図	34	第62図	集石実測図	87
第23図	石器実測図	35	第63図	配石土坑実測図	88
第24図	石器実測図	36	第64図	土坑実測図	90
第25図	石器分布図4(北側遺物集中部)	38	第65図	遺物分布図(土器)	92
第26図	集石実測図	40	第66図	縄文時代早期土器分析図	93
第27図	遺物分布図(土器)	42	第67図	遺物分布図(押型文土器)	94
第28図	縄文時代草創期土器分布図	43	第68図	土器実測図	96
第29図	土器実測図	44	第69図	土器実測図	98
第30図	土器実測図	47	第70図	遺物分布図(条痕土器)	100
第31図	土器実測図	48	第71図	土器実測図	102
第32図	土器実測図	50	第72図	遺物分布図(円筒形条痕文土器)	104
第33図	遺物分布図(石器)	52	第73図	遺物分布図(塞ノ神式土器)	107
第34図	縄文時代草創期石器分布図	53	第74図	土器実測図	110
第35図	遺物分布図(石鏃・細刃器)	54	第75図	土器実測図	112
第36図	遺物分布図(石鏃)	55	第76図	土器実測図	116
第37図	石器実測図	57	第77図	遺物分布図(縄文土器)	120
第38図	石器実測図	58			
第39図	石器実測図	59			
第40図	石器実測図	61			

第78図	土器実測図	122	第119図	礫分布図	174
第79図	遺物分布図 (平袴式土器)	125	第120図	遺物分布図 (石製品・土製品)	175
第80図	遺物分布図 (石器)	127	第121図	石製品実測図	176
第81図	遺物分布図 (石鏃)	129	第122図	土製品実測図	177
第82図	石器実測図	130	第123図	遺物分布図 (土器)	181
第83図	石器実測図	131	第124図	遺物分布図 (轟式(系)、 春日式(系))	182
第84図	石器実測図	132	第125図	遺物分布図 (南福寺式土器)	184
第85図	遺物分布図 (尖頭状石器)	135	第126図	遺物分布図 (山ノ寺式土器)	185
第86図	石器実測図	136	第127図	遺物分布図 (弥生時代中期の 甕形土器、成川式土器)	186
第87図	遺物分布図 (石匙、削器)	137	第128図	土器実測図	187
第88図	石器実測図	138	第129図	土器実測図	188
第89図	石器実測図	139	第130図	土器実測図	189
第90図	石器実測図	140	第131図	遺物分布図 (石器)	190
第91図	石器実測図	141	第132図	遺物分布図 (石器類)	191
第92図	遺物分布図 (石錐)	142	第133図	石器実測図	193
第93図	遺物分布図 (楔形石器)	143	第134図	石器実測図	194
第94図	石器実測図	144	第135図	遺物分布図 (磨石・敲石・ 石皿・石台)	196
第95図	遺物分布図 (磨石・敲石)	148	第136図	石器実測図	197
第96図	石器実測図	149	第137図	石器実測図	198
第97図	石器実測図	150	第138図	石器実測図	199
第98図	石器実測図	151	第139図	遺物分布図 (原石、剥片・ 碎片)	200
第99図	石器実測図	152	第140図	遺構配置図	204
第100図	石器実測図	153	第141図	溝遺構実測図	205
第101図	遺物分布図 (石皿・台石)	154	第142図	溝遺構断面図	206
第102図	石器実測図	155	第143図	土坑実測図	207
第103図	石器実測図	156	第144図	土坑実測図	208
第104図	石器実測図	157	第145図	遺物分布図 (陶磁器類)	209
第105図	石器実測図	158	第146図	遺物実測図	210
第106図	遺物分布図 (二次加工ある 不定形石器)	159	第147図	土器分布図①	215
第107図	石器実測図	160	第148図	土器分布図②	216
第108図	石器実測図	161	第149図	土器分布図③	217
第109図	遺物分布図 (使用痕ある剥片)	162	第150図	土器分布図④	218
第110図	石器実測図	163	第151図	爪形文土器編年図	219
第111図	石器実測図	164	第152図	先土器時代遺物分布図 (北側)	221
第112図	石器実測図	165			
第113図	石器実測図	166			
第114図	石器実測図	167			
第115図	遺物分布図 (石核)	170			
第116図	石器実測図	171			
第117図	石器実測図	172			
第118図	遺物分布図 (剥片・碎片)	173			

図 版 目 次

- 図版 1 全景
 - 1 南西上空から
 - 2 上空から
- 図版 2 縄文時代草創期の調査
 - 1 調査風景
 - 2 出土状態
- 図版 3 縄文時代早期の調査
 - 1 II, III-B区(北から)
 - 2 VII-C, D区(北東から)
- 図版 4 縄文時代早期の遺構
 - 1 1号集石の検出状況
 - 2 2号集石の検出状況
 - 3 2号集石の完掘状態
- 図版 5 先土器時代の遺物
- 図版 6 先土器時代の遺物
- 図版 7 先土器時代の遺物
- 図版 8 先土器時代の遺物
- 図版 9 縄文時代草創期の土器
- 図版10 縄文時代草創期の土器
- 図版11 縄文時代草創期の土器
- 図版12 縄文時代草創期の石器
- 図版13 縄文時代草創期の石器
- 図版14 縄文時代草創期の石器
- 図版15 縄文時代草創期の石器
- 図版16 縄文時代草創期の石器
- 図版17 縄文時代早期の土器
- 図版18 縄文時代早期の土器
- 図版19 縄文時代早期の土器
- 図版20 縄文時代早期の土器
- 図版21 縄文時代早期の土器
- 図版22 縄文時代早期の土器
- 図版23 縄文時代早期の土器
- 図版24 縄文時代早期の土器
- 図版25 縄文時代早期の土器
- 図版26 縄文時代早期の石器
- 図版27 縄文時代早期の石器
- 図版28 縄文時代早期の石器
- 図版29 縄文時代早期の石器
- 図版30 縄文時代早期の石器
- 図版31 縄文時代早期の石器
- 図版32 縄文時代早期の石器
- 図版33 縄文時代早期の石器
- 図版34 縄文時代早期の石製品, 土製品
- 図版35 縄文時代前期～古墳時代の土器
- 図版36 縄文時代前期～古墳時代の土器
- 図版37 縄文時代前期～古墳時代の石器

第 I 章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

昭和52年3月29日付けで日本道路公団福岡建設局から熊本県教育委員会に対し、九州縦貫自動車道（八代～えびの間）の分布調査依頼があり、同年8月4日～6日と8月10日～12日の2回にわたる分布調査を実施した。その結果、下記の遺跡（参考地）を確認した。

八代市（東片町古墳群、上片町条里遺跡）、球磨郡山江村（淡島遺跡、狸谷遺跡、本城遺跡、高城遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡）、人吉市（笹栗山遺跡、梢山遺跡、佐無田狩所遺跡、石清水遺跡、七地条里遺跡、尾丸横穴群、原城跡、尾丸古塔碑群、七地遺跡、人我胸遺跡、屋子遺跡）

この分布調査の結果を基に、八代～人吉間の試掘調査を行ない、昭和57年～62年にかけて発掘調査を行なった。

その後、改めて人吉～えびの間の分布調査を行ない、前回確認されていた屋子遺跡を含めて、新たに6遺跡（屋子遺跡、白鳥平A遺跡、白鳥平B遺跡、赤池永谷遺跡、人我胸遺跡、古屋敷遺跡）を確認した。

この結果を日本道路公団福岡建設局へ回答し、その後日本道路公団から文化庁長官あて協議書が提出され、熊本県教育委員会の意見を付けて文化庁長官あてに発送した。文化庁からは、「熊本県教育委員会と協議の上、事前に発掘調査を実施すること。なお、調査の結果、重要な遺構等が発見されたときは、設計変更等によりその保存に配慮すること」という通知があった。

熊本県教育委員会は日本道路公団の依頼を受け、平成元年度から各遺跡の試掘調査を行なった。白鳥平B遺跡については平成元年10月に行ない、文化財保護主事西住欣一郎が担当し、「アカホヤ層下から、土器及び剥片類が検出され、この台地一帯が縄文時代早期の遺跡であり本調査が必要である。またシラス層直上から剥片類が検出されることから先土器時代の遺物の包含層が存在する可能性がある」との結果を得た。

日本道路公団と協議のうえ、本格的な発掘調査は平成3年度から実施することになり、文化財保護主事宮坂孝宏と嘱託宮川聡、奥田和秀が担当した。

第1章 調査の概要

調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 大塚正信（平成3、4年度文化課長、平成5年度首席教育審議員兼文化課長）

調査総括 隈 昭志（平成3、4年度教育審議員・課長補佐）

平野芳久（平成5年度教育審議員・課長補佐）

松本健郎（平成3、4年度文化財調査第二係長、平成5年度主幹兼文化財調査第二係長）

調査・報告 宮坂孝宏（文化財保護主事、調査・報告書）

書 担 当 宮川 聡（囑託・本調査） 奥田和秀（囑託・本調査）

植野治代（囑託、報告書） 日置正香（整理囑託、報告書）

白井勝子（臨時、報告書） 戸田清恵（臨時、報告書）

宇都宮朋子（臨時、報告書）

専門調査員 賀川光夫（別府大学教授） 橘 昌信（別府大学教授）

山中一郎（京都大学助教授） 大塚達朗（東京大学助手）

安蒜政雄（明治大学教授）

新東晃一、宮田栄二（鹿児島県埋蔵文化財センター）

調査指導及び協力者（敬称略、順不同）

三島 格（肥後考古学会会長）、織笠 昭（東海大学助教授）、岡本東三（千葉大学助教授）、甲元真之（熊本大学助教授）、山下秀樹（京都文化博物館）、宮坂 清（下諏訪町教育委員会）、亀田直美（早稲田大学助手）、山崎純男（福岡市教育委員会）、長野真一、牛ノ浜 修、東 和幸（鹿児島県埋蔵文化財センター）、長嶺 均（沖縄県教育委員会）、網田龍生、稲津暢洋（熊本市教育委員会）、澤田宗順（八代市立博物館）、和田好史、鶴嶋俊彦（人吉市教育委員会）、黒田裕司（三加和町教育委員会）、浦田信智（西合志町教育委員会）、清田純一（城南町教育委員会）、人吉市教育委員会

調査事務局 松崎厚生（平成3～5年度課長補佐）、平野芳久（平成5年度教育審議員・課長補佐）、木下英治（平成3～5年度主幹・経理係長）、大広美枝子（平成3年度主任主事）、川上勝美（平成3年度主任主事）、高濱保子（平成4、5年度参事）、相馬治久（平成4、5年度参事）

道路公団 村田迪雄（人吉工事事務所長）、久保伸一（人吉工事事務所副所長）

安岡東一（人吉工事事務所工事長）、喜多 徹（人吉工事事務所庶務課長）

財津 勝（人吉工事事務所工務課長）

第2節 調査の方法と経過

九州縦貫自動車道は、遺跡が立地する丘陵をほぼ南北に横ぎって、建設される計画である。調査区画の設定は、この自動車道の幅杭とそこから調査区内に任意に延長し行なった。

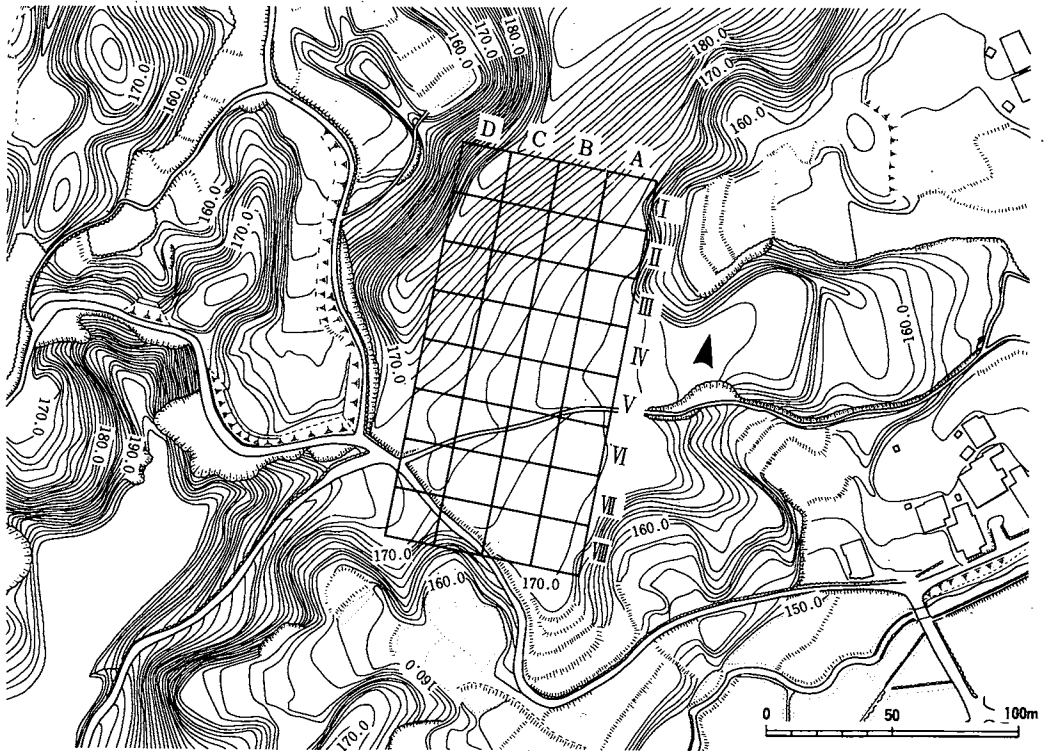
まず、S T A 436+60の東側に設定された幅杭から任意に延長した線を基準とし、20m×20mの大区画を設定した。この大区画は、北→南へI～Ⅶ、東→西へA～Dとして設定した。この大区画を4m×4mの中区画25個に分割し、1～25という番号を付した。このように設定した大区画と中区画を基本として調査を実施した。

調査の手順と方法は、以下のとおりである。

まず、重機による表土除去を行ない、その清掃の後トランシットを使用して、4m×4mの中区画を設定した。20mごとに丸太杭を使用した。

調査は、遺構の検出と遺物の検出を中心に実施した。

遺構は、平面形の確認を行なった後に、土層観察のため土手を残し掘り下げた。その観察後土手を取り除いて全体像を確認する。その間に作成される資料には、 $\frac{1}{50}$ （場合によっては $\frac{1}{25}$ ）に縮尺して作る平面図、土層断面図、断面図などがある。



第1図 地形図

第 I 章 調査の概要

遺物の検出は、上記した遺構調査の完了後に実施した。検出遺物は、中区画別、基本土層別、遺物の種類別に台帳を作り遺物番号を付した。この台帳に記載する事項には、土器型式、文様、石器器種、石材、などがある。

こうした発掘調査作業のほか、関連調査として周辺に分布する遺跡の所在確認調査を行なった。その成果は、第 II 章第 1 節の歴史的環境の項に示している。

次に、調査の経過を月別に示しておこう。

8 月 発掘調査の準備及び調査の開始。調査事務所の建設。調査区全面の表土剥ぎ作業。調査区内の清掃作業。調査区画の設定。遺構確認作業。

9 月 本格的な調査の開始。調査は、VI B～D 区及び VII C、D 区から始めた。ここでは表土を除去した段階で濁ったシラスが約 15cm の厚さで確認できた。この面からガチガチの硬化面が確認された。ほぼ東西に走る道路状遺構である。この遺構周辺から正方形や長方形の炭化物のつまった土坑を確認した。

10 月 道路状遺構及び土坑の実測を行う。また VI C 区で縄文時代晩期の土器集中部分を検出し実測を行う。VII C 区を中心に 4 本の溝遺構を確認し、実測を行った。

11 月 表土を除去した段階で、遺物の散布の希薄な IV B～V D 区で任意に中区画ごとに掘り下げを行った。その結果 IV B、C 区及び V B 区と III B 区で 7 基の集石遺構を検出し、実測を行った。

12 月 II B 区及び III B 区を中区画ごとに、掘り下げを行った。その結果 II B 区で爪形文土器とそれに伴う石器群を検出した。また並行して VI～VIII 区のアカホヤ層下（V 層以下）の掘り下げを行った。

1 月 II B 区での調査を継続しながら、VI～VIII 区の掘り下げを行った。

2 月 II B 区での調査を継続しながら、VI～VII 区の掘り下げを急いだ。

3 月 いよいよ調査終了の月である。II B 区の掘り残し部分の発掘を進めながら、VII C 区の西側の掘り下げを急いだ。また土層図や地形図など必要な図面の作成を行った。

以上の経過により、調査は 3 月無事終了した。

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の環境

1. 地理的環境

白鳥平B遺跡の所在する人吉市は、九州山地に挟まれ大きく口を開けた標高100～200mを測る断層盆地である。

盆地の中央には、球磨川が東西に貫流する。この球磨川は、人吉盆地を抜けるとその流れを大きく北に変え、蛇行しながら八代（不知火）海に注ぐ全長115kmの九州でも有数の河川である。また球磨川の流域面積は、約1880km²で熊本県の面積の約25%を占めている。支流の数は、実に80本以上を数える県下有数の規模をもつ河川である。

人吉盆地は、この球磨川の流路に沿って存在する沖積地と台地・丘陵に分けられ、その周辺に山地が位置する。

下球磨地方（人吉市周辺）の球磨川南岸は、始良起源の入戸火砕流（シラス）を基盤とする台地・丘陵が分布している。またこの丘陵は、加久藤（宮崎県）～大口（鹿児島県）にかけての山地に連なり、支流によって開析され谷を形成している。また人吉盆地全体を眺めた場合、中球磨地方の球磨川南岸の台地・丘陵は、白髪岳山地の麓に形成された、複合扇状地である。球磨川北岸では、川辺川によって形成された、扇状地と阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵地がある。このように人吉盆地の台地・丘陵には、その生成の違いがある。

またこのような台地・丘陵及び沖積地を取り囲むように山地が広がる。このような環境の中、先史時代の人々の生活に欠くことのできない道具である石器の素材（石材）のあり方を球磨川流域での岩石・岩層の分布からみていく（第2図）。

白鳥平A遺跡出土の石器の中で、最も多いのは、黒耀石・珪岩である。

黒耀石は、人吉市桑ノ木津留と球磨村の白浜林道で産出が確認されている。また鹿児島県大口市の日東及びその周辺にも原産地が分布している。珪岩は、人吉盆地の北側の山地に岩脈があり、川原や礫層中に転石の形で存在し入手が容易である。また安山岩は、盆地南西の山地に分布し入手が容易である。これらの石器石材は、すべてそれぞれの支流によって運ばれ球磨川の川原で転石として容易に入手できる。

2. 歴史的環境

白鳥平B遺跡は、球磨川の支流である人我胸川の流域に存在する。ここでは、人吉市周辺（下

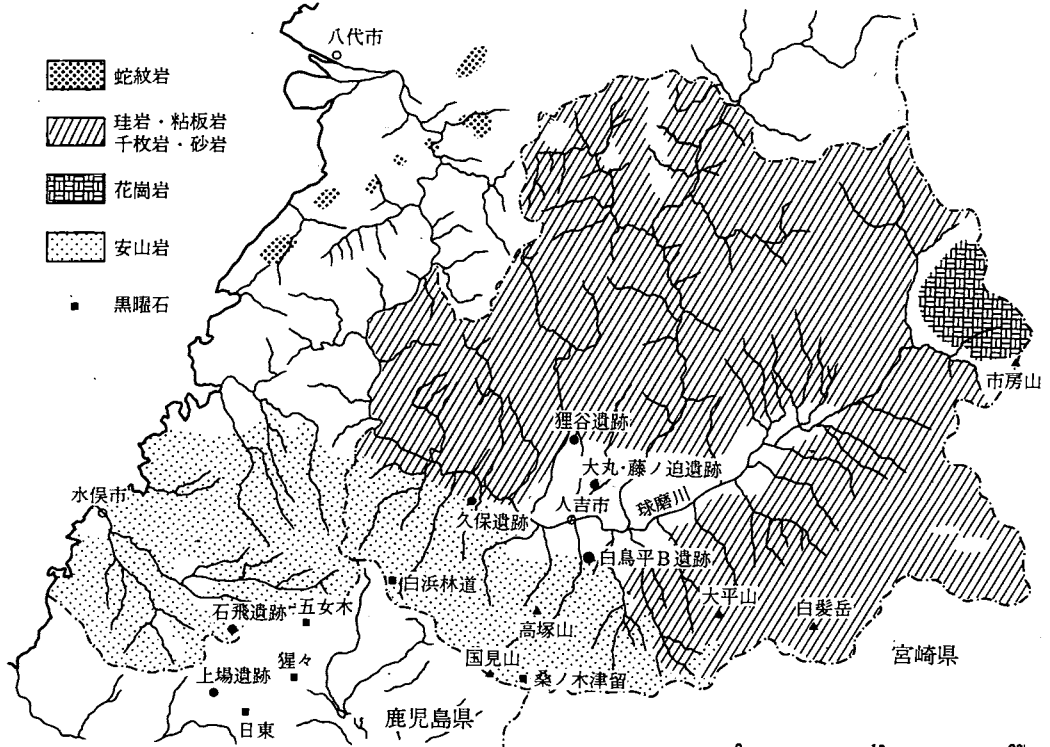
球磨地方)の先土器時代～古墳時代縄文時代の遺跡について概観する。

(1) 先土器時代

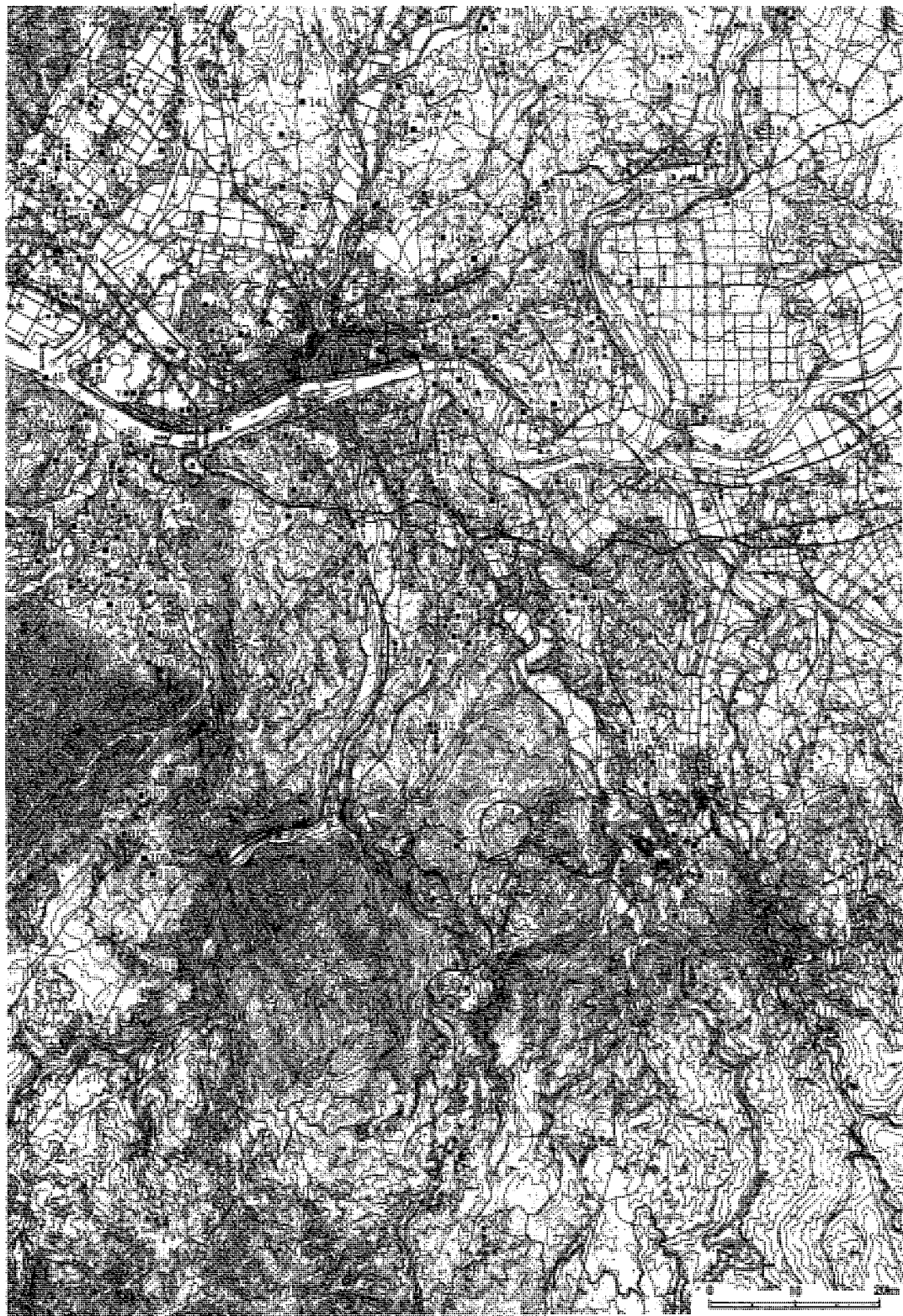
現在までに確認されている先土器時代の遺跡は、人吉・球磨地方に31箇所を数える。これらの遺跡の多くが人吉市・山江村を中心とする地域に存在する。しかしこれらの遺跡の中で、狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡(144)、高城遺跡、鼓ヶ峰遺跡(31)、天道ヶ尾遺跡(73)、村山開谷遺跡(43)、血気ヶ峰遺跡(28)、城・馬場遺跡第2地点(146)、島廻遺跡(87)、白鳥平A遺跡(83)、白鳥平B遺跡(84)、中尾別府遺跡等を除けば、すべて表面採集によるものであり、その全体像については不明な部分が多く残されている。また、近年の開発に伴う発掘調査の増加により、A T (シラス) 下位の石器文化が確認され、類例が増えつつある。狸谷遺跡(山江村)、久保遺跡(球磨村)、血気ヶ峰遺跡(人吉市)である。この中で血気ヶ峰遺跡のI石器文化は、曲野遺跡の石器文化段階に比定できるもので、人吉・球磨地方の先土器文化を考える上で貴重な資料であり、報告書の刊行が待たれる。

(2) 縄文時代

平成3年度の調査で、白鳥平B遺跡において草創期に属する爪型文土器が検出された。この時期の遺跡は、近年南九州でも出土例が増加している。熊本県内では、狸谷遺跡、里の城遺跡で隆起線文土器が、また無田原遺跡、白鳥平B遺跡で爪形文土器が検出されている。中でも白鳥平B遺跡では、同一層から爪形文土器と共伴する石器群がまとまって検出され、同時期の南



第2図 球磨川流域図



第3図 遺跡分布図

第II章 遺跡の概要

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	典拠他	番号	遺跡名	所在地	時代	典拠他
1	後田	人吉市上原町後田	縄文	①	76	南目	人吉市七地前南目	縄文・古墳	①
2	馬草野	〃 〃 馬草野	〃	①	77	花立	〃 〃 花立	〃	①
3	羽田	〃 〃 羽田口	〃	①	78	赤池原	〃 〃 赤池原	〃	①
4	牛塚古墳	〃 〃 牛塚	古墳	①	79	下須馬場	〃 〃 下須馬場・段治ケ迫	縄文	①
5	牛塚	〃 〃 〃	縄文	①	80	千太郎	〃 〃 蟹作町千太郎	〃	①
6	六地藏	〃 〃 六地藏	〃	①	81	無田ノ原	〃 〃 無田ノ原	縄文・古墳	①
7	滑来寺	〃 〃 滑来寺	〃	①	82	中通	〃 〃 赤池原町西中通・東中通	縄文・古墳	①・⑩
8	尾崎	〃 〃 尾崎	〃	①	83	白鳥平A	〃 〃 赤池水無立山	先土器・縄文	①・⑩
9	広平	〃 〃 広瀬	〃	①	84	白鳥平B	〃 〃 〃	〃	①
10	平ノ上	〃 〃 平ノ上	〃	①	85	水追	〃 〃 水追	縄文	①
11	天宝物	〃 〃 天宝物	〃	①	86	赤池水谷	〃 〃 水谷	〃	①・⑩
12	八王子	〃 〃 八王子	〃	①	87	鳥廻	〃 〃 鳥廻	先土器・縄文	①・⑩
13	野間	〃 〃 下原町野間	〃	①	88	早水	〃 〃 早水・藪野町平山	縄文	①
14	山仁田	〃 〃 山仁田	〃	①	89	石野	〃 〃 赤池原町石野	〃	①
15	井龍	〃 〃 井龍	〃	①	90	平谷	〃 〃 東漆田町平谷	〃	①
16	堀久保園	〃 〃 堀・久保園	〃	①	91	後平	〃 〃 下漆田町後平	〃	①
17	馬場	〃 〃 馬場	〃	①	92	椎貝	〃 〃 東漆田町椎貝	〃	①
18	荒毛	〃 〃 小園・角ノ前・迫田	弥生・古墳	①・⑦	93	野田	〃 〃 野田	〃	①
19	無田	〃 〃 無田	縄文	①	94	水谷	〃 〃 東間上町水谷	〃	①
20	山王	〃 〃 山王	〃	⑦	95	宇野	人吉市西間上町表宇野	縄文	①
21	上ノ段	〃 〃 中神町上ノ段	〃	①	96	茂田	〃 〃 茂田	〃	①
22	平原	〃 〃 平原	古墳	①	97	八峰	〃 〃 下永野町八峰	〃	①
23	石原	〃 〃 石原	縄文	①	98	東耳取A	〃 〃 東耳取	〃	①
24	桜ノ前	〃 〃 桜ノ前	〃	①	99	東耳取B	〃 〃 〃	〃	①
25	山入	〃 〃 合ノ原町山入	〃	①	100	文殊ノ前	〃 〃 文殊ノ前	弥生	①
26	下山	〃 〃 下山	〃	①	101	斧研	〃 〃 斧研	縄文	①
27	永峰	〃 〃 瓦屋町永峰	〃	①	102	射馬ノ本	〃 〃 上永野町射馬ノ本	先土器・縄文	①・⑩
28	血気ヶ峰	〃 〃 鬼木町血気ヶ峰	先土器・縄文	①・⑧	103	表村	〃 〃 表村	縄文	①
29	南打水	〃 〃 南打水	弥生	①	104	西原	〃 〃 西原	〃	①
30	善生院	〃 〃 善生院	縄文	①	105	水野桑木津留	〃 〃 桑木津留	〃	①
31	鼓ヶ峰	〃 〃 願成寺町鼓ヶ峰	先・縄・弥	①・⑨	106	融山	〃 〃 融山	〃	①
32	上の寺C	〃 〃 上の寺	縄文・弥生	①	107	赤松ヶ尾	〃 〃 赤松ヶ尾	〃	①
33	釜屋	〃 〃 釜屋	縄文	①	108	永葉山	〃 〃 永葉	先土器・縄文	①・⑩
34	上の寺A	〃 〃 上の寺	〃	①	109	成石A	〃 〃 木地屋町成石	縄文	①
35	石滑水	〃 〃 上石滑水	〃	①・⑩	110	成石B	〃 〃 〃	〃	①
36	上の寺B	〃 〃 上の寺	〃	①	111	野畑	〃 〃 野畑	先土器	①・⑩
37	杉園	〃 〃 杉園	弥生	①	112	楠木迫	〃 〃 赤池水無町楠木迫	先土器・縄文	①・⑩
38	鬼木古墳	〃 〃 鬼木町鬼木	古墳	①	113	大野A	〃 〃 大野町	縄文	①
39	萩	〃 〃 中脊井町萩原	古墳	①	114	大野B	〃 〃 〃	〃	①
40	大村横穴群	〃 〃 城本町城本・島ヶ岡	〃	①・⑩	115	孫四郎	〃 〃 上漆田町孫四郎	〃	①
41	尾山園	〃 〃 観音堂・尾園	縄文	①	116	頭無	〃 〃 頭無	縄文・古墳	①
42	村山	〃 〃 上林町蟹ヶ谷	〃	①・⑩	117	日向原	〃 〃 下田代町向原	〃	①
43	村山閣	〃 〃 村山	先土器・縄文	①・⑩	118	下原	〃 〃 下原	縄文	①
44	浜川	〃 〃 下城本町浜川	縄文	①	119	川添	〃 〃 川添	縄文・古墳	①
45	中堂	〃 〃 中神町中堂	〃	①・⑩	120	中原	〃 〃 上田代町中原	縄文	①
46	中尾	〃 〃 下戸越中尾	先土器	①	121	田代大原	〃 〃 大原	縄文・弥生	①
47	三日ヶ原	〃 〃 三日ヶ原	縄文	①	122	馬渡	〃 〃 大畑町馬渡	縄文	①
48	今村	人吉市下戸越町今村	縄文	①	123	政井野	〃 〃 上田代町政井野	〃	①
49	高山	〃 〃 高山	先土器・縄文	①	124	清水	〃 〃 大畑町清水	〃	①
50	唐渡神	〃 〃 唐渡神	古墳	①	125	小麦野	〃 〃 小麦野	〃	①
51	唐渡神	〃 〃 〃	縄文	①	126	三石	相良村柳瀬三石	縄文・弥生	②
52	内ノ原B	〃 〃 内ノ原	古墳	①	127	平家城原跡	〃 〃 中原	弥生	②
53	内ノ原A	〃 〃 〃	縄文	①	128	〃	〃 〃 〃	縄文	②
54	大坪	〃 〃 大坪	〃	①	129	人吉ゴルフクラブ	〃 〃 十島	〃	②
55	高栗	〃 〃 高栗	〃	①	130	十島	〃 〃 〃	〃	②
56	永栗	〃 〃 永栗	〃	①	131	二本松	人吉市願成寺町二本松	先土器	②
57	永栗	〃 〃 上戸越町永栗	〃	①	132	藪原	山江村山田藪原	縄文	②
58	原	〃 〃 大原	〃	①	133	〃	〃 〃 〃	〃	②
59	笹淵	〃 〃 笹淵	〃	①	134	別府古墳群	〃 〃 別府	古墳	②
60	耳取	〃 〃 下永野町東耳取	〃	①	135	塚原	〃 〃 塚原	縄文	②
61	瓜生	〃 〃 瓜生	〃	①	136	屋敷下	〃 〃 屋敷下	〃	②
62	門木	〃 〃 門木	〃	①	137	京塚古墳	〃 〃 京塚	古墳	②
63	東耳取	〃 〃 東耳取	〃	①	138	京塚	〃 〃 〃	縄文	②
64	下天ヶ野	〃 〃 下天ヶ野	縄文・古墳	①	139	東浦古墳群	〃 〃 東浦	古墳	②
65	矢黒	〃 〃 矢黒町西園・下矢黒	縄文	①	140	山江中学校	〃 〃 辻・中辻	縄文	②
66	稲荷山	〃 〃 西間下町遊葉ヶ迫	〃	①	141	一本松	〃 〃 一本松	〃	②
67	遊葉ヶ迫	〃 〃 〃	〃	①	142	手石方	山江村山田手石方	縄文	②
68	捨君畑	〃 〃 捨君畑	〃	①	143	長ヶ峰	〃 〃 長ヶ峰	〃	②
69	岩内	〃 〃 岩内	〃	①	144	大丸・藤ノ迫	〃 〃 大丸	先土器・縄文	③
70	原畑	〃 〃 七地町原畑	〃	①	145	城・馬場	〃 〃 城・馬場	縄文	④
71	七地水田	〃 〃 迫田	〃	①・⑩	146	城馬場跡	〃 〃 〃	先土器・縄文	⑤
72	里田	〃 〃 里田・沼明・迫田	〃	①	147	塩井川	人吉市鬼木町塩井川	縄文	②
73	天道ヶ尾	〃 〃 天道ヶ尾	先土器・縄文	①・⑩	148	梢山	〃 〃 梢山	〃	②
74	七地	〃 〃 七地	古墳	①	149	塚	綿町大字西宇内門	弥生	⑥
75	尾丸	〃 〃 尾丸	縄文	①	150	大王原	錦町大字西宇内大王原	縄文	⑥

第1節 遺跡の環境

第2表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	典拠他	番号	遺跡名	所在地	時代	典拠他
151	三石横穴群	相良村大字柳瀬字三石	古墳	⑤	160	覚井古墳	相良村大字柳瀬字覚井		⑥
152	雨宮	" 大字川辺字上層	弥生	⑥	161	一丸	錦町大字西字一丸	縄文	⑤
153	石坂古墳群	" 大字深木字石坂鶴野	古墳	⑥	162	十日市横穴群	" 大字木上字十日市	古墳	⑥
154	深水小園	" 大字深水字小園	古墳(集葬)	⑥	163	城ヶ峰横穴群	相良村大字柳瀬字城ヶ峰	"	⑥
155	深水谷川	" 大字深水字谷川	縄文・歴史	⑥	164	小原横穴	" 大字柳瀬字小原	"	⑥
156	人吉農芸学院	鏡町大字木上字平岩	古墳	⑥	165	井沢	" 大字柳瀬字井沢	縄文・弥生	⑤
157	高原	" 大字木上字境田	弥生	⑥	166	井沢権現社	" 大字柳瀬字井沢	先土器	⑥
158	瀬戸山古墳群	相良村大字深水字瀬戸山	古墳	⑥	167	京ヶ峰横穴	錦町大字西字京ヶ峰	古墳	⑥
159	吉野尾古墳	" 大字柳瀬字吉野尾	"	⑥					

①『人吉市文化財地図』人吉市教育委員会1991

②木崎康弘『狸谷遺跡調査報告』熊本県教育委員会1987

③木崎康弘『大丸・藤ノ迫遺跡調査報告』熊本県教育委員会1986

④大田幸弘・松舟博満『城・馬場遺跡調査報告』熊本県教育委員会1990

⑤1990年度、熊本県教育委員会発掘調査

⑥坂田和弘『深水谷川遺跡調査報告』熊本県教育委員会1994

⑦鶴嶋俊彦『荒毛遺跡調査報告書』人吉市教育委員会1992

⑧1992年度、人吉市教育委員会発掘調査

⑨西住欣一郎『鼓ヶ峰遺跡調査報告』熊本県教育委員会1988

⑩文化庁文化財保護部『全国遺跡地図 熊本県』1981

⑪高木正文『装飾古墳総合調査報告』熊本県教育委員会1984

⑫赤瀬恵・椎葉文雄『村山遺跡調査報告書』人吉市教育委員会1979

⑬鶴嶋俊彦『村山開谷遺跡調査報告書』人吉市教育委員会1988

⑭和田好史『中堂遺跡調査書』人吉市教育委員会1993

⑮大田幸博『七地水田遺跡調査報告』熊本県教育委員会1989

⑯西住欣一郎『天道ヶ尾遺跡調査報告Ⅰ、Ⅱ』熊本県教育委員会1989、1990

⑰1991年度、人吉市教育委員会発掘調査

⑱宮坂孝宏『白鳥平A遺跡調査報告』熊本県教育委員会1993

⑲大田幸博・松舟博満『赤池永谷遺跡調査報告』熊本県教育委員会1993

⑳山城敏昭『島廻遺跡調査報告』熊本県教育委員会1993

㉑松舟博満・木崎康博『熊本県球磨・人吉地方の先土器時代資料について』『紀後考古』第2号 1982

㉒松舟博満氏の御教示による。

九州地方を考える上で興味深い資料である。

また、白鳥平A遺跡及び同B遺跡では、縄文時代早期に属する遺物が多く出土している。中でも両遺跡から検出された、早期に属する耳栓は、近年鹿児島県で出土例が増加している資料で、人吉・球磨地方での初出の資料である。この他、人吉市周辺での早期の遺跡としては、狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡、城・馬場遺跡(145)、同第2地点、村山開谷遺跡、鼓ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡、島廻遺跡、赤池永谷遺跡(86)、石清水遺跡(35)、射場ノ本遺跡(102)、深水谷川遺跡(155)、益手遺跡(錦町)、野々脇遺跡(五木村)等がある。この中で、狸谷遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡では、塞ノ神式土器を中心に様々な土器が検出され、それに伴う遺構も検出された。またこれらの遺跡は、当時の集落のあり方を考える上で重要な遺跡である。

また城・馬場遺跡、同第2地点、天道ヶ尾遺跡、白鳥平A遺跡では、手向山式土器の壺形土器が検出されている。この中で城・馬場遺跡と同第2地点は、検出された早期の土器中の手向山式土器の比率が高い遺跡である。これらの早期の遺跡相互の比較は、極めて興味深い。

アカホヤ降灰以降、前・中期の遺跡は人吉球磨地方では激減する。その中で鼓ヶ峰遺跡では、曾畑式土器、船元式土器が検出され、射場ノ本遺跡では、並木式土器が出土している。

後・晩期の遺跡としては、中堂遺跡(45)、アンモン山遺跡、天道ヶ尾遺跡、七地水田遺跡(71)がある。この中で中堂遺跡は球磨川左岸低地に位置し、住居址や石器製作址が確認されている。このことは、当時の集落のあり方を考える上で興味深い。

(3) 弥生時代

人吉・球磨地方の弥生時代では、特徴的な文様構成で知られる免田式土器が多く出土している。この免田式土器の出土した遺跡は30ヶ所以上を数え、人吉盆地中央部に集中している。白

鳥平B遺跡では、この時代の遺構、遺物は検出されていないが、近接する遺跡としては中通遺跡(82)がある。この中通遺跡では、円形の竪穴式住居とともに黒髪式土器、磨製石鏃が出土している。また、夏女遺跡(錦町)では、多くの竪穴式住居が検出され良好な資料を提供している。

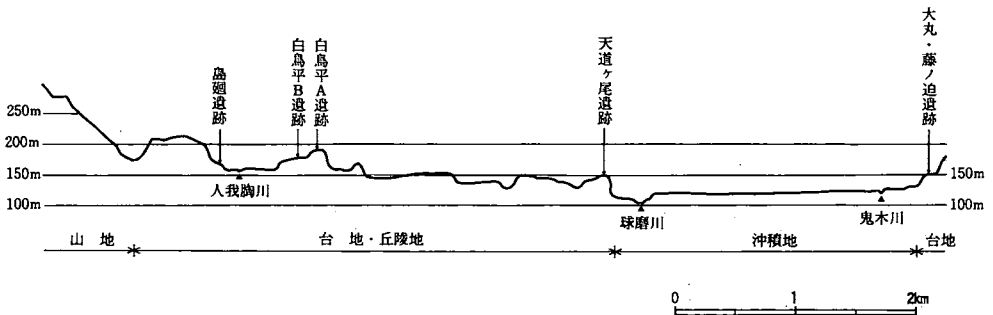
(4) 古墳時代

人吉・球磨地方の古墳時代では、前方後円墳や大型の円墳が集中する錦町、免田町等の盆地中央にその中心がみられる。白鳥平B遺跡は、これらの地域から西方に位置し近接する古墳としては、錦町の京ヶ峰横穴(167)、人吉市の大村横穴群(40)、相良村の十日市横穴群(162)、城ヶ峰横穴群(163)、小原横穴(164)がある。このような環境の中で、白鳥平B遺跡からは、当該時期に比定できる成川式土器の小破片数点が検出されている。

第2節 遺跡の概要

遺跡は、熊本県人吉市赤池水無町立山に所在し、球磨川の支流である人我胸川の左岸丘陵に立地する。丘陵の基盤は、入戸火砕流(シラス)である。標高は、約170mを測る。

当地は、加久藤～大口にかけて三県を画する山地から連なる丘陵で、胸川・人我胸川及び鳩胸川によって開析されたそれぞれの谷に挟まれている。また、遺跡の立地する丘陵は、南方の山地から徐々に低くなり、北側の白鳥平A遺跡へと続く丘陵のいったん低くなった鞍部から東側へ緩やかに傾斜した部分に位置し、人我胸川との比高差は20mを測る。この丘陵の南側に土丈原遺跡が所在する。遺跡は、この丘陵のほぼ全面に広がる。調査区は東西に緩やかに傾斜し、調査区内での高低差は約4mである。土層の堆積は良好で、入戸火砕流をⅧ層として8枚確認できた。またアカホヤ層(Ⅳ層)から入戸火砕流(Ⅶ層)までの層厚は、北側で約1m、南側で約2mを測り、AT上位で良好な状態で先土器時代の遺物を検出した。またⅡB区では、爪形文土器とそれに伴う石器群を良好な状態で検出した。



第4図 地形断面図

第3節 遺跡の層位と包含層

遺跡では、始良カルデラ起源の入戸火砕流をⅧ層として、8枚の土層が確認できた。以下、各層ごとに説明をしていく。

第Ⅰ層 表土層（耕作土）

第Ⅱ層 黒褐色土層

この層は、堆積が薄くほとんどが耕作などによって削られており、北西部隅と南側にわずかに残存しているだけである。土質は、しまりがなくフカフカとした状態である。また南側では、濁りの強いシラスが混入されており、新しい時期の客土の可能性が指摘できる。この濁りの強い層（南側調査区）から、遺構、遺物が検出された。遺構としてはⅡ層からの掘り込みと考えられる炭化物の詰まった長方形の土坑2基と、溝4条、道路状遺構である。

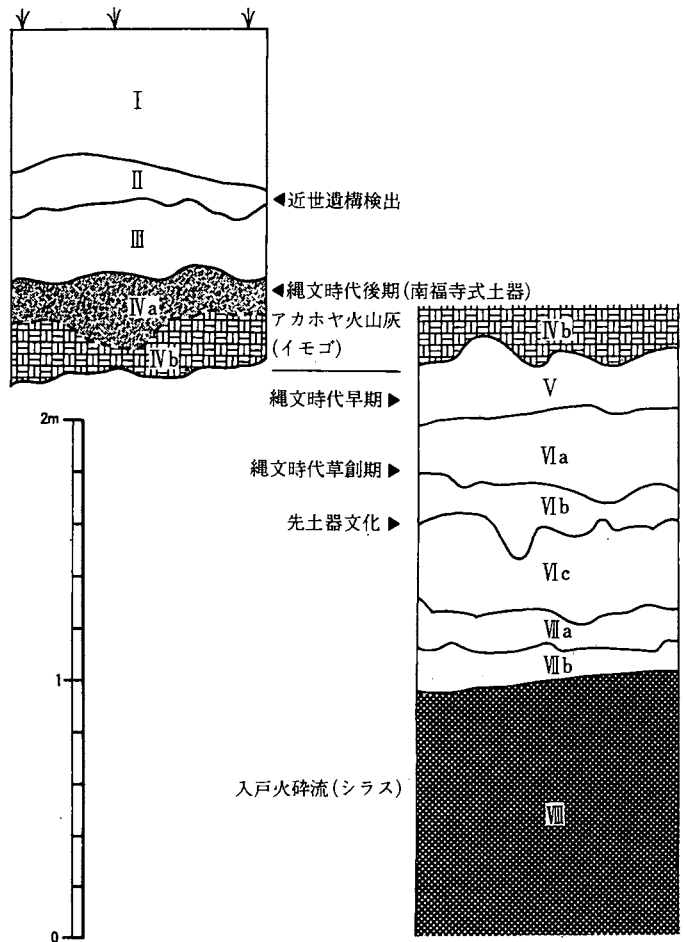
第Ⅲ層 暗褐色土層

この層は、しまりがなくフカフカした土層である。土層はⅡ～Ⅳa層と同様で調査区北西部隅と南側でわずかに残存しているだけである。この層からは、縄文時代晩期以降の遺物がわずかに検出されている。

第Ⅳ層 黄褐色土層

アカホヤ火山灰層である。この層は、その土質の違いによってさらにⅣa層とⅣbの2枚に分層できる。

第Ⅳa層は、フカフカとした細かい砂粒のアカホヤ火山灰層である。この層の成因については、大丸・藤ノ迫遺跡や狸谷遺跡でも記載されているとおり、土壌化したアカホヤ火山灰の二次的な堆積層であると考えられる。



第5図 土層図

この層からは、縄文時代前期の縄式土器がわずかに検出されている。

第Ⅳb層は、ほぼ全面に堆積している。この層は非常に硬くしまった、アカホヤ火山灰の一次堆積層である。無遺物層である。

第Ⅴ層 褐色土層

縄文時代早期の遺物包含層である。粒子は比較的細かく、やや粘性を帯びる。

第Ⅵ層 この層は、その土色、土質の違いからa～cに分層できる。

第Ⅵa層 黒色土層

縄文時代早期及び草創期の遺物包含層である。土質はしまりがあり粘性がある。この土層は、遺跡全面に分布する。また縄文時代草創期と早期では、一部重なる地点があるものの全体的には分布域が違う。両者は層位的に分離が可能である。

第Ⅵb層 黒褐色土層

この層は、縄文時代草創期と先土器時代の遺物包含層である。土質は、粒子は上層に比べやや粗く、部分的にガチガチに固まったブロックを含む。

第Ⅵc層 暗褐色土層

この層上部は、先土器時代の遺物包含層である。Ⅵa、b層に比べ色調的には薄く、土質はガチガチに堅い層である。

第Ⅶ層 この層は、シラスが土壌化して、二次的に堆積した層であると考えられる。土質の違いからa、b層に分層した。

第Ⅶa層 淡褐色土層

この層は、湿ったような色調を呈し、固くしまり粒子は粗くザラザラとした土層である。

第Ⅶb層 淡褐色砂質土層

この層の堆積は薄く、色調はⅦa層とほぼ同様であるが、全体的に粒子が大きくザラザラとしている。Ⅶa、b層とも無遺物層である。

第Ⅷ層 入戸火砕流（シラス）

この層は、始良カルデラ起源の入戸火砕流である。黄色火山灰層で、粒子が粗くザラザラとしている。入戸火砕流（シラス）の二次的堆積層である。無遺物層である。

第III章 調査の成果

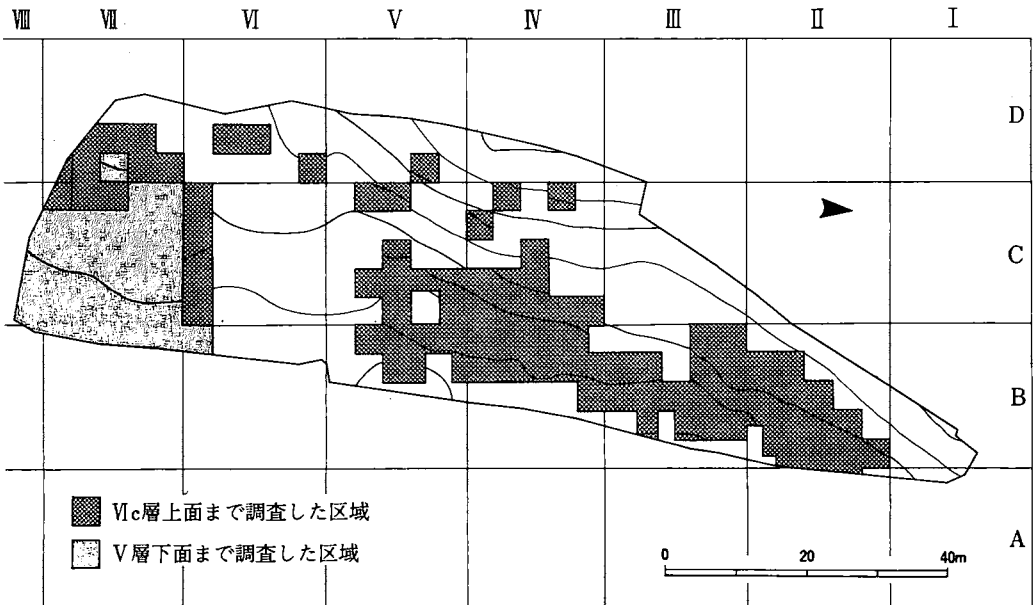
第1節 先土器時代の遺物

1. 遺物の出土層位とその分布

先土器時代の調査は、ほぼ遺跡全面において実施した。その結果Ⅷ層の入戸火砕流上層で、シラス（入戸火砕流）の二次堆積層であるⅦa、b層を間層に挟み、Ⅵb層下部～Ⅵc層上部においてナイフ形石器、三稜尖頭器を主体とする石器群が検出された。遺物が含まれているこれらの層は、それぞれ黒褐色、褐色で両層ともやや粘性を帯びている。Ⅵb、Ⅵc層の層厚は、合わせて60～70cmを測り、このうち先土器時代の石器群が包含されている層厚は、30～40cmである。

しかし一部遺物の上下があると思われ、部分的には上部文化層（縄文時代草創期）の遺物との混在が認められたが、包含状態は概ね良好である。

遺物の分布は、南北2ヶ所に大きく偏在する傾向が窺える。それぞれの石器群の石器組成の在り方には、大きな違いは認められないが南側の石器群については、その全容を確認できていないため比較検討には、注意が必要である。北側の石器群についても、調査範囲の都合上遺物



第6図 白鳥平B遺跡調査区域図

第3表 先土器時代石器組成表

器 種	計 (%)	珪 岩	黒 耀 石	安 山 岩	頁 岩	砂 岩	凝 灰 岩
ナイフ形石器	14(18.9)	3(21.4)	9(64.3)	2(14.3)	—	—	—
三稜尖頭器	10(13.5)	1(11.1)	8(77.8)	1(11.1)	—	—	—
搔 器	1(1.4)	—	—	—	1(100)	—	—
石 錐	1(1.4)	—	1(100)	—	—	—	—
楔形石器	4(5.4)	3(75.0)	1(25.0)	—	—	—	—
磨石・敲石	18(24.3)	—	—	—	—	6(33.3)	12(66.7)
石血・台石	1(1.4)	—	—	—	—	—	1(100)
二次加工ある不定形石器	6(8.1)	2(33.3)	4(66.7)	—	—	—	—
使用痕ある剥片	19(25.6)	13(68.4)	6(31.6)	—	—	—	—
石 器 総 計	74(9.2)	23(31.1)	28(37.8)	3(4.1)	1(1.4)	6(8.1)	13(17.5)
石 核	14(1.7)	11(78.6)	1(7.1)	2(14.3)	—	—	—
剥片・碎片	706(88.0)	164(23.2)	536(75.9)	5(0.7)	—	1(0.1)	—
原 石	9(1.1)	1(11.1)	8(88.9)	—	—	—	—
總 計	802	199(24.8)	573(71.4)	10(1.2)	1(0.1)	7(0.9)	13(1.6)

の広がり全体を確認していないため、ここで報告する石器群が白鳥平B遺跡の先土器時代の全容であるとは言いきれない。

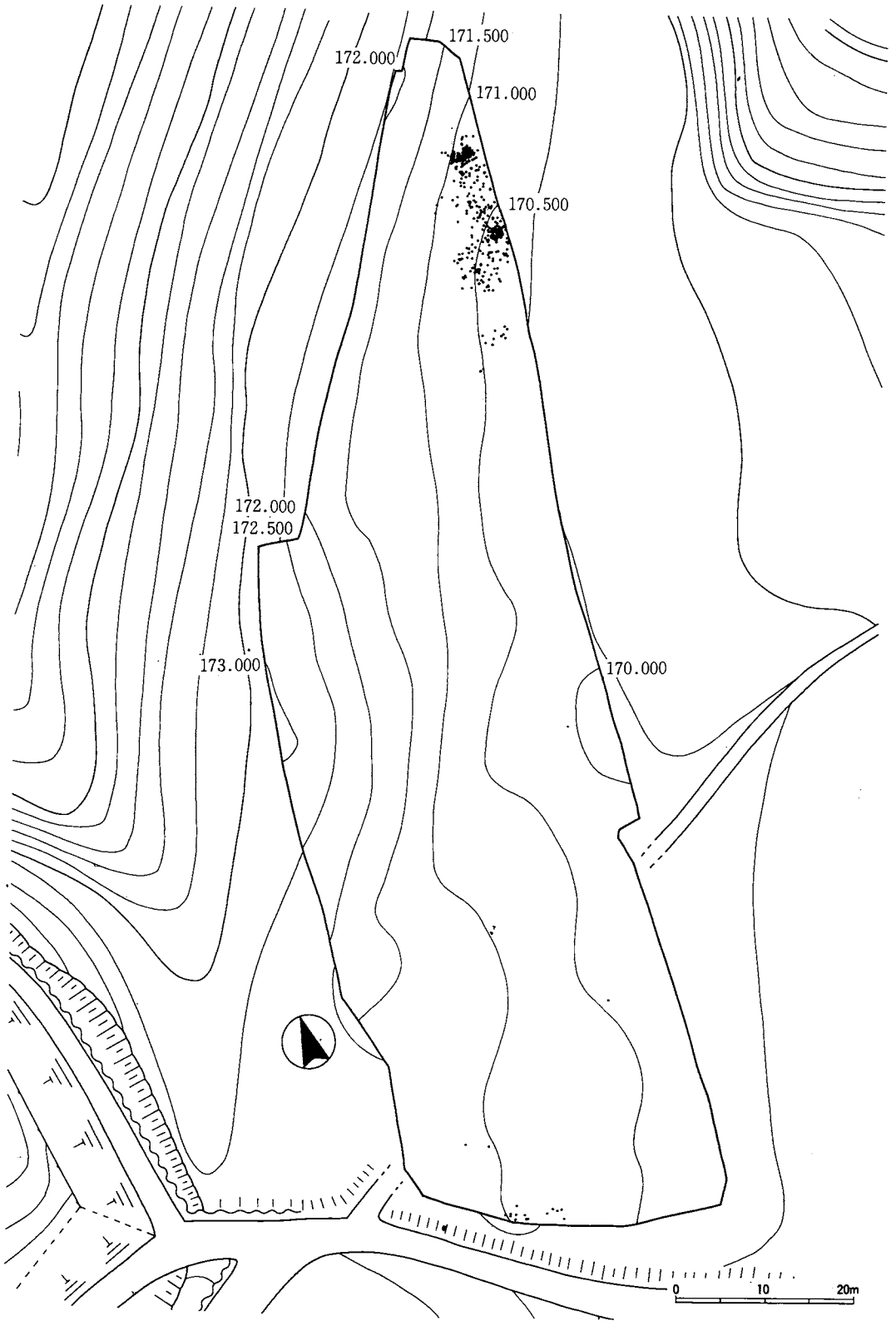
2. 石器組成と分布の構成

出土した遺物はすべて石器関係の資料であり、その総数は802点である（第3表）。その内訳は、ナイフ形石器14点、三稜尖頭器10点、搔器1点、石錐1点、楔形石器4点、磨石・敲石18点、二次加工ある不定形石器6点、石核14点、剥片・碎片706点である。石材では、珪岩199点、黒耀石573点と、この2種類で遺物全体の96.2%を占めている。その他安山岩10点、黒色硬質頁岩1点、砂岩7点、凝灰岩13点である。

これらの石材のうち黒耀石は、大きく2種類に分類できる。風化して光沢がない黒耀石と、漆黒色を呈し不純物が少ない良質の黒耀石である。その分布は、前者の黒耀石が北側の石器群の中にのみ含まれている。後者の黒耀石は、南北両方の石器群ともに含まれているが、その主体をなさない。

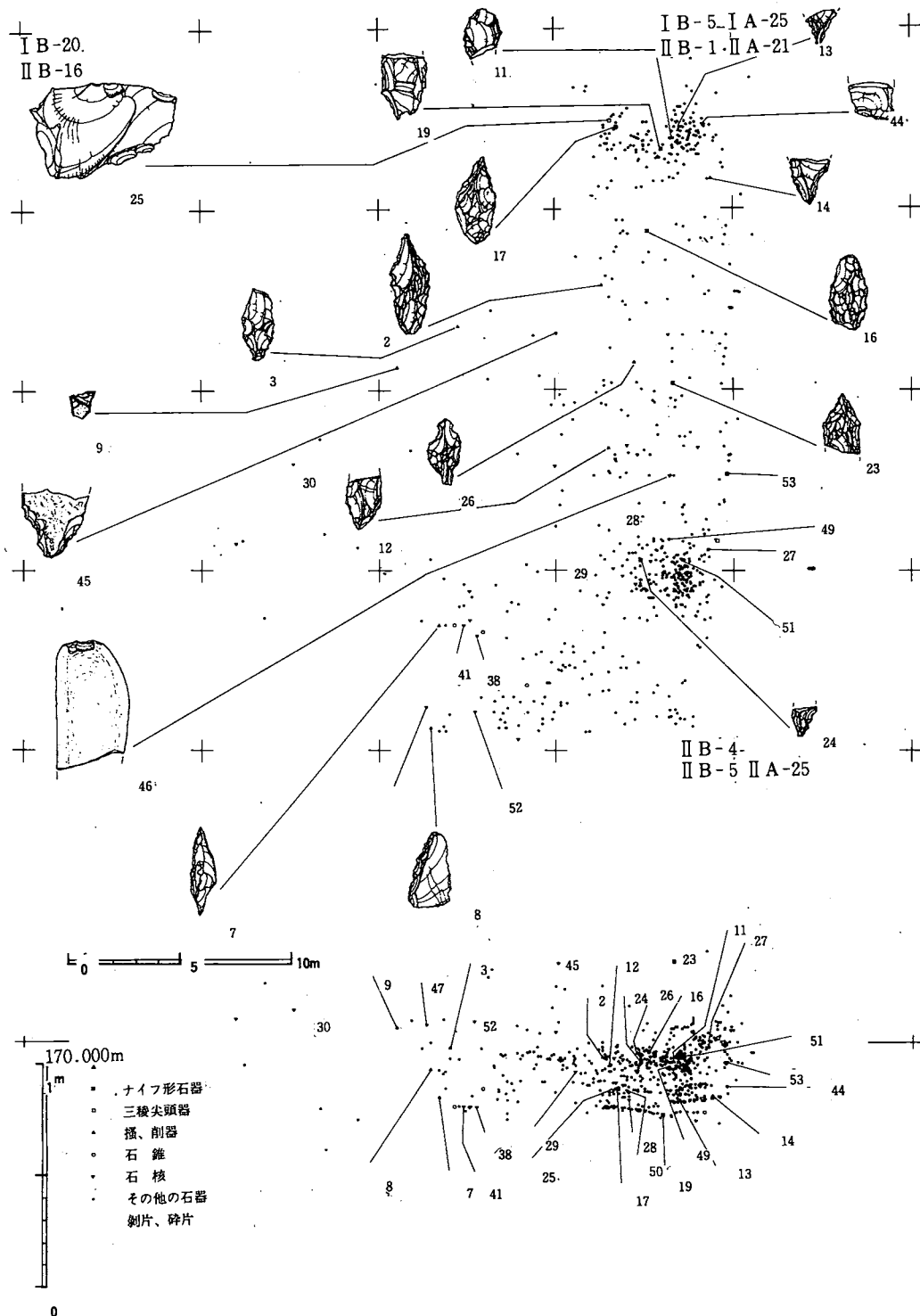
このように、南北の石器群の石材組成からその主体を占める石材に差異が認められる。つま

第1節 先土器時代の遺物



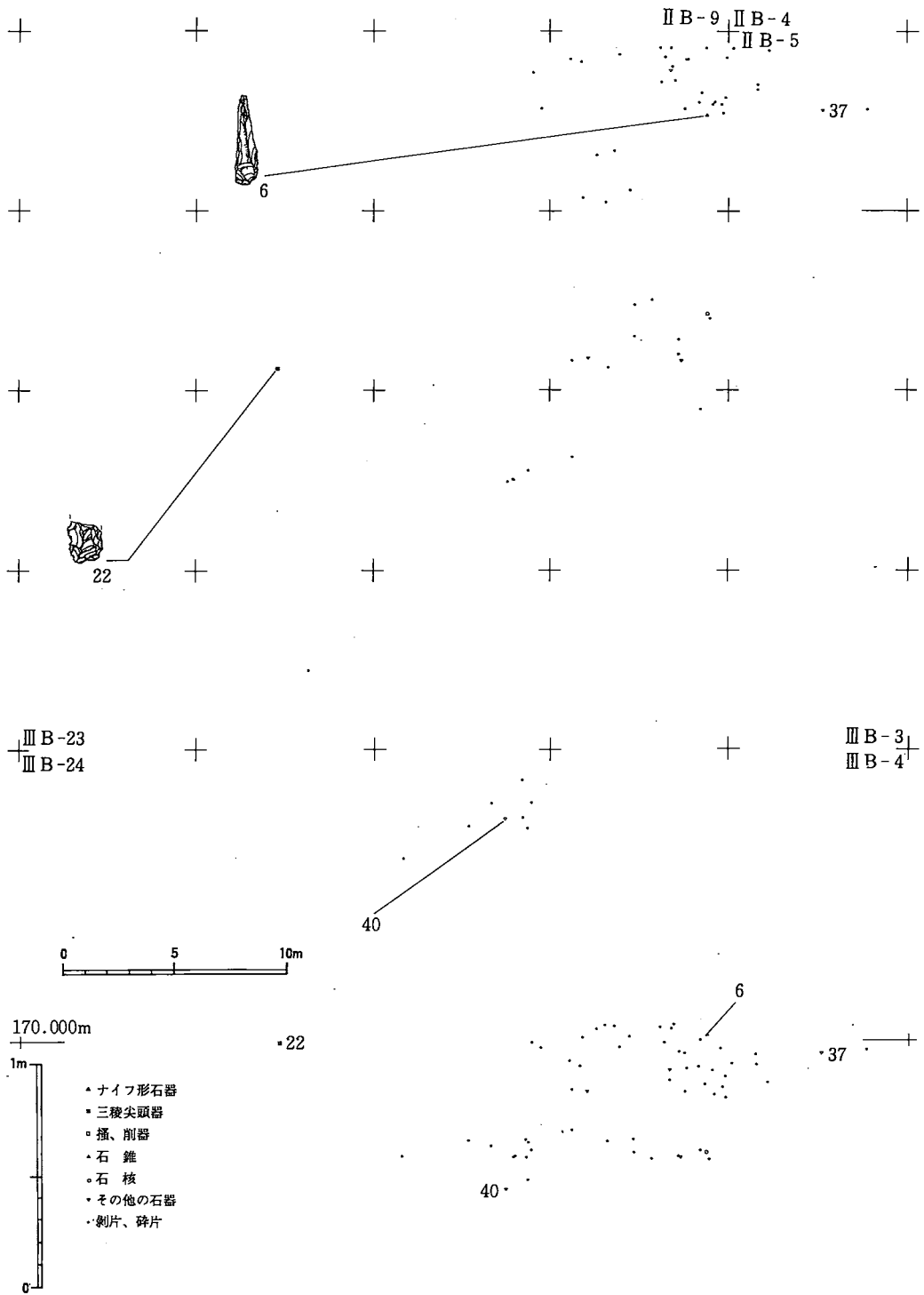
第7図 先土器時代遺物分布図

第三章 調査の成果

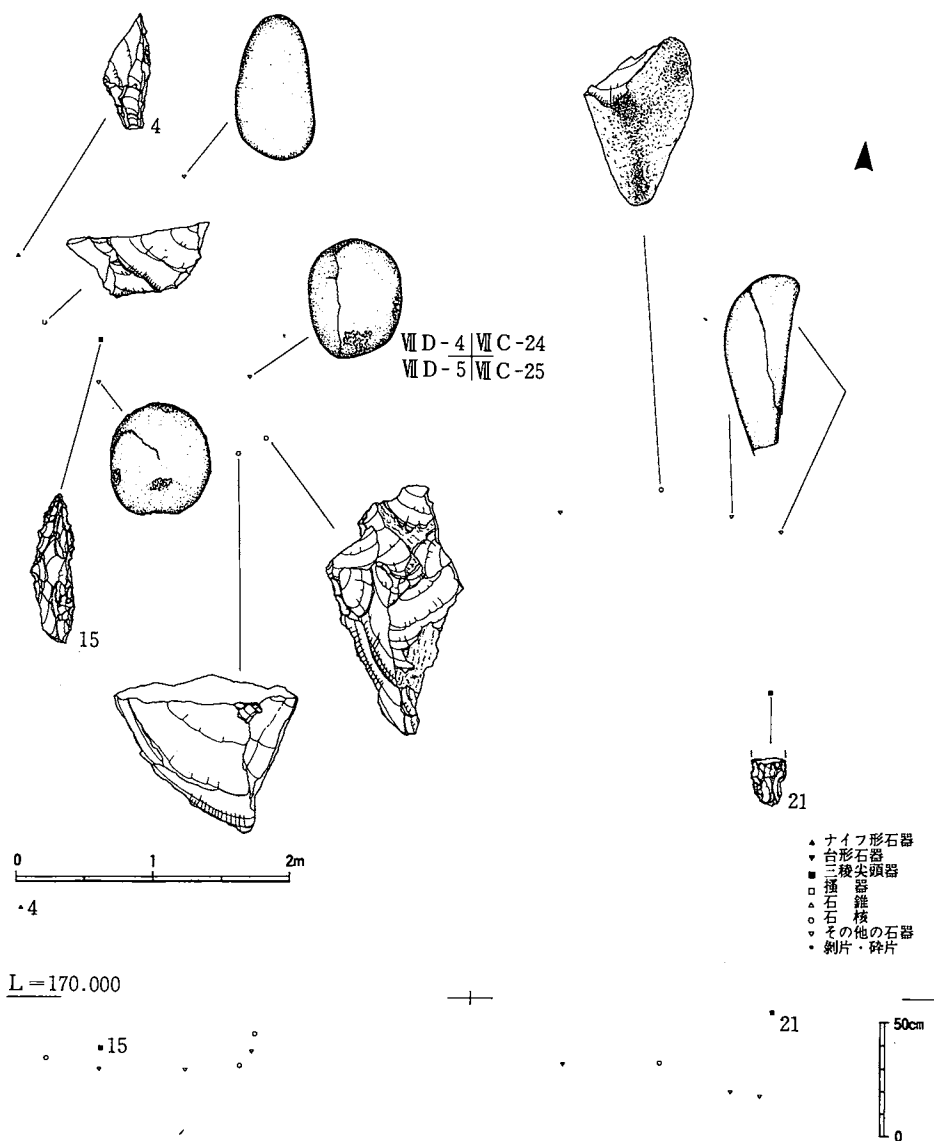


第8図 遺物分布図1

第1節 先土器時代の遺物



第9図 遺物分布図2



第10図 遺物分布図3

り南側の石器群では、資料数が少なく全体像としては解らないが、珩岩製の石器が卓越する。これに反して北側の石器群では、風化して光沢がない黒耀石製の石器が卓越する。この南北2つの石器群の石器組成、石材組成の差異が示すものが何であるかは、今回の調査からは断定できないが、両石器群の距離的隔たりから集団の差異と考えられる。また、両石器群の時間的差異については、今後十分に検討していく必要がある。

3. 出土石器とその分布

ナイフ形石器（第11図1～第13図14）

ナイフ形石器は、南北の石器群合わせて14点検出された。この石器組成の中に占める割合は、18.9%で石器全体の中で三稜尖頭器とともに高い数値を示している。その石材の内訳は、珩岩3点、黒耀石9点、安山岩2点である（第3表）。

南北の石器群別では、それぞれ2点、11点で北側の石器群に集中する傾向がみられる。また石材別でも南側の石器群では、珩岩と黒耀石がそれぞれ1点ずつ検出されている。北側の石器群では、珩岩3点、黒耀石6点、安山岩2点で黒耀石が卓越している。以下、資料について個別に説明を加えていく。

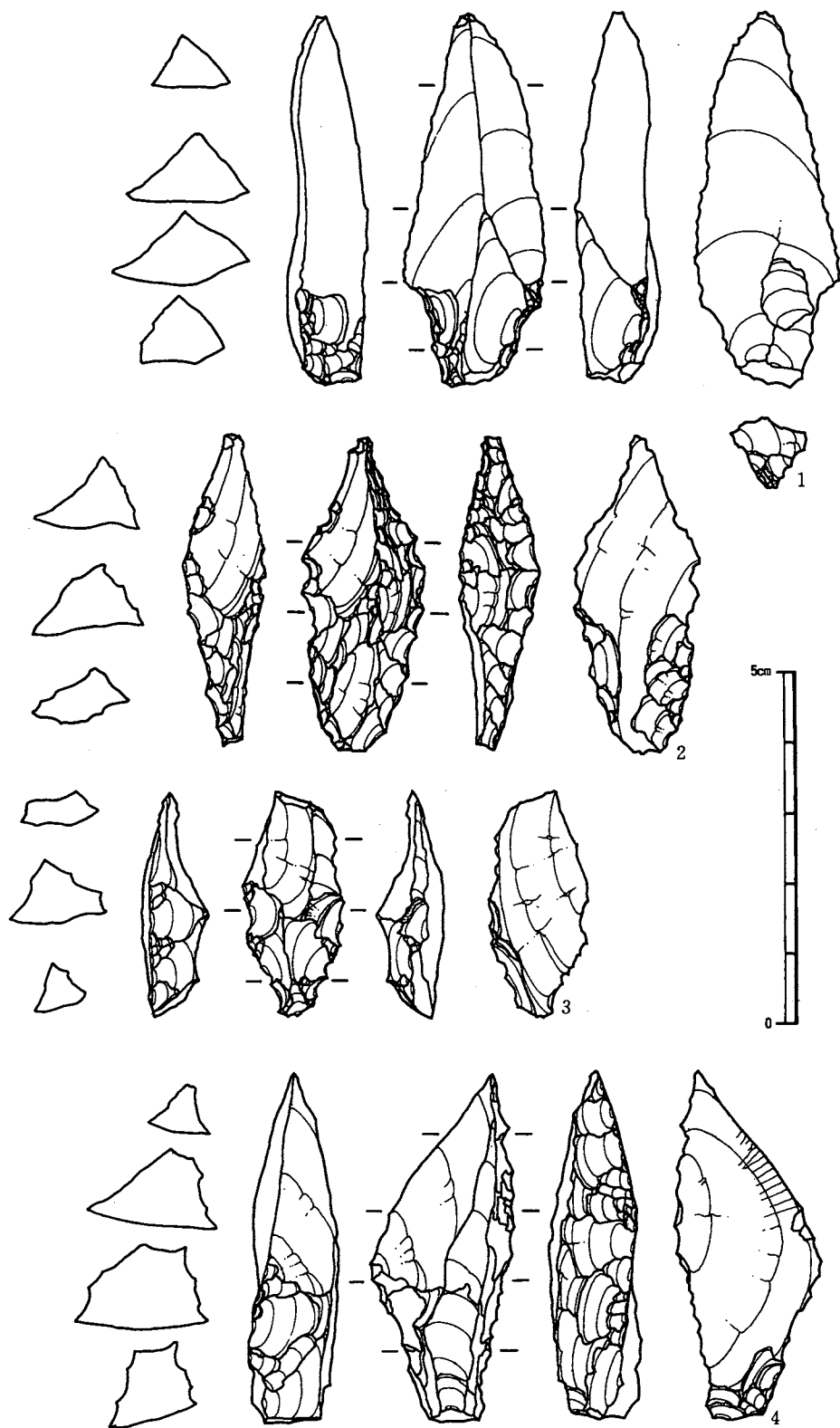
1は、Ⅲ-B区で検出された、珩岩製のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、打点部を基部側に置く。打面及び打点部は残置される。素材剥片の剥出は、表裏両面とも打面側から同一方向に行われる。表面には2面の剥離によって中央に稜を作り出し、先端部が先細りの形状を作り出している。調整加工は、表面の基部にのみ施され、やや内湾する形状を作り出している。所謂剥片尖頭器に分類される資料である。

2は、Ⅱ-B区で検出された安山岩製のナイフ形石器である。厚みのある横長剥片を素材とし、打点部を左位に置く。調整加工は表面側左側縁の基部～中位までと、右側縁の全縁に細かな刃潰し加工を施し、裏面側は左右両側縁とも基部側に平坦剥離がみられる。刃部は左位に設定されている。全体の形状から切出形のナイフ形石器として捉えられる資料である。

3は、Ⅱ-B区で検出された、風化して光沢のない黒耀石製のナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、打点部側を左位に置く。調整加工は、左側縁の全縁と右側縁の基部～中位まで角度の低いやや大まかな加工を加え作り出されている。刃部は右位に設定されている。

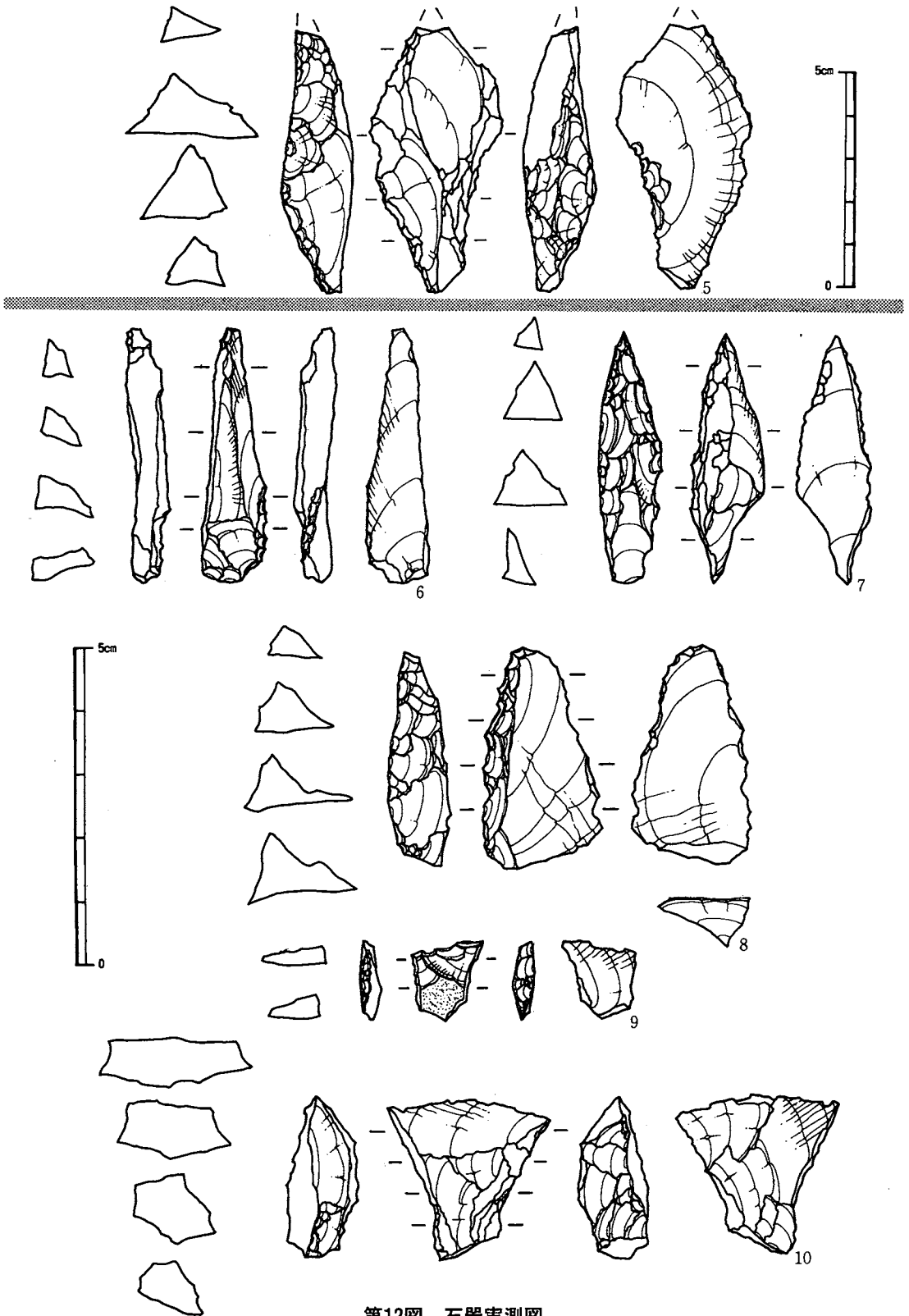
4は、Ⅶ-D区で検出された、珩岩製のナイフ形石器である。厚みのある横長剥片を素材とし、打点部を右位に置き、打点部を取り除くように右側縁全縁と左側縁の基部～中位まで急角度の刃潰し加工を施す。刃部は左位に設定されている。切出形のナイフ形石器である。

5は、Ⅶ-D区で検出された黒色硬質頁岩製の、比較的大型のナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、表面側左側縁の全縁と右側縁の基部～中位までに急角度の刃潰し加工を施す。



第11図 石器実測図

第1節 先土器時代の遺物



第12図 石器実測図

先端部をわずかに欠失しているがほぼ全体形のわかる資料である。刃部は右側縁上部に設定され、右側縁基部よりやや内湾する形状を呈し、狸谷型のナイフ形石器に類似する形態を示す。切出形のナイフ形石器で、他の資料と比較して大振りである。

6はⅡ-B区で検出された、安山岩製のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、打点部を基部側に置く。調整加工は、左側縁部先端部と左右両側縁の基部にわずかに施される。刃部は右位に設定されている。素材剥片の形状を大きく変更させず作り出された、部分（基部）加工のナイフ形石器である。

7はⅡ-B区で検出された、珪岩製のナイフ形石器である。幅広の横長剥片を素材とし、打点部を基部側に置く。調整加工は、左側縁のほぼ全縁に裏面側から稜上から細かな刃潰し加工が施されている。右側縁基部側では稜上から2面の大まかな剥離により調整を行い、やや内湾する形状を作り出している。刃部は右位に設定されている。



第13図 石器実測図

8はⅡ-B区で検出された、珪岩製のナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、打点部を左位に置く。そして打点部を取り除くように刃潰し加工が施されている。一側縁加工のナイフ形石器である。刃部は右位に設定されている。

9はⅡ-B区で検出された、黒耀石製の台形石器である。調整加工は細かく左右両側縁に施される。表面基部側に礫面を残す。

10はⅥ-D区で検出された、黒耀石製の台形石器である。素材剥片の形状は不明であるが、厚みのある剥片を使用している。調整加工は、両側縁とも大まかな刃潰し加工を施し、作り出している。

11～14は部分的に欠損し全体形がつかめない資料である。石材はすべて風化して光沢のない黒耀石製である。11は横長剥片を素材とし、左右両側縁に調整加工を施している。やや丸みをもった形状を呈し、刃部は先端部右位に設定されている。切出型のナイフ形石器かもしくは未完成品と考えられる資料である。12は横長の剥片を素材とし、打点部を先端部右位に置き左右両側縁に大まかな調整加工を施している。先端部を欠失しているが、縦断面の形状から欠失部分はわずかである。このことから完成品であると考えれば、その形状は2、11に類似し切出型のナイフ形石器として考えられる資料である。13、14は基部のみの資料で、石器の上半部を欠失しその全体形を知ることはできない。しかし、稜上からの調整加工が行われていないためナイフ形石器として取り扱った。

三稜尖頭器（第14図15～第16図24）

三稜尖頭器は、南北の石器群合わせて10点検出された。この石器組成の中に占める割合は、13.5%でナイフ形石器に次いで高い数値を示している。その石材の内訳は、珪岩1点、黒耀石8点、安山岩1点である（第3表）。

南北の石器群別では第8図～第10図で示したとおり、それぞれ3点、7点で北側の石器群に集中する傾向がみられる。また石材別でみると、南側の石器群では珪岩製1点、黒耀石製2点が検出され、北側の石器群では黒耀石製6点、安山岩製1点で、黒耀石が卓越している。北側で検出された黒耀石製の三稜尖頭器は、すべて風化して光沢のないものである。

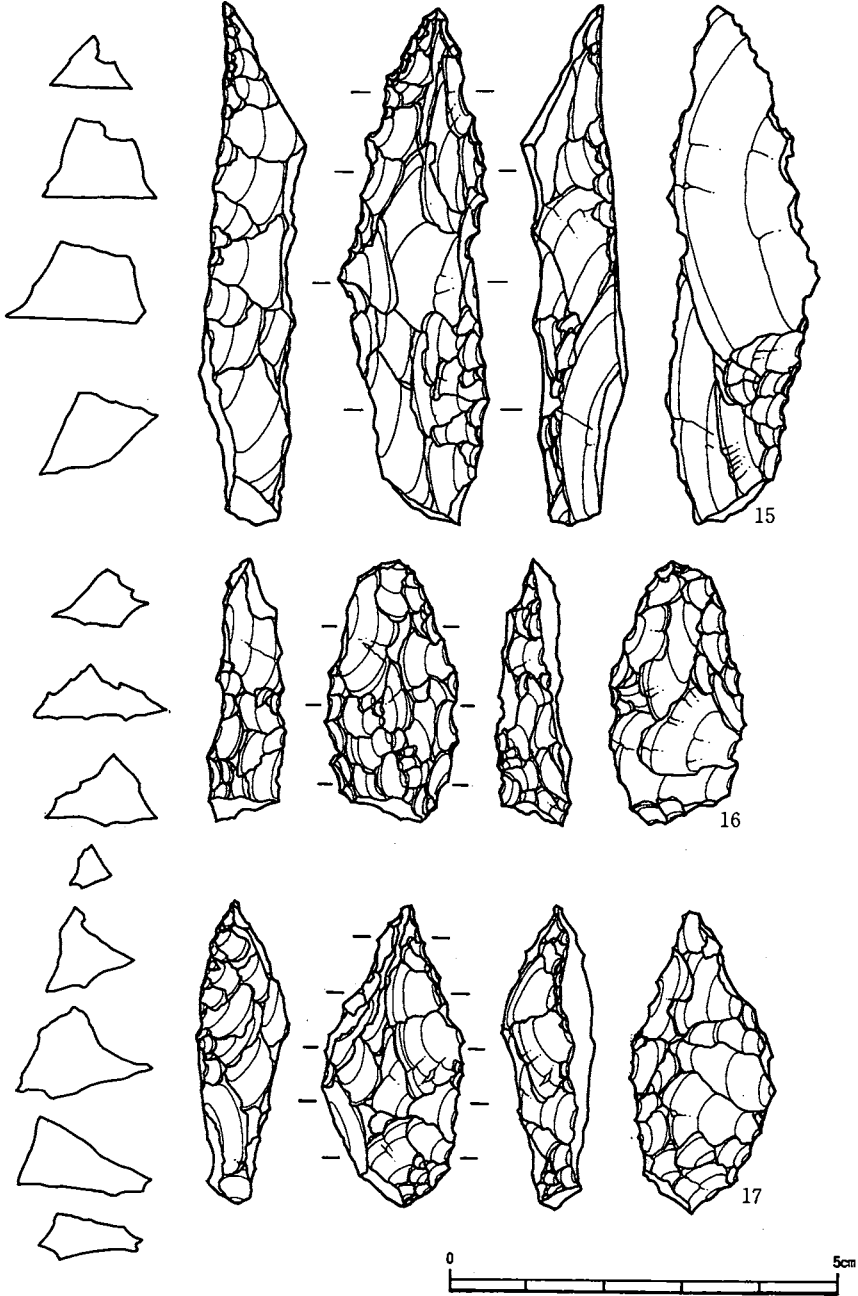
以上のように南北の石器群では、ナイフ形石器と同様に石材の利用状況に違いがみられる。また石器の形状も、南側の石器群では北側の石器群に比して大型である。

以下、資料について個別に説明を加えていく。

15はⅦ-D区で検出された、珪岩製の三稜尖頭器である。石核の作業面を表裏両面に残している、石核を素材とする石器である。調整加工は、表裏両面ともにみられる。表面側は、左右両側縁とも裏面側から稜を作り出すように粗い加工が施される。断面形は基部及び先端部を除くと、台形である。稜上からの調整加工はみられない。

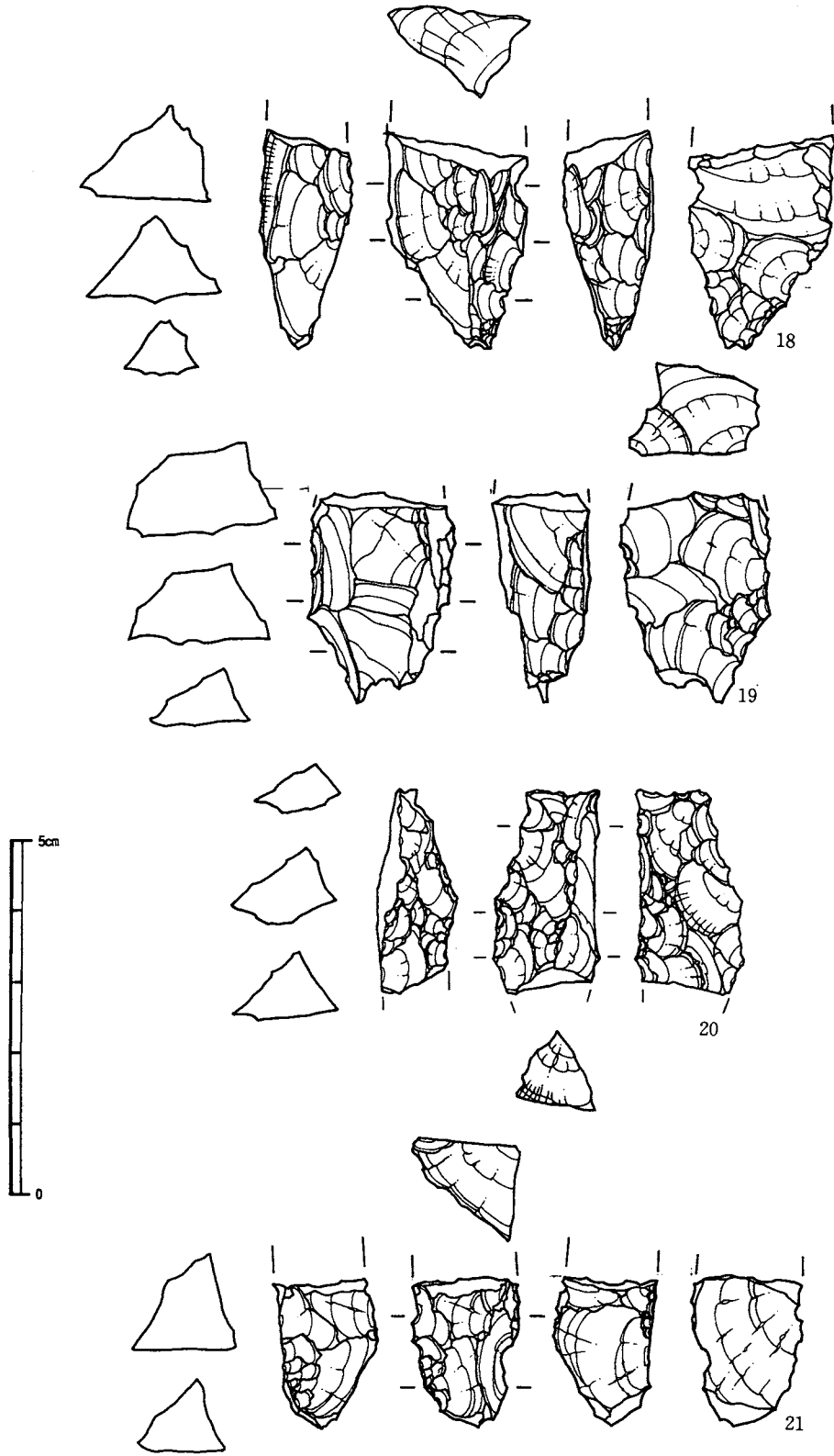
16はⅡ-B区で検出された、風化して光沢のない黒耀石製の三稜尖頭器である。先端部は尖らずやや丸みをもった形状に作り出されている。調整加工は表裏両面ともにみられ、断面形は低い三角形を呈する。三面加工の三稜尖頭器である。表面側の調整加工は細かく、基部側よりでは稜上からの調整もみられる。基部をわずかに欠失している。

17はⅡ-B区で検出された、風化して光沢のない黒耀石製の三稜尖頭器である。15の資料と



第14図 石器実測図

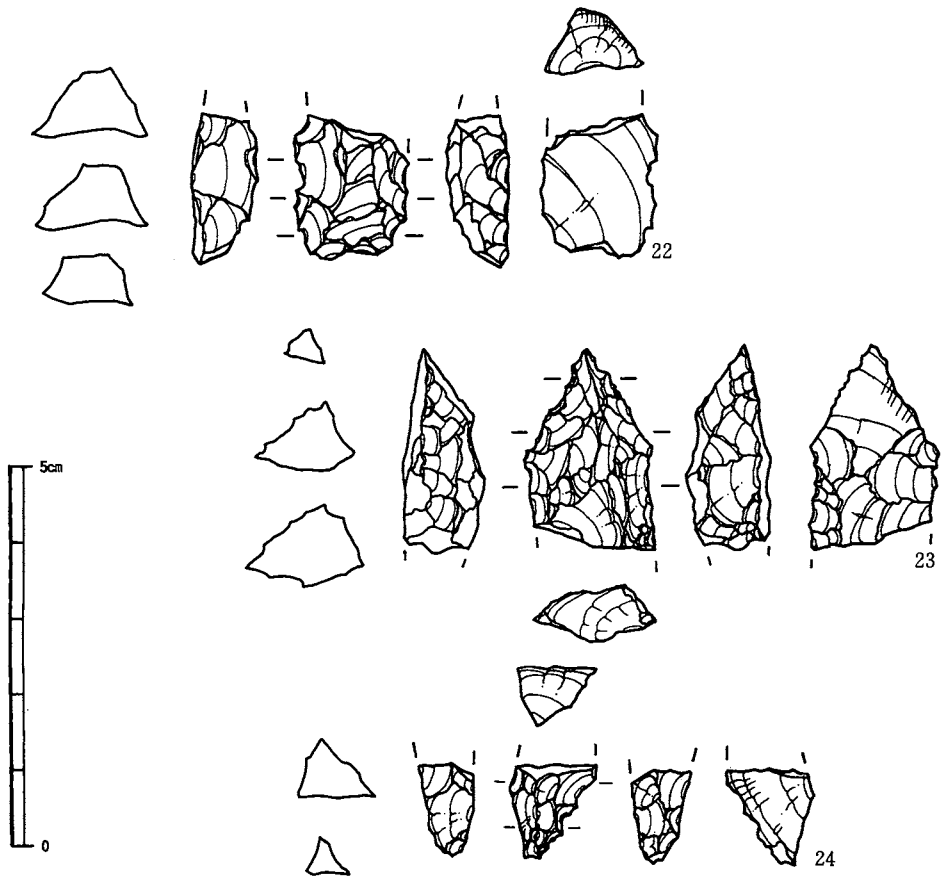
第1節 先土器時代の遺物



第15図 石器実測図

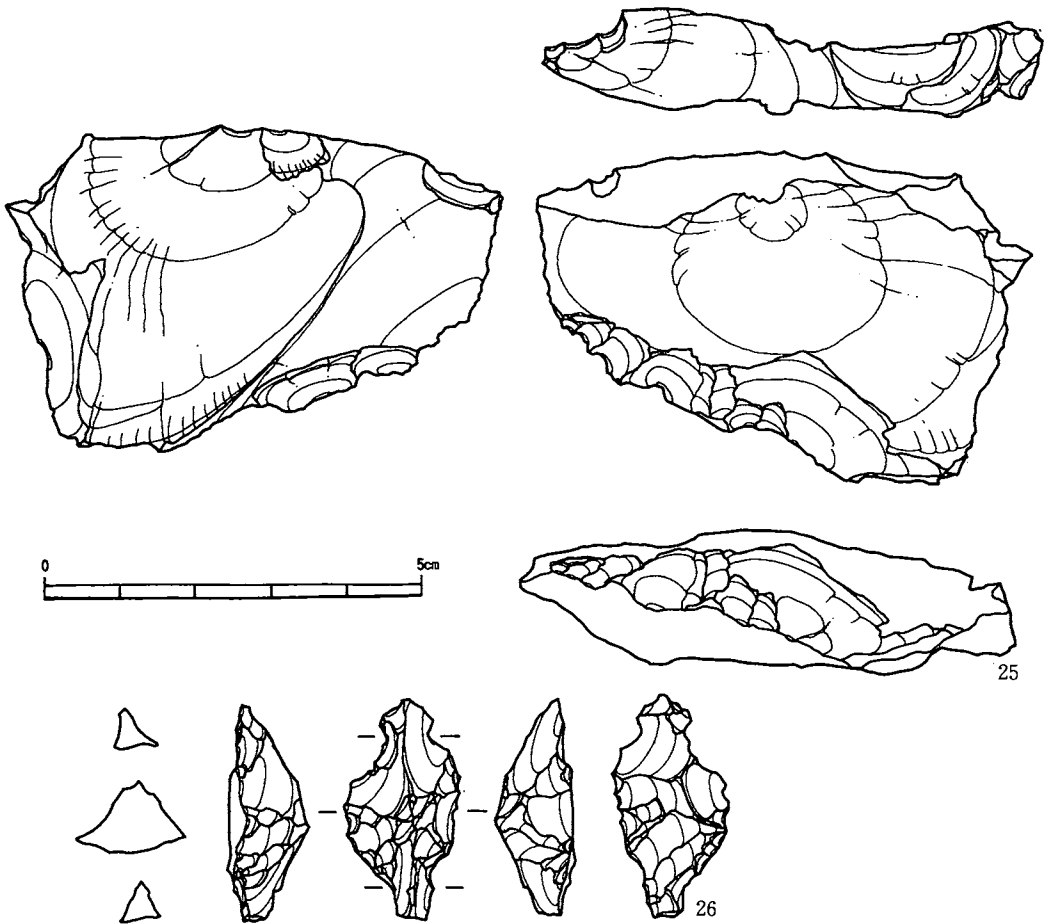
同様に表裏両面に調整加工を施す、三面加工の三稜尖頭器であるが先端部は、裏面側からの急角度の調整加工によって鋭角に作り出されている。断面形は基部を除くとほぼ三角形を呈している。稜上からの調整加工はみられない。

18～24は、先端部あるいは基部を欠失し、全体形がつかめない資料である。18は、VI-C区で検出された黒耀石製の三稜尖頭器で、先端部を欠失している。厚みのある縦長剥片を素材とする。表面側の調整加工は、左側縁では稜上からの大まかな加工が施され、右側縁では裏面側からと稜上から細かな加工が施されている。裏面側では、基部側に8面の平坦剥離が施されている。断面形は三角形を呈する。19はII-B区で検出された、黒耀石製の三稜尖頭器である。調整加工は表裏両面ともにみられる。三面加工の三稜尖頭器である。表面側の調整加工は、すべて裏面側から施し稜上からの調整加工はみられない。断面形は、台形を呈する。20はII-B区で検出された、安山岩製の三稜尖頭器である。調整加工は表裏両面ともにみられるが、表面右側縁では1面の稜上からの調整加工がみられるだけである。先端部は尖らず直線的になる。



第16図 石器実測図

このことから考えて未完成品か、もしくは上下逆にして先端部欠失の可能性も指摘できる。21はⅡ-B区で検出された、黒耀石製の三稜尖頭器である。上半部を欠失している。横長剥片を素材としたもので、裏面側からの大まかな剥離によって断面三角形に作り出している。二面加工の三稜尖頭器である。22はⅡ-B区で検出された、風化して光沢のない黒耀石製の三稜尖頭器である。素材は厚みのない横長剥片を利用した二面加工の資料である。調整加工は、表面側だけに施され左側縁の1面の稜上からの調整加工以外は、裏面側から稜を作り出す形で施されている。断面形は、台形を呈する。23はⅡ-B区で検出された、風化して光沢のない黒耀石製の三稜尖頭器で、基部を欠失している。縦長剥片を素材とし、調整加工は表裏両面ともにみられる。表面側の調整加工は左右両側とも裏面側及び稜上から施され、断面形は三角形を呈する。裏面側では、石器中央部で11面の平坦剥離が施されている。24はⅡ-B区で検出された、風化して光沢のない黒耀石製の三稜尖頭器で、上半部を欠失している。13の資料と形態的には類似するが、稜上からの調整加工がみられ、断面形が三角形を呈するなど他の三稜尖頭器と類似す



第17図 石器実測図

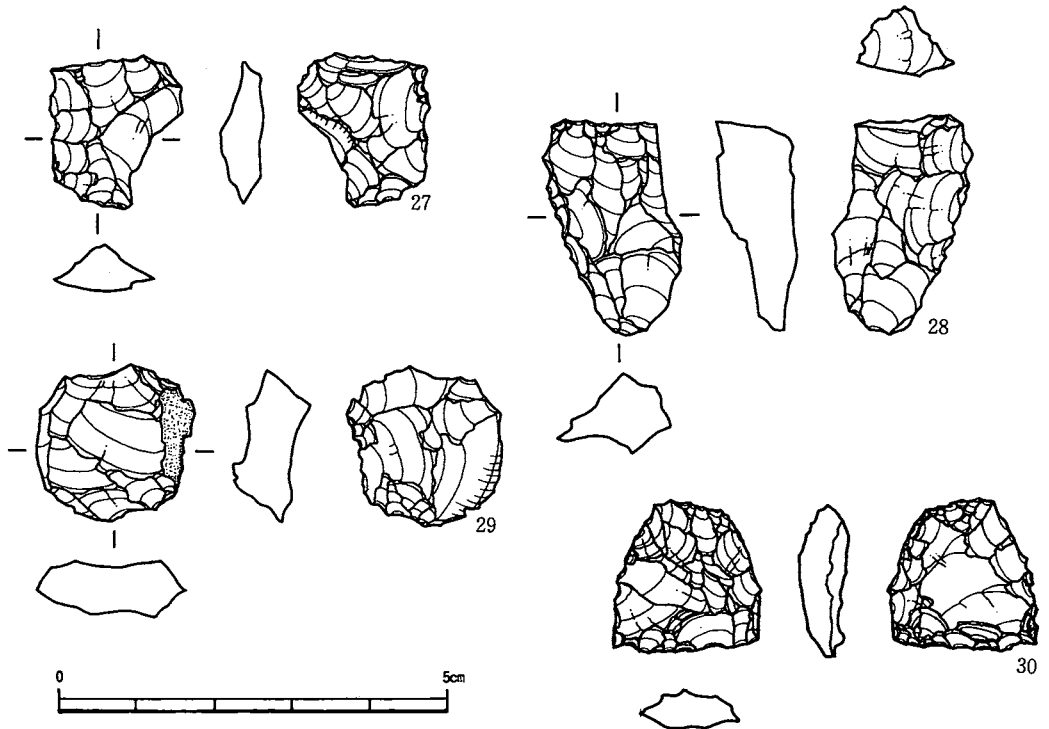
る形態が想定できるため三稜尖頭器として分類した。横長剥片を素材とし、調整加工は表面のみにみられる。

搔器 (第17図25)

搔器は、北側の石器群から1点のみ検出された。その石器組成の中に占める割合は、1.4%である。石材は、黒色硬質頁岩である。24は、複剥離打面から剥出された厚みのある幅広の横長剥片を素材とし、打点部側と対向する一辺の裏面側に刃部を作り出している。表面は石核の作業面をそのまま残し、対向する2面の剥離面によって構成されている。

石錐 (第17図26)

石錐は、北側の石器群から1点のみ検出された。その石器組成の中に占める割合は、1.4%である。石材は、不純物の少ない良質の黒耀石製である。全体形は三稜尖頭器に類似するが、小型で石器中央部の幅に比して先端部及び基部は急激に細く尖る形状を示す。縦断面形から先端部は欠失部分は見られないが、基部側はわずかに欠失している。調整加工は表裏両面ともにみられる。表面側では裏面側から石器中央に向けて急角度の調整加工が施され、裏面側では素材剥片の起伏を取り除くように平坦剥離が施されている。上下両端とも刃部として考えられる資料である。



第18図 石器実測図

楔形石器 (第18図27～30)

楔形石器は、4点検出された。その石器組成に占める割合は、5.4%である。出土地点は、4点ともⅡB区である。

27は、ⅡB-3区で出土した珪岩製の楔形石器である。表裏両面とも、石器の縁辺に微細な剥離痕が観察される。

28は、ⅡB-3区で出土した珪岩製の楔形石器である。表裏両面とも上下端に微細な剥離痕が観察される。

29は、ⅡB-4区で出土した黒耀石製の楔形石器である。上下端に微細な剥離痕が観察される。

30は、ⅡB-13区で出土した珪岩製の楔形石器である。表裏両面とも、石器の縁辺に微細な剥離痕が観察される。

磨石・敲石 (第19図31～第20図42)

磨石・敲石は、南北の石器群合わせて18点検出された。その石器組成の中に占める割合は、24.3%でナイフ形石器、三稜尖頭器とともに高い数値を示している。また南北の石器群別では、8点、10点で両石器群とも偏差は認められない。しかし南側の石器群は資料総数に比して高い数値を示している。

その形態的な特徴からは円形、楕円形、棒状、不整形のものと様々な形態がみられる。これらの石器の使用部位からは、長軸の一端かもしくは両端に敲打痕が観察されるものと、敲打痕が全縁に観察されるもの、敲打痕が石器中央部にも観察されるものと、また敲打痕と合わせて磨痕が観察されるものがある。石材別では砂岩、凝灰岩の2種類がある。

磨石・敲石は、その縁辺や表面の状態によって、大きく2つに分類ができる。

以下、分類ごとに説明を加えていく。

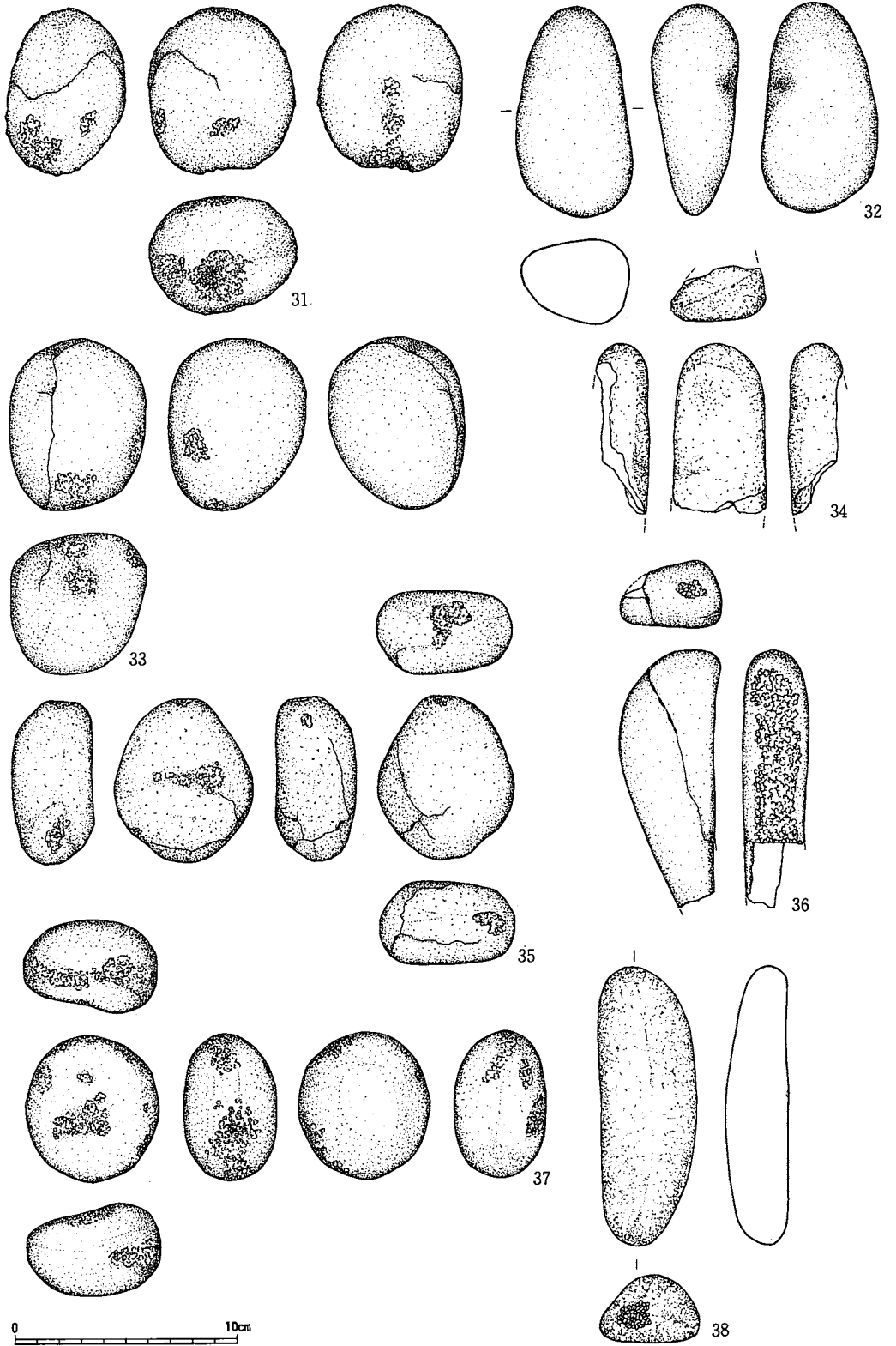
第1類 (31、33、35、38、41、42)

第1類は、石器の一端ないし両端に、敲打痕が観察されるものである。石器の形状は、円形や楕円形と棒状のものがみられ、それぞれの大きさにも比較的バラツキはみられない。

また、この1類の石器には、石器表面にも敲打痕が観察されるもの(31、33、35、42)もみられる。この石器表面に敲打痕の観察される4点の資料は、形状では円形と楕円形のものに限られる。

第2類 (32、34、36、37、39、40)

第2類は、石器の側縁部に敲打痕が観察されるものである。石器の形状は、円形、楕円形、不整形、棒状と様々である。大きさには、比較的バラツキはみられないが、中には40のように小型のものもみられる。敲打痕の状態では、側縁部の広い範囲に認められるもの(36、37、39)

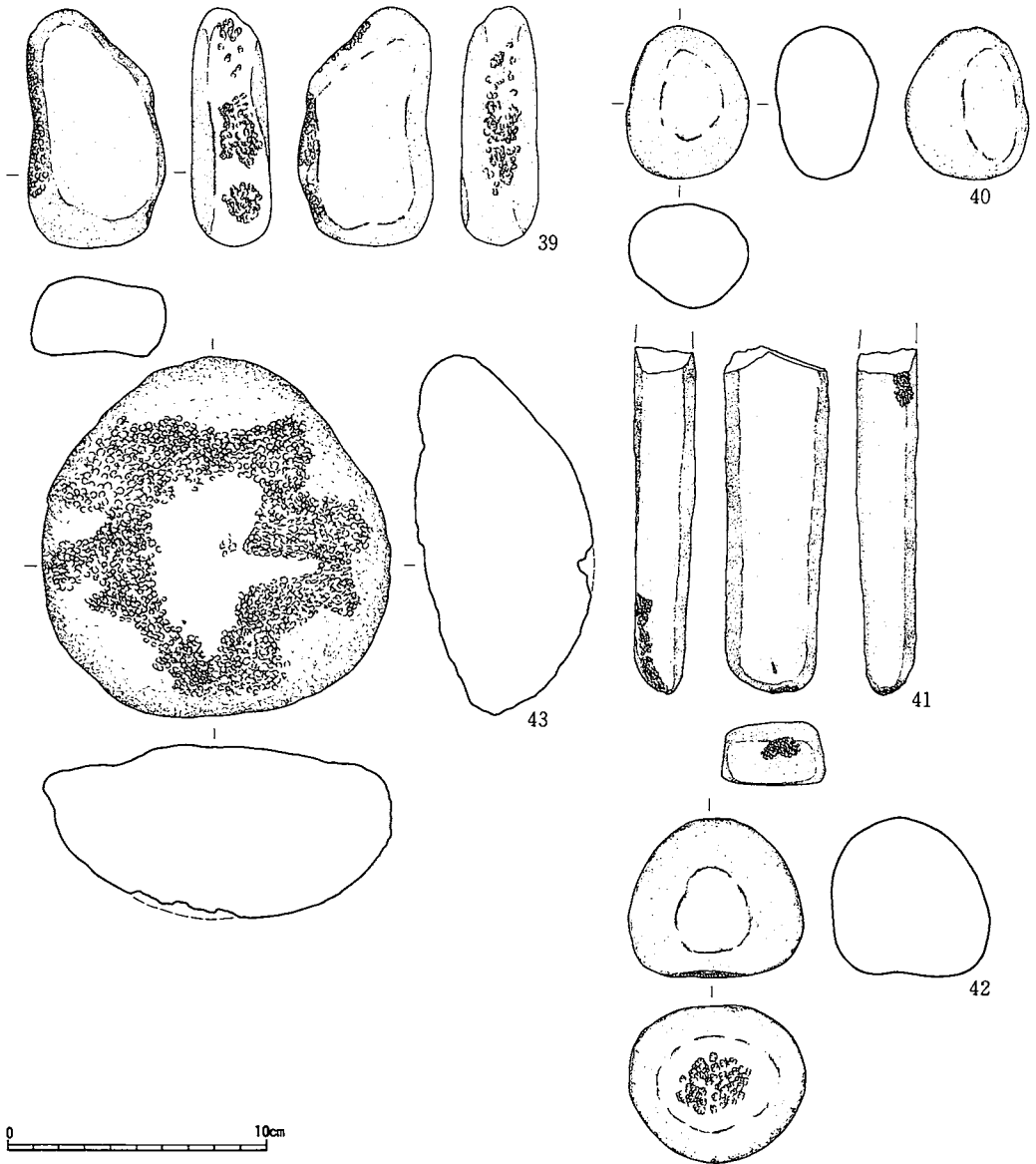


第19図 石器実測図

と側縁部の荒れが少ないもの (32、34、40) がある。また、37は、石器表面にも敲打痕が観察される。

石皿・台石 (第20図43)

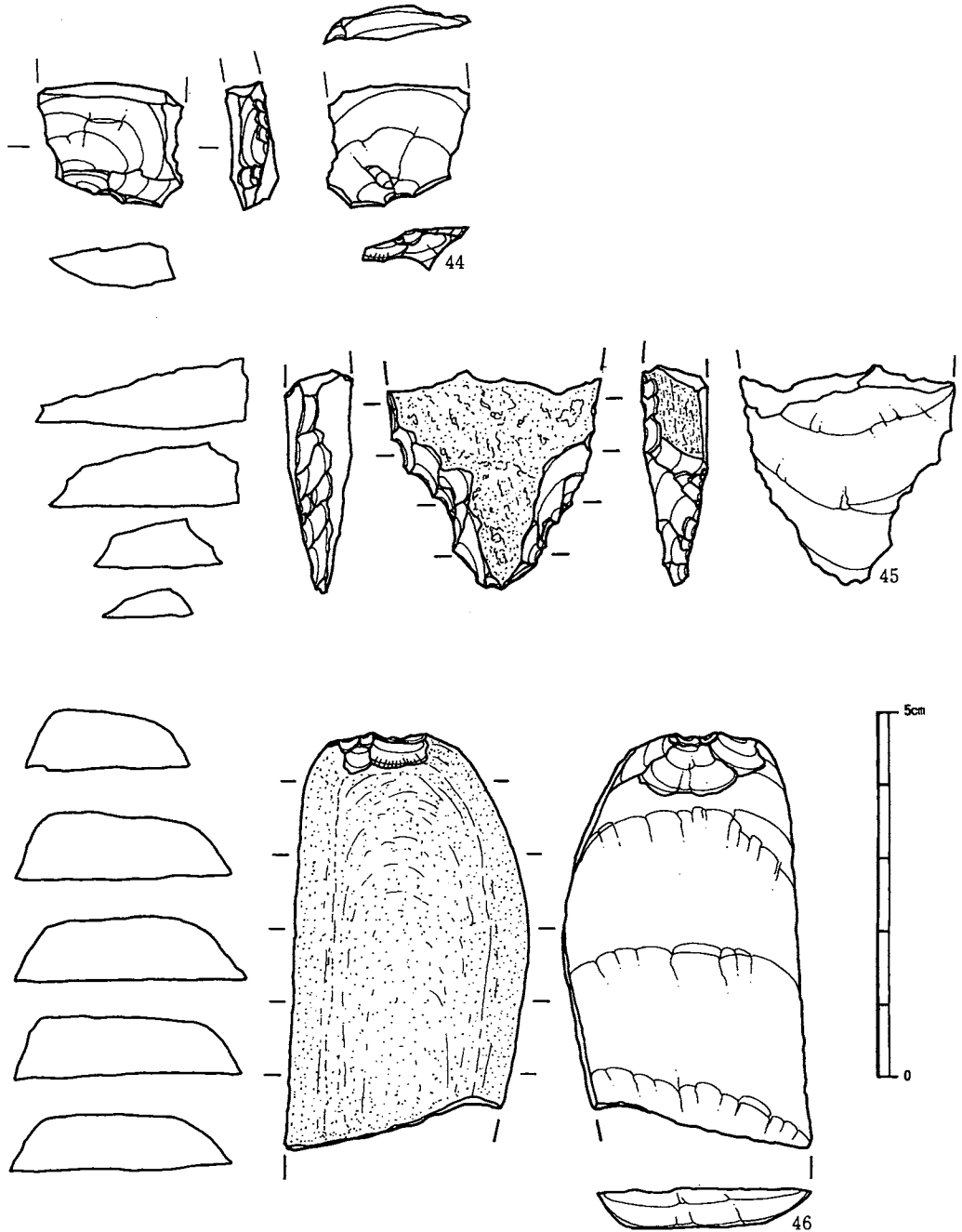
石皿・台石は、1点出土した。その石器組成に占める割合は、1.4%である。石材は、凝灰岩である (第3表)。出土地点は、VII D-4区である。石皿・台石と磨石・敲石との数量の関係は、1:18の割合にあり、検出された全資料からみるかぎり石皿・台石1個に対して磨石・敲石18



第20図 石器実測図

個という数値が得られる。また、この石皿・台石が出土した南側の石器群にかぎって考えた場合、1:8という関係が割り出せる。

43は、円形の扁平な円礫をそのまま使用している。作業面の状態は、石器表面に広く敲打痕が観察される。また、石器表面中央部では、敲打痕による潰れがみられず磨痕が観察される。



第21図 石器実測図

二次加工ある不定形石器（第21図44～46）

二次加工ある不定形石器は、北側の石器群から6点検出された。その石器組成の中に占める割合は、8.1%である。また石材別では、珪岩2点、黒耀石製4点である。

以下、資料について個別に説明を加えていく。

44は風化して光沢のない黒耀石製の石器である。縦長剥片を素材とし、右側縁表面側に裏面側からの調整加工と打面部に3枚の調整剥離が施される。先端部を欠失し、全体の形状は不明である。この先端部欠失は、単に欠損であるのか、意図的に折りとられたものであるのかは不明である。また、ナイフ形石器に類似した資料であるが、ここでは二次加工ある不定形石器として取り扱った。

45は風化して光沢のない黒耀石製の石器である。縦長剥片を素材とし、表面に大きく礫面を残す。調整加工は基部側の左右両側縁に施され、やや内湾する形状を呈する。上半部は、大きく欠失しその全体形は不明であるが、平面形は剥片尖頭器の基部の形状に類似する。しかし裏面側の剥離は打点部が石器上部側に置かれる点で異なる。そのため器種認定では二次加工ある不定形石器として取り扱った。

46は凝灰岩製の石器である。風化が著しく表裏両面とも観察が困難である。表面には大きく礫面を残す。先端部表面に敲打痕による6面の剥離面が、また裏面側には同様に6面の剥離面が観察される。石器下半部を欠失しており石器の全体形は不明であるが、表裏両面にみられる敲打痕から楔形石器として捉えることも可能な資料である。

使用痕ある剥片（第22図47～53）

使用痕ある剥片は、19点検出された。その石器組成に占める割合は、25.6%である。出土地点は、北側の石器群で18点、南側の石器群で1点である。

以下、資料について個別に説明を加えていく。

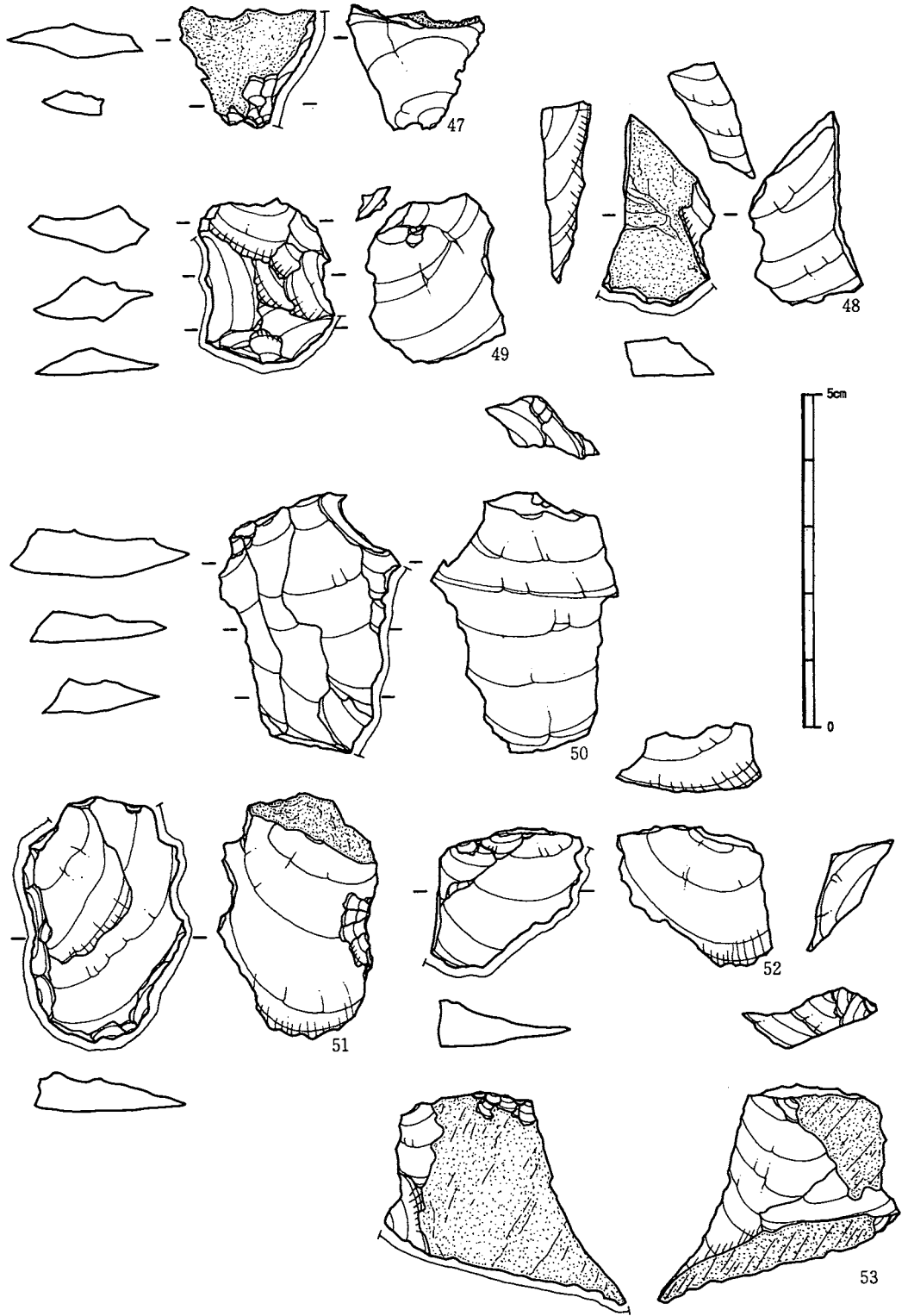
47は、ⅡB-9区で出土した。石材は、黒耀石製である。横広の剥片で、右側縁に使用痕による微細な刃こぼれが観察される。表面には大きく礫面を残す。

48は、ⅡB-3区で出土した。石材は、珪岩製である。不整形の縦長剥片で、左側縁及び先端部に使用痕による微細な刃こぼれが観察される。打面は、単剥離面である。

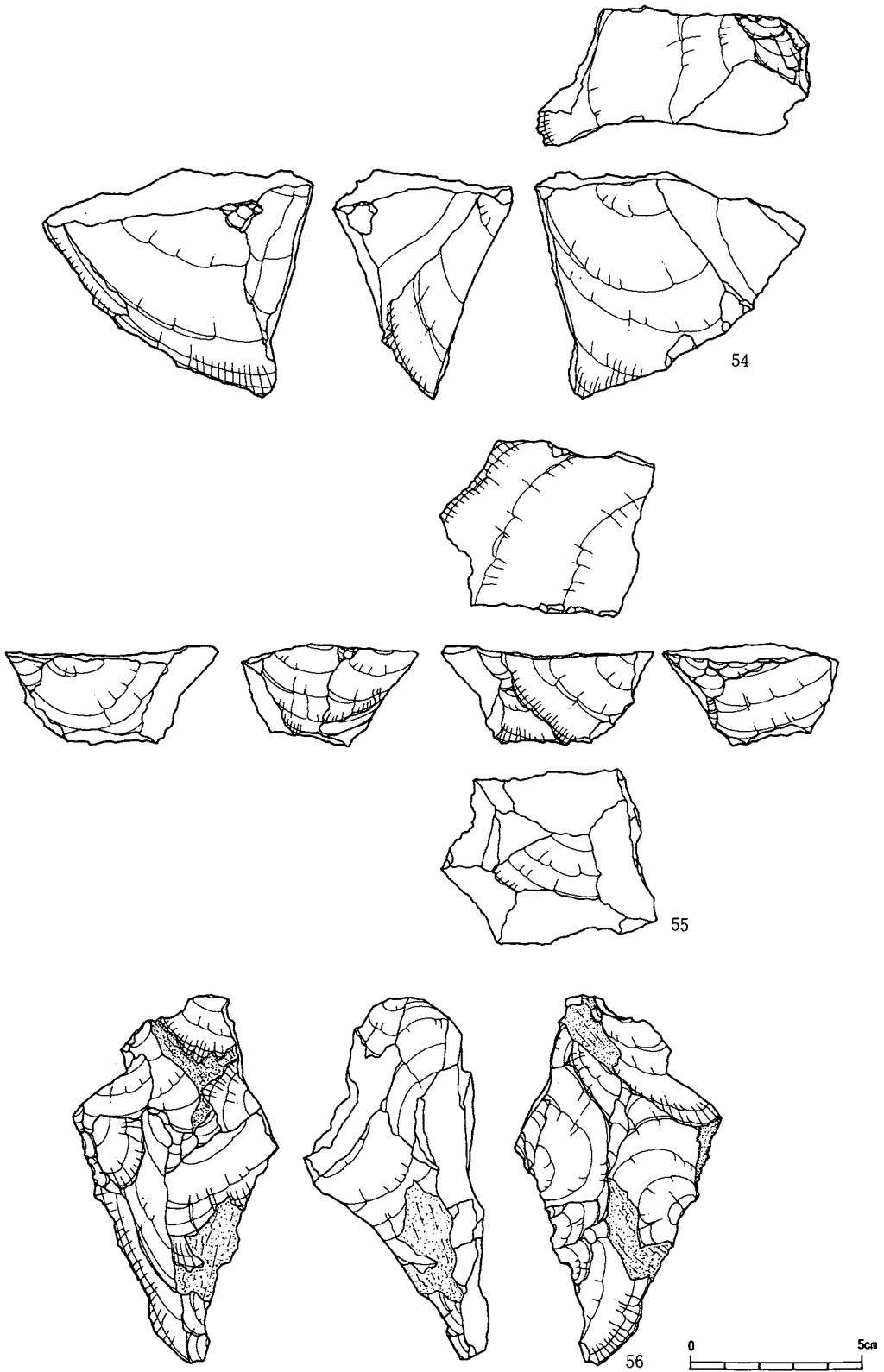
49は、ⅦC-24区で出土した。珪岩製で打点部及び右側縁を欠失している。使用痕は、剥片先端部に観察される。表面に大きく礫面を残す。

50は、ⅡB-3区で出土した。珪岩製で不整形の縦長剥片で、右側縁に使用痕による微細な刃こぼれが観察される。打面は、複剥離面である。

51は、ⅡB-3区で出土した。珪岩製で礫面を打面として剥出された、縦長剥片である。使用痕は、打面部以外の縁辺すべてで観察される。また、右側縁裏面側に6枚の小剥離面が観察



第22図 石器実測図



第23図 石器実測図

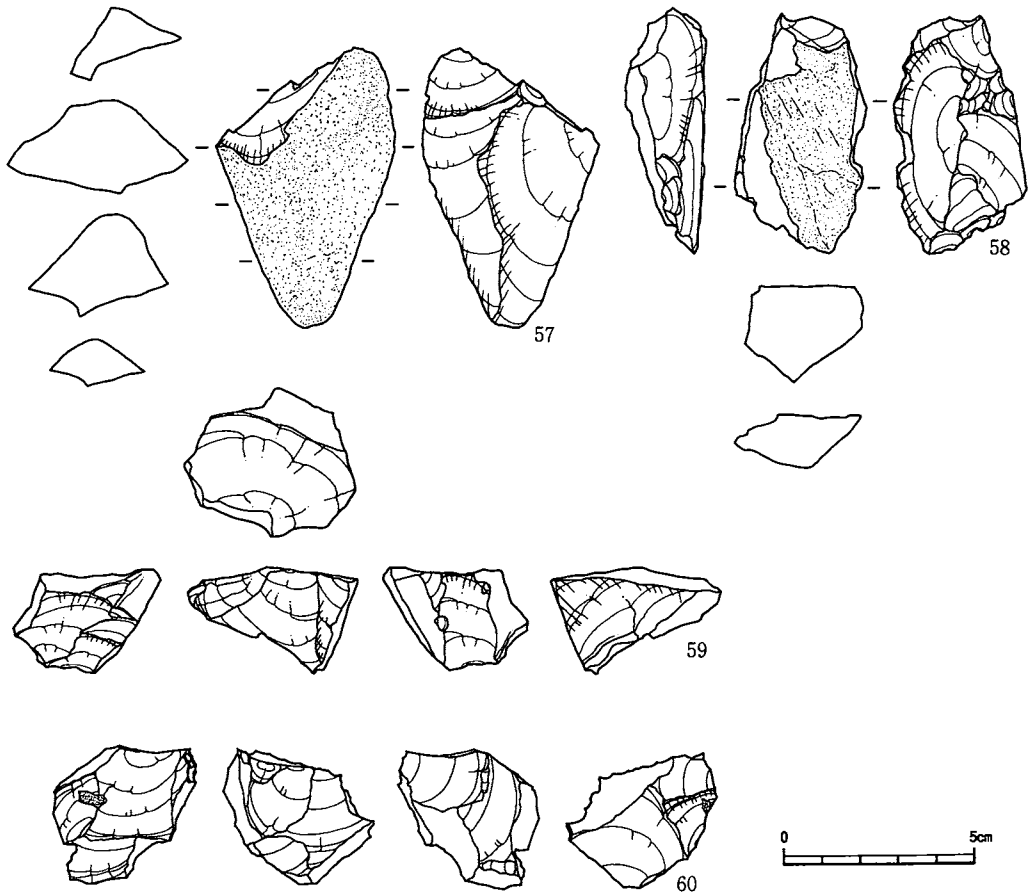
され、弧の広い挟入状を呈する。

52は、ⅡB-9区で出土した。幅広の剥片で、右側縁から先端部にかけて微細な刃こぼれが観察される。打面は、単剥離面である。

53は、ⅡB-3区で出土した。珩岩製の不整形の縦長剥片で、裏面側に節理面が観察される。表面側には、大きく礫面を残す。使用痕は、先端部に観察される。

石核 (第23図54~第24図60)

石核は、14点検出した。その全出土資料に占める割合は、1.7%である。しかし、当該時期の石器石材組成では、黒耀石、珩岩、安山岩、黒色硬質頁岩等が確認されたが、調査区内から検出された石核は、珩岩11点、黒耀石1点、安山岩2点である。特に、風化して光沢のない黒耀石製の石器は多数検出されたが、同種の石材の石核は1点も出土しなかった。このことは、白鳥平B遺跡における当時の石器製作の在り方について考えるうえで注意が必要である。



第24図 石器実測図

第1節 先土器時代の遺物

第4表 石器計測表

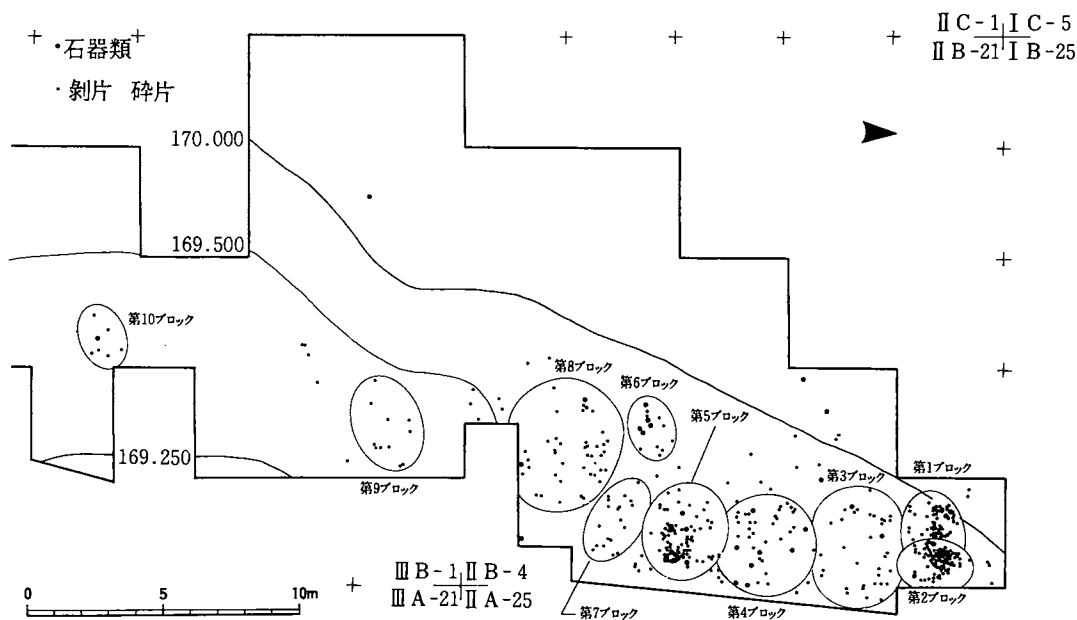
No	器	種	石	材	計 測 値				欠 損 部 位	登 録 番 号
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (cm)		
1	ナイフ	形石器	珪	岩	7.88	3.05	1.60	9.70	—————	ⅢB-5区一括
2	"	"	安山	岩	4.50	1.80	1.00	6.45	—————	4358
3	"	"	黒耀	石	3.20	1.48	0.90	2.40	—————	5386
4	"	"	珪	岩	5.00	2.10	1.20	11.25	—————	3953
5	"	"	黒色硬質頁岩		(6.25)	3.20	1.70	(22.90)	先端部欠損	一括
6	"	"	安山	岩	3.90	1.00	0.70	1.85	—————	3136
7	"	"	珪	岩	3.90	1.18	1.00	3.40	—————	5391
8	"	"	"		3.40	1.90	1.10	4.15	—————	3625
9	"	"	黒耀	石	1.20	1.20	0.40	0.25	—————	5387
10	"	"	"		2.50	2.60	1.10	4.25	—————	4722
11	"	"	"		(2.23)	1.80	0.70	(2.10)	基部欠損	5196
12	"	"	"		(2.40)	1.60	0.90	(4.35)	先端部欠損	4395
13	"	"	"		(1.50)	(1.40)	(0.70)	(0.90)	先端部欠損	5311
14	"	"	"		(2.00)	(1.80)	(0.80)	(2.10)	先端部欠損	5291
15	三稜尖頭器		珪	岩	6.50	1.93	1.10	14.30	—————	4447
16	"	"	黒耀	石	3.30	1.78	0.90	2.70	—————	4517
17	"	"	"		3.80	1.80	1.20	5.60	—————	5361
18	"	"	"		(3.00)	2.00	1.30	(5.40)	先端部欠損	3717
19	"	"	"		(2.93)	2.10	1.30	(8.05)	先端部欠損	5318
20	"	"	安山	岩	(2.80)	1.50	1.20	(4.05)	基部?欠損	ⅢB-1区一括
21	"	"	黒耀	石	(2.10)	1.50	1.90	(3.65)	先端部欠損	4900
22	"	"	"		(1.90)	1.50	0.90	(2.20)	先端部欠損	2095
23	"	"	"		(2.63)	(1.70)	(1.10)	(3.85)	基部欠損	3268
24	"	"	"		(1.23)	1.13	0.80	(0.60)	先端部欠損	2185
25	撞石	器	黒色硬質頁岩		6.25	9.80	2.63	45.90	—————	5360
26	石		黒耀	石	(2.90)	1.50	1.00	(2.65)	錐部先端欠損	4370
27	楔形石器		珪	岩	1.90	1.70	0.60	1.65	—————	5047
28	"	"	"		2.70	1.78	1.00	4.65	—————	5415
29	"	"	黒耀	石	2.00	2.00	0.70	3.10	—————	5223
30	"	"	珪	岩	1.96	1.90	0.50	2.15	—————	3669
31	磨石・敲石		凝灰	岩	7.50	6.70	5.40	312.10	—————	4454
32	"	"	"		9.40	5.20	3.90	221.60	—————	4457
33	"	"	"		7.70	6.10	6.20	420.90	—————	4448
34	"	"	砂岩		(7.10)	(4.20)	(2.30)	(95.00)	下端部欠損	5405
35	"	"	凝灰	岩	7.30	6.20	3.70	220.00	—————	1779
36	"	"	"		(11.50)	4.50	3.00	(166.70)	下端部欠損	5169+5170
37	"	"	砂岩		6.60	6.0	4.20	233.15	—————	3066
38	"	"	"		12.48	4.20	3.10	223.00	—————	4594
39	"	"	凝灰	岩	9.10	5.20	3.10	210.00	—————	5280
40	"	"	"		5.90	4.70	3.90	130.00	—————	2535
41	"	"	砂岩		(13.30)	(4.00)	(2.30)	(225.00)	上端欠損	5281
42	"	"	凝灰	岩	6.10	6.80	6.10	323.00	—————	49
43	石皿・台石		"		13.80	13.50	6.70	1480.00	—————	4247
44	二次加工ある不定形石器		黒耀	石	(1.65)	(1.95)	(4.00)	(2.20)	先端欠損	5228
45	"	"	"		(3.00)	(2.95)	(0.90)	(6.25)	先端部欠損	4375
46	"	"	安山	岩	(5.70)	3.40	(0.90)	(25.25)	下半部折損	4530
47	使用痕ある剥片		黒耀	石	1.80	2.10	0.50	1.60	—————	2596
48	"	"	珪	岩	2.83	1.70	0.60	2.20	—————	5403
49	"	"	"		2.48	2.00	0.70	2.70	—————	2827
50	"	"	"		3.85	2.75	0.75	6.40	—————	5414
51	"	"	"		3.68	2.78	0.60	5.00	—————	2480
52	"	"	"		2.10	2.33	0.70	3.80	—————	2344
53	"	"	"		3.20	3.60	0.60	4.35	—————	5219

また、検出された14点の石核の剥片剥離の状態から、横長剥片か幅広の不整形剥片を剥出している点で共通している。石核の素材では、厚みのある板状の剥片を素材とするもの（54、55）と、分割礫を素材とするもの（56、57、58）がある。

打面の状態からは、平坦打面から一定方向へ石核の縁辺を周るように剥出作業を連続して行うもの（55）や、56のように分割礫の剥離面を打面として、頻繁に打面を轉移し剥出を行なうものがある。

4. まとめ

白鳥平B遺跡の先土器文化は、遺跡の基本層位では第Ⅵb層～第Ⅵc層を包含層とするものである。第Ⅷ層入戸火砕流（シラス）の上層で第Ⅶa層～第Ⅶb層という間層を挟んで検出されている。このことから、始良Tn火山灰降灰以後一定の時間幅をもって形成された文化層であると考えられる。石器組成は、ナイフ形石器、三稜尖頭器、搔器、石錐、磨石・敲石、二次加工ある不定形石器で、比較的充実した内容をもつ。しかし資料総数は802点と多いが、その大半は剥片・碎片である。その石器組成からナイフ形石器、三稜尖頭器を主体とする石器文化として捉えられる。



第25図 石器分布図4（北側遺物集中部）

遺物の包含状態は、比較的良好であるが一部上部文化層（縄文時代草創期）と混在するものも認められる。層厚は第VI b層～第VI c層合わせて約60～70cmである。遺物は第VI c層上部～第VI b層下部にかけて、約30～40cmに包含されている。

このような包含状態の中で検出された遺物の分布から、大きく南北の2つの石器集中部が確認された。また北側の石器群については、その遺物の分布からさらに10のまとまり（ブロック）に分けることができる。それらのブロックの在り方については、第25図で示したとおりである。これらの各ブロックは剥片・碎片の集中部分に同種の石材を利用した石器類が重なるまとまりとして捉えられ、検出された剥片・碎片の大半は風化して光沢のない黒耀石である。このことは、白鳥平B遺跡の先土器文化の特徴として特筆されるものである。

また、第1、3ブロックでは、検出された剥片・碎片の広がり、中央部にわずかに空白をもって存在する。このような剥片・碎片の広がり、大阪府羽曳野市翠鳥園遺跡の在り方に類似し、石器製作の作業場として捉えることができる。

しかし、白鳥平B遺跡の北側石器群（第1～10ブロック）で検出されている剥片・碎片と石器類は両者とも石材は風化して光沢のない黒耀石で共通した状況が窺えるが、同種の石材の石核が検出されていない。このことは、当該遺跡に持ち込まれた素材の状態を想定する上で重要である。つまり、風化して光沢のない黒耀石の原産地がどこであるかが問題であるが、少なくとも在地の石材ではないことから、遺跡には素材剥片の状態を持ち込まれている可能性が指摘できる。その素材剥片から調整加工を加えて石器を作り出す過程のみを遺跡内で行っていると考えられる。

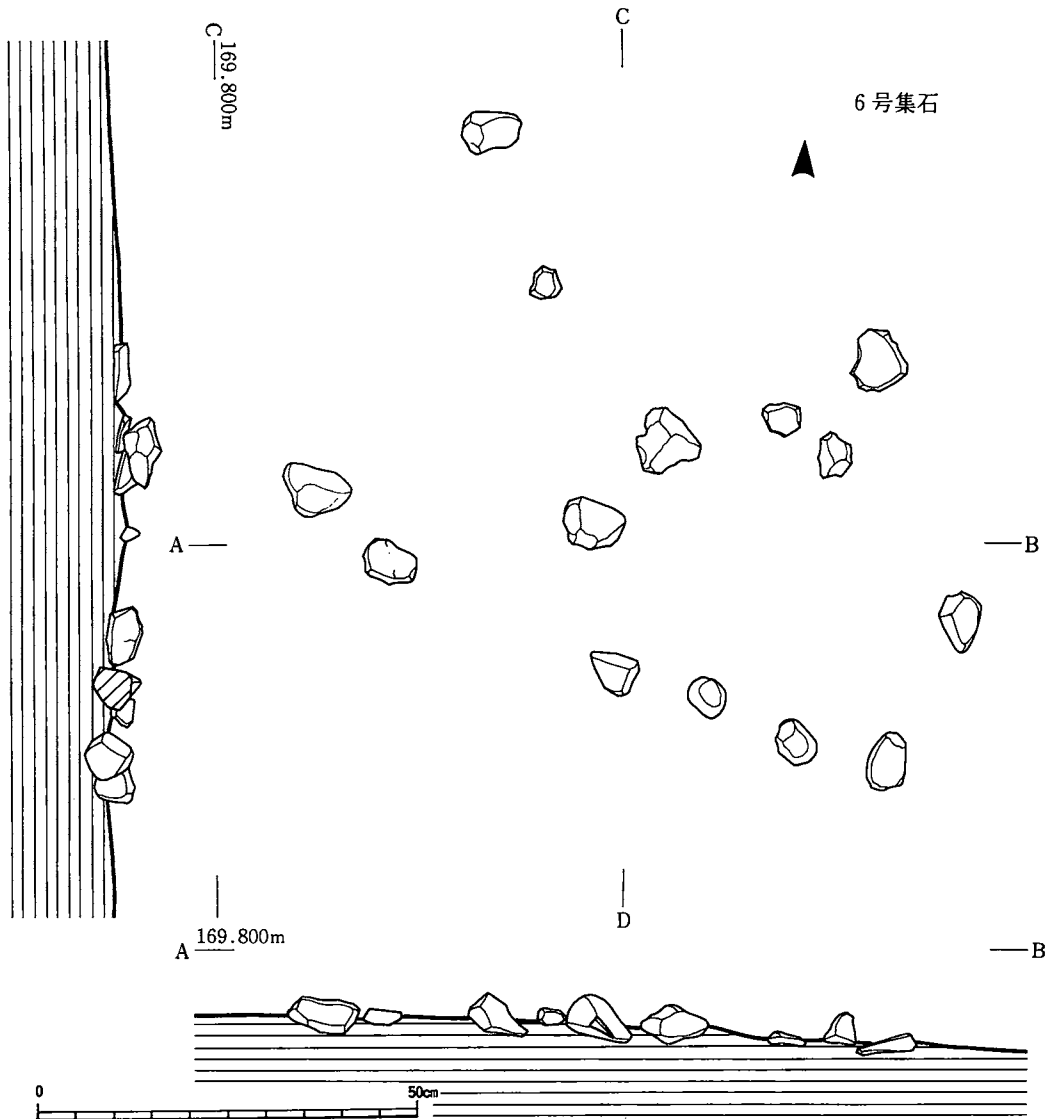
また、遺跡内に残された石器群の編年的位置付けが問題となるが、南北とも調査範囲の制約から石器群の全体像を示しているとは考えられない。その点も考慮に入れて編年的位置付けを示しておきたい。

白鳥平B遺跡において検出された石器群は、前述したように第VIII層（入戸火砕流）上位の第VI c層～第VI b層に包含層が認められる石器文化である。また、この石器文化は、ATとの間に第VII a、b層を間層として挟んで確認された。このことから、AT降灰以後一定の期間の空白をもって形成された石器文化であることが指摘できる。

北側の石器群では、石器組成の中に包含層からの検出ではなく、攪乱で現位置を止めない状態ではあるが1点剥片尖頭器が含まれている。また他のナイフ形石器は、1点の台形石器と切出形のナイフ形石器で構成され、それに加えて三稜尖頭器が7点存在する。また、南側の石器群には、剥片尖頭器は認められず、切出形のナイフ形石器、原ノ辻型の台形石器、三稜尖頭器が検出されている。このような形態組成に近似する遺跡としては、白鳥平A遺跡・血気ヶ峰II石器文化がある。このことから白鳥平A遺跡・血気ヶ峰遺跡II石器文化と同様の時期として捉えられる。南側の石器群についてもほぼ同様の時期と考えられる。

第2節 縄文時代草創期の遺物

縄文時代草創期の調査は、ほぼ遺跡全面において実施した。その結果Ⅱ-B区を中心に、第VI b層上部～第VI a層下部にかけて爪形文土器と石鏃を中心とする石器類が検出された。包含層であるこれらの層は、黒褐色土、褐色土で第VI b層はやや粘性を帯びている。第VI b層、第VI a層の層厚は合わせて50～60cmを測り、このうち縄文時代草創期の遺物が包含されている層厚は30～40cmである。



第26図 集石実測図

しかし、部分的には上部文化層（縄文時代早期）及び下部文化層（先土器時代）との遺物の混在が認められたが、包含状態は概ね良好である。

遺物の分布は、遺跡北側のⅡ－B区を中心に検出され、遺跡全面には広がらない。また調査区の制約から、遺物の広がり全域を確認できていない。遺物は、遺跡北側の標高約170.0mより低い東側に集中している。このことから縄文時代草創期の遺物の広がりには、調査区の東側にさらに伸びるものと考えられる。

縄文時代草創期に属する遺物は、1,922点出土した。その内訳は、爪形文土器70点、細刃器33点、石鏃56点、尖頭器2点、削器4点、磨石・敲石14点、石皿・台石4点、二次加工ある不定形石器13点、使用痕ある剥片30点、石核26点、剥片・碎片1,648点である。

1. 遺構とその分布

縄文時代草創期に属する遺構は、VB-21区から集石遺構が1基検出された（第26図）。

検出面は、第VI b層下面である。この6号集石は、当該期の遺物の集中部と分布を異にする。1m×1mの範囲に、拳大の破碎礫が15個集中して検出された。遺構に伴う土坑は、検出されなかった。検出された破碎礫は、熱を受け赤変している。

2. 出土遺物とその分布

(1) 土器

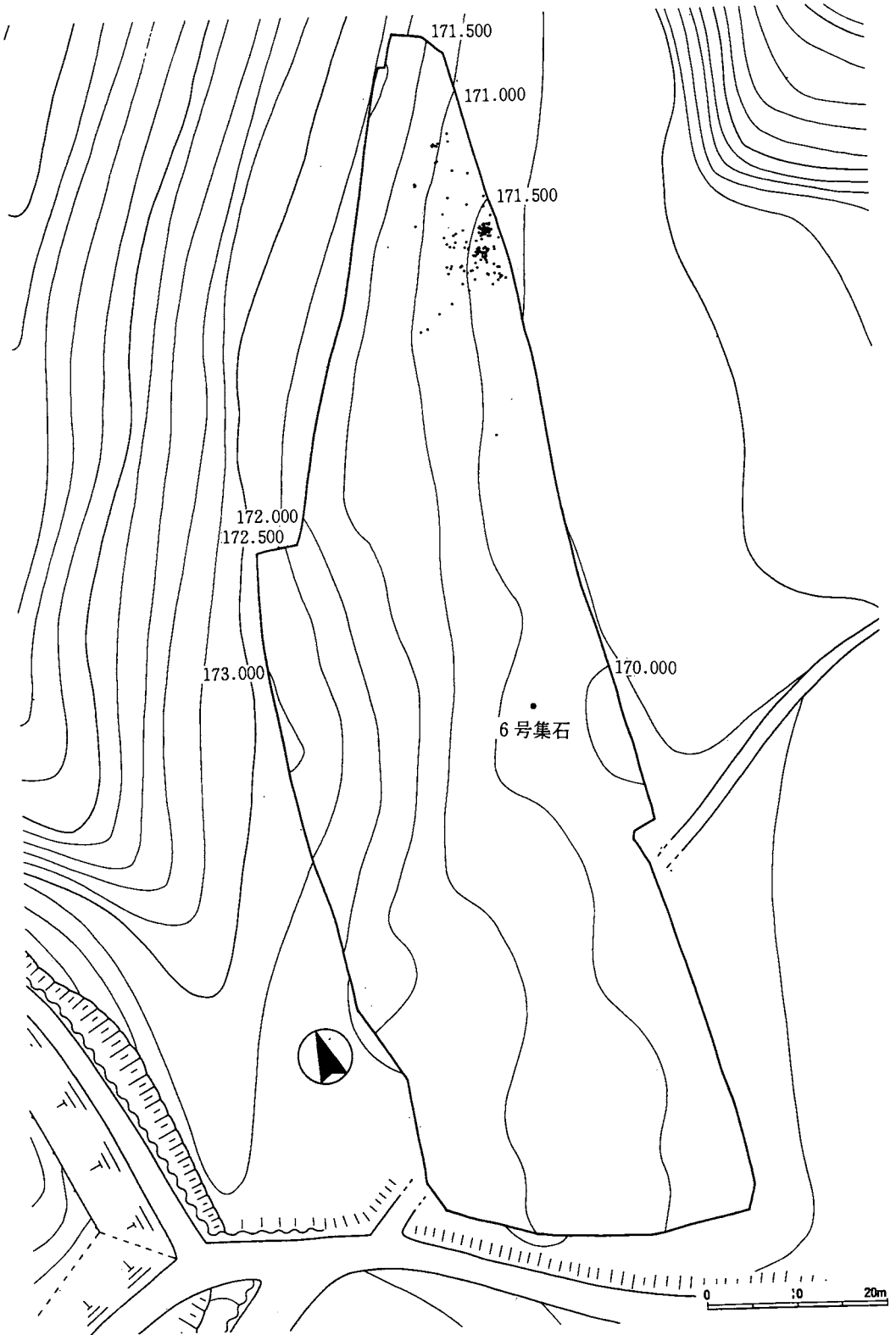
草創期に属する土器は、第VI b層上部～第VI a層下部にかけて検出された。その総数は、70点であるが1例の接合があったため、実質の資料点数は69点である。これらの土器は、Ⅱ－B区に集中して検出され、その分布はいくつかのまとまりに分けられる。

これらの土器を部位別にみると口縁部15点、胴部54点で、底部の資料は検出されなかった。

また、その土器の器形については完形かもしくは完形に近い状態に復元できる資料が存在しないため不明である。しかし、口縁部の資料からみて、口縁端部以下文様帯を数条施し、以下胴部については施文されない。所謂、土器上部に文様帯が集約される施文形態をとるものと考えられる。これらの土器の内、文様が施文されている26点の資料について、その施文の特徴からⅠ～Ⅳ類に分類ができる。以下類ごとに説明を加えていく。

Ⅰ類（第29図1～第30図16）

Ⅰ類は、口縁端部以下に横方向へ爪形文を数条施文するもので、爪形文の施文が規則的なもの（a）と不規則なもの（b）に細分される。Ⅰa、Ⅰb類とも口縁端部は平坦に作りだし共通している。またこれらの資料の爪形文の施文は、深くその施文により土器表面に起伏が認め

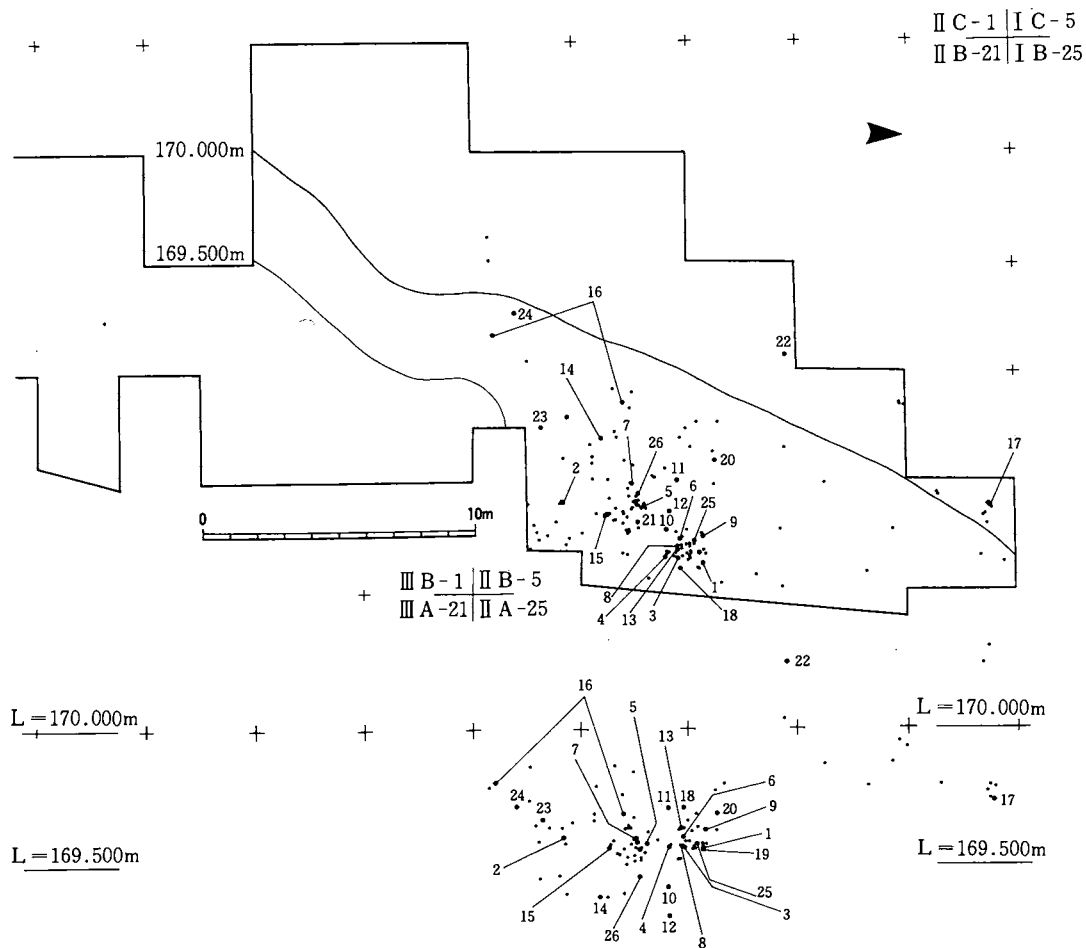


第27図 遺物分布図（土器）

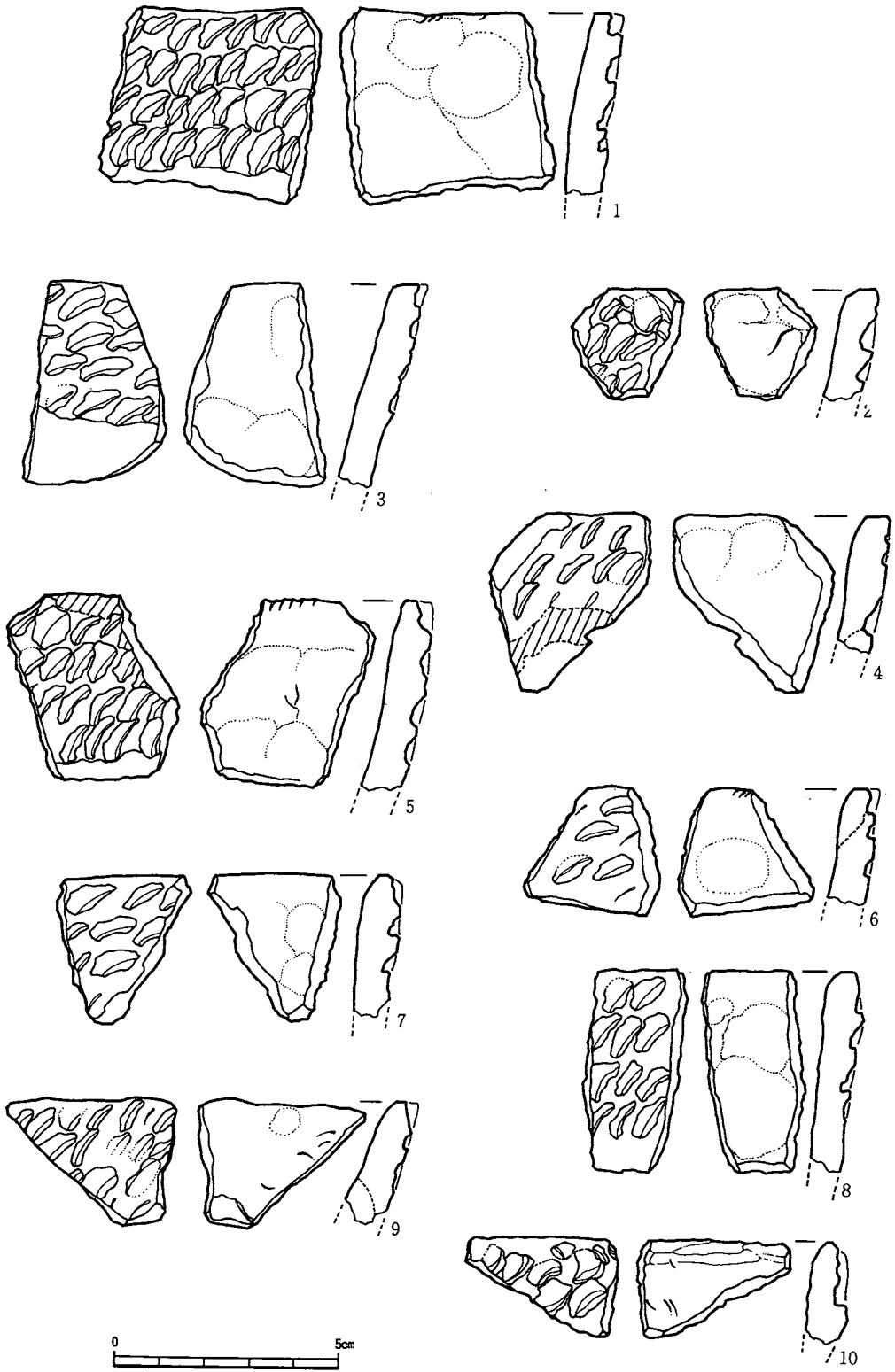
られる。1、2、5の資料の施文の切り合いから、施文時の土器の置き方、施文の方向性を類推することができる。つまり土器を正立に置き、左から右へ施文している。このことから施文された爪形文が「C字」形を呈している。しかし、爪形文が不規則に施文されているI b類の資料では、「C字」形と「D字」形が混在するものもみられる。

以下、資料について個別に説明を加えていく。

1は、口縁部表面側に規則的に配列された爪形文が4段施文される。施文は深く、文様間は粘土が盛り上がり起伏がみられる。口唇部は平坦に作り出され、爪形文等の加飾は認められない。内面は、口唇部近くにナデによる砂粒の動きが観察される。このナデによって口唇部の内面側の稜を明確に作り出している。ナデの方向は右から左である。またその他に指による凹も観察され起伏がみられる。この凹は、整形段階かもしくは表面への爪形文施文段階の痕跡と考えられる。色調は、内外面とも淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒と角セン石が観察される。



第28図 縄文時代草創期土器分布図



第29図 土器実測図

2は、口縁部表面側に不規則に爪形文が4段施文される。施文は深く、文様間の粘土が盛り上がり大きく隆起し起伏がみられる。爪形文は、大半が「C字」形に施文されているが、僅かに「D字」形に施文されているものもみられる。口唇部は、平坦に作り出されている。内面には、口唇部の内面側の稜を明確に作り出すためのナデが認められる。砂粒の動きから1と同様に右から左へ行われている。以下指による明確な凹は観察できず、1ヶ所浅く爪の痕跡が認められるが比較的丁寧に作り出されている。

色調は、内外面とも暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、微細な石英粒が観察される。

3は、口縁部表面側に規則的に配列された爪形文が4段施文される。しかし、その配列は1と比較して右に大きく傾いた「C字」形に施文されている。口唇部は、平坦に作り出されている。内面には、3ヶ所の指による凹がみられる。しかし、口唇部近くのナデによる調整は、器面の状態がよくないため確認できない。色調は、内外面とも淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに微細な石英粒が確認される。

4は、口縁部表面側に規則的に配列された爪形文が3段施文される。施文された爪形文は深い、他の資料に比べ器面の起伏は少ない。また、2段目右側と2段目左端、3段目左端のそれぞれの切り合い関係から施文の方向は、左から右へ、上から下へ順次施文されたものと考えられる。口唇部は、平坦に作り出されている。内面には、指による凹が観察される。色調は、内外面とも淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに微細な石英粒が観察される。

5は、口縁部表面側に規則的に配列された爪形文が4段施文される。施文された爪形文の方向は、1、4と同様で左から右へ、上から下へ順次施文されている。また1と同様に4段目の施文部の下方に、ナデによる粘土の僅かな高まりが観察され、類似性が指摘できる。このことから1、5の資料は、同一固体として捉えることができる。口唇部は、平坦に作り出されている。内面には、口唇部近くに右から左へのナデ調整が施され、口唇部の内面側に明確に稜を作り出している。またその稜上から口唇部にかけて浅い爪形文が施文されている。以下には、指による凹が観察され、一部爪の痕跡も認められる。色調は、内外面とも淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒と角セン石が確認できる。

6は、口縁部表面側に規則的に配列された爪形文が4段施文されている。施文された爪形文は、3の資料と同様に大きく右に傾いた「C字」形に施文されている。口唇部は、平坦に作り出されている。内面には、口唇部の端部に稜を作り出すための右から左へのナデが観察され、口唇部近くから口唇部にかけて浅い爪形文が施文されている。以下は、指による凹が観察される。色調は、内面が褐色で外面が暗褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒が観察される。

7は、口縁部表面側に規則的に配列された爪形文が4段施文されている。その施文は、3、

6と同様に大きく右に傾いた「C字」形を呈する。口唇部は、平坦に作り出されている。内面には、口唇部端部内面側に稜を作り出すために、右から左へナデによる調整が施されている。以下は、指による凹が観察される。色調は、内外面とも淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒が観察される。

8は、口縁部表面側に規則的に配列された爪形文が4段施文されている。その施文は、左から右へ上から下へ順次施され、深い「C字」形を呈する。口唇部は、平坦に作り出されている。内面には、口唇部近くに右から左へのナデによる調整が確認できる。以下は、指による凹が観察される。色調は、内外面とも淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒と角セン石が確認される。また内面の口唇部近くに煤の付着がみられる。

9は、口縁部表面側に規則的に配列された爪形文が4段施文されている。その施文は深く施されているが、内外面とも保存状態が悪いためやや磨耗している。爪形文は、「C字」形に施されている。内面は、指による凹とそれに伴う爪の痕跡が確認できる。色調は、外面では磨耗し土器の素地（黒褐色）がみられるが、施文部の周囲の盛り上がり部分では淡褐色を呈し、内面でも同様である。胎土には、僅かに微細な石英粒と角セン石が確認できる。

10は、口縁部表面側に不規則な爪形文が2段施文されている。施文された爪形文は、「C字」形と「D字」形に深く施されている。そのため器面は、施文時の粘土の盛り上がりにより起伏がみられる。口唇部は、他の資料と違いやや丸みをもった端部に作り出されている。内面は、口唇部近くから右から左へのナデ調整が施される。指による凹はみられないが、爪と思われる痕跡が確認できる。色調は、外面が黒褐色、内面が暗褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒が確認できる。

11は、胴部の破片で規則的に配列された爪形文が3段施文されている。その施文は、深いのが他の資料にみられるような文様間の大きな粘土の盛り上がりはみられない。内面には、下端に指による凹と爪の痕跡が確認できる。色調は、外面が淡褐色、内面が焦茶色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに微細な石英粒と角セン石が確認できる。

12は、胴部の破片で規則的に配列された爪形文が3段施文されている。その施文は、深く文様間では大きく粘土が盛り上がり、器面は起伏がみられる。内面は、僅かに指による凹が確認できる。色調は、内外面とも淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒が確認できる。

13は、胴部の小破片で規則的に配列された爪形文が2段確認できる。その施文は深く施されているが、内外面とも保存状態が悪いためやや磨耗している。そのため、内面の調整は確認できないが、指による凹はみられない。色調は、外面が淡褐色で内面が暗褐色～焦茶色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒が確認できる。

14は、胴部の破片で不規則に施文された爪形文が観察される。その施文の方向は、一定せず、

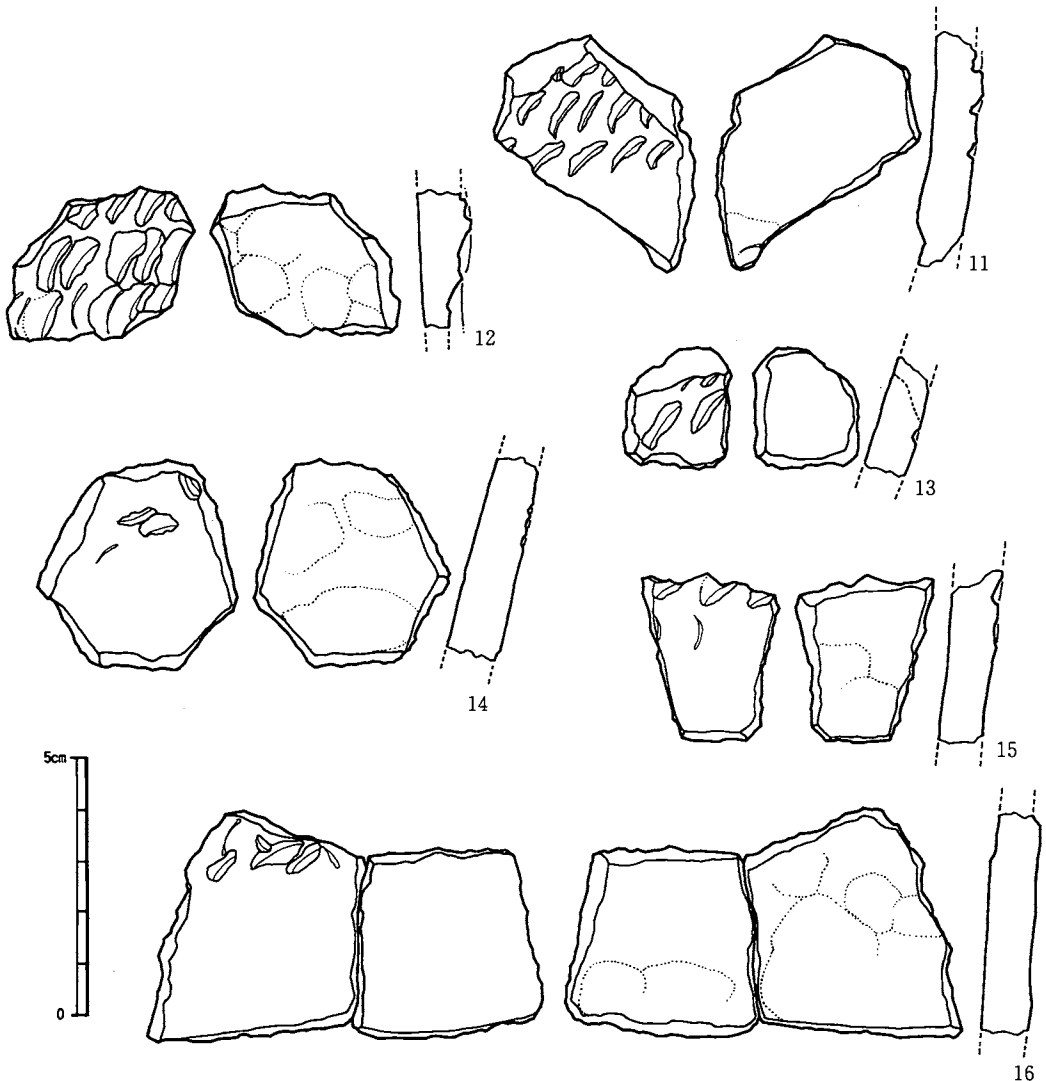
疎らである。内面には、僅かに浅い凹がみられる。色調は、内外面とも淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒が確認できる。

15は、胴部の破片で僅かに深く施文された爪形文が観察される。器面の調整は、内外面ともナデによる。色調や胎土は15と同様であり、同一固体であると考えられる。

16は、胴部の接合資料である。爪形文の施文は、不規則に施される。器面の調整は、内外面ともナデによるが、内面には指による凹も観察される。色調は、内外面とも淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに微細な石英粒、黒雲母が確認できる。

Ⅱ類 (第31図17~21)

Ⅱ類は、爪形文を施文した周囲が摘みあげにより取り囲むように隆起し、指頭圧痕が認めら

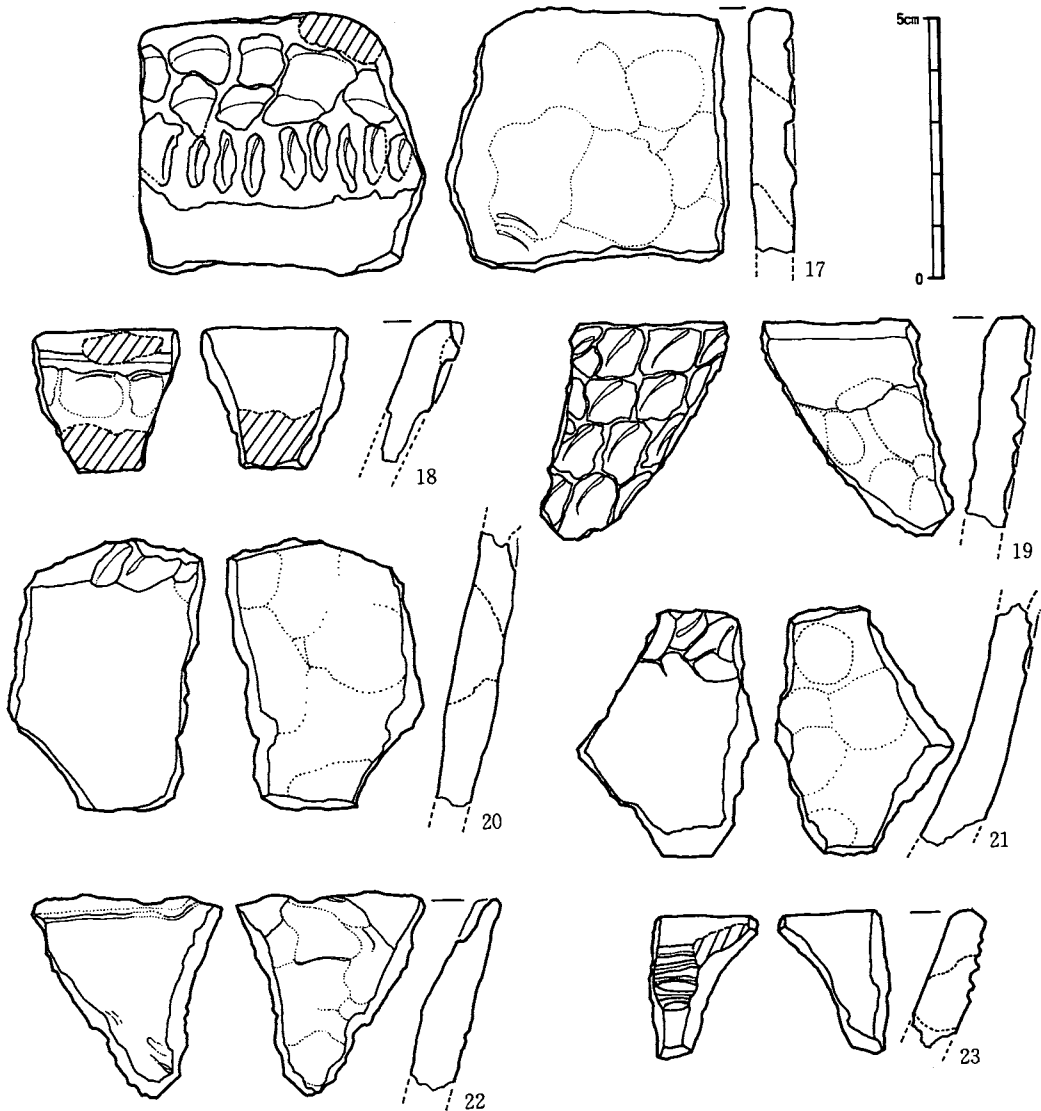


第30図 土器実測図

れるものである。資料数は、5点と少ない。その文様の構成には、大きく2種類がみられる。つまり17、18のように向きの違う爪形文が数段施文されるものと、19~21のように「C字」形の爪形文を施文し周囲を隆起させたものである。

以下、資料について個別に説明を加えていく。

17は、口縁部上部に横向き爪形文を施文し、その施文時の指頭圧痕により周囲は盛り上がっている。この指頭圧痕を伴う爪形文を2段施文し、その下に深く施文された「C字」形の爪形文が1列規則的に施される。これらの文様帯の下は、ナデにより調整が施され文様帯と無文帯とを区画するように僅かな粘土の隆起がみられる。口唇部は、平坦に作り出されている。内



第31図 土器実測図

面の調整は丁寧であるが、指による凹が確認され起伏がみられる。色調は、内外面とも暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに微細な石英粒が観察される。

18は、保存状態が悪いため器面が内外面とも磨耗している。しかし口縁部表面側に横向きの爪形文と指頭圧痕が施文され、その文様上部の口唇部に近い部分に1条貼りつけによる隆起線文がみられる。内面については、磨耗が激しく調整については確認できない。色調は、内外面とも暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒が観察される。

19は、口縁部表面側に同傾の「C字」形を呈する爪形文を4段施文する。その爪形文は指頭圧痕を伴い、それぞれの文様間は粘土の盛り上がりにより隆起している。口唇部は、平坦に作り出されている。内面は、口唇部内側の稜を明瞭にするためのナデ調整と、指による凹が観察される。この凹は、上方では明瞭に確認できるが下方ではやや浅く不明瞭になる。色調は、外面が焦茶色、内面が淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒と黒耀石が観察される。

20は、胴部破片で僅かに深く施文された爪形文と、それに伴う指頭圧痕が確認できる。その他の部分は、内外面ともナデ調整が施される。内面には、指による凹が観察されその上からナデによる調整が施されている。色調は、外面では文様周辺で暗灰色、その他は淡褐色で、内面は淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒と角セン石、黒耀石が観察される。

21は、胴部破片で僅かに深く施文された爪形文と、それに伴う指頭圧痕が確認できる。その他の部分は、ナデ調整が施されている。内面には、指による凹が観察される。色調は、内外面とも暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒と黒耀石が観察される。

Ⅲ類 (第32図24~26)

Ⅲ類は、口縁端部以下に横方向へ爪形文施文を行い、その爪形文施文時の摘みあげによって、横方向に直線的な隆起部を作り出しているものである。資料数は、3点と少ない。また、その出土地点も疎らで、まとまりとしては捉えられない。文様構成は、類似するが口唇部及び口縁部の形態は若干相違点が窺える。

以下、資料について個別に説明を加えていく。

24は、外傾する口縁部で口唇部外面側に「C字」形の同傾の爪形文を施文する。この文様の下部に横向きの爪形文を3段施文する。そのため、文様間の粘土が盛り上がり3条の隆起線文を構成している。このことから、横向きの爪形文施文は摘みあげによって隆起線文を作り出すことを意識した手法と考えられる。また施文部は口縁部上部に集約され、以下は無文となる。この無文部分は、ナデ調整が施されるが指によると考えられる凹も観察される。内面にも同様の凹が観察される。色調は、内外面とも灰褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに微細な石英粒と黒耀石が観察される。

25は、外傾する口縁部の資料であるが、保存状態が悪く磨耗が著しいため文様は不鮮明である。文様は、口唇部外面側に「C字」形の同傾の爪形文施文が観察できる。この文様の下部に横向きの爪形文を施文する。これらの文様間に貼りつけによる隆起線文が観察される。色調は、内外面とも淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに微細な石英粒と黒耀石が観察される。

26は、口縁端部付近で小さく外反する資料である。文様は、口唇部外面側に「D字」形の同傾の爪形文が施文され、3段の横向きの爪形文が施文される。この文様間には、26と同様に摘みあげによる隆起線文が観察される。色調は、内外面とも淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒と黒耀石が観察される。

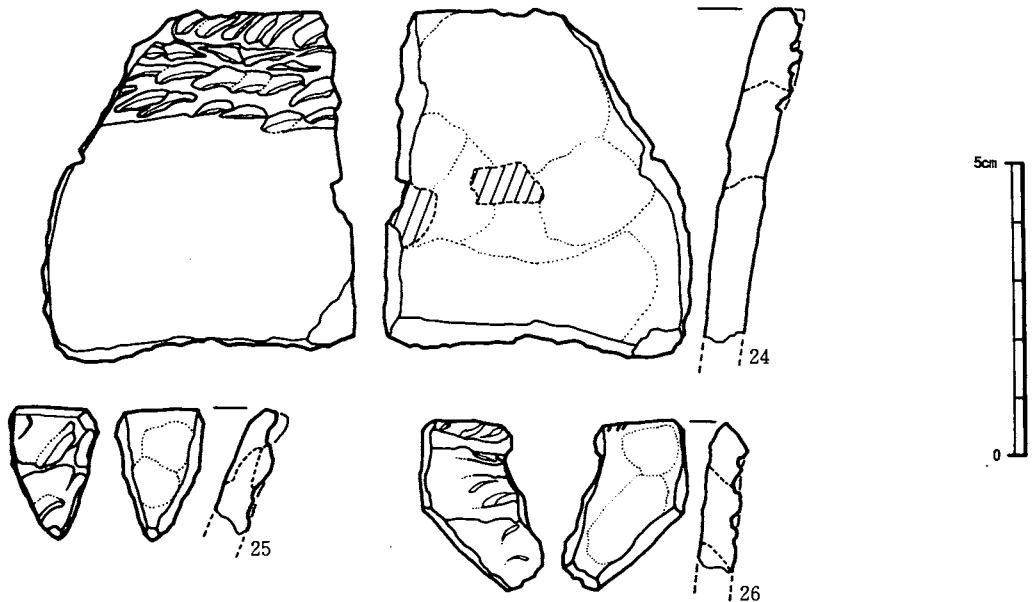
IV類 (第31図22～23)

IV類は、上記のI～III類に分類できない資料を一括して取り扱った。これらの資料はすべて1～7ブロック外から検出された。

以下、資料について個別に説明を加えていく。

22は、外傾する口縁部の資料である。文様は、外面口縁部上部に1条の貼りつけによる隆起線文が観察される。この他の部分は凹が観察され、著しい凹凸がみられる。また内面には、口唇部近くに指頭圧痕が重複して施文され、爪の痕跡も観察される。色調は、外面が暗赤褐色、内面が焦茶色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒と黒耀石が観察される。

23は、外傾する口縁部の資料である。口唇部は、丸く作り出され他の資料に比べ異質である。文様は4条の隆起線文が観察され、その文様間に爪形文が施文されている。色調は、内外面と



第32図 土器実測図

第2節 縄文時代草創期の遺物

第5表 縄文時代草創期石器組成表

器種	計 (%)	珪岩	黒耀石	安山岩	頁岩	砂岩	凝灰岩
石 鏃	65(38.0)	24(36.9)	40(61.5)	1(1.6)	—	—	—
細 刃 器	33(19.3)	1(3.0)	32(97.0)	—	—	—	—
尖 頭 器	1(0.6)	1(100.0)	—	—	—	—	—
削 器	4(2.3)	3(75.0)	—	1(25.0)	—	—	—
抉 入 石 器	1(0.6)	—	1(100)	—	—	—	—
楔 形 石 器	5(2.9)	1(20.0)	3(60.0)	1(20.0)	—	—	—
石 錐	1(0.6)	—	1(100)	—	—	—	—
磨 石 ・ 敲 石	14(8.2)	—	—	—	—	5(35.7)	9(64.3)
石 皿 ・ 台 石	4(2.3)	—	—	—	—	—	4(100)
二次加工ある不定形石器	13(7.6)	6(46.2)	7(53.8)	—	—	—	—
使用痕ある剥片	30(17.6)	7(23.3)	23(76.7)	—	—	—	—
石 器 総 計	171(9.2)	43(25.1)	107(62.6)	3(1.8)	—	5(2.9)	13(7.6)
石 核	26(1.4)	6(23.1)	20(76.9)	—	—	—	—
原 石	6(0.3)	—	6(100)	—	—	—	—
剥 片 ・ 碎 片	1648(89.1)	408(24.8)	1230(74.6)	8(0.5)	2(0.1)	—	—
総 計	1851	457(24.7)	1363(73.6)	11(0.6)	2(0.1)	5(0.3)	13(0.7)

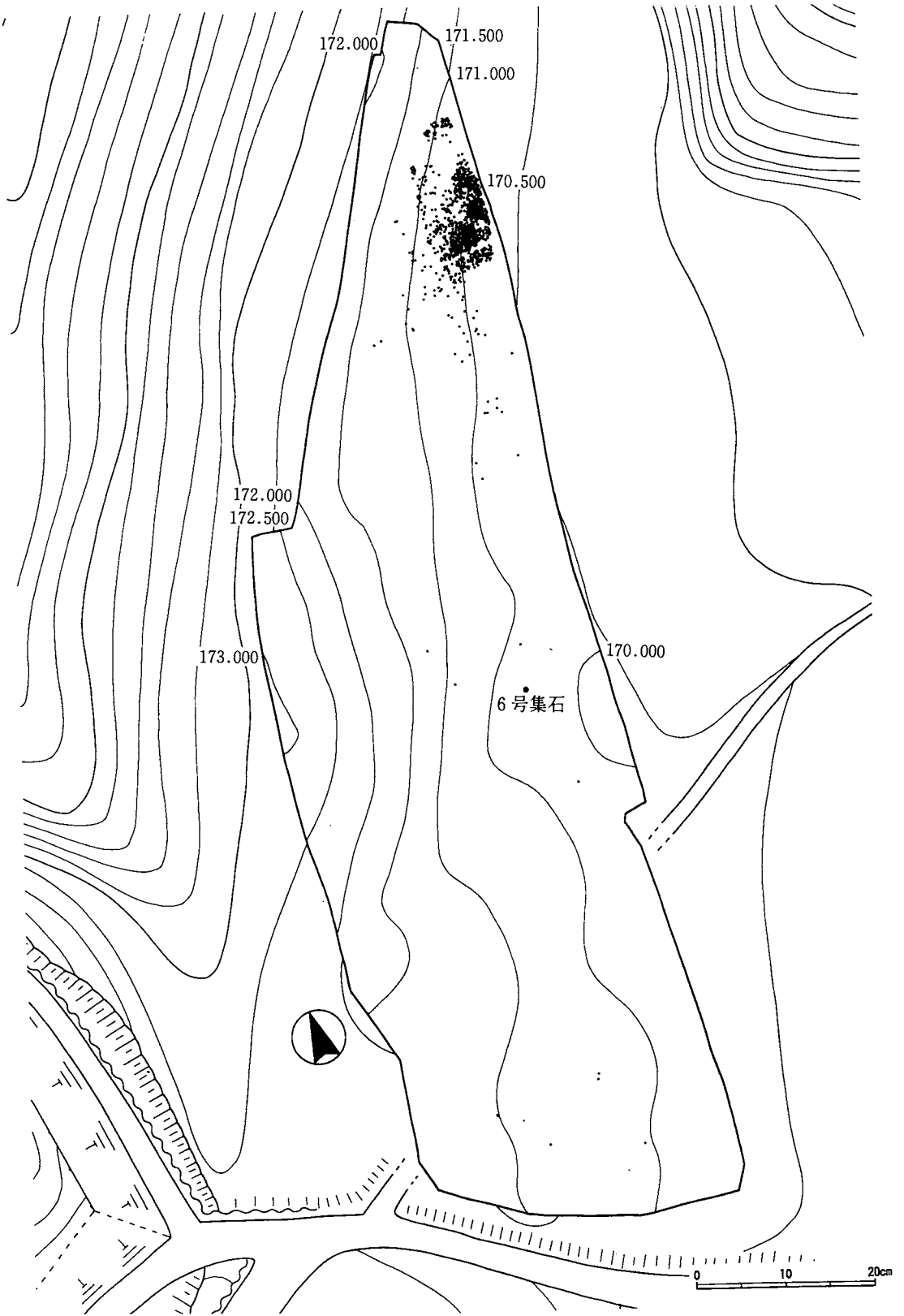
も淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、僅かに石英粒が観察される。

(2) 石器

縄文時代草創期に属する石器は、1,851点検出された(第5表)。その内訳は、石器171点、石核・原石32点、剥片・碎片1,648点である。またその中で石器の器種ごとの内訳は、石鏃65点、細刃器33点、尖頭器1点、削器4点、抉入石器1点、石錐1点、楔形石器5点、二次加工ある不定形石器13点、使用痕ある剥片30点、磨石・敲石14点、石皿・台石4点である。石材ごとの内訳は、黒耀石1,363点、珪岩457点、安山岩11点、砂岩5点、凝灰岩13点である。

石器の分布は、調査区北側のⅡ-B区を中心に比較的まとまって検出されている。その在り方から、いくつかの集中部に分けられる。またこのまとまりは、土器の集中部と重なる傾向が窺える。

第三章 調査の成果

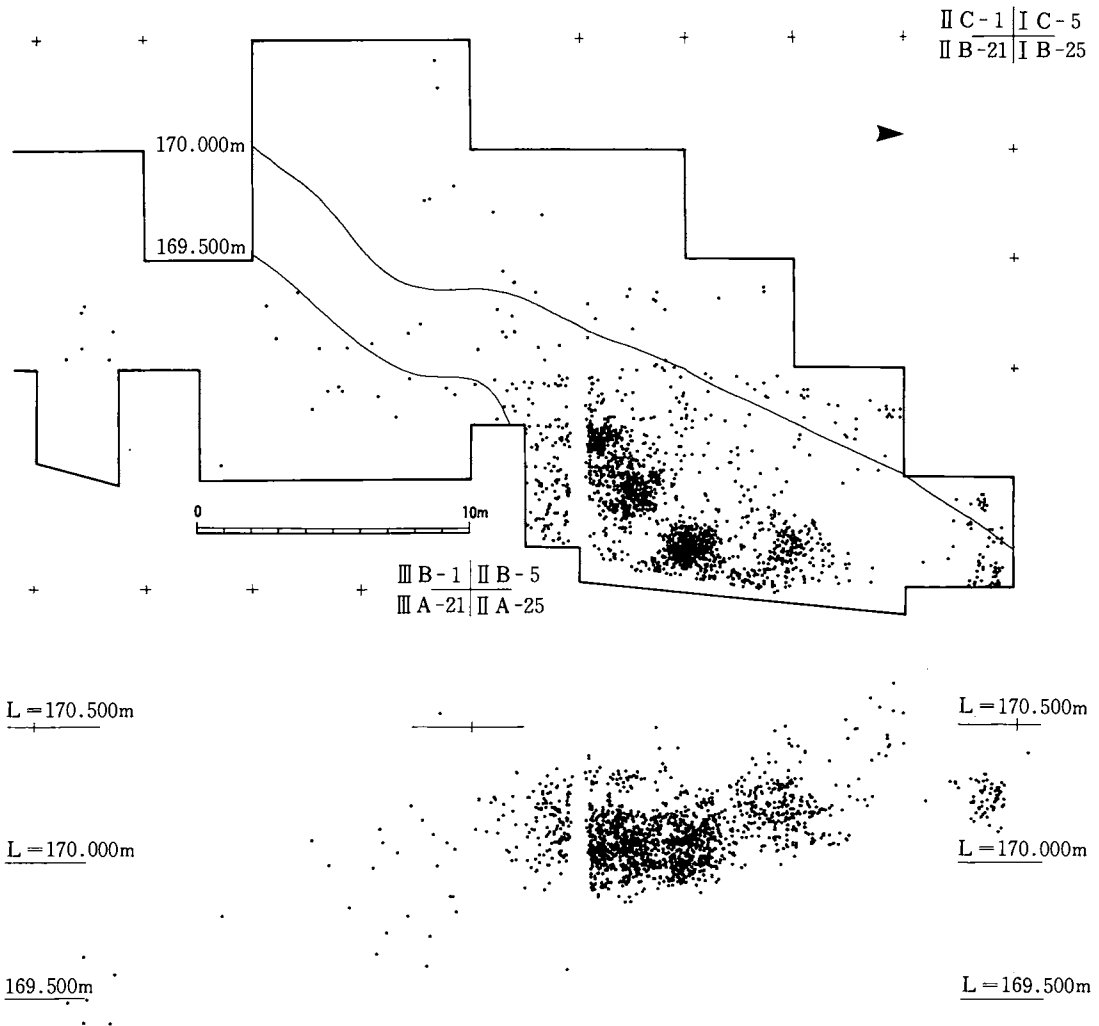


第33図 遺物分布図（石器）

石鏃 (第37図1～第39図45)

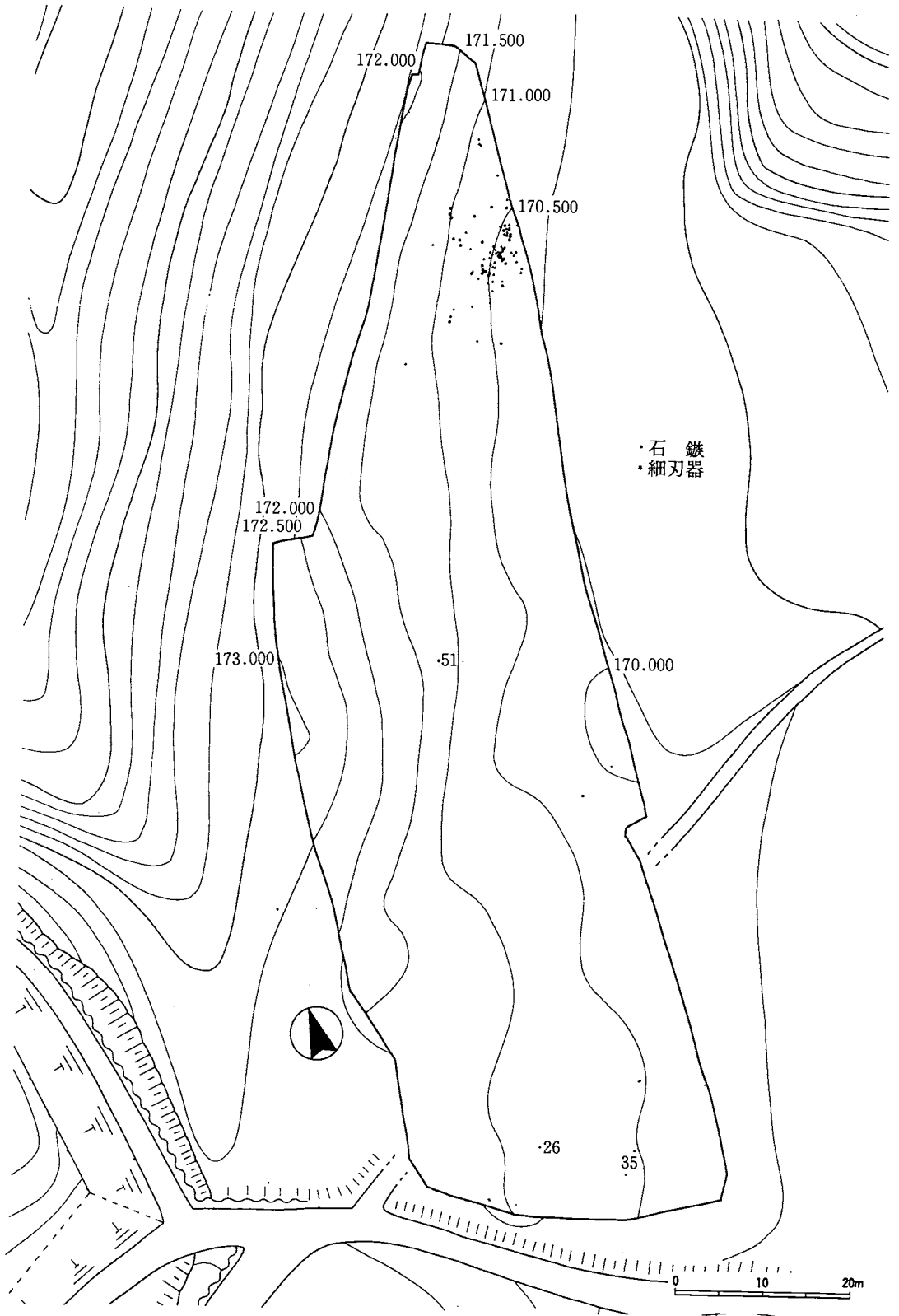
石鏃は、65点検出した。その中で接合資料が1例認められたので、資料総数は64点となる。また、先端部及び脚部末端のみの資料については、図化できなかったためここでは掲載していない。石器組成に占める割合は、38.0%で当該時期の石器全体の中で最も高い数値を示している。その石材ごとの内訳は、黒耀石40点、珪岩24点、安山岩1点で、黒耀石の利用頻度が最も高い。その分布は、北側の遺物集中部にまとまり、偏在する傾向は窺えない(第35図)。

検出された65点の石鏃は、石器の形状において二等辺三角形(第1類)、正三角形(第2類)に分類できる。さらに、その基部の作りだしの状況から平基のもの(a)、浅く挟れるもの(b)、V字状に挟れるもの(c)、U字状に挟れるもの(d)に細分される。以下、類ごとに説明を加



第34図 縄文時代草創期石器分布図

第三章 調査の成果



第35図 遺物分布図（石鏃・細刃器）

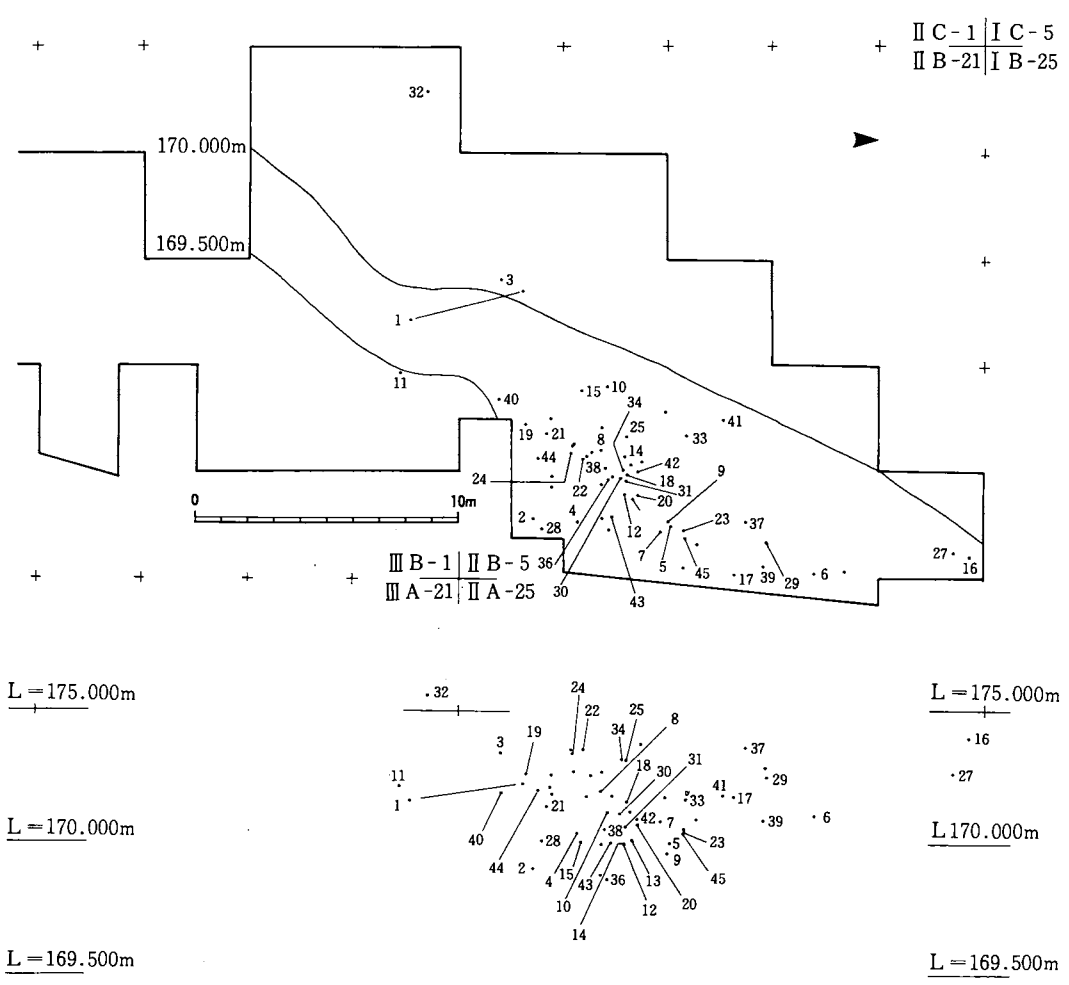
えていきたい。

第1 a類

1 a類は、二等辺三角形を呈する平基の石鏃である。しかし、この類別に該当する資料は、検出されなかった。

第1 b類 (1, 3, 4, 6, 7, 9, 17, 19, 20, 22, 25, 28, 29, 32, 33)

1 b類は、二等辺三角形を呈し浅い抉入を施す石鏃である。資料数は15点で、全資料の中で最も多い数値を示している。石器の形状からは、縁辺が直線的に作り出されるもの(15)と、膨らむもの(1, 3, 4, 6, 7, 9, 17, 19, 20, 22, 25, 28, 29, 32, 33)とに分けられる。また、全体的に左右対称になる形状のものはみられず、脚部の左右で大きさ、長さに違いが認め



第36図 遺物分布図(石鏃)

られる。

比較的細かな調整によって作り出されているが、挿入部の調整では、石器中央部に向けて長めの小剥離が観察されるもの（1、4、7、17、20、21、25、28、29）もある。

第1 c類（10、14、21、31、38、43）

1 c類は、二等辺三角形を呈しV字状の挿入を施す石鏃である。資料数は、6点である。石器の形状では、縁辺が直線的に作り出されるもの（14、43）と、膨らむもの（21、31）とがある。挿入部の作り出しでは、1 b類と同様に石器中央に向けて長めの小剥離が観察されるもの（14、21、43）がある。

第1 d類（35）

1 d類は、二等辺三角形を呈しU字状の挿入を施す石鏃である。資料数は、1点のみである。脚部の作りだしは、左右対称にならない点では1 b、1 c類と共通する。他の類別の資料に比べて鏃身が長く、厚みがある。横断面は凸レンズ状を呈する。

第2 a類（8、11、24、37、45）

2 a類は、正三角形を呈する平基の石鏃である。資料数は、5点である。37は、左側縁先端部近くで屈曲し、全体の形状が台形を呈する資料である。その他の資料は、縁辺が直線的に作り出され、比較的大型の石鏃である。調整加工は両側縁から細かく入念に施され、基部からは比較的最長の小剥離が石器中央に向けて施されている。

第2 b類（13、16、30、34、36、39、42）

2 b類は、正三角形を呈し浅い挿入を施す石鏃である。資料数は、7点である。石器の形状では、大型のもの（16、34、36）と小型のもの（13、30、39、42）がある。縁辺の形状からは直線的なもの（34）と、膨らむもの（13、16、30、36、39、42）とがみられる。また、34は、比較的整った形状を呈するが、13、30はその形状が左右対称をなさない。

第2 c類（26、41）

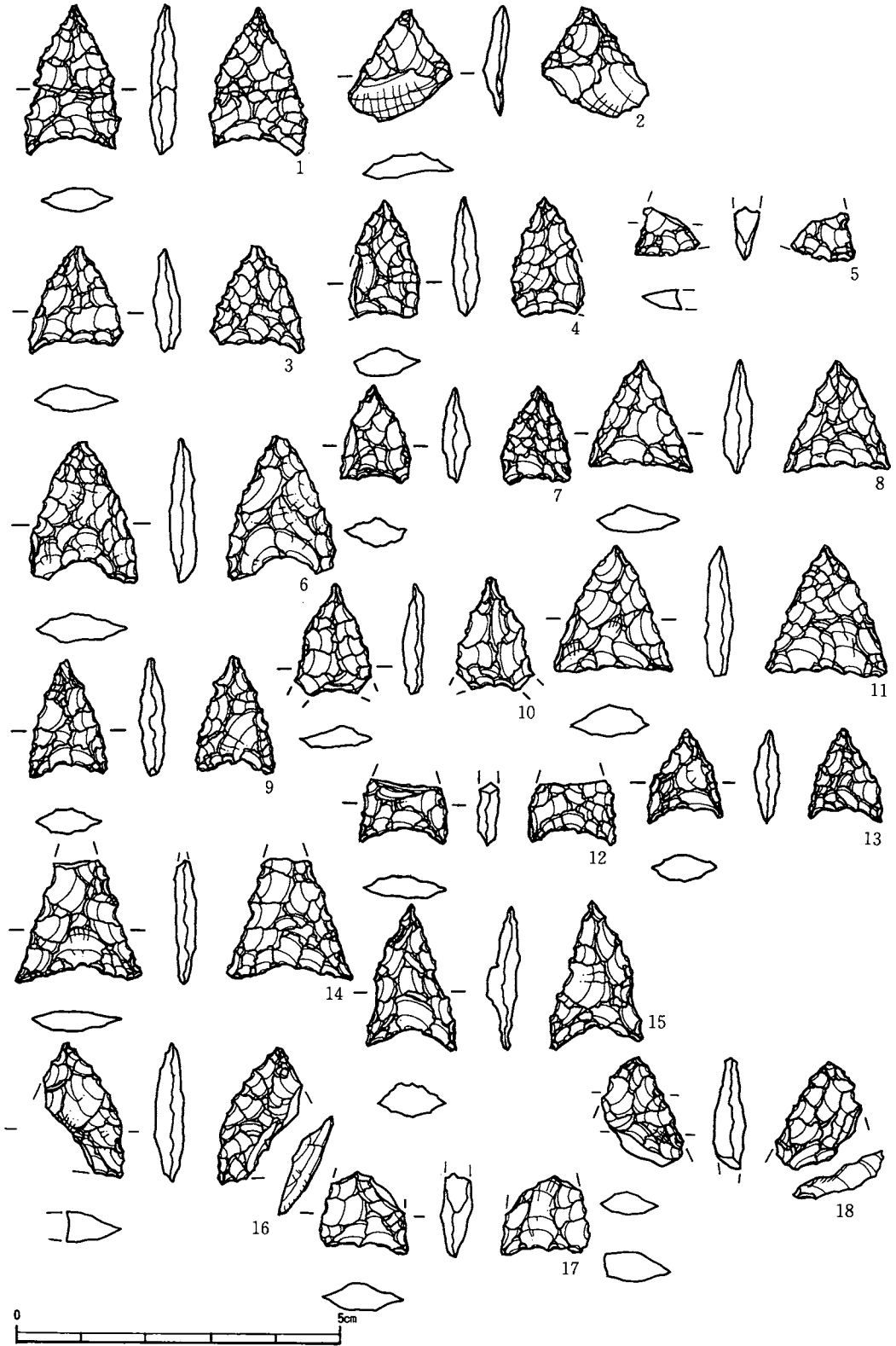
2 c類は、正三角形を呈しV字状の挿入を施す石鏃である。資料数は、2点である。26は、縁辺が直線的に作り出されている資料で、全体の形状は左右対称にならない。41は、先端部及び片脚を欠失しているため、全体形については左右対称をなすかどうかは不明である。挿入は、26に比べ深く施されている。

第2 d類

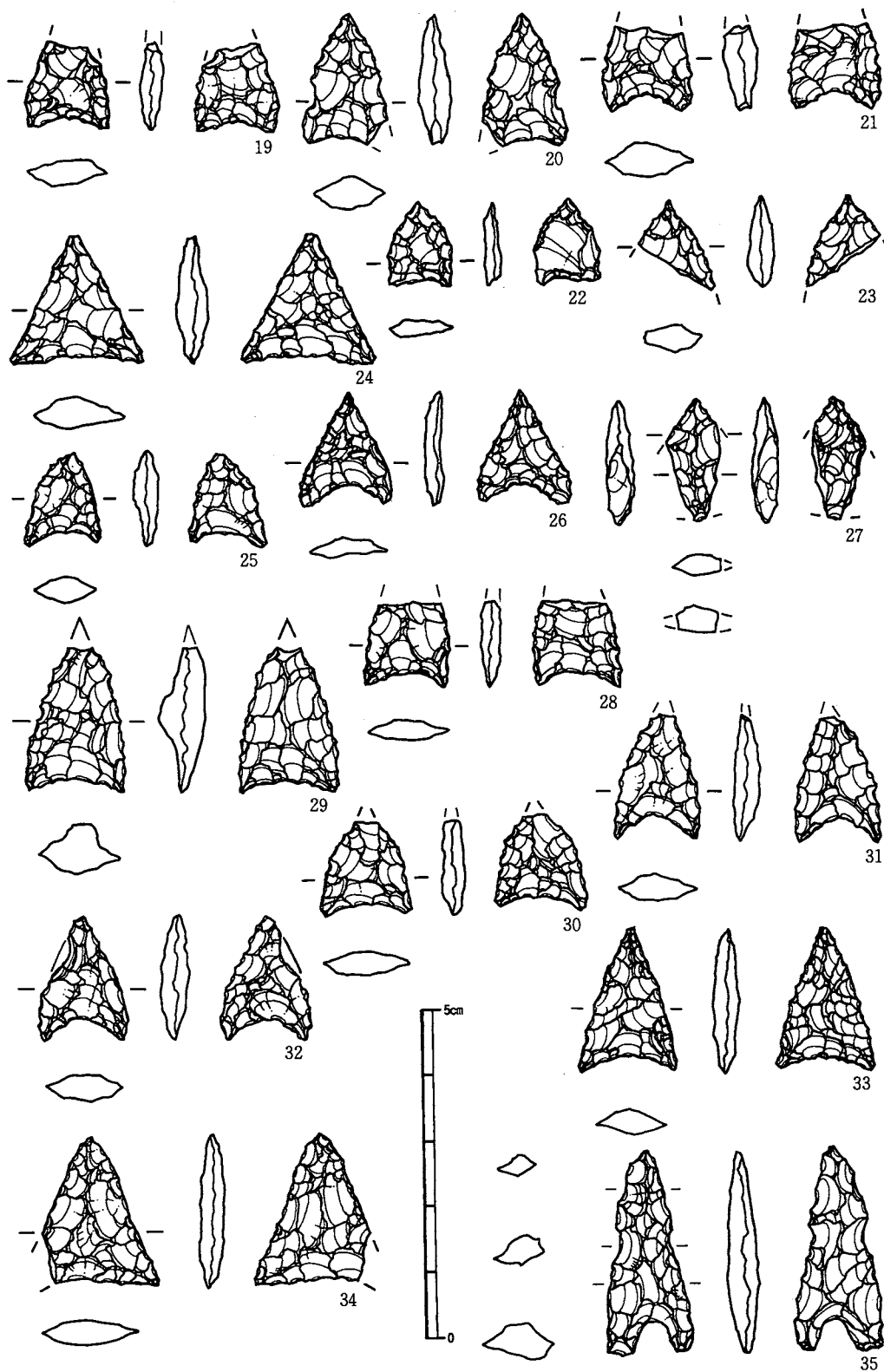
2 d類は、正三角形を呈しU字状の挿入を施す石鏃である。しかし、この類別に該当する資料は検出されなかった。

未加工品（2）

出土資料中に、未加工品と考えられるものが1点あった。石材は、珪岩である。調整加工は、先端部及び両側縁にみられ、基部は素材剥片の形状をそのまま止めている。



第37図 石器実測図



第38図 石器実測図

所属不明の石鏃 (5、18、23、27、40、44)

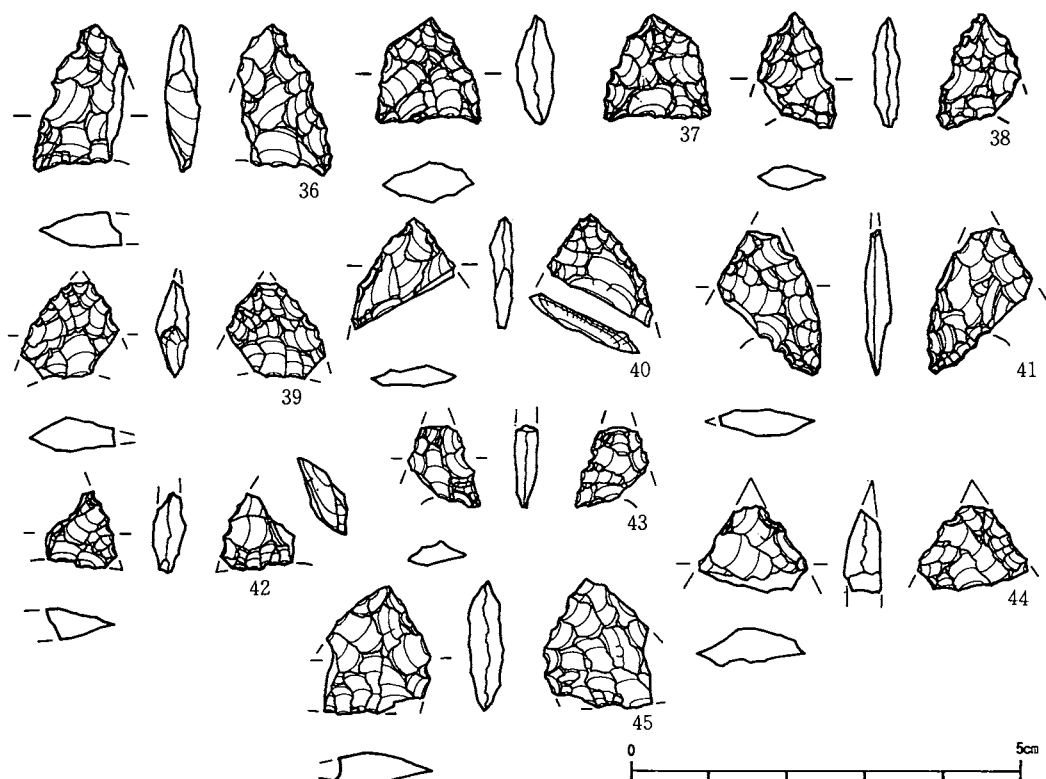
欠損によって、類の認定にかかわる情報を知りえなかった資料である。資料数は、6点である。2類に属するものは、5例 (18、23、27、40、44) である。5については、全体の形状は不明であるが、基部の状況からc類に属する資料であると考えられる。

尖頭器 (第40図46)

尖頭器は、1点検出された。その石器組成に占める割合は、0.6%である。石材は、珪岩製である。検出された資料は、先端部側を大きく欠失しているため、その全体の形状は不明な点が多い。しかし、その基部の形状から、幅広の尖頭器であると考えられる。出土地点は、縄文時代草創期の遺物集中部より、わずかに南側のⅢB区より検出された。

細刃器 (第42図47~64)

細刃器は、33点検出された。その石器組成に占める割合は、19.3%である。石材は、大半が挟雑物を含まない良質の黒耀石製であり、桑ノ木津留産と考えられる。その出土地点は、縄文時代草創期の遺物集中部とほぼ重なり、ⅡB~ⅢB区にかけて出土している。しかし、細石刃核は調査区から1点も検出されていない。図化した18点のうち、頭部~先端部まで完全な状態



第39図 石器実測図

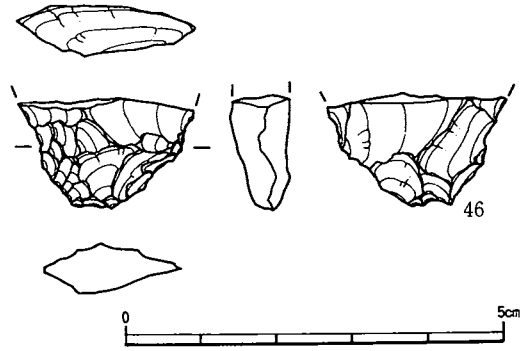
第三章 調査の成果

第6表 石器計測表

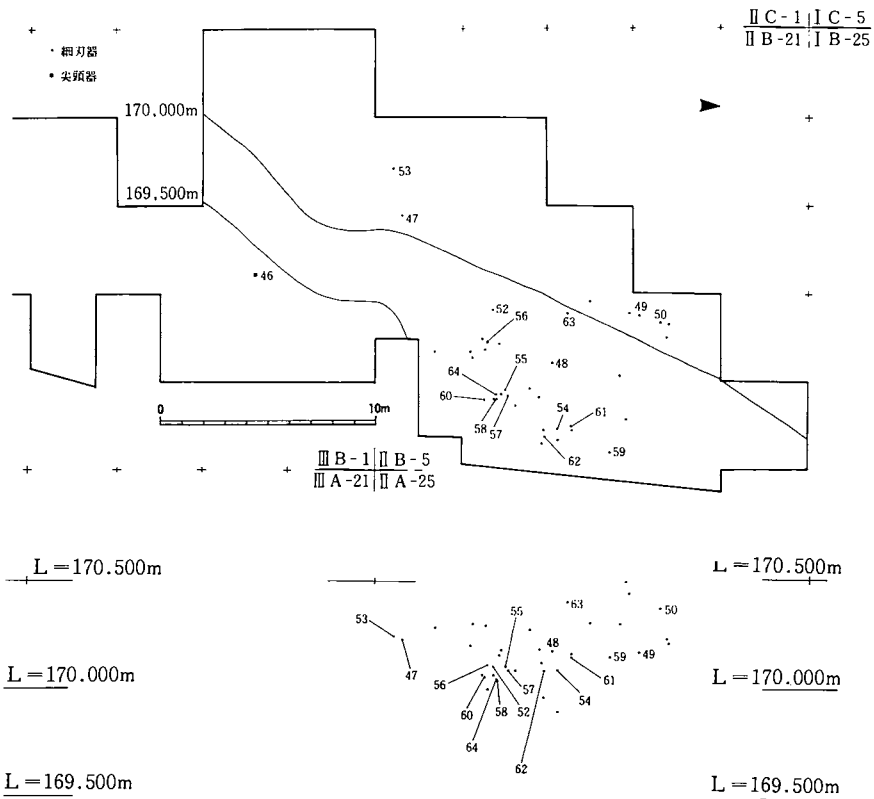
No	器種	石材	計 測 値				欠損部位	登録番号	
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)			
1	石	燧	黒	2.35	1.50	0.40	0.85	接合資料	1058, 1311
2	"		珪	1.65	1.63	0.40	0.55	未完成品	2995
3	"		黒	1.60	1.42	0.40	0.65	—————	1059
4	"		珪	1.80	1.10	0.40	(0.70)	左側縁下部欠損	1435
5	"		黒	(0.75)	(0.98)	0.71	(0.20)	左脚部のみ残存	2176
6	"		珪	2.20	1.62	0.42	1.10	—————	4954
7	"		黒	1.50	1.08	0.45	0.45	—————	1570
8	"		珪	1.70	1.60	0.42	0.90	—————	1737
9	"		黒	1.80	1.20	0.40	0.45	—————	2500
10	"		"	(1.70)	(1.20)	0.32	(0.50)	両脚部末端欠損	2594
11	"		珪	1.90	1.80	0.50	1.00	—————	1075
12	"		黒	(1.00)	1.36	0.33	(0.40)	先端部欠損	1930
13	"		"	1.46	1.10	0.40	0.35	—————	1891
14	"		珪	(1.90)	1.93	0.30	(0.75)	先端部欠損	2576
15	"		"	2.20	1.40	0.50	0.85	—————	2982
16	"		黒	(2.08)	(1.26)	0.49	(0.70)	左側縁下半部欠損	4991
17	"		"	(1.20)	1.38	0.40	(0.70)	先端部欠損	5074
18	"		"	(1.55)	(1.30)	0.45	(0.60)	基部欠損	1959
19	"		"	(1.32)	1.23	0.40	(0.50)	先端部欠損	2759
20	"		"	(1.98)	(1.30)	0.50	(0.85)	片脚部末端欠損	1638
21	"		"	(1.30)	1.38	0.50	(0.60)	先端部欠損	3140
22	"		"	1.30	1.00	0.25	0.25	—————	898
23	"		"	(1.38)	(1.10)	0.40	(0.30)	下半部欠損	2143
24	"		珪	1.92	2.00	0.50	1.10	—————	904
25	"		"	1.40	1.15	0.40	0.30	—————	1138
26	"		黒	1.70	1.40	0.30	0.35	—————	5402
27	"		"	(1.83)	(0.80)	0.41	(0.50)	両側縁欠損	5126
28	"		"	(1.28)	1.40	0.30	(0.45)	先端部欠損	2732
29	"		珪	(2.18)	1.50	0.78	(1.65)	先端部欠損	3879
30	"		黒	(1.45)	1.40	0.40	(0.60)	先端部欠損	1954
31	"		珪	1.80	1.30	0.40	0.75	先端部欠損	1654
32	"		黒	1.88	1.38	0.40	(0.55)	左側縁欠損	1767
33	"		"	2.20	1.48	0.40	0.70	—————	725
34	"		珪	(2.30)	(1.73)	0.38	(1.15)	左脚末端欠損	872
35	"		安山	3.10	1.30	0.58	1.50	—————	4595
36	"		黒	1.95	(1.00)	(0.40)	(0.50)	左脚部欠損	2917
37	"		珪	1.38	1.35	0.50	0.65	—————	3250
38	"		黒	(1.48)	(1.00)	0.30	(0.35)	左脚部欠損	2297
39	"		珪	(1.25)	(1.25)	0.43	(0.45)	先端・両脚末端欠損	4123
40	"		"	(1.40)	(1.30)	0.25	(0.25)	下半部欠損	3689
41	"		"	(1.83)	(1.35)	0.32	(0.45)	先端部・左脚部欠損	4508
42	"		黒	(1.03)	(0.95)	(0.43)	(0.15)	右脚部のみ残存	1963
43	"		"	(1.02)	(0.96)	0.30	(0.25)	先端部・左脚部欠損	1600
44	"		"	(1.13)	(1.40)	0.60	(0.65)	先端部・下半部欠損	2419
45	"		"	(1.62)	(1.38)	0.40	(0.85)	両脚部欠損	2128

第2節 縄文時代草創期の遺物

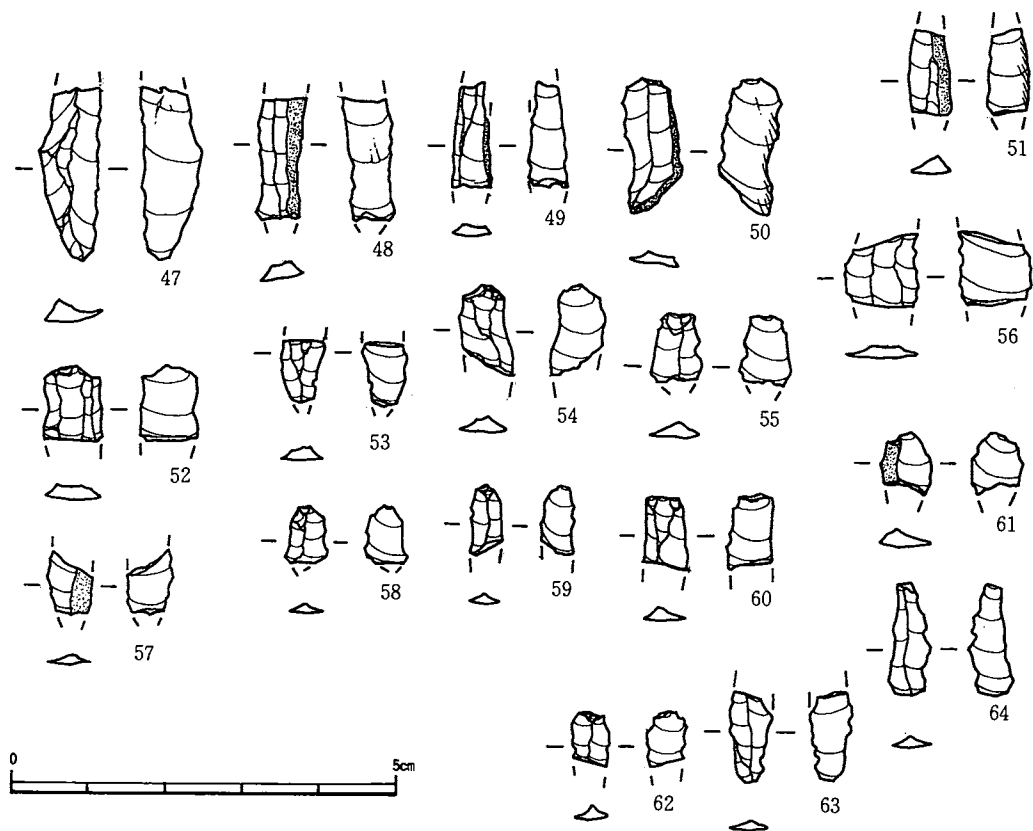
で出土した資料は、50、64の2点のみである。その他の資料は、頭部あるいは先端部を欠失している。その内訳は、頭部の資料8点（52、54、55、58～62）と胴部の資料5点（48、49、51、56、57）、先端部の資料3点（47、53、63）である。



第40図 石器実測図



第41図 遺物分布図（尖頭器、細刃器）



第42図 石器実測図

削器 (第44図65～第45図68)

削器は、4点検出された。その石器組成に占める割合は、2.3%である。石材は、すべて珪岩製である。出土地点は、ⅡB区で遺物集中部に重なる。

以下資料について個別に説明を加えていく。

65は、幅広の不整形剥片を素材とし、刃部は先端部に設定され、表裏両面からの細かな調整加工によって作り出されている両刃の削器である。

また、この資料は打点部近くに両側縁とも細かな調整加工が施され、挟入状を呈する。

66は、不整形の縦長剥片を素材とし、左右両側縁の先端部側に刃部を設定している。調整加工は、表裏両側から細かく施される両刃の削器である。

67は、幅広の剥片を素材とする削器(搔器)である。その調整加工は、縁辺の $\frac{2}{3}$ に急角度に施される。また、左右両側では大まかな調整によるが、先端部では細かな調整加工によっている。

68は、不整形の剥片を素材とし、右側縁に刃部を設定する片刃の削器である。

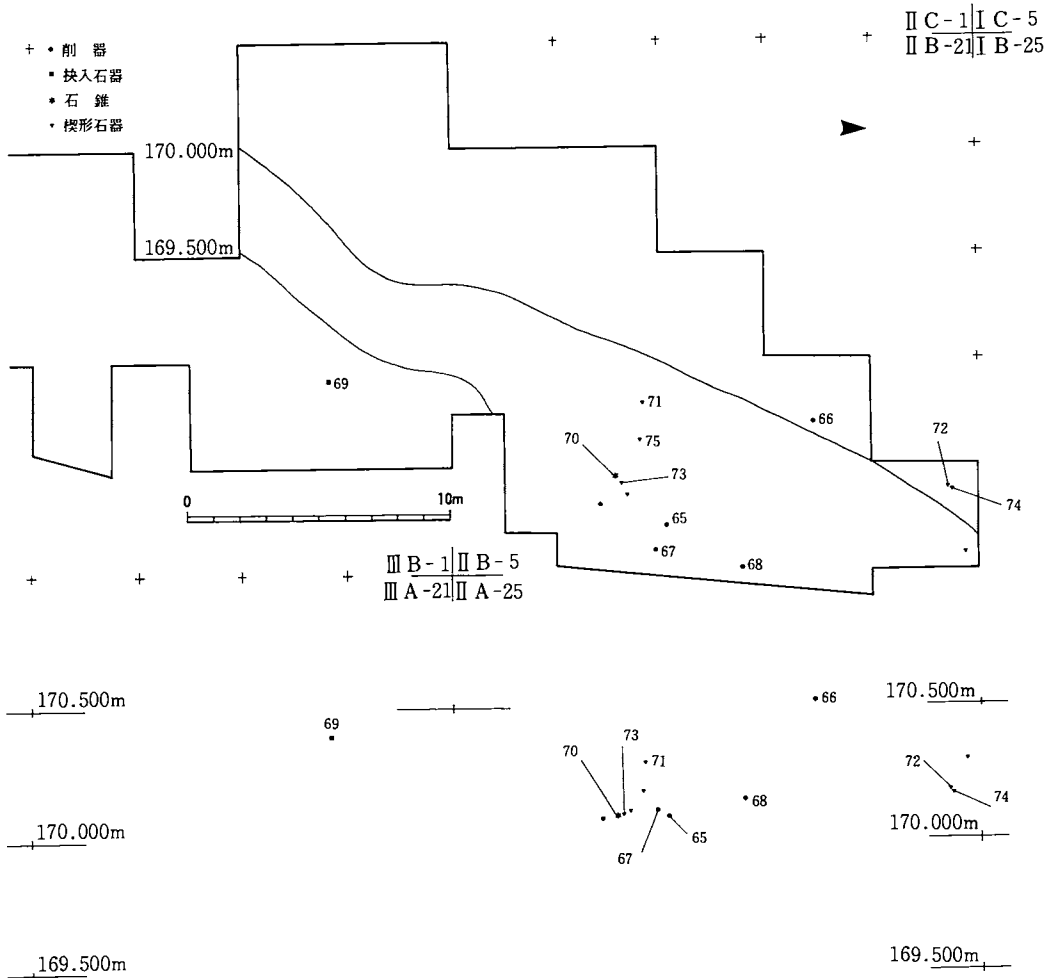
抉入石器 (第45図69)

抉入石器は、1点検出された。その石器組成に占める割合は、0.6%である。出土地点はⅢB-7区で、石材は珪岩である。

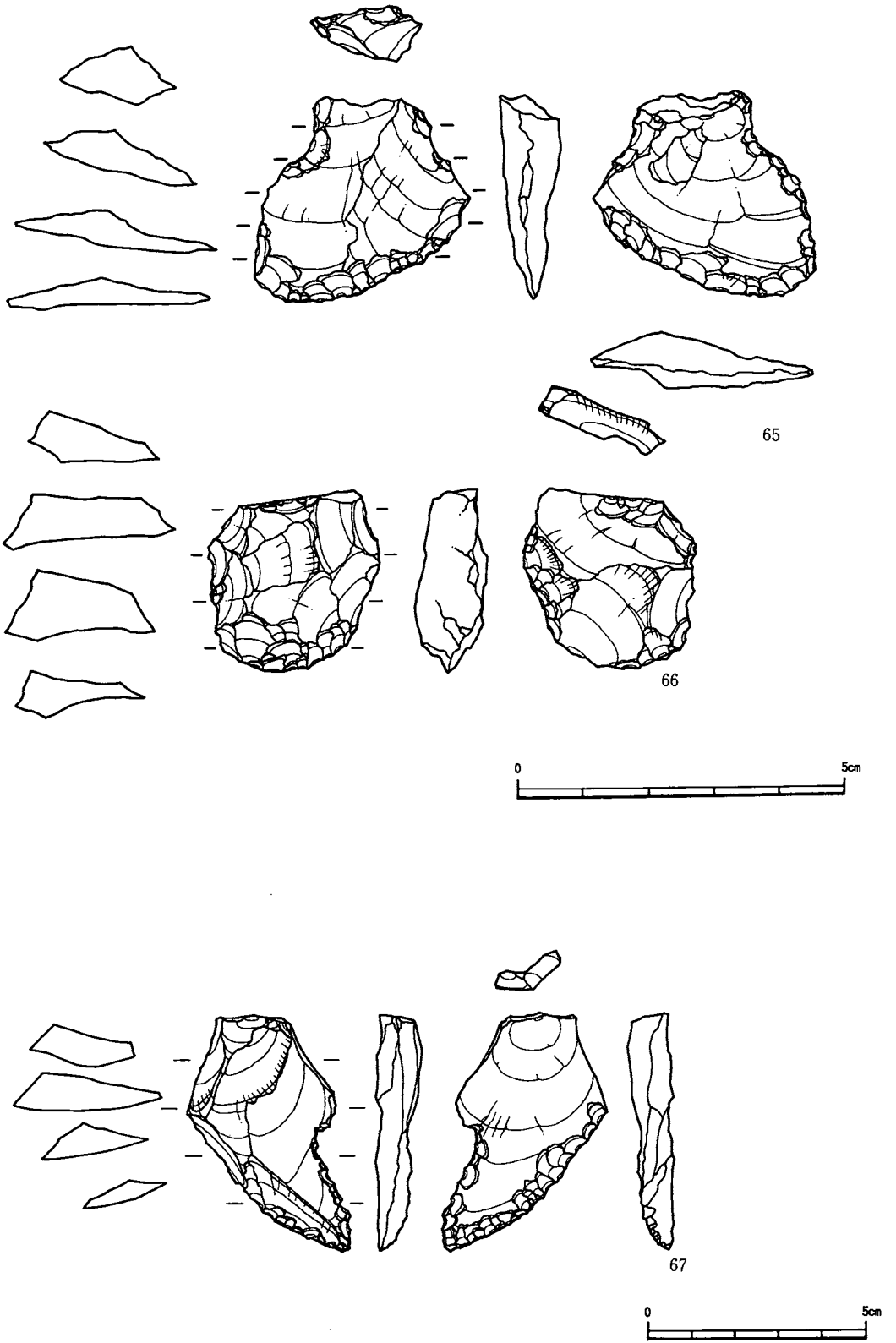
69は、幅広の剥片を素材としている。刃部は、右側縁裏面側にみられる。その調整加工は、抉入状に施されている。

石錐 (第45図70)

石錐は、1点検出された。その石器組成に占める割合は0.6%である。石材は、挟雑物の少ない良質の黒耀石製である。不整形の剥片を素材とし、その先端部に裏面側から細かな調整加工を施して錐部を作り出している。



第43図 遺物分布図 (削器・抉入石器・楔形石器・石錐)



第44図 石器実測図

楔形石器 (第46図)

楔形石器は、5点検出された。その石器組成に占める割合は、2.9%である。石材別では、黒耀石3点、珩岩1点、安山岩1点である。

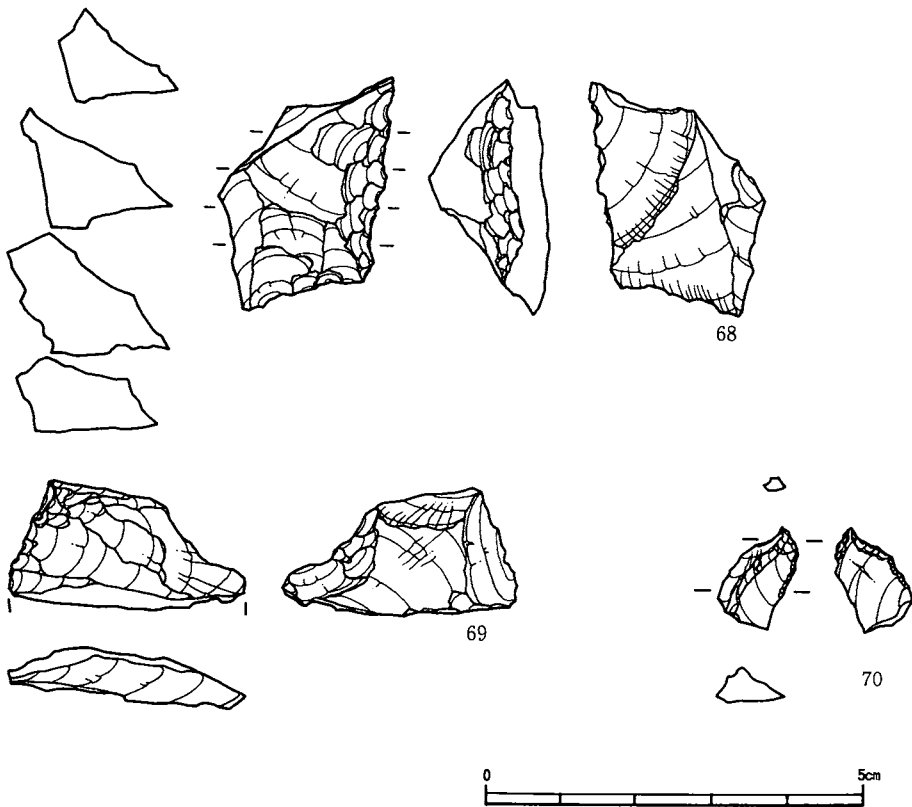
以下資料について個別に説明していく。

71は、厚みのある剥片を素材としている。細かな剥離面が表裏両面に、縁辺に沿って全周に観察される。

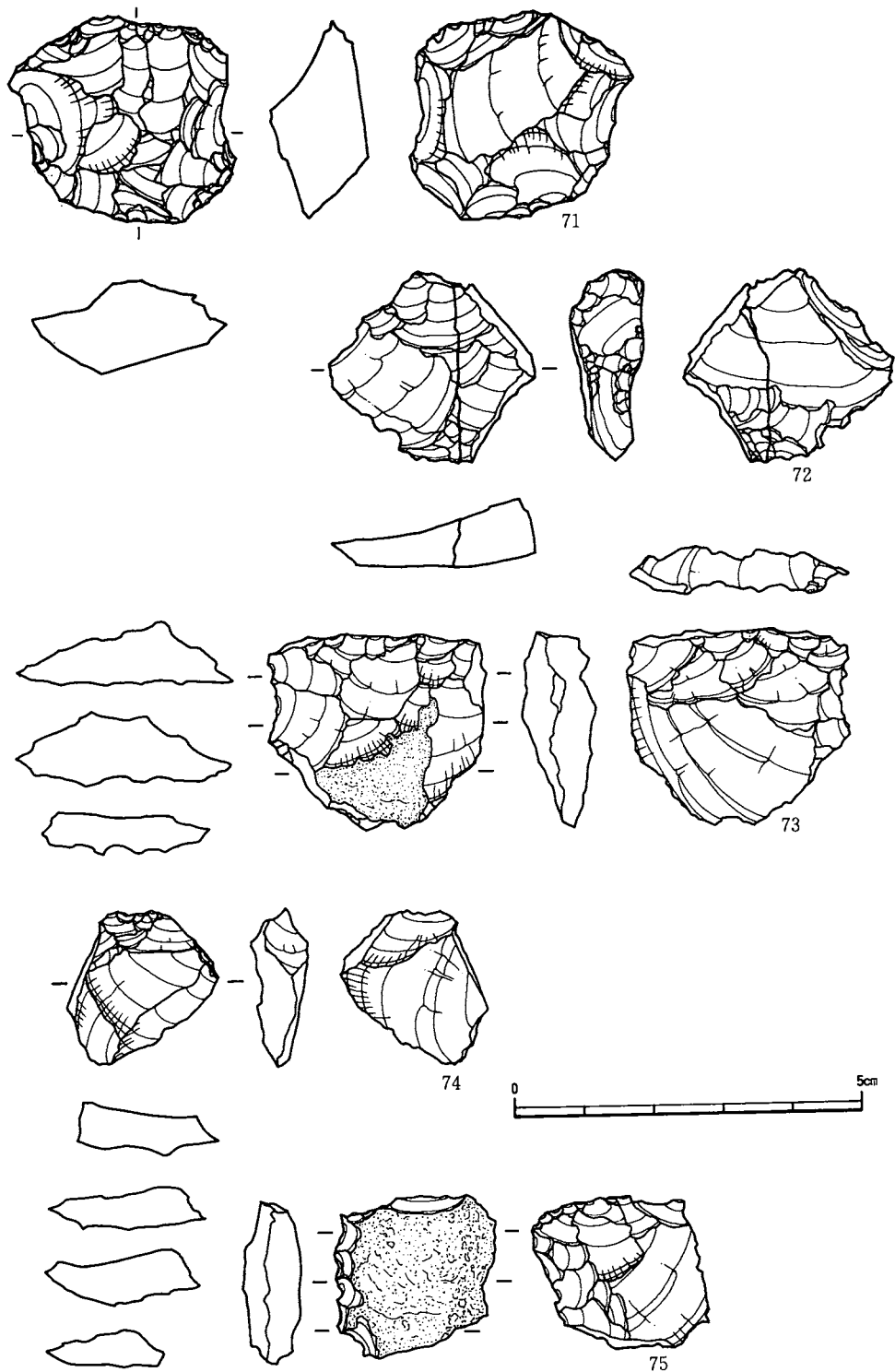
72は、珩岩製の楔形石器で、接合資料である。上下端に、対向する微細な剥離面が観察され、その方向に沿って割れている。また、右側縁にも微細な剥離面が観察され、対向する一辺には対応する大きな剥離面が観察される。

73は、表面に礫面を残す厚みのある剥片を素材とする。表裏両面の上端に、微細な剥離面が観察され、対向する一辺には細かな潰れが観察される。

74は、黒耀石製の幅広の剥片を素材とし、表面に礫面を大きく残す。左右両側縁に、対向する細かな剥離面が観察される。また、上端にも細かな剥離面が観察されるが、下端は潰れが観



第45図 石器実測図



第46図 石器実測図

第2節 縄文時代草創期の遺物

第7表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
46	尖頭器	珪岩	(1.50)	(2.40)	(0.68)	2.35	ⅢB-12	2532
47	細刃器	黒耀石	(2.20)	0.71	0.30	2.60	ⅡB-15	1061
48	"	"	(1.53)	0.58	0.20	1.80	ⅡB-8	4194
49	"	"	(1.35)	0.60	0.15	1.00	ⅡB-7	4501
50	"	"	1.71	0.70	0.15	1.60	ⅡB-7	4425
51	"	"	(1.10)	0.50	0.20	0.80	ⅣC-9	446
52	"	"	(0.92)	0.70	0.17	1.10	ⅡB-9	2595
53	"	"	(0.80)	(0.53)	(0.15)	0.90	ⅡB-20	2092
54	"	"	(1.15)	0.68	0.20	1.30	ⅡB-3	2151
55	"	"	(0.90)	0.65	0.20	1.40	ⅡB-4	1272
56	"	"	(0.98)	0.90	0.15	0.90	ⅡB-9	2352
57	"	"	(0.80)	0.60	0.15	0.50	ⅡB-4	933
58	"	"	(0.70)	0.52	0.10	0.90	ⅡB-4	1244
59	"	"	(0.90)	0.40	0.10	0.40	ⅡB-3	3895
60	"	"	(0.95)	0.69	0.18	1.10	ⅡB-4	1207
61	"	"	(0.80)	0.70	0.23	2.61	ⅡB-3	1001
62	"	"	(0.70)	0.50	0.18	1.10	ⅡB-4	1548
63	"	"	(1.15)	0.55	0.10	0.50	ⅡB-8	3652
64	"	"	1.40	0.45	0.15	0.70	ⅡB-4	1389
65	削器	珪岩	3.10	3.40	0.90	5.95	ⅡB-3	1798
66	"	"	2.73	2.62	1.10	7.20	ⅡB-7	4427
67	"	"	5.40	3.40	1.05	3.80	ⅡB-4	4925
68	"	"	3.10	2.30	1.70	7.30	ⅡB-3	5082
69	抉入石器	"	1.70	3.10	0.90	3.05	ⅢB-7	2517
70	石錐	黒耀石	1.35	1.00	0.50	0.30	ⅡB-4	1273
71	楔形石器	珪岩	2.95	3.15	1.40	11.50	ⅡB-7	697
72	"	"	2.73	3.00	0.98	3.40	ⅡB-1	5206
73	"	"	2.80	3.20	1.10	9.45	ⅡB-4	1269
74	"	黒耀石	2.40	2.40	0.80	4.05	ⅡB-9	5207
75	"	珪岩	2.20	2.20	0.70	3.05	ⅡB-1	1677

察される。

75は、幅広の剥片を素材とする楔形石器である。上端に、微細な剥離面が観察される。

磨石・敲石（第48図76～第49図85）

磨石・敲石は、14点出土した。その石器組成の中に占める割合は、8.2%である。石器の分布は、当該期の遺物の分布域とほぼ同様で、ⅡB区～ⅢB区に分布する。しかし、その在り方は、比較的散在する傾向が窺える。

石器の形態的特徴からは、円形、楕円形、棒状、不整形のものと様々な形態がみられる。これらの石器の使用部位からは、長軸の一端かもしくは両端に敲打痕が観察されるものと、敲打

痕が全縁に観察されるもの、敲打痕が石器中央部にも観察されるものと、また敲打痕と合わせて磨痕が観察されるものがある。石材別では、砂岩、凝灰岩の2種類がある。

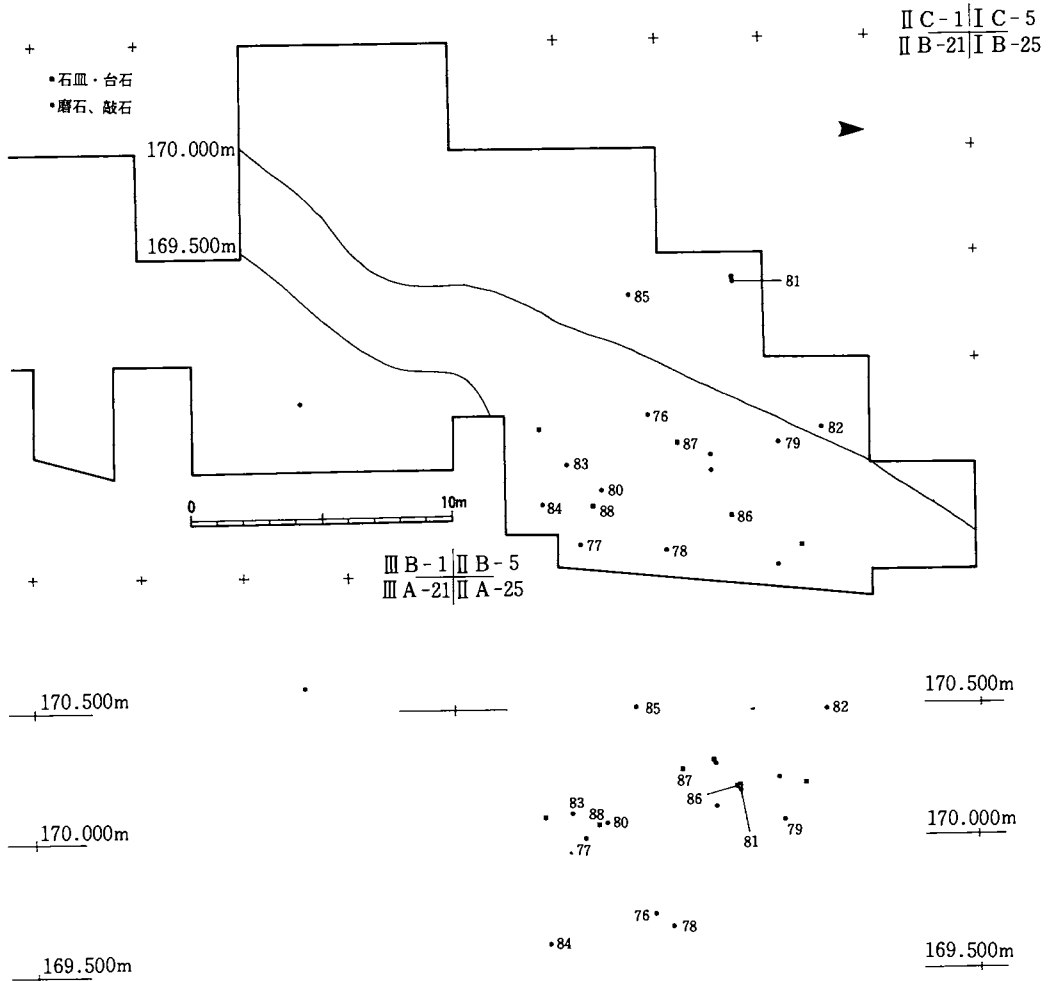
以上のように磨石・敲石は、その縁辺や表面の状態によって、大きく2つに分類できる。

以下、分類ごとに説明を加えていく。

第1類 (80~82)

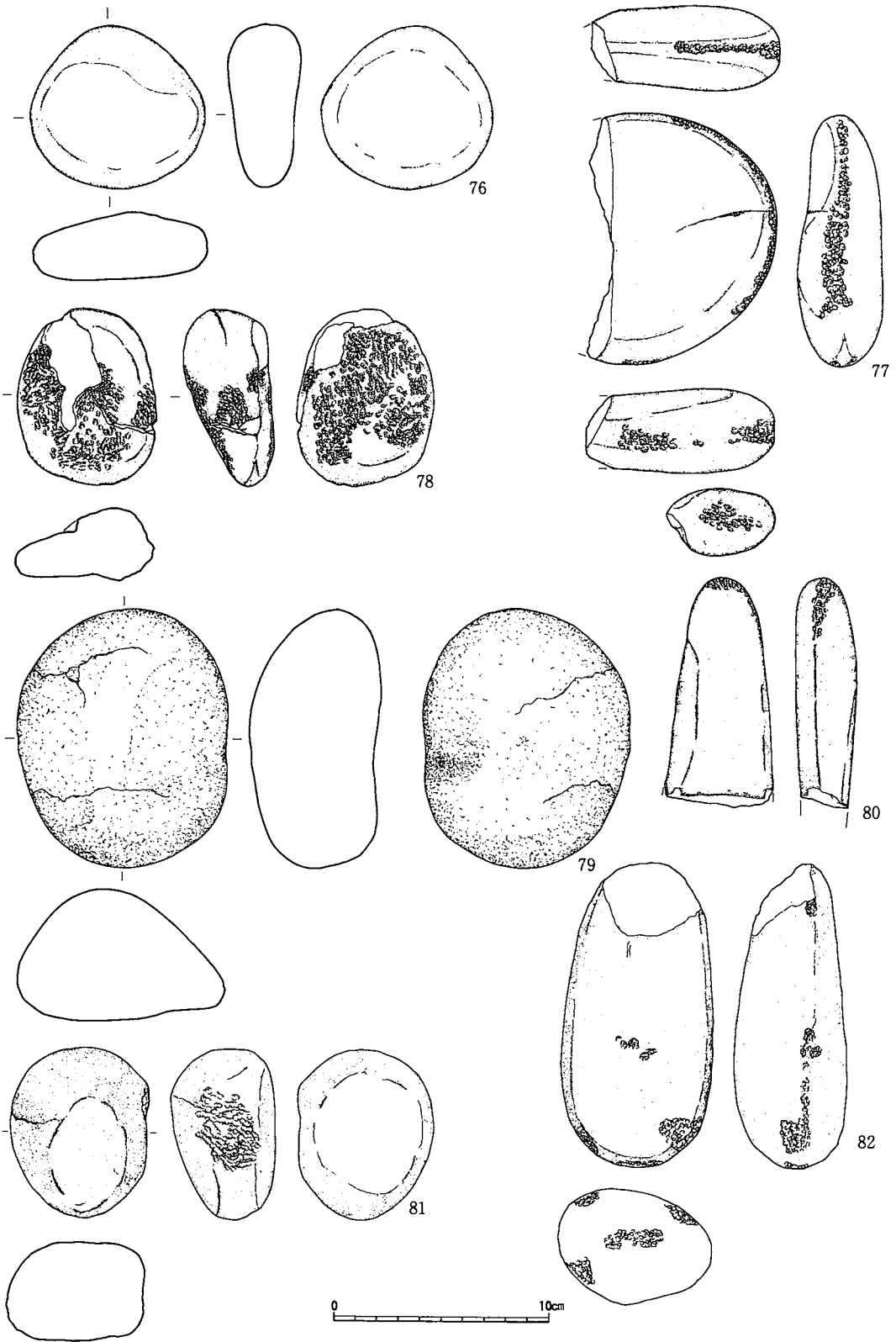
第1類は、石器の一端ないし両端に、敲打痕が観察されるものである。石器の形状は、円形、楕円形、棒状のものがある。80、82は、それぞれ下半部、上端部を欠損している。また、82は石器表面にも敲打痕が観察される。

第2類 (76~79, 83~85)

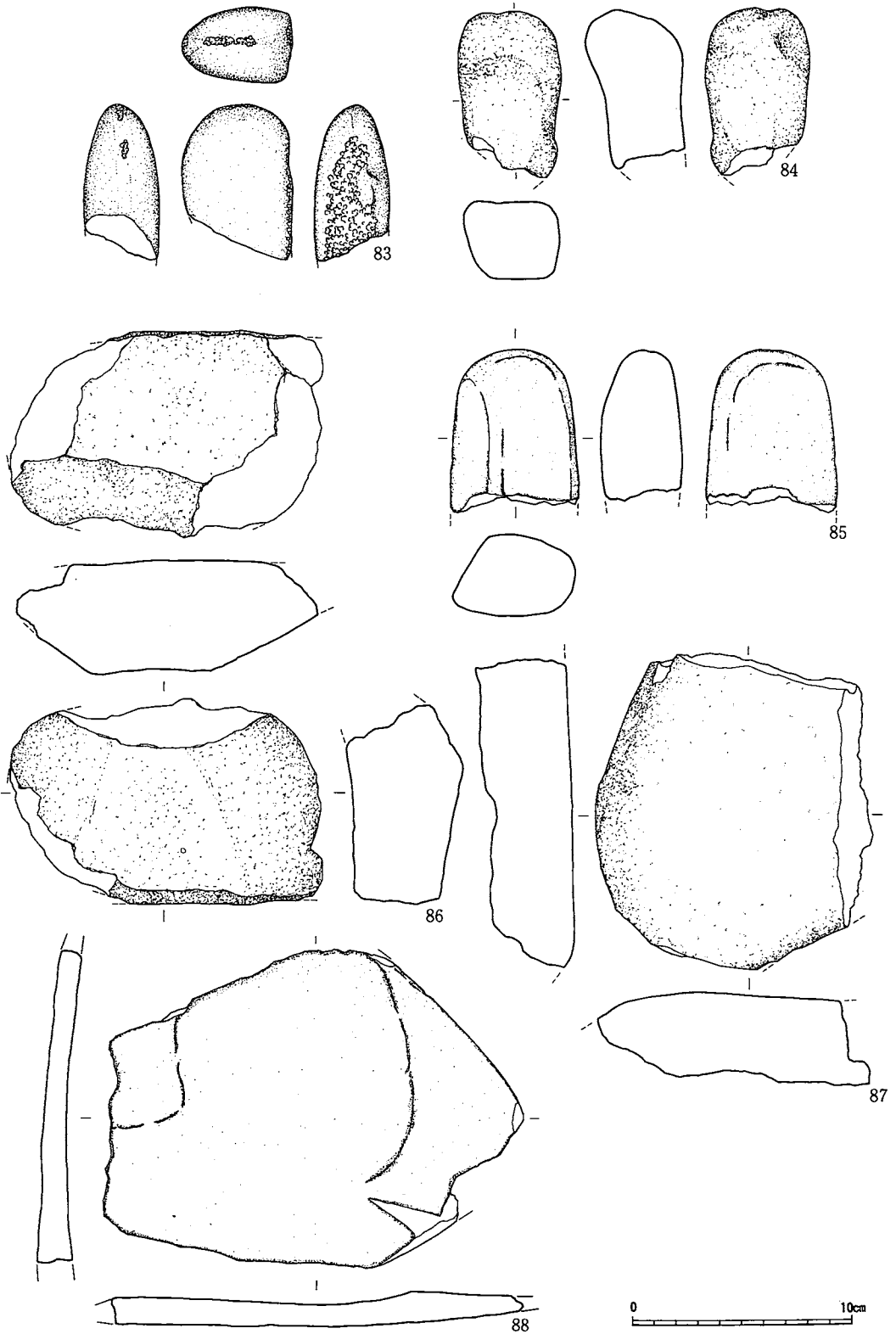


第47図 遺物分布図（磨石・敲石、石皿・台石）

第2節 縄文時代草創期の遺物



第48図 石器実測図



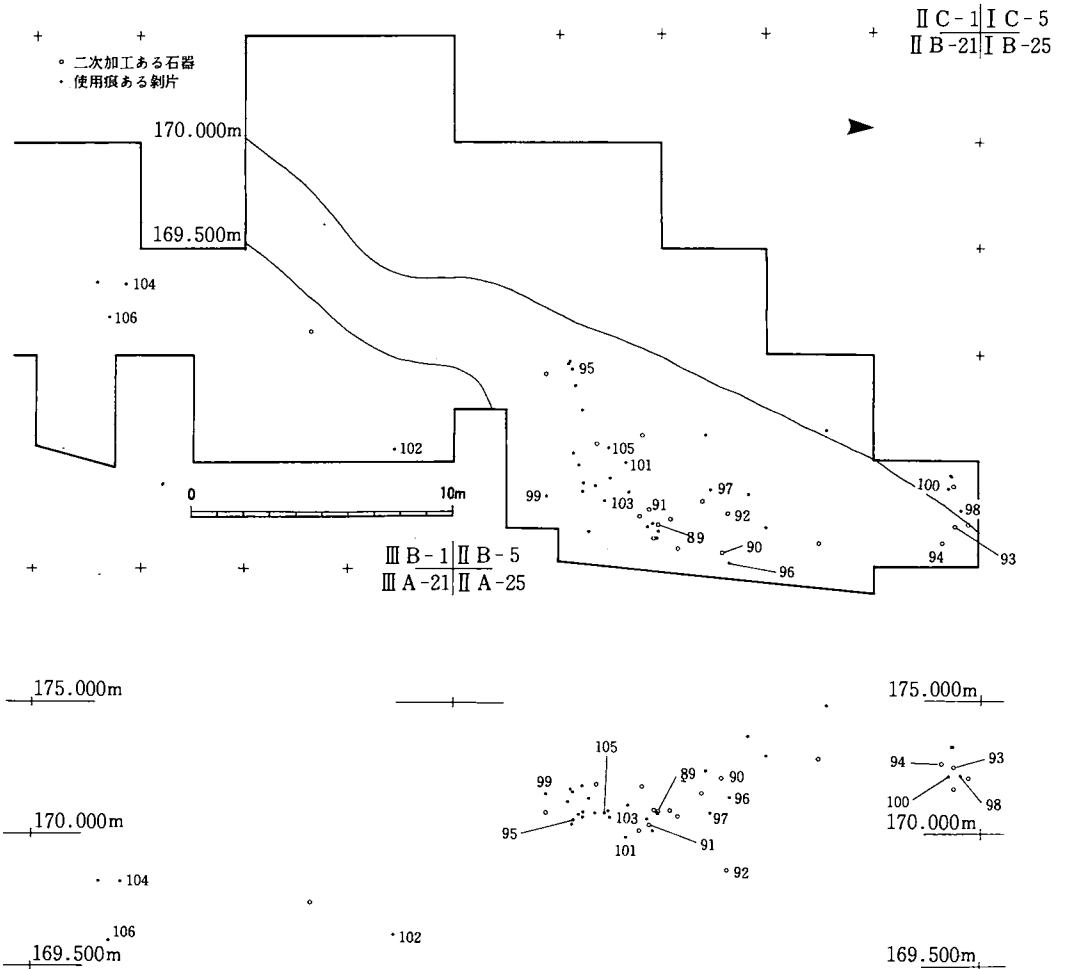
第49図 石器実測図

第2類は、石器の側縁部に敲打痕が観察されるものである。石器の形状は、円形、楕円形、不整形、棒状と様々である。大きさでは、大型のもの（77、79）と中型のもの（76、78、83～85）とがある。敲打痕の状態では、側縁部の広い範囲に認められるもの（77、78、83）と側縁部の荒れが少ないもの（76、79、84、85）がある。78は、石器表面にも広く敲打痕が観察される。

石皿・台石（第49図86～88）

石皿・台石は、4点出土した。その石器組成の中に占める割合は、2.3%である。石材は、凝灰岩である（第5表）。出土地点は、すべてⅡB区である。その分布は、散在的である。

石皿・台石と磨石・敲石との数量の関係は、1：3.5の割合にある。つまり、石皿・台石1個に対して磨石・敲石が3.5個という数値が得られる。



第50図 遺物分布図（二次加工ある不定形石器、使用痕ある剥片）

86は、ⅡB-3区で出土した。その石材は、凝灰岩である。一边を除き縁辺を欠失している。扁平な礫を素材とし、石器中央に僅かに浅い凹が観察される。しかし、石器表面の敲打痕による荒れは少ない。

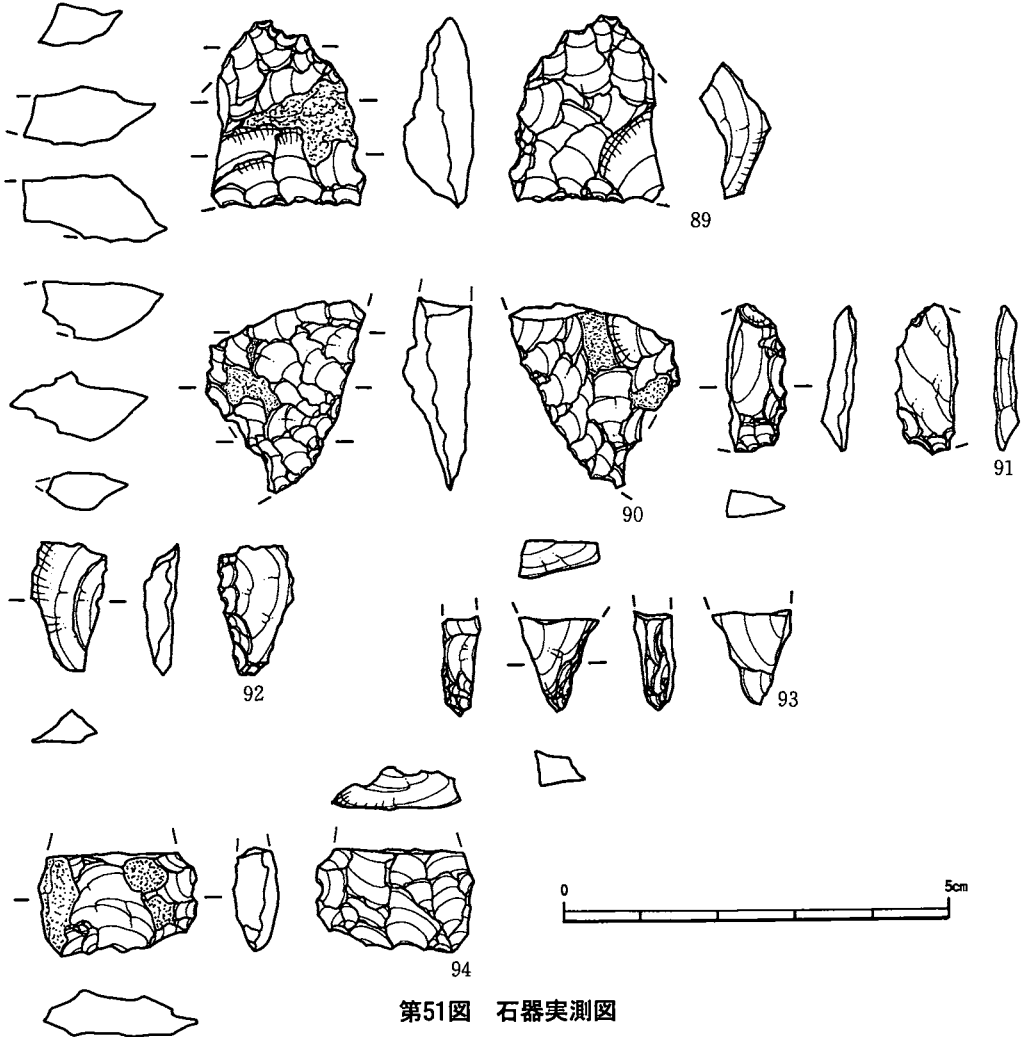
87は、ⅡB-8区で出土した。その石材は、凝灰岩である。一边を除き縁辺を欠失している。また裏面側は、剥落している。使用による凹や敲打痕等は明確でない。

88は、ⅡB-4区で出土した。その石材は、凝灰岩である。扁平な礫を素材として使用しており、石器表面中央部に広く凹面が観察される。しかし、石器表面の敲打痕による荒れは少ない。

二次加工ある不定形石器 (第51図89~94)

二次加工ある不定形石器は、13点検出された。その石器組成に占める割合は、7.6%である。石材別では、黒耀石7点、珩岩6点である。

以下資料について個別に説明を加えていく。



第51図 石器実測図

89は、挟雑物の少ない良質の黒耀石製である。表面側に礫面を残し、左側縁下半部を欠失している。その調整加工は、細かく表裏両面から施され縦断面、横断面の形状は凸レンズ状を呈する。石鏃の未完成品の可能性もある。

90は、挟雑物の少ない良質の黒耀石製である。表裏両面ともに部分的に礫面を残す。その調整加工は、表裏両面に細かく施されている。また、右側縁を一部欠失しているため全体の形状は不明であるが、その調整加工の在り方から尖頭器の未完成品か、もしくは石鏃の未完成品の可能性も考えられる。

91は、幅広の剥片を素材とし、縁辺から細かな調整加工を施している。その他の部分は素材剥片の状態のままである。また、左側縁部を欠失しているため全体の形状は不明である。

92は、横長剥片を素材とし、その裏面側の打点部側に細かな調整加工を施す。

93は、横長剥片を素材とし、その表面側の先端部側に細かな調整加工を施す。

94は、黒耀石製で石器の表面に礫面を残す。表裏両面とも縁辺から粗い調整加工を施し、先端部を欠失している。石鏃の未完成品の可能性もある。

使用痕ある剥片（第52図95～第53図106）

使用痕のある剥片は、30点出土した。その石器組成の中に占める割合は、17.6%である。また石材別では、珪岩7点、黒耀石23点である。その分布は、そのほとんどがⅡB区に集中し、わずかにⅢB区で検出されたものもある。この分布の在り方は、当該期の遺物の分布と同様である。以下、資料について個別に説明を加えていく。

95は、ⅡB-9区で出土した黒耀石製の使用痕ある剥片である。厚みのある不整形の縦長剥片を素材とし、先端部及び左右両側縁に使用痕が観察される。表面に、大きく礫面を残す。

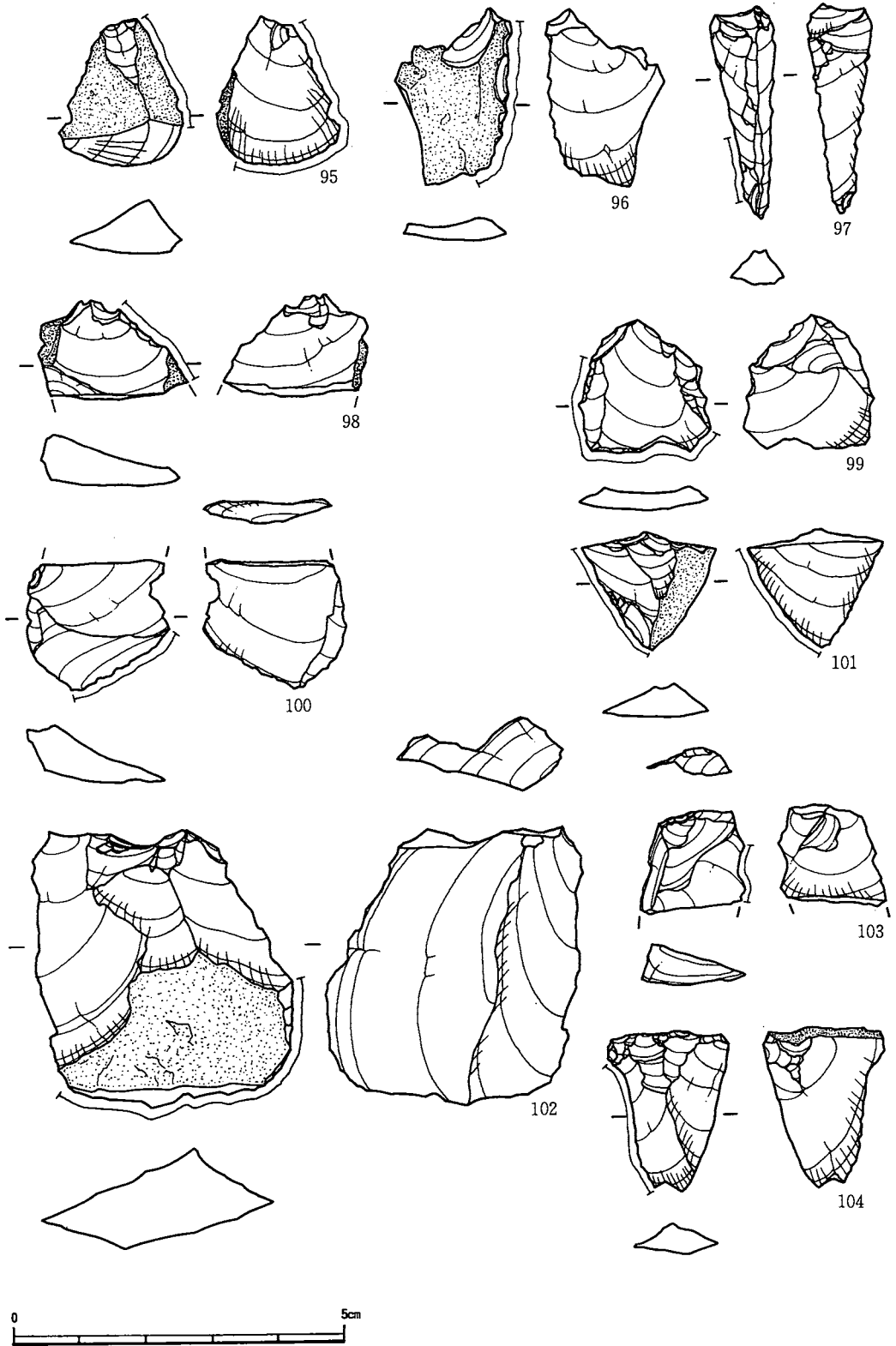
96は、ⅡB-3区で出土した黒耀石製の使用痕ある剥片である。不整形の縦長剥片を素材とし、表面に大きく礫面を残す。右側縁に使用痕が観察される。

97は、ⅡB-3区で出土した黒耀石製の使用痕ある剥片である。縦長剥片を素材とし、打点部は除去されている。断面形は三角形を呈し、左側縁先端部に使用痕が観察される。

98は、ⅡB-1区で出土した黒耀石製の使用痕ある剥片である。表裏両面ともに、僅かに礫面を残す。先端部を欠失しているが、剥片の形状は幅の広い縦長剥片を素材とするものと考えられる。右側縁上部に使用痕が観察される。

99は、ⅡB-5区で出土した珪岩製の使用痕ある剥片である。幅広の不整形剥片を素材とし、打点部は除去されている。断面形は台形を呈し、先端部及び左側縁に使用痕が観察される。

100は、ⅡB-1区で出土した珪岩製の使用痕ある剥片である。不整形の縦長剥片を



第52図 石器実測図

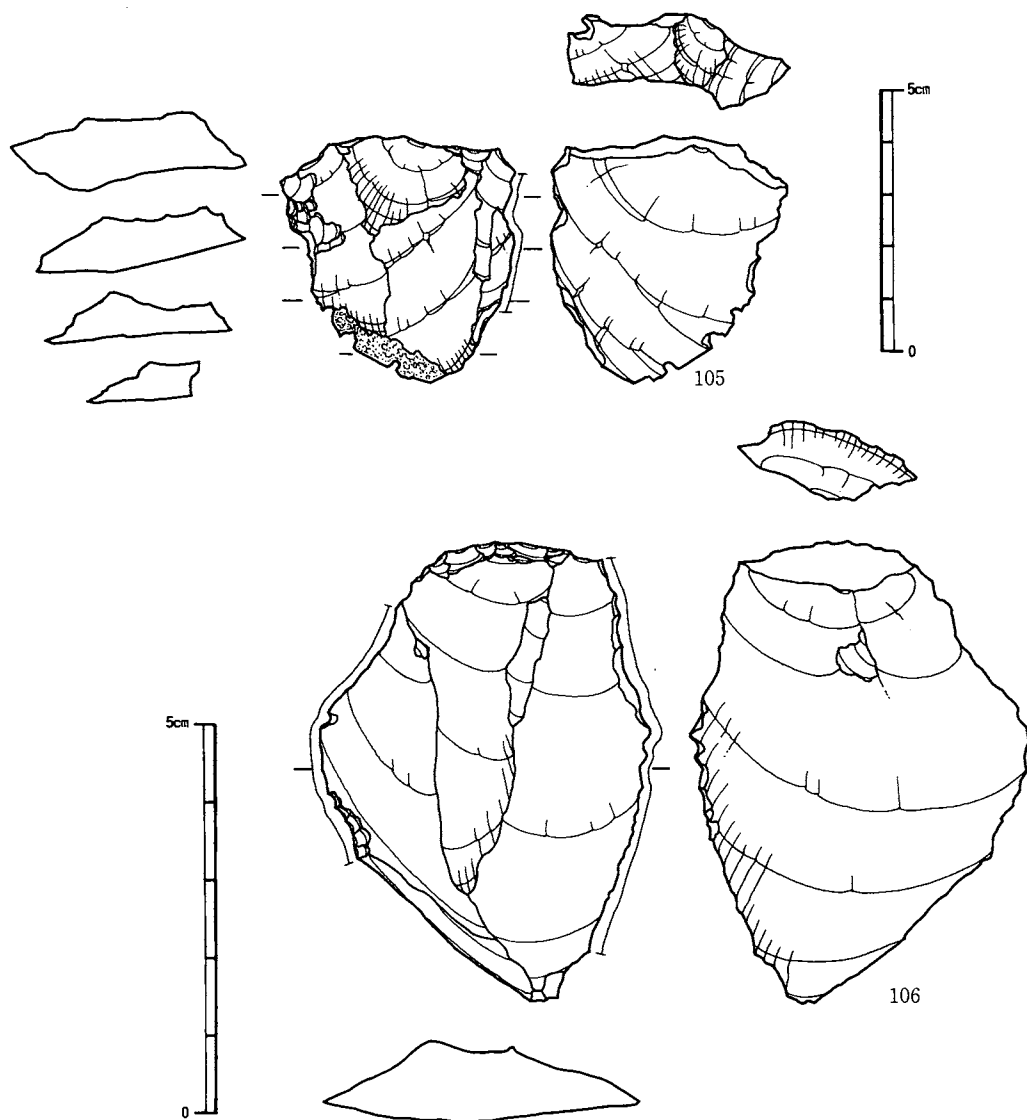
素材とし、打点部側を欠失している。先端部に使用痕が観察される。

101は、ⅡB-4区で出土した黒耀石製の使用痕ある剥片である。不整形の縦長剥片を素材とし、打点部側を欠失している。使用痕は、剥片先端部の左右両側縁に観察される。

102は、ⅢB-6区で出土した珪岩製の使用痕ある剥片である。幅広の不整形剥片を素材とし、表面に礫面を残す。使用痕は、縁辺に観察される。

103は、ⅡB-4区で出土した黒耀石製の使用痕ある剥片である。縦長剥片を素材とし、右側縁に使用痕が観察される。先端部を欠失している。

104は、ⅢB-14区で出土した黒耀石製の使用痕ある剥片である。礫面を打面とし剥出された不整形の剥片を素材とし、左側縁に使用痕が観察される。



第53図 石器実測図

第三章 調査の成果

第8表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
76	磨石・敲石	凝灰岩	7.40	8.00	3.30	235	ⅡB-9	5290
77	"	砂岩	11.40	8.60	3.90	520	ⅡB-4	4912
78	"	凝灰岩	8.10	6.40	3.90	185	ⅡB-3	5395
79	"	"	11.80	9.60	6.00	370	ⅡB-7	4506
80	"	砂岩	10.40	4.90	2.30	200	ⅡB-4	1234
81	"	凝灰岩	7.80	6.30	4.80	315	ⅡB-13	3671
82	"	"	13.80	6.90	5.20	665	ⅡB-7	4204
83	"	"	7.00	5.10	3.40	155	ⅡB-9	2032
84	"	"	7.50	4.80	4.40	200	ⅡB-5	4579
85	"	"	7.30	5.90	3.70	220	ⅡB-14	1337
86	石皿・台石	"	14.20	9.30	5.40	900	ⅡB-3	3904
87	"	"	13.60	14.20	4.40	1230	ⅡB-8	737
88	"	"	19.30	14.40	1.70	540	ⅡB-4	1215
89	二次加工ある不整形石器	黒耀石	2.40	2.00	0.90	3.80	ⅡB-4	1549
90	"	"	2.48	2.10	0.90	2.70	ⅡB-3	3578
91	"	珪岩	1.90	0.80	0.38	0.60	ⅡB-4	1875
92	"	"	1.70	0.98	0.40	0.45	ⅥC-13	4393
93	"	"	1.20	1.03	0.43	0.40	ⅡB-1	5135
94	"	黒耀石	1.42	2.00	0.60	1.65	ⅡB-1	4976
95	使用痕ある剥片	"	2.32	2.86	0.80	1.85	ⅡB-9	2600
96	"	"	2.52	17.20	0.30	1.50	ⅡB-3	5096
97	"	"	3.20	0.92	0.40	1.12	ⅡB-3	1812
98	"	"	1.56	2.12	0.72	1.77	ⅡB-1	5140
99	"	珪岩	2.00	1.92	0.22	1.08	ⅡB-5	2386
100	"	"	1.92	2.06	0.76	2.60	ⅡB-1	5150
101	"	黒耀石	1.82	2.00	0.52	1.40	ⅡB-4	2244
102	"	珪岩	4.00	3.80	1.20	11.38	ⅢB-6	2514
103	"	黒耀石	1.40	1.46	0.52	1.33	ⅡB-4	1422
104	"	"	2.50	1.90	0.40	1.61	ⅢB-14	2098
105	"	"	4.70	4.60	1.30	28.90	ⅡB-9	2000
106	"	珪岩	6.00	4.32	1.06	24.05	ⅢB-14	2107

105は、ⅡB-9区で出土した挟雑物を含む黒耀石製の使用痕ある剥片である。幅広の剥片を素材とし、石器表面の先端部に礫面を残す。使用痕は、右側縁に観察される。

106は、ⅢB-14区で出土した珪岩製の使用痕ある剥片である。単剥離面を打面とし剥出された不整形の縦長剥片を素材とする。使用痕は、左右両側縁に観察される。

石核 (第55図107~113)

石核・原石は、32点が出土した。そのうち石核は、26点である。全出土資料に占める割合は、1.7%である。石材別では、珪岩6点、黒耀石26点で黒耀石の利用頻度が、最も高い数値を示し

ている。これらの石器の分布は、当該期の遺物の分布と同様で、ⅡB～ⅢB区に集中している。

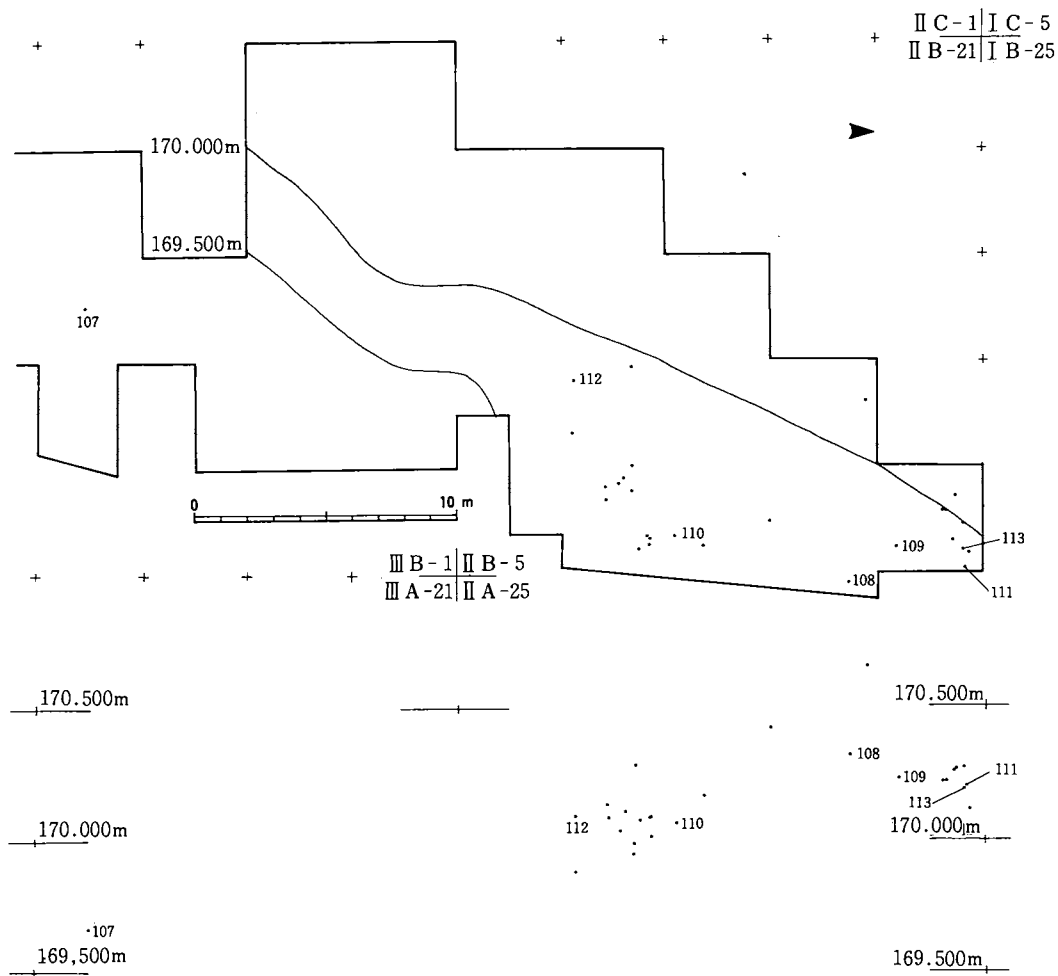
出土した石核は、その剥片剥離の状態によって、2類に分類ができる。以下、類ごとに説明を加えていく。

第1類 (107)

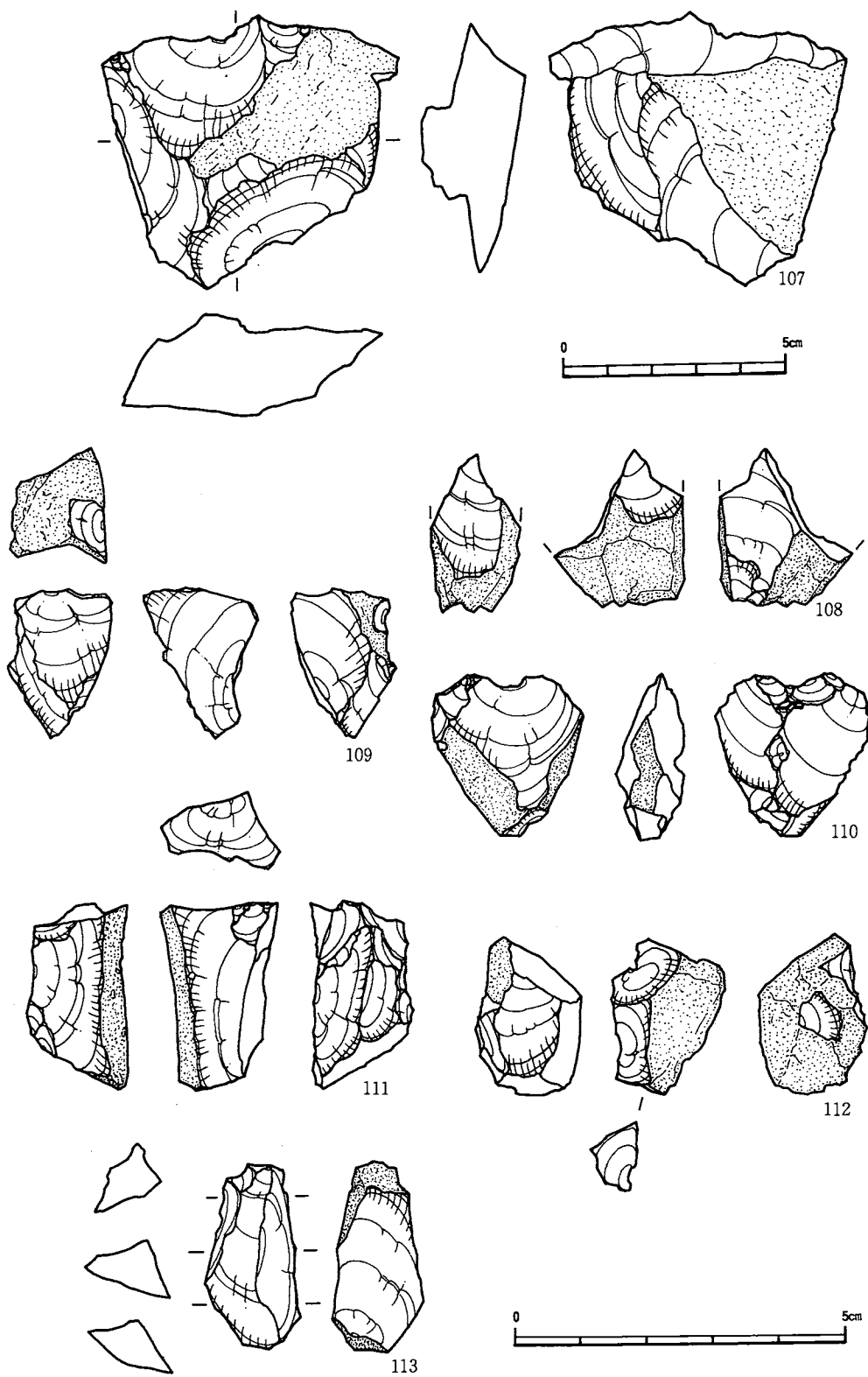
1類は、剥片や分割礫を素材とする扁平な石核である。その剥片剥離は、打面を石核の縁辺に沿って、頻りに転移させるという特徴があり、その結果剥片剥離には、求心的な剥離痕がみられる。

第2類 (108～113)

2類は、円礫（亜角礫）を素材とする小型の石核である。石核表面には、礫面を残している。



第54図 遺物分布図（石核）



第55図 石器実測図

剥片剥離の方向は一定せず、剥離面を打面として幅広の不整形剥片を剥出している。

3. まとめ

縄文時代草創期の遺物は、調査区北側のⅡ-B区で標高約170.0mより低い東側に集中して検出された。このことから遺跡の範囲は、さらに調査区外東側に伸びるものと考えられる。

また、検出された有文土器片のうち唯一1例確認された接合資料は、有文土器片と無文土器片との接合である。

有文土器片は、施文の状態からⅠ～Ⅲ類に分類した。Ⅲ類に分類した資料については、資料数が3点と少なく確認された資料の主体を占めるものではないが、施文の状態から球磨郡多良木町里の城遺跡、宮崎市堂地西遺跡の資料に酷似する。このことは、白鳥平B遺跡縄文時代草創期の編年的問題を考える上で重要である。

しかし、白鳥平B遺跡において検出された資料の、内面の調整痕（指による凹とナデ調整）については、今後類似する資料についても詳細な観察が必要である。Ⅱ類に分類した資料は、その資料数は5点と少なく、Ⅲ類と同様に確認された資料の主体を占めるものではない。このⅡ類の特徴は、爪形文に指頭圧痕を併用する点にある。17、18の資料は、傾きが異なる爪形文を併用した資料で、口唇部への加飾と指頭圧痕の有無という相違点はあるが、類似する資料としては宮崎市椎屋形遺跡があげられる。Ⅰ類に分類した資料は、爪形文のみを規則的、不規則的に数列施文するもので、白鳥平B遺跡の当該期の主体を占める資料である。施文された爪形文は深く、器面には施文時の粘土の盛り上がりが見られる。施文の深淺の相違点はみられるが、菊池郡大津町無田原遺跡、出水市上場遺跡の資料に類似する。

Ⅰ～Ⅲ類の資料を大塚達朗氏の編年に当てはめると、Ⅲ類は、隆起線文土器期Ⅳ期、Ⅰ類は続隆起線文土器期Ⅰ古期に相当する。Ⅱ類とⅢ類の編年的位置付け、先後関係については、白鳥平B遺跡の資料からは不明である。今後の資料の増加を待って検討する必要がある。

しかし型式学的には、隆起線文を意識的に作り出すために摘みあげの手法がみられる資料(Ⅲ類)から、指頭圧痕を伴って爪形文が施文され周囲を隆起させた資料(Ⅱ類)へと発展するものと考えられる。つまり〈Ⅲ類→Ⅱ類→Ⅰ類〉という変遷として捉えることができる。Ⅰ～Ⅲ類の時間的な差異は、差程ないものと考えられ、隆起線文土器期から続隆起線文土器期への過渡期的段階として捉えられる。

また、石器では石鏃65点、尖頭器1点、細刃器33点、削器4点、抉入石器1点、楔形石器5点、石錐1点、磨石・敲石14点、石皿・台石4点、二次加工ある石器13点、使用痕ある剥片30点の石器が検出された。このように、石器組成としてはほぼ完全な組成を示しているものといえる。石器の出土地点は、土器等の集中部分とほぼ同一で、遺跡北側に偏在する傾向が窺える。

第三章 調査の成果

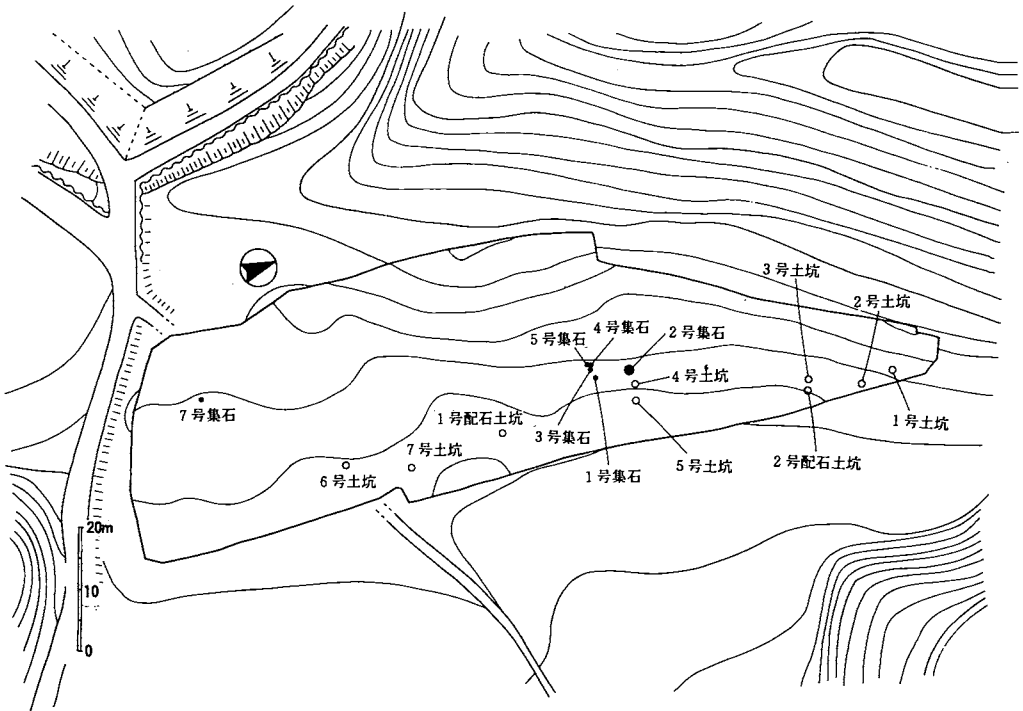
当該期の石器組成では、細石刃核及び細刃器の有無が問題となるが、白鳥平B遺跡においては細石刃核の出土はみられないが、細刃器の可能性の高い石器が33点検出されている。このことは、球磨郡多良木町里の城遺跡、宮崎市堂地西遺跡の報告例に類似した状況といえる。

しかし、宮崎市椎屋形遺跡では細石刃核及び細刃器は検出されていない。このような石器組成や土器の型式学的検討から、僅かな時間的幅のなかで捉える必要があると考えられる。

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構と遺物は、鬼界カルデラを起源とするアカホヤ火山灰層下のV層褐色土層からVI a層上部にかけて検出された。これらの遺構、遺物は、厚い火山灰に覆われており、開墾等の後世の攪乱を除けば、比較的良好な状態で検出された。調査は、調査範囲のほぼ全面において実施し、遺構、遺物の集中部分を完掘した。南側の一部ではV層下面までの調査で終了した。しかし、隣接する地域においてVI c層まで調査を行なったが遺物の検出は、希薄になるためその集中部はV層中に存在するものと考えられる。

この結果、集石遺構と2,247点の遺物を検出した。その内容は、6基の集石遺構と9基の土坑及び配石土坑からなる遺構と、押型文、条痕土器、円筒形条痕文土器、平楯式土器、塞ノ神式系土器等が検出された。これらの遺構、遺物は、それぞれの分布域に違いが認められる。集石では、VII D-2区で1基（7号集石遺構）が検出された外はVI B、C区に集中する傾向が窺える。また、土坑については、調査区の東側に広く分布している。遺物については調査区の中で疎密の差はあるがほぼ全域に分布する。しかし、大まかな集中部分としては、南北2つに分けることができ、その土器群の様相にも違いが認められる。



第56図 遺構配置図

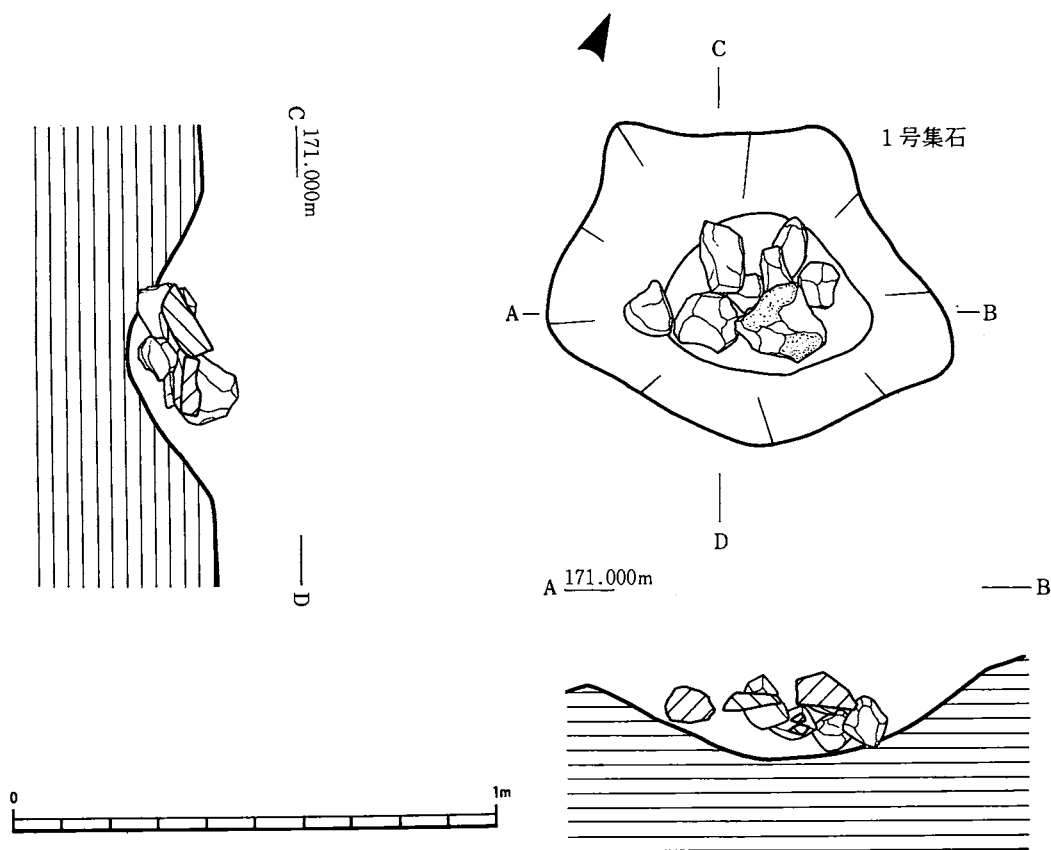
1. 遺構とその分布

(1) 集石遺構

調査の結果、縄文時代早期に属する集石遺構は、6基検出した。集石遺構の分布は、1～5号集石遺構からなる集中部と、7号集石遺構に分けられる。検出面は、V層上面（1、3、4、7号集石遺構）とVI a層上面（2、5号集石遺構）である。これらの集石遺構は、土坑を伴う点では類似するが、遺構を構成する礫の大きさには明確な違いが認められる。しかし、それぞれの遺構から土器等が出土しなかったため、細かな時期決定については、周囲の遺物分布（土器型式の分類と分布）の状態と合わせて検討する必要がある。

1号集石遺構（第57図）

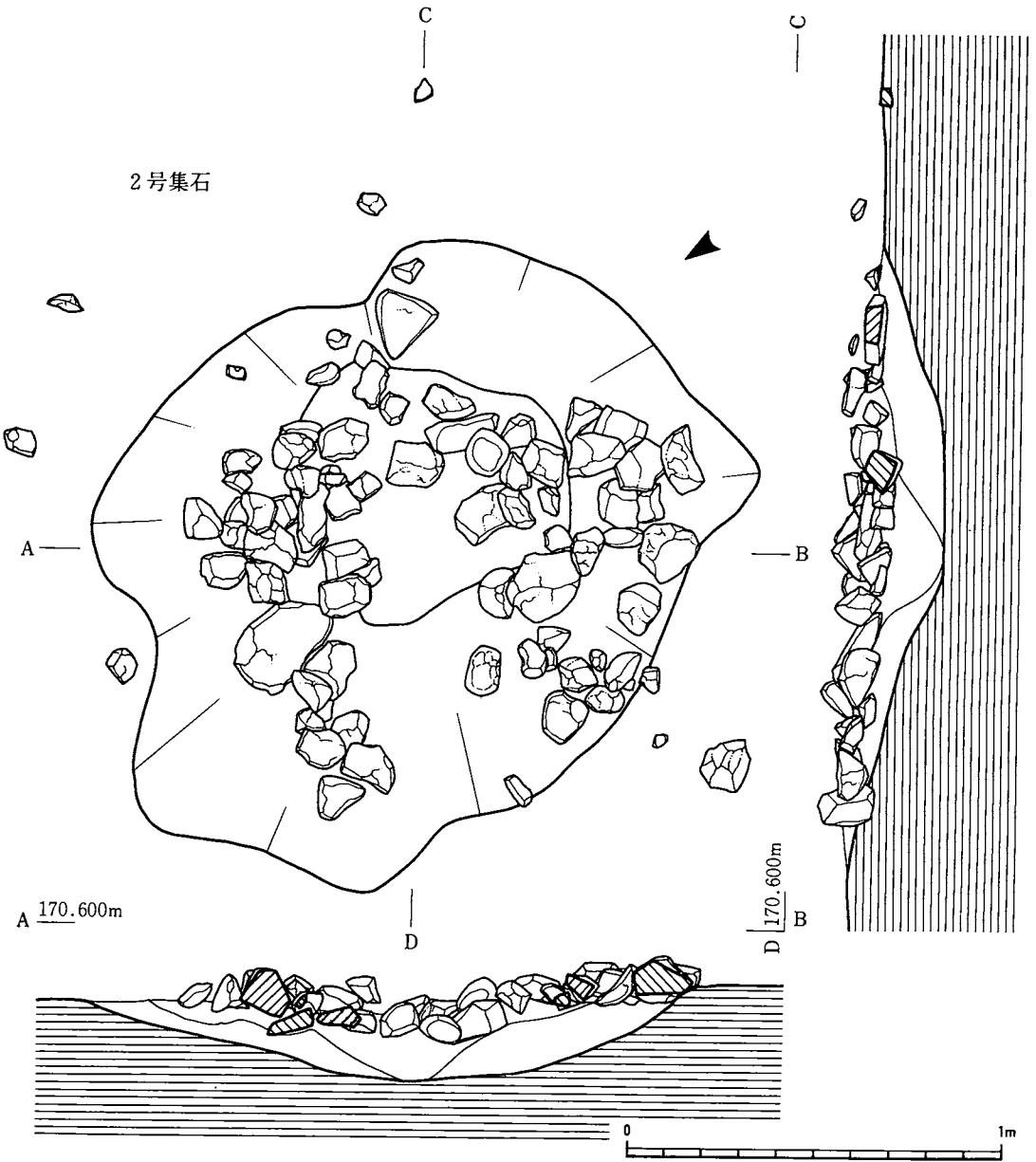
IV C-1区で検出した集石遺構である。V層上面から掘りこまれた長軸約85cm、短軸約65cmの不整形の土坑で、深さ約20cmを測る。集石は、10～20cmの加久藤溶結凝灰岩を中心に9個の破碎礫で構成される。これらの礫は、すべて火を受け赤変している。一部には薄く剥落したのも存在する。炭化物は、確認できなかった。



第57図 集石実測図

2号集石遺構（第58図）

ⅢB-25区で検出した集石遺構である。VI a層上面から掘りこまれた約160cm×約180cmの楕円形に近い不整形の土坑で、深さ約20cmを測る。集石は、10～25cmの加久藤溶結凝灰岩を中心に95個で構成されている。これらの礫は、大半が火を受け赤変しているか、もしくは薄く表面が剥落した状態が観察される。また集石は、土坑中央部及び北西側に空白をもち、「コの字」形

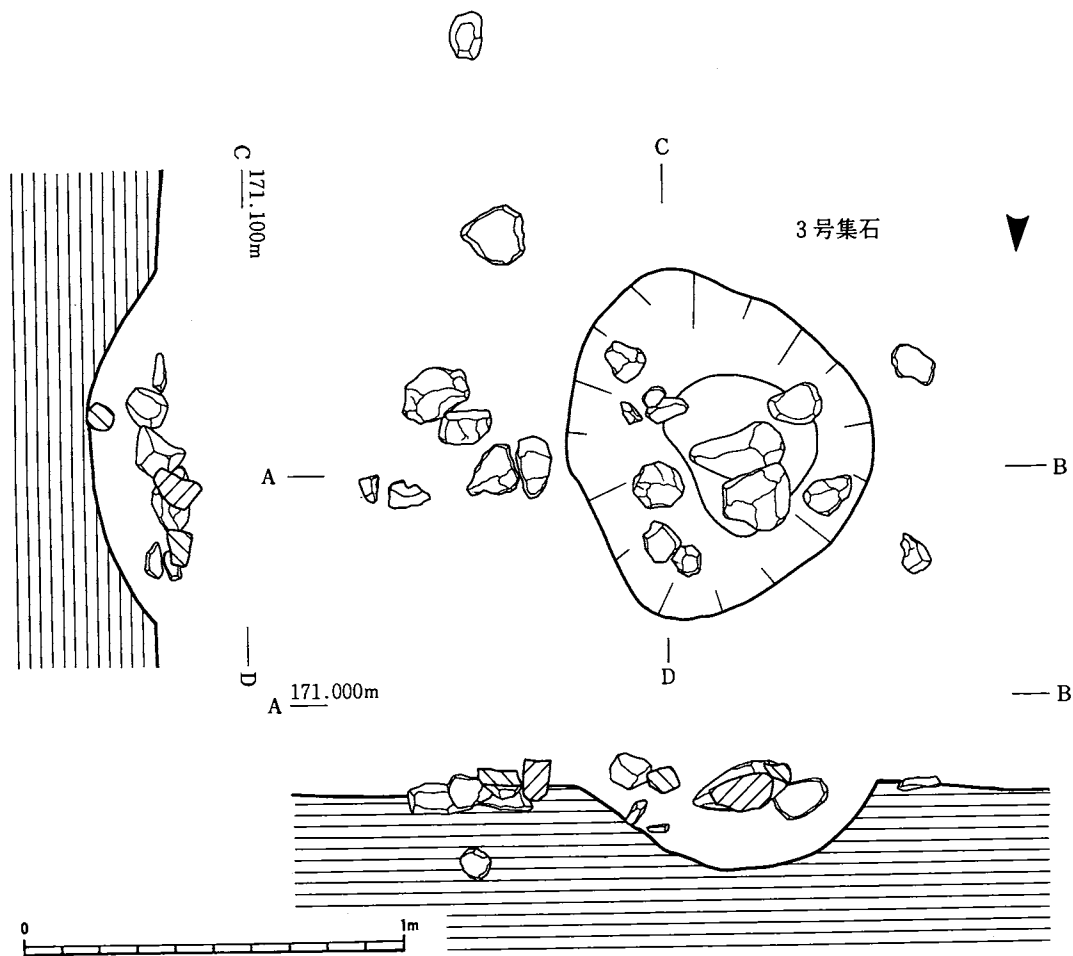


第58図 集石実測図

を呈している。埋土は、暗褐色土（上層）としまりのある黒褐色土（下層）との2枚に分層された。また、上下層中には炭化物が含まれている。上層では微細な炭化物が、下層では上層より大きめの炭化物が含まれる。床面は、遺構全体の平面形からするとやや東側に偏った状態で確認され、固くしまっている。また、埋土中下層から3cm程度の土器の破片が出土したが、型式等は判別できなかった。

3号集石遺構（第59図）

IVB-21区で検出した集石遺構である。V層上面から掘りこまれた、約95cm×約85cmの楕円形の土坑で、深さ約25cmを測る。集石は、10~20cmの加久藤溶結凝灰岩を中心に、土坑内に11個と土坑外に10個で構成されている。これらの礫は、すべて火を受け赤変している。埋土の色調は、暗褐色でサラサラとし微細な炭化物を含んでいる。



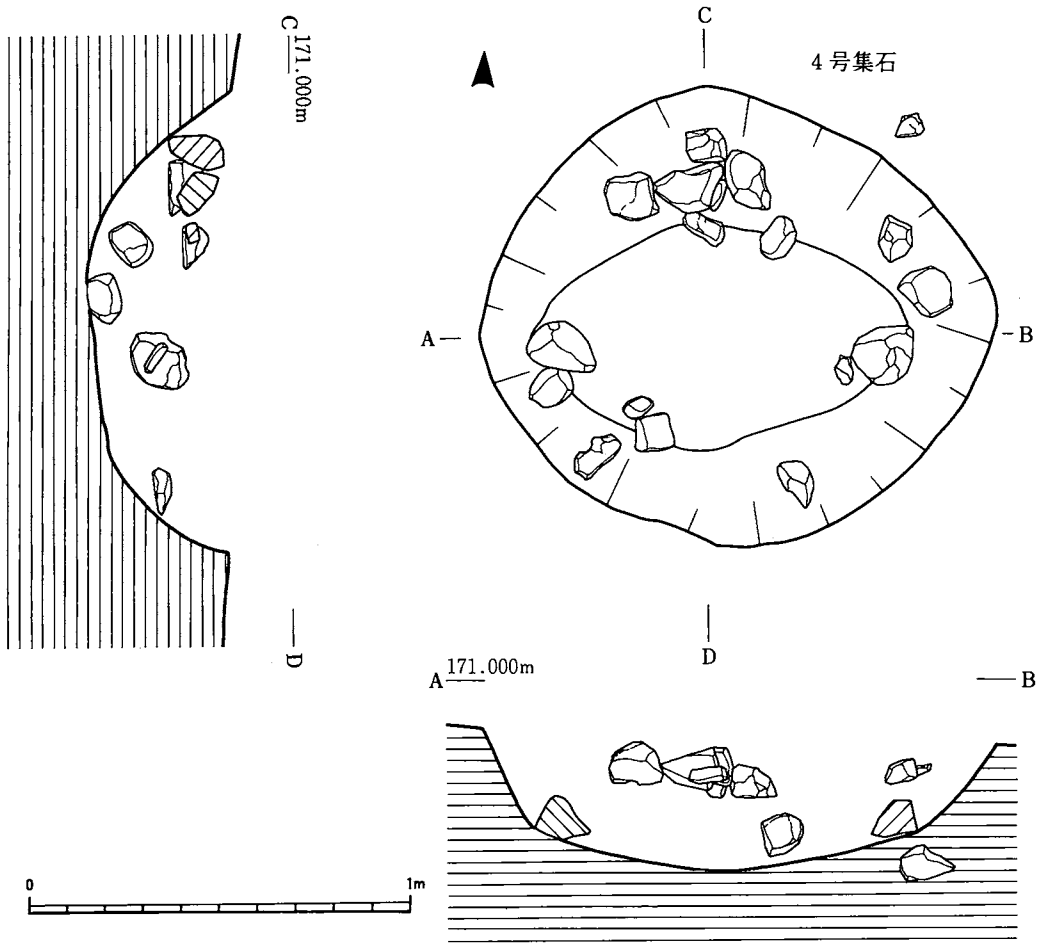
第59図 集石実測図

4号集石遺構 (第60図)

IVB-21区とIVC-1区にかけて検出した集石遺構である。V層上面から掘りこまれた、約120cm×約135cmの楕円形の土坑で、深さ約40cmを測る。集石は、10~20cmの加久藤溶結凝灰岩を中心に、19個の礫で構成されている。これらの礫は、すべて火を受け赤変している。また、礫の在り方は、土坑中央部に空白をもち、土坑縁辺部近くで円形に囲む状態で確認された。埋土は、暗褐色土でサラサラとし微細な炭化物を含んでいる。

5号集石遺構 (第61図)

IVC-1区で検出した集石遺構である。IVa層上面から掘りこまれた、約80cm×約75cmの楕円形の土坑で、深さ約20cmを測る。集石は、10~20cm大の加久藤溶結凝灰岩を中心に36個の礫

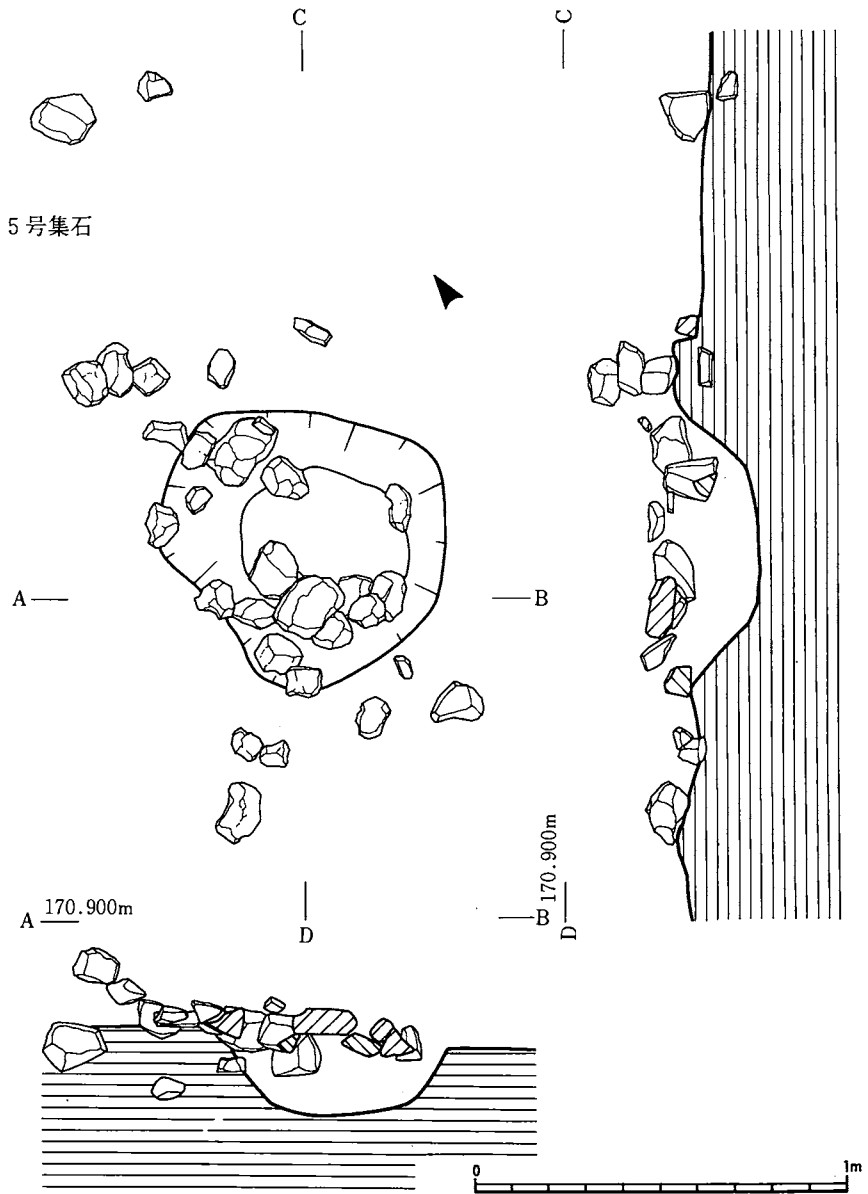


第60図 集石実測図

で構成されている。これらの礫は、すべて火を受け赤変しているか、もしくは表面が薄く剥落した状態を呈している。埋土は、分層できなかつたが2号集石遺構の下層と類似し、黒褐色で微細な炭化物を含んでいる。

7号集石遺構 (第62図)

VII D-2区で検出された集石遺構である。V層上面から掘りこまれた、約75cm×約63cmの楕



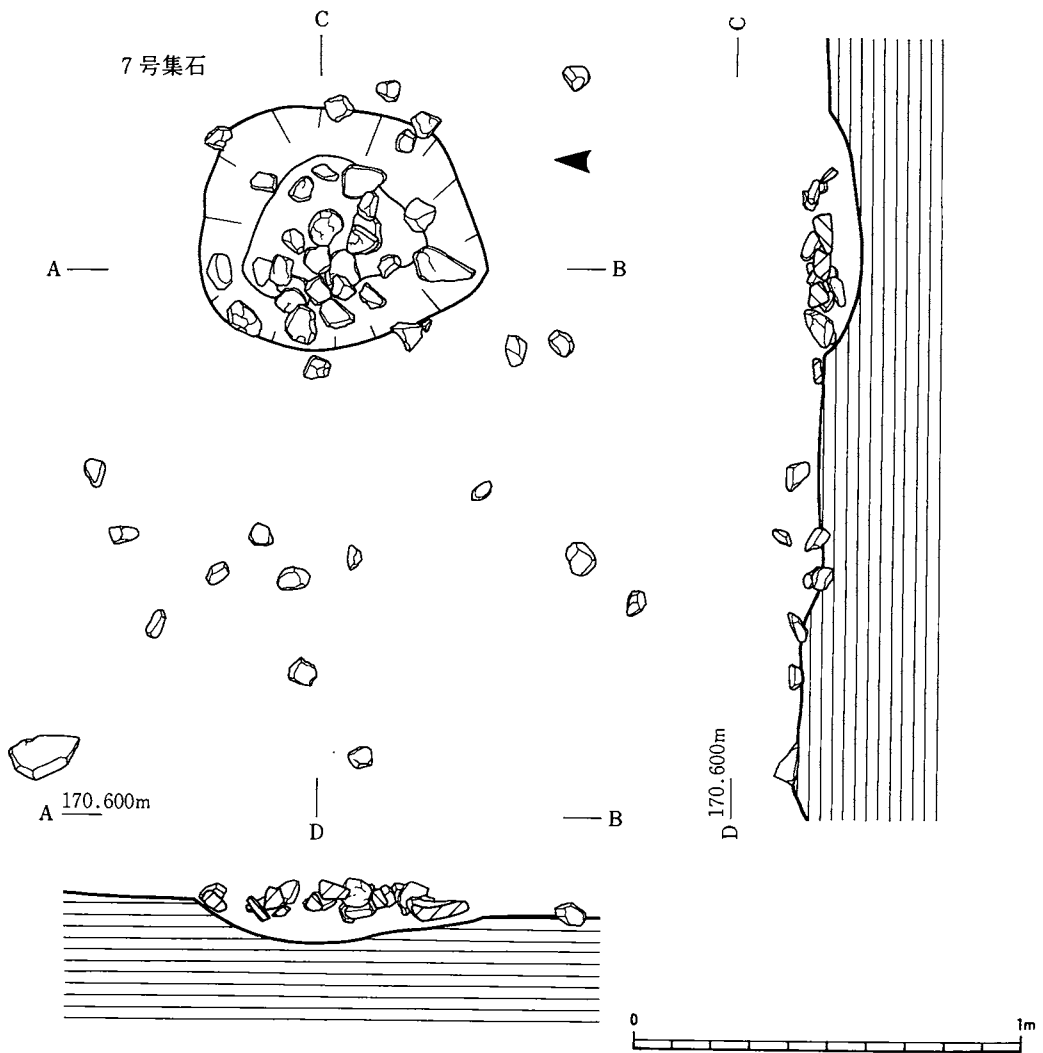
第61図 集石実測図

円形の土坑で、深さ約15cmを測る。集石は、5～10cm大の加久藤溶結凝灰岩を中心に40個で構成されている。また、土坑外には18個の礫が、散乱した状態で確認された。土坑内の礫は、土坑の西側に偏った状態で検出され、すべて火を受け赤変している。埋土は、暗褐色でサラサラとし微細な炭化物を含んでいる。この炭化物は、東側床面上で多く確認された。

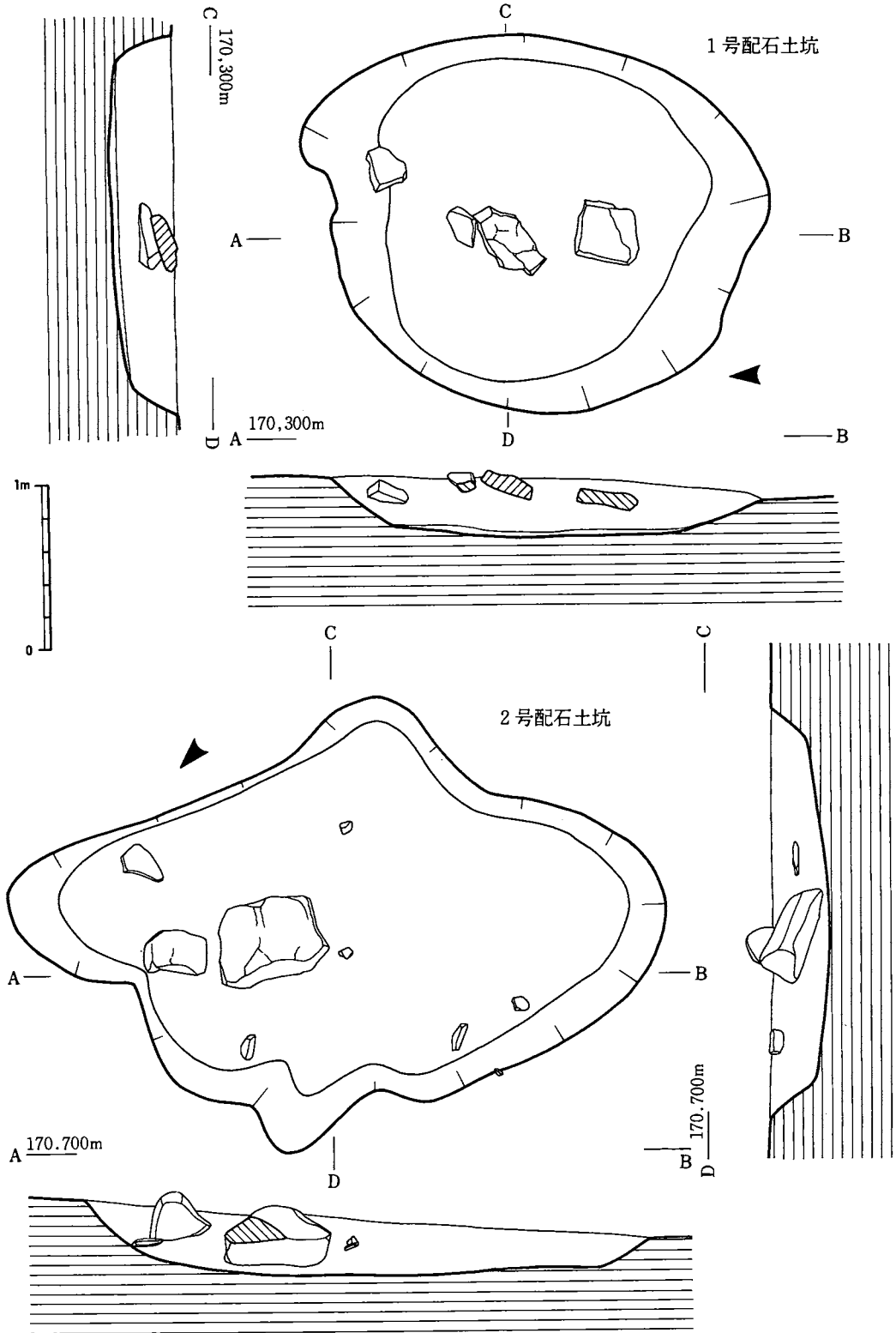
このように、土坑を伴う礫集中部とその周囲に散乱する礫とは、遺構の廃棄の状態を示すものと考えられる。

(2) 配石土坑

配石土坑は、楕円形あるいは不整形の土坑に、大型の礫を配した遺構で、2基検出された。



第62図 集石実測図



第63図 配石土坑実測図

この配石土坑は、とV B区で確認された。この分布の在り方は、集石遺構の分布と異なる。また、1、2号配石土坑とも土坑の集中する分布域に近い地点に存在することから、これらの配石土坑や土坑と集石遺構、遺物集中部分と合わせて生活空間を考える上で重要である。

1号配石土坑 (第63図)

V B-16、21区で検出された配石土坑である。土坑の平面形は、約135cm×約115cmの不整形の土坑で、深さ約18cmを測る。土坑内には、大型の扁平な礫を4個配する。土坑は、V層上面からの掘りこみを確認した。埋土は、暗褐色土で分層はできなかったが、床面近くには部分的に黒色土のブロックがわずかに認められた。

2号配石土坑 (第63図)

II B-3、4区にかけて検出された配石土坑である。土坑の平面形は、不整形の楕円形を呈し、長軸約200cm、短軸約130cmで深さ約19cmを測る。土坑内には、床面からやや浮いた状態で大型の礫が2個配され、床面には小穴が2ヶ所確認された。埋土は粒子の粗い暗褐色土で、小穴の埋土は弱い粘性を帯びた黒褐色土である。

(3) 土坑

土坑は、7基検出された。その分布は、調査区北側のI、II-B区とIII B区、V B区より南側の大きく3ヶ所に分布する。分布の在り方は、調査区内東側の比較的標高の低い地点に存在する。平面形は、円形、楕円形、不整形のものがあり、その中でも小穴をもつものと、もたないものがある。これらの土坑からは遺物が出土していないため、V層上面から掘りこまれている遺構について縄文時代早期に属するものとして取り扱った。

1号土坑 (第64図)

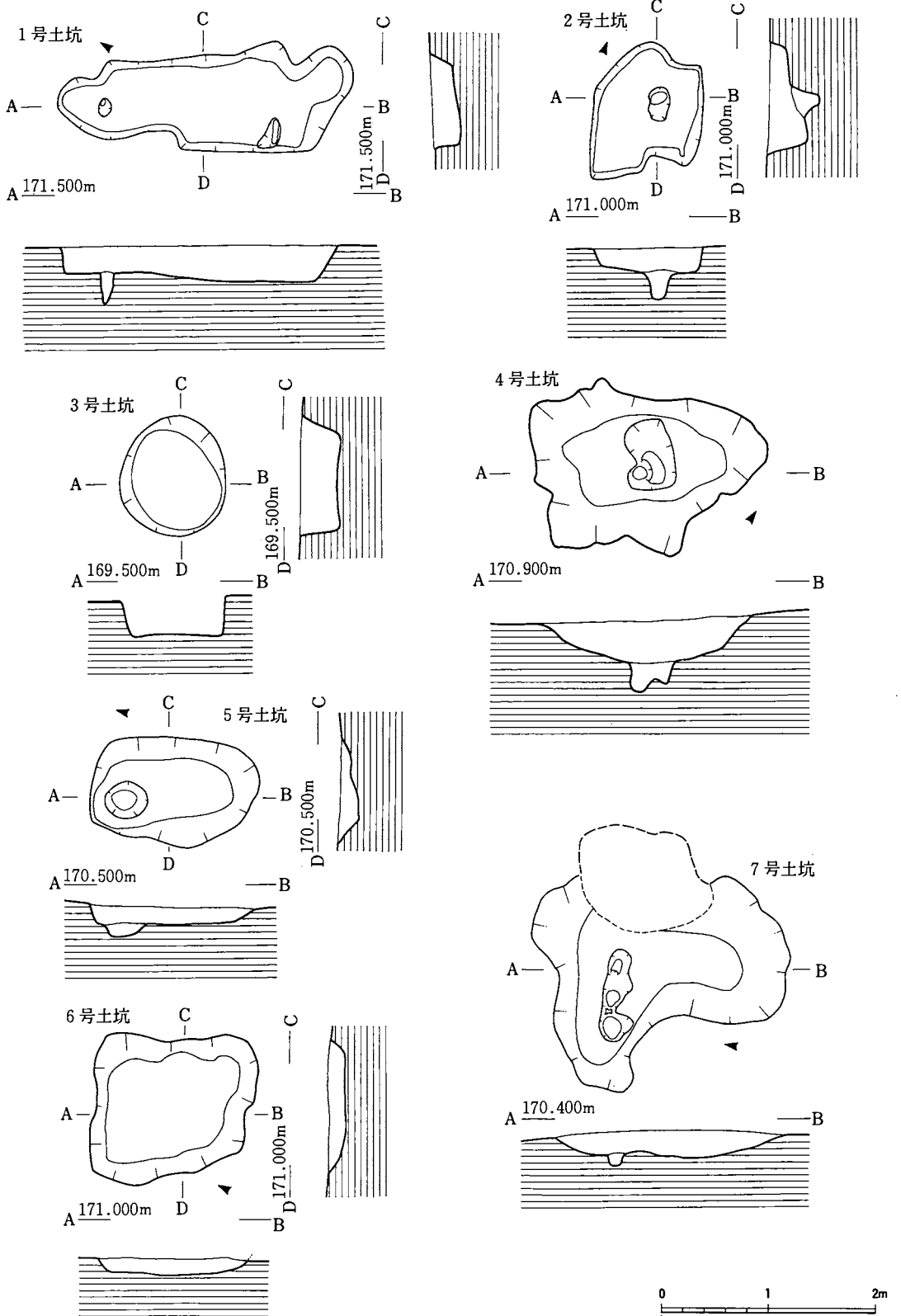
I、II-A区で検出された。土坑の平面形は、約276cm×約89cmの不整形を呈し、深さ約40cmを測る。土坑内には、小穴が2ヶ所確認された。その深さは、約30cmである。土坑の埋土は、黒褐色土で粒子は細かくサラサラしている。小穴の埋土は、褐色土で土坑の埋土に比べてやや弱い粘性を帯びている。

2号土坑 (第64図)

II B-1、2区で検出された。土坑の平面形は、約102cm×約107cmの正方形に近い不整形を呈し、深さ約23cmを測る。土坑中央部には、約26cm×約35cmの楕円形を呈した小穴をもち、その深さは約25cmを測る。土坑の埋土は、暗黄褐色土で粒子は細かくサラサラしている。また小穴の埋土は、黒色土でフカフカとしている。

3号土坑 (第64図)

II B-4区で検出された。土坑の平面形は、約111cm×約98cmの円形を呈し、深さ約38cmを測る。床面は、平坦で他の土坑と形態的に異なる。埋土は、暗黄褐色土で粒子は細かくサラサラとしている。



第64図 土坑実測図

4号土坑（第64図）

ⅢB-20区で検出された。土坑の平面形は、約218cm×約154cmの不整形を呈し、深さ約39cmを測る。土坑中央部に、約45cm×約65cmの不整形の小穴をもつ。小穴の深さは、約32cmを測る。土坑の埋土は、褐色土で粒子は細かくサラサラとしている。小穴の埋土は、暗褐色土である。

5号土坑（第64図）

ⅢB-15、20区で検出された。土坑の平面形は、約156cm×約101cmの不整形を呈し、深さ約18cmを測る。土坑北側に、約35cm×約41cmの小穴をもつ。その深さは、約12cmで比較的浅い。土坑の埋土は、褐色土で粒子は細かくサラサラとしている。小穴の埋土は暗褐色である。

6号土坑（第64図）

ⅥC-2区で検出された。土坑の平面形は、約140cm×約124cmの不整形を呈し、深さ約16cmを測る。暗褐色土で粒子は細かくサラサラとしている。

7号土坑（第64図）

ⅤB-25区で検出された。土坑の平面形は、約243cm×約205cmの不整形を呈し、深さ約20cmを測る。東側が攪乱をうけ、確認できない部分が存在した。土坑中央やや北側に約27cm×約86cmの細長い小穴をもつ。小穴の深さは、約20cmである。土坑の埋土は、黒褐色土で粒子は細かくサラサラとし、僅かに炭化物が確認された。小穴の埋土は、黒色土である。

2. 遺物とその分布

(1) 土器

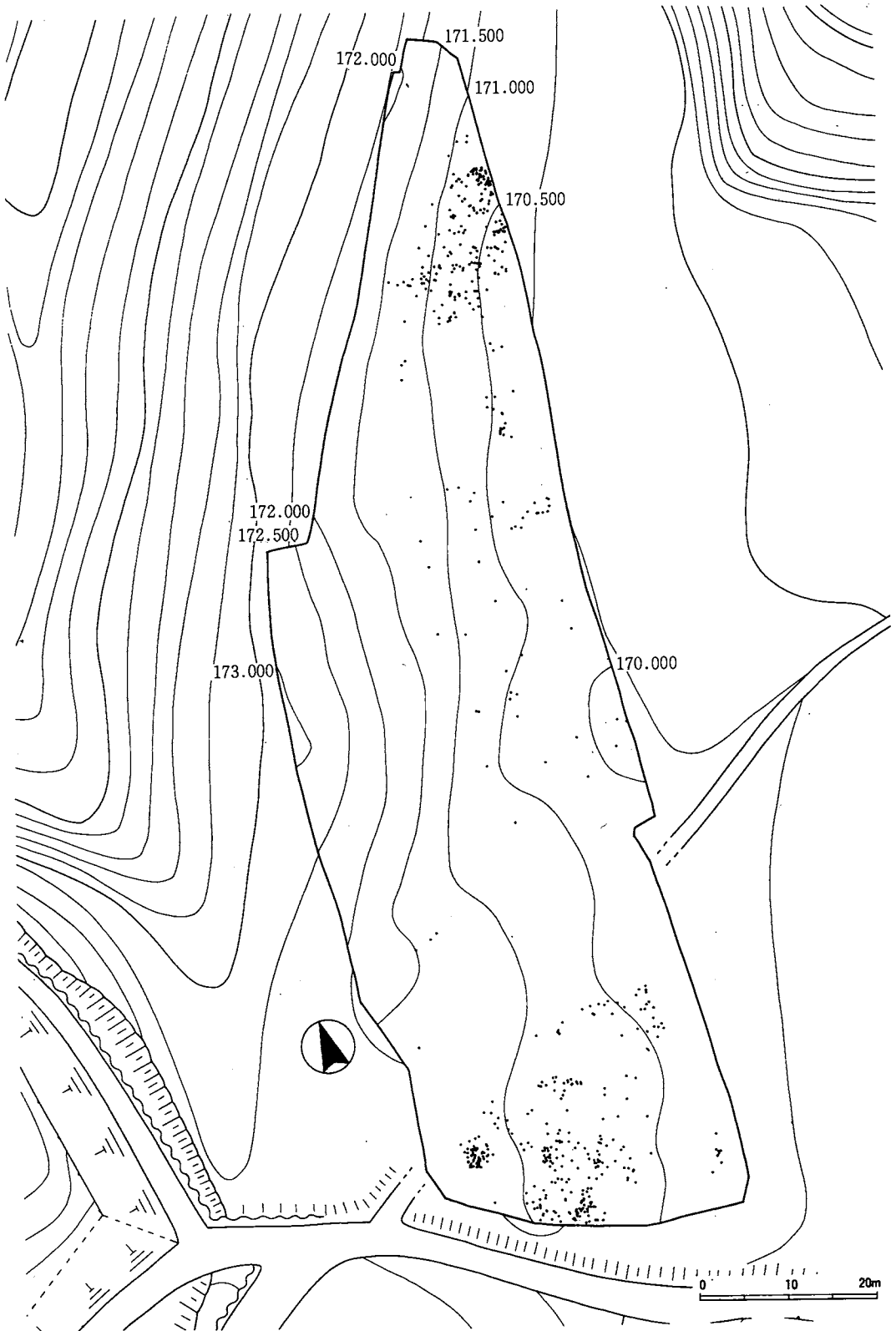
縄文時代早期に属する土器は、644点検出された。その種類は、押型文土器（山形文、楕円文）38点、条痕土器21点、円筒形条痕土器21点、塞ノ神式土器109点、撚糸文・縄文（平柵式土器を含む）47点、不明土器398点である。このように多種類の土器型式が確認されたがその出土層位や分布という点では相違点が認められる。つまりⅤ層で出土する一群（山形押型文土器、円筒形条痕文土器、塞ノ神式土器、平柵式土器、縄文土器）とⅥa層で出土する一群（楕円押型文土器、条痕土器）である（第66図）。

また、それぞれの土器型式ごとの分布では、厚手で内面が丁寧なナデ整形を施す楕円押型文土器や条痕土器はⅡB区に集中し、薄手で山形文を施文し内面の整形が粗い押型文土器、塞ノ神式土器の中で石坂上タイプ、平柵式土器はⅦC、D区に集中する。円筒形条痕文土器は、南北の両集中部で確認されている。

押型文土器（第68図1～第69図30）

押型文土器は、38点検出された。その文様ごとの内訳は、楕円文23点、山形文15点である。また、押型文土器の分布は、楕円押型文土器がⅡB区に集中し、山形押型文土器はⅦC、D区

第三章 調査の成果



第65図 遺物分布図 (土器)

に集中する（第67図）。

以下資料について個別に説明を加えていく。

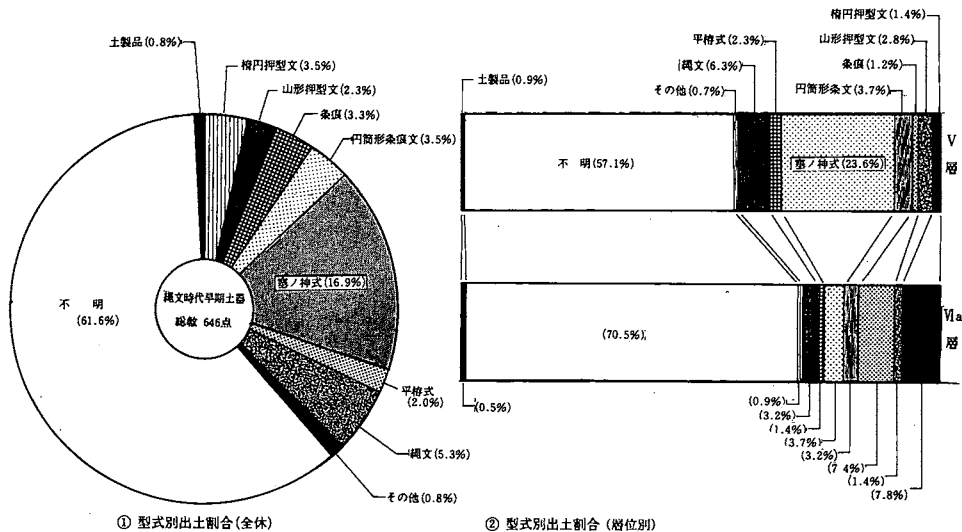
1は、ⅡB-2区で出土した資料で、接合資料である。口縁部の形態は、直口し口唇部はナデ整形によってやや平坦に作り出されている。外面には5mm大の楕円文を横走させる。内面は、施文原体による条痕や押型文は施文されず、極めて丁寧なナデ整形が施されている。

全体の器形は、口縁部から胴部中位までで底部の接合がないため不明であるが、胴部中位付近でわずかに屈曲する傾向が窺えることから、底部付近ではやや窄まるものと考えられ、円筒形に近い形態の深鉢形を呈するものと考えられる。

器面の色調は、外面は淡赤褐色で、内面は淡赤褐色で下半部では灰褐色である。また、外面に煤の付着が認められる。焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英、長石の砂粒が混入されている。器厚は、12mmを測る。

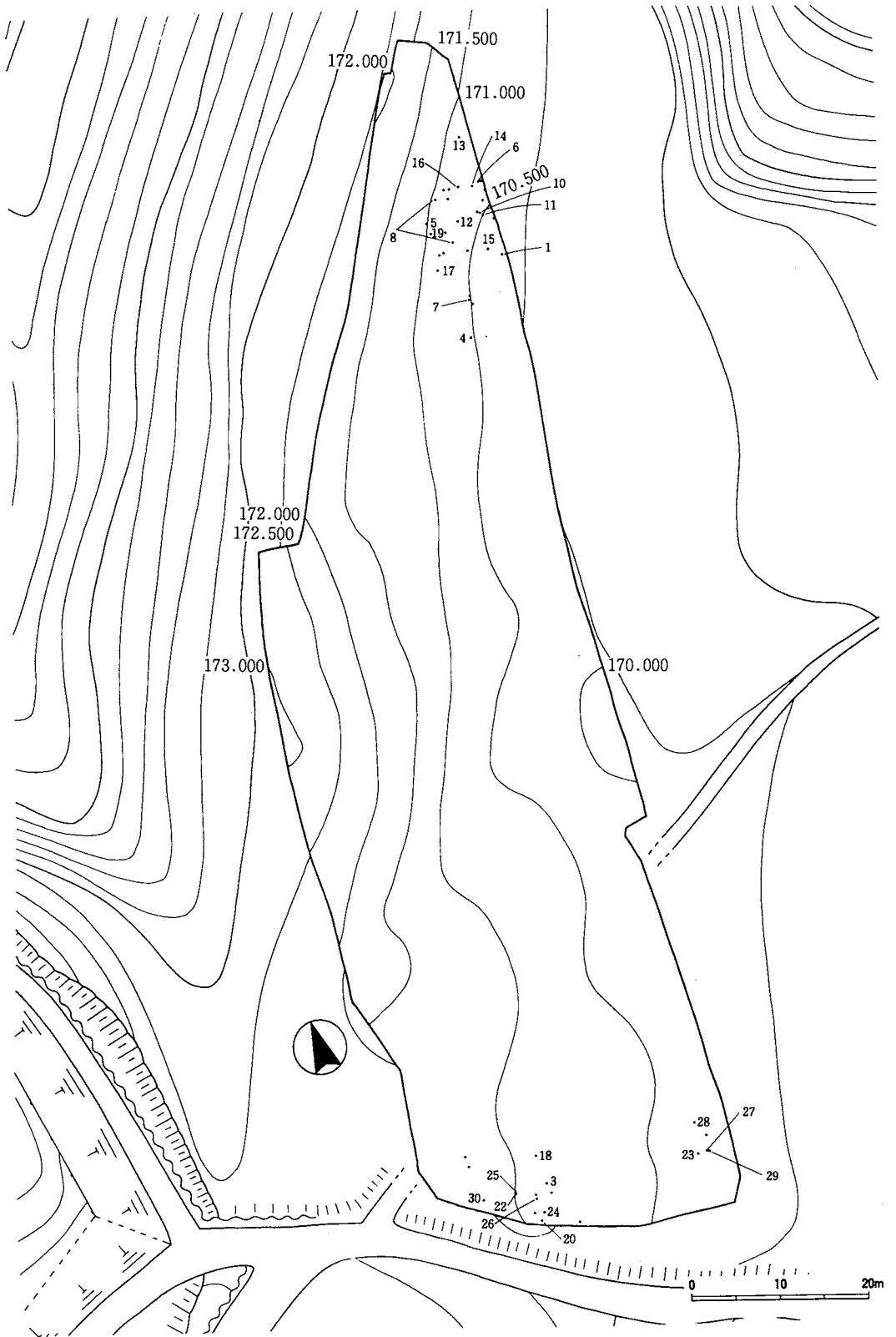
2は、ⅡB-2区で出土した口縁部の資料である。口縁部の形態は、直口し口唇部はやや平坦に作り出されている。外面には5mm大の楕円押型文を横走させる。内面には、1と同様に施文原体による条痕や押型文は施文せず、極めて丁寧なナデ整形を施す。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英、長石の砂粒を混入している。外面に、わずかに煤の付着が認められる。器厚は、10mmを測る。

3は、ⅦC-24区で出土した口縁部の資料である。口縁部の形態は、外傾する。外面の施文は、細かな楕円押型文を縦走させ、内面でも同様に細かな楕円押型文を斜走させている。しかし、内面の施文部は口唇部から約2cm程度で以下については施文された後、ナデ消されている。



第66図 縄文時代早期土器分析図

第三章 調査の成果



第67図 遺物分布図 (押型文土器)

口唇部は、施文原体による刻みが施されている。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm程度の石英や長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、最大11mmを測る。

4は、ⅢB-16区で出土した口縁部の資料である。口縁部の形態は直口し、口唇部はやや平坦に作り出されている。施文は外面のみに施される。その施文は、5mm大の楕円押型文である。口唇部と内面は、施文具により極めて丁寧なナデ調整が施される。器面の色調は、淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、長石の砂粒が混入されている。器厚は、10mmを測る。

5は、ⅡB-9区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、5mm大の楕円押型文を横走させる。内面は、極めて丁寧なナデ調整が施される。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英や長石、黒耀石の砂粒が混入されている。器厚は、11mmを測る。

6は、ⅡB-2区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、5mm大の楕円押型文を横走させる。内面は、剥落により観察ができない。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、11mm以上である。

7は、ⅡB-10区で出土した胴部の資料である。1と同一個体である。外面の施文は、5mm大の楕円押型文を横走させ、内面の調整は極めて丁寧なナデ整形が施されている。器面の色調は、外面が淡赤褐色で内面は灰褐色である。胎土には、1～3mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、11mmを測る。

8は、ⅡB-7区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、5mm大の横走する楕円押型文を施文する。内面は、極めて丁寧なナデ整形が施されている。器面の色調は、外面が淡赤褐色で内面が褐色である。胎土には、1～2mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、11mmを測る。

9は、ⅡB-3区で検出された2号配石土坑埋土中から出土した胴部の資料である。外面の施文は、5mm大の横走する楕円押型文を施文する。内面の調整は、剥落により観察できない。

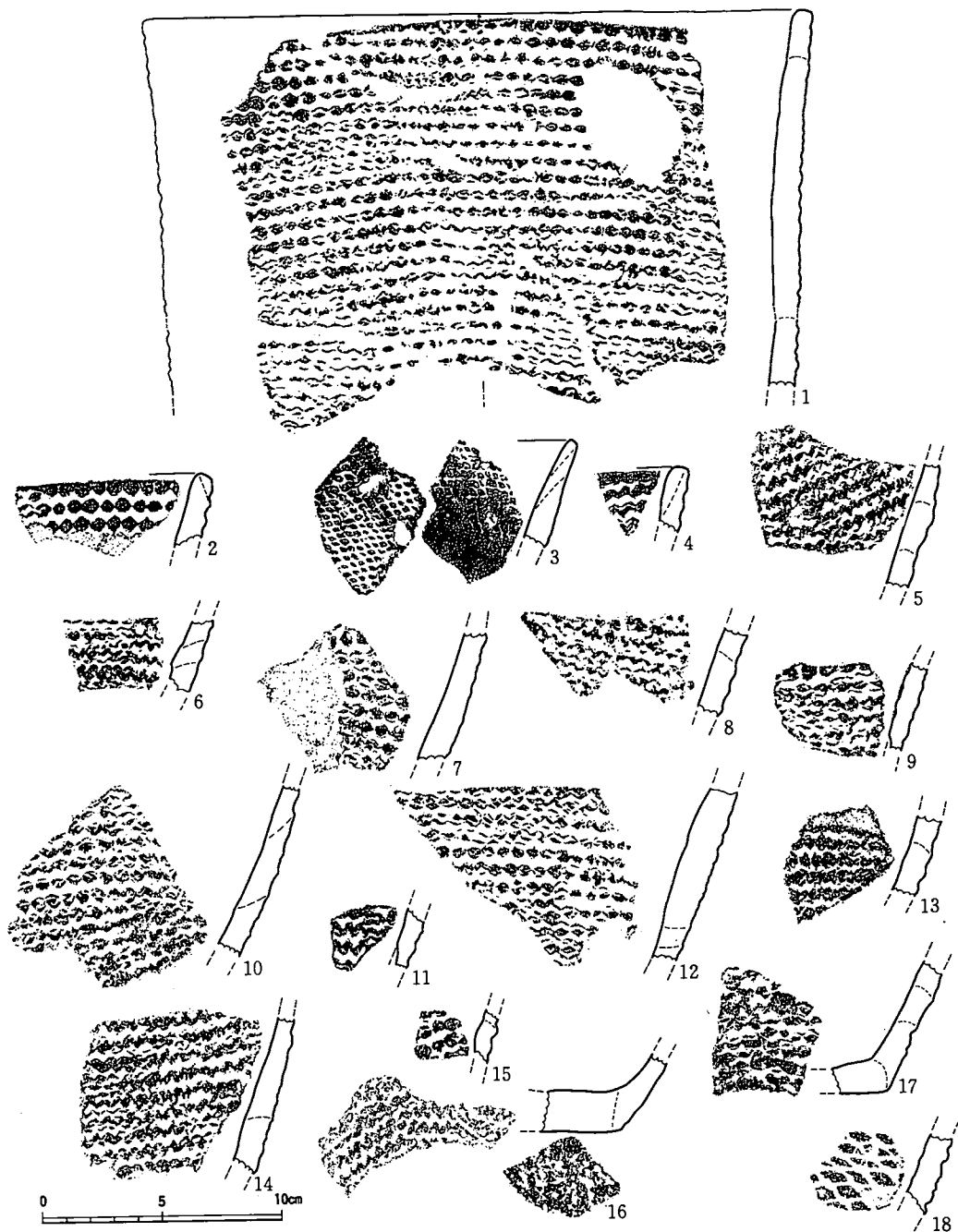
器面の色調は、外面で淡赤褐色を呈する。胎土には、1～3mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、9mm以上である。

10は、ⅡB-3区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、5mm大の横走する楕円押型文を施文する。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形が施されている。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色である。胎土には、1～2mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、11mmを測る。

11は、ⅡB-2区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、5mm大の横走する楕円押型

文を施文する。内面は、器面が剥落しているため観察できない。器面の色調は、淡赤褐色を呈する。胎土には、1～2mm大の石英、長石を混入している。器厚は、8mm以上である。

12は、ⅡB-7区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、5mm大の横走する楕円押型文を施す。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形を施す。また外面に、わずかに煤の付着が観



第68図 土器実測図

察される。器面の色調は、外面が淡赤褐色で内面は淡赤褐色、灰褐色を呈する。胎土には、1～2mm大の石英、長石の砂粒が混入されている。器厚は、15mmを測る。

13は、ⅡB-1区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、5mm大の横走する楕円押型文を施す。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形を施す。器面の色調は、外面が淡赤褐色で内面は褐色を呈する。胎土には、1～2mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、11mmを測る。

14は、ⅡB-2区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、5mm大の横走する楕円押型文を施す。内面の調整は、施文具により削りだされ極めて丁寧に仕上げられている。また、外面には、煤の付着が観察される。器面の色調は、外面が淡赤褐色、内面は褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒を混入している。

15は、ⅡB-4区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、5mm大の横走する楕円押型文を施す。内面の調整は、器面が剥落しているため観察できない。器面の色調は、外面が淡赤褐色を呈する。胎土には、1～3mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、7mm以上である。

16は、ⅡB-2区で出土した底部の資料である。外面の施文は、5mm大の横走する楕円押型文を施す。底部の外面は、縄目状の圧痕が観察される。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形を施している。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、胴部で8mm、底部で17mmを測る。

17は、ⅡB-9区で出土した底部の資料である。外面の施文は、5mm大の横走する楕円押型文を施している。底部外面は、16と違い圧痕は観察されない。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形を施す。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1～3mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、胴部で11mm、底部で13mmを測る。

18は、VIC-23区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、間延びした楕円押型文を横走させる。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。器面の色調は、外面が淡褐色、内面は褐色で焼成は良好である。胎土には、石英、長石の砂粒がわずかに観察される。器厚は、11mmを測る。

19は、ⅡB-8区で出土した口縁部の資料である。破片が小さいため、全体の形状を想定するのは困難であるが、口縁部の形状から1の形態に類似するものと考えられる。施文は外面、内面ともに横走する山形押型文が施される。口唇部は、施文具で削りだされ丁寧に仕上げられ平坦である。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、9mmを測る。

20は、VID-5区で出土した口縁部の資料である。施文は、内外面と口唇部にみられる。施文原体は、すべて同一で間延びした山形押型文である。外面では斜走させ、内面では横走させ

ている。口縁部の器形は、やや反りぎみに外傾する深鉢形を呈するものと考えられる。

内面の施文部以下の調整は、ナデ整形による。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、雲母の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

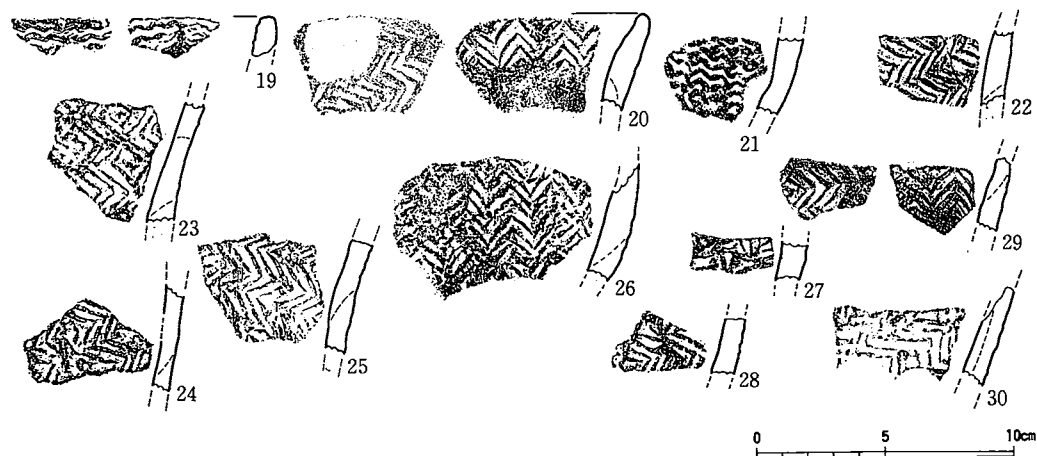
21は、VII C区から検出された一括資料である。胴部の破片でやや膨らむ器形を呈する。外面の施文は、細かな横走する山形押型文を施す。内面は、丁寧なナデ整形が施される。器面の色調は、外面が赤褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石の砂粒がわずかに観察される。器厚は、9mmを測る。

22は、VII D-4区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、間延びした山形押型文を斜走させる。内面の調整は、丁寧なナデ整形が施されている。器面の色調は、内外面とも灰褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、角セン石がわずかに観察される。器厚は、9mmを測る。20と同一固体である可能性が高い。

23は、VII C-5区で出土した胴部の資料である。器形は、大きく外反するものと考えられる。外面の施文は、縦走する間延びした山形押型文を施す。内面の調整は、ナデ整形による。手向山式土器として分類が可能な資料であるが、調査によって「くの字」に屈曲する胴部や全体形が想定できる接合資料が得られていないため、型式認定は慎重にならざるをえない。

器面の色調は、内外面とも焦茶色で焼成はやや良好である。胎土には、長石の砂粒がわずかに観察される。器厚は、最大10mmを測る。

24は、VII D-5区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、縦走する間延びした山形押型文を施す。内面の調整は、ナデ整形による。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、石英、長石、角セン石の砂粒がわずかに観察される。器厚は、7mmを測る。



第69図 土器実測図

25は、ⅦD-4区で出土した胴部の資料である。器形は、23と類似し外反する。外面の施文は、縦走する間延びした山形押型文を施す。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも焦茶色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石の砂粒が観察される。器厚は、9mmを測る。

26は、ⅦD-4区で出土した胴部の資料である。その器形は、胴部で膨らむ。外面の施文は、横走する間延びした山形押型文を施す。器面の色調は、外面が褐色、内面が焦茶色で焼成は良好である。胎土には、石英、長石、角セン石の砂粒がわずかに観察される。器厚は、11mmを測る。

27は、ⅦC-5区で出土した胴部の資料である。破片が小さいため施文された山形押型文の方向は判別できないが、間延びした山形押型文を施す。内面の調整は、ナデ整形による。器面の色調は、外面が褐色、内面が焦茶色で焼成は良好である。胎土には、石英の砂粒がわずかに観察される。器厚は、10mmを測る。

28は、ⅦC-4区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、縦走する間延びした山形押型文を施す。内面の調整は、ナデ整形による。器面の色調は、内外面とも灰褐色で焼成は良好である。胎土には、わずかに石英、長石、角セン石の砂粒が観察される。器厚は、8mmを測る。

29は、ⅦC-5区で出土した口縁部に近い胴部の資料である。施文は、内外面ともに間延びした山形押型文がみられる。外面は縦走、内面は横走させる。器面の色調は、内外面とも焦茶色で焼成はやや良好である。胎土には、長石、角セン石がわずかに観察される。器厚は、8mmを測る。

30は、ⅦD-9区で出土した胴部の資料で、補修孔が観察される。外面の施文は、斜走する間延びした山形押型文を施す。内面の調整は、ナデ整形による。器面の色調は、外面が褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な長石、黒耀石の砂粒がわずかに観察される。器厚は、9mmを測る。

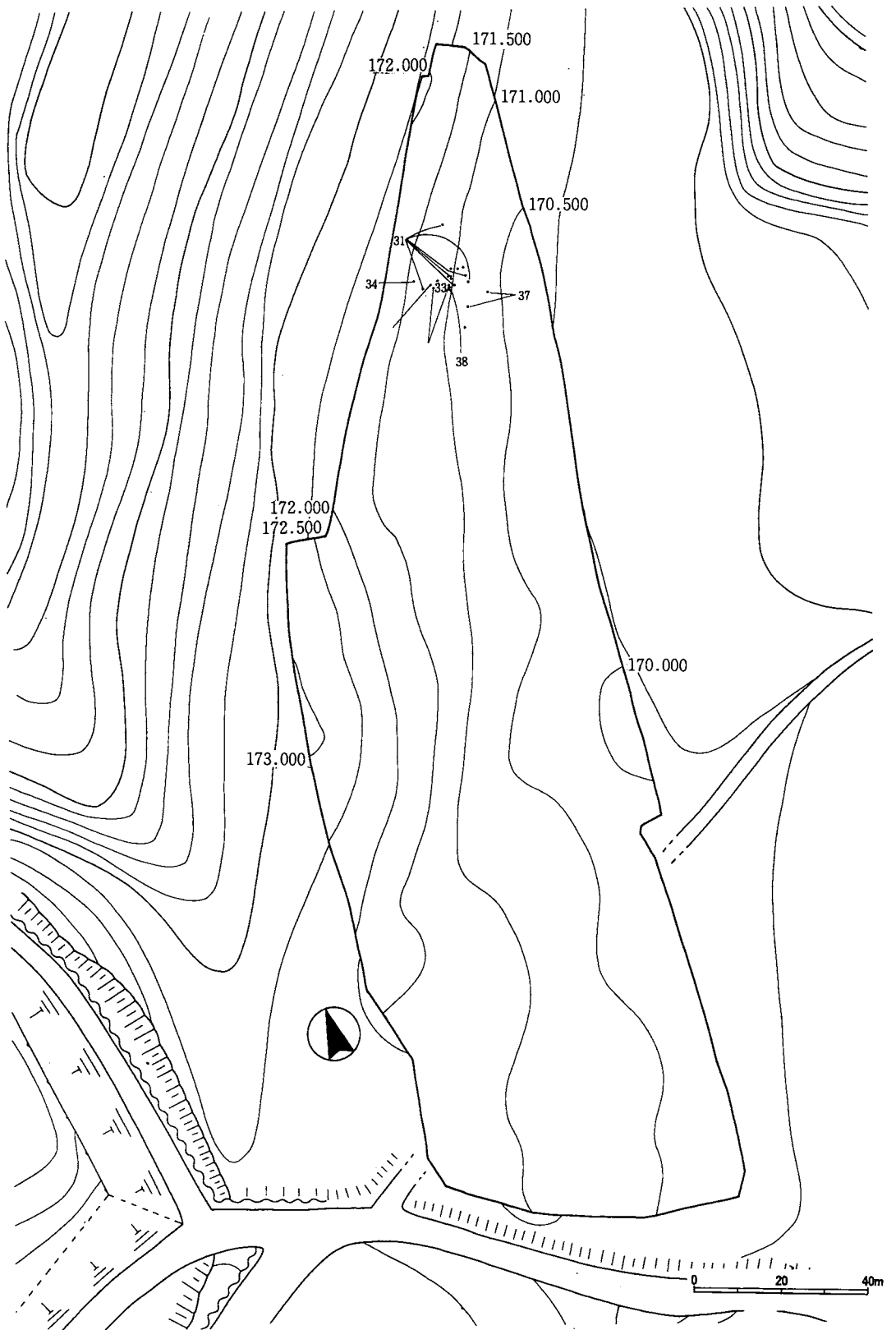
条痕土器 (第71図31~39)

条痕土器は、21点出土した。その分布は、調査区北側のⅡB区を中心に広がる(第70図)。この傾向は、内面を極めて丁寧なナデ整形によって仕上げた楕円押型文土器の分布と類似している(第147図)。出土した土器は、すべて胴部の資料で全体の器形が想定できる資料は検出されなかった。この条痕土器の特徴は、器厚が厚く外面には粗い条痕が施文される点にある。円筒形条痕文土器との相違点は、この条痕の施文の状態や器面の色調、焼成にある。胴部の資料は、すべて膨らまず直線的な形態をなすことから、円筒形かもしくはそれに近い器形が想定できる。

以下、資料について個別に説明を加えていく。

31は、ⅡB-13、14、19区で出土した胴部の接合資料である。外面の施文は、粗く浅い貝殻条痕を横方向、斜方向に施す。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、

第三章 調査の成果



第70図 遺物分布図（条痕土器）

内外面とも暗赤褐色～暗褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石、角セン石の砂粒が混入され、中には3mmを越える粒子も観察される。器厚は、17mmを測る。

32は、ⅡB-19区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、粗く浅い貝殻条痕を横方向に施す。内面の調整は、器面が荒れているため観察できない。器面の色調は、外面が赤褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石の砂粒が混入されている。器厚は、14mm以上である。

33は、ⅡB-14区で出土した胴部の資料である。内面は、剥落していて観察できないが、外面には横方向の貝殻条痕が施されている。器面の色調は、外面が赤褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石の砂粒が混入されている。器厚は、10mm以上である。

34は、ⅡB-19区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、粗く浅い貝殻条痕を横方向に施す。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。また内面には、煤の付着が観察される。

器面の色調は、外面が赤褐色で内面はすすの付着で黒色を呈し、焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英、長石、角セン石の砂粒が混入されている。器厚は、14mmを測る。

35は、VD-2区で検出された胴部の一括資料である。器形は、やや反りぎみである。

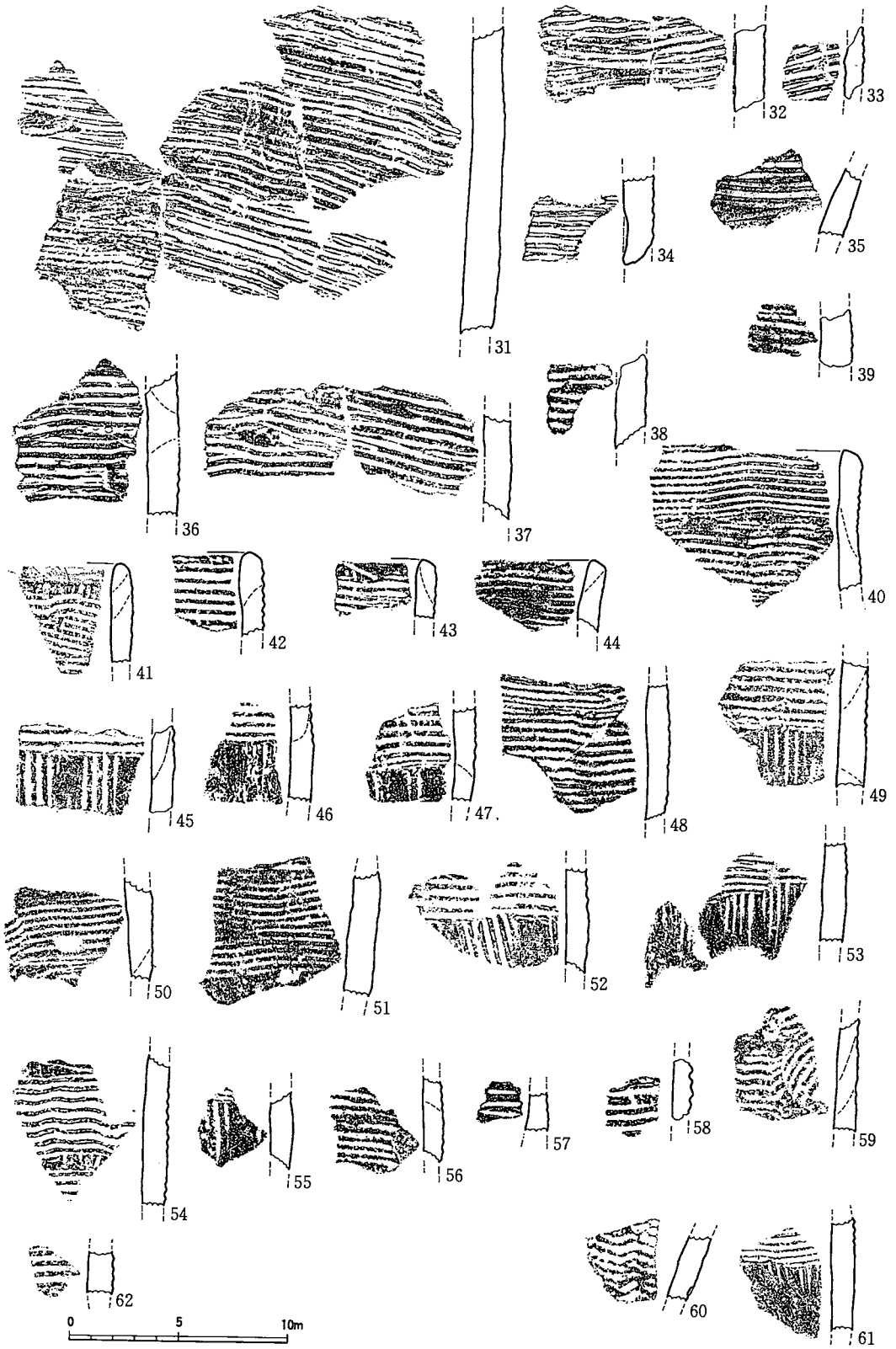
外面の施文は、粗く浅い貝殻条痕を横方向に施す。内面の調整は、ナデ整形による。器面の色調は、外面が褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石の砂粒が混入されている。器厚は、11mmを測る。

36は、ⅡB-14、19区で出土した胴部の接合資料である。外面の施文は、粗く浅い貝殻条痕を横方向に施す。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも赤褐色、暗褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、角セン石を混入している。器厚は、15mmを測る。

37は、ⅡB-9、17区で出土した胴部の接合資料である。外面の施文は、粗く浅い貝殻条痕を施す。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。また、内面にわずかに煤の付着が観察される。器面の色調は、外面が赤褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、角セン石が混入されている。器厚は、13mmを測る。

38は、ⅡB-14区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、粗く浅い貝殻条痕を施す。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも赤褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、角セン石の砂粒が混入されている。器厚は、14mmを測る。

39は、ⅡB-15区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、粗く浅い貝殻条痕を施す。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。器面の色調は、外面が淡赤褐色、内面が赤褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、角セン石の砂粒が混入されている。器厚は、15mmを測る。



第71図 土器実測図

円筒形条痕文土器（第71図40～62）

円筒形条痕文土器は、21点検出された。この円筒形条痕文土器は、口縁部付近に文様帯をもつ土器で、貝殻による条線文を施文する一群である。

その分布は、ⅢB区～ⅣB区にかけて集中する傾向が窺える（第72図）。この分布の在り方は、他の土器型式の空白を埋める状態で、集石遺構に近い地点にある。また、これらの土器群は層位的にはV層～Ⅵa層で検出されたが、その中心はV層にあるものと考えられる。

以下資料について個別に説明を加えていく。

40は、ⅢB-6区で出土した口縁部の資料である。器形は、円筒形の深鉢形を呈し口縁部近くでやや反りぎみになる。また、口唇部は丁寧なナデ整形により平坦に作り出され、やや外器面側に傾く。外面の施文は、条線文を横方向に深く施す。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、角セン石の砂粒が混入されている。器厚は、10mmを測る。

41は、ⅣB-16区で出土した口縁部の資料である。口縁部の器形は直口し、口唇部は丁寧なナデ整形により丸く作り出されている。外面の施文は、縦横2方向に施されている。はじめに縦方向の深い条線文を施し、次にその文様に重ねて横方向の深い条線文を施している。

器面の色調は、内外面とも灰褐色で焼成は良好である。また、外面にわずかに煤の付着が観察される。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。胎土には、微細な石英、長石の砂粒が混入されている。器厚は、10mmを測る。

42は、ⅢB-11区で出土した口縁部の資料である。口縁部の器形は直口し、口唇部は丁寧なナデ整形により丸く作り出されている。外面の施文は、41と同様で縦横2方向に施されている。はじめに施文される縦方向の条線文は浅く、それに重ねて横方向の深い条線文を施している。器面の色調は、外面が暗褐色、内面が暗赤褐色で焼成は良好である。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。胎土には、1～2mm大の石英、長石を混入している。器厚は、11mmを測る。

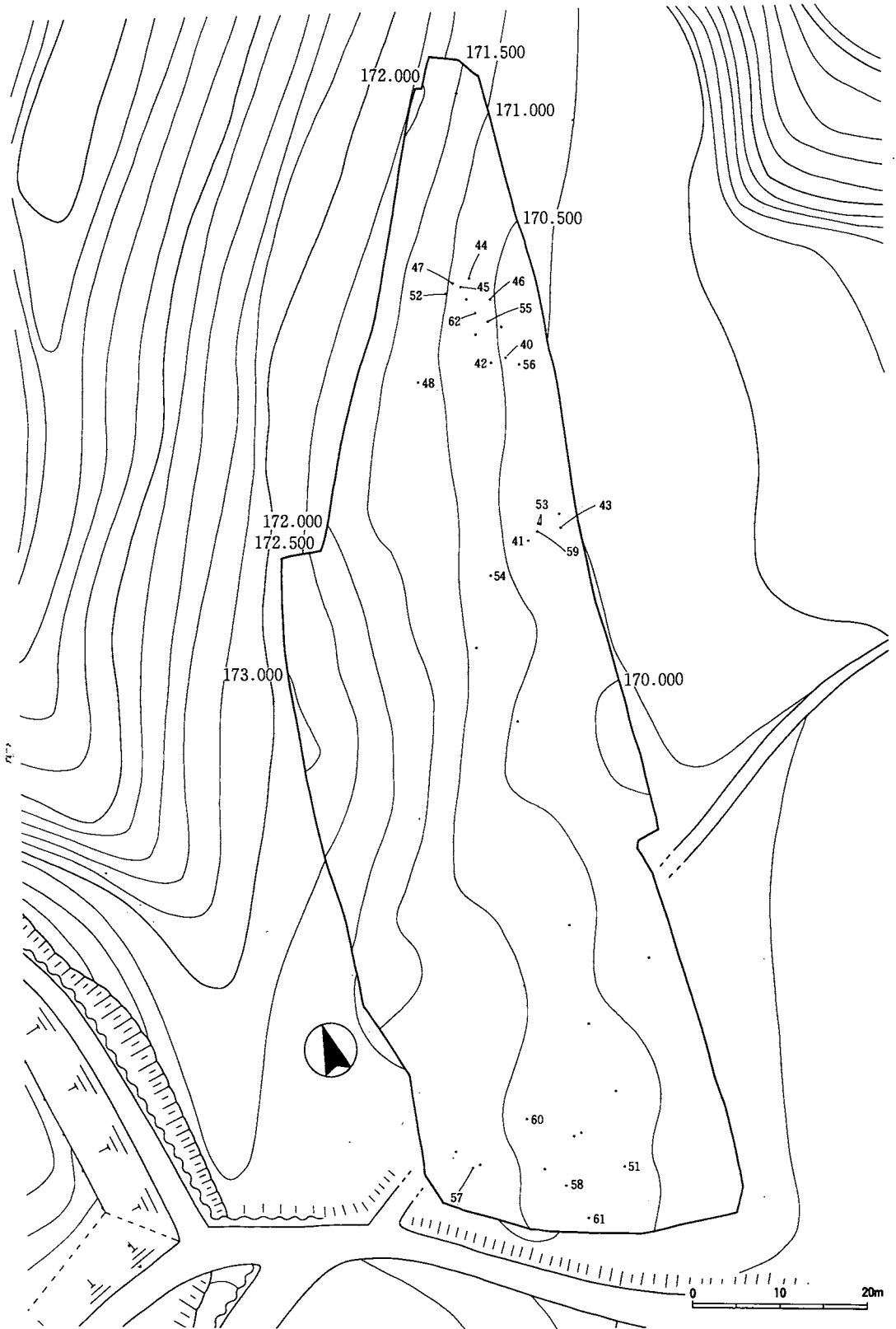
43は、ⅣB-11区で出土した口縁部の資料である。口縁部の器形は直口し、口唇部は丁寧なナデ整形により丸く作り出されている。外面の施文は、浅い縦方向の条線文を施した後、重ねて横方向の深い条線文を施している。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。

器面の色調は、内外面とも灰褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

44は、ⅡB-9区で出土した口縁部の資料である。口縁部の器形は、やや反りぎみに作り出されている。口唇部は、丁寧なナデ整形により平坦に作り出され、やや外器面側に傾く。

外面の施文は、横方向の深い条線文を施す。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、10mmを測る。

第三章 調査の成果



第72図 遺物分布図（円筒形条痕文土器）

45は、ⅡB-14区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、縦横2方向の条線文が施されている。その先後関係は、縦方向の条線文を施した後、部分的に条線文をナデ消して3本単位にまとめている。その後、重ねて横方向の条線文を施している。

内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも暗赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英の砂粒を混入している。器厚は、10mmを測る。

46は、ⅡB-10区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、縦横2方向の条線文を施す。その先後関係は、45と同様で「縦方向施文—横方向施文」である。しかし、縦方向施文は、その後ナデ消されわずかに確認できる程度である。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。

器面の色調は、外面が赤褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英の砂粒を混入している。器厚は、11mmを測る。

47は、ⅡB-14区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、縦横2方向の条線文を施す。その施文の先後関係は、46と類似する。また、外面にわずかに煤の付着が観察される。

内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、外面が暗赤褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英の砂粒が混入されている。器厚は、10mmを測る。

48は、ⅢB-21区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、深い横方向の条線文である。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石、角セン石を含んでいる。器厚は、11mmを測る。

49は、ⅢB-7区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、縦横2方向で45～47と類似する。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。器面の色調は、外面が暗赤褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英の砂粒を混入している。器厚は、13mmを測る。

50は、ⅢB-6区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、横方向の条線文を施す。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、角セン石の砂粒を含んでいる。器厚は、12mmを測る。

51は、ⅦC-14区で出土した胴部の資料である。器面が磨耗して観察が困難であるが、外面の施文は横方向の条線文を施す。内面の調整は、ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成はやや良好である。胎土には、微細な石英、角セン石の砂粒が含まれている。器厚は、13mmを測る。

52は、ⅡB-14、15区で出土した胴部の接合資料である。外面の施文は、斜方向と横方向の2種類が施されている。その施文の先後関係は、「斜方向—横方向」である。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。器面の色調は、外面が暗赤褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。

胎土には、1mm大の石英、長石を混入している。器厚は、10mmを測る。

53は、ⅣB-11区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、縦横2方向の条線文を施す。その施文の先後関係は、「縦方向—横方向」である。また、この縦方向施文は破片の下部迄で、

以下は施文されていない。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、石英、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、11mmを測る。

54は、IVB-22区で出土した胴部の資料である。外面の施文は縦横2方向に施され、その先後関係は「縦方向一横方向」である。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、外面が焦茶色、内面が淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、角セン石が混入されている。器厚は、12mmを測る。

55は、IIB-10区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、条線文が縦横2方向に施される。その施文の先後関係は「縦方向一横方向」である。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。器面の色調は、外面が赤褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、1～3mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、11mmを測る。

56は、IIIB-7区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、条線文を横方向に施す。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、石英、長石、角セン石がわずかに含まれている。器厚は、9mmを測る。

57は、VIID-7区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、条線文を横方向に施す。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、外面が淡褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。器厚は、11mmを測る。

58は、VIIC-24区で出土した胴部の資料である。外面には、深い横方向の条線文を施文する。内面の調整は、ナデ整形による。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、長石、角セン石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

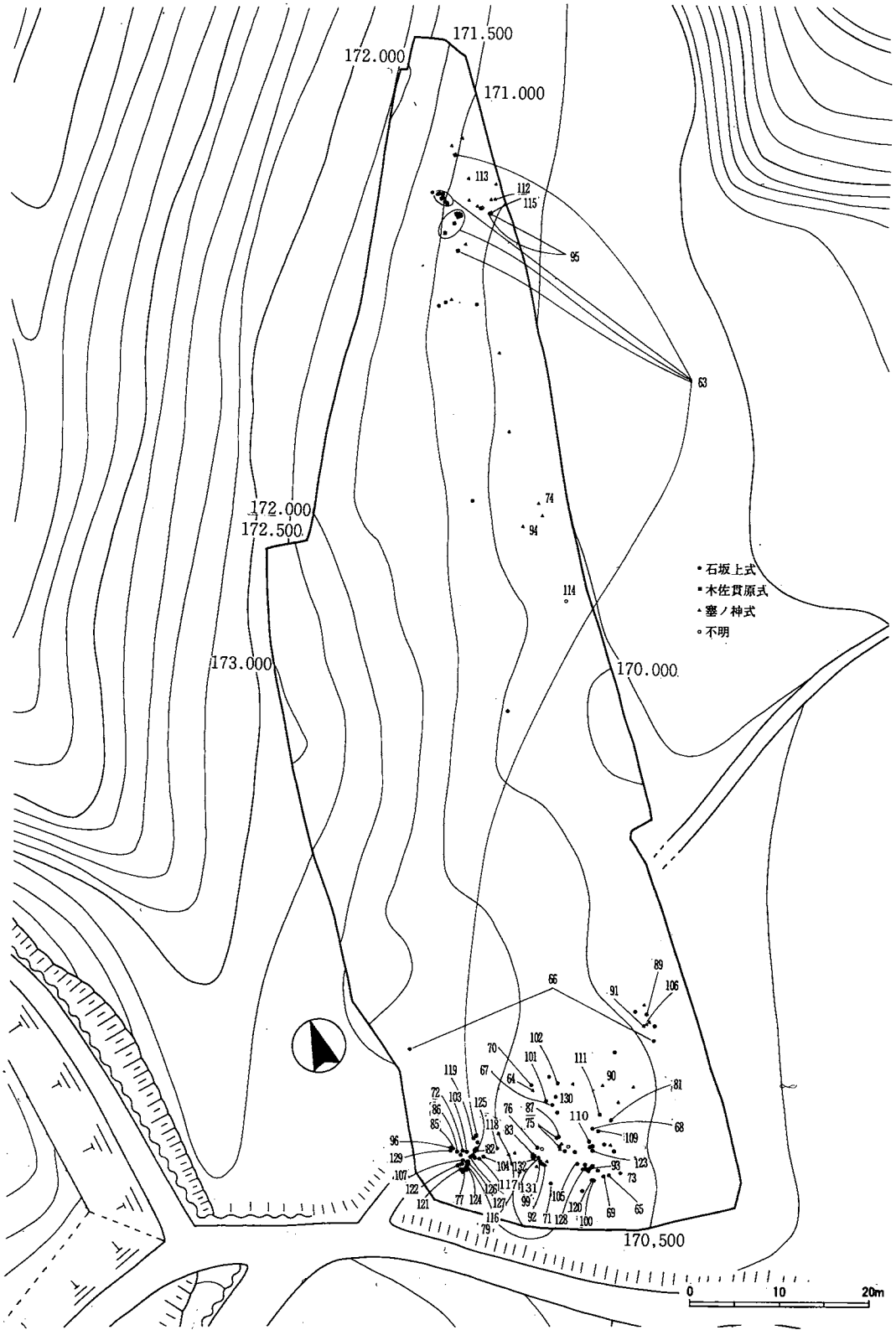
59は、IVB-11区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、横方向と斜方向の2方向の条線文を施す。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、外面が褐色、内面が黒褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、10mmを測る。

60は、VIIC-22区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、横方向の条線文を間延びした山形に施す。内面の調整は、丁寧なナデ整形による。器面の色調は、外面が淡赤褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、角セン石の砂粒がわずかに含まれている。器厚は、11mmを測る。

61は、VIC-1区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、縦横2方向の条線文を施す。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、11mmを測る。

62は、IIB-15区で出土した胴部の資料である。外面の施文は、横方向の条線文である。内面の調整は、極めて丁寧なナデ整形による。器面の色調は、内外面とも赤褐色で焼成は良好で

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第73図 遺物分布図（塞ノ神式土器）

第9表 塞ノ神式(系)土器形態分類表

形態分類		文 様 構 成	
		口 縁 部 ~ 頭 部	頭 部 ~ 底 部
1	a	貝殻による連続刺突文を横位、山形に施文する。	凹線文間に燃糸文、縄文を充填させる。
	b	貝殻による連続刺突文を横位、山形に施文し、胴部文様が頭部~口縁部にかけても施文される。	凹線文間に燃糸文、縄文を充填させる。
2		曲線や直線の凹線文(沈線文)によって幾何学的な文様を構成する。	縦位に施文された燃糸文帯と無文帯を交互に施文する。また、その上から凹線文を横位、曲線的に施文する。
3		数条の凹線文を横位もしくは山形や曲線的に施文し、その凹線文の上下に連続刺突文を施文する。	凹線文間に燃糸文、縄文を充填させる。

ある。胎土には、微細な石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、12mmを測る。

塞ノ神式土器(第74図63~第76図133)

塞ノ神式(系)土器は、109点検出された。その分布は、調査区内のほぼ全域に広がるが、その中心は大きく南北2つに集中する傾向が窺える(第73図)。また、2つの集中部では、塞ノ神式土器の文様構成に違いがみられる。北側では白鳥平A遺跡において3類とした土器が集中し、底部を欠失しているがほぼ全体の形状が把握できる状態で復元された。南側では2類とした土器が集中している。1類として分類した土器は、南北両地点で検出されるが、その個体数は少ない。

以下資料について個別に説明を加えていくが、塞ノ神土器の文様構成の違いによる分類については、白鳥平A遺跡の記述(第9表)に合わせて説明を行なう。

63は、1破片(胴部下半で底部近くの小破片)のみⅦC区で検出されたが、その他はすべてⅡB区に集中して検出された。この資料は、底部を欠失しているがほぼ全体の形状が把握できる唯一の接合資料である。

全体の器形は、円筒形で頸部及び底部付近でやや窄まる胴部に、ラップ状に開く口縁部という形状を呈する。その文様構成は、口縁部で3条単位の凹線文を横走させ、その上下に貝殻による連続刺突文を施文する。胴部では、幾何学的に区画された凹線文間に燃糸文を充填させる。3類に分類できる資料である。口径は21.7cm、残存する器高は20.3cmである。

内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成はやや良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒を混入している。

64は、ⅦC-21区で検出された口縁部の資料である。その文様は、貝殻による連続刺突文を

横走施文している。1 a 類に分類できる資料である。

内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、外面が暗赤褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、7.5mmを測る。

65は、VII C-19区で検出された口縁部の資料である。その文様は、2条単位の凹線文を横走施文する。その上下に貝殻による連続刺突文は施文されない。口唇部は平坦に作り出され、同一の施文原体による2条単位の刻み目が施文されている。2、3類の口縁部と考えられるが胴部資料との接合ができず、全体の文様構成が把握できないため、類別は難しい。

しかし、出土地点が2類の集中部であることから、2類の口縁部資料である可能性が高い。

内面の調整は、極めて丁寧なナデによる。器面の色調は、外面が褐色、内面が淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な長石、角セン石の砂粒がわずかに観察される。器厚は、7mmを測る。

66は、VI D-9区、VII C-1区で検出された口縁部の接合資料である。その文様は、3条単位の凹線文を曲線的に施文し、その上下に施文原体による刺突連続文を施文する。口唇部にも同一の施文原体によって刻み目を施している。65と同様の理由から2類の口縁部資料と考えられる。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、外面が褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英、長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、8mmを測る。

67は、VII C-17区で検出された口縁部の資料である。その文様は、2条以上を単位とする凹線文を斜走施文する。この資料も65と同様に凹線文の上下には、施文原体による刺突連続文は施文されない。しかし、口唇部の外器面側に刻み目を施している点で65と異なる。

内面の調整は、極めて丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、わずかに長石の砂粒を含んでいる。器厚は、7mmを測る。

68は、VII C-13区で検出された口縁部の資料である。3条単位の凹線文を斜走施文する点で67と類似するが、この凹線文の下に刺突連続文が施される。口唇部への施文は、67と同様で施文原体による刻み目を施している。内面の調整は、丁寧なナデによるが内器面には凹凸がみられる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、わずかに長石の砂粒を含んでいる。器厚は、10mmを測る。

69は、VII C-19区で検出された口縁部の資料である。その文様は、横走と曲線に施文された凹線文と刺突連続文で構成されている。また、口唇部の外器面側に施文原体による深い刻み目を施している。口縁部の器形は、途中屈曲する形態を呈する。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、12mmを測る。

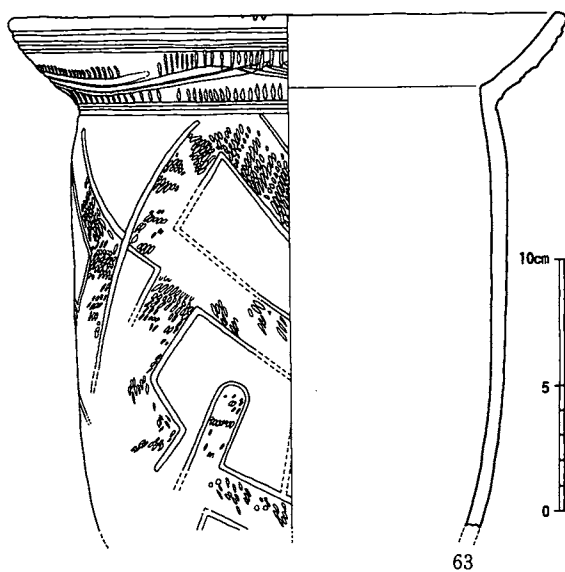
70は、ⅦC-21区で検出された口縁部の資料である。口唇部の外器面側に施文原体による刻み目を施し、その他は施文されない。内外面とも調整は、極めて丁寧なナデによる。器面の色調は、外面が褐色、内面が淡褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、8mmを測る。

71は、ⅦC-24区で検出された口縁部の資料である。その文様は、1条単位の沈線文とその上下に刺突連続文を施文する。内面の調整は、極めて丁寧なナデによる。器面の色調は、外面が暗褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な黒耀石、角セン石の粒子が混入され、わずかに長石の砂粒も観察される。器厚は、8mmを測る。

72は、ⅦD-7区で検出された口縁部の資料である。1条の凹線文を横走施文し、口縁部上部に施文原体による刻み目を施す。内面の調整は、極めて丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な黒耀石、長石、角セン石の粒子が観察される。器厚は、9mmを測る。

73は、ⅦC-14区で検出された口縁部の資料である。その文様は、2条単位の凹線文を横走施文し、口縁部上部には施文原体による刻み目を施す。内面の調整は、極めて丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な長石、角セン石の粒子をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

74は、ⅥB-11区で検出された口縁部の資料である。その文様は、口縁部上部の施文原体による刻み目と、凹線文間に充填された燃糸文によって構成されている。1b類に分類できる資



第74図 土器実測図

料である。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、外面が淡褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、長石の砂粒がわずかに観察される。器厚は、7mmを測る。

75は、VII C-18、23区で検出された頸部から口縁部にかけての接合資料である。その文様は、頸部に3条の凹線文を横走施文し、口縁部では6条の凹線文を斜走施文する。内面の調整は、極めて丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な黒耀石、角セン石の粒子を混入し、わずかに長石の砂粒も観察される。器厚は、9mmを測る。

76は、VII C-23区で検出された口縁部破片で、口唇部付近を欠失する資料である。その文様は、3条の凹線文を横走施文する。内面の調整は丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、8mmを測る。

77は、VII D-7区で検出された口縁部破片で、口唇部付近を欠失する資料である。その文様は、3条の凹線文を斜走施文する。また、頸部には1条の凹線文を横走施文する。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、わずかに石英、長石の砂粒を含んでいる。器厚は、8mmを測る。

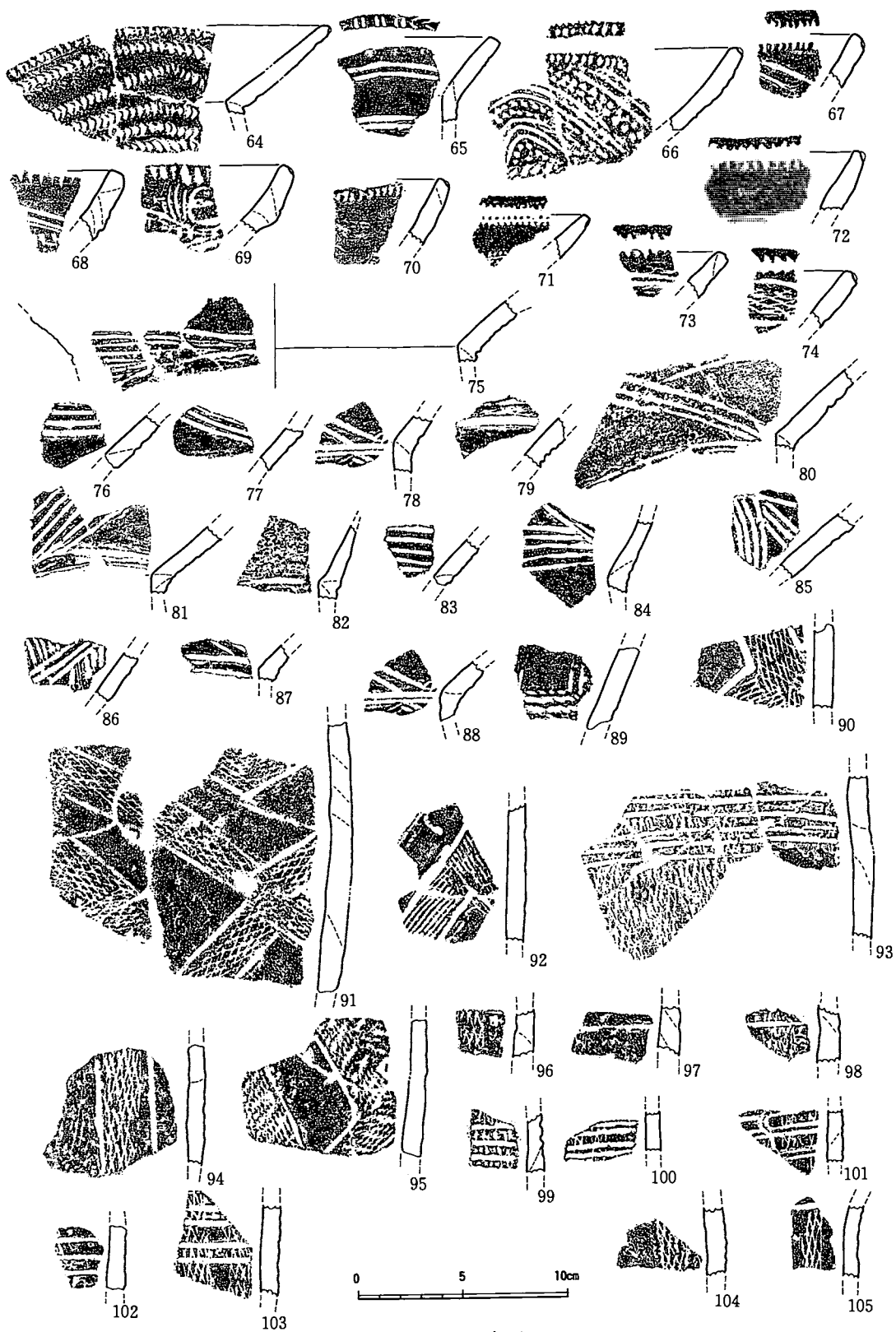
78は、VII C区で検出した一括資料である。資料は、頸部から口縁部にかけての破片で、口縁部の大半を欠失している。その文様は、斜走、横走の凹線文施文である。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、わずかに長石の砂粒を含んでいる。器厚は、7mmを測る。

79は、VII D-3区で検出された資料である。口縁部の破片で、口唇部付近を欠失する。その文様は、凹線文間に撚糸文を充填する。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、外面が淡赤褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な長石の粒子を混入している。器厚は、9mmを測る。

80は、VII C区で検出された一括資料である。この資料は、頸部から口縁部にかけての破片で、口唇部は欠失している。その文様は、斜走、横走の凹線文で構成されている。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、外面が淡赤褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、石英、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、8mmを測る。

81は、VII C-13区で検出された頸部から口縁部にかけての資料で、口唇部を欠失している。その文様は、頸部に凹線文を横走施文し、口縁部には斜走施文する。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、黒耀石、長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、9mmを測る。

82は、VII D-7区で検出された頸部から口縁部にかけての資料で、口唇部を欠失している。頸部に1条の凹線文を横走施文する。口縁部には明確な文様は観察されない。内面の調整は、



第75図 土器実測図

丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、9mmを測る。

83は、VII C-23区で検出された口縁部の資料で、口唇部を欠失している。その文様は、5条の凹線文を横走施文する。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、石英、長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、8mmを測る。

84は、VII C区で検出した一括資料で、頸部から口縁部にかけての破片で口唇部を欠失している。その文様は、頸部に横走する凹線文を施文し、口縁部には5条の凹線文を斜走施文する。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。器厚は、8mmを測る。

85は、VII D-7区で検出された口縁部の資料で、口唇部を欠失している。その文様は、斜走する異傾の凹線文で構成されている。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、外面が淡褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、8mmを測る。

86は、VII D-7区で検出された資料で、85と文様構成、器面の色調、胎土、焼成は類似する。器厚は、7mmを測る。

87は、VII C-18区で検出された頸部の資料である。その文様は、頸部に横走する3条の凹線文を施文し、口縁部には斜走する凹線文が2条観察される。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、角セン石をわずかに含んでいる。器厚は、8mmを測る。

88は、VII C区で検出された頸部の一括資料である。その文様は、頸部に横走する2条の凹線文を施文し、口縁部には2条単位の斜走する凹線文を施す。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、淡灰褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、角セン石をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

89は、VI C-5区で検出された口縁部の資料で、口唇部を欠失している。その文様は、縦横2方向の凹線文により構成される。横方向の凹線文は、縦方向の施文と状態が異なり施文原体による連続する押し引き状の施文によって凹線文が構成されている。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な長石、角セン石をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

90は、VII C-12区で検出された胴部の資料である。その文様は、幾何学的に区画した凹線文間に燃糸文を充填させる文様構成である。1類ないし3類の胴部資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも暗赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英、長石の砂粒を混入し、わずかに微細な角セン石も観察される。器厚は、9mmを

測る。

91は、ⅦC-1区で検出された胴部の資料である。その文様は、幾何学的に区画した凹線文間に捺糸文を充填させる文様構成である。1類ないし3類の胴部資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英、長石を混入している。器厚は、12mmを測る。

92は、ⅦC-23区で検出された胴部の資料である。その文様は、幾何学的に区画した凹線文間に捺糸文を充填させる文様構成である。1類ないし3類の胴部資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英、長石を混入している。器厚は、9mmを測る。

93は、ⅦD-7区で検出された胴部の接合資料である。その文様は、捺糸文帯を縦位に施文し、その上から6条以上の横走る凹線文を施す。2類に分類できる胴部資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。器厚は、10mmを測る。

94は、ⅣB-16区で検出された胴部資料である。その文様は、区画した凹線文間に捺糸文を充填させる文様構成である。1類ないし3類の胴部資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡赤褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、1～3mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、9mmを測る。

95は、ⅡB-3区で検出された胴部の資料である。その文様は、幾何学的に区画した凹線文間に捺糸文を充填させる文様構成である。1類ないし3類の胴部資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石をわずかに含んでいる。器厚は、9.5mmを測る。

96は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、捺糸文帯を縦位に施文し、破片上部に1条の横走る凹線文が観察される。2類に分類できる胴部資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が暗褐色、内面が淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒を混入している。器厚は、9.5mmを測る。

97は、ⅦD区で検出された胴部の一括資料である。その文様は、捺糸文帯を縦位に施文しその上から横走る1条の凹線文を施す。2類に分類できる胴部資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

98は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、捺糸文帯を縦位に施文し、その上から1条の横走る凹線文を施す。2類に分類できる胴部の資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が褐色、内面が淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、11mmを測る。

99は、ⅦC-23区で検出された胴部の資料である。その文様は、縦位に施文された撚糸文帯の上から3条の凹線文を施す。2類に分類できる胴部の資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、石英、長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、8.5mmを測る。

100は、ⅦC-19区で検出された胴部の資料である。その文様は、縦位に施文された撚糸文帯の上から横走する4条の凹線文を施す。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、長石の砂粒を含んでいる。器厚は、8mmを測る。

101は、ⅦC-14区で検出された胴部の資料である。その文様は、縦位に施文された撚糸文帯と、その上から2条単位で施文された横走及び曲線の凹線文により構成される。2類に分類できる胴部の資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、長石の砂粒を含んでいる。器厚は、8mmを測る。

この資料は、文様構成、器面の色調、焼成、胎土等の点で、100と類似しており両者は同一固体の可能性が高い。

102は、ⅦC-16区で検出された胴部の資料である。その文様は、縦位に施文された撚糸文帯の上から3条の横走する凹線文を施す。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が煤の付着により黒褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

103は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、縦位に施文された撚糸文帯と、その上から2条を単位とし4条の凹線文を横走施文する。2類に分類できる胴部の資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

104は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。2類に分類できる胴部の資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

105は、ⅦC-19区で検出された胴部の資料である。その文様は、縦位に施文された撚糸文帯の上に横走する凹線文が施文される。2類に分類できる胴部の資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が黒褐色、内面が赤褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石の砂粒を含んでいる。器厚は、7mmを測る。

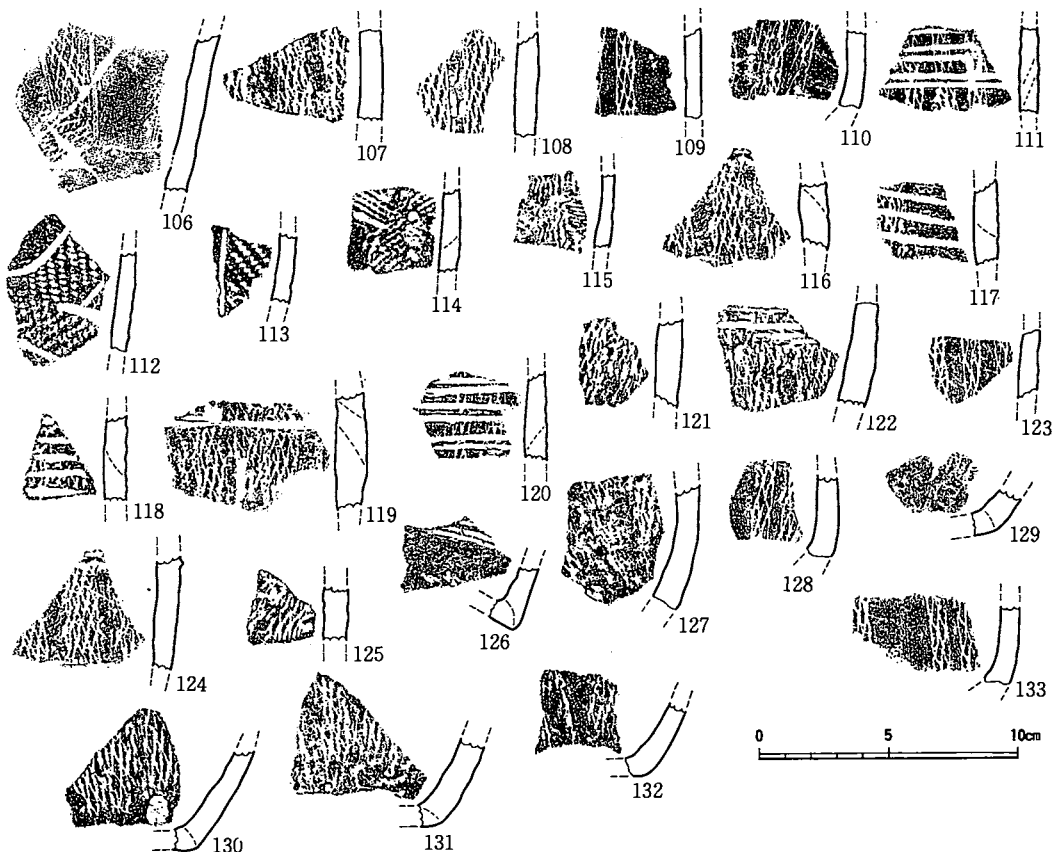
106は、ⅦC-1区で検出された胴部の資料である。その文様は、幾何学的に区画した凹線文間に撚糸文を充填させる。1類ないし3類の胴部資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデに

よる。器面の色調は、外面が赤褐色、内面が淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、9mmを測る。

107は、VII D-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡灰褐色、内面が淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

108は、VII C区で検出された胴部の一括資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

109は、VII C-13区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が赤褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒を混入し、1mm以下の角セン石の砂粒もわずかに観察される。器厚は、6mmを測る。



第76図 土器実測図

110は、ⅦC-18区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。破片の形状から底部に近い資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、角セン石、黒雲母の砂粒を混入している。器厚は、7mmを測る。

111は、ⅦC-12区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文し、その上から2条単位の凹線文を横位、曲線に施す。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が褐色、内面が赤褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、角セン石を混入している。器厚は、7mmを測る。

112は、ⅡB-2区で検出された胴部の資料である。その文様は、幾何学的に区画された凹線文間に縄文を充填する。1類か3類の資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、6.5mmを測る。

113は、ⅡB-2区で検出された胴部の資料である。その文様は、区画したと考えられる凹線文と縄文が観察され、112と同様の文様構成をなすものと思われる。内面の調整、器面の色調、焼成、胎土、器厚についても、112と同様の観察結果が得られた。1類か3類に分類できる資料である。

114は、ⅣB-14区で検出された胴部の資料である。その文様は、異方向の撚糸文を施文し区画凹線文は施文されない。このことから、2類に近い資料であると考えられる。しかし、このような文様構成の資料は、115と合わせて2点のみである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が褐色、内面が淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒を混入し、1mm以下の角セン石もわずかに観察される。器厚は、8mmを測る。

115は、ⅡB-2区で検出された胴部の資料である。その文様は、異方向の撚糸文を施文し区画凹線文は施されない点で114と共通する。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、7mmを測る。

116は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、縦位に撚糸文帯を施文し、その上から横位の凹線文を3条施す。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が褐色、内面が淡褐色で焼成は良好である。胎土には、石英、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、11mmを測る。

117は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文し、その上から3条の凹線文を横位に施す。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、9.5mmを測る。

118は、ⅦD-2区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文し、その上から4条の凹線文を横位に施す。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、角セン石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

119は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文し、その上から1条の凹線文を横位に施す。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が暗褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、13mmを測る。

120は、ⅦC-19区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文し、その上から2条単位の横位の凹線文を施す。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、角セン石、黒雲母の砂粒を混入している。器厚は、9mmを測る。

121は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

122は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文し、その上から横位の凹線文が3条施されている。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、角セン石をわずかに含んでいる。器厚は、11mmを測る。

123は、ⅦC-18区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒を混入し、1mm以下の角セン石もわずかに観察される。器厚は、7.5mmを測る。

124は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、縦位に撚糸文帯を施文し、破片上下端に1条ずつの横位の沈線が観察される。2類に分類できる資料である。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、石英、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

125は、ⅦD-7区で検出された胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、9.5mmを測る。

126は、ⅦD-7区で検出された底部近くの胴部の資料である。その文様は、横位の凹線文が3条観察される。内面の調整は、ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好

である。胎土には、1mm以下の石英の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、8.5mmを測る。

127は、VII D-7区で検出された底部に近い胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の石英、角セン石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

128は、VII C-19区で検出された底部近くの胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、8.5mmを測る。

129は、VII D-7区で検出された底部近くの胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、外面が暗褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

130は、VII C-17区で検出された底部近くの胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒が混入され、わずかではあるが黒耀石、角セン石も観察される。器厚は、9mmを測る。

131は、VII C-23区で検出された底部近くの胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒が混入され、わずかではあるが黒耀石、角セン石も観察される。器厚は、10.5mmを測る。この資料は、施文の状態、器面の色調、焼成、胎土等が130と類似する。このことから両者は、同一固体の可能性もある。

132は、VII C-23区で検出された底部近くの胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1~2mm大の石英粒を混入している。器厚は、9.5mmを測る。

133は、VII C-19区で検出された底部近くの胴部の資料である。その文様は、撚糸文帯を縦位に施文する。内面の調整は、丁寧なナデによる。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒を混入している。器厚は、9mmを測る。

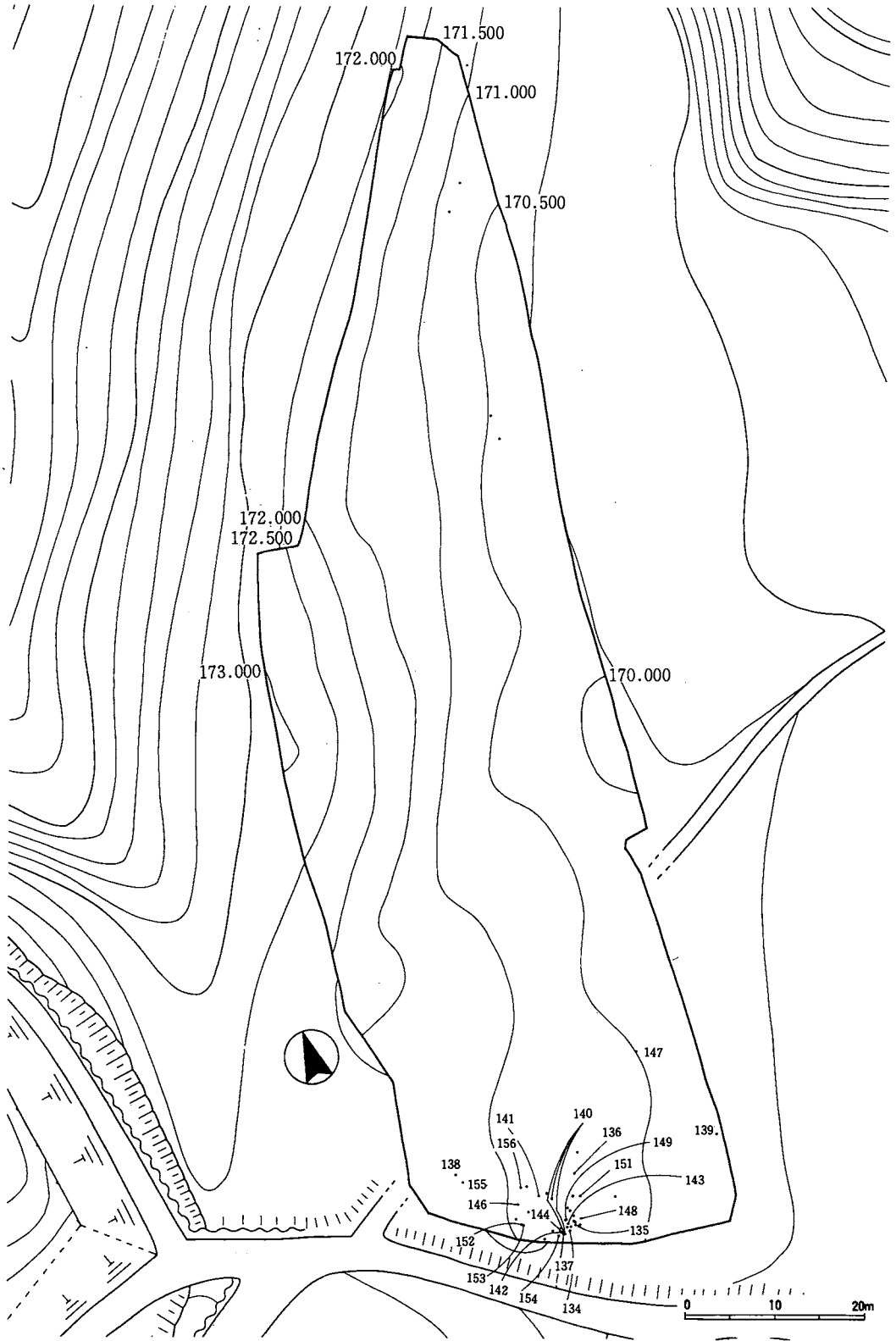
縄文土器 (第78図134~156)

縄文土器は、34点出土した。その分布は、調査区南側のVII C区に集中する (第77図)。

以下、資料について個別に説明を加えていく。

134は、VII C-25区で検出された口縁部の資料である。器形は、大きく外反する。施文は、内外面及び口唇部にみられる。その原体は、RLである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。

第三章 調査の成果



第77図 遺物分布図（縄文土器）

器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の石英、長石の砂粒が含まれている。器厚は、10mmを測る。

135は、VII C-25区で検出された口縁部の資料である。口縁部は、大きく外反する。施文は、内外面及び口唇部にみられる。その原体は、RLである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

136は、VII C-18区で検出された口縁部の資料である。口縁部は、大きく外反する。施文は、内外面に施され、口唇部への加飾はみられない。その文様は、外面で横方向の縄文施文とその上から斜方向の縄文施文を行なう。内面では、外面の斜方向の縄文施文と同傾の施文を行なう。その原体は、LRである。内面の調整は、ナデによる。器面の色調は、内外面とも赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石、角セン石の砂粒を混入している。器厚は、10mmを測る。

137は、VII C-25区で検出された口縁部の資料である。その器形は、大きく外反する。施文は、内外面及び口唇部にみられる。その原体は、LRである。器面の色調は、内外面とも赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の長石、角セン石の砂粒を含んでいる。器厚は、9mmを測る。

138は、VII D-7区で検出された口縁部の資料である。その器形は、大きく外反する。施文は、内外面にみられる。その原体は、LRである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が赤褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石、角セン石の砂粒を含んでいる。器厚は、11mmを測る。

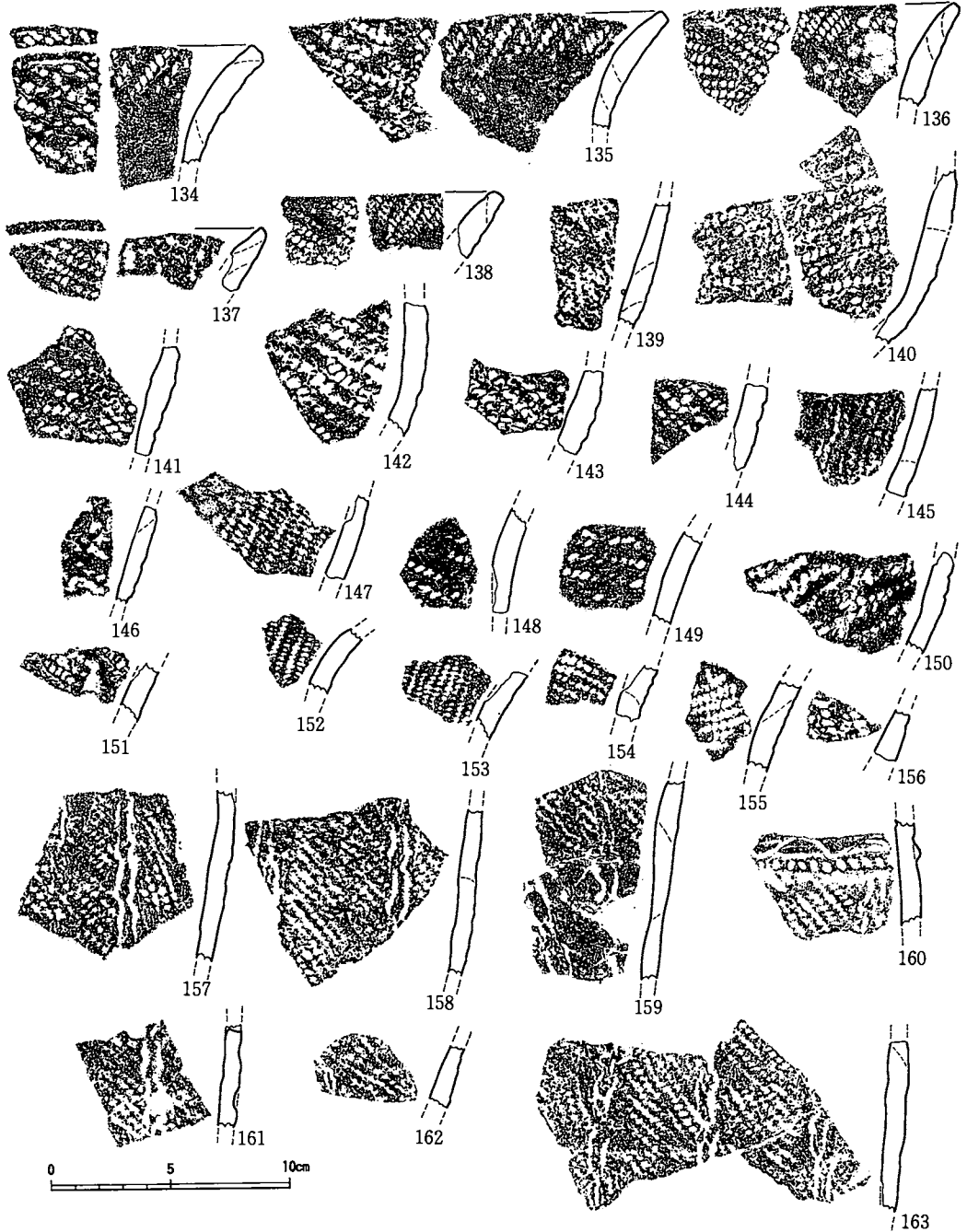
139は、VII B-24区で検出された胴部の資料である。文様は、縦方向と斜方向の縄文が観察される。その原体は、RLである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、1～3mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

140は、VII C-24、25区で検出された胴部の接合資料である。文様は、横方向にやや間延びした縄文が施されている。その原体は、RLである。内面の調整は、ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、11mmを測る。

141は、VII C-24区で検出された胴部の資料である。文様は、横方向にやや間延びした縄文が施されている。その原体は、RLである。内面の調整はナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

142は、VII C-25区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向にやや間延びした縄文を

施す。その原体は、RLである。内面の調整は、ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1～3mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。



第78図 土器実測図

143は、ⅦC-25区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向にやや間延びした縄文を施文する。その原体は、RLである。内面の調整は、ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、11mmを測る。

144は、ⅦC-25区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向にやや間延びした縄文を施文する。その原体は、RLである。内面の調整は、ナデによる。器面の色調は、外面が淡褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の石英、長石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

145は、ⅢB-14区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向の縄文を密に施文する。その原体は、RLである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡赤褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

146は、ⅦD-4区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向にやや間延びした縄文を施文する。その原体は、RLである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、7mmを測る。

147は、ⅦC-1区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向の縄文を密に施文する。その原体は、LRである。内面の調整は、横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、微細な石英、長石、黒耀石の砂粒が含まれている。器厚は、8mmを測る。

148は、ⅦC-20区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向のやや間延びした縄文が施されている。その原体は、LRである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9.5mmを測る。

149は、ⅦC-25区で検出された胴部の資料である。文様は、横方向のやや間延びした縄文が施されている。その原体は、LRである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面は煤の付着により暗褐色、内面が淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

150は、ⅦC-25区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向にやや間延びした縄文を施している。その原体は、LRである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡褐色、内面が暗褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

151は、ⅦC-19区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向の縄文を密に施文する。

その原体は、RLである。内面の調整は、横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡赤褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の長石、角セン石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

152は、VII D-4区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向に細かな縄文を密に施文する。その原体は、RLである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色である。胎土には、微細な長石、角セン石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、8mmを測る。

153は、VII D-4区で検出された胴部の資料である。文様は、153と類似し斜方向に細かな縄文を密に施文する。その原体は、RLである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の長石、角セン石の砂粒を含んでいる。器厚は、9mmを測る。

154は、VII C-25区で検出された胴部の資料である。文様は、横方向の細かな縄文を密に施文する。その原体は、LRである。内面の調整は、横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の長石、角セン石を含んでいる。器厚は、10mmを測る。

155は、VII D-7区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向の細かな縄文を密に施文する。その原体は、LRである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡赤褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石、角セン石の砂粒をわずかに含んでいる。器厚は、10mmを測る。

156は、VII D-4区で検出された胴部の資料である。文様は、斜方向にやや間延びした縄文を施文している。その原体は、RLである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。

平椀式土器（第78図157～163）

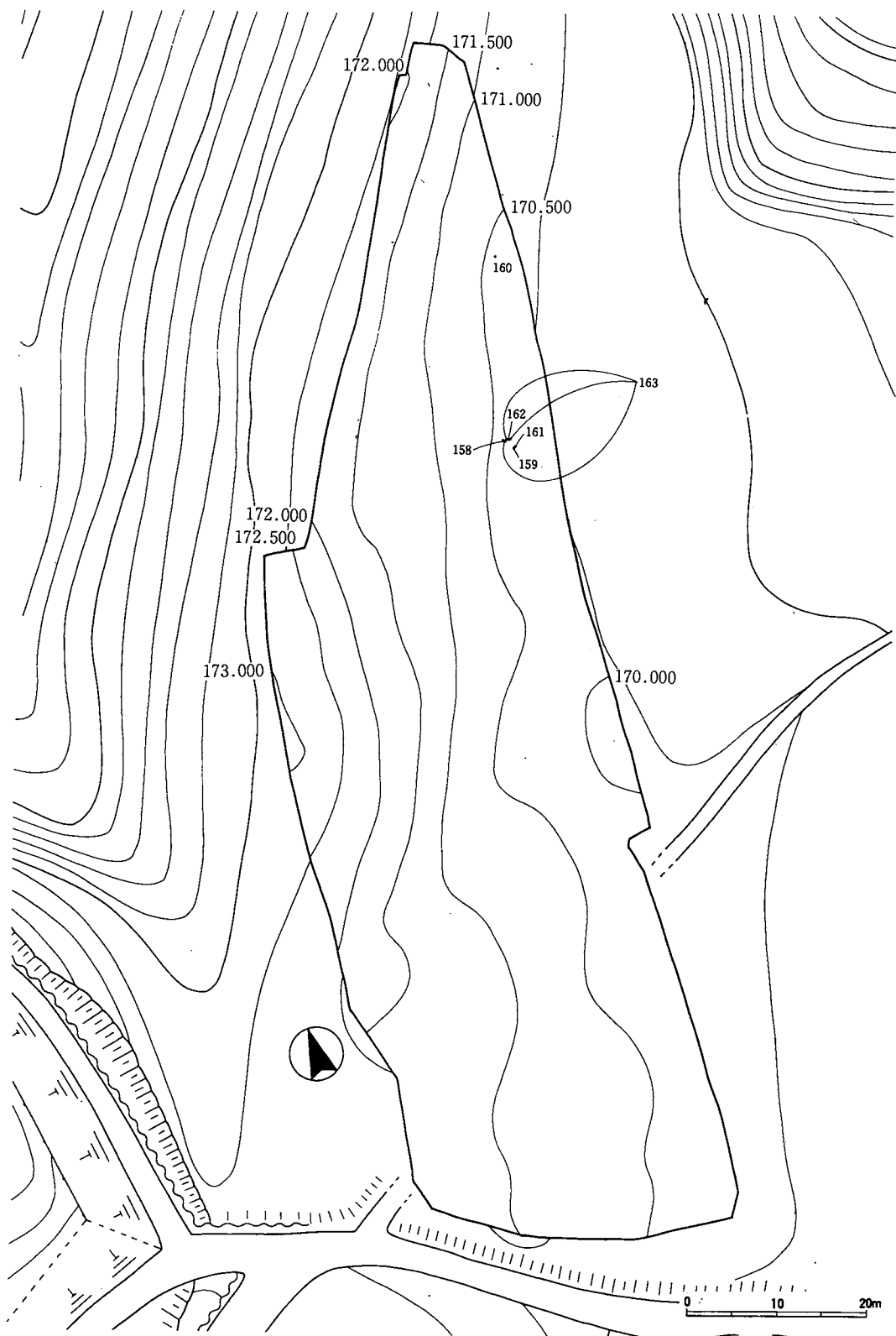
平椀式土器は、13点出土した。その分布はIII B区に集中し、縄文土器の分布と異なった状況を示す（第79図）。出土層位は、V層上位面で塞ノ神式土器、縄文土器、山形押型文土器と同様である。また、縄文土器の中に平椀式土器が存在する可能性が考えられるが、ここでは結束帯をもつ資料についてのみ平椀式として分類を行なった。

以下、資料について個別に説明を加えていく。

157は、III B区で検出した胴部の一括資料である。文様は結束帯を中心に、その左右に同傾の斜縄文を施文する。その原体は、RLである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡赤褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

158は、III B-14区で検出された胴部の資料である。文様は結束帯を中心に、その左右に同傾

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第79図 遺物分布図（平椀式土器）

の斜縄文を施文する。その原体は、R Lである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡褐色、内面が褐色で焼成は良好である。また、外面には煤の付着が観察される。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、8mmを測る。

159は、ⅢB-14区で検出された胴部の資料である。文様は結束帯を中心に、その左右に同傾の斜縄文を施文する。その原体は、R Lである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

160は、ⅡB-4区で検出された胴部の資料である。文様は、波形に施文された凹線文と結束帯と斜縄文が施され、これらの文様の中間に突帯文を貼付しその上部に刺突文を施文している。その縄文施文の原体は、R Lである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が黒褐色、内面が褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm以下の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、8.5mmを測る。

161は、ⅢB-14区で検出された胴部の資料である。文様は結束帯を中心に、その左右に同傾の斜縄文を施文する。その原体は、R Lである。また、破片の上部中央に補修孔が観察される。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、8mmを測る。

162は、ⅢB-14区で検出された胴部の資料である。文様は結束帯と斜縄文が施文されている。その原体は、R Lである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、内外面とも淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

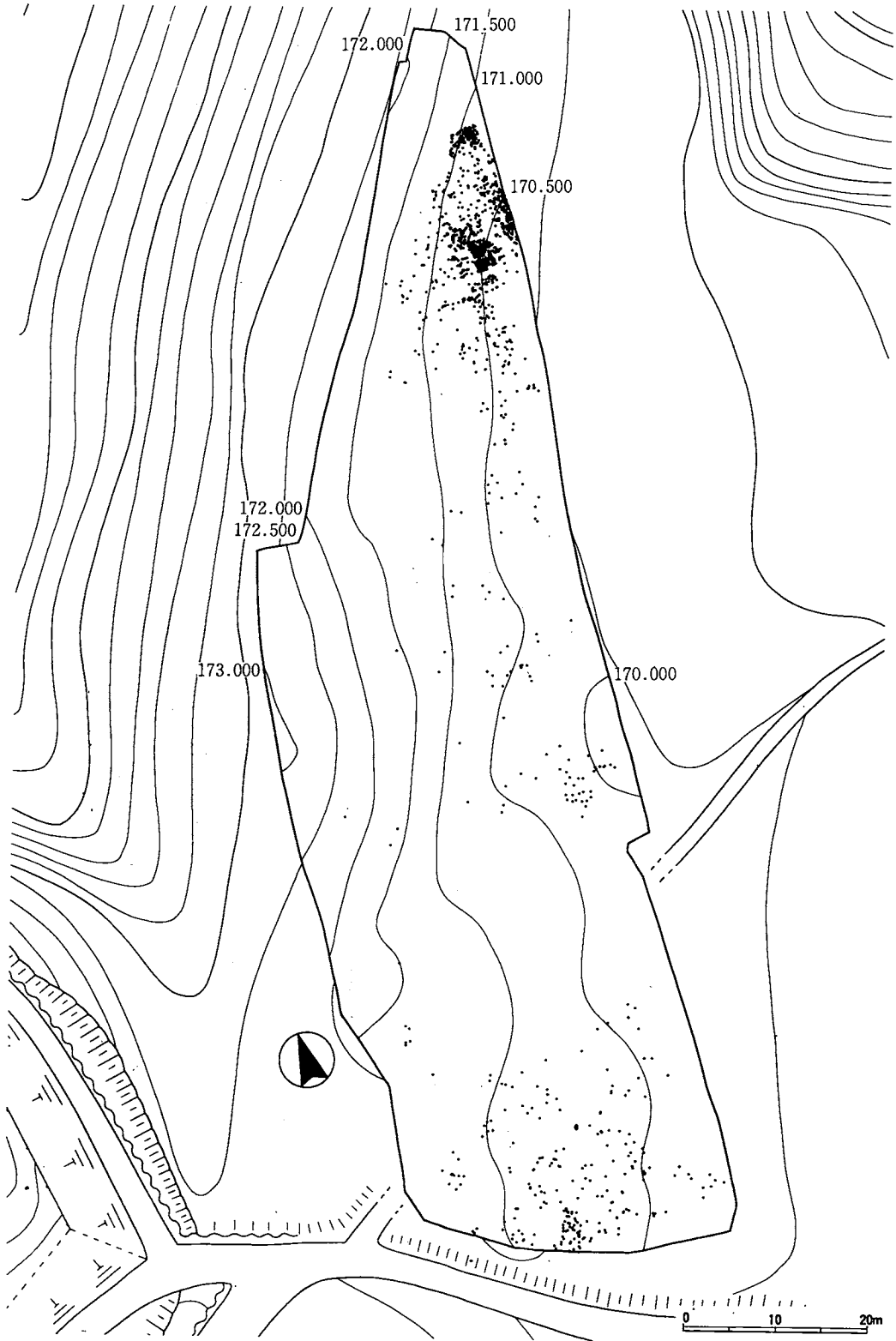
163は、ⅢB-14区で検出された胴部の接合資料である。文様は結束帯を中心に、その左右に同傾の斜縄文を施文する。その原体は、R Lである。内面の調整は、丁寧な横ナデによる。器面の色調は、外面が淡赤褐色、内面が淡褐色で焼成は良好である。胎土には、1～2mm大の長石粒をわずかに含んでいる。器厚は、9mmを測る。

(2) 石器

縄文時代早期に属する石器は、1426点検出された(第10表)。その内訳は、石器255点、石核・原石61点、剥片・碎片1110点である。またその中で、石器の器種ごとの内訳は、石鏃42点、尖頭器(尖頭状石器)6点、石匙2点、削器8点、楔形石器10点、石錐3点、磨石・敲石77点、石皿・台石26点、二次加工ある不定形石器19点、使用痕ある剥片62点である。

石材ごとの内訳では、黒耀石590点(41.4%)、珪岩661点(46.3%)、安山岩53点(3.7%)、砂岩33点(2.3%)、凝灰岩80点(5.6%)である。これらの石器の分布は、土器の分布と同様で大きく南北2カ所に集中する傾向が窺える。

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第80図 遺物分布図（石器）

第10表 縄文時代早期石器組成表

器 種	系 (%)	珪 岩	黒 耀 石	安 山 岩	頁 岩	砂 岩	凝 灰 岩	そ の 他
石 鏃	42(16.5)	20(47.6)	19(45.2)	3(7.1)	—	—	—	—
尖 頭 状 石 器	6(2.4)	4(66.6)	1(16.7)	1(16.7)	—	—	—	—
石 匙	2(0.8)	2(100)	—	—	—	—	—	—
削 器	8(3.1)	2(25.0)	3(37.5)	3(37.5)	—	—	—	—
抉 入 石 器	—	—	—	—	—	—	—	—
楔 形 石 器	10(3.9)	6(60.0)	3(30.0)	1(10.0)	—	—	—	—
石 錐	3(1.2)	2(66.7)	1(33.3)	—	—	—	—	—
磨 石 ・ 敲 石	77(30.2)	—	—	—	—	23(29.9)	54(70.1)	—
石 皿 ・ 台 石	26(10.2)	—	—	—	—	—	26(100)	—
二次加工ある不定形石器	19(7.4)	10(52.6)	7(36.8)	1(5.3)	—	1(5.3)	—	—
使用 痕 ある 剥 片	62(24.3)	39(62.9)	16(25.8)	4(6.5)	—	3(4.8)	—	—
石 器 総 計	255(17.9)	85(33.3)	50(19.6)	13(5.1)	—	27(10.6)	80(31.4)	—
石 核	47(3.3)	21(44.7)	20(42.5)	6(12.8)	—	—	—	—
原 石	14(1.0)	1(7.1)	13(92.9)	—	—	—	—	—
剥 片 ・ 碎 片	1110(77.8)	554(49.9)	507(45.7)	34(3.1)	1(0.1)	6(0.5)	—	8(0.7)
総 計	1426	661(46.3)	590(41.4)	53(3.7)	1(0.1)	33(2.3)	80(5.6)	8(0.6)

石鏃 (第82図1～第84図35)

石鏃は、42点出土した。その石器組成に占める割合は、16.5%である。石材ごとの内訳は、黒耀石19点、珪岩20点、安山岩3点で、黒耀石、珪岩の利用頻度が高く92.8%を占めている。

石鏃の分布は、大きく2つのまとまりに分けることができる。すなわち調査区の南側と北側である。このことは、早期に属する土器や他の石器の分布とほぼ同様である。

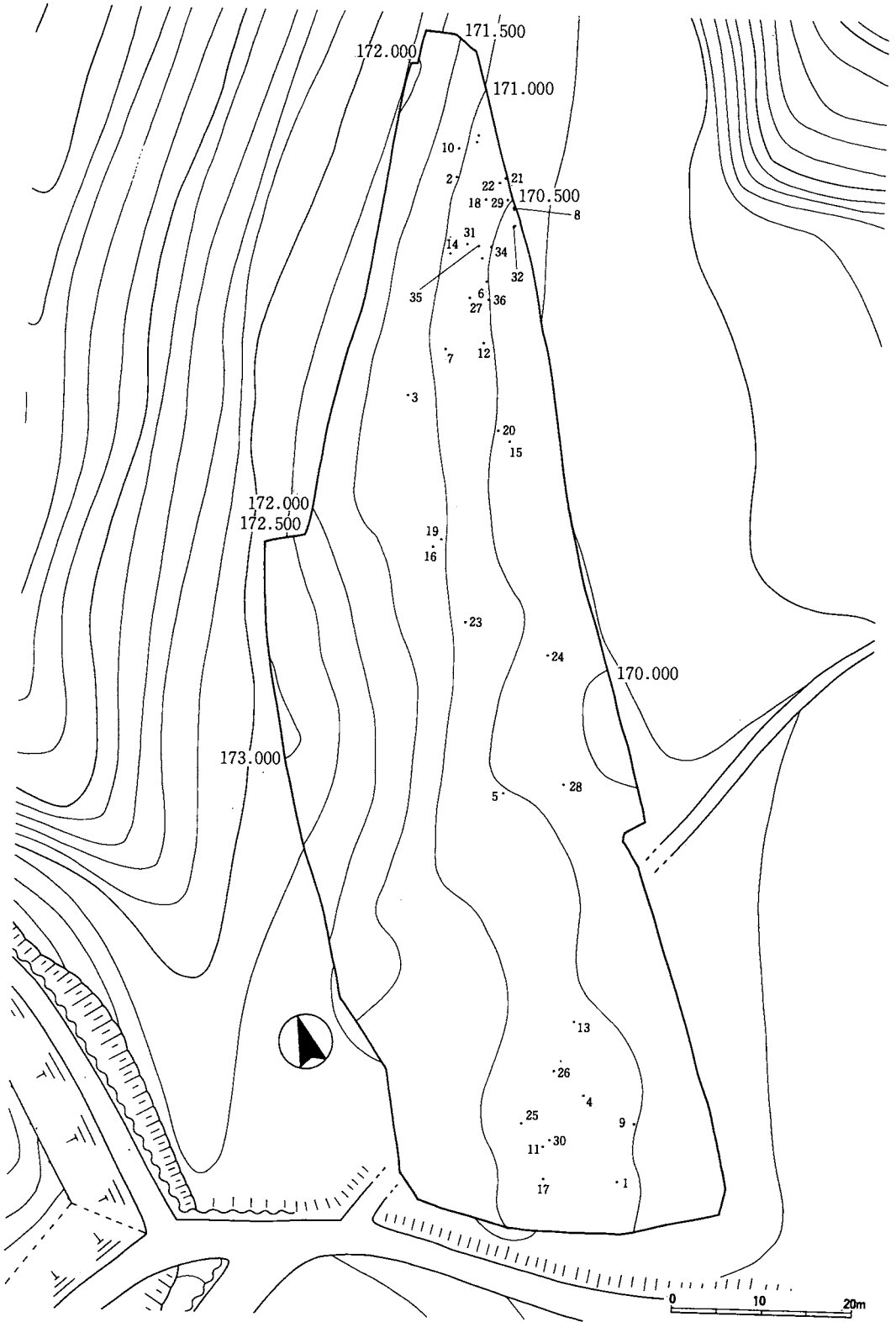
出土した42点の石鏃は、石器全体の形状から1類(二等辺三角形)、2類(三角形)に分類し、さらに基部の形状でa(平基のもの)、b(浅く抉れるもの)、c(V字状に抉れるもの)、d(U字状に抉れるもの)にそれぞれ細分できる。以下、類ごとに説明を加えていく。

第1 a類

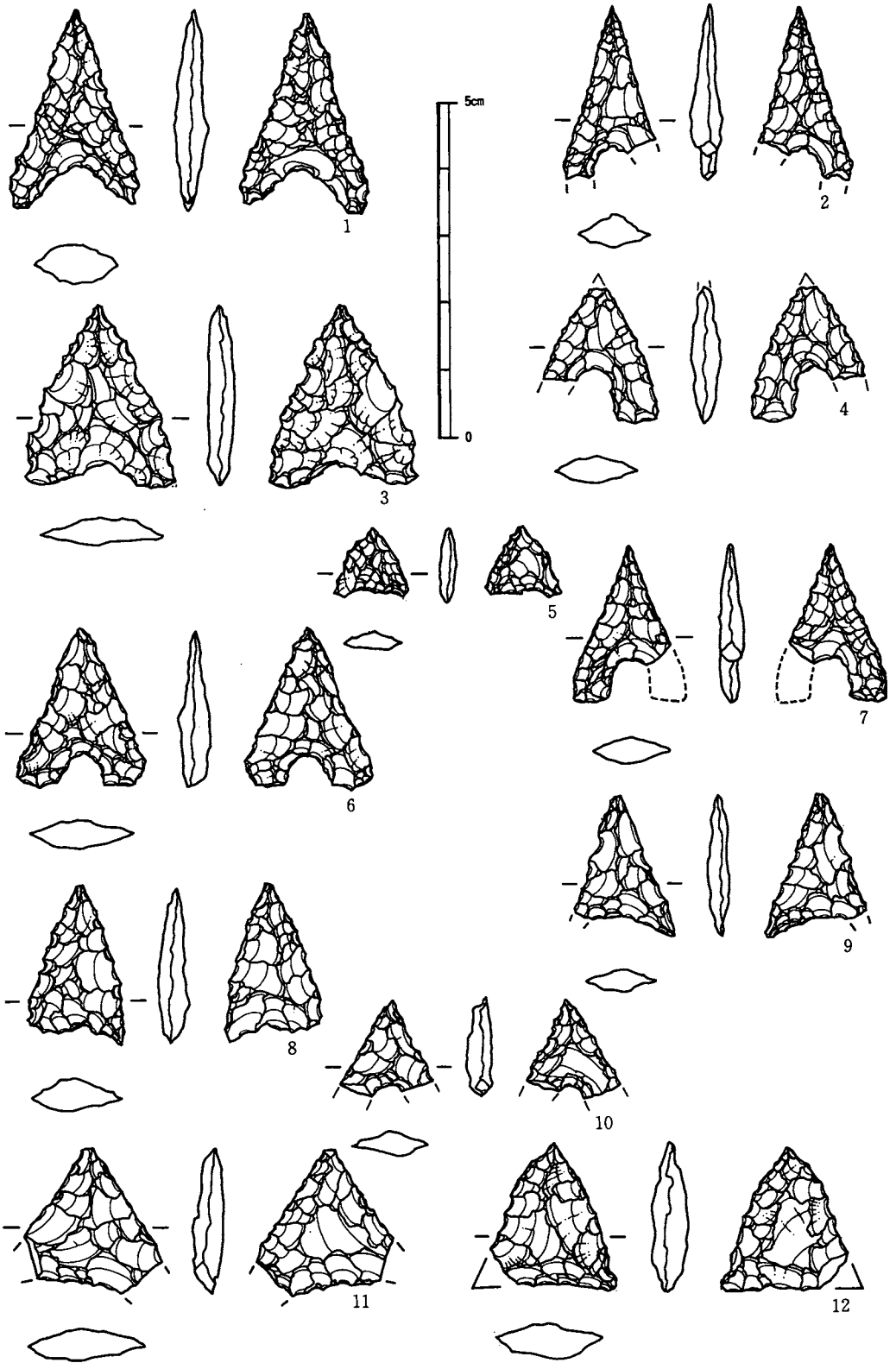
1 a類は、二等辺三角形を呈する平基の石鏃である。白鳥平B遺跡の早期に属する石鏃42点のうち1 a類に分類できる資料は検出されなかった。

第1 b類 (8、9、20、22、25、27、32)

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

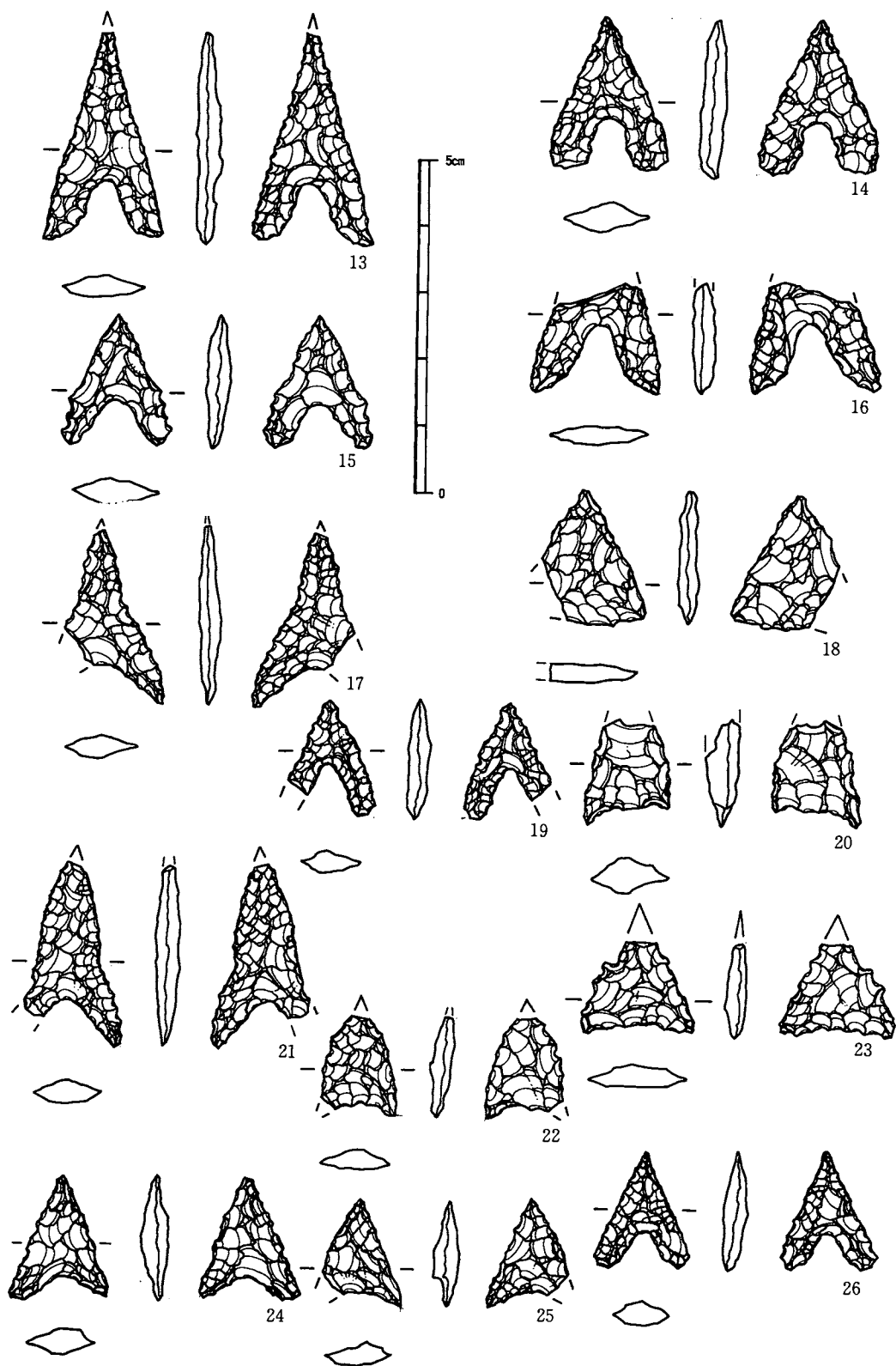


第81図 遺物分布図(石鏃)



第82図 石器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

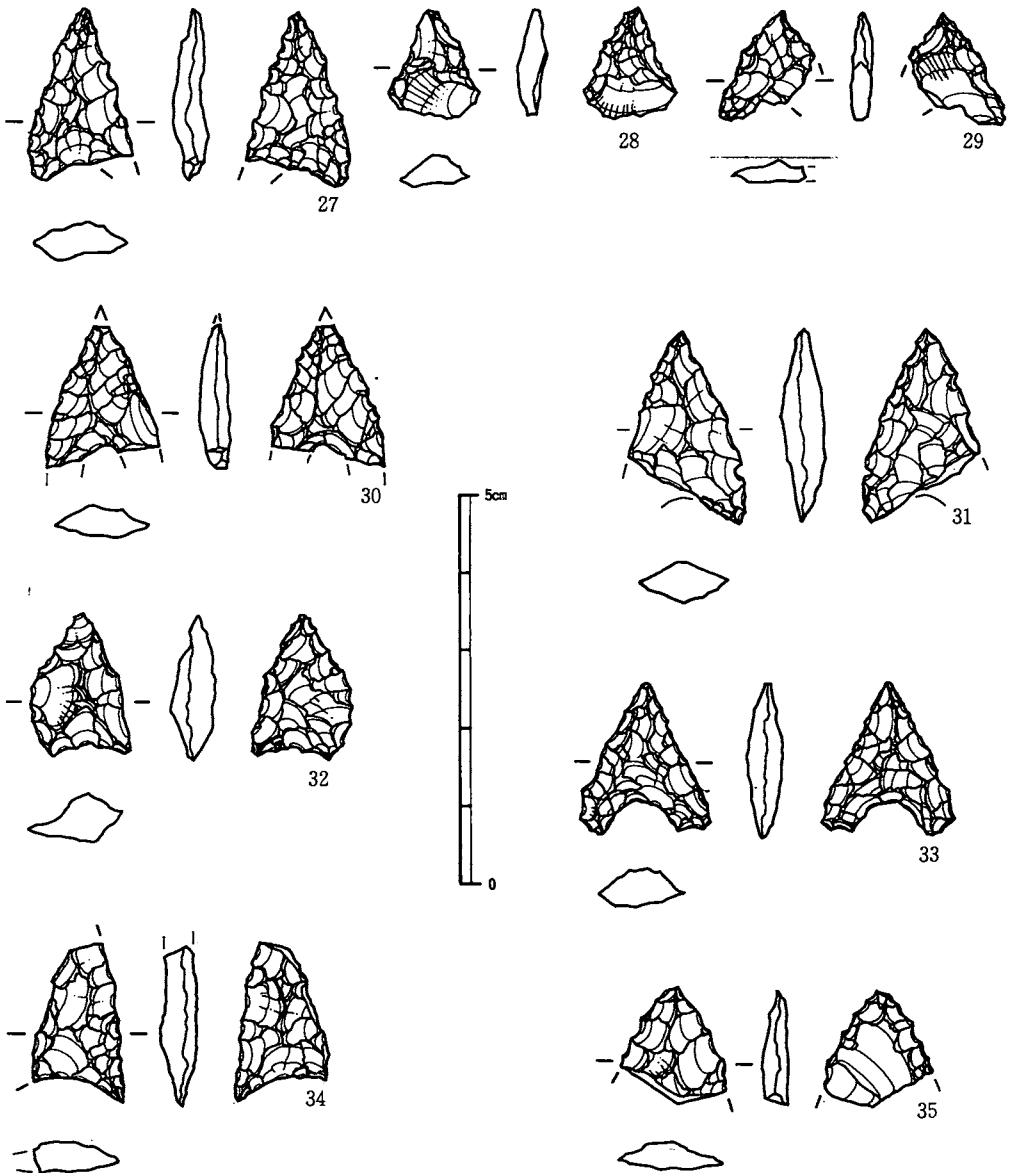


第83図 石器実測図

1 b類は、二等辺三角形を呈する、抉りの浅い凹基の石鏃である。資料数は、7点である。出土地点は、北側の遺物集中部で5点、南側の遺物集中部で2点である。これらの資料は、石器の大きさでは差ほどのバラツキはみられず比較的まとまっている。しかし、全体の形状からは、左右対称のもの（8、9、22、25、27）や左右対称をなさないもの（20、32）がある。32は、左右両側縁でその形状が大きく異なる。また20、22の資料は、基部の調整加工の面で他の資料と異なり、幅の狭い剥離面が石器中央部に向けて比較的長めに施されている。

第1 c類（1、17、19、21、24、26、31、33）

1 c類は、二等辺三角形を呈する、抉りがV字状に施される凹基の石鏃である。資料数は、



第84図 石器実測図

8点である。出土地点は、北側の遺物集中部で2点、南側の遺物集中部で5点、1点は調査区中央東側で検出された。石器の最大長は、1.4～3.0cmとバラツキがみられる。また縁辺の形状では、直線的なもの(1、24、26、33)、やや膨らむもの(19、31)、縁辺中央部で内湾するもの(17、21)がある。

第1d類(2、4、6、7、13～16、30)

1d類は、二等辺三角形を呈する、抉りがU字状に施される凹基の石鏃である。このような形態の石鏃は、2d類の資料を含め、その特徴的な形態から一般的に「鍬型鏃」と呼称されるもので、早期の押型文土器に共伴することが指摘されている。資料数は、9点である。出土地点は、北側の遺物集中部で6点、南側の遺物集中部で3点である。また石器の形状では、幅が狭く長身のもの(2、13、16)と比較的幅の広いもの(4、6、7、14、15、30)がある。これらの資料は、全般的に細かな調整加工により丁寧に作り出されているが、15のみはやや粗い調整加工がみられる。

第2a類(18)

2a類は、正三角形を呈する、平基の石鏃である。資料数は、1点である。その出土地点は、北側の遺物集中部(ⅡB-3区)である。基部片側を欠失しているが、基部及び両側縁とも直線的に作り出されている。

第2b類(3、5、11、12、23)

2b類は、正三角形を呈する、抉りの浅い凹基の石鏃である。資料数は、5点である。出土地点は、北側の遺物集中部南側で2点、南側の遺物集中部で1点、調査区中央部のVC区で1点である。石器の形状では、小型のもの(5)と大型のもの(3、11、12、23)がある。

第2c類(29)

2c類は、正三角形を呈する、抉りがV字状に施される凹基の石鏃である。資料数は、1点である。出土地点は、北側の遺物集中部(ⅡB-3区)である。黒耀石製の石鏃で、裏面がわ基部に素材剥片の剥離面を残す。幅広の不整形剥片を素材とし、打点部を基部左側に置く。調整加工は粗く、表面側からの抉入部作出段階の事故による欠損と考えられる。

第2d類(10)

2d類は、正三角形を呈する、抉りがU字状に施された凹基の石鏃である。資料数は、1点である。出土地点は、北側の遺物集中部(ⅡB-1区)である。基部(両脚)を欠失しているため全体の形状は不明であるが、縁辺は直線的に作り出され深い抉りをもつ。石器全体の調整加工は、大まかである。

未加工品(28)

出土資料の中に、未加工品と考えられるものが1点確認された。その石材は、黒耀石である。出土地点は、調査区中央東側のVB-24区である。幅広で不整形の縦長剥片を素材とし、基部

の表裏両面と表面の左側縁先端部近くに素材剥片の剥離面を残す。調整加工は、両側縁にのみみられ、先端部を作り出している。

所属不明の石鏃 (34, 35)

欠損によって、類の認定にかかわる情報を知り得なかった資料がある。資料数は、2点である。出土地点は、2点とも北側の遺物集中部 (ⅡB-9区) である。34は、左側縁及び先端部を欠失し全体の形状は不明な点があるが、基部の形状からb類に分類できる。35は、基部を欠失し1類に分類できる資料である。

尖頭状石器 (第86図)

尖頭状石器は、6点出土した。その石器組成に占める割合は、2.4%である。石材ごとの内訳は、珪岩4点、黒耀石1点、安山岩1点である (第10表)。出土地点は、南側の遺物集中部3点、北側の遺物集中部3点である (第85図)。

これらの資料は、その形状により大きく2類に分類できる。

第1類 (36, 41)

1類は、長さ比べて幅が広い形状を呈する資料である。資料数は、2点である。

36は、左右対称の整った形状を呈している。表面の一部に礫面を残し、調整加工は表裏両面とも階段状剥離である。断面形は縦横とも凸レンズ状を呈する。裏面側中央に素材剥離面を残し、その形状から幅広の剥片を素材とするものと考えられる。

41は、表裏両面とも縁辺からの大まかな調整剥離により作り出し、左右対称をなさない。石器の形状は、長幅ともさほど数値に差がなく、全体形は三角形を呈する。裏面に素材剥離面を残し、その形状から幅広の剥片を素材とするものと考えられる。

第2類 (37~40)

2類は、幅に比べて長さのある木葉形を呈する資料である。資料数は、4点である。これらの資料には、全体形が左右対称をなすもの (38) と、そうでないもの (37, 39, 40) がある。

37は、表裏両面とも縁辺からの調整加工により作り出されているが、先端部の位置はやや左によっている。断面形は、厚く未加工品と考えられる資料である。

38は、裏面に礫面を大きく残し、縁辺からの調整加工により左右対称に作り出されている。

39は、表裏両面ともに基部側に節理面をわずかに残す。先端部にわずかに潰れがみられる。

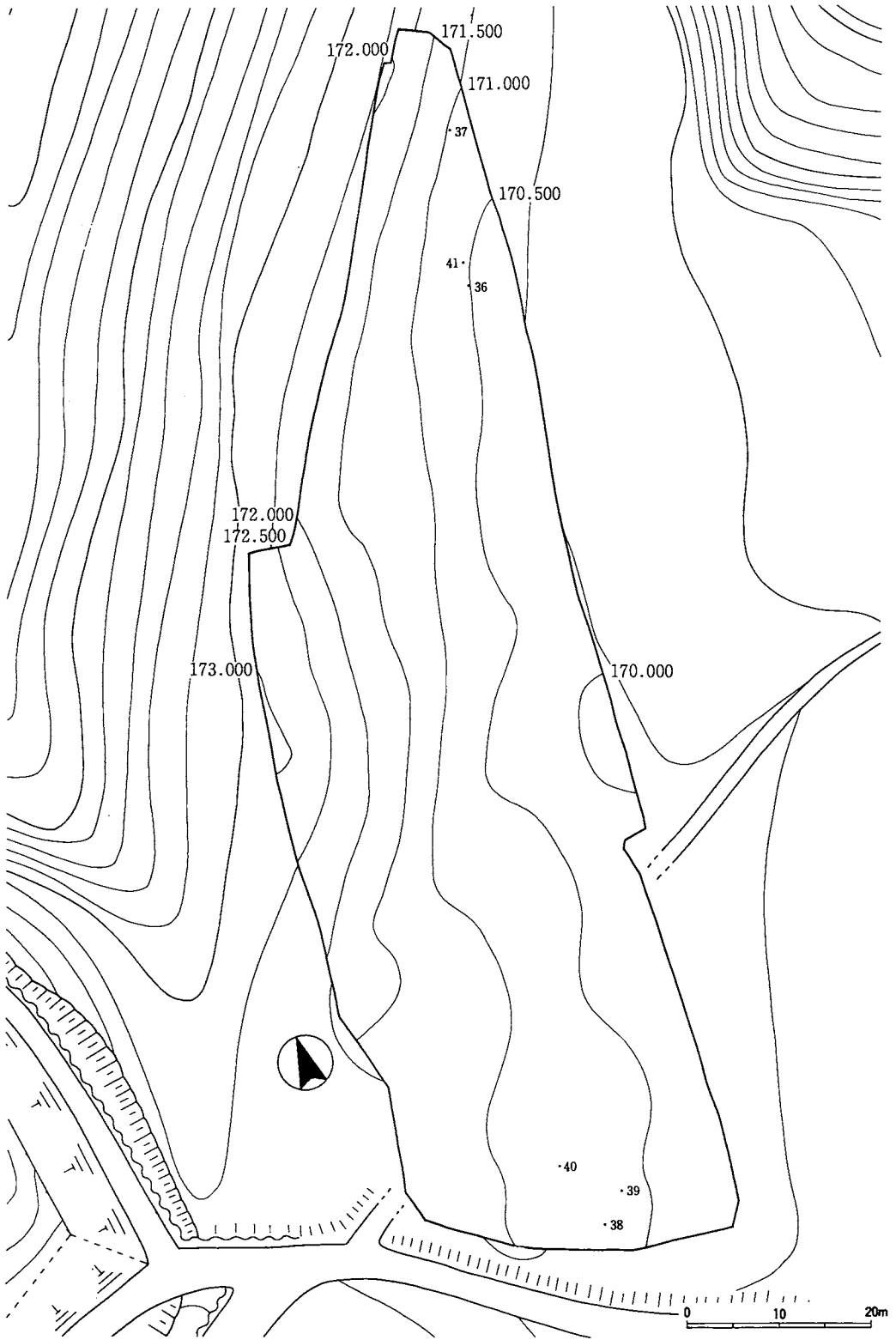
40は、表面に礫面を残す。全体的に縁辺から大まかな調整加工により作り出しているが、先端部は表裏両面から細かな調整により入念に作り出している。右側縁に折れ面が観察される。

石匙 (第88図)

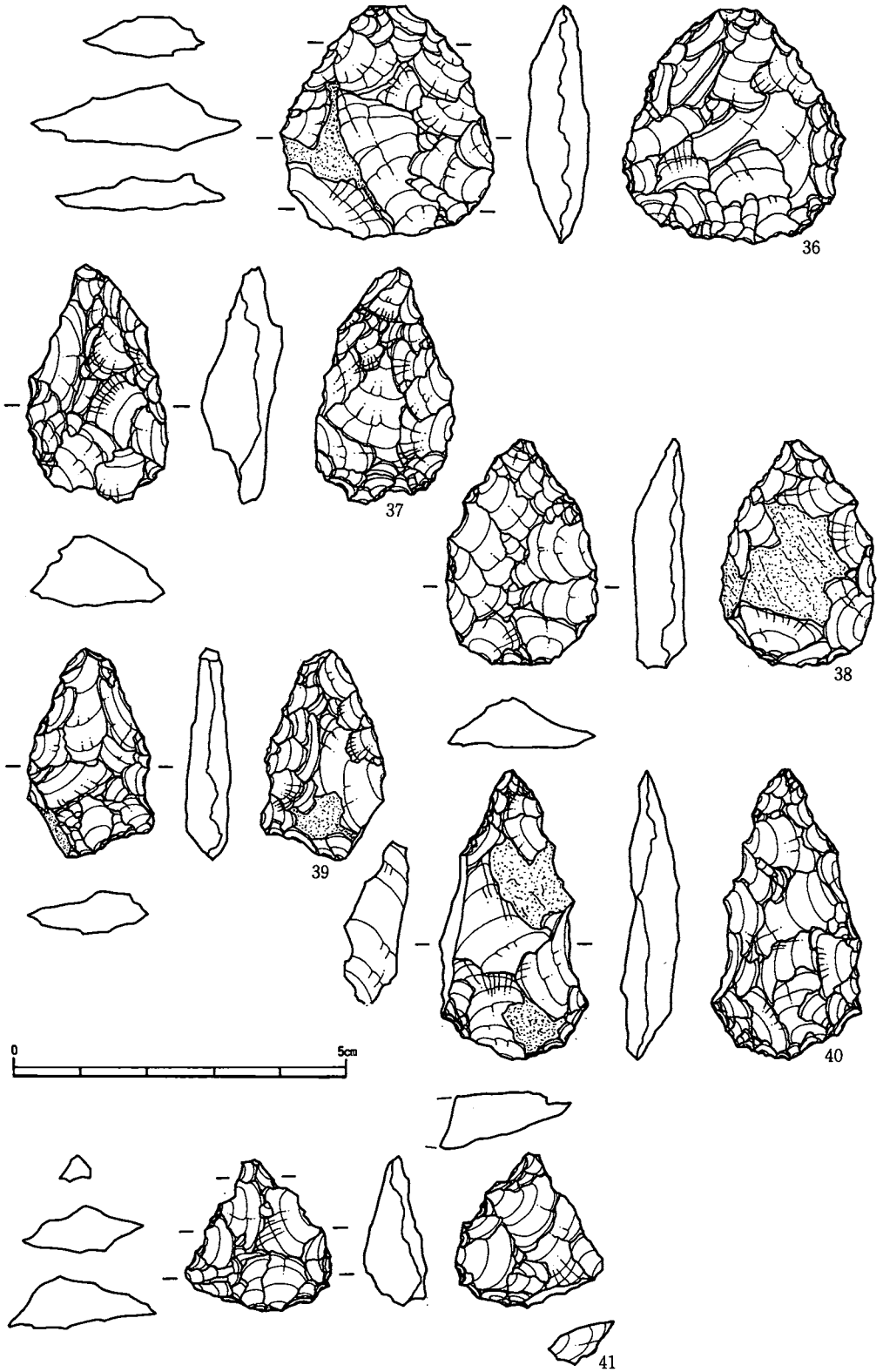
石匙は、2点出土した。その石器組成に占める割合は、0.8%である。石材では、2点とも珪岩製である (第10表)。出土地点は、ⅦC-22区とⅥB-11区である。

42は、横形の石匙である。摘み部は、石器全体の大きさに比して大きく作り出されている。

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

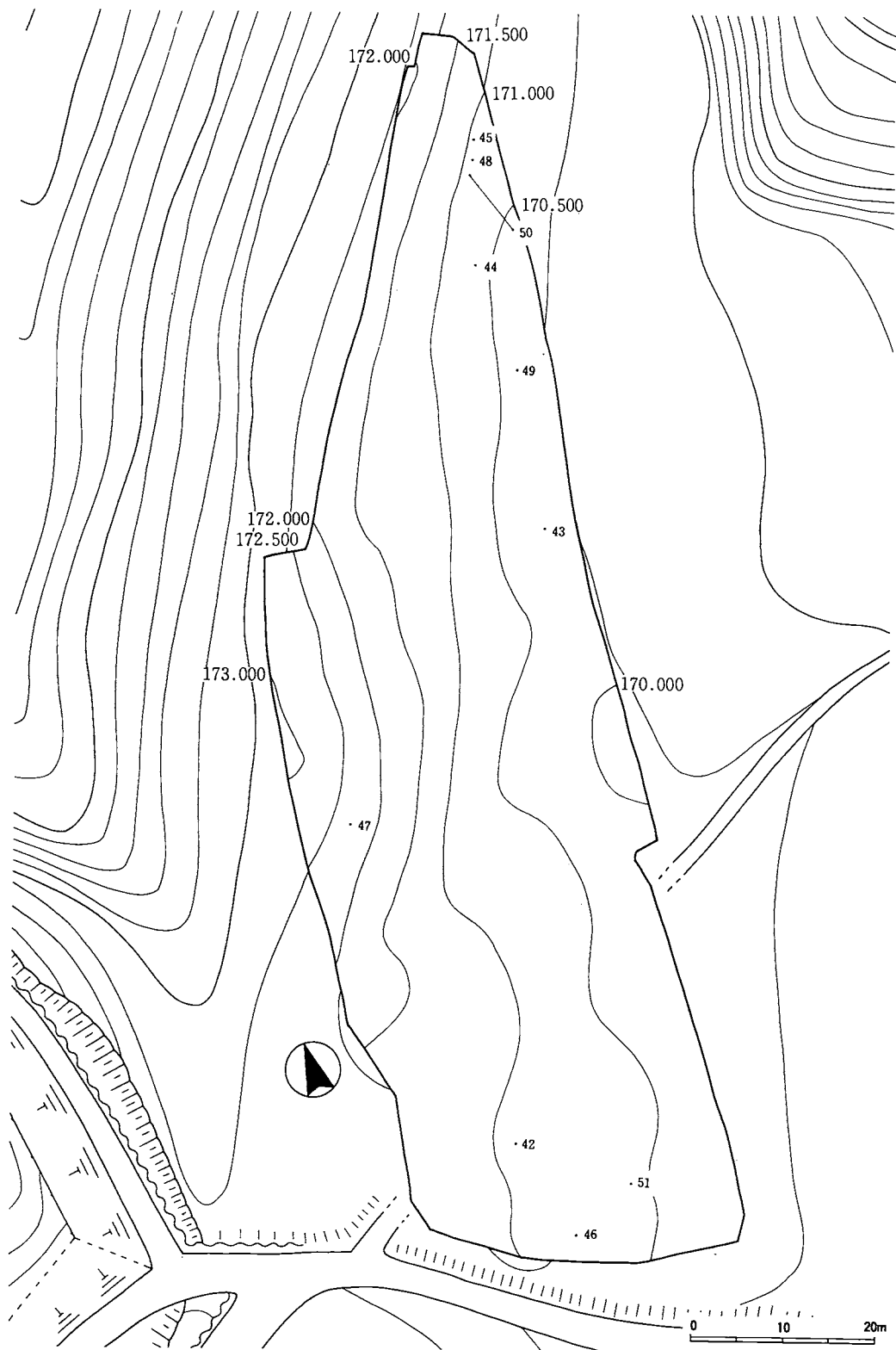


第85図 遺物分布図（尖頭状石器）

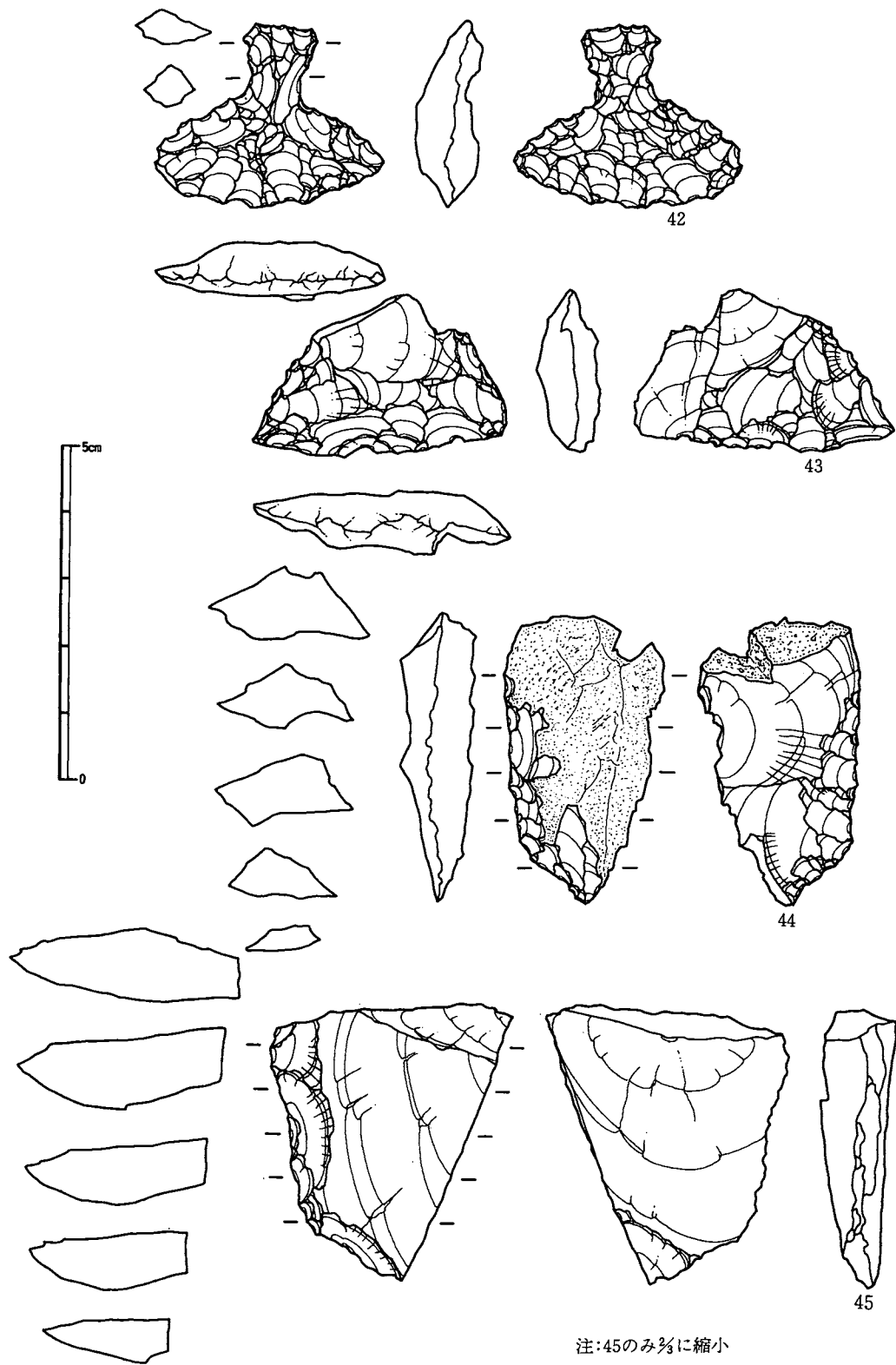


第86図 石器実測図

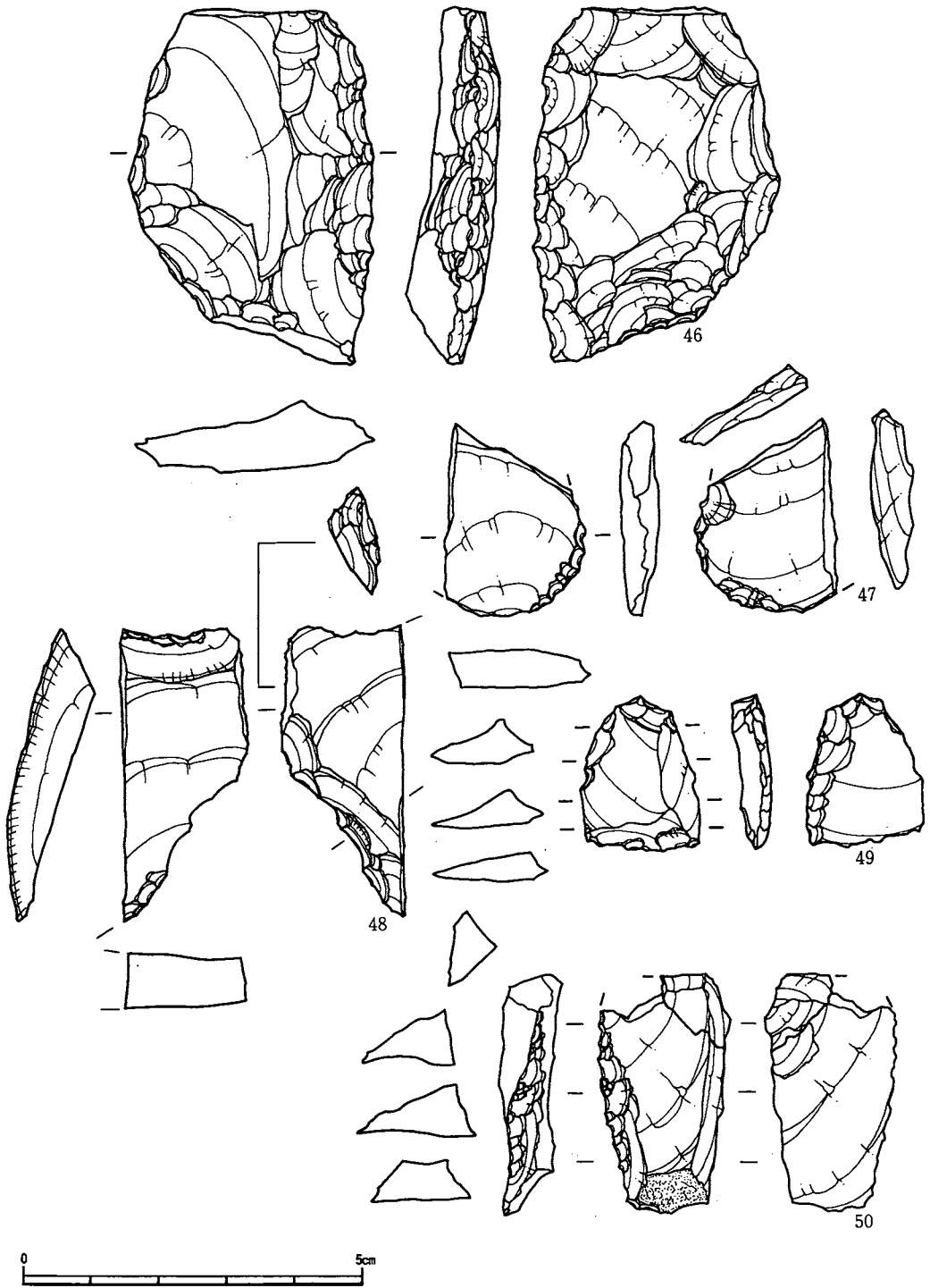
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第87図 遺物分布図（石匙、削器）



第88図 石器実測図



第89図 石器実測図

調整加工は、表裏両面とも細かく入念に施されている。

43は、摘み部の作り出しがみられず未加工品であると考えられる。

削器（第88図44～第90図51）

削器は、8点出土した。その石器組成に占める割合は、3.1%である。出土地点は、北側遺物集中部に偏在し、中央部、南側に散在する傾向が窺える（第87図）。

44は、表面に大きく礫面を残す黒耀石製の削器である。その刃部は、左側縁に表裏両面からの細かな調整加工により作り出されている。

45は、幅広の大型の剥片を素材とし表面の左側縁に大まかな調整加工により刃部を作り出している安山岩製の削器である。

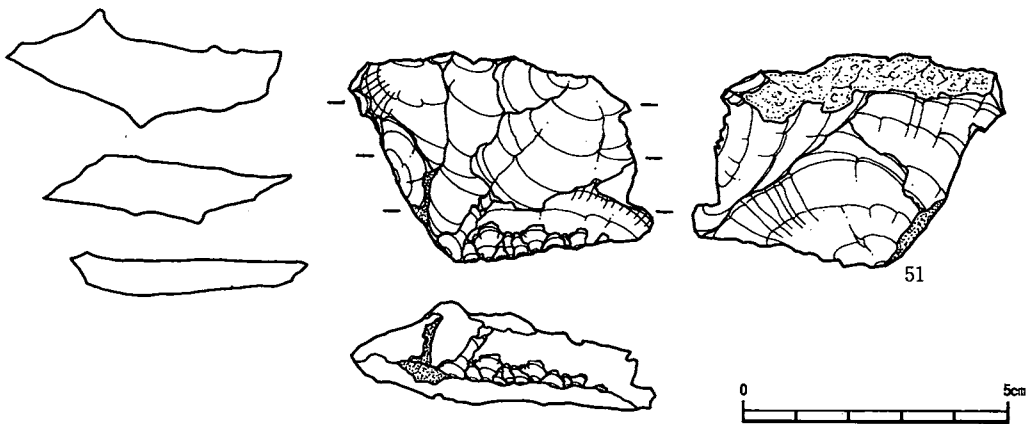
46は、厚みのある幅広の剥片を素材とし、左右及び下縁の三辺に刃部を作り出している。安山岩製の削器である。

47は、幅広の剥片を素材とし右側縁に細かな調整加工により刃部を作り出している。珪岩製の削器である。

48は、幅広の剥片を素材とし右側縁裏面側に大まかな調整加工を施し刃部を作り出している。安山岩製の削器である。

49は、縦長剥片を素材とし右側縁裏面側に細かな調整加工を施し刃部を作り出している。珪岩製の削器である。

50は、不整形の剥片を素材とした黒耀石製の削器で、接合資料である。刃部は、左側縁表面側に細かな調整加工を施し作り出されている。



第90図 石器実測図

51は、黒耀石製の削器で石核を転用したものと考えられる。裏面側には、礫面を残す。刃部は、下縁部に細かな調整加工を施し、作り出されている。

石錐 (第91図)

石錐は、3点出土した。その石器組成に占める割合は、1.2%である。また、石材では黒耀石1点、珪岩2点である。

出土地点では、北側、中央部、南側でそれぞれ各1点検出され、まとまりとしては捉えられない(第92図)。

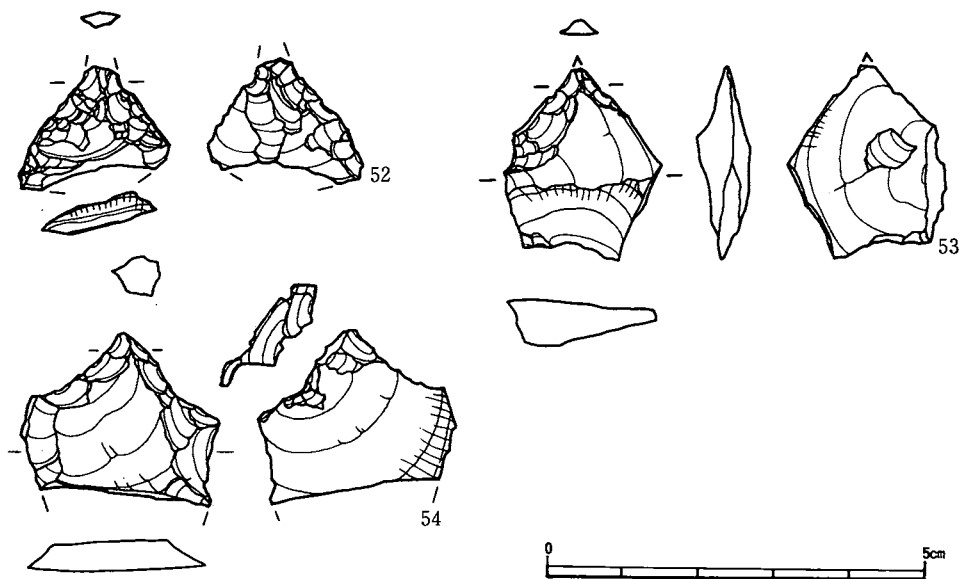
52は、幅広の剥片を素材とし、その打点部側に錐部を作り出す。調整加工は、細かく入念に施し、基部からそのまま錐部へ至り明瞭な摘み部をもたない。

53は、幅広の不整形剥片を素材とし、その剥片の一辺に細かな調整加工を施し、錐部を作り出している。52と同様に明瞭な摘み部をもたない。

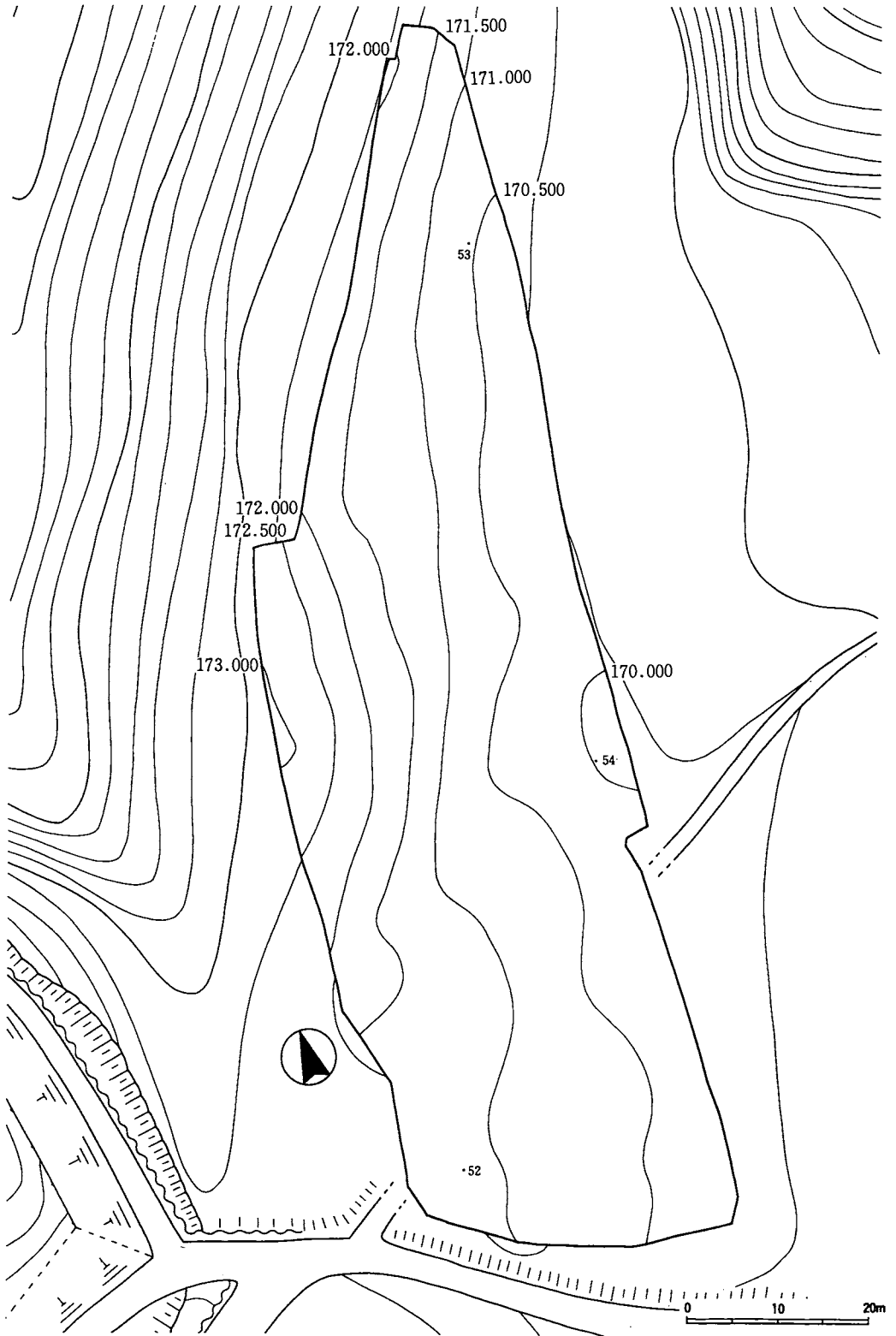
54は、幅広の剥片を素材とし、打点部側に調整加工を施し錐部を作り出している。また、錐部の作り出しにより摘み部と錐部が明瞭に区別されている。

楔形石器 (第94図)

楔形石器は、10点出土した。その石器組成に占める割合は、3.9%である。また、石材ごとの内訳は黒耀石4点、珪岩5点、安山岩1点である。

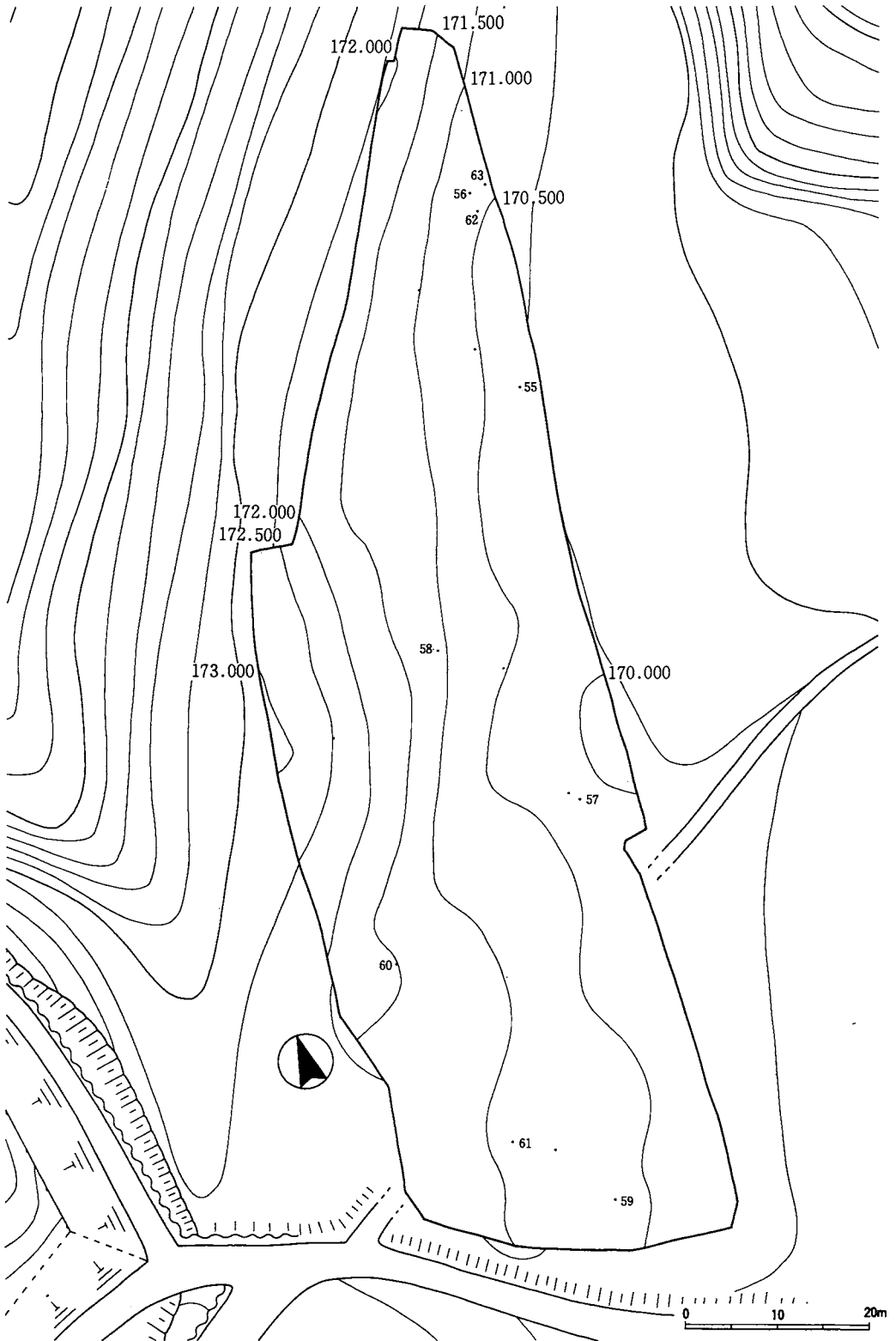


第91図 石器実測図

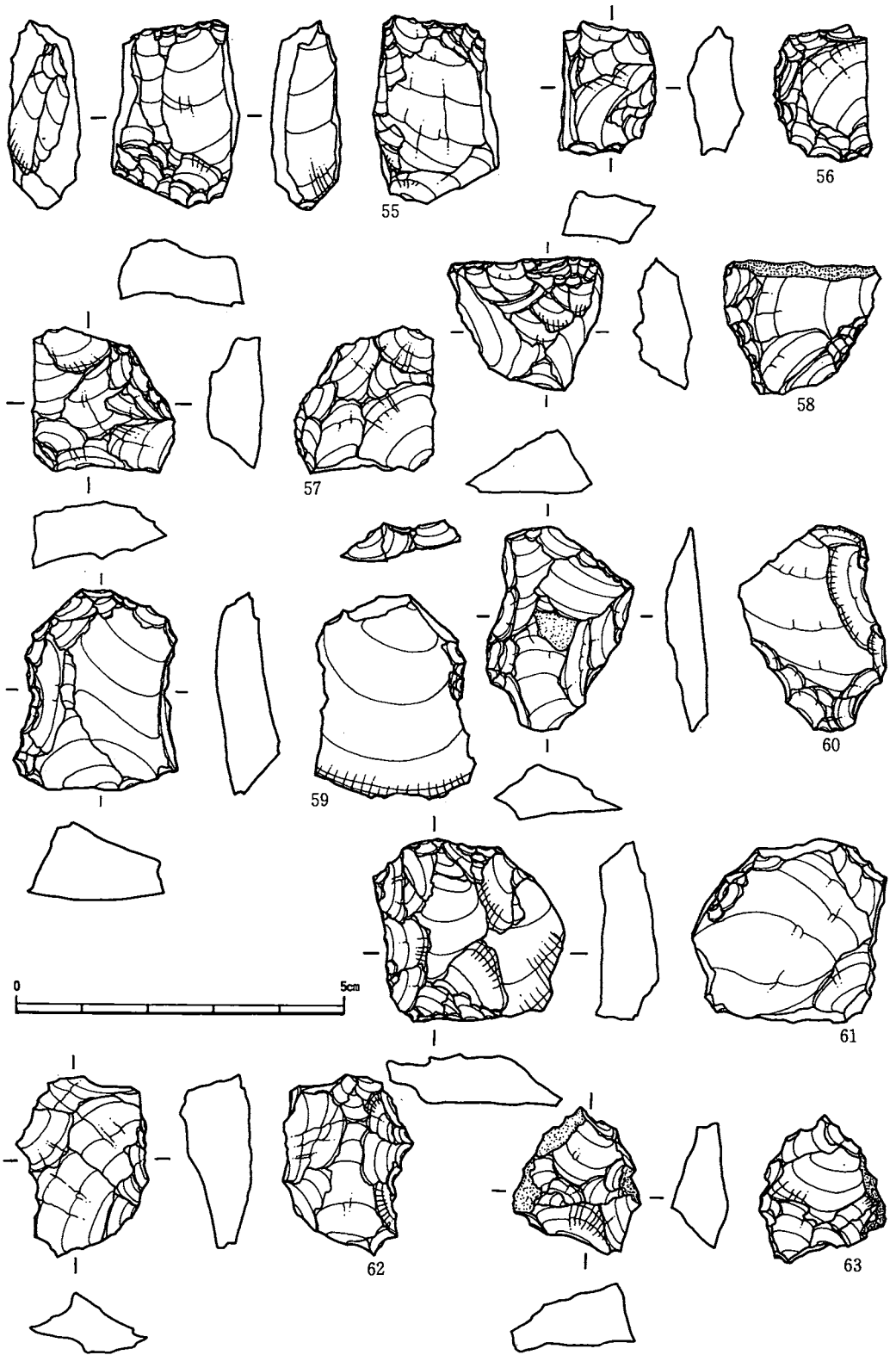


第92図 遺物分布図（石鏝）

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第93図 遺物分布図（楔形石器）



第94図 石器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

第11表 石器計測表

No	器 種	石 材	計 測 値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
1	石 鏃	黒 耀 石	2.97	1.90	5.80	1.40	VII C-15	4024
2	"	"	(2.60)	(1.40)	0.50	0.70	II B-7	4142
3	"	安 山 岩	2.70	2.21	0.41	1.75	III B-22	134
4	"	黒 耀 石	2.00	(1.70)	0.40	0.85	VII C-12	4588
5	"	"	1.08	1.03	0.28	0.20	V C-8	325
6	"	珪 岩	2.38	1.93	0.42	1.20	II B-10	3036
7	"	"	2.30	(1.48)	0.40	0.70	III B-16	1072
8	"	黒 耀 石	2.40	1.45	0.50	1.10	II B-3	4539
9	"	珪 岩	2.20	1.62	0.42	1.10	VII C-8	3511
10	"	"	(1.40)	(1.40)	0.40	0.55	II B-1	5157
11	"	"	(2.20)	(2.10)	0.50	1.50	VII C-23	3402
12	"	"	2.20	1.90	0.58	1.65	III B-11	670
13	"	安 山 岩	(3.12)	1.80	0.32	1.15	VII C-15	3726
14	"	黒 耀 石	2.30	1.76	0.45	0.80	III B-14	1088
15	"	安 山 岩	1.98	1.60	0.40	0.55	"	2103
16	"	珪 岩	(1.70)	1.92	0.30	0.65	IV C-1	137
17	"	"	(2.60)	(1.50)	0.38	0.60	VII C-24	4485
18	"	黒 耀 石	2.00	(1.53)	0.30	0.80	II B-3	3247
19	"	"	1.75	1.30	0.33	0.35	IV C-1	114
20	"	"	(1.60)	(1.30)	0.50	0.70	III B-17	1097
21	"	"	(2.78)	(1.45)	0.38	0.80	II A-22	4958
22	"	"	(1.50)	(1.15)	0.30	0.50	II B-2	3263
23	"	珪 岩	(1.36)	(1.70)	0.35	0.55	IV C-3	125
24	"	黒 耀 石	1.88	1.50	0.40	0.50	IV B-20	72
25	"	珪 岩	(1.60)	(1.20)	(0.38)	0.50	VII C-22	3371
26	"	"	(2.60)	(1.50)	0.38	0.40	VII C-16	4585
27	"	"	(2.20)	(1.38)	0.40	0.90	II B-15	1047
28	"	黒 耀 石	(1.40)	1.20	(0.40)	0.45	V B-24	141
29	"	"	(1.40)	(1.20)	(0.30)	0.40	II B-3	4673
30	"	"	(1.80)	(1.50)	0.40	0.75	VII C-18	4617
31	"	"	2.50	(1.50)	0.52	1.25	II B-9	702
32	"	珪 岩	1.85	1.30	0.60	0.90	II B-4	4650
33	"	黒 耀 石	2.02	1.62	0.52	1.00	II B-10	3685
34	"	珪 岩	2.05	1.20	0.40	0.90	II B-9	2010
35	"	"	1.50	1.38	0.38	0.50	II B-9	1675
36	尖頭状石器	頁 岩	3.50	3.30	1.00	9.80	II B-10	3147
37	"	珪 岩	3.50	2.10	1.10	6.80	II B-1	4872
38	"	"	3.40	2.30	0.80	6.10	VII C-15	4023
39	"	"	4.30	2.23	0.80	7.25	VII C-14	4596
40	"	"	3.10	2.23	0.80	7.25	VII C-18	4615
41	"	黒 耀 石	2.30	2.20	0.80	3.05	II B-9	800
42	石 匙	珪 岩	2.75	3.50	0.80	5.30	VII C-22	3370
43	"	"	2.40	3.90	1.00	7.70	IV B-11	34
44	削 器	黒 耀 石	4.30	2.43	1.10	8.95	II B-9	691
45	"	安 山 岩	6.30	5.55	1.90	55.60	II B-1	4982

第12表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
46	削器	安山岩	5.20	3.60	1.00	22.05	VII C-25	4293
47	"	珪岩	2.80	2.10	0.60	3.75	VD-2	50
48	"	安山岩	4.30	1.82	0.80	22.80	II B-1	5015
49	"	珪岩	2.30	1.78	0.70	2.10	III B-16	1082
50	"	黒耀石	3.50	1.90	0.80	4.60	II B-2+II B-3	3307+2119
51	"	"	3.90	5.83	2.20	24.00	VII C-14	4013
52	石錐	"	1.90	(1.60)	0.55	1.10	VII D-7	4074
53	"	珪岩	2.50	2.08	0.60	2.40	II B-9	1183
54	"	"	2.30	2.70	0.50	2.55	VB-18	145
55	楔形石器	"	2.83	1.93	1.00	7.00	III B-8	118
56	"	"	2.00	1.50	0.80	2.55	II B-2	3556
57	"	"	2.20	2.18	1.00	5.75	VB-24	119
58	"	安山岩	2.00	2.40	0.98	3.95	VI C-9	103
59	"	珪岩	3.05	2.50	1.20	9.00	VII C-15	3467
60	"	"	3.10	2.28	0.83	4.95	VI D-1	46
61	"	"	2.73	2.98	0.80	7.80	VII C-22	3972
62	"	"	2.70	2.00	0.90	5.85	II B-3	3611
63	"	黒耀石	2.20	1.93	1.10	2.90	II B-2	4841

石器の分布は、北側と南側の遺物集中部に偏在する傾向が窺えるが、数点中央部に散在するものもある(第93図)。

55は、III B-8区で出土した珪岩製の楔形石器である。表面に長軸方向に対向する剥離面がみられ、上下両端には対向する小剥離痕が観察される。

56は、II B-2区で出土した珪岩製の楔形石器である。左側縁には折れ面が観察される。上下両端に対向する小剥離痕が観察される。

57は、VB-24区で出土した珪岩製の楔形石器である。石器の左側面が平坦で、右側縁上部と左側縁下部に対向する小剥離痕が観察される。

58は、VI C-9区で出土した黒耀石製の楔形石器である。石器上端に礫面を残し平坦で、上下両端と左右両側縁に対向する小剥離痕が観察される。

59は、VII C-15区で出土した珪岩製の楔形石器である。石器表面の左側縁部に抉りがみられ、上下両端に対向する剥離面が観察される。

60は、VI D-1区で出土した安山岩製の楔形石器である。石器の上下両端と左右両側縁に、それぞれ対向する剥離面が観察される。

61は、VII C-22区で出土した珪岩製の楔形石器である。石器上下両端と左側面が平坦で、上下両端に対向する小剥離痕が観察される。

62は、ⅡB-3区で出土した珪岩製の楔形石器である。石器上下両端と左右両側縁に、それぞれ対向する剥離面が観察される。

63は、ⅢB-11区で出土した黒耀石製の楔形石器である。表裏両面に礫面を残し、上下両端に対向する剥離面が観察される。

磨石・敲石（第96図64～第100図94）

磨石・敲石は、77点出土した。その石器組成に占める割合は、30.2%である。また、その石材は、砂岩23点、凝灰岩54点である。石器の分布は、大きく南北の遺物集中部で検出されている。また、北側の分布の在り方は、ⅡB区とⅢB区の2ヶ所に集中する傾向が窺える（第95図）。

これらの石器は、その形態的特徴から円形、楕円形、棒状、不整形のものと同様な形態のものがみられる。また、石器の使用部位からは、長軸の一端かもしくは両端に敲打痕が観察されるものと、敲打痕が全縁に観察されるもの、敲打痕が石器中央部にも観察されるものと、また敲打痕と合わせて磨痕が観察されるものがある。

以下、分類ごとに説明を加えていく。

第1類（64、66、70、72、80、84、88、89、91）

第1類は、石器の一端ないしは両端に、敲打痕が観察されるものである。石器の形状は、楕円形（64、66、72、84、88、89、）、棒状（70、91）、不整形（80）のものがある。

第2類（65、67、68、77、79、87、94）

第2類は、石器の側縁部に敲打痕が観察されるものである。石器の形状は、楕円形、不整形のものがある。大きさは、比較的均質である。敲打痕の状態では、側縁部の広い範囲に認められるもの（65、67、68、87）とそうでないもの（77、79、94）がある。

第3類（71、82、85、86、93）

第3類は、敲打痕が全縁に観察されるものである。形状は、楕円形（85、86、93）と棒状（82）、不整形（71）がある。86は、上半部を欠失しているが敲打痕は、残存する全縁で観察される。93は、上端部及び左側縁部を欠失しているが、残存する全縁で敲打痕が観察される。

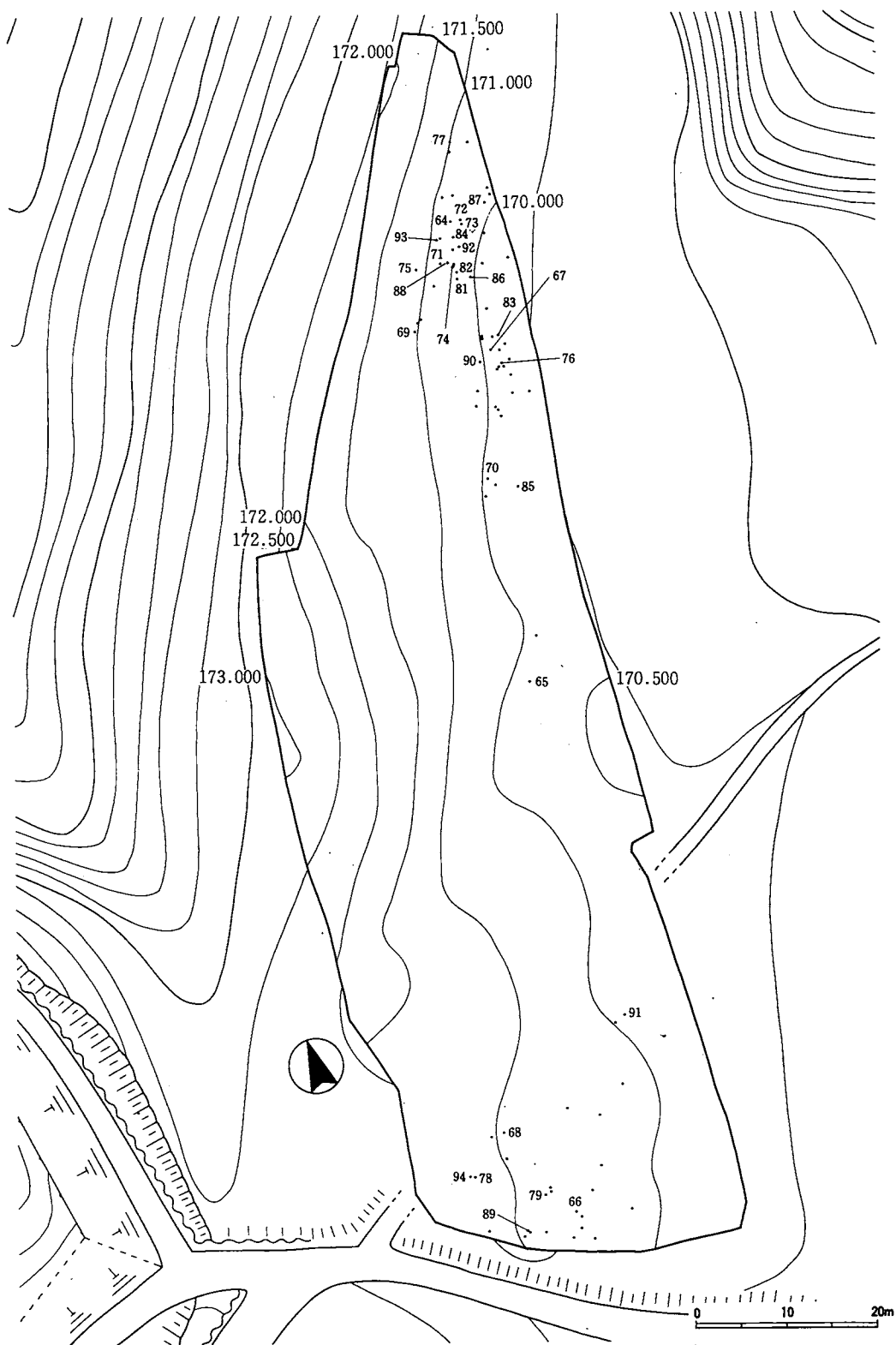
第4類（69、73～76、78、81、83、90、92）

第4類は、縁辺の敲打痕が顕著に観察されないものである。石器の形状は、円形、楕円形、不整形のものがある。74、90は、縁辺の敲打痕は顕著に観察されないが、石器の平面部に敲打痕が観察される資料である。

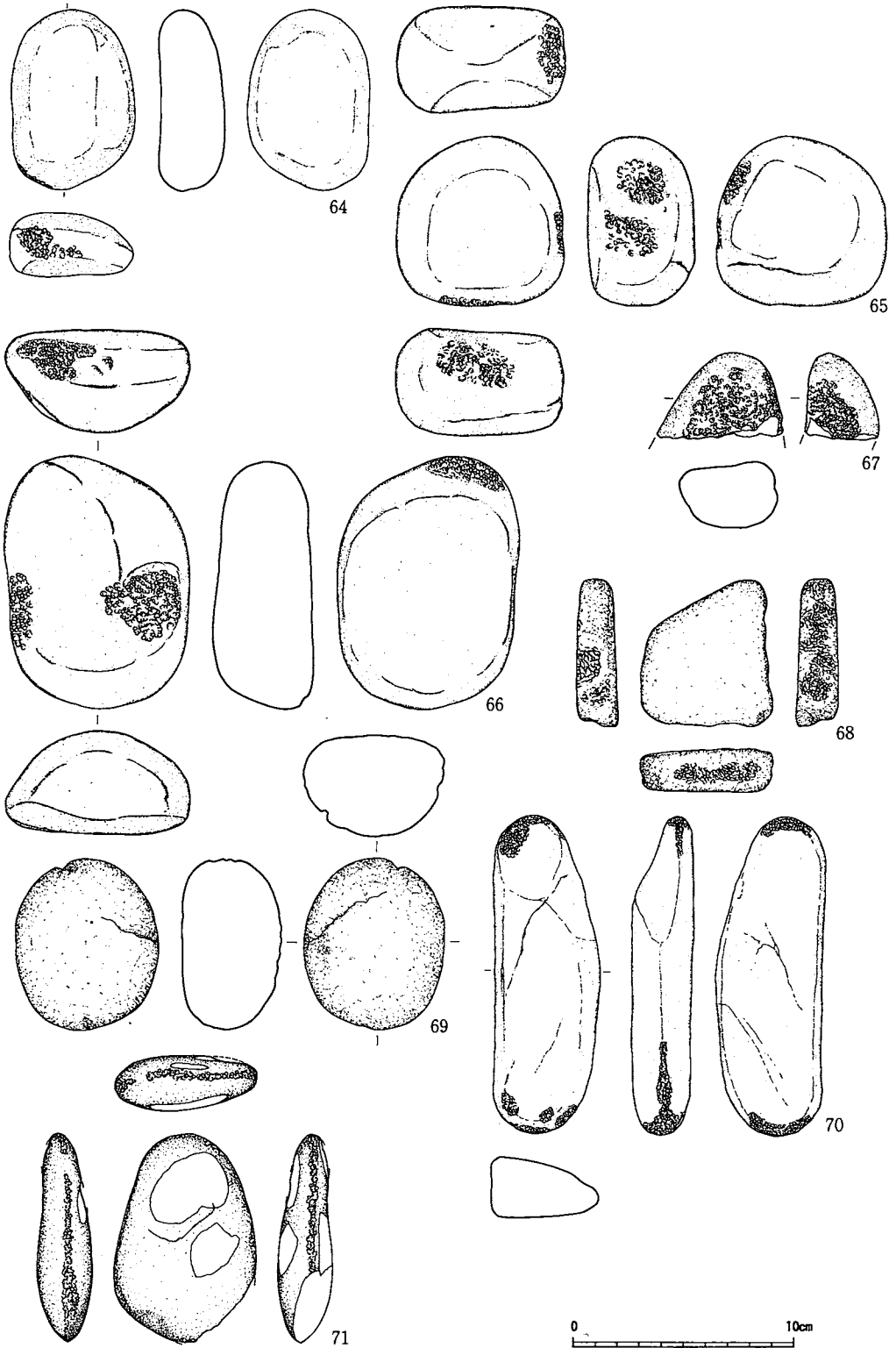
石皿・台石（第102図95～第105図108）

石皿・台石は、26点出土した。その石器組成の中に占める割合は、10.2%である。石材は、すべて凝灰岩である。その分布は、磨石・敲石の分布の在り方と同様である（第101図）。

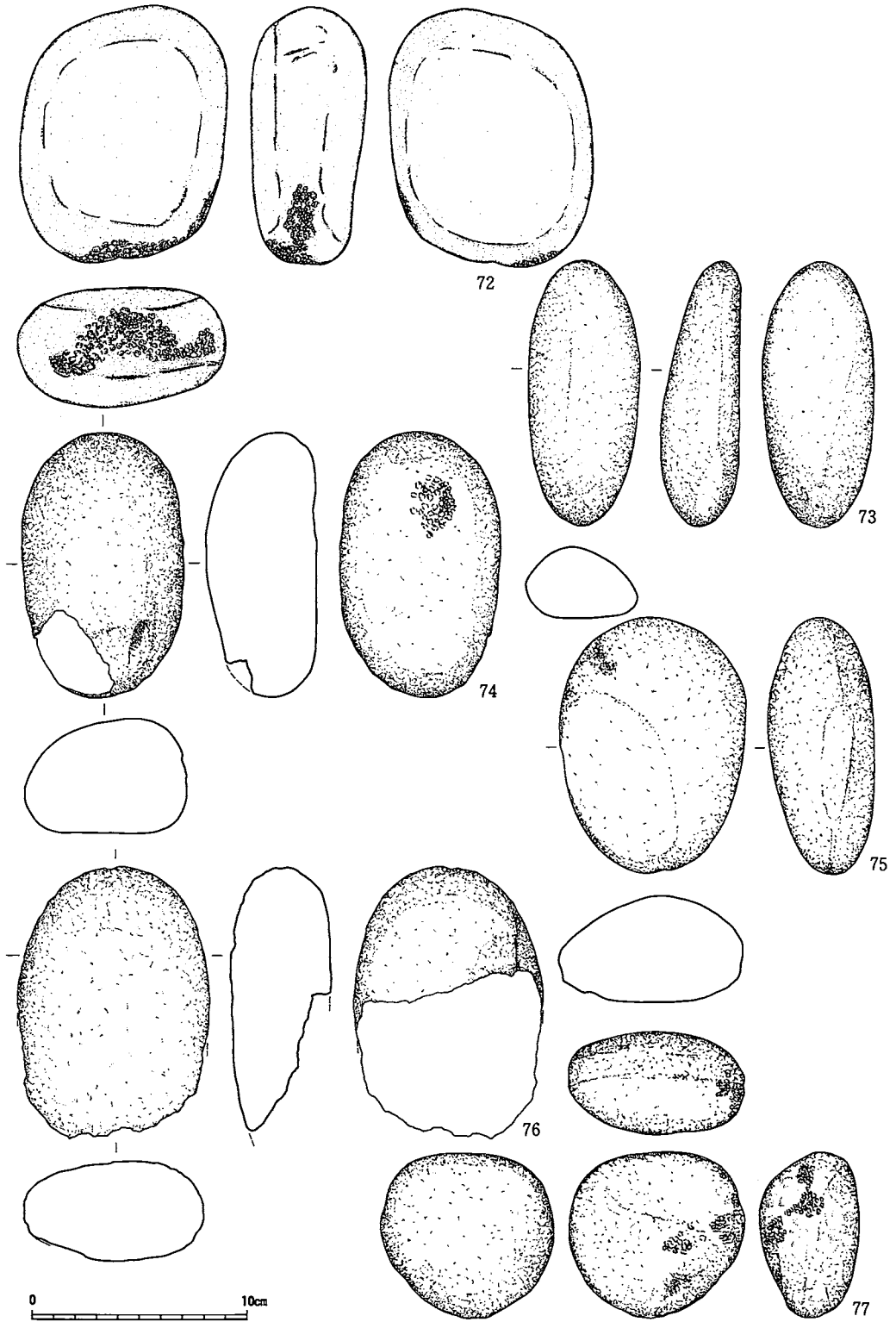
石皿・台石と磨石・敲石との数量の関係は、1：3の割合にある。つまり、石皿・台石1個に対して磨石・敲石が3個という数値が得られる。



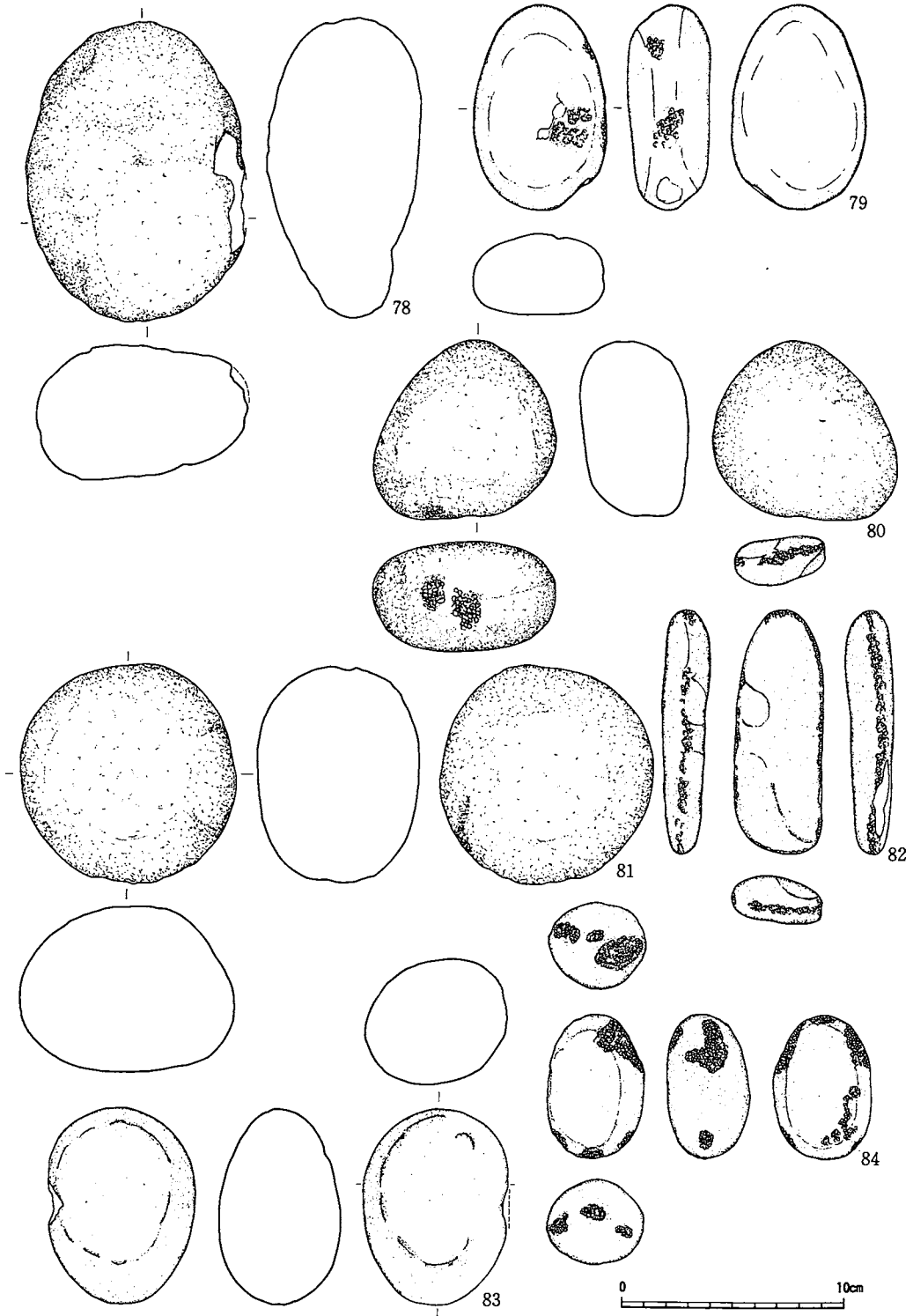
第95図 遺物分布図（磨石・敲石）



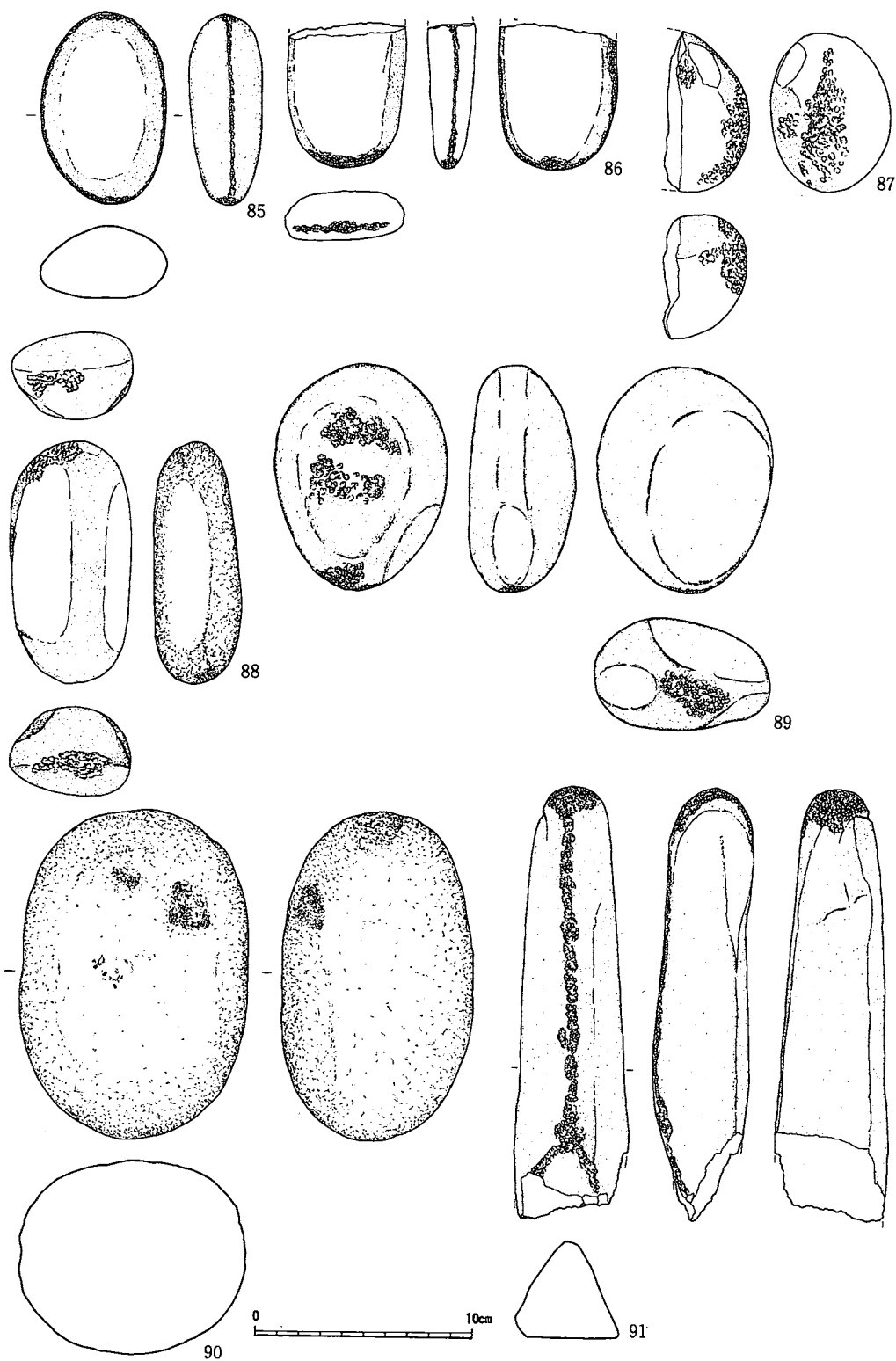
第96図 石器実測図



第97図 石器実測図



第98図 石器実測図



第99図 石器実測図

石皿は、そのほとんどが欠損している。また、その大きさは、中型のもの（98、102、103、107、108）と小型のもの（95～97、100、101、104）がある。これらの石器の作業面の状態では、窪みが顕著なもののみならず、比較的浅い窪みをもつものである。

台石は、石器表面に磨痕の他に敲打痕が観察されるもので99、105、106の3点がある。

二次加工ある不定形石器（第107図109～第108図119）

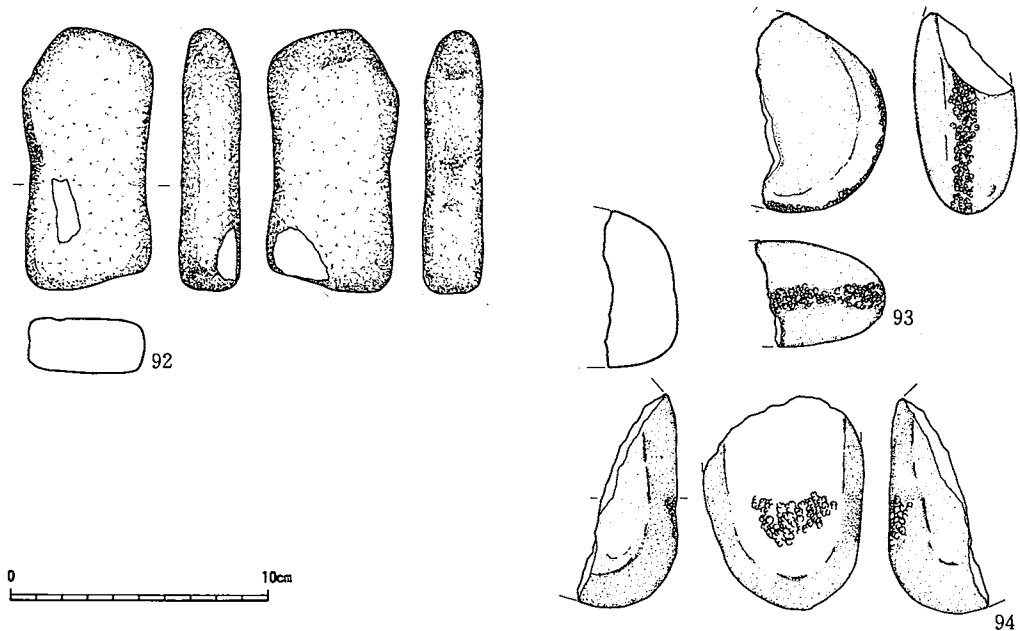
二次加工ある不定形石器は、19点出土した。その石器組成に占める割合は、7.4%である（第10表）。また、石材ごとの内訳は、黒耀石7点、珪岩10点、安山岩1点、砂岩1点である。

出土地点は、南北と中央部の大きく3ヶ所に分布する傾向が窺える（第106図）。

109は、ⅡB-1区で出土した黒耀石製の石器である。石器上半部及び右側縁部を大きく欠失しており、石器本来の全体形は不明である。調整加工は、細かく縁辺から入念に施され、石鏃の未加工品の可能性も指摘できる。

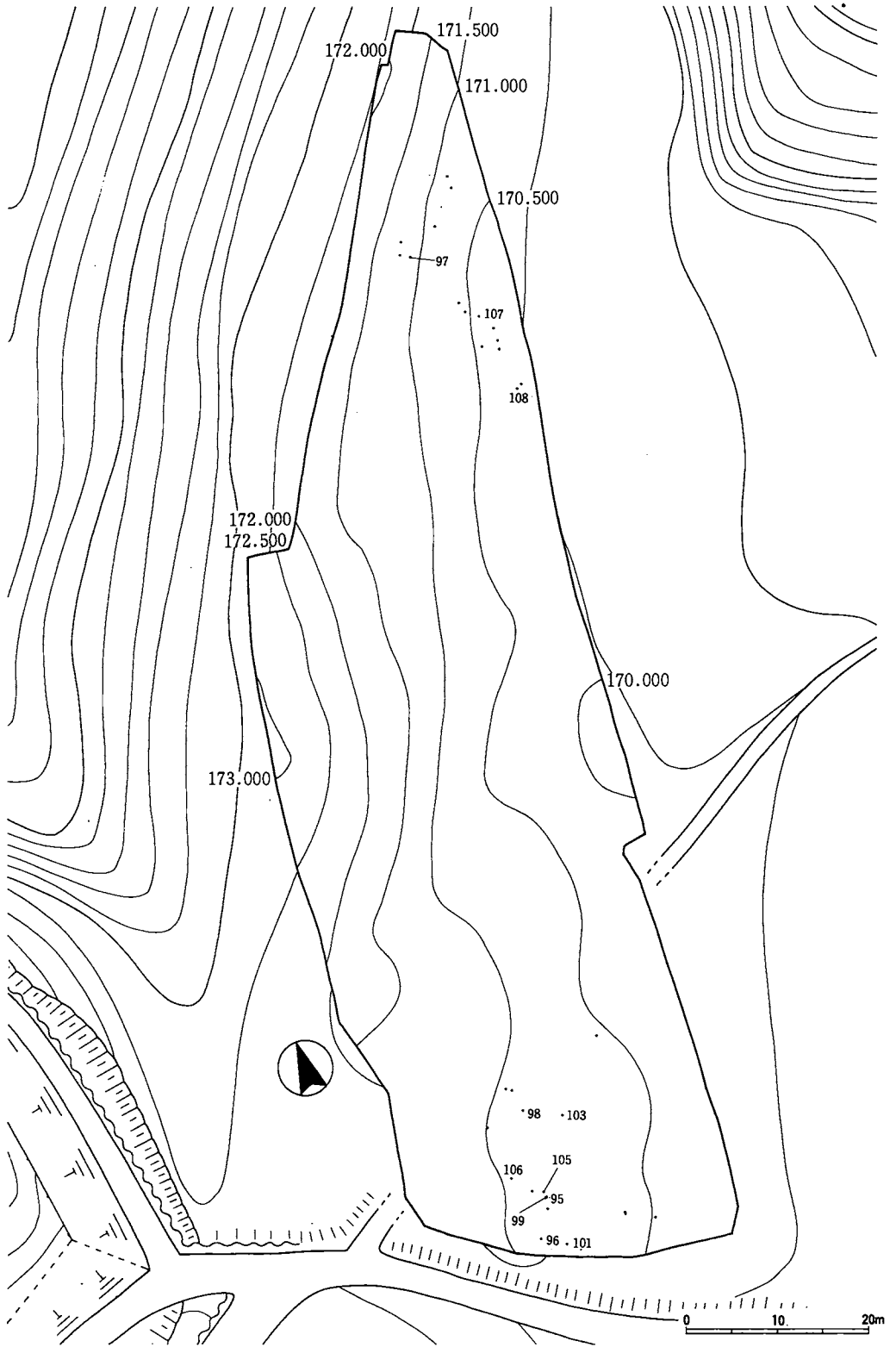
110は、VIC-25区で出土した黒耀石製の石器である。表面に礫面を残し、調整加工は、表裏両面とも縁辺から粗く施す。石器の全体形は、三角形を呈し石鏃の未加工品の可能性も指摘できるが、厚みがあり先端部の作り出しは明確でない。

111は、VB-18区で出土した珪岩製の石器である。幅広の剥片を素材とし、右側縁及び基部に調整加工が施される。石器の全体形は、三角形に近い形状を呈しているが、基部の調整加工が抉入状に施され、やや茎状に作り出されている。



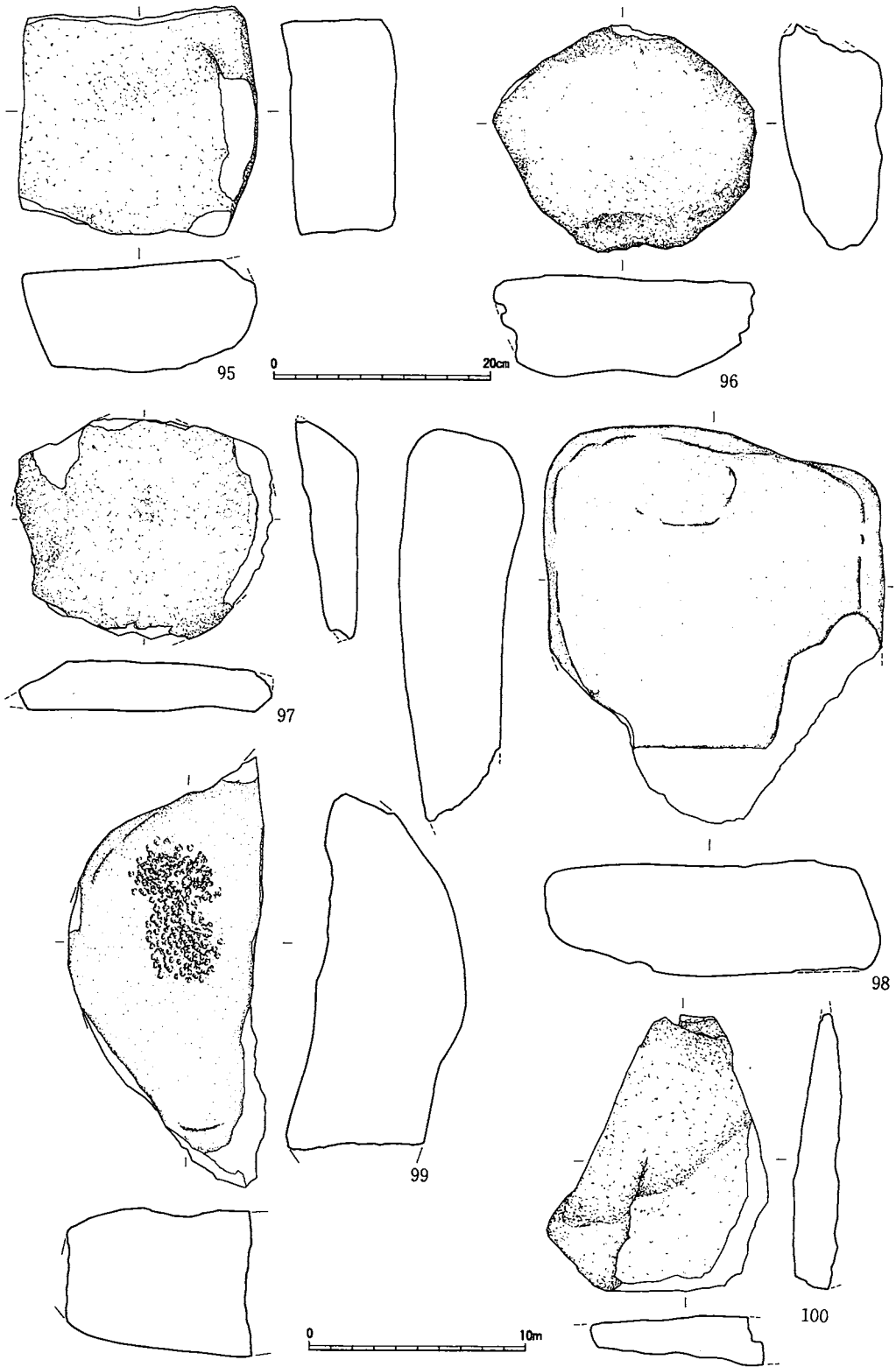
第100図 石器実測図

第三章 調査の成果

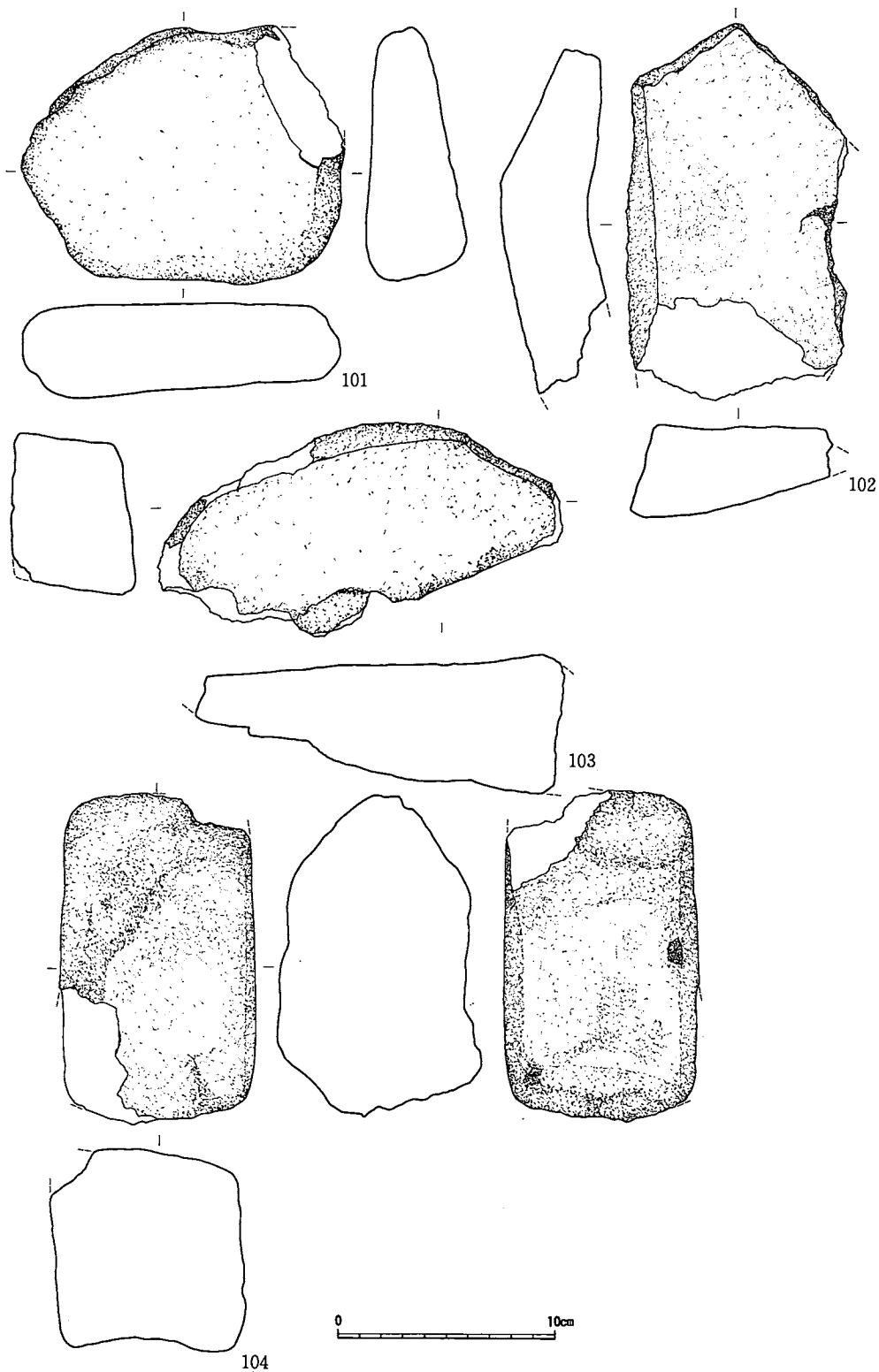


第101図 遺物分布図（石皿・台石）

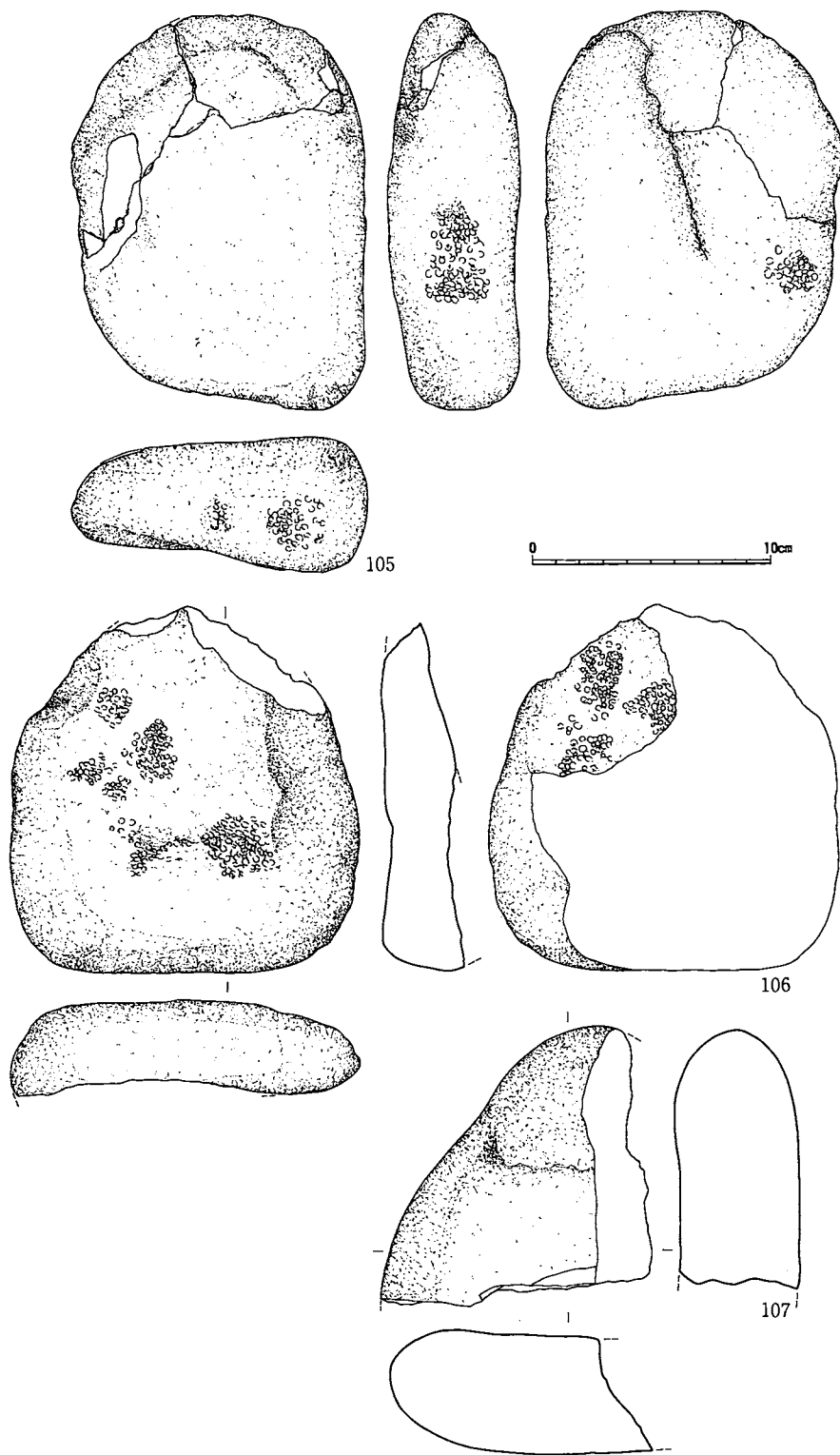
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第102図 石器実測図



第103図 石器実測図



第104図 石器実測図

112は、IV C-13区で出土した黒耀石製の石器である。横長剥片を素材とし、左側縁に調整加工を施す。石器の断面形は、三角形ないしは台形を呈する。

113は、VII C-25区で出土した珩岩製の石器である。幅広の剥片を素材とし、右側縁部裏面側に平坦剥離による調整加工が観察される。

114は、V B-22区で出土した黒耀石製の石器である。縦長剥片を素材とし、打点部を上部置き左側縁部裏面側に調整加工を施す。

115は、VII C-5区で出土した黒耀石製の石器である。幅広の縦長剥片を素材とし、右側縁裏面側に調整加工を施す。打面は、複剥離面である。

116は、IV C-5区で出土した黒耀石製の石器である。厚みのある縦長剥片を素材とし、表面稜上より調整加工を施す。石器の断面形は、厚みのある三角形を呈する。打面は、単剥離面である。

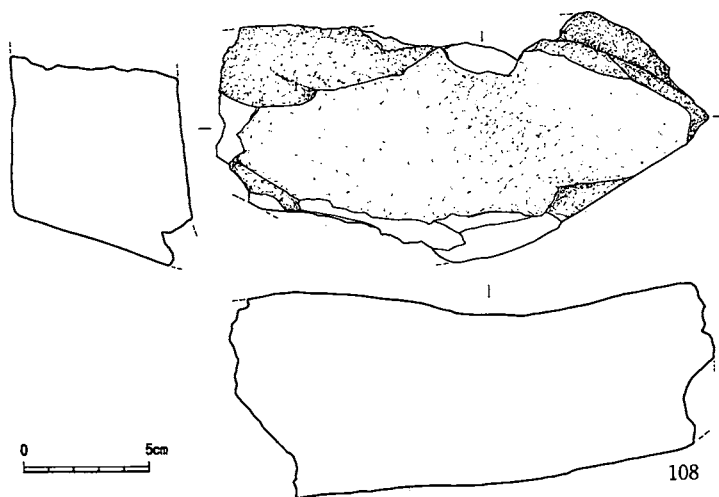
117は、II B-2区で出土した珩岩製の石器である。幅広の剥片を素材とし、右側縁上部に調整加工を施す。打面は、単剥離面である。

118は、III B-6区で出土した珩岩製の石器である。厚みのある幅広の縦長剥片を素材とし、右側縁の表面側に調整加工を施す。打面は、単剥離面である。

119は、II B-1区で出土した黒耀石製の石器である。幅広の剥片を素材とし、先端部表面側に調整加工を施す。表面には、大きく礫面を残す。

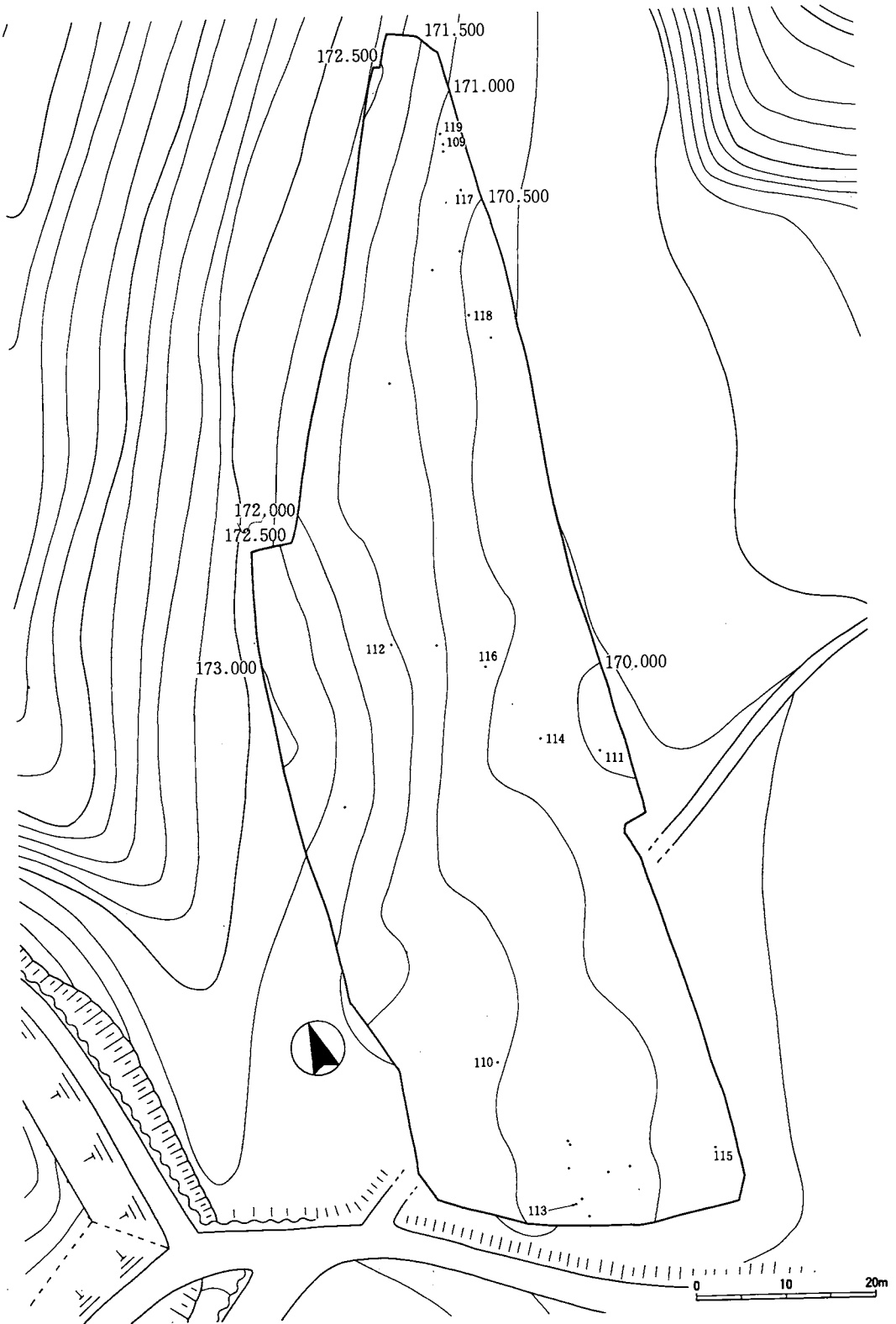
使用痕ある剥片（第110図120～第114図149）

使用痕ある剥片は、刃こぼれ状の痕跡のみが観察されるもので、62点が出土した。その石器組成に占める割合は、24.3%である。また、石材ごとの内訳は、黒耀石16点、珩岩39点、安山

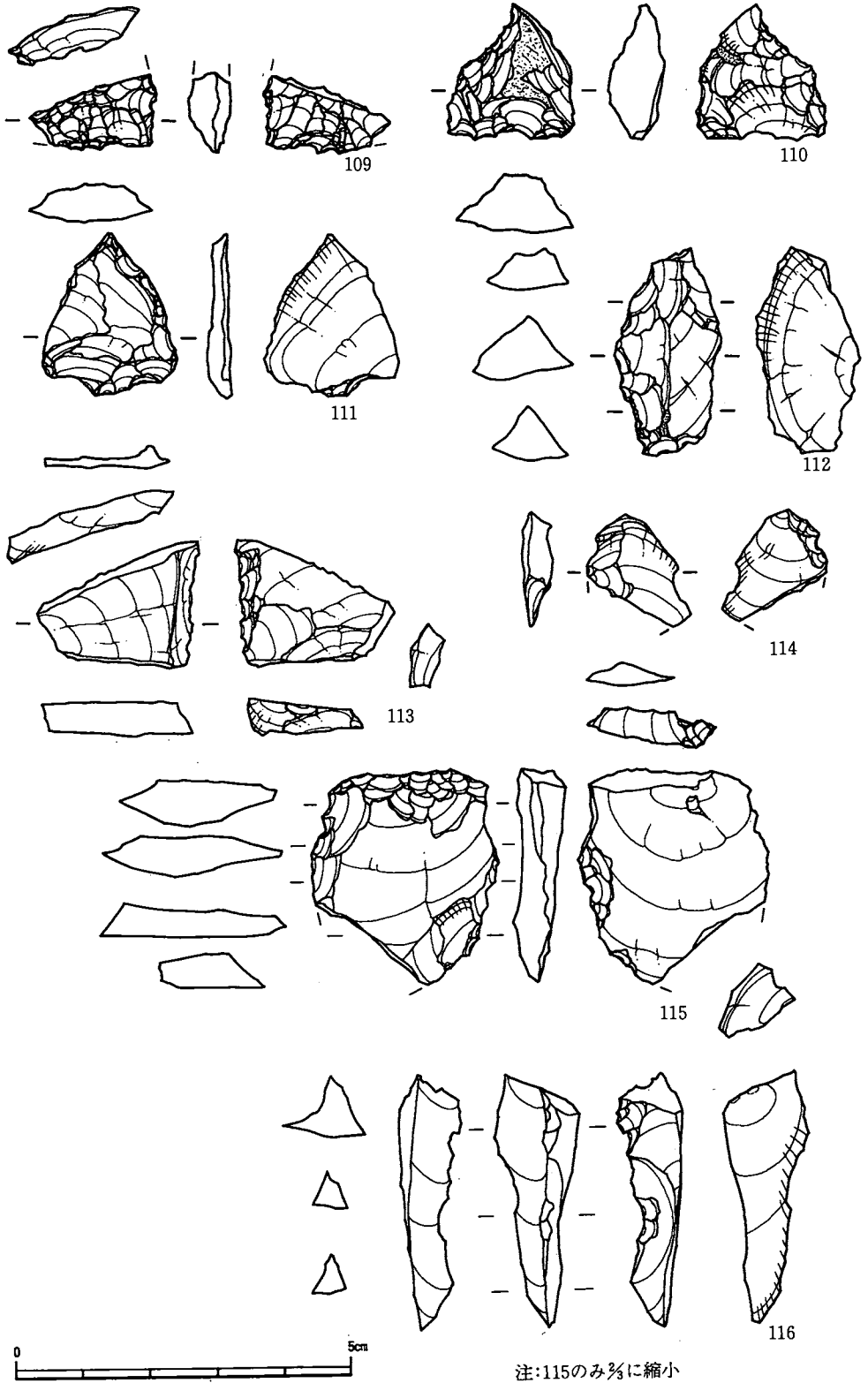


第105図 石器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



第106図 遺物分布図（二次加工ある不定形石器）

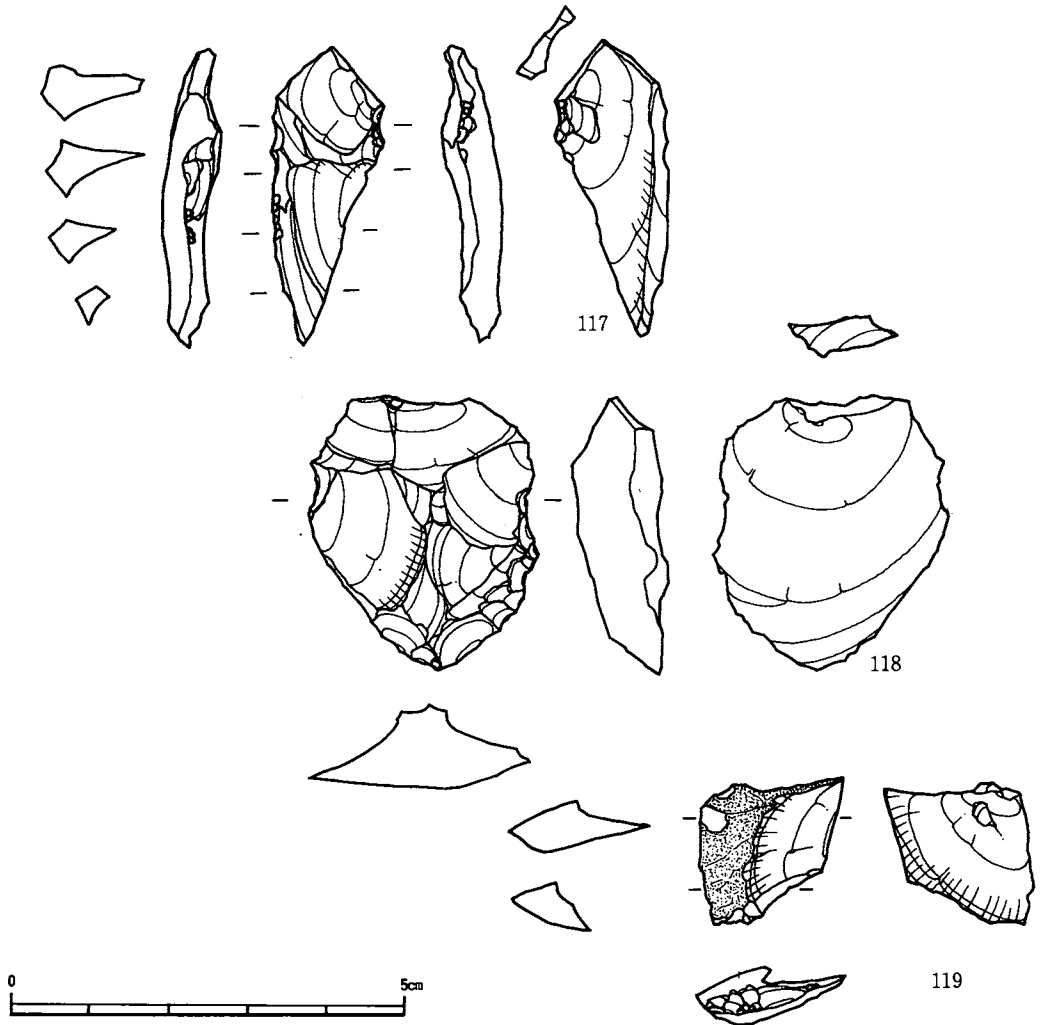


第107図 石器実測図

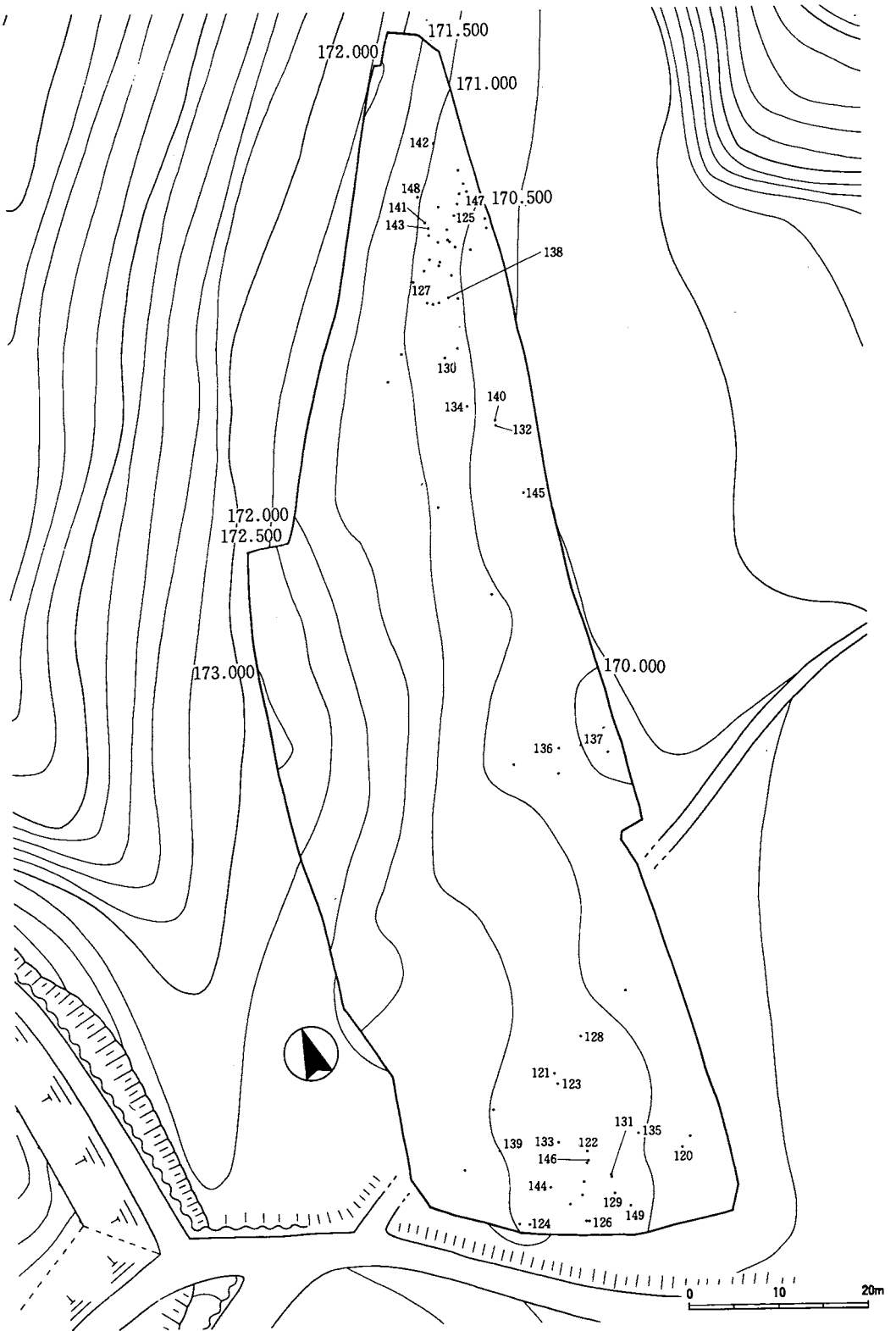
岩4点、砂岩3点である。その分布は、南北の遺物集中部に偏在し、一部中央部に散在する傾向が窺える（第109図）。

これらの石器に使用された剥片は、その形状から両側縁がほぼ平行している刃器状剥片を使用しているもの（123、138、149）と不整形の縦に長い剥片（121、122、125、130～132、134、136、137、144、146、147）と不整形の横に長い剥片（120、126～128、133、135、139、141～143、148）がある。使用痕の部位からは、剥片の一侧縁にみられるもの（121、123、124、127、137、138、140～142、147、149）や両側縁にみられるもの（130、134）、先端部にみられるもの（120、128、131、132、135、139、143、144、148）、一侧縁または両側縁と先端部にみられるもの（122、125、126、133、136、145、146）とがある。

また、石器表面に残された剥離痕は、同一方向、上下方向、直行するもの、上下左右方向、

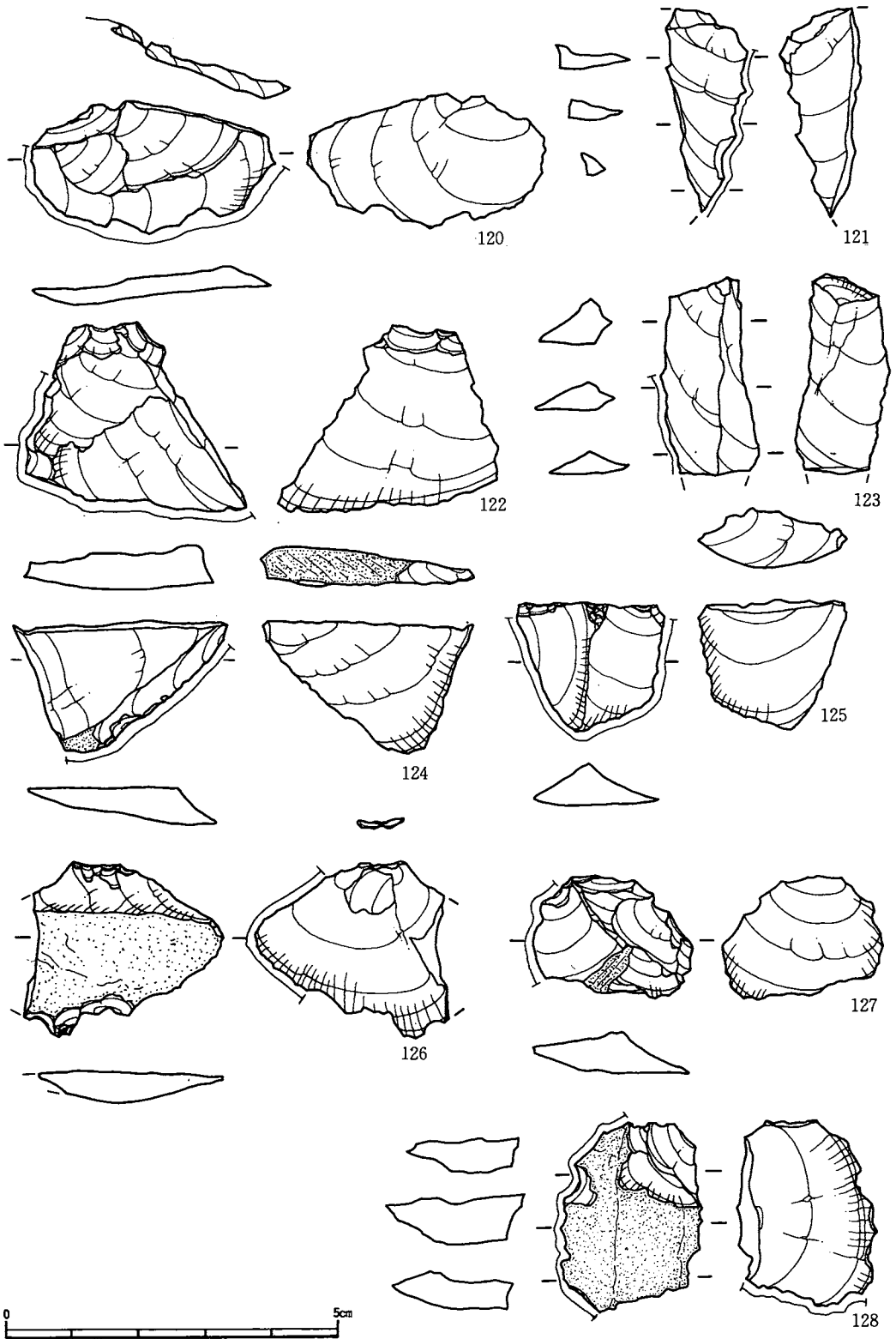


第108図 石器実測図

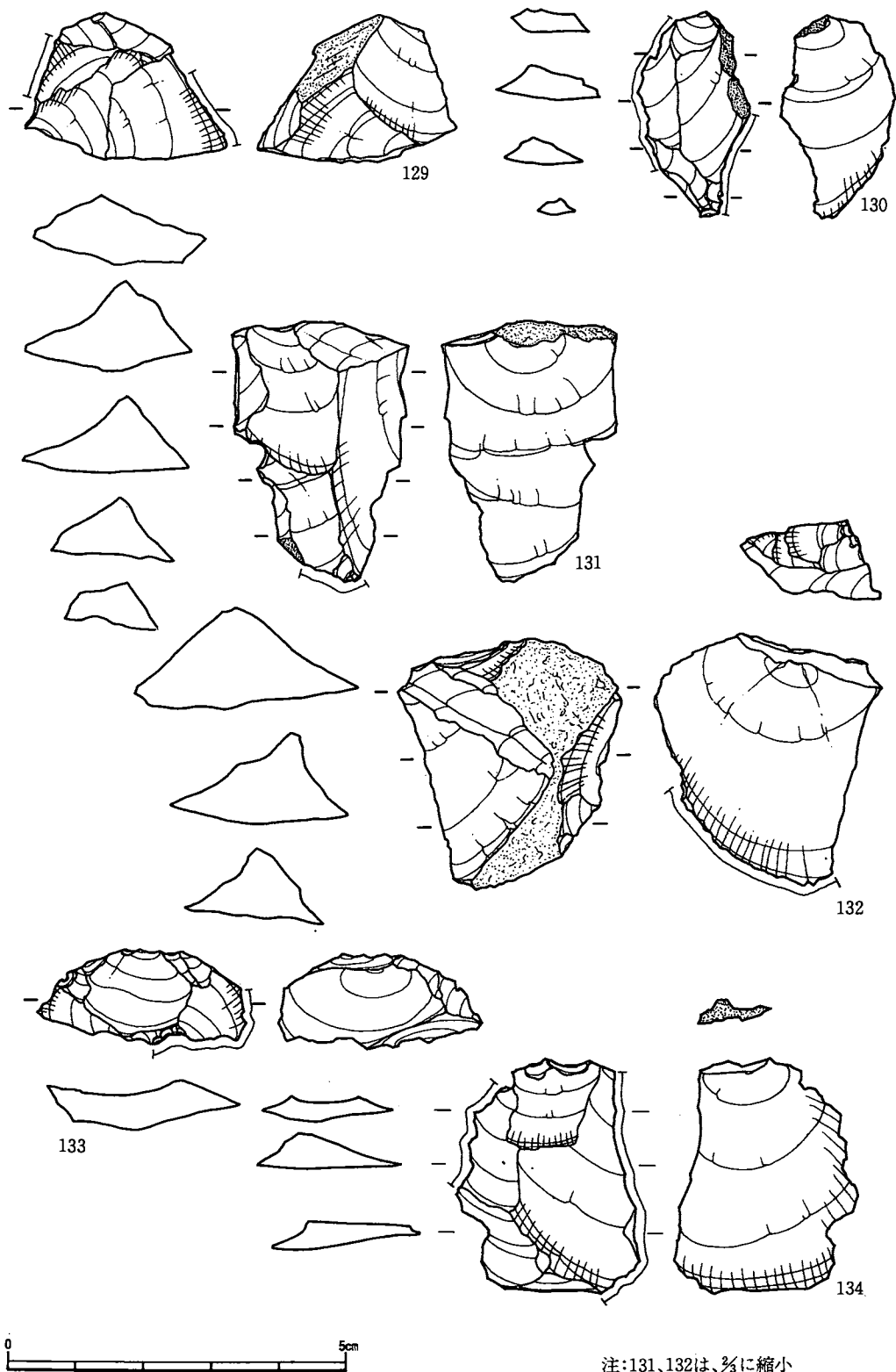


第109図 遺物分布図（使用痕ある剥片）

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

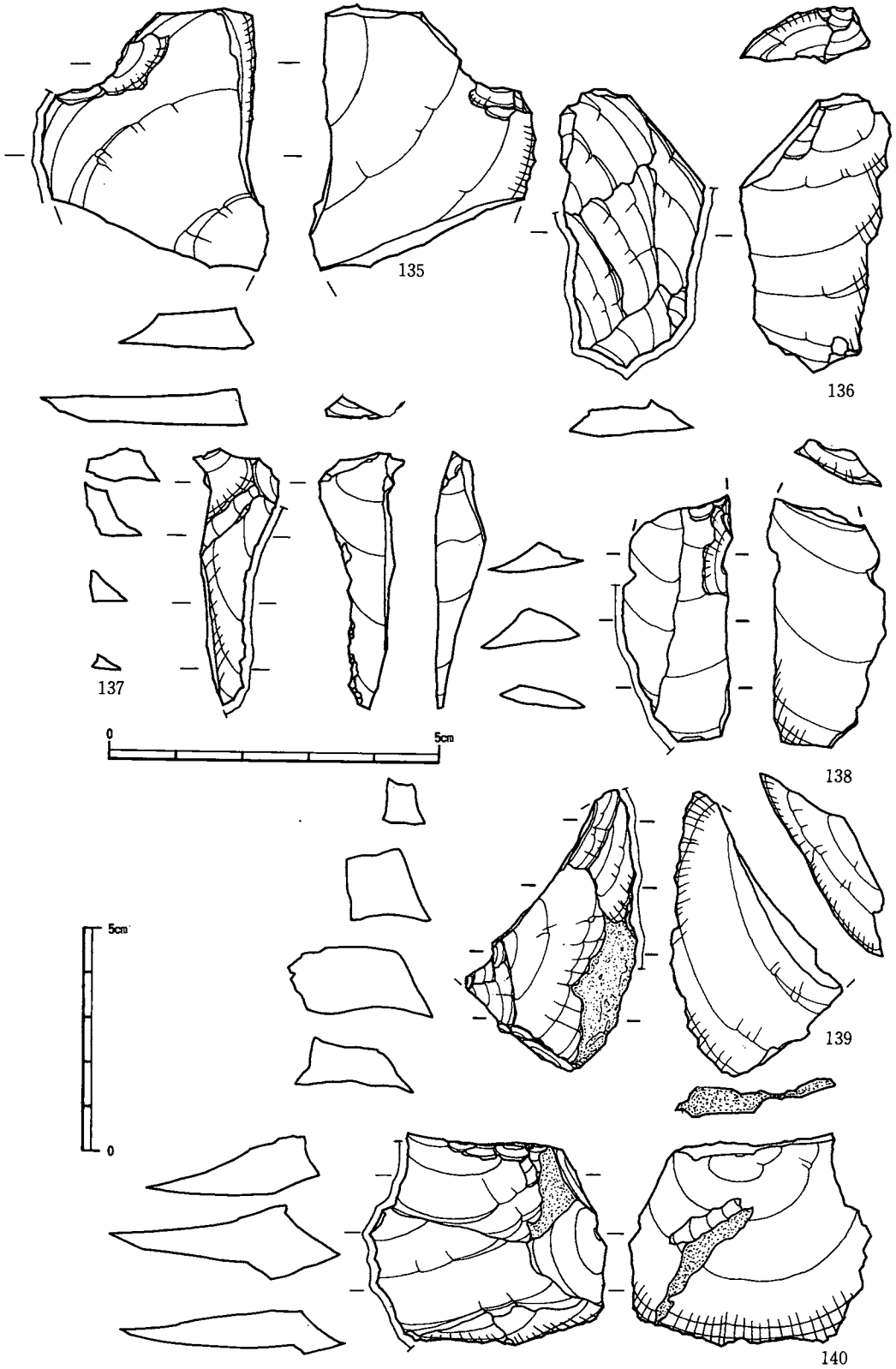


第110図 石器実測図

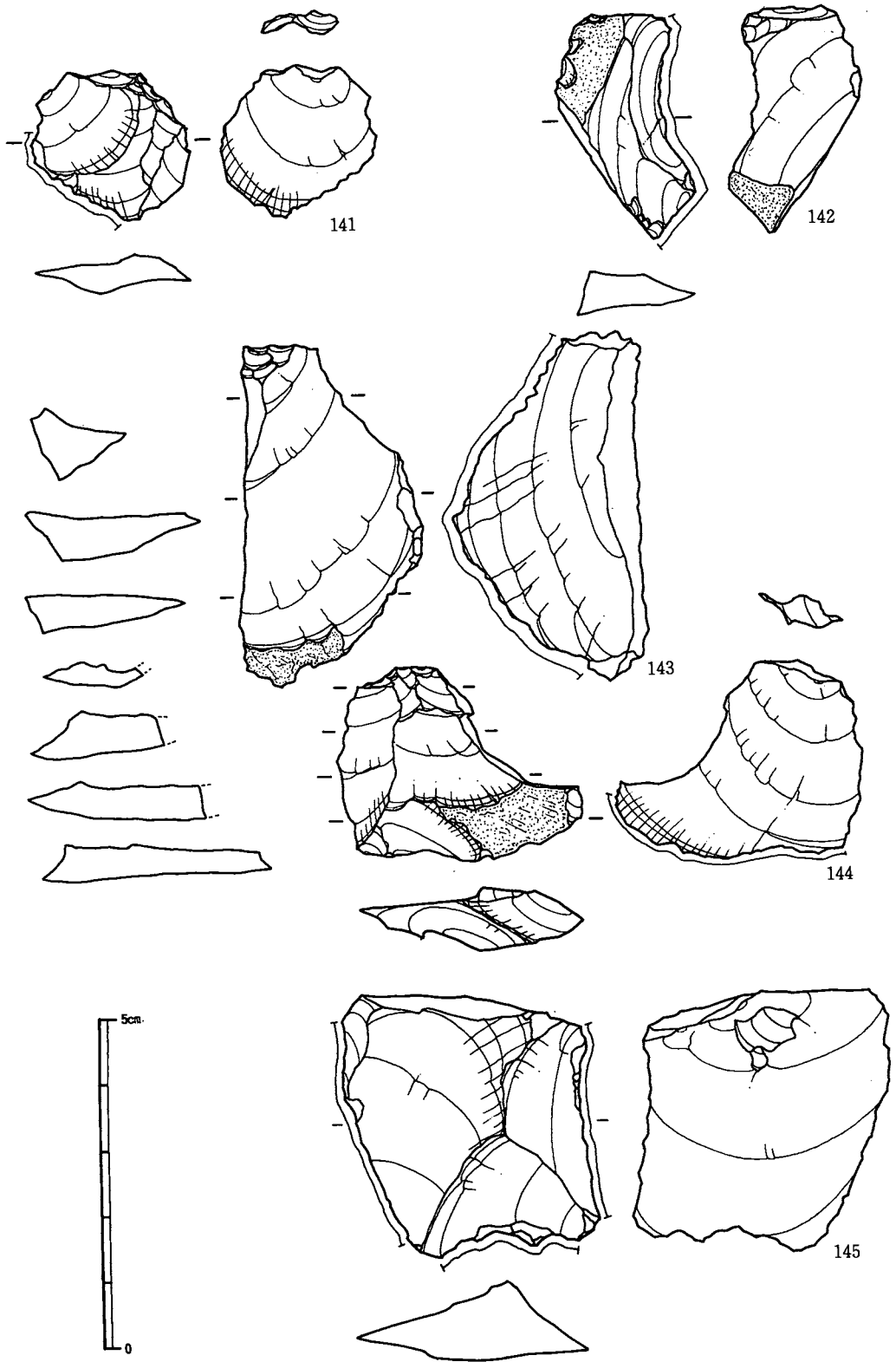


注:131、132は、 $\frac{1}{2}$ に縮小

第111図 石器実測図



第112図 石器実測図



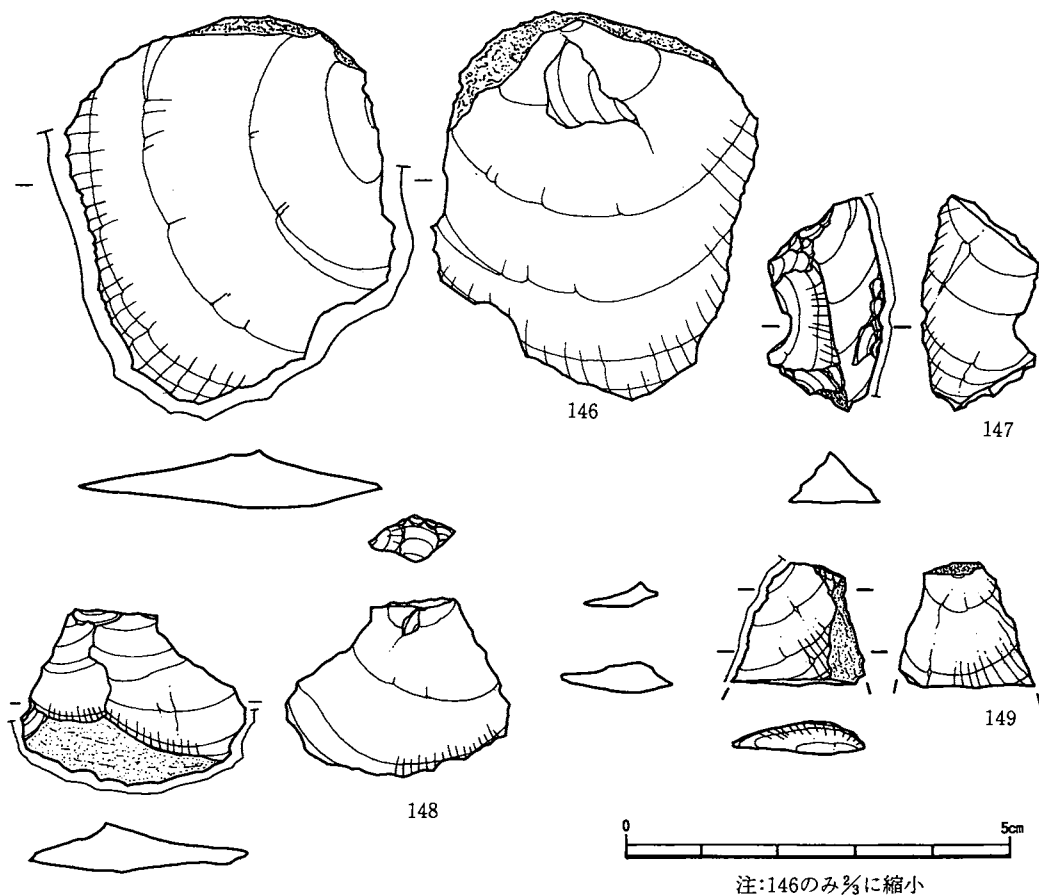
第113図 石器実測図

求心的な多方向と様々である。

石核 (第116図150~第117図155)

石核・原石は、61点出土した。その全出土資料に占める割合は4.3%である。石材ごとの内訳では、黒耀石33点、珪岩22点、安山岩6点で、黒耀石及び珪岩の割合が高く、石核・原石の90.2%を占める (第10表)。石核・原石の分布は、南北の遺物集中部に偏在する傾向が窺える。また、北側で検出された石核・原石の分布の在り方は、他の石器類の分布域をとりまく形でみられ、やや標高の高い西側に散在する。

これらの石核は、円礫や分割礫を素材とするもの (151、153、155) と剥片を素材とするもの (150、152、154) がある。剥片剥離の状態からは、打面を縁辺に沿って頻繁に転移し求心的な剥離痕を残すもの (150、154) や礫面を打面とし打面転移を頻繁に行なわないもの (151)、分割面や礫面を打面とし90°の打面転移を行なうもの (153)、対向する90°、180°の打面転移を行なうもの (152)、打面転移を行なわず一定方向の剥片剥離を行なうもの (155) がある。



第114図 石器実測図

第三章 調査の成果

第13表 石器計測表

No	器種	石材	計 測 値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
64	磨石・敲石	凝灰岩	8.20	5.70	3.00	200	ⅡB-8	4183
65	"	"	7.70	7.70	4.80	447	ⅣB-25	75
66	"	"	11.40	8.50	4.70	570	ⅦC-24	4327
67	"	"	3.80	5.70	3.30	80	ⅢB-7	1080
68	"	"	6.65	6.00	1.90	110	ⅦD-1	3822
69	"	"	7.80	6.50	4.50	300	ⅡB-20	1065
70	"	砂岩	14.40	4.80	2.80	295	ⅢB-20	1117
71	"	"	9.60	6.50	2.50	169	ⅡB-14	1032
72	"	凝灰岩	11.90	9.60	5.40	930	ⅡB-8	4182
73	"	砂岩	12.20	5.20	3.60	300	ⅡB-8	3663
74	"	凝灰岩	12.20	7.60	5.20	685	ⅡB-9	637
75	"	"	11.80	8.70	5.00	625	ⅡB-14	1040
76	"	"	12.70	8.90	4.60	500	ⅢB-7	777
77	"	"	7.70	8.20	4.70	370	ⅡB-1	4716
78	"	"	13.50	9.90	7.10	1100	ⅦD-7	4235
79	"	"	9.20	6.00	3.70	290	ⅦC-23	4630
80	"	"	8.10	8.40	4.90	455	ⅡB-3	1440
81	"	"	9.90	9.80	7.40	1010	ⅡB-9	688
82	"	砂岩	11.00	4.00	2.10	125	ⅡB-9	636
83	"	凝灰岩	8.90	6.70	5.50	420	ⅢB-6	769
84	"	砂岩	6.50	4.40	3.90	140	ⅡB-8	3191
85	"	"	8.60	5.70	3.35	240	ⅢB-15	1105
86	"	"	6.50	5.40	2.20	120	ⅡB-10	488
87	"	"	7.20	3.80	5.50	180	ⅡB-3	3260
88	"	"	10.90	5.50	4.00	380	ⅡB-9	707
89	"	凝灰岩	10.20	8.00	5.00	401	ⅦD-4	4242
90	"	"	14.90	10.40	8.80	1860	ⅢB-12	679
91	"	砂岩	19.60	5.20	4.40	525	ⅥC-5	3719
92	"	凝灰岩	10.00	5.10	2.20	205	ⅡB-9	3634
93	"	砂岩	7.70	5.00	4.10	150	ⅡB-8	3202
94	"	凝灰岩	8.20	3.90	6.20	200	ⅦD-7	4237
95	石皿・台石	"	21.00	21.80	10.50	800	ⅦC-24	4492
96	"	"	20.60	23.80	9.30	3000	ⅦD-4	3957
97	"	"	20.00	23.40	9.80	3000	ⅡB-9	640
98	"	"	25.40	18.00	5.50	2070	ⅦC-21	3964
99	"	"	17.50	9.00	6.90	1000	ⅦC-23	4632
100	"	"	12.60	10.00	2.20	310	ⅦB-3,4	2号配石土坑
101	"	"	11.50	14.60	4.40	1025	ⅦC-25	4307
102	"	"	10.10	16.90	4.70	1860	ⅢB-25	2号集石
103	"	"	18.60	9.50	6.20	935	ⅦC-16	4001
104	"	"	14.80	8.90	9.40	900	ⅢB-25	2号集石
105	"	"	16.50	12.50	5.60	1465	ⅦC-23	4634
106	"	"	15.20	14.70	4.00	875	ⅦD-3	5399
107	"	砂岩	11.60	11.50	5.30	820	ⅢB-6	3347
108	"	凝灰岩	19.90	9.60	8.30	1850	ⅢB-8	753

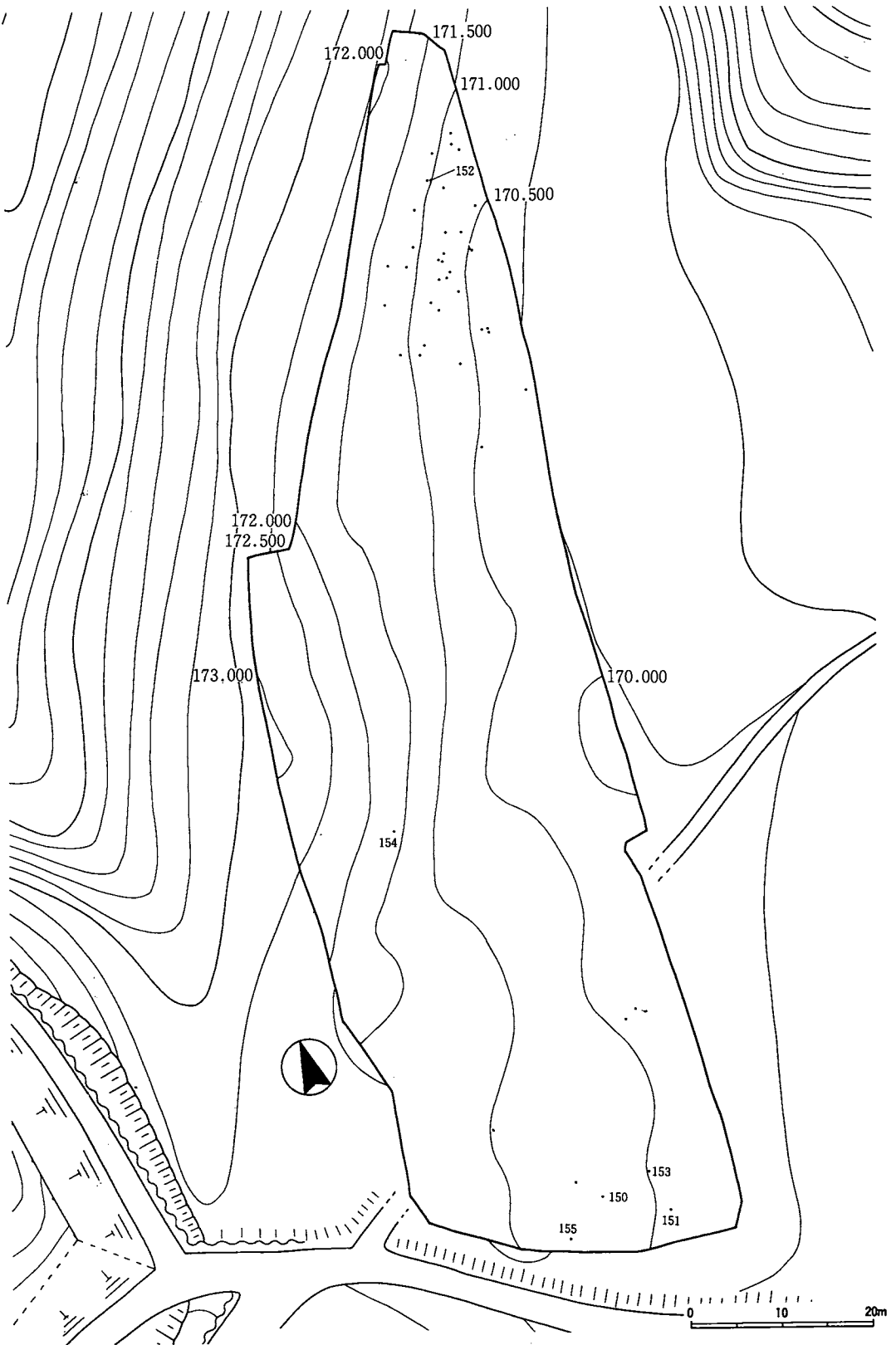
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

第14表 石器計測表

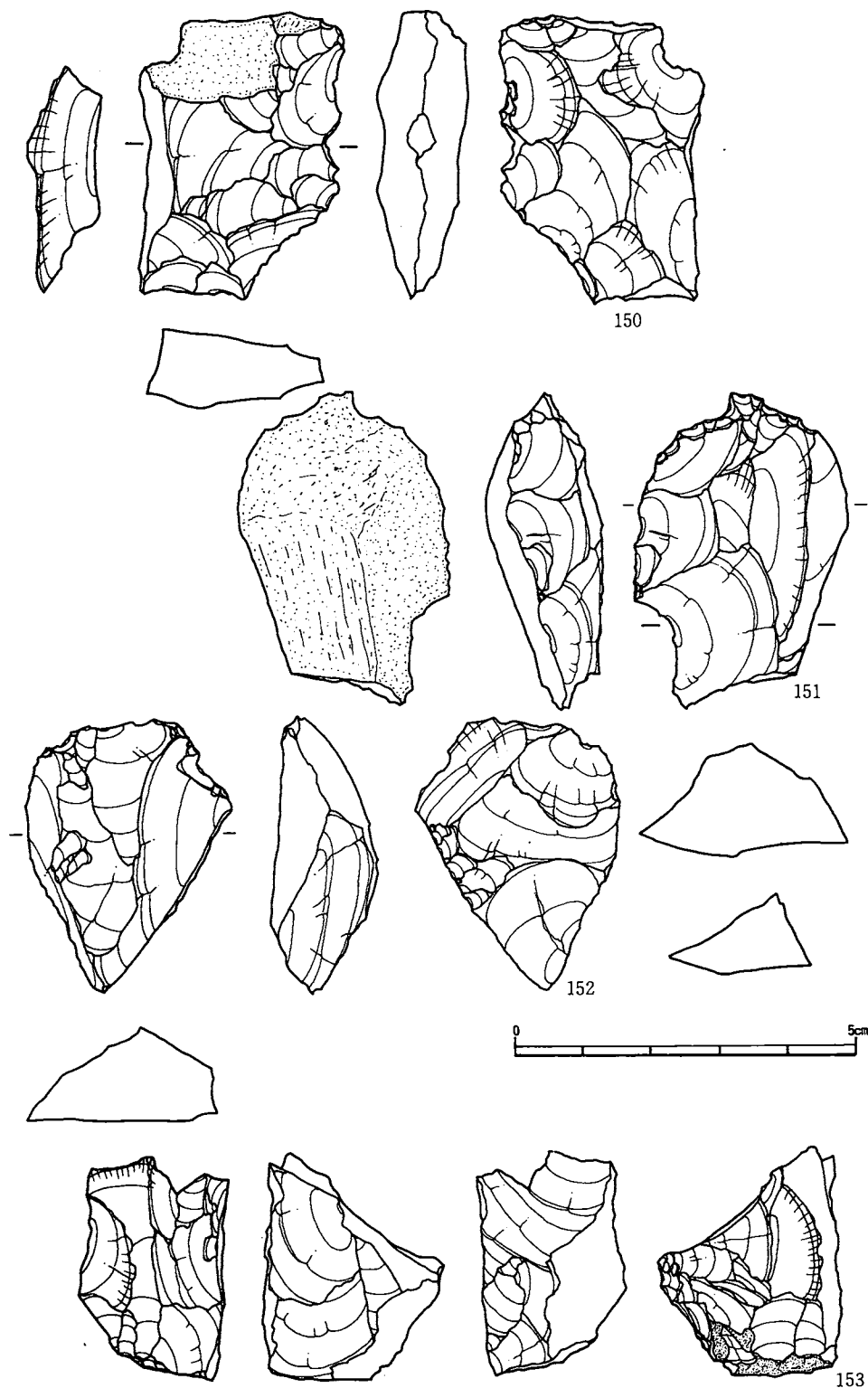
No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
109	二次加工ある不定形石器	黒耀石	1.50	1.80	0.59	0.95	II B-1	4700
110	"	珪岩	1.92	1.80	0.50	1.00	IV C-25	3737
111	"	"	2.40	2.00	2.35	1.30	V B-18	100
112	"	黒耀石	3.80	1.60	0.92	3.50	IV C-13	27
113	"	珪岩	1.90	2.43	0.53	3.25	VII C-25	4298
114	"	黒耀石	1.68	1.58	0.35	0.40	V B-25	96
115	"	"	3.20	2.80	0.66	18.60	VII C-5	549
116	"	珪岩	3.80	1.20	1.00	2.80	IV C-5	80
117	"	"	3.80	0.86	0.72	2.90	II B-2	3550
118	"	"	3.40	2.80	1.22	9.00	III B-6	3346
119	"	黒耀石	1.90	1.90	0.63	1.50	II B-1	4874
120	使用痕ある剥片	珪岩	2.00	3.70	0.58	2.30	VII C-4	3447
121	"	"	3.10	1.20	0.35	1.10	VII C-16	4000
122	"	"	2.90	3.30	0.70	4.50	VII C-18	4611
123	"	"	3.00	1.50	0.70	1.80	VII C-16	3999
124	"	"	2.00	3.70	0.58	2.30	VII D-4	4245
125	"	"	1.90	2.20	0.60	2.25	II B-3	3619
126	"	"	2.60	3.00	0.50	2.60	VII C-25	4280
127	"	"	1.90	2.40	0.65	2.00	II B-14	1024
128	"	"	2.88	2.15	0.73	3.95	VI C-15	3725
129	"	"	2.20	2.90	1.00	4.60	VII C-20	3477
130	"	黒耀石	3.00	1.70	0.50	1.40	III B-11	1317
131	"	珪岩	5.70	4.00	2.00	32.00	VII C-14	4599
132	"	"	5.50	5.00	2.20	48.20	III B-14	1091
133	"	"	1.40	3.10	0.80	1.95	VII C-18	3413
134	"	"	1.40	3.10	0.80	1.95	III B-13	746
135	"	"	3.82	3.12	0.66	10.00	VII C-8	3509
136	"	"	4.18	2.12	0.66	5.40	V B-23	91
137	"	"	3.86	1.00	0.46	1.90	V B-18	98
138	"	"	3.70	1.60	0.60	3.00	II B-10	3050
139	"	"	6.35	3.85	1.55	29.55	VII D-2	5225
140	"	"	4.20	5.15	1.35	20.05	III B-14	1089
141	"	"	2.28	2.40	0.60	1.70	II B-8	4510
142	"	"	3.40	2.00	0.63	4.35	II B-1	5001
143	"	"	5.10	2.85	1.10	10.00	II B-8	4446
144	"	"	4.40	5.63	1.08	20.65	VII D-5	4482
145	"	黒耀石	4.00	3.66	1.20	17.90	IV B-11	1115
146	"	"	4.70	2.20	1.15	8.30	VII D-3	3774
147	"	珪岩	2.73	1.50	0.63	2.10	II B-3	3591
148	"	黒耀石	2.30	2.90	0.70	3.10	II B-7	4423
149	"	"	1.60	1.90	0.40	0.90	VII C-15	3469

このように、様々な形態の石核が検出されているが石核に残された剥離面からは、不整形の

第三章 調査の成果



第115図 遺物分布図（石核）



第116図 石器実測図

横に長い幅広の剥片を剥出している点で共通している。

(3) 石製品・土製品 (第121図156～第122図163)

上記してきた土器・石器の他に、特殊な遺物として石製品4点と土製品5点が出土した。

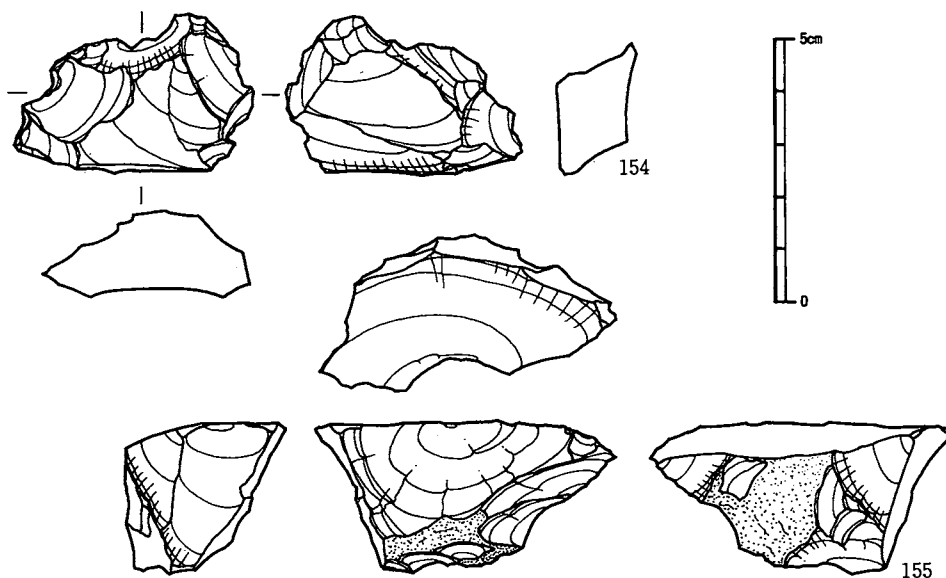
以下、遺物ごとに説明を加えていく。

156は、ⅡB-1区で出土した異形石器である。石材は、黒耀石である。その形態は、石鏃に類似するが、両側縁に抉入状の調整加工を施す。先端部をわずかに欠失している。横断面の形状は、凸レンズ状を呈する。

157は、ⅦD-9区で出土した異形石器である。石材は、黒耀石である。その形態は、両側縁とも大きく内湾する。調整加工は、細かく施されている。横断面の形状は、156と同様にやや厚みのある凸レンズ状を呈する。また、両側縁には、装着のためであろうか擦痕が観察される。

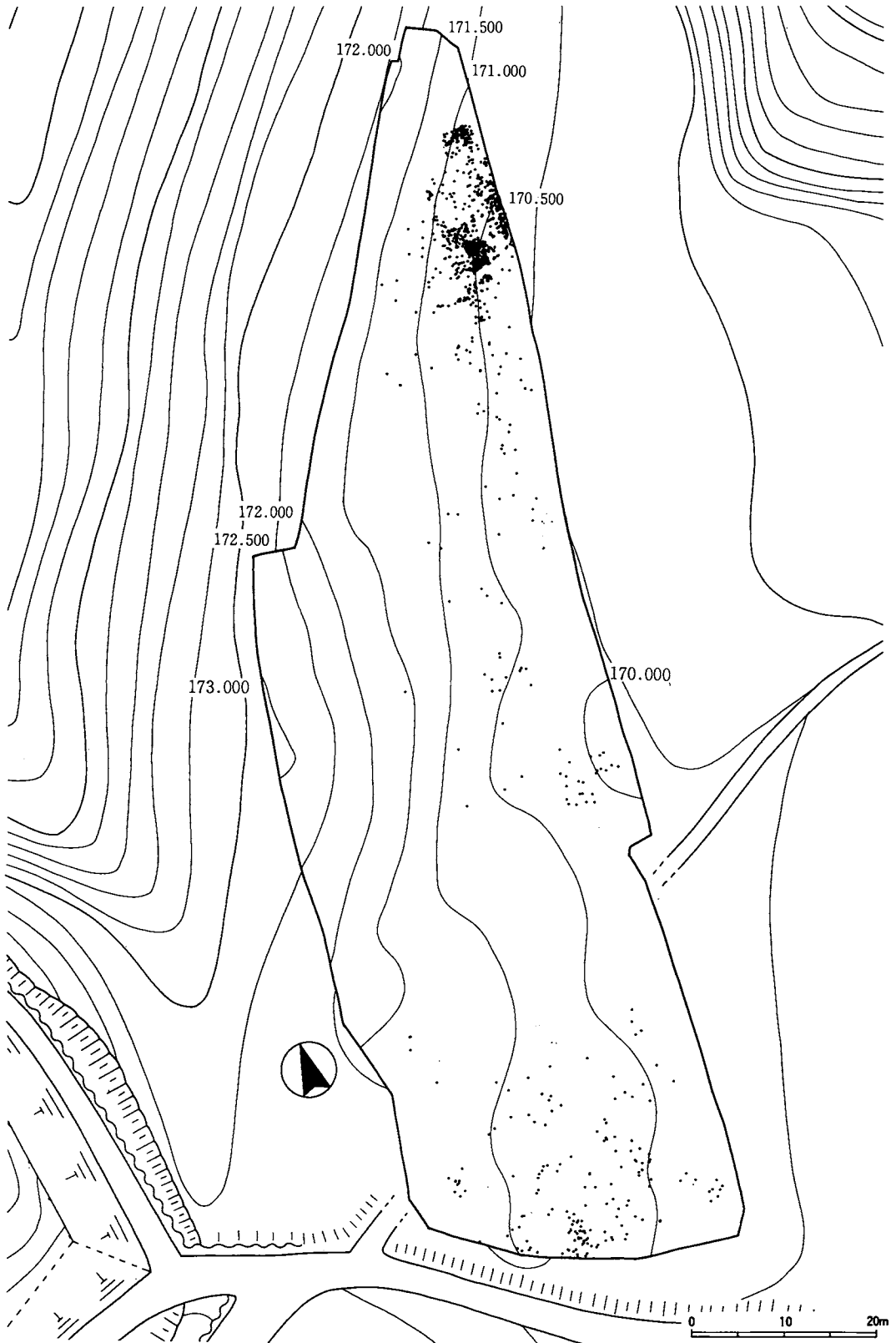
158は、ⅦC-24区で出土した異形石器である。石材は、珪岩である。その形態は、石鏃に類似する。しかし、先端部が作り出されず、両側縁に肩をもつ特異な形状を呈する。横断面の形状は、156、157より薄い凸レンズ状を呈する。

159は、ⅦC-18区で出土した異形石器である。石材は、砂岩である。扁平な小円礫を素材とし、上下両端に対向する小剥離痕が観察され、下端部には5条の刻みがみられる。また、左右両側にも2～3条の刻みが観察される。

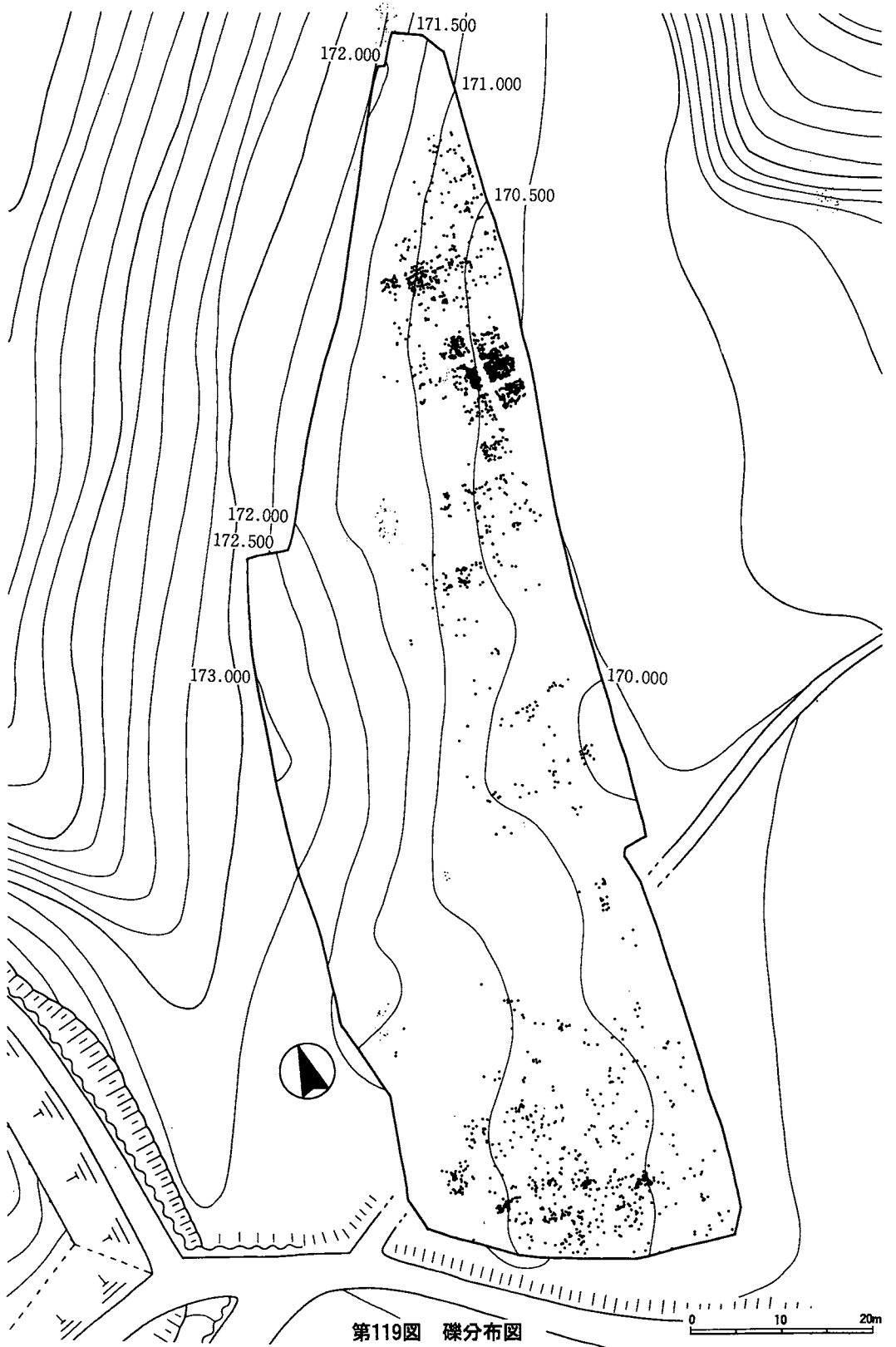


第117図 石器実測図

第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

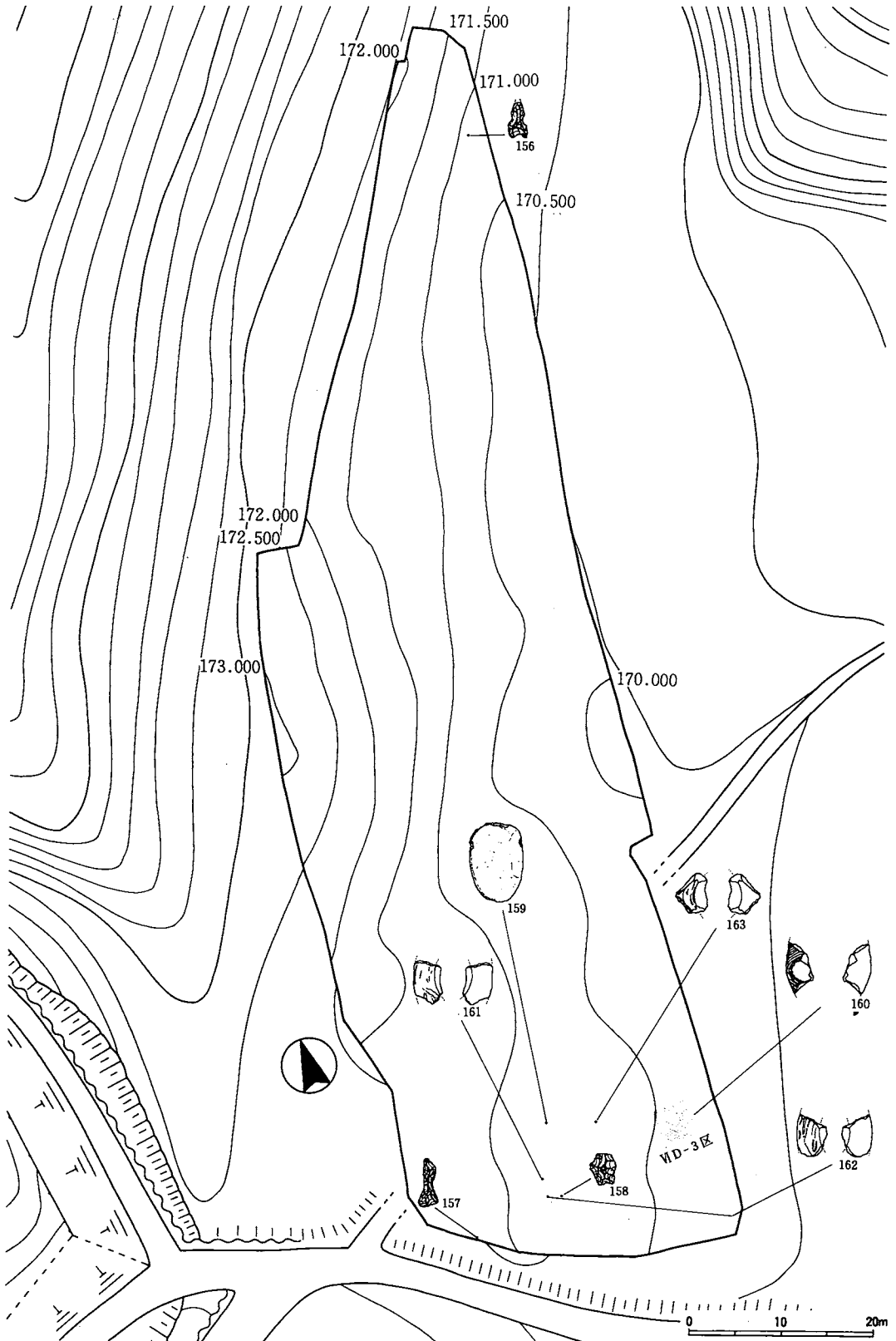


第118図 遺物分布図（剥片・碎片）



第119図 礫分布図

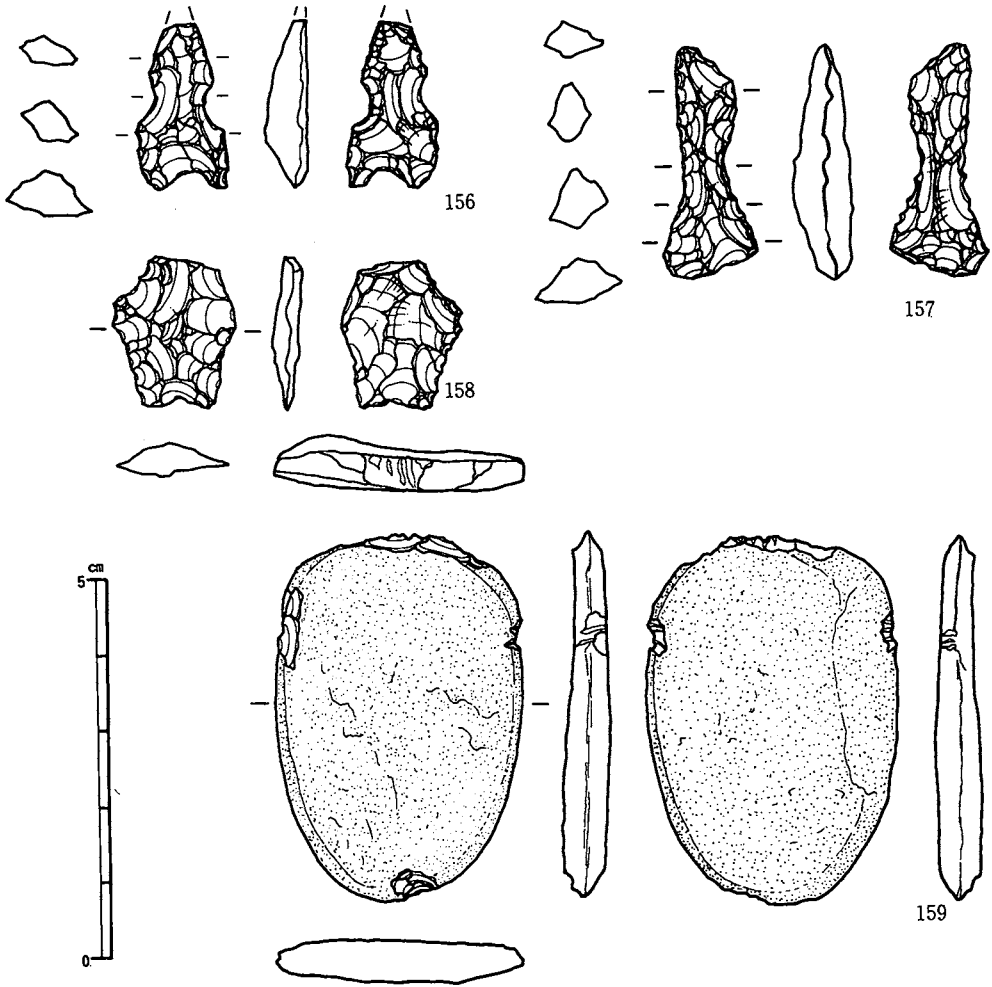
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物



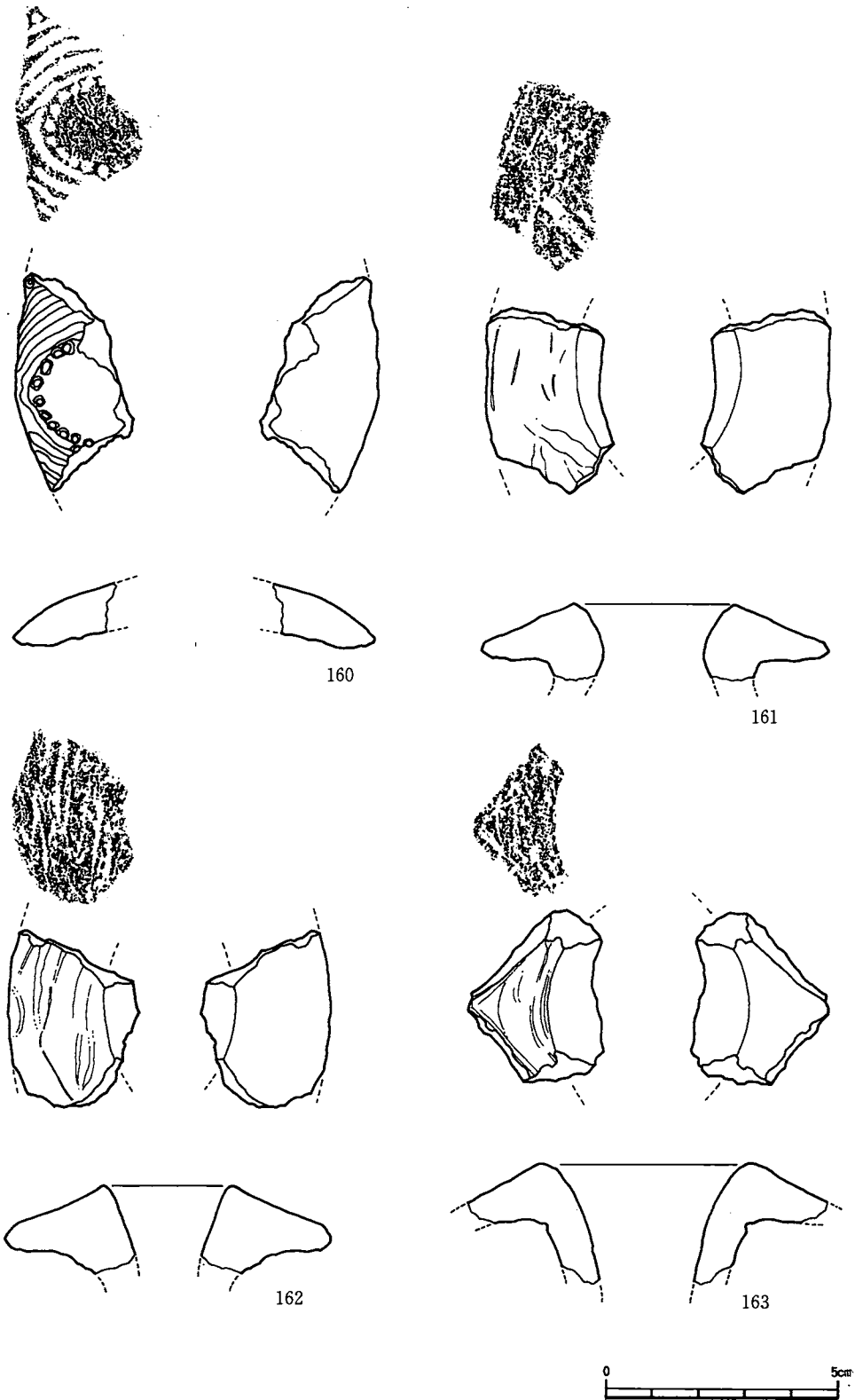
第120図 遺物分布図（石製品・土製品）

160は、ⅦD-3区で検出した土製品である。全体形の約 $\frac{1}{2}$ が残存し、復元径が直径約8cmである。内側を欠失しているため全体形は不明であるが、外縁径が小さいことから耳栓と考えられる資料である。その文様構成は、棒状の施文原体による連続刺突文と沈線文を曲線的に施文している。胎土は、1mm大の石英、長石をわずかに含み、器面の色調は内外面とも明褐色である。焼成は良好で、内器面側には整形段階の凹凸がみられる。

161は、ⅦC-23区で出土した土製品である。全体形の約 $\frac{1}{2}$ が残存し、外縁径が約7.5cm、内縁径が約3.4cmである。文様構成は、器面の状態からはっきりしないが、1条の沈線が斜方向に施文されている。胎土は、1mm大の石英、長石をわずかに含み、器面の色調は内外面とも明褐色である。焼成は良好である。形態的な特徴から、耳栓と考えられる資料である。



第121図 石製品実測図



第122図 土製品実測図

162は、ⅦC-23区で出土した土製品である。全体形の約 $\frac{1}{2}$ が残存し、外縁径が約7cm、内縁径が約3cmである。文様構成は、器面の状態からはっきりしないが、数条の沈線が横方向に施文されている。胎土は、1mm大の石英、長石をわずかに含み、器面の色調は内外面とも明褐色である。焼成は良好である。形態的な特徴から、耳栓と考えられる資料である。

163は、ⅦC-12区で出土した土製品である。全体形の約 $\frac{1}{4}$ が残存し、内縁径が約4.2cmである。外縁部を欠失しているため、全体形は不明である。文様構成は、器面の状態からはっきりしないが、数条の沈線を横方向に施文している。胎土は、1mm大の石英、長石をわずかに含み、器面の色調は内外面とも明褐色である。焼成は良好である。形態的な特徴から、耳栓と考えられる資料である。

3. まとめ

縄文時代早期は、アカホヤ火山灰層下の第Ⅴ～Ⅵa層を包含層とし、これまで示してきたような各種の遺構・遺物が検出された。これらの遺構・遺物は、厚く堆積した広域火山灰であるアカホヤ火山灰層下に包含されており、比較的良好な状態である。このことから他地域の遺構・遺物との比較検討を行なううえで、極めて良好な資料であるといえる。

検出された遺構としては、集石遺構6基、配石土坑2基、土坑7基である。これらの遺構は、分布とそれぞれの検出面で違いが認められる。

つまり、第Ⅴ層上面で検出される一群（1、3、4、7号集石遺構、配石土坑、土坑）と第Ⅵa層上面で検出された一群（2、5号集石遺構）である。

これらの遺構の分布については、前者では1、3、4号集石遺構がⅣB、C区に集中し、7号集石遺構のみⅦD区において検出された。配石土坑及び土坑は、これらの集石遺構の集中部と異なり、1号配石土坑はⅤB区で、2号配石土坑はⅡB区でそれぞれ検出された。1～3号土坑は、ⅡA、B区において検出された。後者の2、5号集石遺構は、ⅢB区とⅣC区で比較的近接した地点で、4、5号土坑はⅢB区、6号土坑はⅥC区、7号土坑はⅤB区で検出されている。

このように早期に属する遺構は、Ⅴ層上面とⅥa層上面の2つの時期に大きく分けることができ、分布域にも違いがみられる。

このことを遺物の在り方からみた場合、Ⅴ層上面で出土する土器には、塞ノ神式土器、平椀式土器、縄文土器、円筒形条痕文土器、山形押型文土器がある。またⅥa層上面で出土する土器には、条痕土器、楕円押型文土器がある。これらの土器型式は、それぞれにまとまりをもち、各段階の分布域には違いがみられる。つまり、Ⅴ層上面で出土する土器群は、南北の遺物集中部分ともにみられ、遺跡内に広範囲に分布する傾向が窺える。Ⅵa層上面で出土する土器群は、

北側の遺物集中部分にのみにみられ、比較的狭い範囲に分布する。このVI a層上面段階の遺物分布の在り方は、縄文時代草創期の遺物分布とほぼ同様である。

これらのことから、当該遺跡では草創期～早期の各段階で北側から遺跡全面へ、生活の場の利用が拡大していった様子が窺える。

しかし、早期に属する土器のうち、大半を占めるのはV層上面段階の遺物であり、遺物・遺構の分布も南北2ヶ所に集中部分が認められ、両集中部分間の距離的位置関係を考えた場合、この段階についても細分が可能であるかもしれないが、南北の遺物集中部分間での接合例が1例確認された（塞ノ神系土器の石板上式土器1個体）ことからほぼ同時期として捉えた。

また、石器類の分布も土器群の在り方と同様に、南北2つの集中部分に分けられる。各層段階の分布域もほぼ同様の状態が窺える。石器組成でみた場合、磨石・敲石の占める割合がもともと高く30.2%である。石皿・台石は、10.2%である。このことから石皿・台石1に対して磨石・敲石が2.96という数値になる。このことから石皿・台石1個に対して磨石・敲石が3個対応する計算になる。この結果は、狸谷遺跡（球磨郡山江村）の在り方と同数である。

定形的な石器の中では、磨石・敲石とそれに対応する石皿・台石をあわせて40.4%でもっとも高い数値を示す。その他では、石鏃が16.5%を占め比較的高い数値を示している。両者の石器は、その使用の場の違いから単純には比較できないが、狸谷遺跡と比較した場合では、ややその石器組成のなかに占める割合がわずかではあるが低いことが指摘できる。このような在り方は、近接する白鳥平A遺跡と類似する。このことは、球磨川の北側と南側での石器組成の違いとして注意する必要がある。つまり、人吉・球磨地方の縄文時代早期の遺跡の石器組成を考えた場合、石鏃が石器組成の中心をなす東九州の様相と磨石・敲石がその中心をなす南九州の様相の対峙した状況がみられる。そのなかで、球磨川の南側に位置する白鳥平B遺跡では、わずかではあるが石鏃の占める割合が低く、やや南九州の様相が強くなる傾向が窺える。このことは、当該期の土器群の様相とも合致する。つまり、早期の土器組成の中に占める押型文土器の割合が、狸谷遺跡、大丸・藤の迫遺跡等と比べ少ない傾向がみられる。

第4節 縄文時代前期～古墳時代の遺物

鬼界カルデラ起源であるアカホヤ火山灰の二次的堆積層（Ⅳ a 層）とⅢ層から、縄文時代前期以降の遺物が出土した。しかしアカホヤ火山灰降灰以後の土層の堆積は薄く、また後世の開墾等により調査区南東側にわずかにみられるだけで、その残存状態は良好とはいえない。

そのため、近世の溝状遺構、道路状遺構、時期不明の土坑以外の遺構は検出されず、遺物のみが検出された。

遺物としては、縄文時代前期～晩期、古墳時代等がみられ、分布の在り方は散在する。

またこれらの遺物は、縄文時代早期の遺構・遺物とは、純粋なアカホヤ火山灰である第Ⅳ b 層（無遺物層）を間層として挟み、層位的に分離されている。

1. 遺物とその分布

出土した遺物は、土器590点、石器102点である。その分布は、調査区の南側に散在する傾向がみられ、各時期の土器型式ごとのまとまりも疎らである。このことは、当該遺跡の南東側のみにみられる、第Ⅱ b 層の在り方からも窺える。Ⅱ b 層は、濁りの強いシラス層で後世の開墾の際に当地に持ち込まれた客土であると考えられる。また、北東側では第Ⅳ b 層の直上に表土層がのる状態で、第Ⅱ～Ⅳ a 層が削平されほとんど残存しない。このようにアカホヤ火山灰降灰以後に堆積した第Ⅱ～Ⅳ a 層は、南側の一部分に残存し、また層厚も薄く開墾による攪乱等もあって良好な状態とはいえない。

(1) 土器

轟式（系）土器（第128図 1～11、14）

轟式土器は、12点出土した。その分布は、調査区南側で比較的集中する傾向が窺える（第124図）。

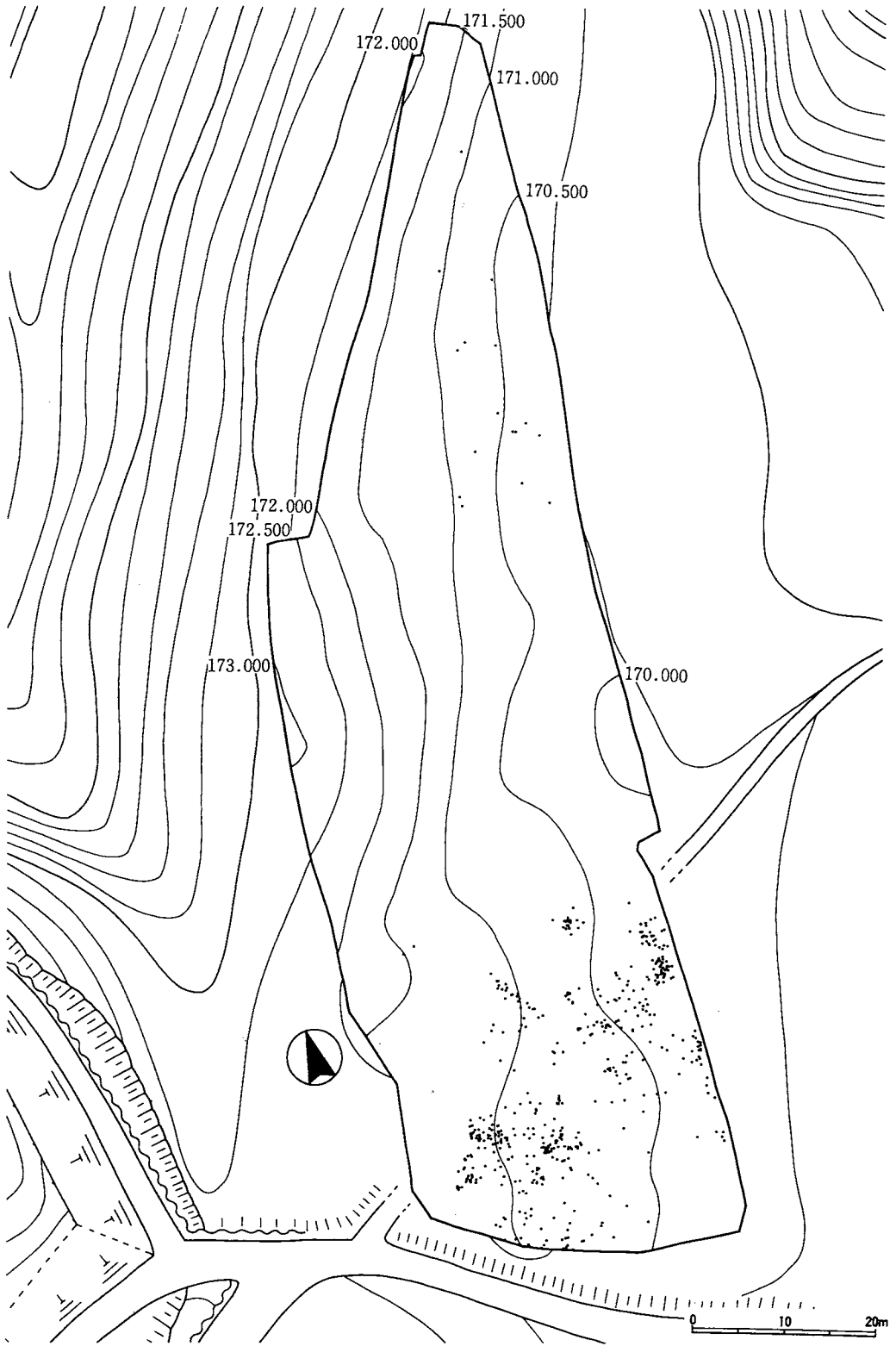
1は口縁部の資料で、2条の微隆起線文を貼付する。その微隆起線文の断面形は、かまぼこ状を呈する。内面はナデによる調整が施され、条痕はみられない。

2～7は、すべて胴部の破片である。その焼成、胎土、色調、器厚、調整の状態から同一固体と考えられる。内外面とも条痕がみられ、色調は黒褐色である。

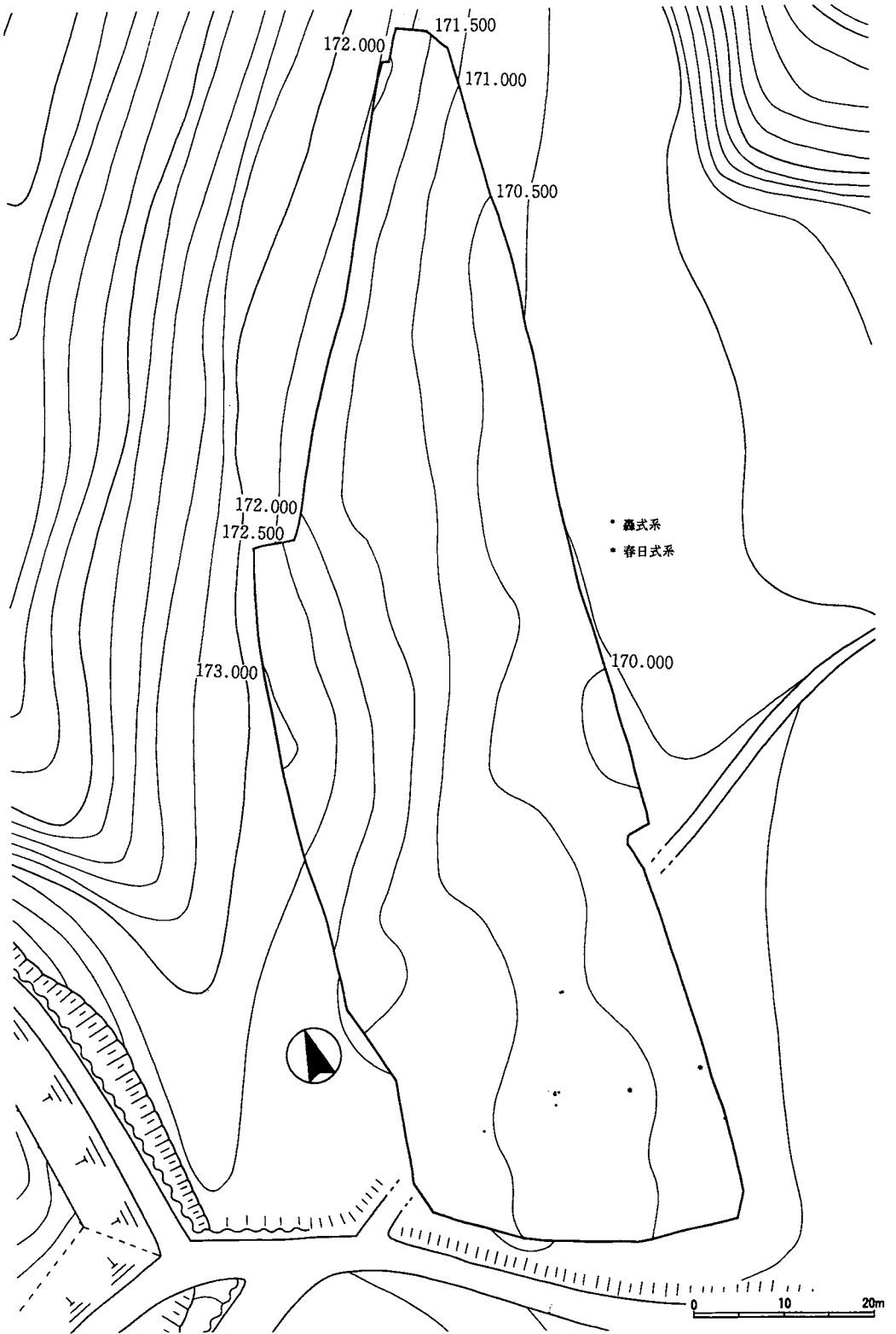
8～11は、胴部の資料である。その焼成、胎土、色調、器厚、調整の状態から同一固体と考えられる。内外面とも条痕がみられ、色調は暗褐色である。器厚は、2～7と比較して厚い。

14は、口縁部の資料である。轟式（系）土器にみられる微隆起線文は、貼りつけによらず工具により隆起させている。

第4節 縄文時代前期～古墳時代の遺物



第123図 遺物分布図（土器）



第124図 遺物分布図（轟式（系）、春日式（系））

春日式土器 (第128図12、13)

春日式土器は、2点出土した。出土地点は、ⅦC-7区とⅦB-22区である。

12、13は、同一固体の可能性が指摘できる胴部の資料である。その文様は施文具による平行する沈線文を横方向、斜方向に施す。

南福寺式土器 (第128図)

南福寺式土器は、12点出土した。その分布は、ⅥC-15区で集中して検出された(第125図)。

18は、ⅥC-15区で集中して検出された資料である。器形は、鉢形を呈し胴部は膨らみ口縁部近くで僅かに屈曲し外反する。文様は、口縁部近くに粘土を貼りつけ凹線文を施す。

口唇部は、ナデ整形により一段低く平坦に作り出す部分と、貼付した粘土の接合面を残し粘土紐を2本内面から外面へ貼付する部分とがみられる。文様は、渦巻き状の凹線文で構成されている。器面の色調は、内外面とも暗赤褐色で焼成は良好である。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、胎土には1mm大の長石粒が観察される。底部は検出されなかった。

15～17は、焼成、胎土、色調、調整の状態等の類似から、阿高系土器の南福寺式に伴うものと考えられる資料である。15、16は、口唇部が平坦で口縁部が僅かに外反する形態を呈する。両者とも文様は施文されないが、16は口縁部がやや肥厚する特徴を有する。17は、口縁部が開き気味に直行する。口唇部は平坦で、15、16、18と同様である。文様は施文されない。

山ノ寺式土器 (第129図)

縄文時代晩期後半に位置付けられる資料で、精製土器3点と粗製土器19点がある。その分布は調査区南側と中央部にみられる。

精製土器は、浅鉢形を呈する。19は、頸部と胴部の屈曲部との間に補修孔がみられる。20、21は、同一固体と考えられる資料である。頸部の屈曲部に、工具による削り痕がみられる。

粗製土器は、16点出土した。そのうち7点は底部の資料である。形状は、深鉢形を呈するものと考えられる。口縁部の形態では、波状を呈するもの(22、29)とそうでないもの(23、25～27)とがある。また、23、29は、口縁部がやや肥厚する。22～33の資料には外面に煤の付着がみられる。

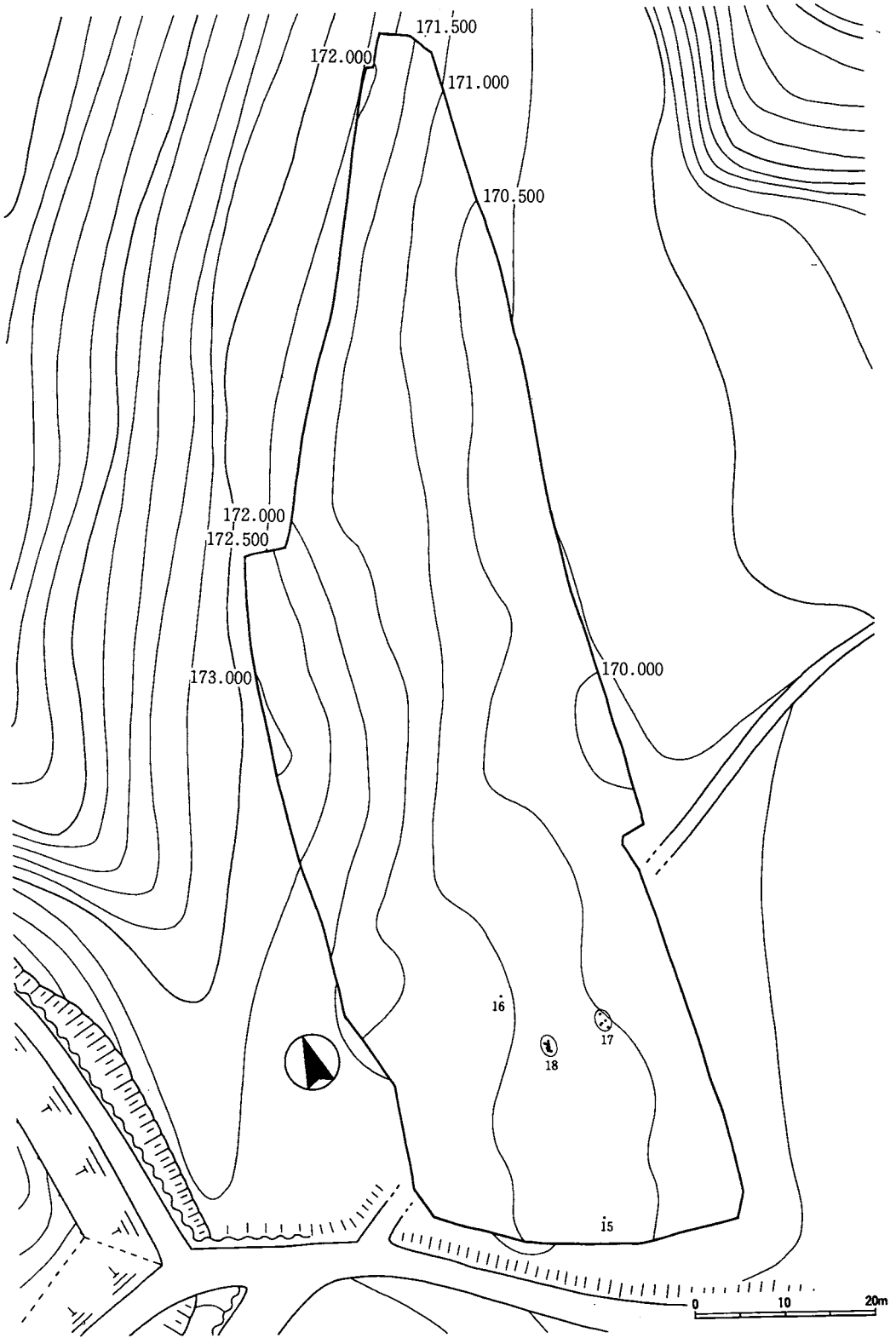
底部 (第130図41～47)

底部の資料は、全部で7点出土した。その分布は、調査区南側に散在する。その形状は平底で、底部と胴部との境で大きく内湾し、この特徴は全資料に共通する。

また、胎土、焼成、色調から山ノ寺式土器の底部と考えられる。

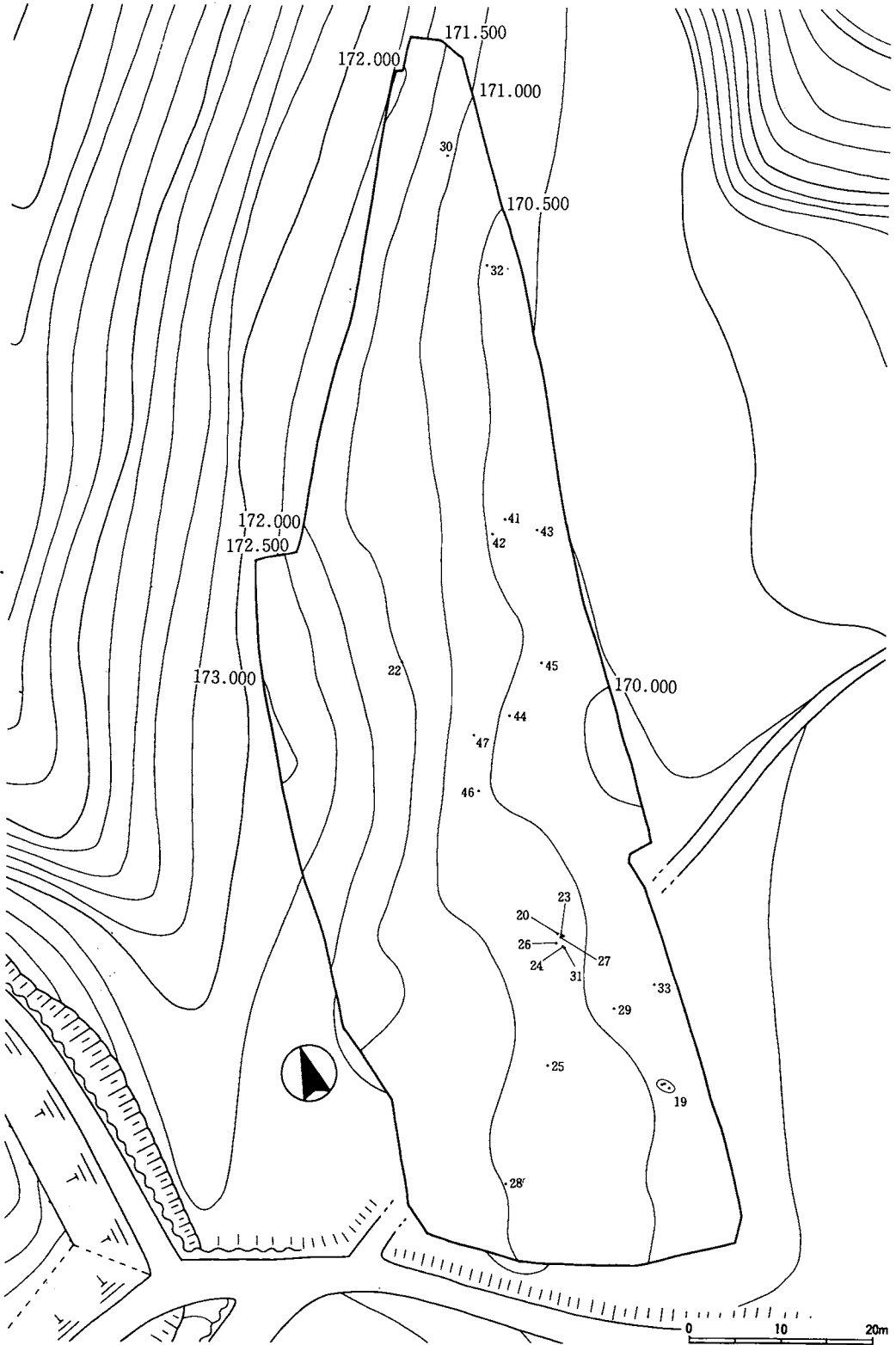
甕 (第129図34、35)

弥生時代中期に属すると考えられる甕の口縁部が2点出土した。出土地点は、2点ともⅢB区である。34、35とも口唇部は大きく外傾し、口縁部下には貼りつけによる凸帯を数条廻らす。両者とも器面の色調は黒褐色で類似し、胎土、焼成等も同様であることから同一個体の可能性



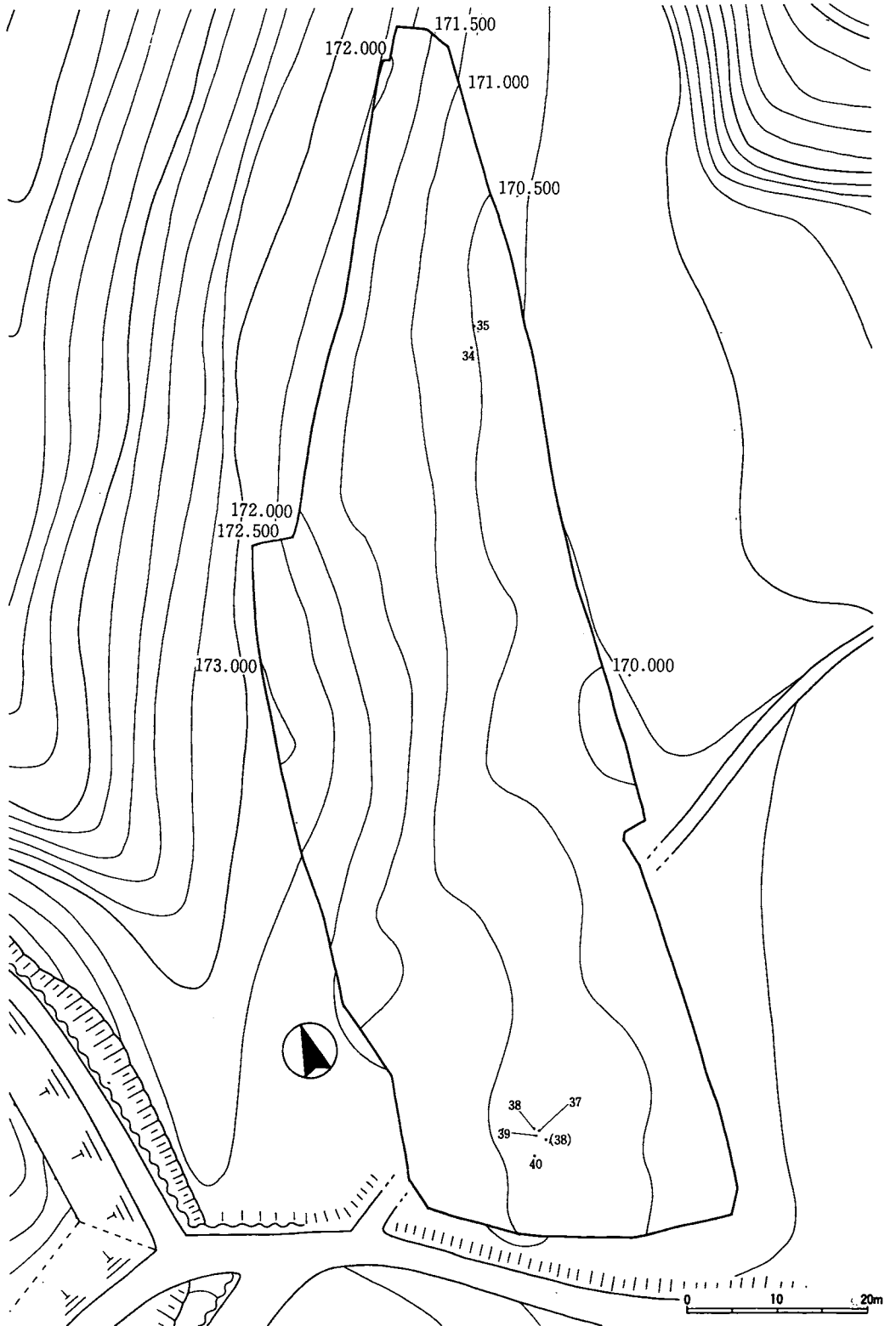
第125図 遺物分布図（南福寺式土器）

第4節 縄文時代前期～古墳時代の遺物



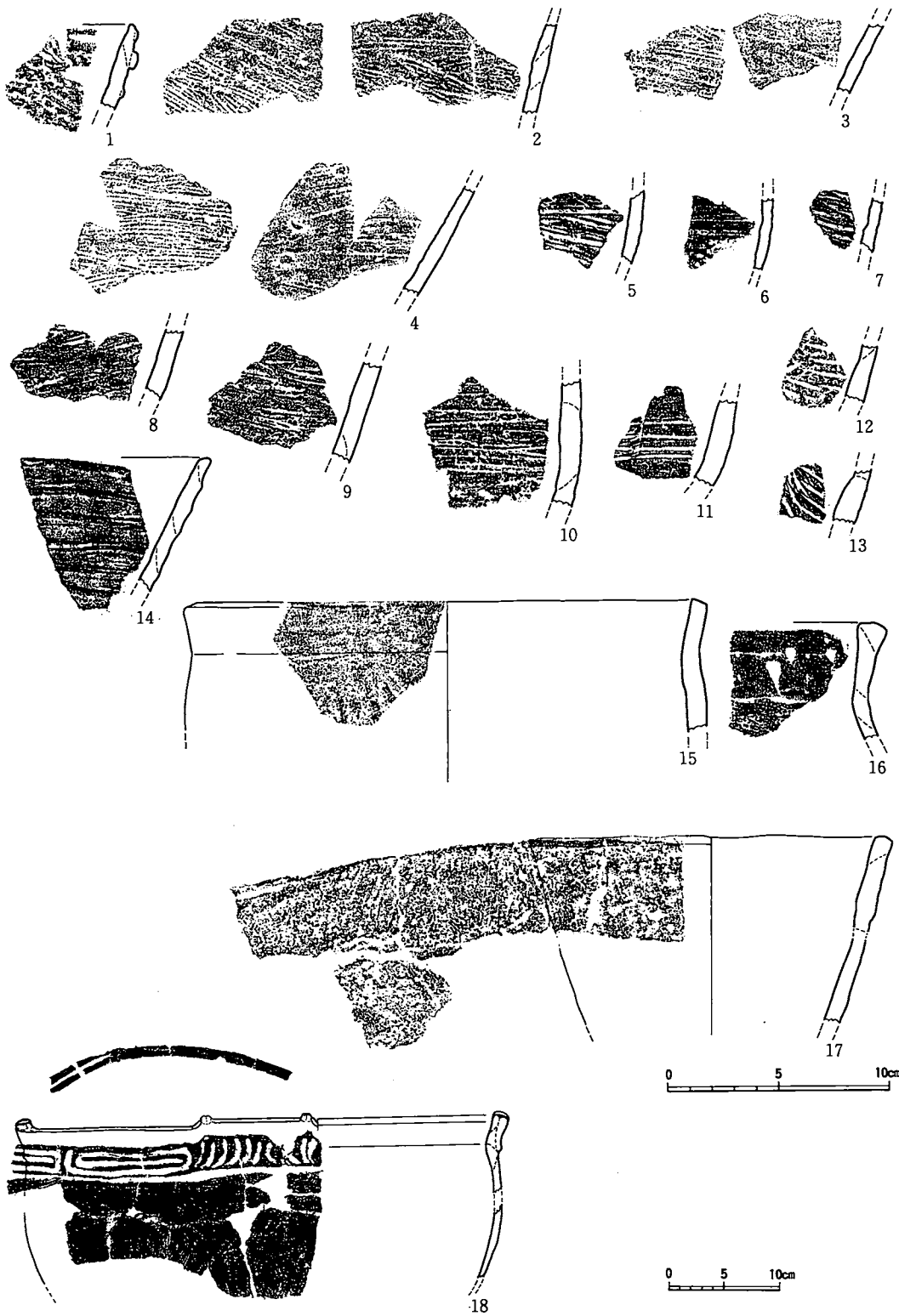
第126図 遺物分布図（山ノ寺式土器）

第三章 調査の成果

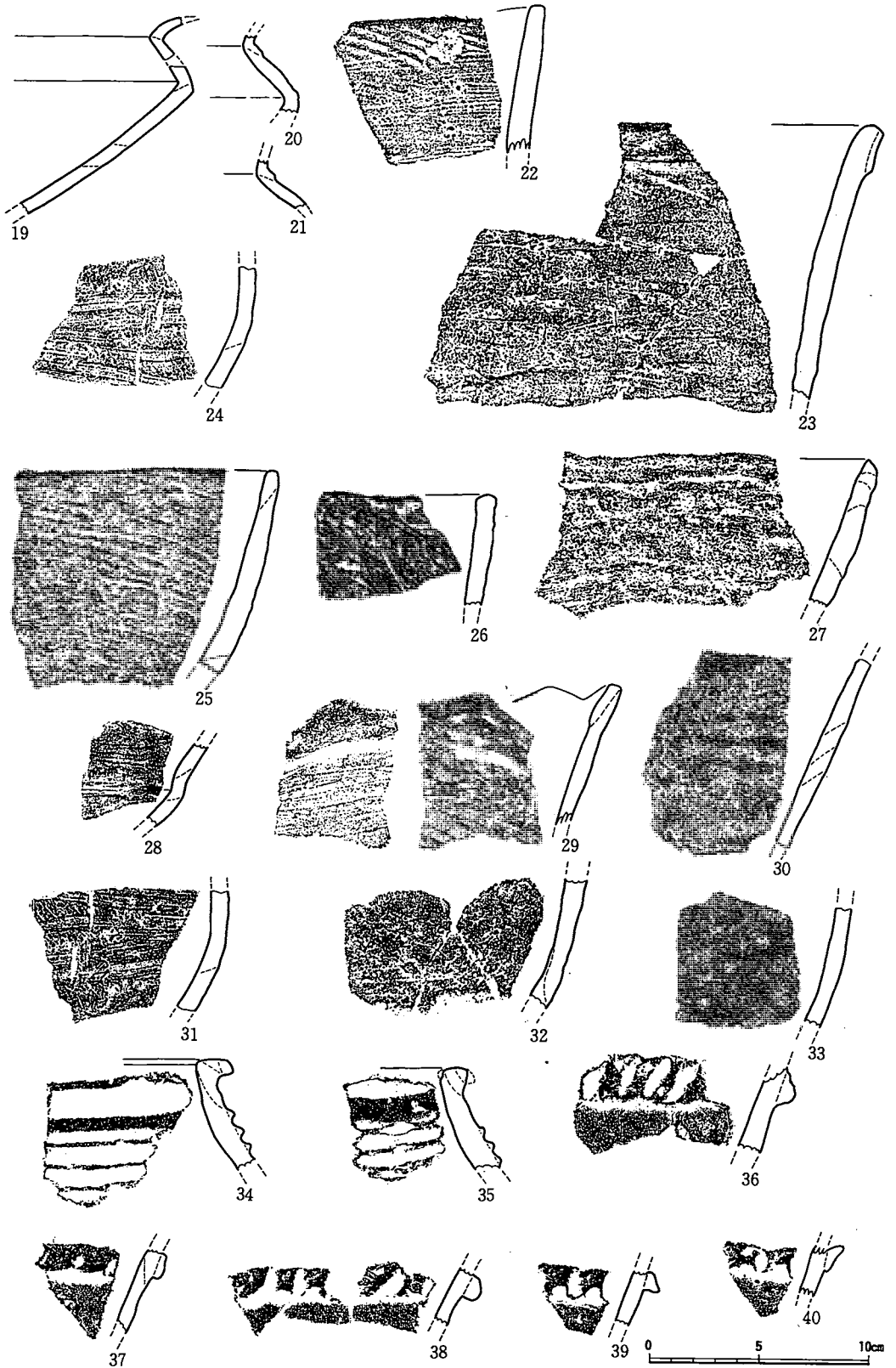


第127図 遺物分布図（彌生時代中期の甕形土器、成川式土器）

第4節 縄文時代前期～古墳時代の遺物



第128図 土器実測図



第129図 土器実測図

も指摘できる。

成川式土器 (第129図36～40)

成川式土器は、4点出土している。これらの資料は、器面が褐色ないしは明褐色を呈し、凸帯を貼付しそのうえに繊維痕を有する刻みを施している。このことから成川式土器の中でも古墳時代に属する資料である可能性が指摘できる。

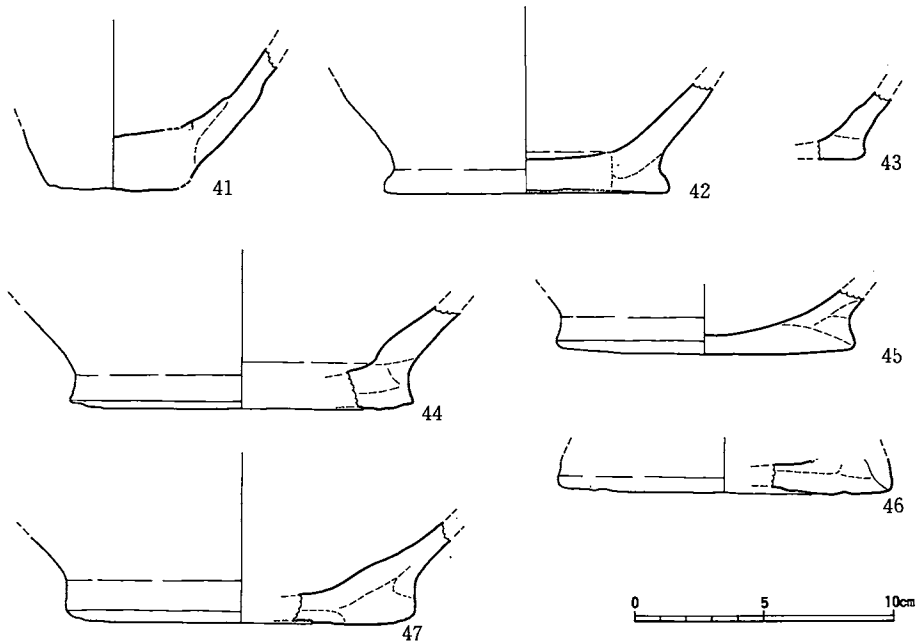
(2) 石器

第Ⅲ～Ⅳ a 層から出土した石器は、102点である。その内訳は、石器44点、原石7点、剥片・碎片51点である。またその中で、石器の器種ごとの内訳は、石鏃10点、削器1点、局部磨製石斧4点、打製石斧4点、磨石・敲石9点、石皿・台石5点、楔形石器1点、二次加工ある不定形石器2点、使用痕ある剥片8点である。

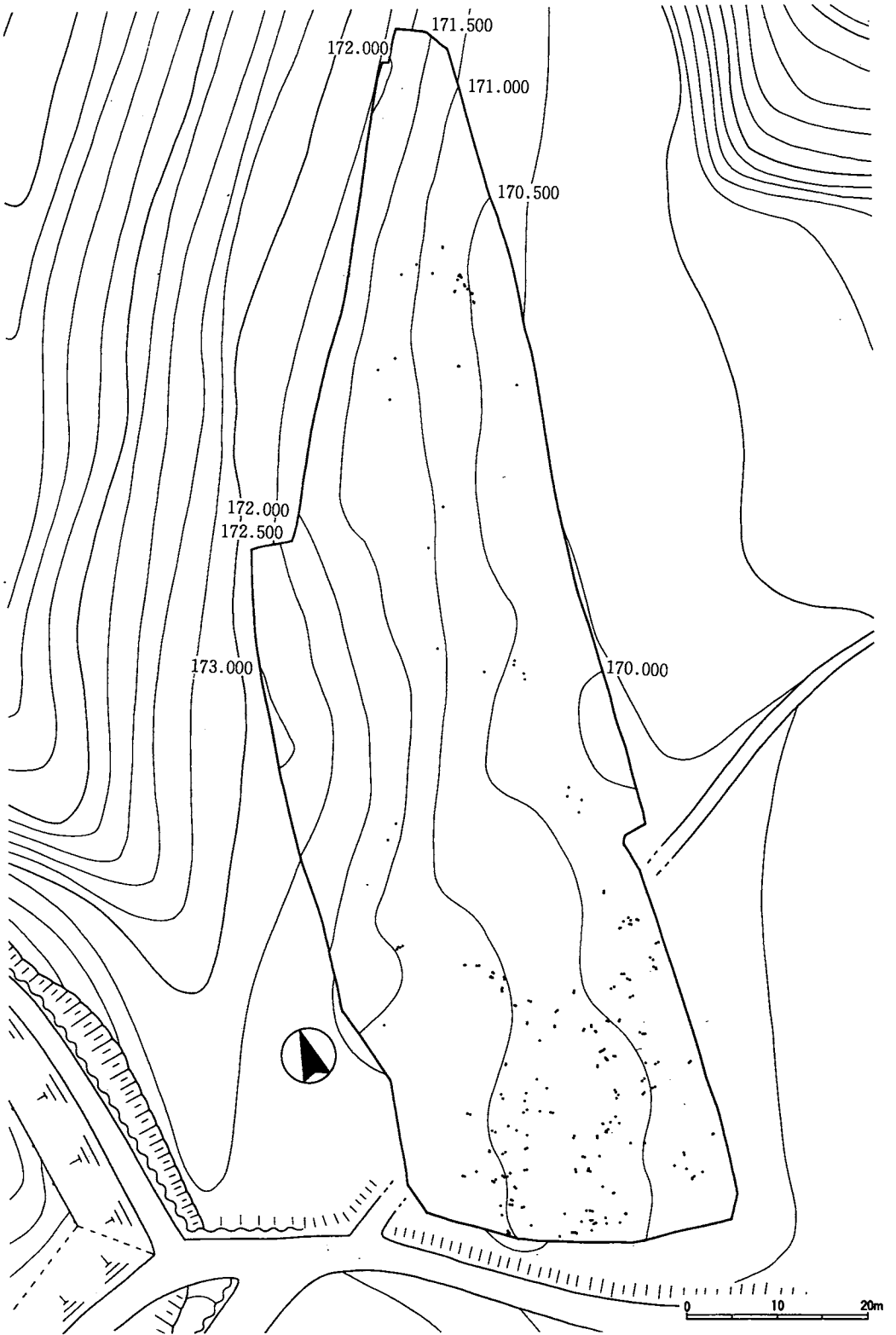
石材ごとの内訳では、黒耀石26点、珪岩29点、安山岩23点、頁岩2点、砂岩14点、凝灰岩4点、粘板岩4点である。これらの石器の分布は、調査区南側に散在し、まとまりとしては捉えられない。

石鏃 (第133図1～10)

石鏃は、10点出土した。石材ごとの内訳は、黒耀石5点、珪岩4点、安山岩1点である。ま

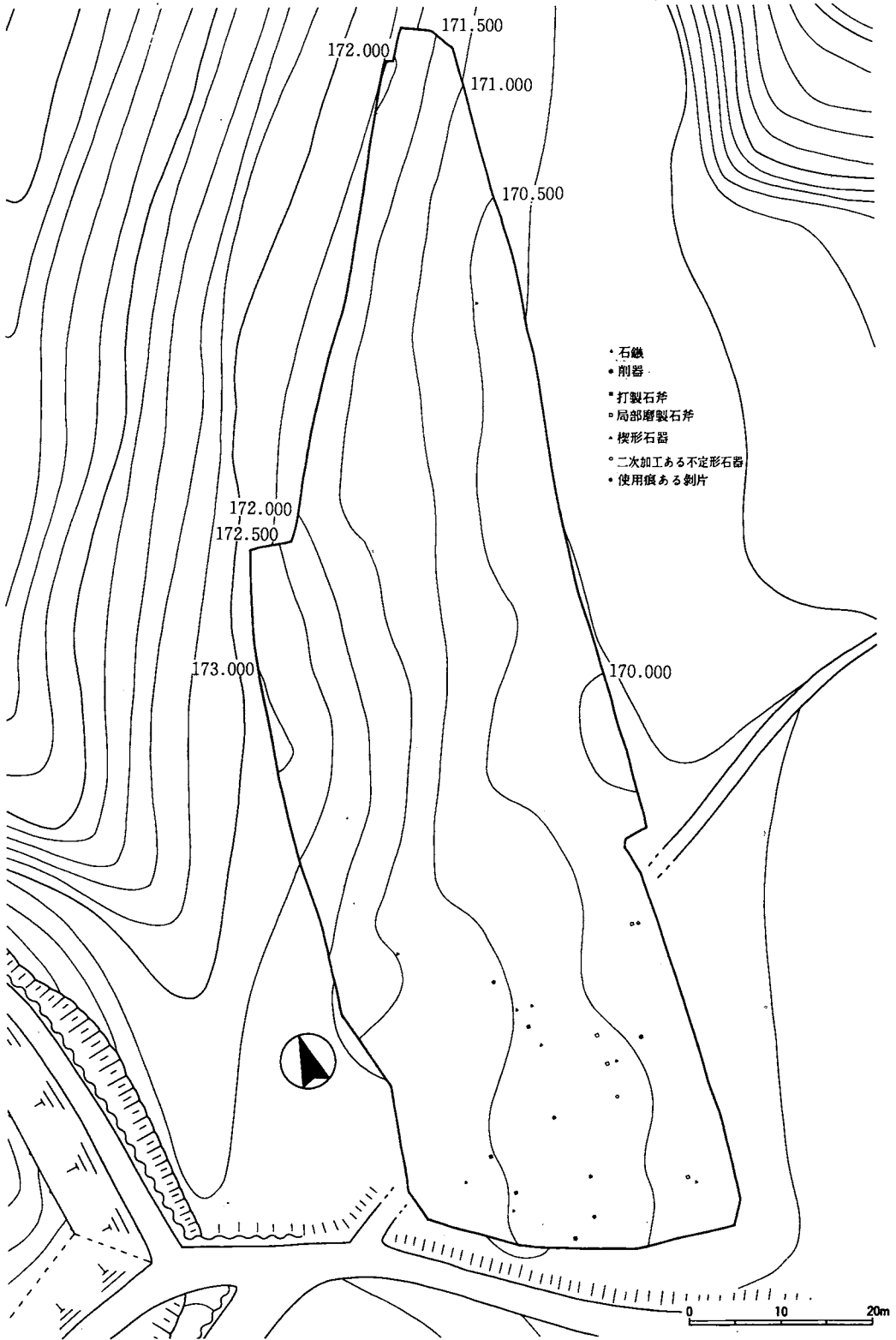


第130図 土器実測図



第131図 遺物分布図（石器）

第4節 縄文時代前期～古墳時代の遺物



第132図 遺物分布図（石器類）

たその分布は、調査区南側に散在する。

1は、VIC-20区で出土した珪岩製の石鏃である。調整加工は、比較的細かく入念に施し、抉入部の形状は浅いV字状を呈する。石器の全体形は、二等辺三角形を呈し、左右対称をなさない。縁辺は左右両側縁とも、やや膨らむ形状を呈する。

2は、VIC-14区で出土した黒耀石製の石鏃である。調整加工は、細かく入念に施し抉入部は、V字状を呈する。石器全体の形状は、幅に比べて鏃長の長い二等辺三角形を呈する。縁辺部は、直線的に作り出されている。

3は、VID-1区で出土した珪岩製の石鏃である。調整加工は、細かく施され抉入は広がったV字状を呈する。石器の全体形は、二等辺三角形に近い形状を呈し、縁辺は膨らみ、左右対称をなさない。表裏両面ともに、素材剥片の剥離面を大きく残す。このことから素材となった剥片の形状は、幅広の不定形剥片でその打点部を基部右側に置く。

4は、IIB-10区で出土した安山岩製の石鏃である。大まかな調整加工を施し、抉入はU字状に施される。縁辺は、やや膨らむ形状を呈し、基部は左右対称をなさない。

5は、VID-4区で出土した珪岩製の石鏃である。調整加工は細かく施し、抉入は浅いV字状を呈する。石器の全体形は、二等辺三角形を呈し左右対称をなす。

6は、VIC-5区で出土した黒耀石製の石鏃である。先端部に潰れがみられ、左脚部を欠失している。調整加工は粗く、縁辺は膨らむ形状を呈する。未加工品と考えられる資料である。

7は、VID-4区で出土した黒耀石製の石鏃である。先端部及び左脚部を欠失している。調整加工は、細かく入念に施されている。縁辺は、直線的に作り出す。

8は、VIC-6区で出土した黒耀石製の石鏃である。先端部及び左脚部を欠失している。縁辺の調整加工は、左右両側縁で異なり、左側縁ではやや内湾ぎみに作り出し、右側縁ではやや膨らむ形状を呈し鋸歯状に作り出している。

9は、VID-7区で出土した黒耀石製の石鏃である。表面に大きく礫面を残し、調整加工は表面側の先端部及び基部、右側縁と裏面側に施す。未加工品である。

10は、VIC-5区で出土した珪岩製の石鏃である。基部は、平基に作り出し調整加工は表裏両面とも入念に施されている。縁辺部で僅かに屈曲する。

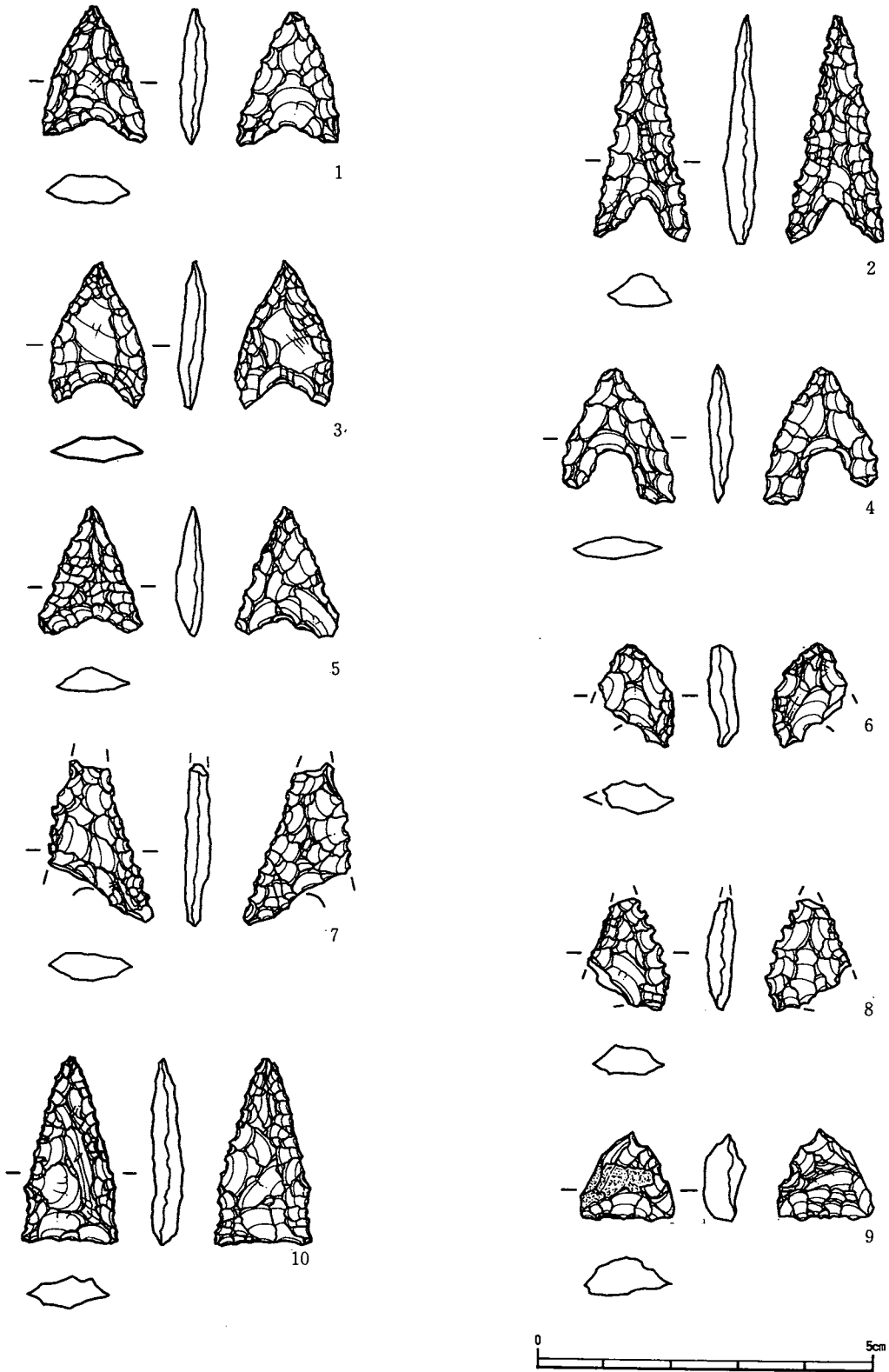
削器 (第138図23)

削器は、1点出土した。石材は、珪岩である。出土地点は、VIC-25区である。礫面を打面として剥出された縦長剥片を素材とし、その両側縁上半部に調整加工を施し、刃部を作り出している。剥片の先端部側を大きく欠失している。

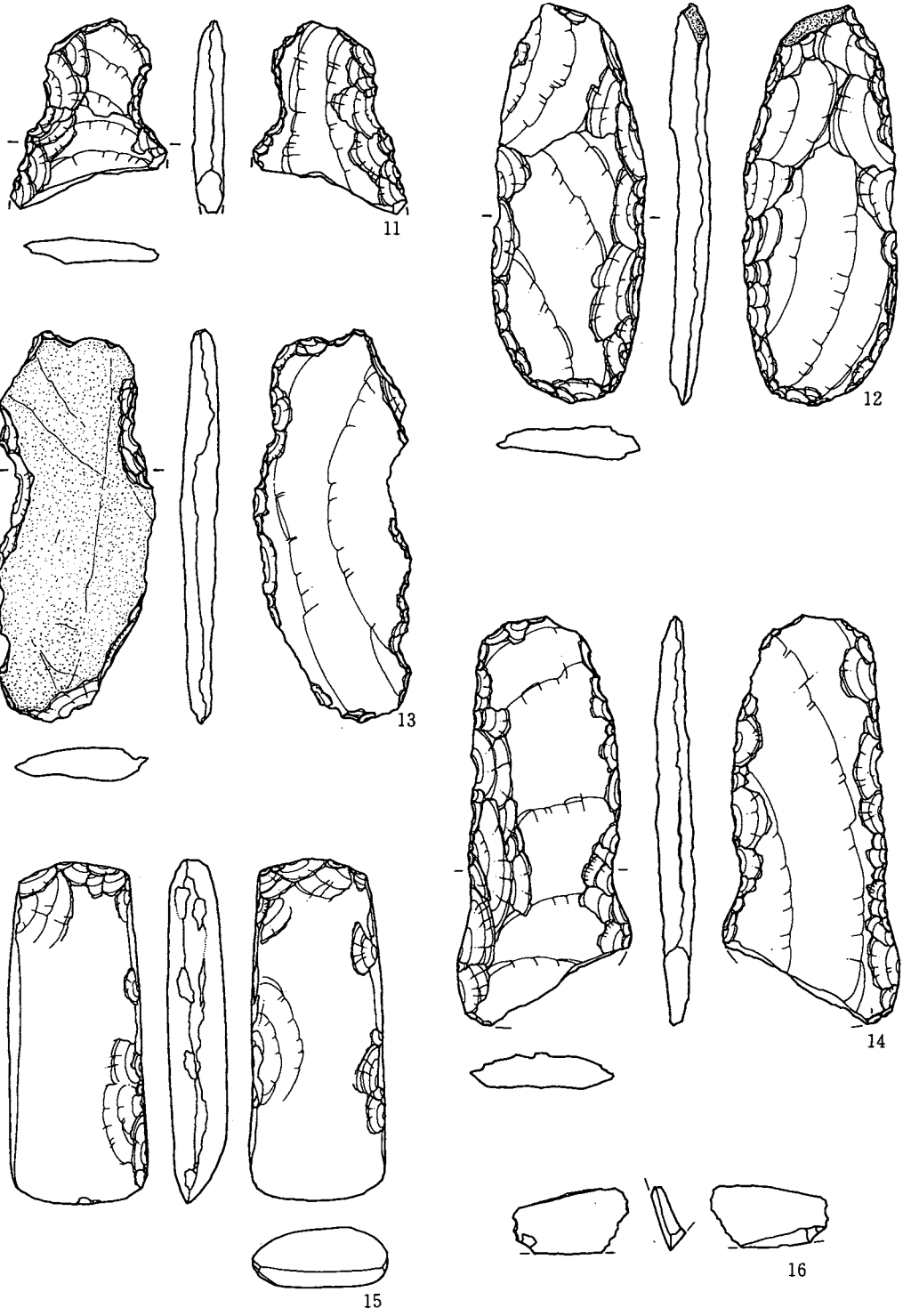
局部磨製石斧 (第134図15、16)

局部磨製石斧は、4点出土した。その石材は、すべて砂岩である。その分布は、まとまりとしては認められず調査区南側に散在する。これらの資料のうち完形は15のみで、その他の3点

第4節 縄文時代前期～古墳時代の遺物



第133図 石器実測図



第134図 石器実測図

はすべて破片である。16は、刃部のみ資料である。

15は、VI B-23区で出土した資料である。石器の全体形は長方形（短冊形）を呈し、基部及び両側縁に敲打痕が認められる。また、両側面とも面取りが施されている。両刃の局部磨製石斧である。

16は、VII C-5区で出土した資料である。刃部のみ資料であるため、石器の全体形は不明である。磨痕は、表面側の破片全面と裏面側に僅かに残る。このことから、15と同様に、両刃の局部磨製または磨製の石斧であると考えられる。

打製石斧（第134図11～14）

打製石斧は、4点出土した。石材は、すべて砂岩である。石器の分布には、偏在の傾向はみられない。

11は、基部のみ資料で刃部側を大きく欠失している。石器の形態は、基部よりの両側縁に挟入状の調整加工が施され、有肩形の打製石斧とされるものである。

12は、VII D-3区で出土した打製石斧である。石器の形態は長楕円形を呈し、その調整加工は表裏両面とも全周に施されている。基部に礫面を残す。

13は、VII C-1区で出土した打製石斧である。石器の形態は不整形を呈し、表面には大きく礫面を残す。調整加工は、表面側の上部側面に挟入状に施され、裏面側には基部及び両側縁に施されている。

14は、VI C-19区で出土した打製石斧である。刃部を欠失している資料で、石器の形態は撥形を呈する。調整加工は、表裏両面とも両側縁に施されている。

楔形石器（第138図26）

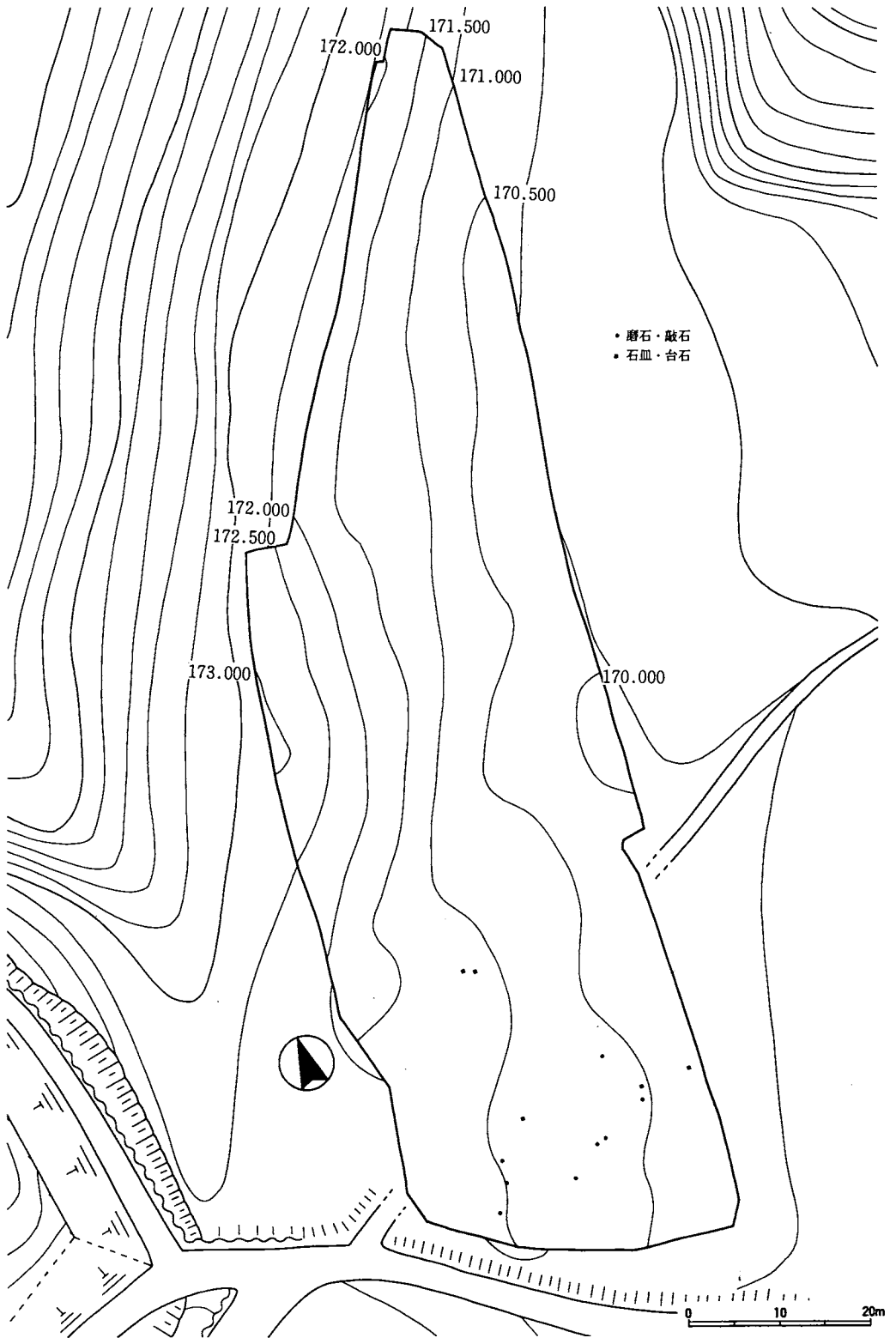
楔形石器は、1点出土した。出土地点は、調査区南側のVI C-19区である。石材は、安山岩である。石器は、拳大の扁平な原礫を素材として使用している。そのため上端部に細かな敲打痕が観察され、下端部には剥離面がみられる。また、左右両側縁にも対応する剥離面が観察される。このことから、この石器を楔形石器に分類した。しかし、礫器として取り扱うべき資料である可能性も指摘できる。

磨石・敲石（第136図17～20）

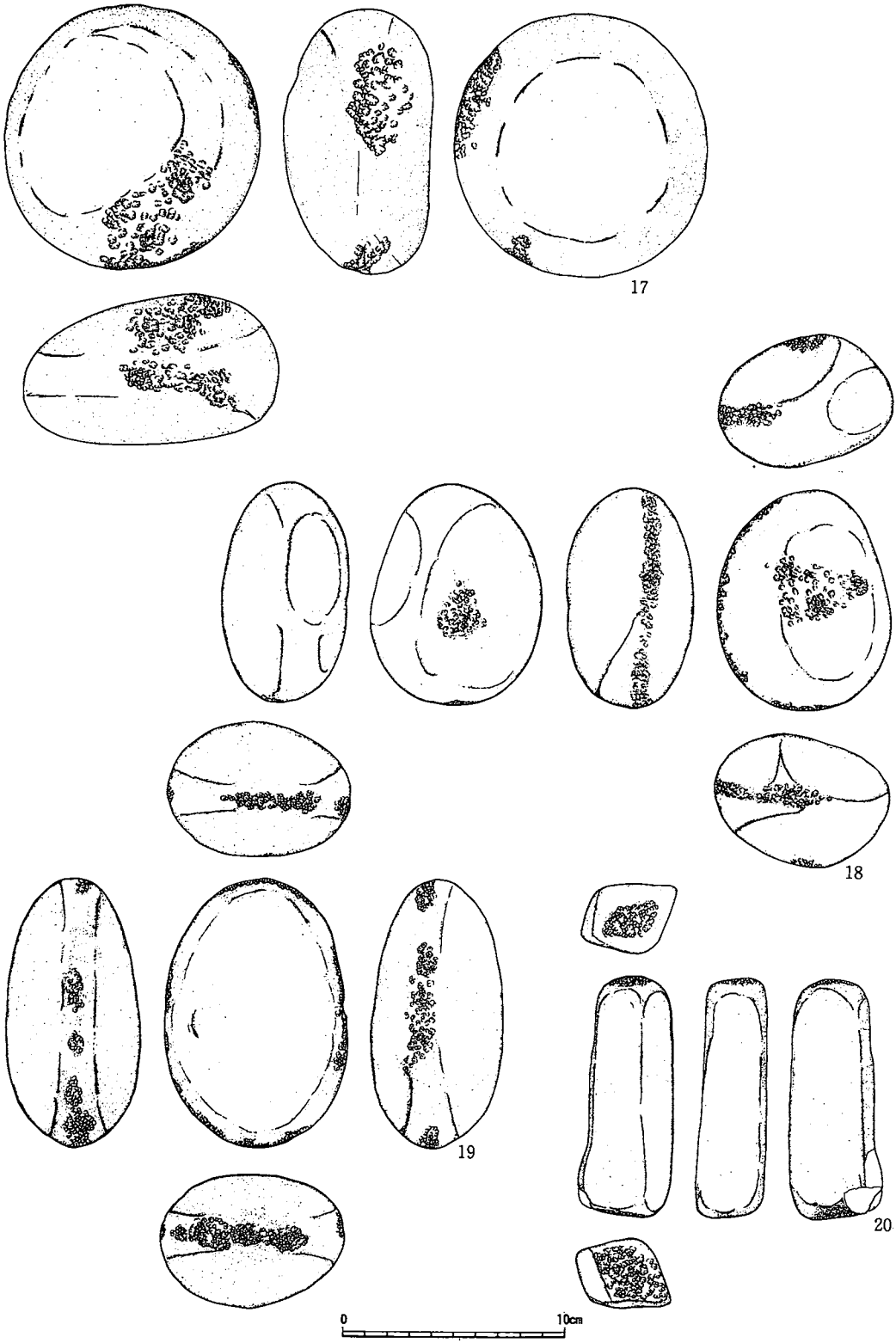
磨石・敲石は、9点出土した。その分布は、調査区南側に散在しまとまりとしては捉えられない。石材は、砂岩4点、凝灰岩5点である。磨石・敲石の形状は、円形（17）、楕円形（18、19）、棒状（20）と様々である。敲打痕の部位では、上下両端にみられるもの（20）、上下両端と両側縁にみられるもの（19）、上下どちらか一端と側縁部の一端にみられるもの（17）、上下両端と側縁部の一端及び表裏面にみられるもの（18）がある。

石皿・台石（第137図21、22）

石皿・台石は、5点出土した。その分布の在り方は、磨石・敲石と同様の傾向が窺える。



第135図 遺物分布図（磨石・敲石、石皿・台石）

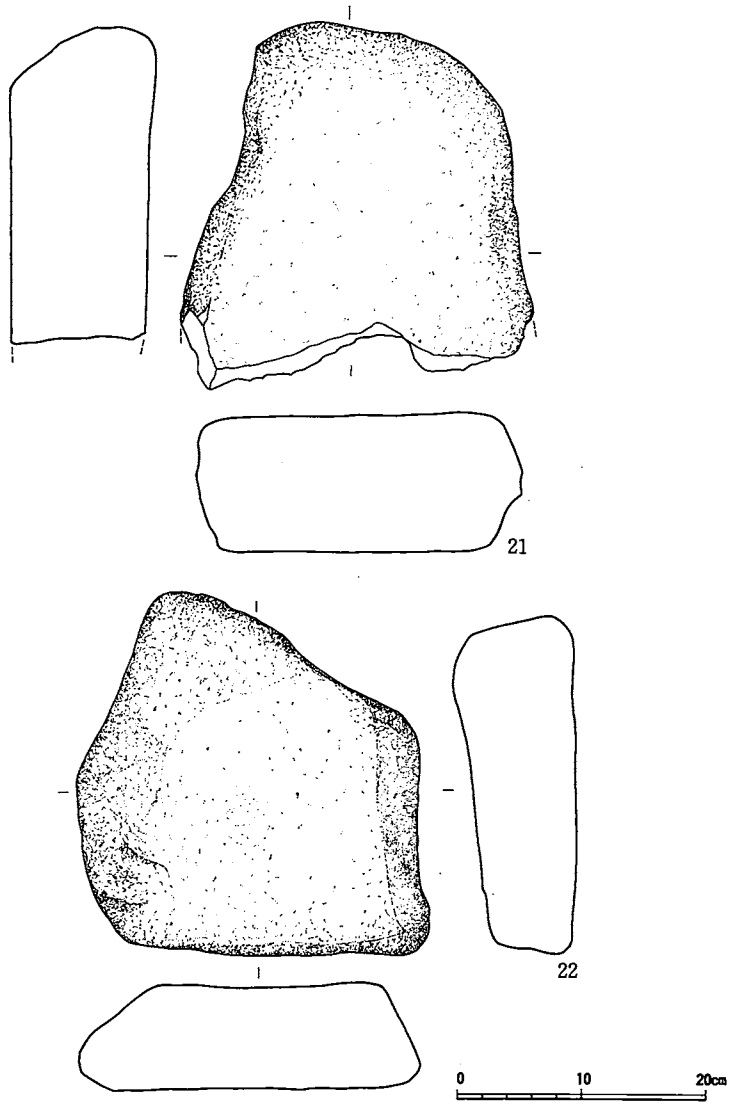


第136図 石器実測図

21は、欠損のため全体形は不明である。21、22は、石器中央部が僅かに窪むが、使用による潰れは明瞭ではない。

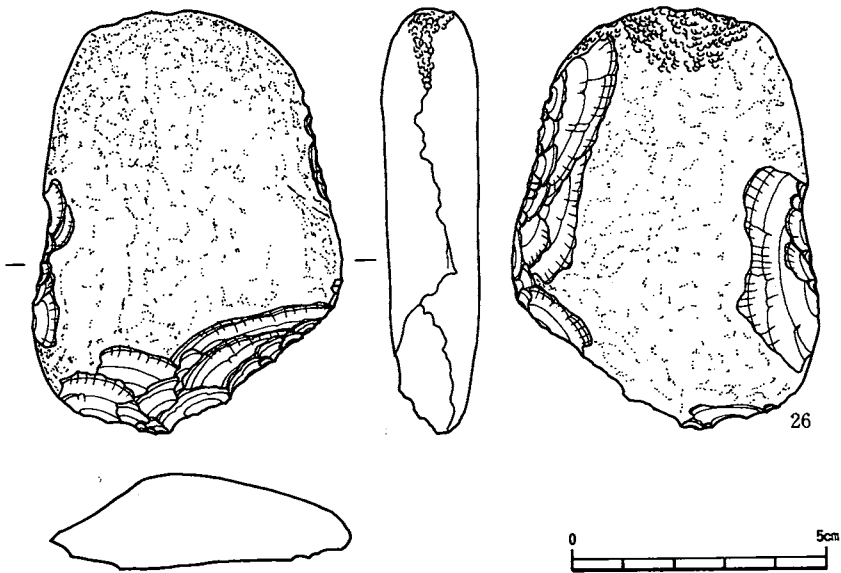
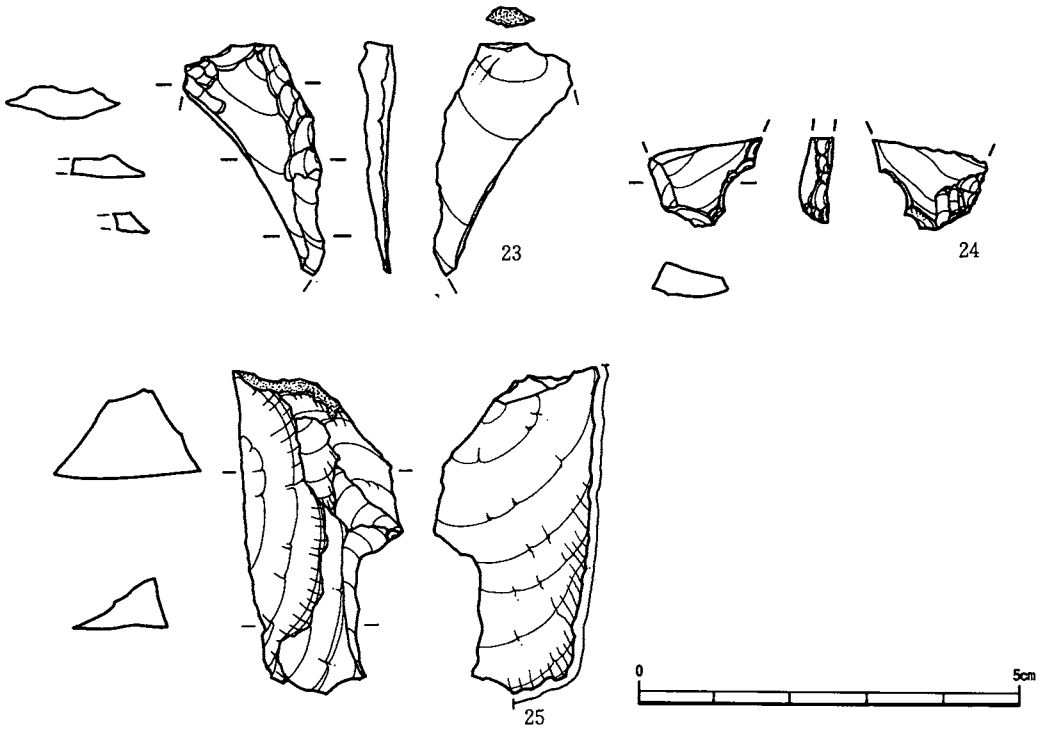
二次加工ある不定形石器（第138図24）

二次加工ある不定形石器は、2点出土した。石材は、黒耀石1点、珪岩1点である。その分



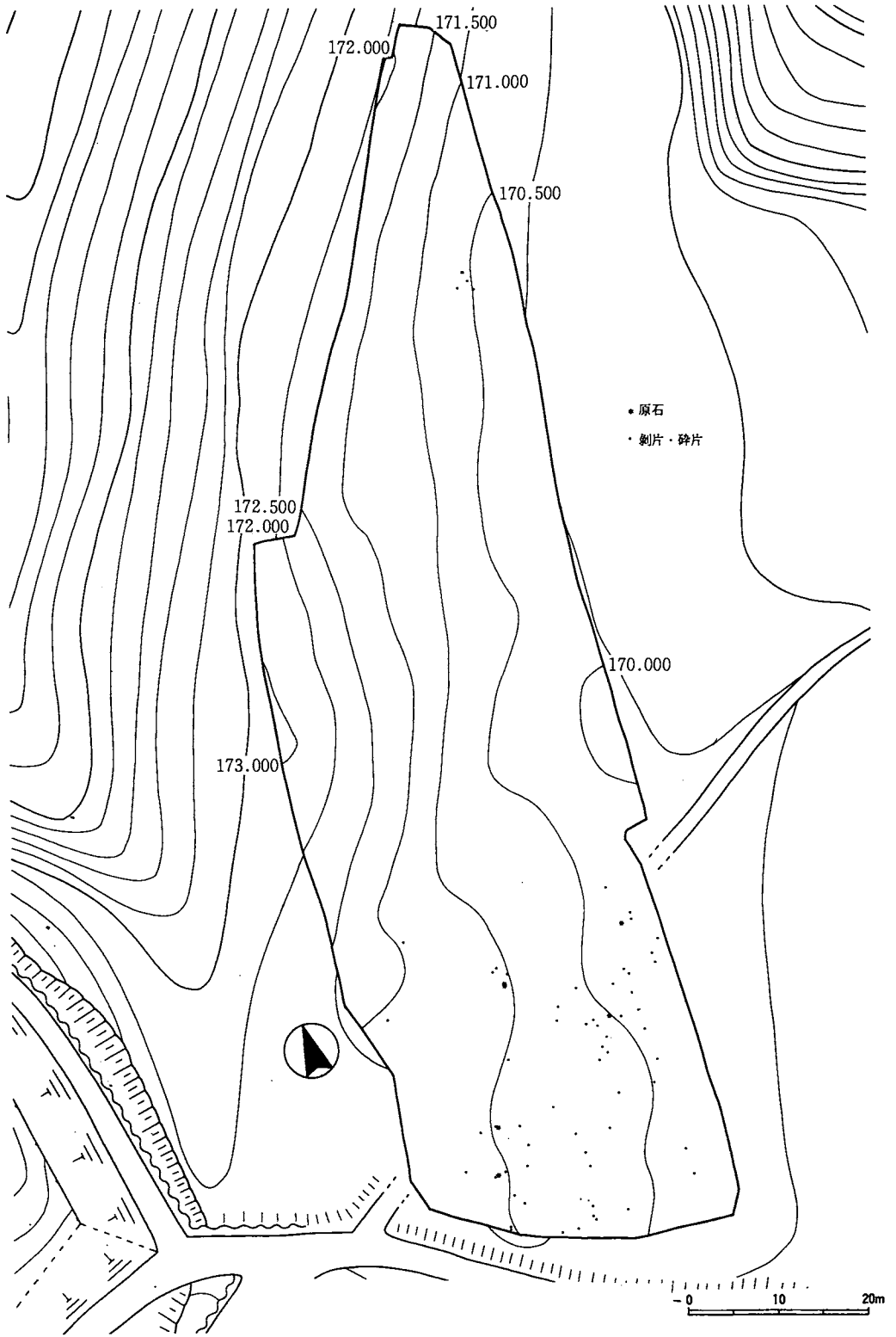
第137図 石器実測図

第4節 縄文時代前期～古墳時代の遺物



第138図 石器実測図

第三章 調査の成果



第139図 遺物分布図（原石、剥片・碎石）

第15表 石器計測表

No	器種	石材	計測値				グリッド	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
1	石	珪岩	2.12	1.52	0.40	0.65	VI C-20	48
2	"	黒耀石	3.46	1.20	0.46	1.10	VI C-14	264
3	"	珪岩	2.20	1.40	0.38	0.95	VII D-1	IV a層一括
4	"	安山岩	2.12	1.52	0.32	0.71	II B-10	486
5	"	珪岩	2.06	1.60	0.40	0.71	VII D-4	3766
6	"	黒耀石	1.72	1.00	0.40	0.50	VII C-5	331
7	"	"	2.46	1.46	0.40	0.90	VII D-4	3761
8	"	"	1.50	1.22	0.42	0.60	VII C-6	316
9	"	"	1.66	1.40	0.60	0.90	VII D-7	4081
10	"	珪岩	2.80	1.43	0.48	1.55	VI C-5	IV a層一括
11	打製石斧	砂岩	5.60	4.20	0.90	14.30	VI C-7	IV a層一括
12	"	"	11.70	4.50	9.50	67.20	VII D-3	3767
13	"	"	11.50	4.30	0.90	73.80	VII C-1	289
14	"	"	12.00	5.50	1.50	69.60	VI C-19	265
15	局部磨製石斧	"	10.20	4.00	1.70	115.30	VI B-23	179
16	"	"	1.80	3.40	0.80	12.00	VII C-5	332
17	磨石・敲石	砂岩	11.55	11.35	6.40	1000	VII C-13	2763
18	"	"	9.65	7.65	5.45	120	VII C-13	2764
19	"	"	11.00	8.20	6.00	800	VII C-6	555
20	"	"	10.60	4.20	3.10	205	VII D-4	3762
21	石皿・台石	"	28.40	31.00	11.60	1550	VI C-17	2821
22	"	"	28.80	28.60	9.80	1180	VI C-22	2822
23	二次加工ある不定形石器	珪岩	3.06	1.90	0.50	1.30	VII C-25	361
24	"	"	(1.00)	1.50	0.50	0.40	VI B-23	178
25	使用痕ある剥片	"	4.70	2.20	1.15	8.30	VII D-3	3774
26	楔形石器	安山岩	8.30	6.00	1.90	133.60	VI C-19	2796

布は、VI B-23区 (24)、VII C-7区で各1点ずつ出土した。

24は、珪岩製の石器である。幅広の不定形剥片を素材とし、右側縁部表面側に急角度の加工を施し、やや抉入状に作り出されている。また、左側縁部裏面側には、6枚の平坦剥離が施されている。石器上半部を欠失している。

使用痕ある剥片 (第138図25)

使用痕のある剥片は、8点出土した。石材は、黒耀石2点、珪岩3点、安山岩3点である。その分布は、調査区南側に散在しまとまりとしては捉えられない。

25は、VII D-3区で出土した資料である。その石材は、珪岩である。礫面を打面として剥出された不定形の縦長剥片を素材とし、左側縁及び先端部に使用痕が観察される。

2. まとめ

アカホヤ火山灰降灰以後の遺物は、後世の開墾等によりその包含状態は、良好であるとはいえない。また、遺物の分布も散在する傾向がみられる。このことから、それぞれの時期ごとのまとまりとして土器群と石器群を対応させることは難しい。そのため、出土した各土器型式により、その時期幅を考えるしかない。出土した土器型式からみると、当該遺跡のアカホヤ火山灰降灰以後には、前期（轟式土器、春日式土器）、後期前半（南福寺式土器）、晩期後半（山ノ寺式土器）と、やや時間幅が空いて古墳時代（成川式土器）の遺物がみられる。このように、長期間断続的に生活の場として利用されていたことが窺える。それぞれの土器については、南福寺式土器、山ノ寺式土器以外は小破片である。そのため、両者の時期が中心となるものと考えられるが、量的には多くない。このことは、石器の出土量にもいえることである。

また、これらの各時期をとおして遺構が検出されていないこととも合わせて、アカホヤ降灰以前と違い、一過性の様相を呈しているものと考えられる。

第5節 その他の遺構・遺物

その他の遺構・遺物としては、調査区南側を中心に2基の土坑と、4条の溝遺構、道路状遺構が検出された。遺物としては、近世に属する陶器類が溝状遺構及び濁りの強いシラス土（Ⅱa層）から検出された。

土層の面からは、道路状遺構より南側で表土下に濁りの強いシラス（Ⅱa層）が確認された。この土層は、溝遺構の埋土同様であり、濁りの強いシラスという性質から開墾に伴う客土である可能性が指摘できる。

1. 遺構とその分布

(1) 溝遺構（第141図、第142図）

溝遺構は、調査区南側で4条検出された。

1号溝遺構は北北西－南南東に延び、幅約60cmで全長約20mにわたって確認された。北北西から南南東に向かって緩やかに傾斜し、南南東端では不明瞭になり確認できなかった。遺物は、埋土中から陶器4点と瓦1点が検出された。

2号溝遺構は、南西－南東に延び、幅約60cmで全長約14mにわたって確認された。溝の底面は、1号溝遺構と同様で北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。遺物は、埋土中から陶器1点が検出された。

3号溝遺構は、西北西－東南東に延び、幅約95cmで全長約6mにわたって確認された。溝の底面は、西北西から東南東に向かって緩やかに傾斜し、東南東端では不明瞭になり確認できなかった。遺物は、埋土中から陶器1点が検出された。

4号溝遺構は、3号溝遺構の北側に平行して確認された。幅約120cmで全長約6mにわたって確認された。遺物は、埋土中からすり鉢1点が検出された。

(2) 道路状遺構（第140図）

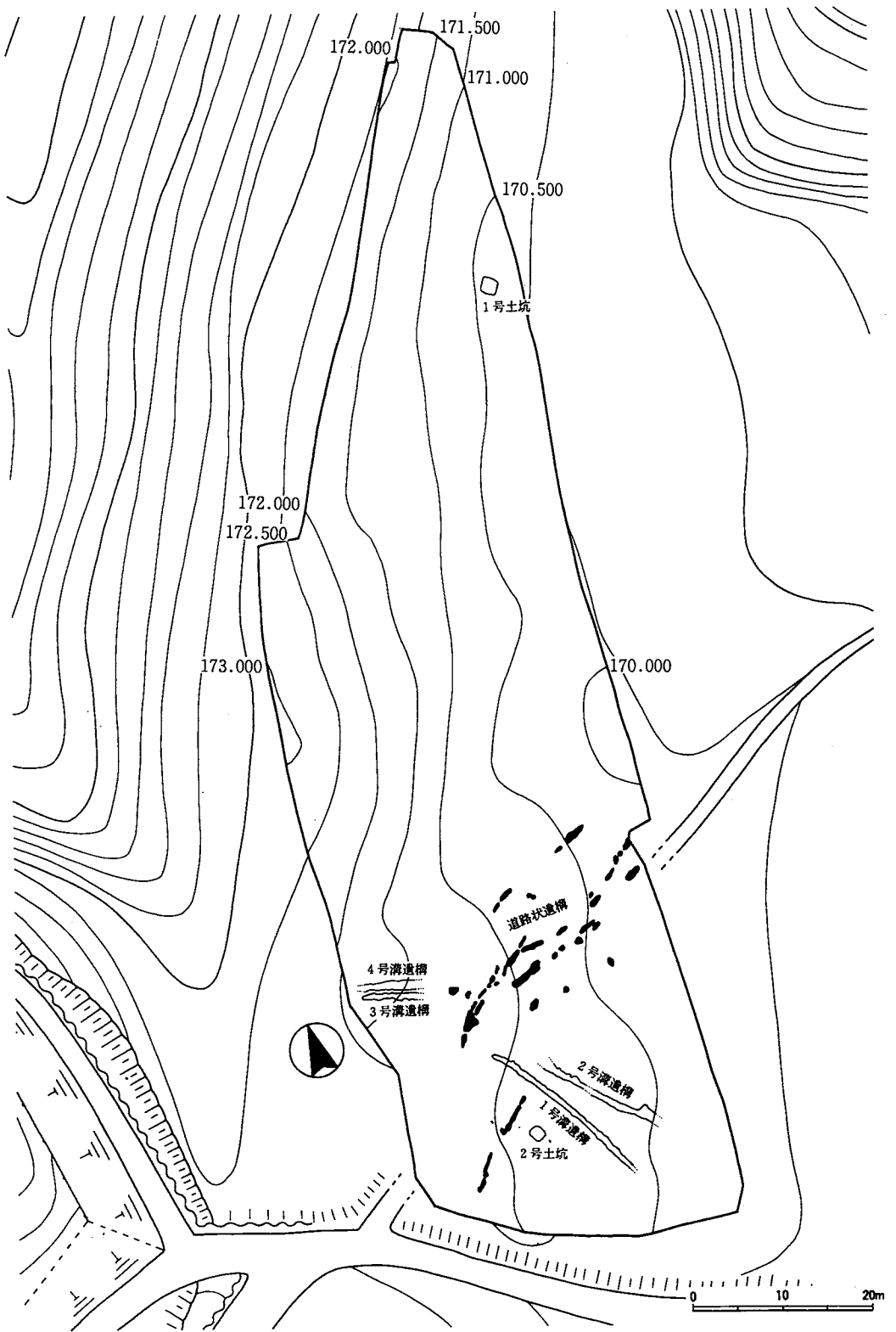
道路状遺構は、表土下のⅡa層上面で確認された。その在り方は、現在まで使用されていた農道と同一方向に硬化面が点在する。その色調は黒褐色で、土質はⅡa層を基本とするものであり、1～4号溝遺構と同時期の可能性が高い。

(3) 不明土坑（第143図、第144図）

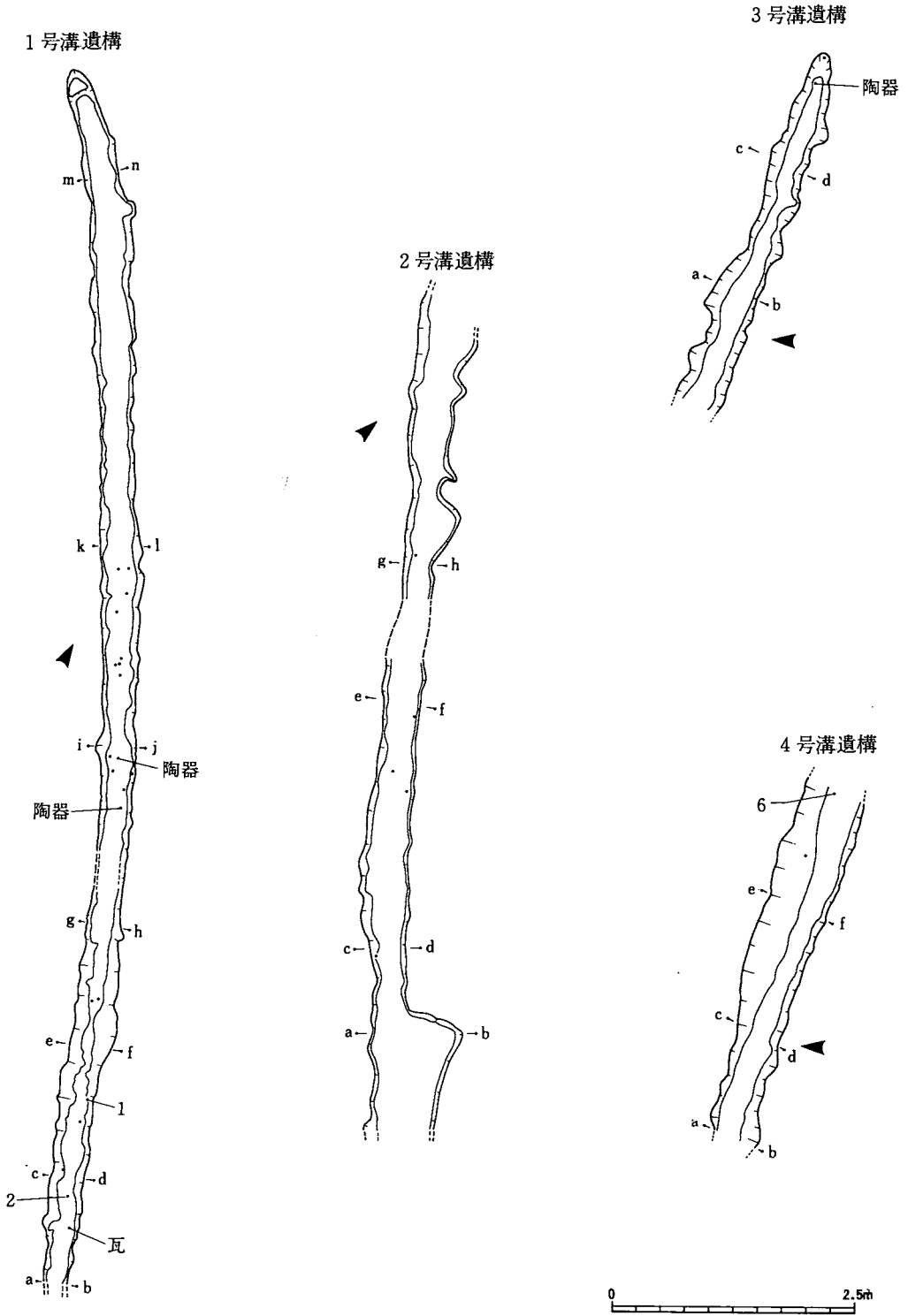
不明土坑は、調査区の南北で1基ずつ検出された。

1号土坑（第143図）

1号土坑は、ⅡB-4、9区で検出された。その平面形は、約1.8m×約1.8mの隅丸の正方形を呈した土坑である。深さは約20cmで、埋土は、3層に分類された。①は暗黄褐色土で、1～

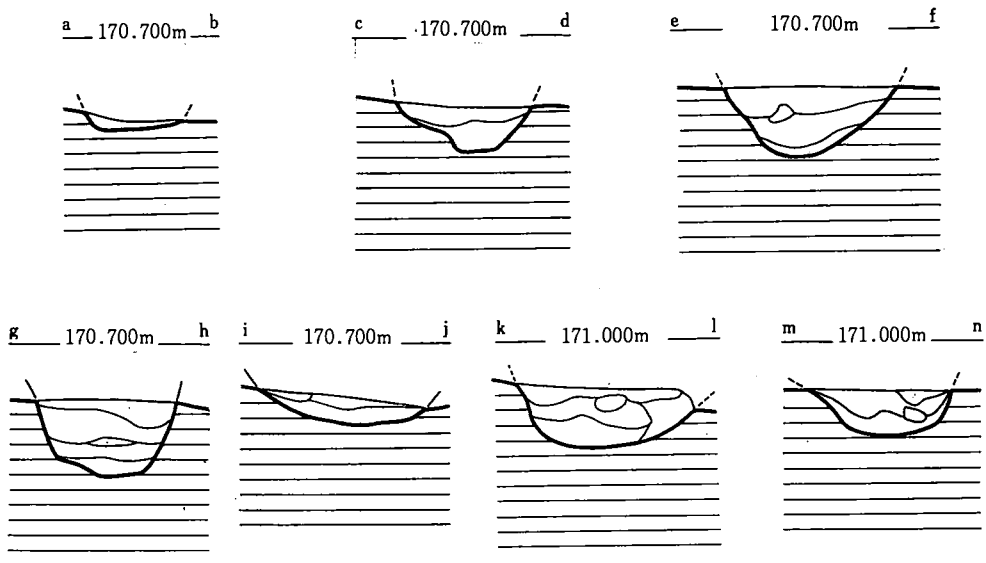


第140図 遺構配置図

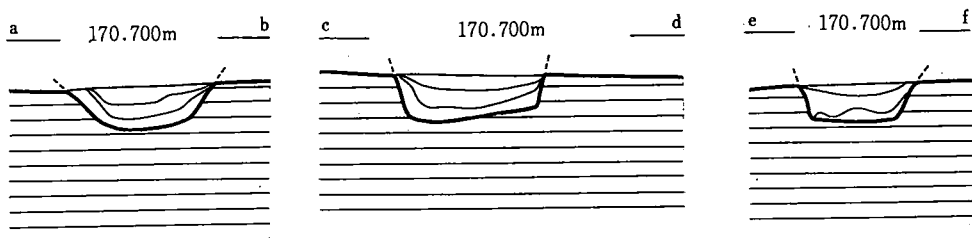


第141図 溝遺構実測図

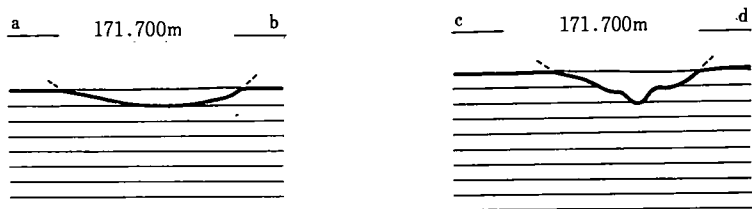
1号溝遺構



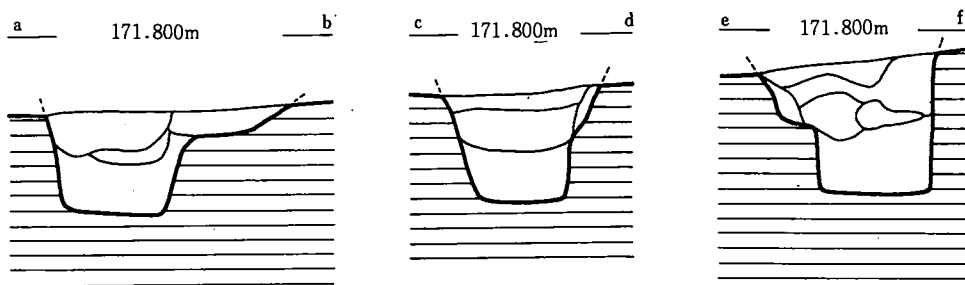
2号溝遺構



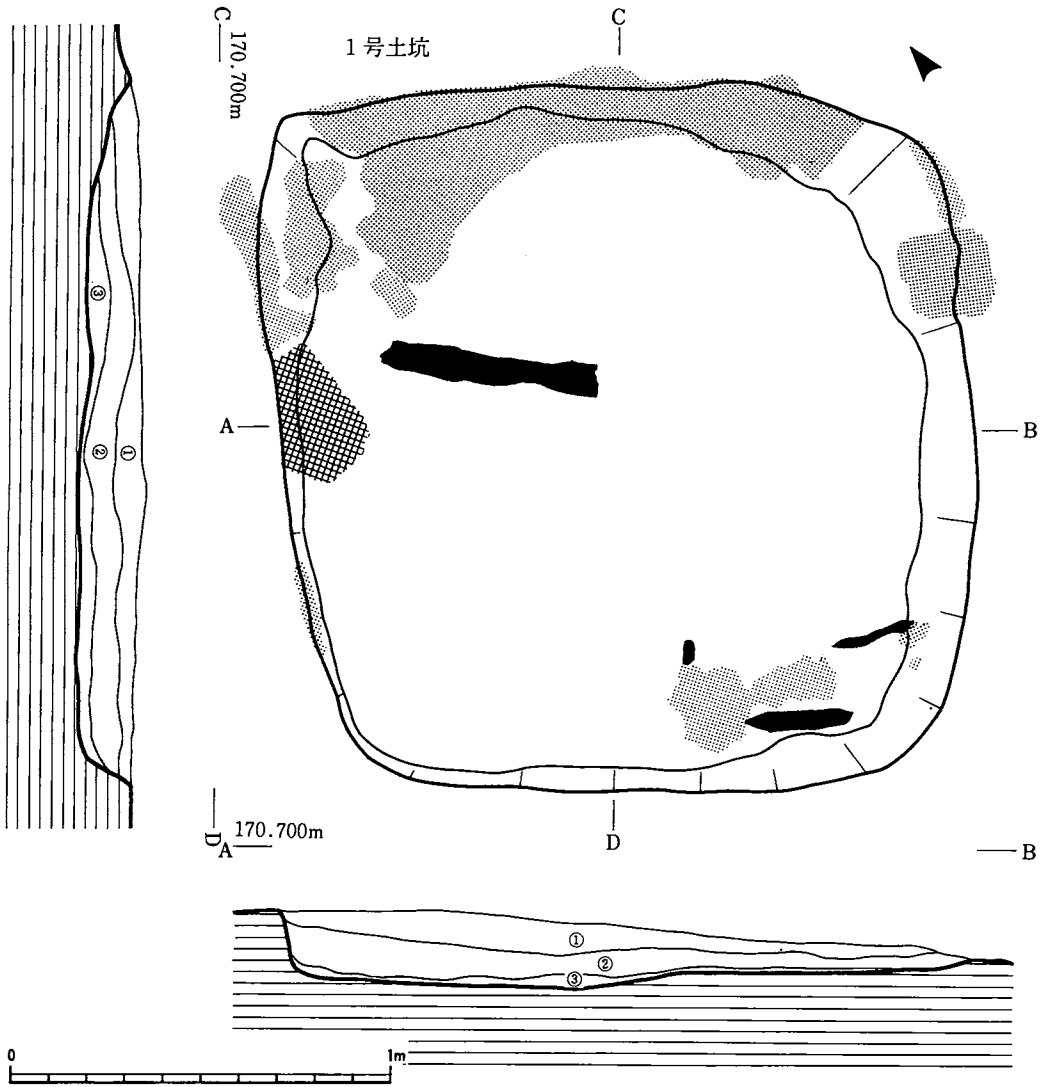
3号溝遺構




4号溝遺構




第142図 溝遺構断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$)



 炭化物

 微細な炭化物の集中部

 熱を受けて赤化している部分

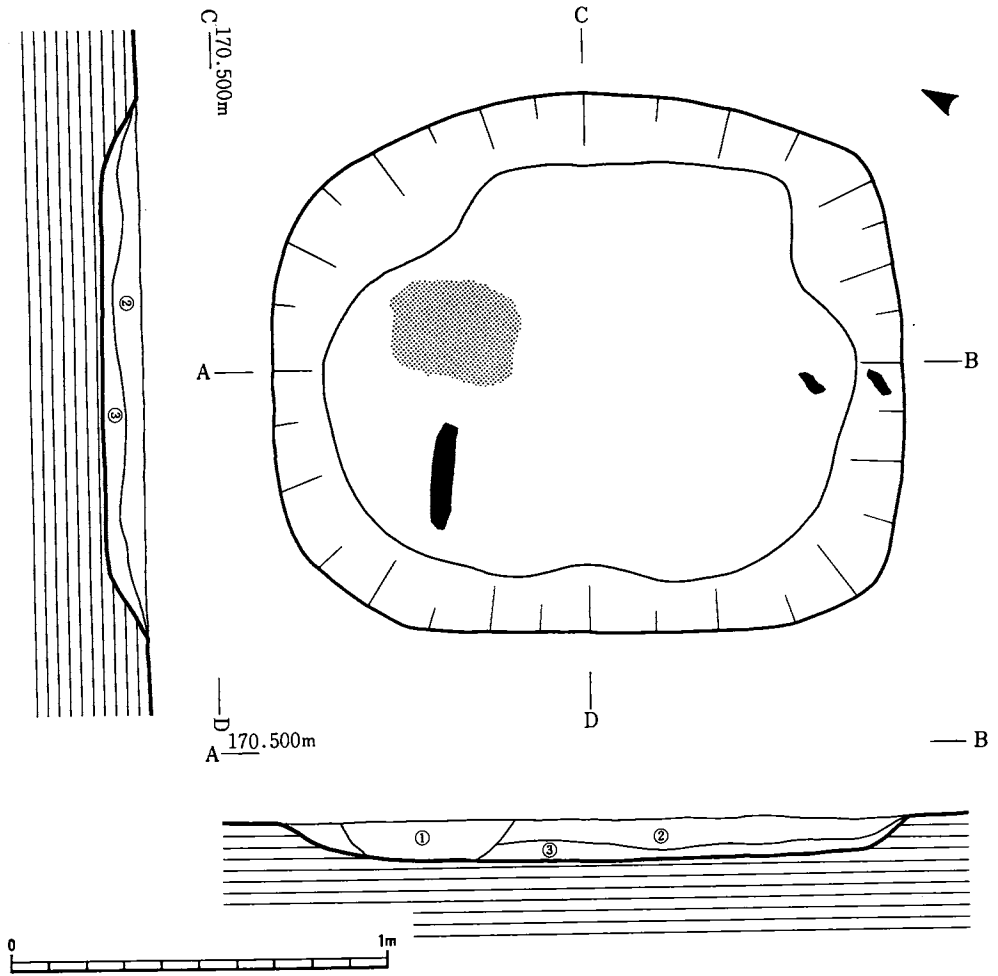
① 暗黄褐色土…1～5mm大の炭化物を、微量に含み、乾いた状態ではやや白っぽく見える。粒子は細かい。

② 黒色土…粒子は細かく、大きめの炭化物を大量に含む。

③ 黒色土…粒子は細かく、微細な炭化物をわずかに含む。

第143図 土坑実測図

2号土坑



炭化物



熱を受けて赤化した部分

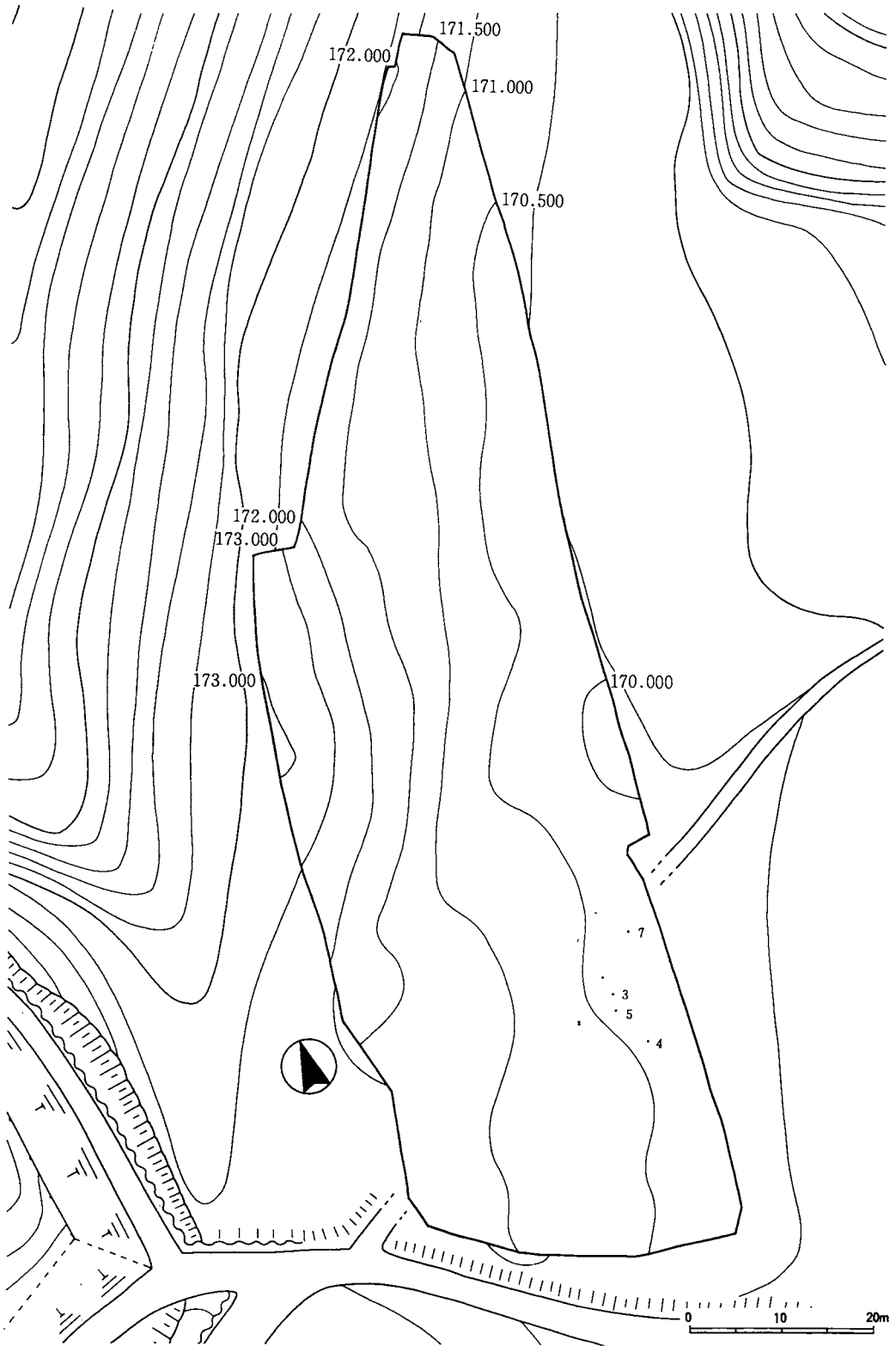
① 黒色土…粒子は細かく、やや大きめの炭化物を大量に含む。

② 暗黄褐色土…粒子は細かく、微細な炭化物をわずかに含む。

③ 暗褐色土…粒子は細かく、大粒の炭化物を多量に含む。

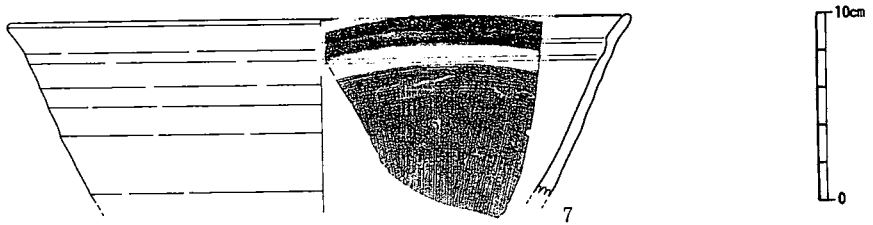
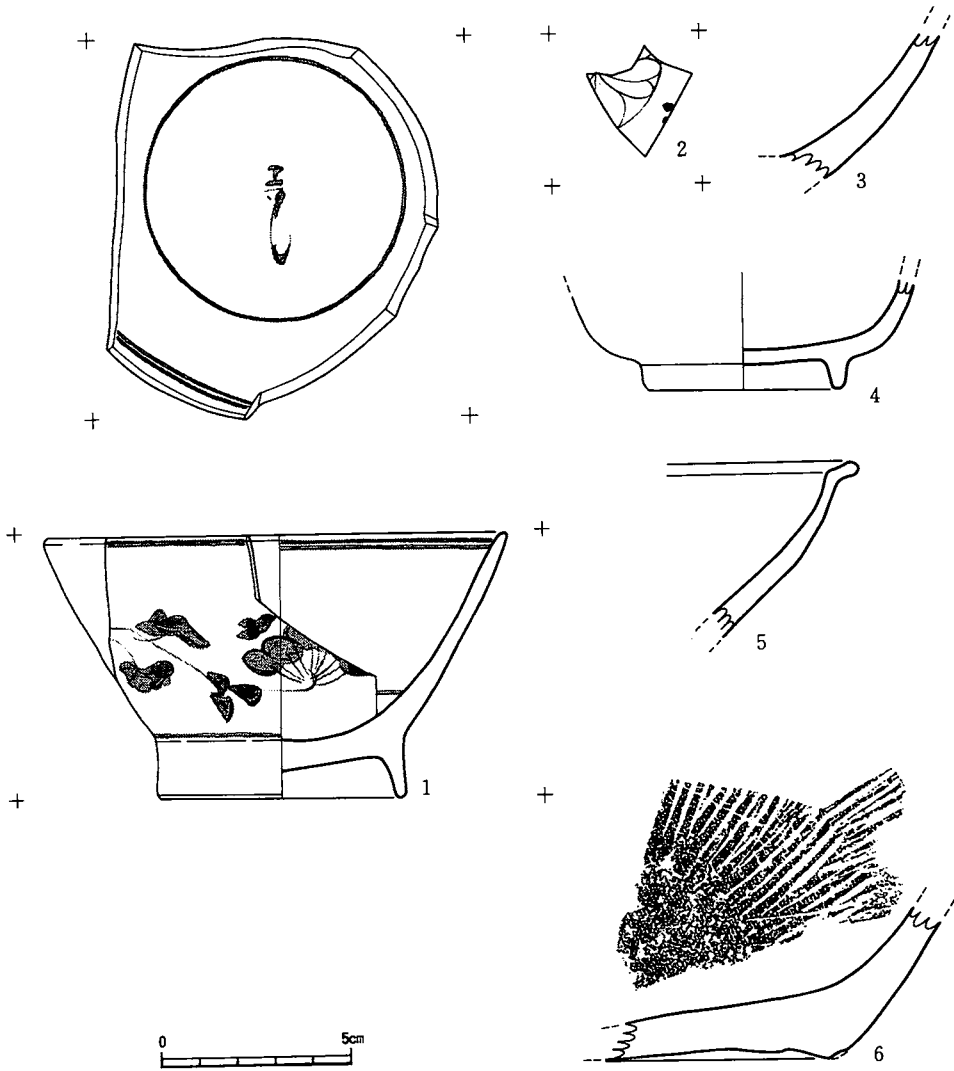
第144図 土坑実測図

第5節 その他の遺構・遺物



第145図 遺物分布図（陶磁器類）

第三章 調査の成果



第146図 遺物実測図

第5節 その他の遺構・遺物

第16表 陶磁器類観察表

番号	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	染付	鉢	口径—(12.3cm) 高台径—6.3cm 器高—6.9cm 高台高—1.6cm	見込の中心の円内に「寿」の崩し文字、口縁部に僅かな歪み 胴部は僅かに膨らみ、口縁部は直行する 高台は、ほぼ垂直 体部口縁部下と胴部口縁部下、胴部と高台との境に、圏線有外面に梅花文	量付は、釉が剥がれている 量付以外は、全面施釉 高台は、削りだし	胎土—密 焼成—良 色調—胎土は青白色、釉は透明、染付は藍色を基調とし濃淡あり	1号溝遺構埋土中
2	染付	不明	法量不明	胴部、菊花文?	内外面とも施釉	胎土—密 焼成—良 色調—胎土は青白色、釉は透明、染付は藍色を基調とし濃淡あり	1号溝遺構埋土
3	陶器	不明	法量不明	細かい貫入が入る	内外面とも、施釉	胎土—密 焼成—良 色調—胎土は淡褐色、釉は黄緑色	
4	陶器	碗	口径—不明 高台径—5.1cm 器高—(2.8cm) 高台高—0.8cm	細かい貫入が入る	高台外面側に2mm幅の面取りを施す	胎土—密 焼成—良 色調—胎土は淡黄色、釉は黄緑色	
5	磁器	不明	法量不明	貫入が入る 口唇部が鋭く外反する 釉に気泡の痕跡が残る		胎土—密 焼成—良 色調—胎土は青白色、釉は透明	
6	陶器	すり鉢	法量不明	刻線は、体部から見込の周辺部まで縦方向に入り、見込中央にはみられない	底部は、やや上底気味	胎土—粗い 焼成—良 色調—胎土は赤褐色、外面は赤褐色	
7	陶器	すり鉢	口径—33.2cm 器高—不明	刻線は、体部の肥厚部下から施され、単位は14本である 刻線は、浅い 口縁部に内外面とも施釉	口縁部が、やや外反し内面側で肥厚する	胎土—密 焼成—良 色調—胎土は赤褐色、内外面とも赤褐色	

5mm大の炭化物を微量に含み、乾いた状態ではやや白っぽくみえる。粒子は細かくサラサラとしている。②は黒色土で、大きめの炭化物が大量に含まれる。③は、色調的には②と同様であるが、炭化物が微細なものを僅かに含む程度である。土質は②に比べてやや粘性を帯びる。この土坑からは、遺物は検出されなかった。

また、北側の壁面では赤く焼けた状態が観察された。

2号土坑（第144図）

2号土坑は、ⅦC-22区で検出された。その平面形は、約1.4m×約1.7mの隅丸の長方形を呈した土坑である。深さは、約10cmで、埋土は3層に分類された。①は黒色土で、やや大きめの炭化物を大量に含む。②は暗黄褐色土で微細な炭化物が僅かに含まれる。③は大きめの炭化物を大量に含んでいる。土質は、①～③とも粒子は細かく同様であるが、①→③へと徐々に粘性が強くなる。この土坑からは、遺物は検出されなかった。

また、土坑床面の北西部で赤く焼けた状態が観察された。

2. 遺物とその分布

近世に属する遺物は、全部で11点出土した。その分布は、調査区南側で検出された道路状遺構より南側にみられ、溝遺構の埋土中から検出されたものを除けば、東側に集中して出土している（第145図、第46図）。

それぞれの資料については、観察表（第16表）にまとめた。

3. まとめ

近世に属する遺構は、第140図で示したように道路状遺構と1～4号溝遺構が確認された。これらの遺構は、Ⅱa層（濁りの強いシラス）直上で検出された。遺構に伴って出土した遺物には、陶磁器類10点と瓦1点がある。遺構以外から出土した遺物についても、出土層位はⅡa層で同時期と考えられる。出土した遺物は瓦以外はすべて日用雑器で、鉢（第146図1）は口縁部に歪みがみられる。

また、これらの遺構・遺物の検出面はⅡa層であり、この土層は土質の性質から自然堆積層とは考えられない。つまり、濁りの強いシラス層であるため畑地を開墾造成し耕作地を拡大させていく過程で持ち込まれた客土である可能性が高い。このことと合わせて考えた場合、遺物・遺構の所属時期はこの開墾に伴って客土を持ち込んだ時期か、もしくはその後といえることができる。つまり江戸時代後半～末と考えることができるのではないだろうか。

不明土坑は、平面形及び埋土中に含まれる炭化物の状態から、その類例としては隣接する白鳥平A遺跡、赤池永谷遺跡の2遺跡3例と、小川内烽火台跡があげられる。

しかし、遺構の性格及び時期等については不明である。

第 IV 章 総 括

発掘調査の結果12枚の基本土層と、その中の6枚に包含されていた、遺構23基、土器803点、石器3379点、土製品・石製品8点が確認された。包含層は、上位より第Ⅱa層、第Ⅲ層～第Ⅳa層、第Ⅴ層～第Ⅵb層である。白鳥平B遺跡では、アカホヤ火山灰降灰以後の遺物として第Ⅱa層に近世の遺構・遺物が、第Ⅲ層～第Ⅳa層に縄文時代前期から古墳時代までの遺物が包含され、第Ⅴ層～第Ⅵb層は、先土器時代から縄文時代早期までの遺構や遺物が包含されている。基本的には第Ⅴ層～第Ⅵa層上部に縄文時代早期の遺構や遺物が包含され、第Ⅵa層下部～第Ⅵb層上部に縄文時代草創期の遺物が包含されている。また第Ⅵb層下部～第Ⅵc層上部には、先土器時代の遺物（ナイフ形石器文化）が包含されている。

このように、白鳥平B遺跡は先土器時代から近世までの複数の時期の遺構や遺物が上下に重なり合う複合開地遺跡である。

1. 近世の遺構・遺物について

近世に属する遺構・遺物は調査区南側で僅かに検出された。前述したように、その所属時期については、不明な点が多い。しかし、その遺構・遺物の検出面や埋土の状況から江戸時代末の可能性が指摘できる。

また、2基の不明土坑については、科学的な年代測定を実施していないため詳細な時期等は不明である。同様の土坑は、人吉・球磨地方で4遺跡8例で確認されている。このうち白鳥平B遺跡の2例を除いて、6例では、遺構中から検出された炭化物について科学的な年代測定がなされた。その結果、およそ13世紀末～15世紀前半という数値が得られている（第17表）。

しかし、文献記録にみられる小川内烽火台遺跡以外については、土坑の性格等を類推することができない。また、白鳥平A、B遺跡、赤池永谷遺跡という比較的近接した地域で形態的に類似した土坑が検出されており、今後類例が増加し、多角的な分析を実施し検討を加えていく必要がある。

第17表 科学的年代測定結果一覧表

遺 跡 名	遺 構 名	測 定 番 号	14C年代測定値	西 暦
赤池永谷遺跡	第1土坑	K S U - 2131	520 ± 20 B P	A D 1430 ± 20年
	第2土坑	K S U - 2132	620 ± 15 B P	A D 1330 ± 15年
	第1集石	K S U - 2134	4970 ± 160 B P	B D 3020 ± 160年
白鳥平A遺跡	4号土坑	K S U - 2133	660 ± 20 B P	A D 1290 ± 20年
小川内烽火台遺跡	S K - 1	K S U - 2056	530 ± 10 B P	A D 1420 ± 10年
	S K - 2	K S U - 2057	520 ± 10 B P	A D 1430 ± 10年
	S K - 3	K S U - 2058	540 ± 10 B P	A D 1410 ± 10年

2. 縄文時代前期～古墳時代について

縄文時代前期～晩期にかけての遺物としては、轟式(系)土器、春日式土器、阿高式系土器(南福寺式)、山ノ寺式土器、弥生時代中期の甕形土器、成川式土器の各型式の土器が少量ではあるが検出された。しかし、その分布の中心は当該遺跡の南側に限られ、遺構等の検出もみられなかった。

このことは、当該遺跡の立地している丘陵に対する後世の開墾等によるところが大きい。遺物の検出が希薄になる北側部分では、その包含層である第Ⅲ層～第Ⅳa層がほとんど削平され残存していない。そのため、アカホヤ火山灰降灰以後も白鳥平B遺跡の立地する丘陵上で営まれた生活(活動)の一端を示す資料として重要であるが、保存状態が良好とはいえず詳細については不明な点が多い。

3. 縄文時代早期について

縄文時代早期の遺構や遺物は、第Ⅴ層～第Ⅵa層上部で検出された。この包含層の上位には鬼界カルデラを起源とするアカホヤ火山灰(第Ⅳ層)が厚く堆積し、その保存状態は極めて良好である。また、上層に堆積した広域火山灰によって、他の地域との比較も可能である。

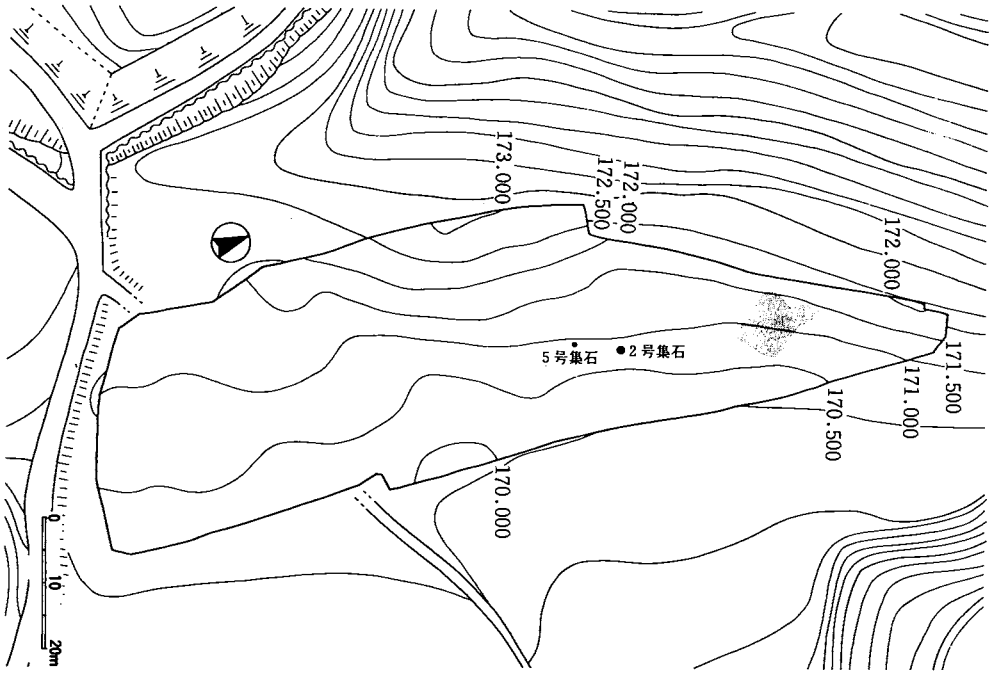
当該期の遺構・遺物は、それぞれに集中部分と出土層位という点で異なる。そのため、前章で述べたように大きく2時期に分けることができる。そこで、この2つの時期をⅠ期・Ⅱ期と仮称する。

Ⅰ期は、第Ⅵa層上部で検出された遺構・遺物で、集石遺構2基と押型文や条痕文土器を主体とする土器群及び石器群からなる。

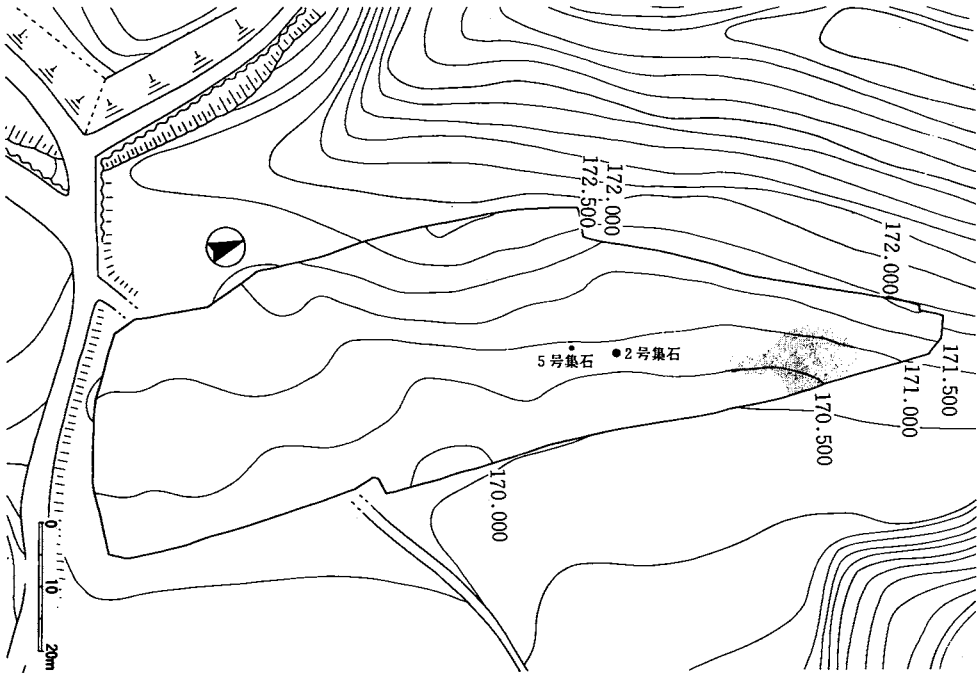
その分布は、遺構がⅢB、ⅣC区で検出され、土器、石器等の遺物集中部はⅡB区で見られる(第147図)。

Ⅱ期は、第Ⅴ層上面で検出された遺構・遺物で、集石遺構4基、配石土坑1基、土坑2基と塞ノ神式や円筒形条痕文、平椀式、縄文、押型文土器等の多様な型式の土器群及び石器群からなる。その分布は、遺構・遺物とも遺跡全面に広く展開するが、まとまりとしては大きく南北の集中部に分けられる(第148図～第150図)。この時期の遺構の分布は、ⅢB、ⅣC区に集中する1、3、4号集石遺構とⅡB区に集中する2号配石土坑及び2基の土坑の2つの遺構集中部と、それらと地点を異にする遺構(7号集石遺構、1号配石土坑、6、7号土坑)がある。このような遺構ごとのまとまりは、当時の生活の場の利用を考えるうえで重要である。

また、この南北2ヵ所の遺物集中部に認められる土器型式別の分布は第148図～第150図のとおりである。このように、南北の遺物集中部で検出される土器型式では、南北の遺物集中部両方で検出されるものと、そうでないものがある。前者には塞ノ神式土器や円筒形条痕文土器があり、後者には平椀式土器や縄文土器、押型文土器がある。さらに、前者の土器のなかで1例南北の遺物集中部間での接合例が認められた。その土器型式は、塞ノ神式系土器の木佐貫原

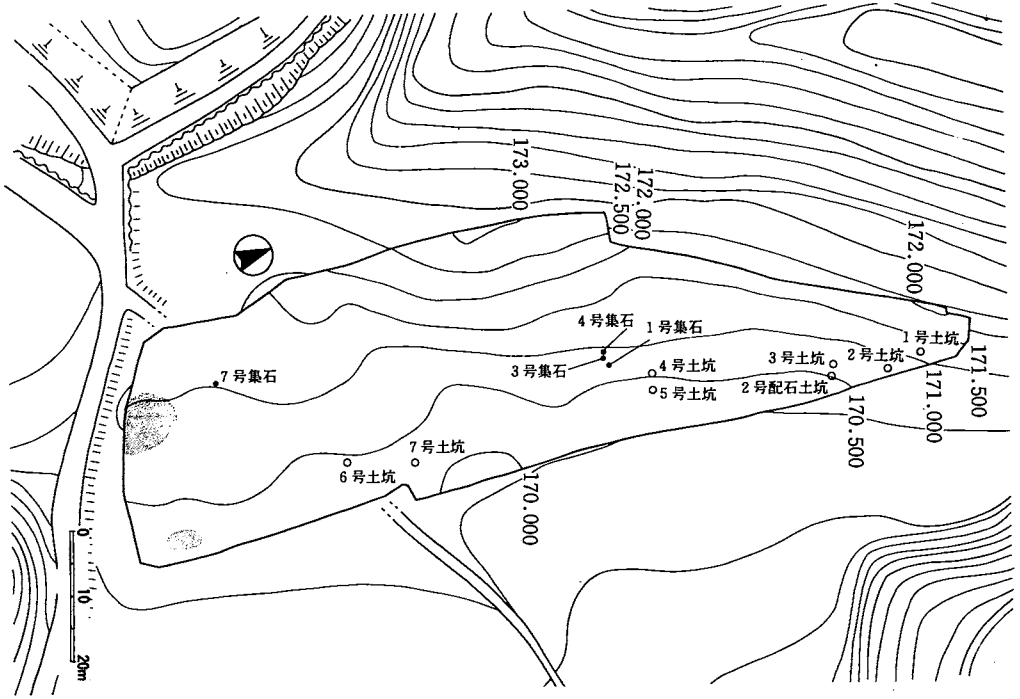


① 橢円押型文土器

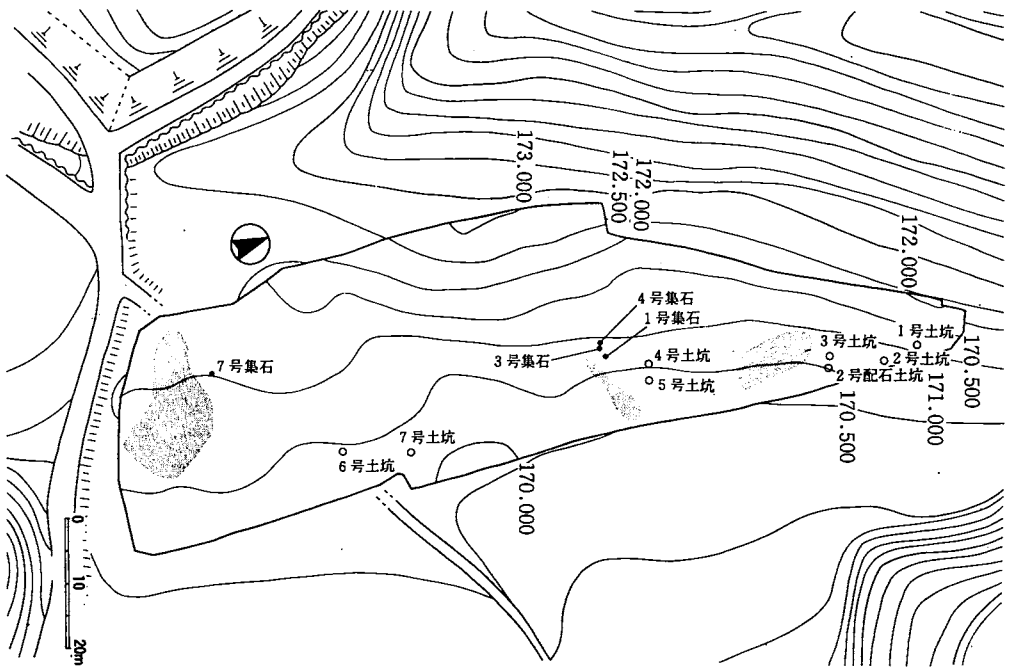


② 条痕土器

第147図 土器分布図①

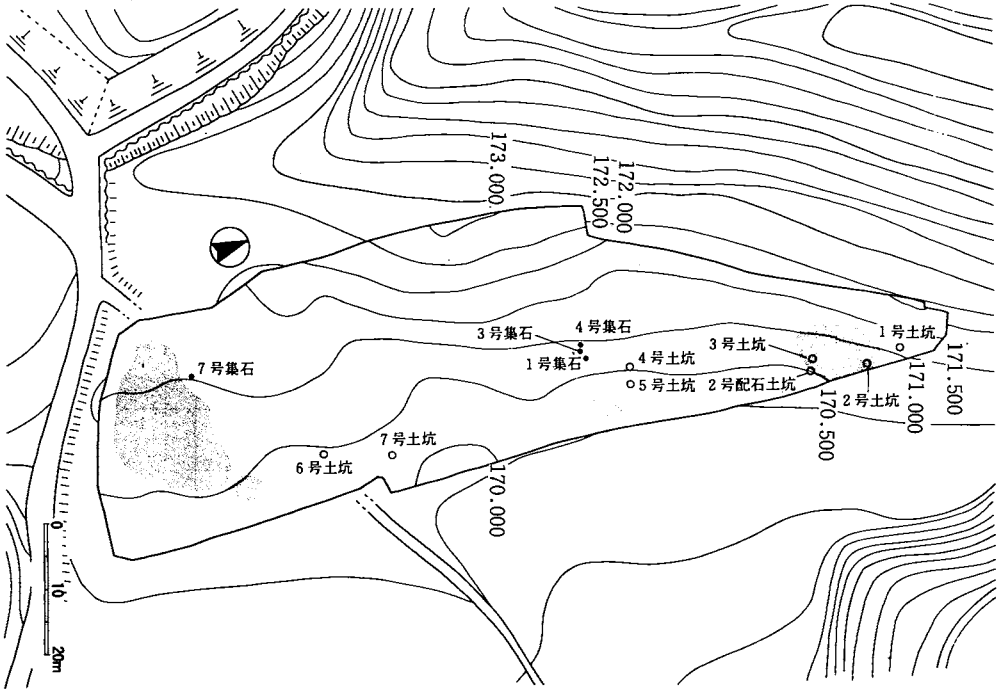


③ 山形押型文土器

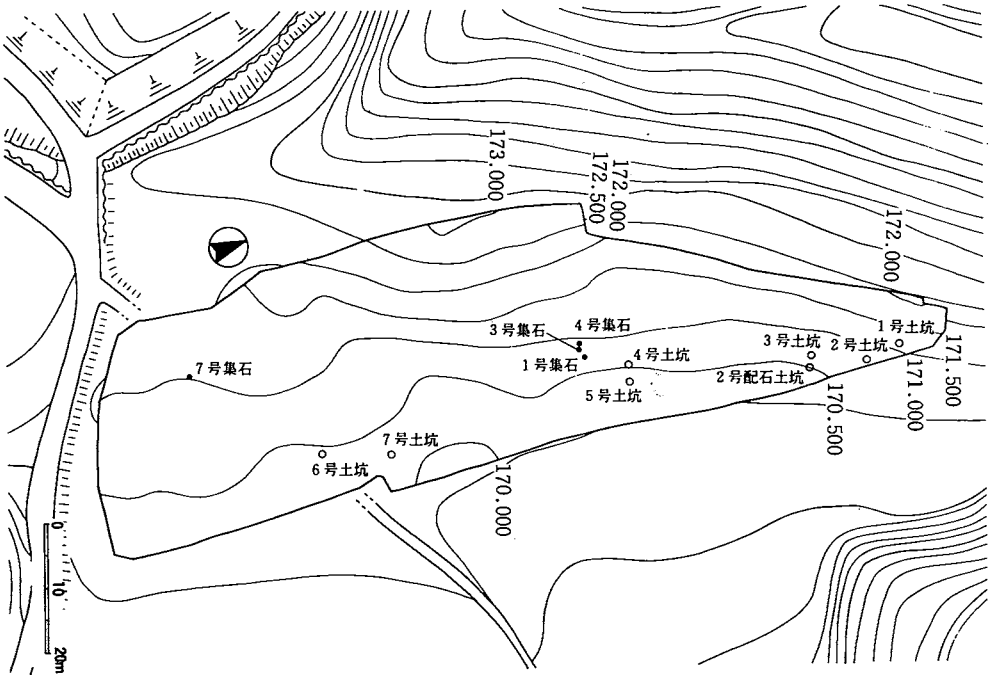


④ 円筒形条痕文土器

第148図 土器分布図②



⑤ 塞ノ神式土器



⑥ 平椽式土器

第149図 土器分布図③



第150図 土器分布図④

タイプである。このことは、南北の遺物集中部がほぼ同時期の所産であることを示唆するものである。

この塞ノ神式系土器には、木佐貫原タイプの外に塞ノ神タイプ、石坂上タイプがみられる。しかし、口縁部の資料は少なく、貝殻による連続刺突文を施すものは第75図64のみであり、胴部との接合例は確認されなかった。このことから、確認された塞ノ神式(系)土器は、木佐貫原タイプと石坂上タイプがその中心となるものと考えられる。

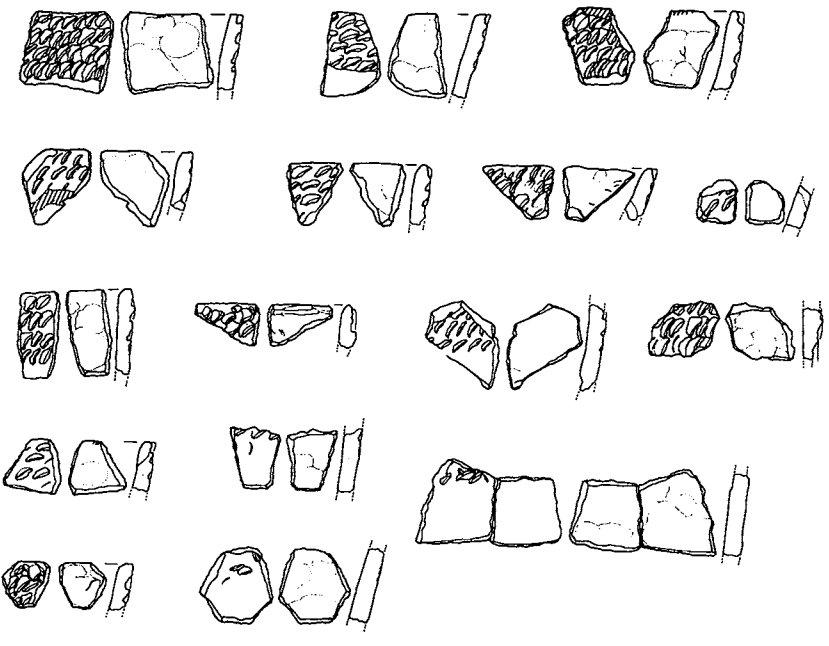
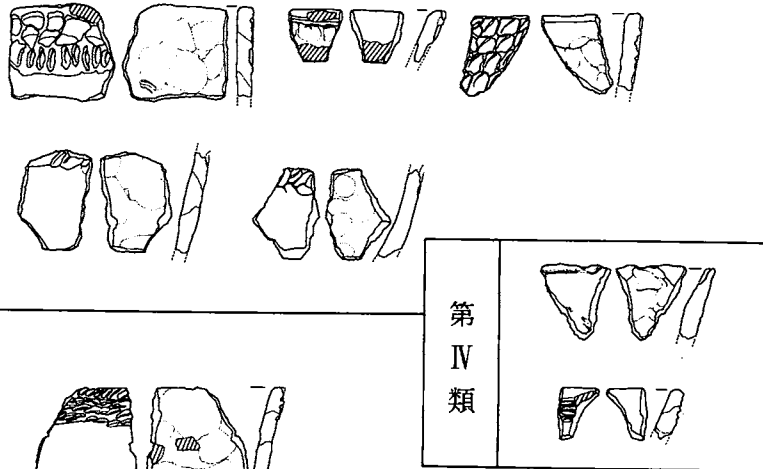
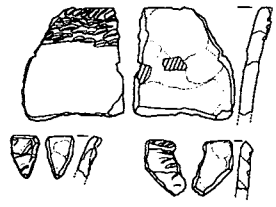
また、これらの土器の中では、木佐貫原タイプが北側で、石坂上タイプが南側の遺物集中部にまとまりをもって検出され、石坂上タイプの分布と重なるように耳栓が4個出土している。

このことから白鳥平B遺跡で検出された耳栓は、新東氏が指摘したように塞ノ神式系の石坂上タイプに伴う可能性が高い。

4. 縄文時代草創期について

縄文時代草創期の遺物は、第VI a層下部～第VI b層上部で検出された。また、その分布は遺跡(調査区)の北側のII B区に集中している。

当該期の遺物の分布の在り方を、遺跡の立地する地形から概観すると、その在り方は北西側に白鳥平A遺跡から連なる丘陵を背し、その比高差は20m以上を測る。北東側には、谷部が回り東側、南側で広がる地形を呈している。このように遺跡の立地する丘陵上の北端の比較的狭い地点に選地している。このような遺跡の在り方は、鹿児島市掃除山遺跡のそれと類似する。

<p>白鳥平B遺跡第I類</p>		<p>統隆起線文土器期 I 古期</p>
<p>第II類</p>		<p>隆起線文土器期 IV 期</p>
<p>第III類</p>		<p>III 期</p>
<p>—</p>	<p>—</p>	<p>III 期</p>

第151圖 爪形文土器編年圖

しかし当該遺跡においては、遺物集中部のみを検出であり、遺跡の存在する丘陵全面で調査を行なっておらず、その全容については不明な点が多い。

また、検出された土器は、前章で述べたように大きくⅠ～Ⅳ類に分類が可能である。これらの土器群は、爪形文施文という点で共通している。しかし、その文様構成には差異が認められる。

Ⅰ類に分類した資料は、当該遺跡の主体をなすもので爪形文を単純に施文する資料である。この資料は、施文の形状や深浅の相違点はみられるが、菊池郡大津町無田原遺跡、出水市上場遺跡、長崎県福井洞穴、泉福寺洞穴、福岡県門田遺跡出土の資料と類似する。

Ⅱ類に分類した資料は、爪形文に指頭痕を併用するもので、口唇部への加飾や指頭痕の有無という相違点はみられるが、類似する資料を出土する遺跡としては、宮崎市椎屋形遺跡があげられる。

Ⅲ類に分類した資料は爪形文を施文し、その上下に摘みあげの手法により、意識的に隆起部を作り出しているもので、その施文部は土器の上部に集約される。この資料は、球磨郡多良木町里の城遺跡、宮崎市堂地西遺跡の資料に類似する。

Ⅳ類は、Ⅰ～Ⅲ類の分類に該当しない資料を一括して取り扱った。

また白鳥平B遺跡の当該期の資料は、大塚達朗氏の指摘する隆起線文土器期Ⅳ期に分類できる資料（白鳥平B遺跡Ⅲ類）と、続隆起線文土器期Ⅰ古期に比定できる資料（白鳥平B遺跡Ⅰ類）がみられ、Ⅱ類のように両者の中間的様相として捉えられる資料も存在する。つまり、型式学的には前章で述べたように、〈Ⅲ類→Ⅱ類→Ⅰ類〉という変遷として捉えることが可能である。しかしこれらの土器群の分布の在り方からは、偏在の傾向は認められず各類ごとの時間幅は差程ないものと考えられ、ほぼ同時期の所産と捉えられる。

そのためこれらの資料の編年的位置付けとしては、隆起線文土器期から続隆起線文土器期への過渡期的段階として捉えることができる。

共伴する石器群の様相では、石器組成の中に占める石鏃の割合が38.4%であり、このことは他の遺跡と比較しても極めて高い数値を示している（第5表）。また、細刃器も同様に19.5%と高い数値を示す。しかし当該遺跡においては、細石刃核が1点も出土しておらず、その共伴関係については疑問の残るところである。この点については注意が必要であり、今後の資料の増加をまって慎重に検討する必要がある。

5. 先土器時代について

先土器時代の遺物は、第Ⅵb層下部～第Ⅵc層上面で検出された。その分布は、前章で述べたように南北2ヵ所に集中部が確認された。

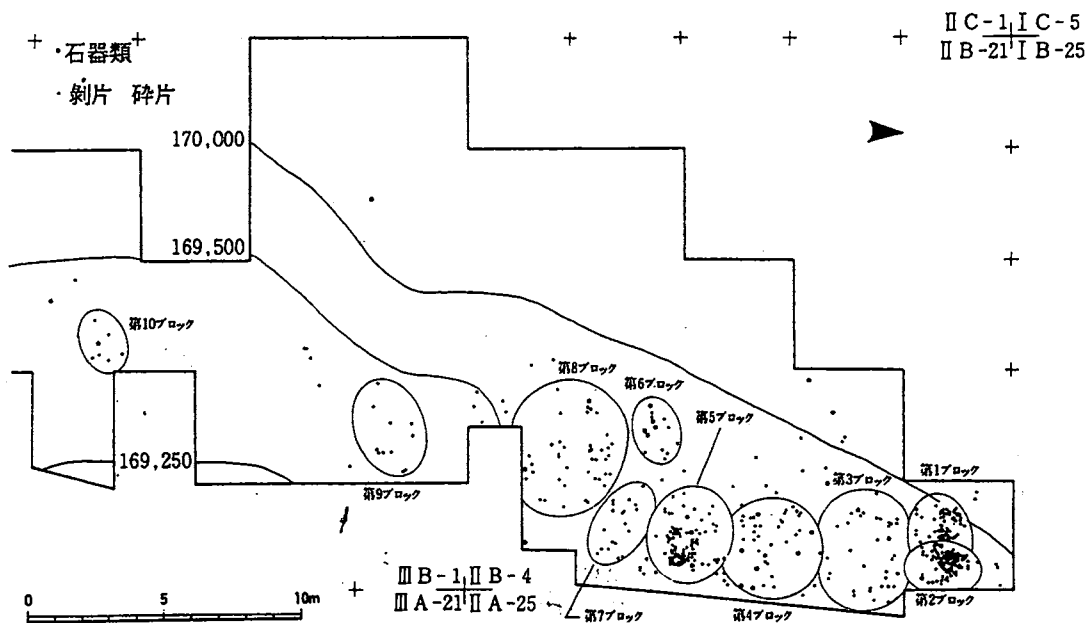
この石器文化は、ナイフ形石器、三稜尖頭器、搔器、削器、楔形石器、磨石・敲石、二次加工ある石器、使用痕ある剥片による石器組成で、ナイフ形石器と三稜尖頭器を主体とした石器

文化である。石器組成の中で中心を占めるものは、ナイフ形石器18.9%、三稜尖頭器13.5%、磨石・敲石24.3%、使用痕ある剥片25.6%である（第3表）。

ナイフ形石器は、切出し状のナイフ形石器を主体とし、台形石器、剥片尖頭器、一側縁加工や部分加工のナイフ形石器を含む形態組成をとっている。また石材では、珪岩24.8%、黒耀石71.4%、安山岩1.2%、頁岩0.1%、砂岩0.9%、凝灰岩1.6%で、黒耀石の利用頻度が極めて高い数値を示している。このことは、狸谷遺跡Ⅱ石器文化の石材利用状況と違う様相を示している。

このような石器組成、石材組成の在り方を球磨地方において、現在まで確認されている先土器時代遺跡と比較すると、石器組成の中でナイフ形石器と三稜尖頭器が主体を占める石器文化としては、白鳥平A遺跡、天道ヶ尾遺跡等がみられる。また、ナイフ形石器を主体とする石器文化としては、狸谷Ⅱ石器文化、大丸・藤ノ迫遺跡等があげられる。

石材組成の面からみても、当該地方において容易に入手できる珪岩が、その中心をなす石器文化（遺跡）が多く、その点からも白鳥平B遺跡の様相は特異である。さらに、当該遺跡において、中心的石材として利用されている黒耀石には、漆黒色の挟雑物を含まない良質のものと、風化が著しく光沢がないものと大きく分けて2種類の黒耀石が利用されている。後者の黒耀石は、表面が礫面のように風化してザラザラとした状態を呈し、新しい割れ面の観察からは、黒色で挟雑物を含まない良質の黒耀石が観察される。このように黒色で挟雑物を含まず良質で、



第152図 先土器時代遺物分布図（北側）

風化の速度が著しく速い黒耀石としては鹿児島県樋脇町上牛鼻産のものが知られており、白鳥平B遺跡で検出された「風化して光沢のない黒耀石」は、上牛鼻産の黒耀石の可能性が高い。また、この種の石材による製品は、ナイフ形石器及び三稜尖頭器にのみ利用され、他の石器には利用されていない。さらに、大量の剥片・破片が検出されたが、「風化して光沢のない黒耀石」製の石核は1点も検出されていない。このことから、当該遺跡には剥片の状態を持ち込まれ、調整加工を施し石器製作を行なった可能性が指摘できる。このことは、北側遺物集中部第1、3ブロックの在り方からも同様の傾向が窺える。

この白鳥平B遺跡の石器文化は、石器組成の中に剥片尖頭器をもち、切出し状のナイフ形石器と三稜尖頭器を主体とする石器文化として捉えることができる。その編年的位置付けとしては、剥片尖頭器の基部調整の在り方から人吉市血気ヶ峰遺跡(血気ヶ峰Ⅱ石器文化)と類似し、ほぼ同様の時期として捉えられる。

参考文献

- 木崎 康弘 1986 『大丸・藤ノ迫遺跡』 熊本県文化財調査報告第80集
 ” 1987 『狸谷遺跡』 熊本県文化財調査報告第90集
 ” 1993 『久保遺跡』 熊本県文化財調査報告第126集
 ” 1989 「始良T n火山灰下位の九州ナイフ形石器文化」『九州旧石器』創刊号
 ” 1990 「球磨・人吉地方の先土器時代」『九州上代文化論集』
- 江本 直 1983 『曲野遺跡Ⅱ』 熊本県文化財調査報告第61集
 ” 1986 『熊本県旧石器時代調査報告書』 熊本県文化財調査報告第81集
- 肥後考古学会1985 『肥後考古』第5号(特集:熊本県の旧石器文化)
- 長野 真一 1979 「小牧ⅢA遺跡の紹介」『指宿史談』創刊号
- 清水 宗昭 1973 「剥片尖頭器について」『古代文化』第25巻第11号
- 緒方 勉・古森 政次 1980 『下城遺跡Ⅱ』 熊本県文化財調査報告第50集
- 西住欣一郎 1988 『鼓ヶ峰遺跡』熊本県文化財調査報告第96集
 ” 1990 『天道ヶ尾遺跡』Ⅱ 熊本県文化財調査報告第111集
- 九州旧石器文化研究会 1992 『九州旧石器時代関係資料集成Ⅱ』(角錐状石器)
 ” 1994 『九州旧石器時代関係資料集成Ⅲ』(剥片尖頭器)
- 宮田 栄二 1992 『西丸尾遺跡』鹿児島県文化財調査報告第64集
- 宮坂 孝宏 1993 『白鳥平A遺跡』熊本県文化財調査報告第127集
- 鶴島 俊彦 1988 『村山閨谷遺跡』 人吉市教育委員会
- 大田 幸博・下村 智 1980 『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告』
 熊本県文化財調査報告第51集

- ” ・松舟 博満 1990 『城・馬場遺跡』 熊本県文化財調査報告第110集
- 宮坂 孝宏・ ” 「城・馬場遺跡第2地点」 第14回九州旧石器文化研究会発表要旨
- 山城 敏昭 1993 『島廻遺跡』熊本県文化財調査報告第132集
- 大田 幸博・松舟 博満 1993 『赤池永谷遺跡』熊本県文化財調査報告第133集
- ” 1992 『小川内烽火台遺跡』熊本県文化財調査報告第123集
- 新東 晃一 1981 『中尾田遺跡』鹿児島県文化財調査報告第15集
- ” 1982 『塞ノ神式土器』縄文文化の研究第3巻 縄文土器Ⅰ 雄山閣
- ” 1989 「早期貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- ” 1989 「塞ノ神・平杵式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- ” 1993 「縄文時代の二つの耳飾り」『南九州縄文通信』7
- 雨宮 瑞生 1991 「南九州の縄文草創期土器」『南九州縄文通信』4
- ” 1992 「南九州の縄文草創期土器（補）」『南九州縄文通信』6
- ” 1993 c 「縄文時代の定住生活出現に関する研究現状」『南九州縄文通信』7
- ” 1992 a 「南九州縄文草創期資料の新旧関係」『鹿児島考古』第26号
- ” 1992 b 「南九州縄文草創期資料の新旧関係」『古文化談叢』第28集
- ” 1993 a 「研究展望・縄文時代の定住生活の出現およびに定住生活に関する史的諸問題」『古文化談叢』第29集
- ” 1993 b 「温帯森林の初期定住—縄文時代初頭の南九州を取り上げて—」『古文化談叢』第30集
- 大久保浩二 1991 「新発見の黒耀石原産地—鹿児島県日置郡市来町平木場—」『南九州縄文通信』4
- 長友 良典 1985 『堂地西遺跡』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集
- 宮崎県考古学会・南九州の縄文時代草創期を考える会 1993 『南九州における縄文時代草創期の諸問題』（資料集）
- 大塚 達朗 1989 「草創期の土器」『縄文土器大観』1 小学館
- ” 1992 「縄文草創期と九州地方」『季刊考古学』第38号
- 鈴木 保彦 1982 「草創期の土器型式」『縄文文化の研究』第3巻 縄文土器Ⅰ 雄山閣
- 佐々木洋治 1982 「隆起線文土器」『縄文文化の研究』第3巻 縄文土器Ⅰ 雄山閣
- 土肥 孝 1982 「縄文文化起源論」『縄文文化の研究』第3巻 縄文土器Ⅰ 雄山閣
- 日本第四紀学会・小野 昭・小田 静夫編 1992 『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会
- 丸山 伸治・濱田 彰久 1993 『大原天子遺跡』熊本県文化財調査報告第138集
- 和田 好史 1993 『中堂遺跡』人吉市教育委員会
- 米元 史郎・小村 美義 1992 『下田遺跡』志布志町埋蔵文化財調査報告（22）

第IV章 総括

- 出口 浩 他 1990 『横井竹ノ山遺跡』鹿児島市埋蔵文化財調査報告書 (10)
- 岡元 満子 他 1992 『掃除山遺跡』下 鹿児島市埋蔵文化財調査報告書 (12)
- 宮井 英一 1985 『大林 I・II、宮林、下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
- 米倉 秀紀 1983 「縄文時代早期の生業と集団活動」文学部論叢第13号 熊本大学
- 麻生 優 編 1984 『泉福寺洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会
- 田中 総 1993 「片羽町A遺跡出土の縄文草創期土器群の再検討」『諏訪市史研究紀要』5
- 人吉市教育委員会 1991 『人吉市遺跡地図』

周辺遺跡採集の石器資料について

宮坂孝宏・松舟博満

1. 楠木迫遺跡

(1) 遺物発見の経緯と遺跡の立地

ここで報告する資料は、人吉市赤池水無町楠木迫に所在し、平成2～3年度に実施した九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設に伴う、白鳥平A、B遺跡及び赤池永谷遺跡、島廻遺跡の発掘調査期間中に周辺遺跡の分布調査を実施した際、松舟博満氏（当時熊本県文化課嘱託）によって人我胸川上流の丘陵上において採集された資料である。

遺跡は、加久藤～大口にかけて三県を画する山地から連なる丘陵上に位置し、標高200～205mを測る。人吉市遺跡地図では、旧石器時代、縄文時代、古墳時代の複合遺跡で、剥片尖頭器、押型文土器、成川式土器、須恵器が出土していることが記載されている。

(2) 遺物について

以下資料について個別に説明を加えていく。

1は、珪岩製のナイフ形石器である。幅広で不定形の縦長剥片を素材とする。打面は、複剥離面であり、打点及び打面を残置する。調整加工は、表面側の左右両側縁基部と裏面側右側縁に施されている。石器の全体形は、剥片尖頭器に類似するが、基部は挟入状をなさない。

また、先端部側の左右両側縁とも刃こぼれが観察される。

石器の計測値は、長さ45mm、幅30mm、厚さ12mm、重さ10.09gである。

2は、安山岩製の二次加工ある不定形石器である。礫面を打面として剥出された幅広の不定形剥片を素材とし、右側縁裏面側に調整加工が施されている。剥片の先端部を欠失しているため、石器の全体形は不明である。

石器の計測値は、長さ（21mm）、幅24mm、厚さ6mm、重さ7.2gである。

3は、黒耀石製の二次加工ある不定形石器である。不定形の縦長剥片を素材とし、表面側には大きく礫面を残す。素材剥片の打点部を上位に置き、調整加工は表面の左側縁部に細かく施されている。

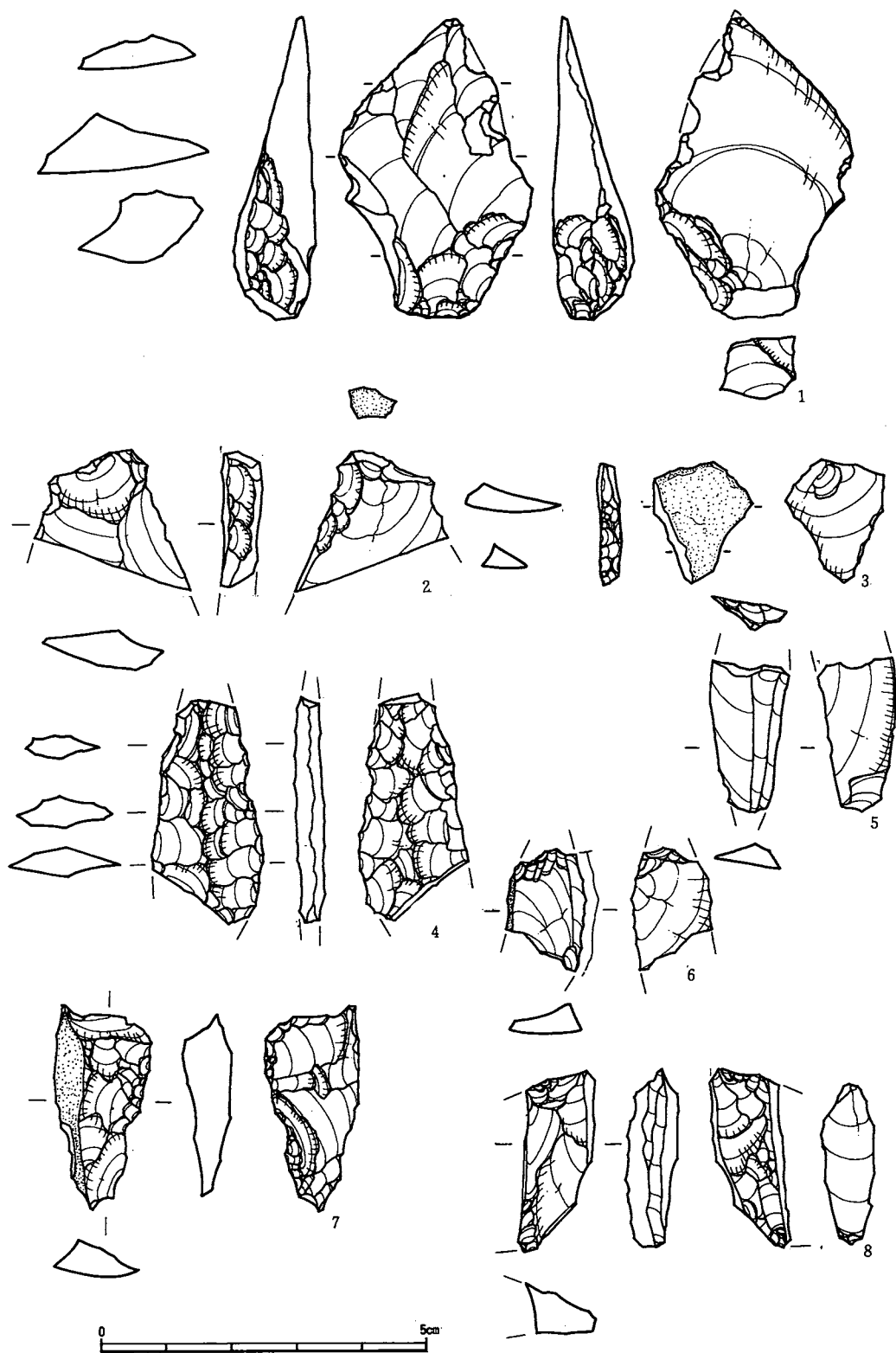
石器の計測値は、長さ19mm、幅15mm、厚さ3mm、重さ1.9gである。

4は、安山岩製の尖頭状石器である。先端部及び基部を欠失し、その全体形は不明である。

調整加工は、表裏両面とも縁片から石器中央に向け丁寧な施されている。

石器の計測値は、長さ（34mm）、幅16.5mm、厚さ4.5mm、重さ2.8gである。

5は、安山岩製の不定形の横長剥片である。剥片の左右両端を欠失している。左右両端とも、切断の可能性も指摘できるが、右端には3枚の小剥離面が観察される。



第1圖 石器実測圖

石器の計測値は、長さ12mm、幅(23mm)、厚さ3.5mm、重さ1.05gである。

6は、黒耀石製の使用痕ある剥片である。不定形な横長剥片を素材とし、素材剥片の打点部側に使用痕が観察される。剥片の左右両端を欠失している。

石器の計測値は、長さ11.5mm、幅(18mm)、厚さ4mm、重さ6.8gである。

7は、珪岩製の楔形石器である。表面左側に礫面を残し、上下両端と左右両側縁の一部に対向する小剥離面が観察される。

石器の計測値は、長さ31mm、幅14.5mm、厚さ8mm、重さ3.27gである。

8は、珪岩製の楔形石器である。石器の左側を欠失している。上下両端に対向する小剥離面が観察される。また、右側縁には、細長い小剥離面が2枚みられ、うち1枚の剥離面については、上下両方向へのリングが観察される。

石器の計測値は、長さ27mm、幅(10.5mm)、厚さ7.5mm、重さ2.95gである。

これら1～8の石器について、所属時期を明確に知り得る資料は、1のナイフ形石器のみである。その他の資料については、不明である。

報 告 書 抄 録

書 名	白鳥平B遺跡
副 書 名	九州縦貫自動車道（人吉～えびの）建設に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第142集
編 著 者 名	宮坂孝宏
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所 在 地	〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	西暦1994（平成6）年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
白鳥平B	人吉市赤池水無町字立山	:	19910803-19920331	10,000m ²	道路建設

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
先土器時代		ナイフ形石器（切出形ナイフ形石器、剥片尖頭器、台形石器）、三稜尖頭器、撻器、削器、楔形石器、磨石、礫石、石皿・台石、不定形石器（二次加工ある石器、使用痕ある剥片）、石刻、剥片・砕片	南北2ヶ所の遺物集中区のうち、北側で1～10ブロックを検出。
縄文時代草創期	集石1基	爪形文土器（70点）、石鏃、細刃器、尖頭器、削器、抉入石器、楔形石器、石鏃、磨石、礫石、石皿・台石、不定形石器（二次加工ある石器、使用痕ある剥片）、石刻、剥片・砕片	南九州隆帯文土器（堂地西武）とともに、単純爪形施文の土器が出土。
縄文時代早期	集石6基 配石土坑2基 土坑7基	押型文土器、条痕土器、円筒形条痕文土器、壺ノ神式土器、平袴式土器、縄文土器 石鏃、尖頭状石器、石匙、削器、楔形石器、石鏃、磨石・礫石、石皿・台石、不定形石器（二次加工ある石器、使用痕ある剥片）、石刻、剥片・砕片 異形石器、耳栓（4）	耳栓4個が出土。共伴する土器との関係が類推できる良好な出土状態。
縄文時代前期～ 古墳時代		轟式（系）土器、春日式（系）土器、阿高式系南福寺式土器、山ノ寺式土器、弥生時代中期の甕形土器、成川式土器、石鏃、削器、打製石斧、局部磨製石斧、楔形石器、磨石・礫石、石皿・台石、不定形石器（二次加工ある石器、使用痕ある剥片）、剥片・砕片	
近世	溝遺構4条 道路条遺構 土坑2基	陶磁器類（染付、すり鉢等）	

圖

版

図版1 全景



1. 南西上空から



2. 上空から

図版2 縄文時代草創期の調査



1. 調査風景



2. 出土状態

図版3 縄文時代早期の調査



1. II, III-B区 (北から)



2. VII-C, D区 (北東から)

図版4 縄文時代早期の遺構

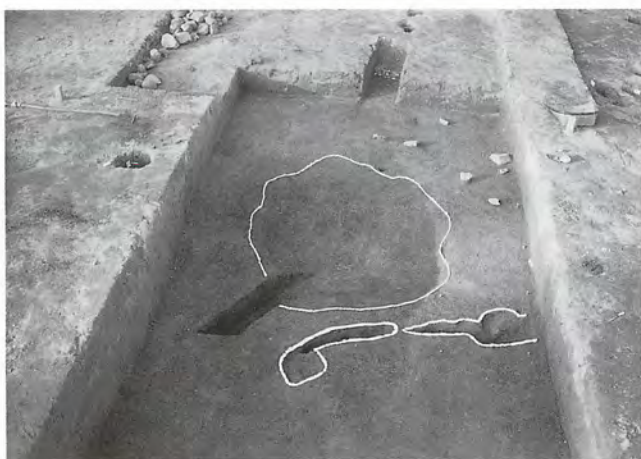
1. 1号集石の検出状況



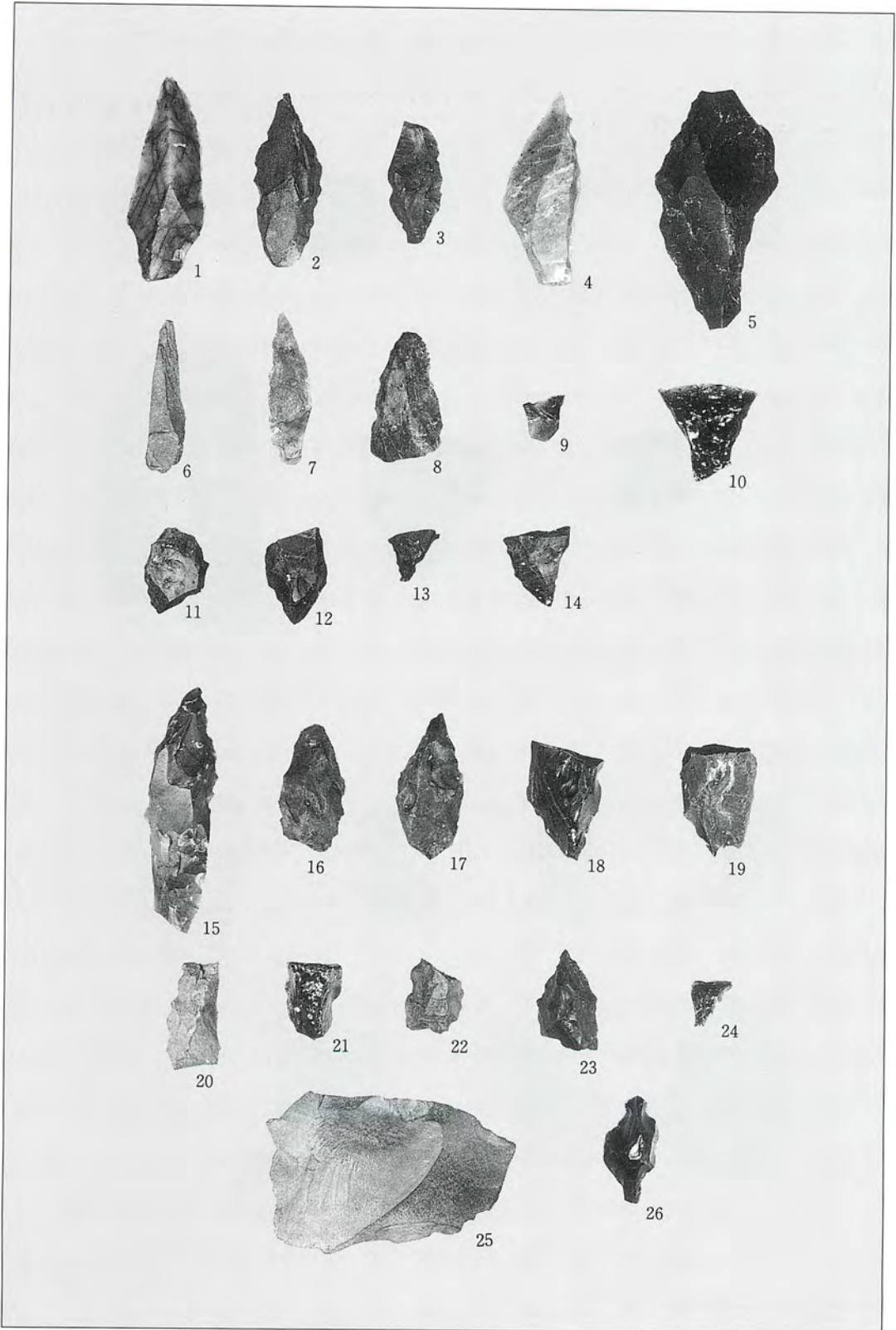
2. 2号集石の検出状況



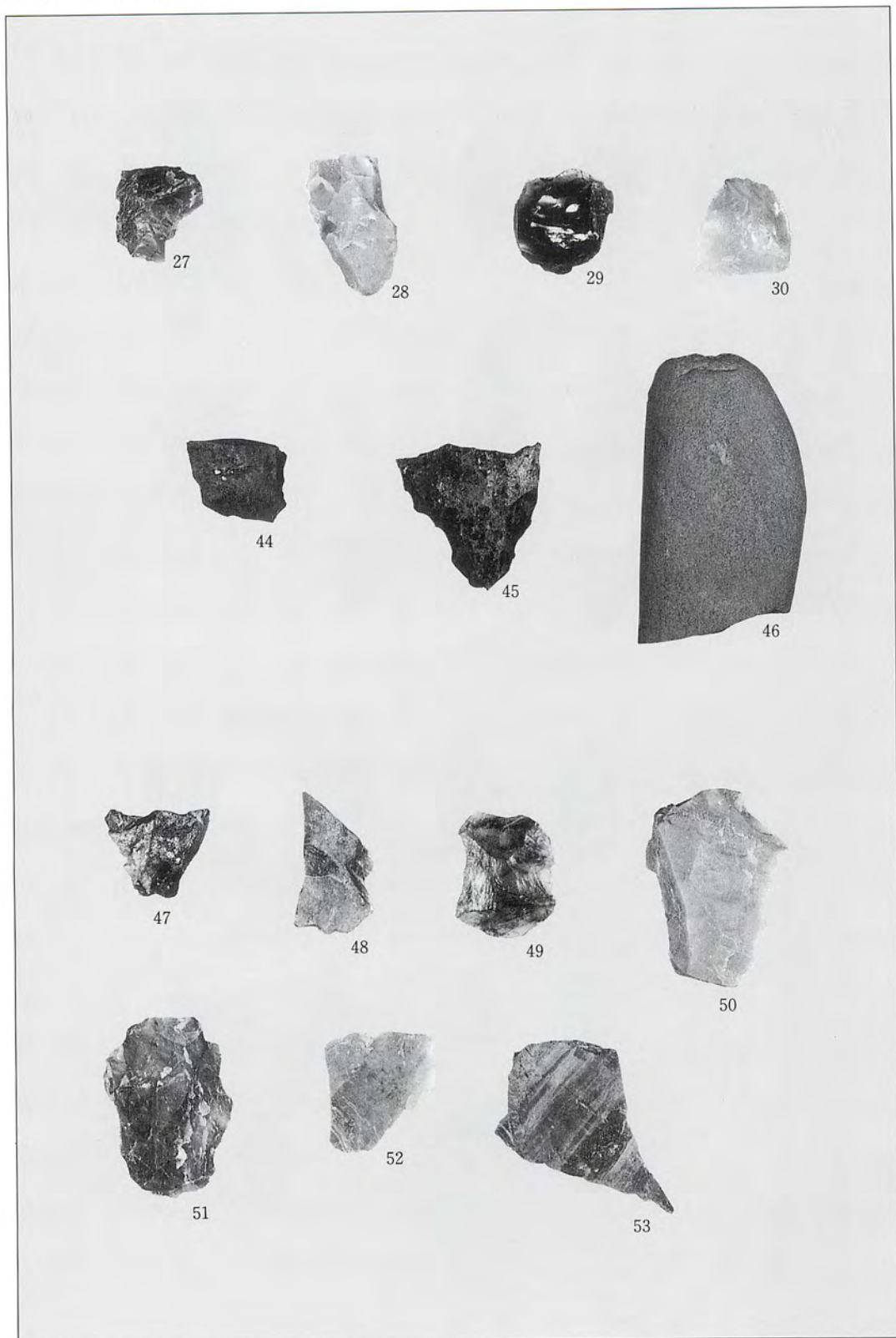
3. 2号集石の完掘状態



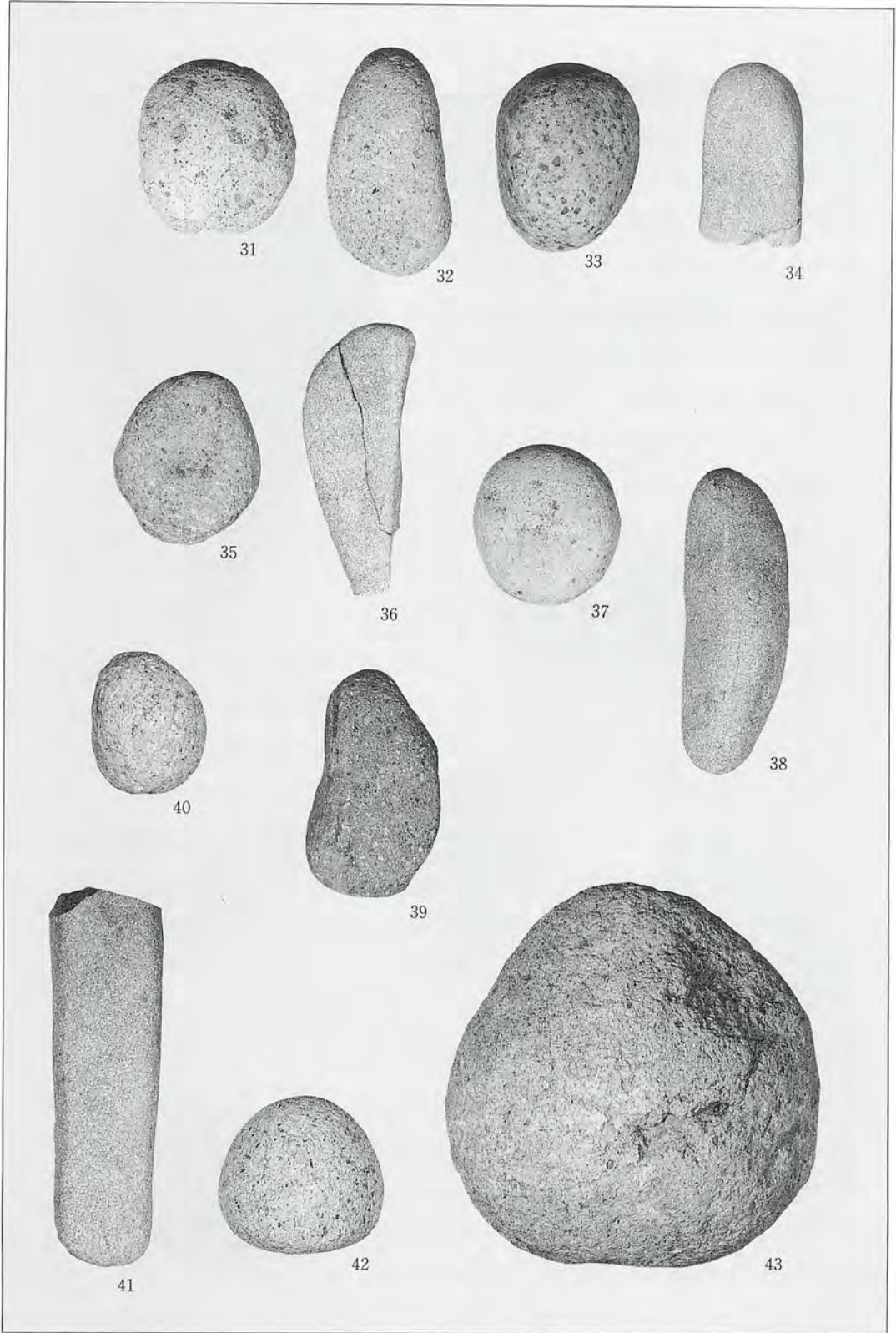
図版5 先土器時代の遺物



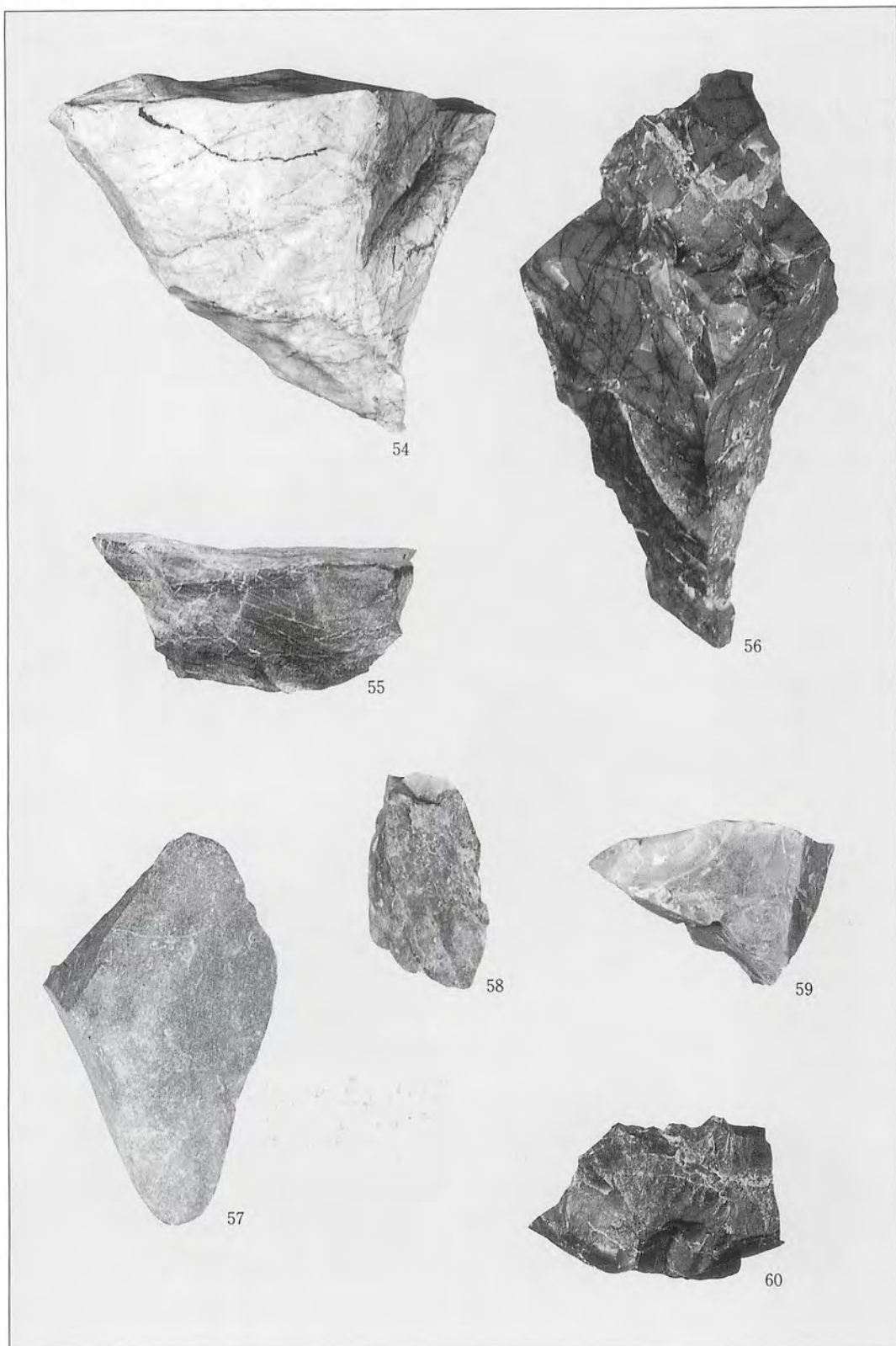
図版6 先土器時代の遺物



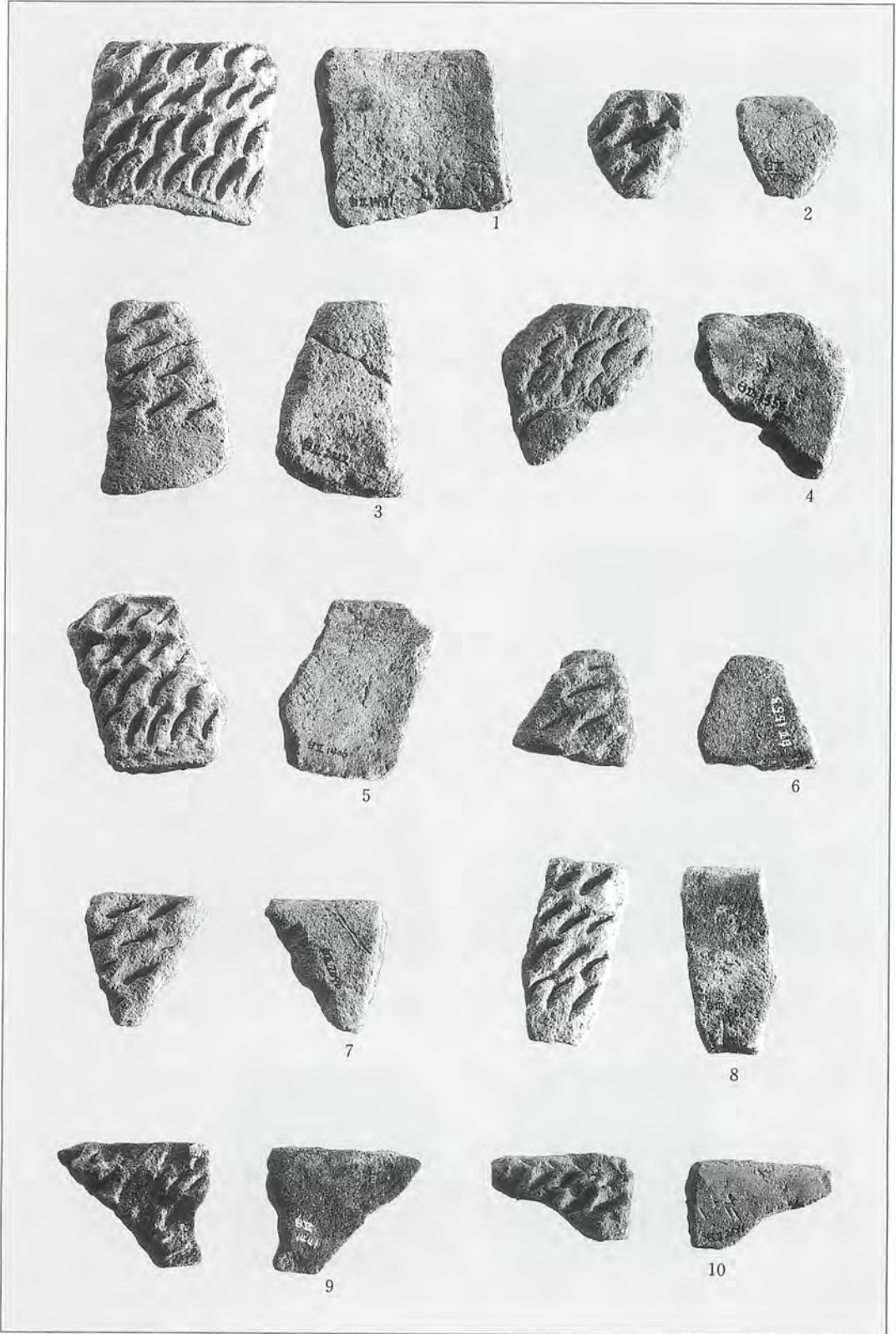
図版7 先土器時代の遺物



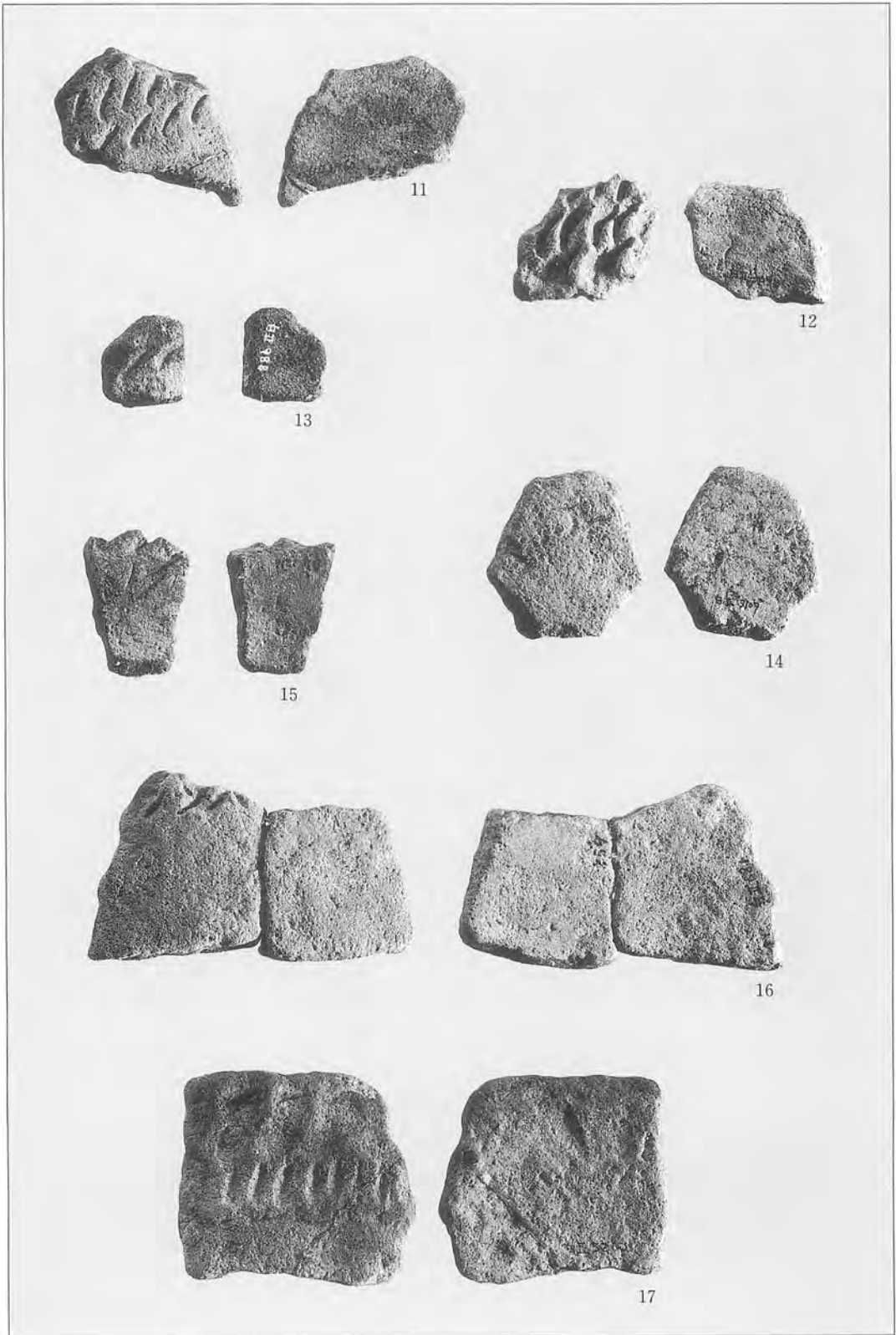
図版8 先土器時代の遺物



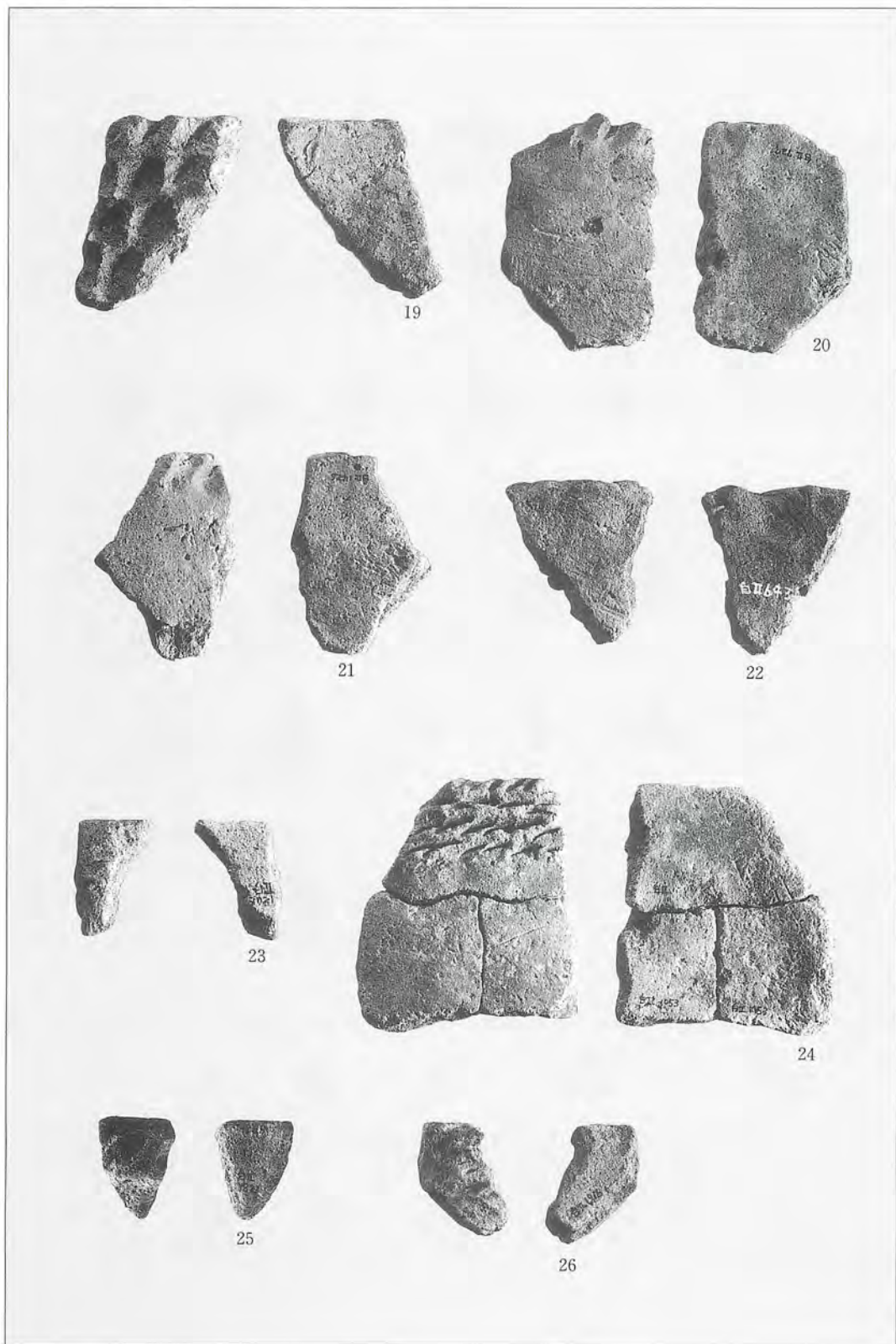
図版9 縄文時代草創期の土器 (S=2/3)



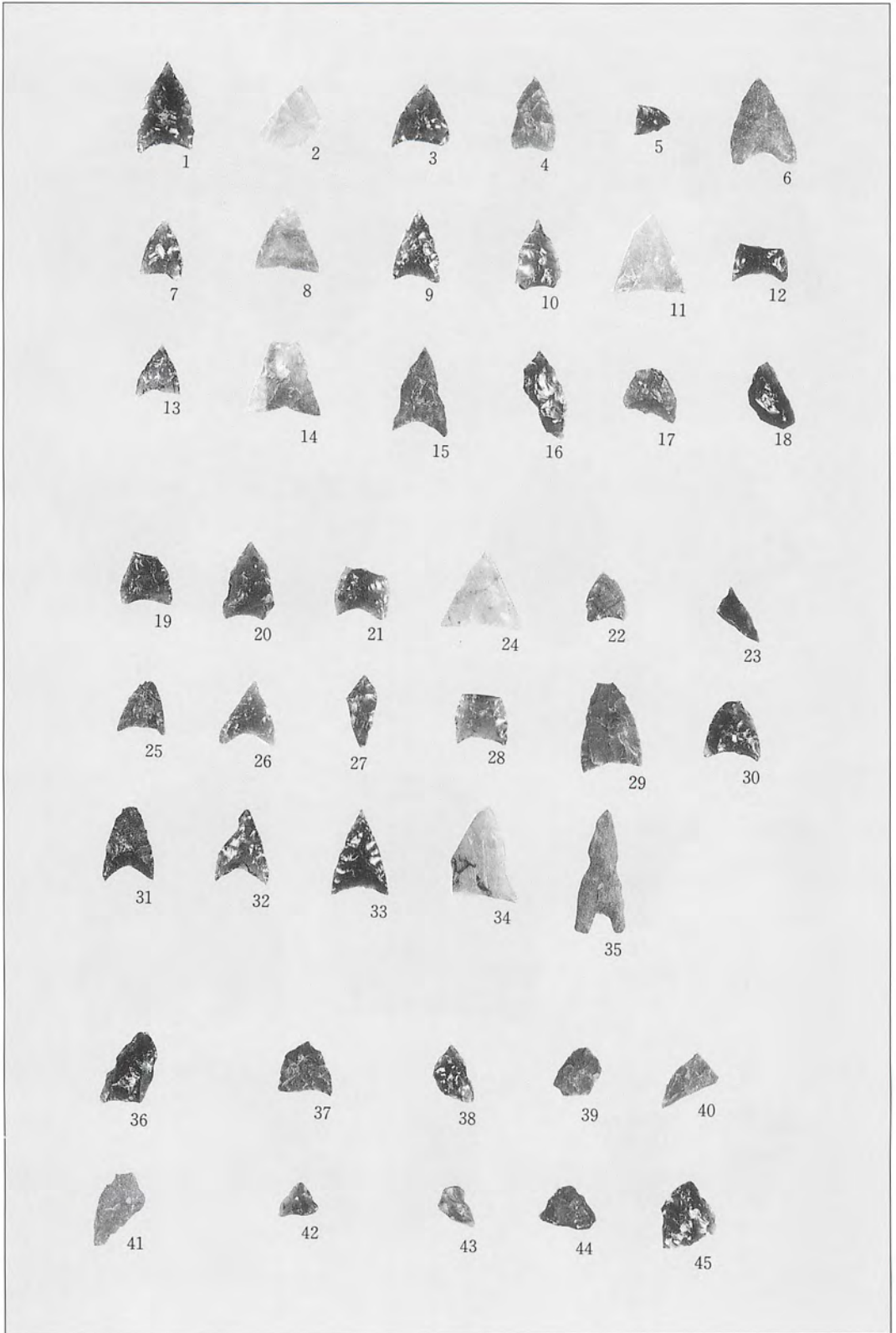
図版10 縄文時代草創期の土器 (S=2/3)



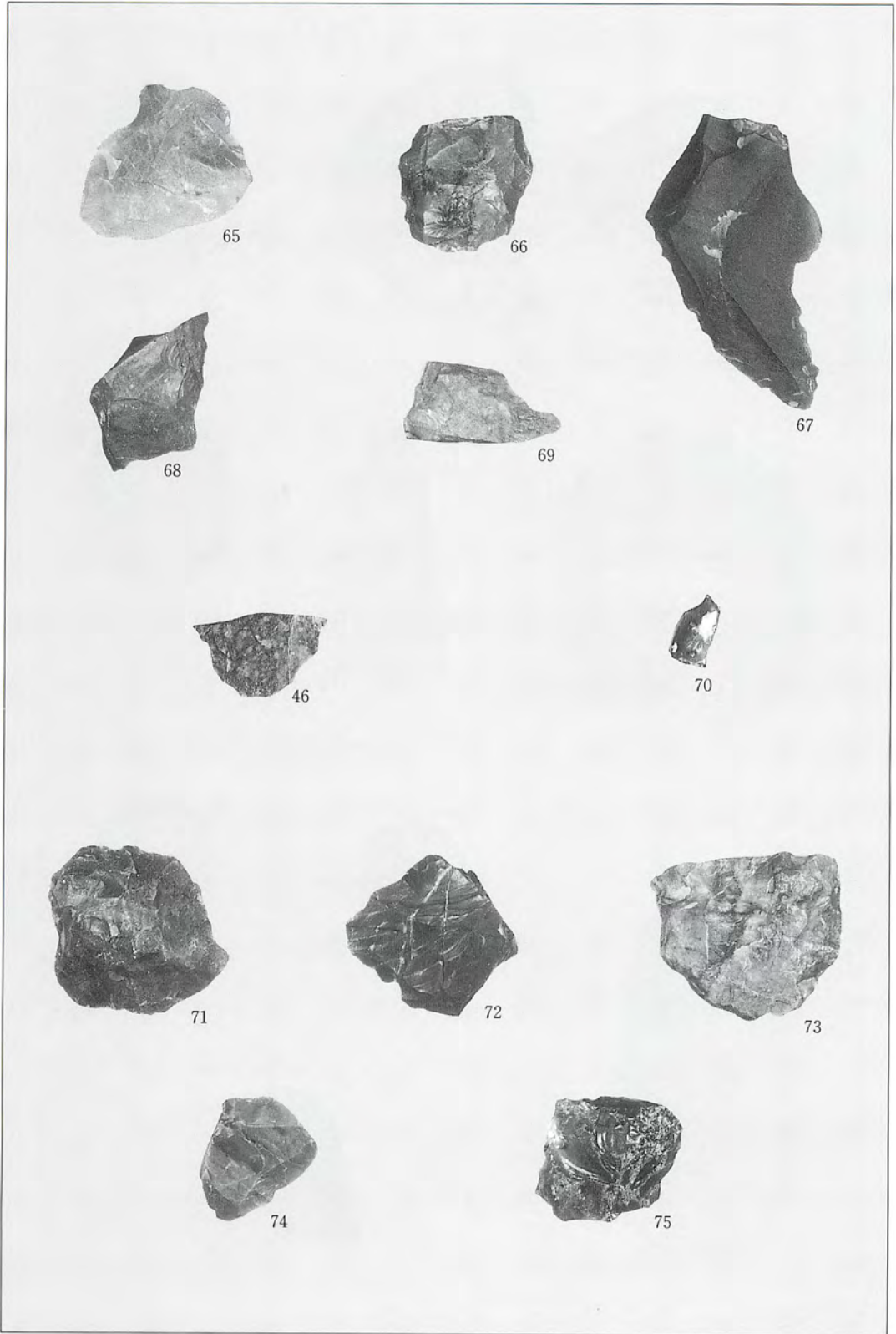
図版11 縄文時代草創期の土器 (S=2/3)



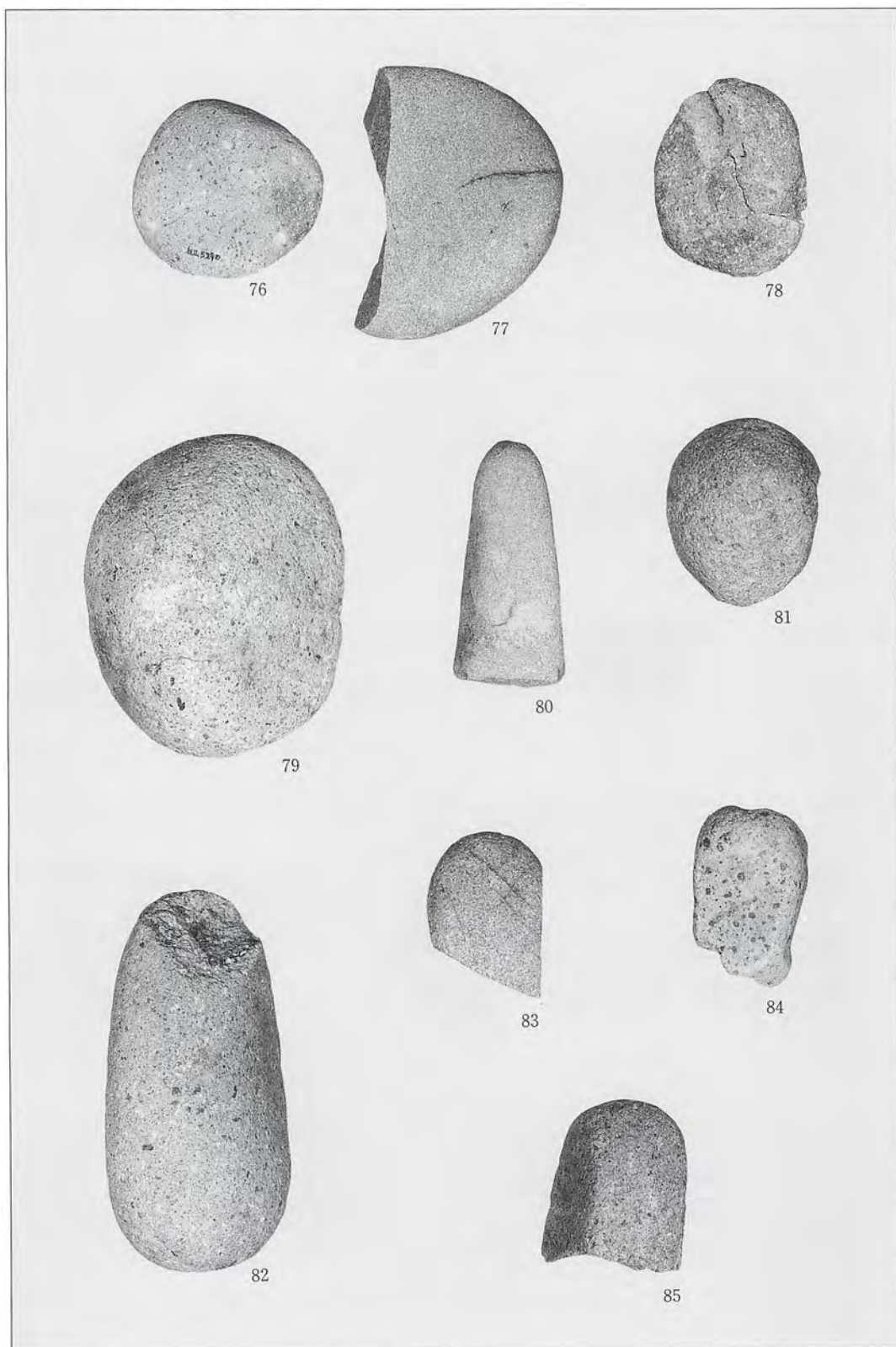
図版12 縄文時代草創期の石器



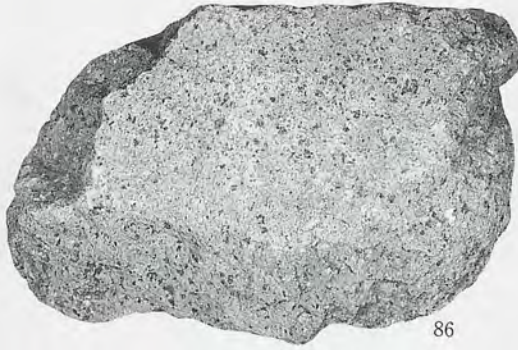
図版13 縄文時代草創期の石器



図版14 縄文時代草創期の石器



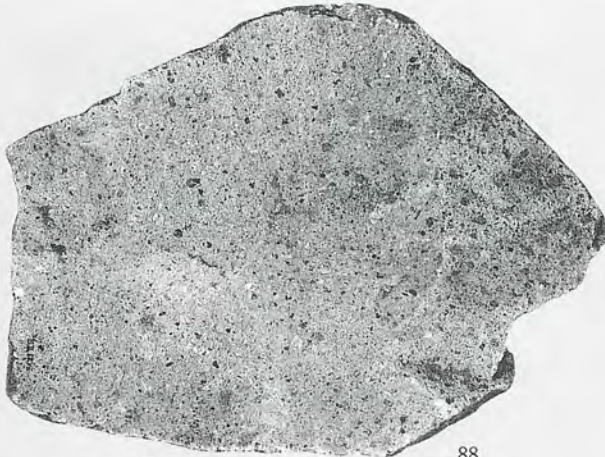
図版15 縄文時代草創期の石器



86

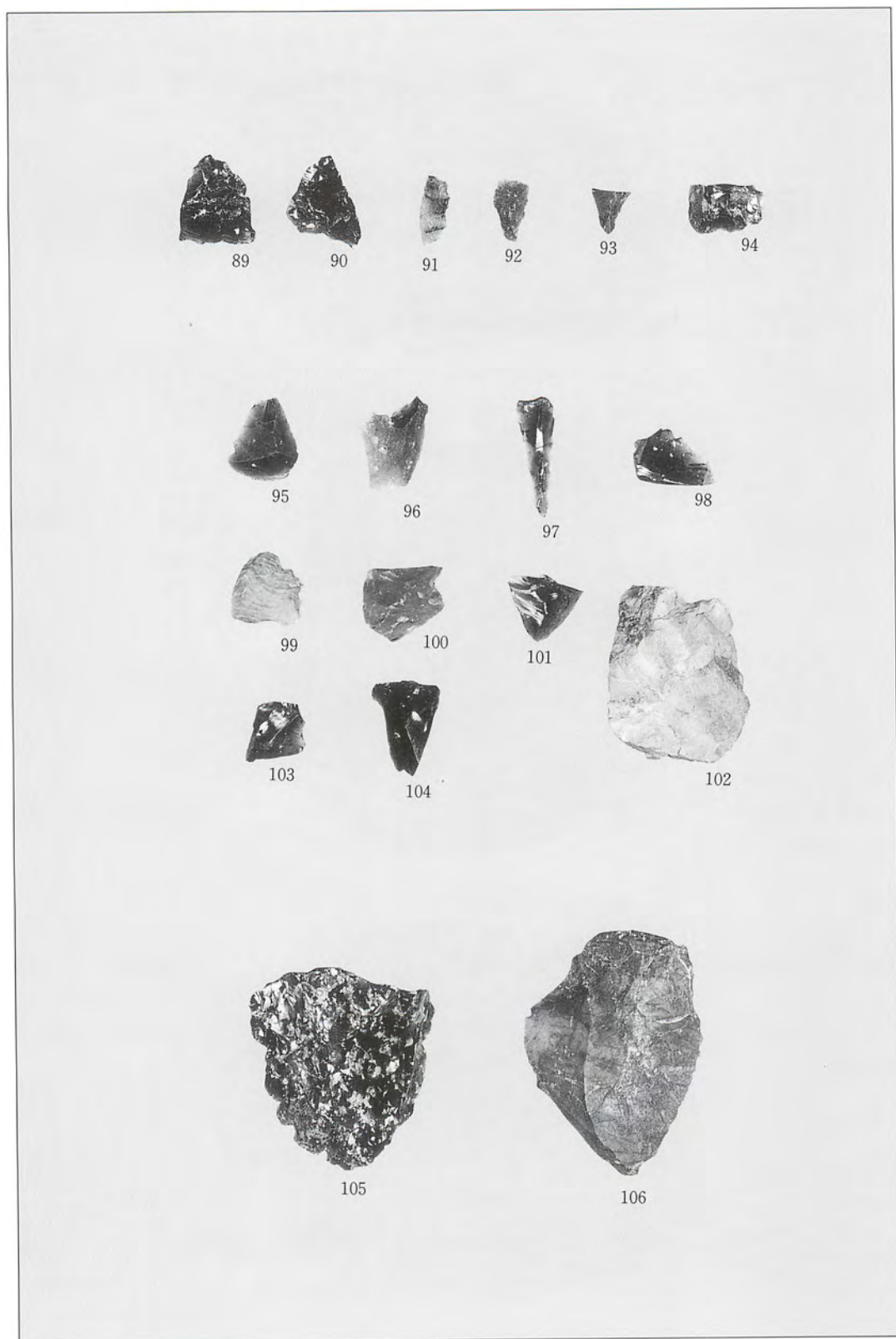


87

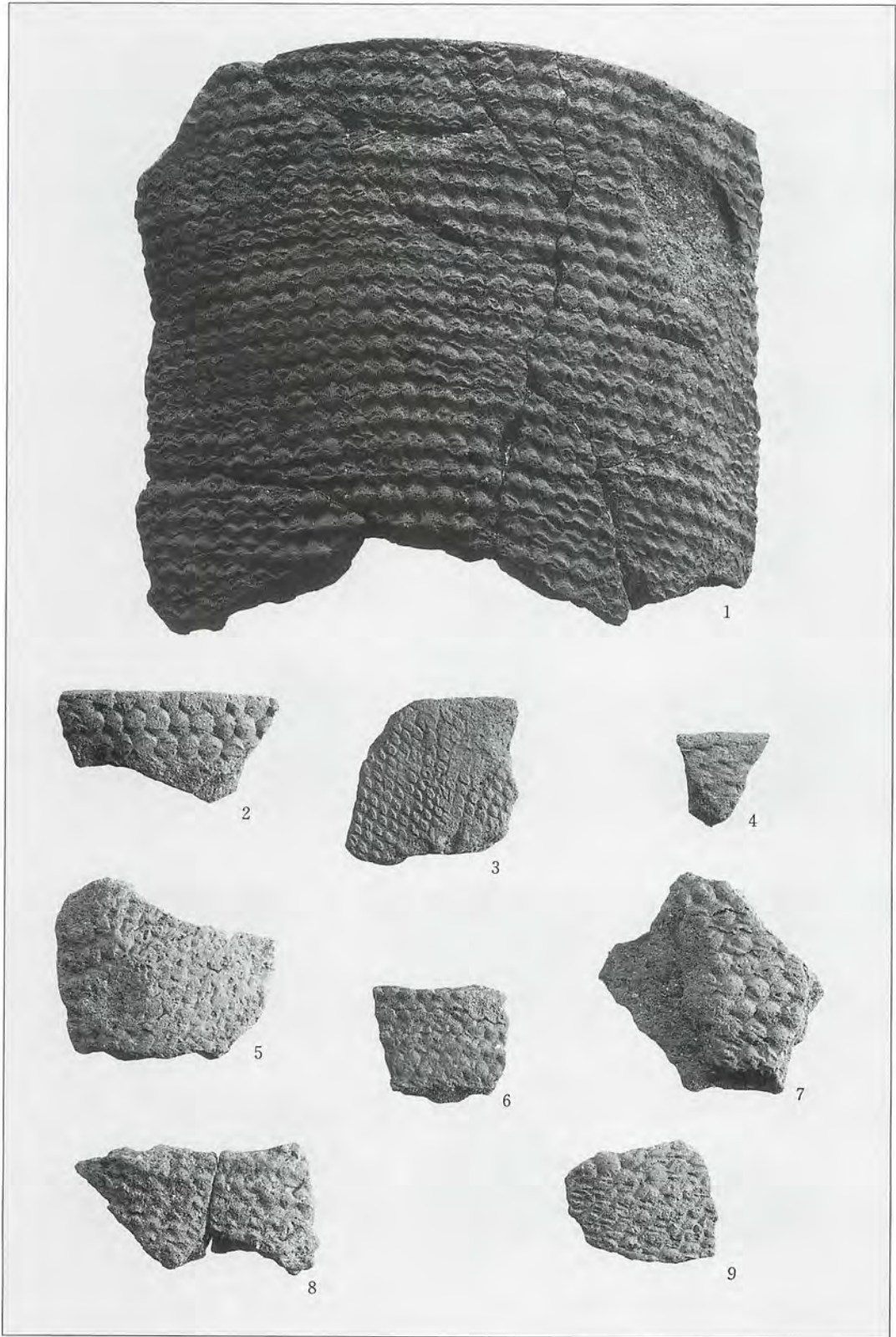


88

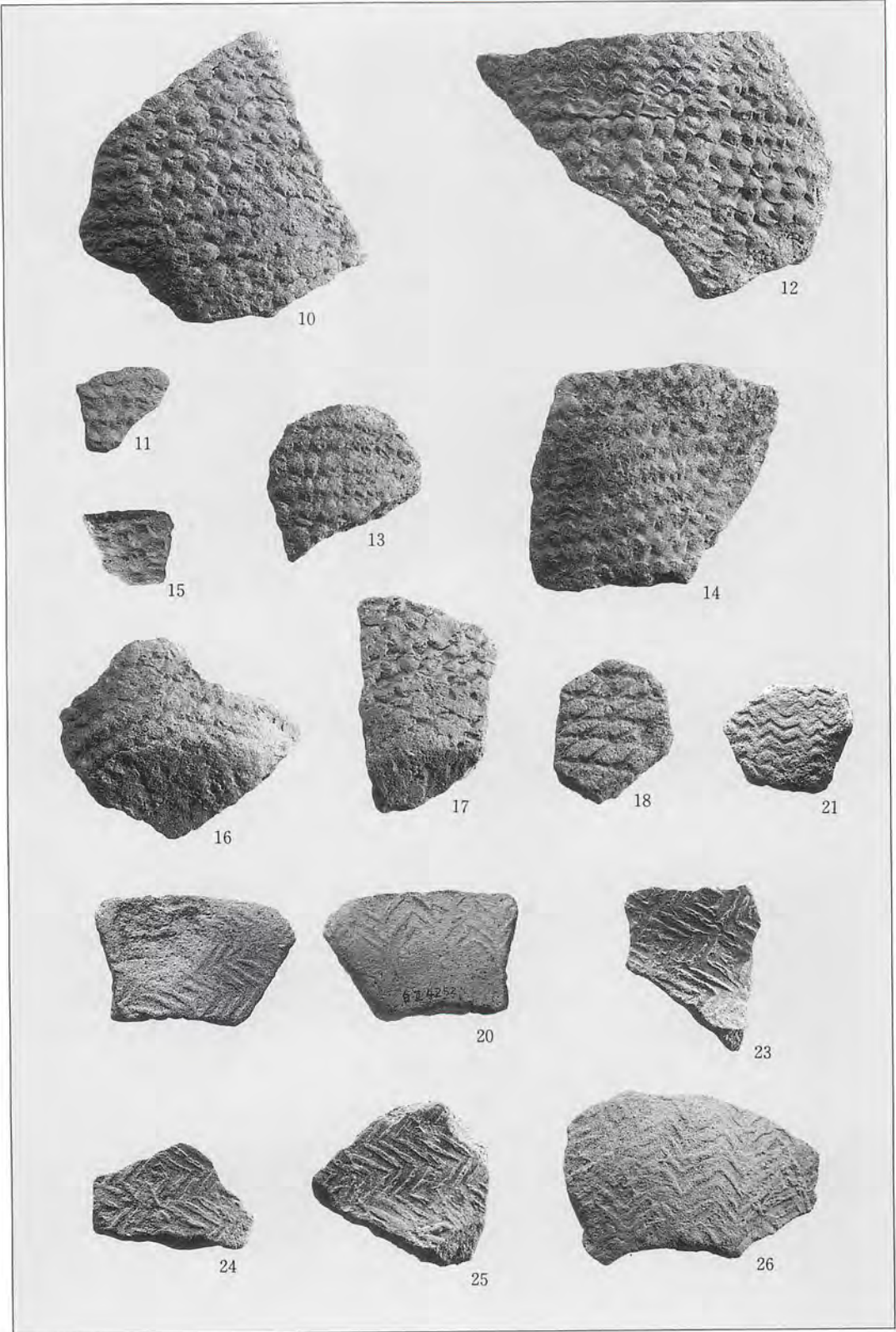
図版16 縄文時代草創期の石器



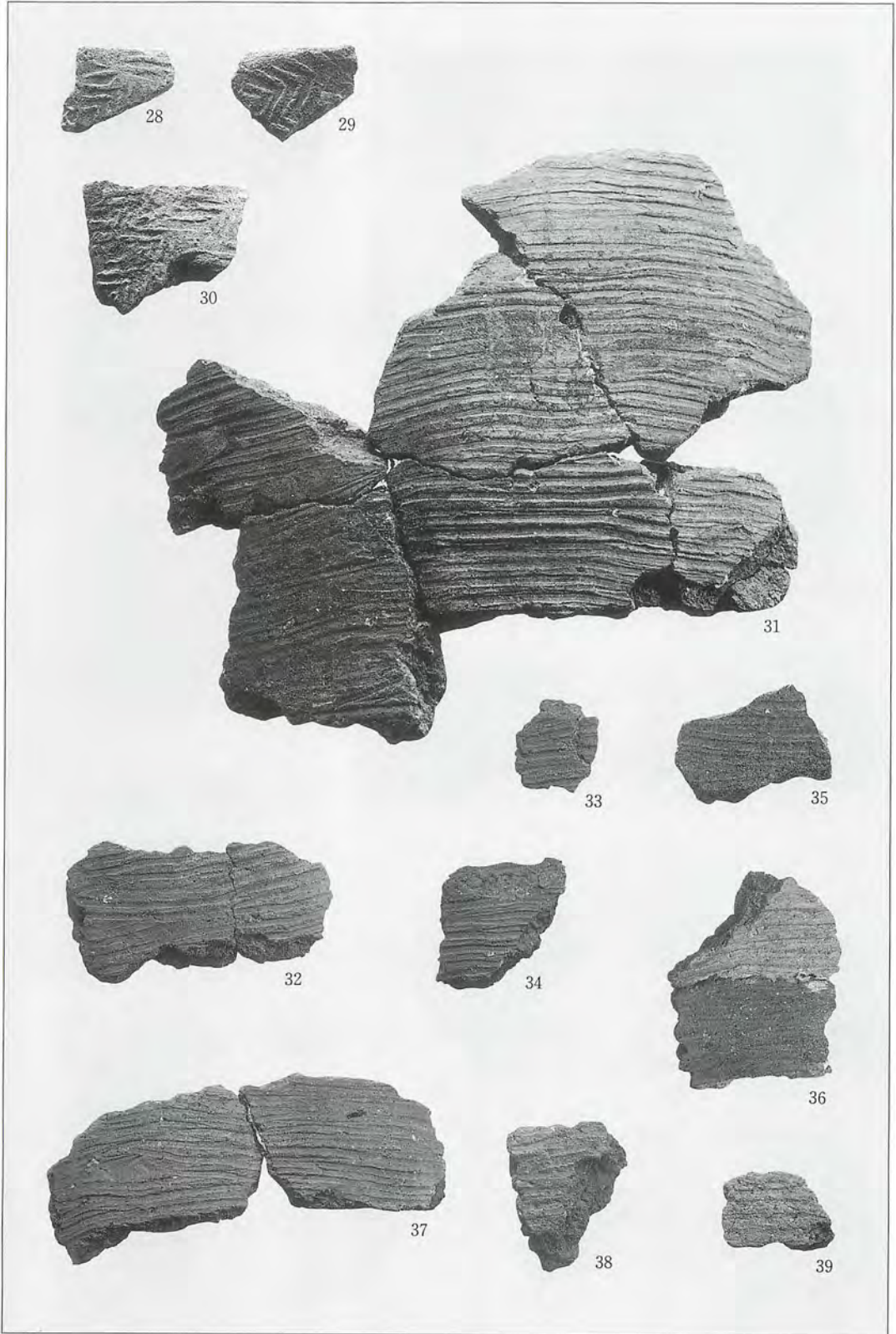
図版17 縄文時代早期の土器 (S=1/2)



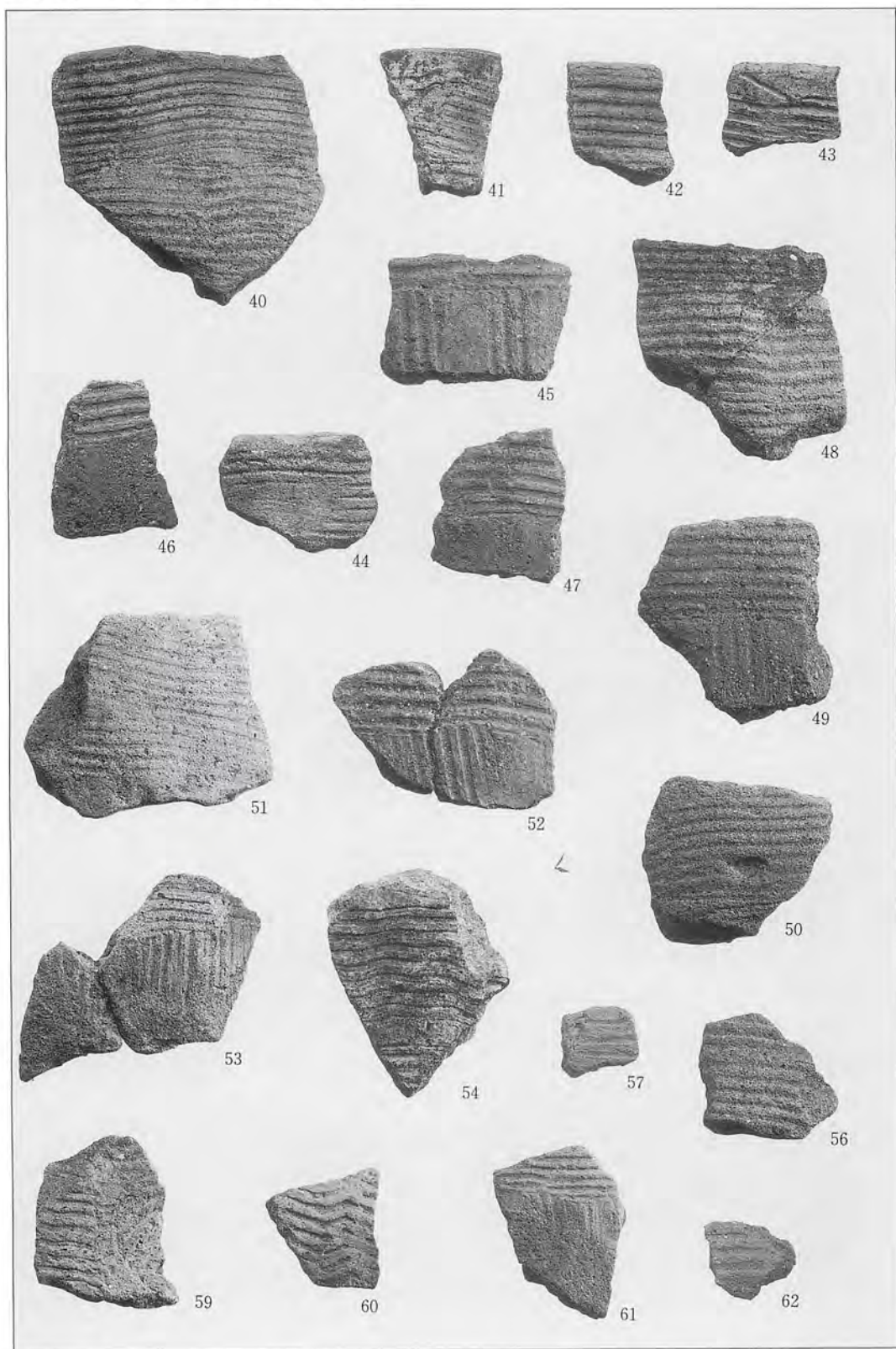
図版18 縄文時代早期の土器 (S=1/2)



図版19 縄文時代早期の土器 (S=1/2)



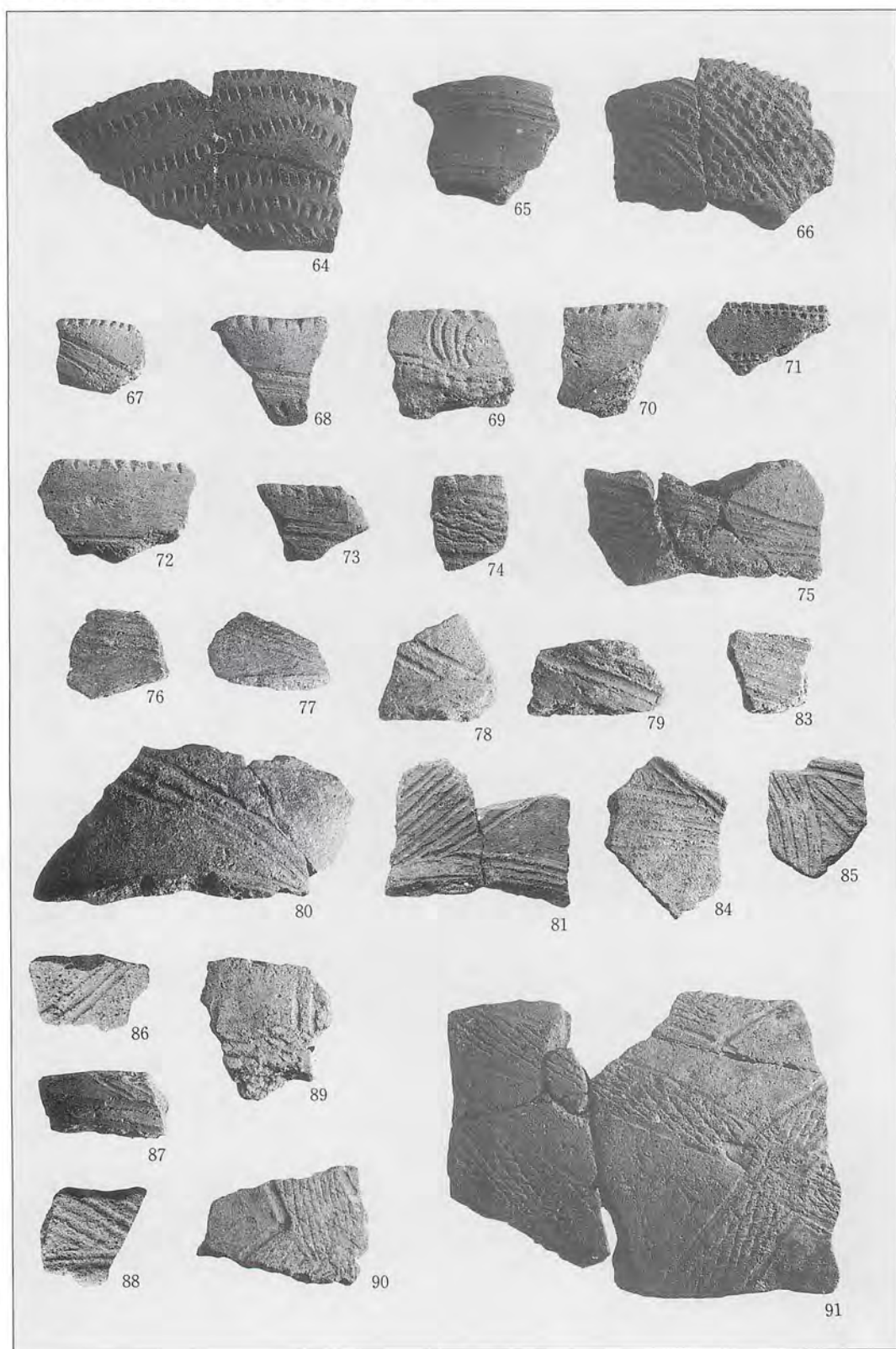
図版20 縄文時代早期の土器 (S=1/2)



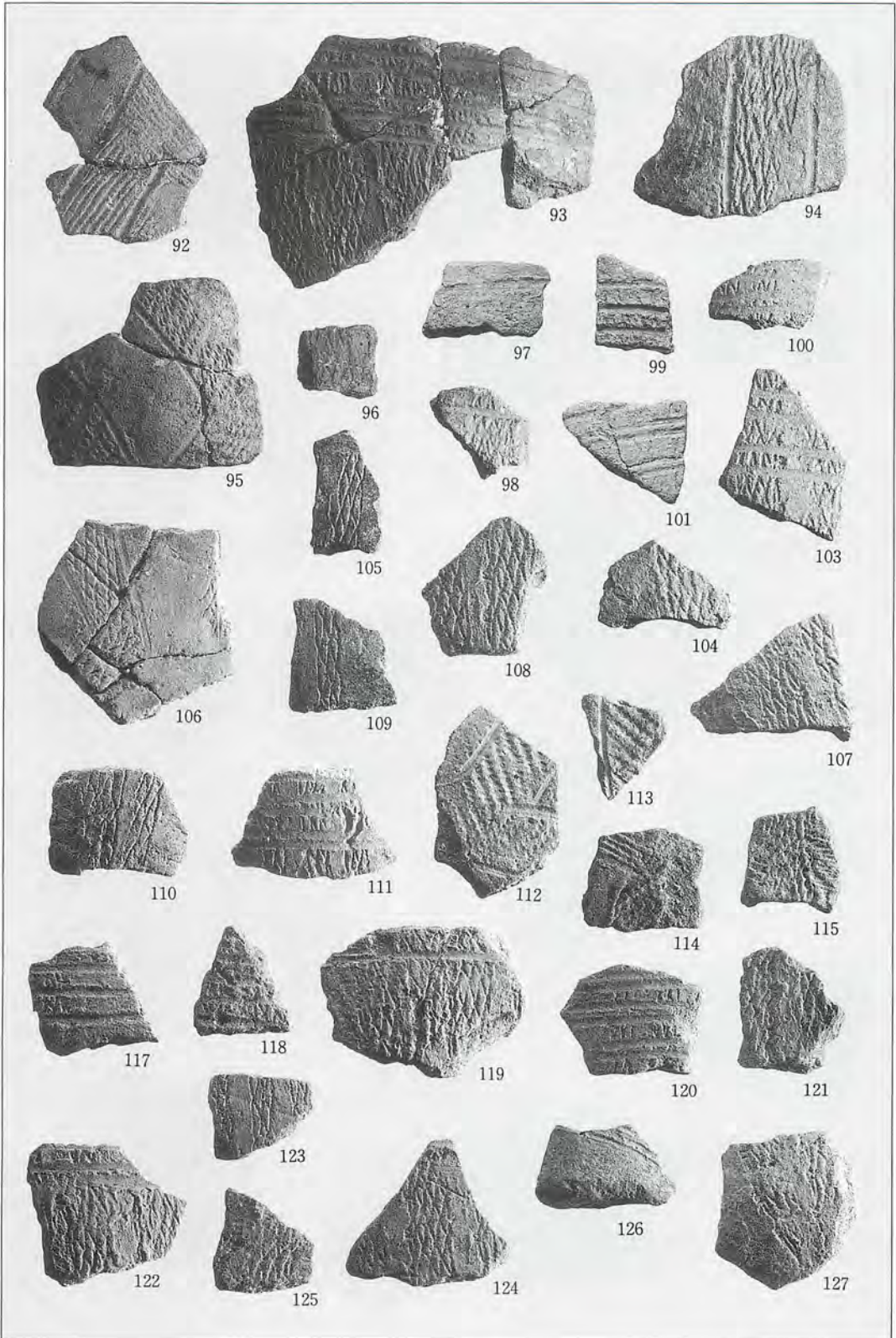
図版21 縄文時代早期の土器



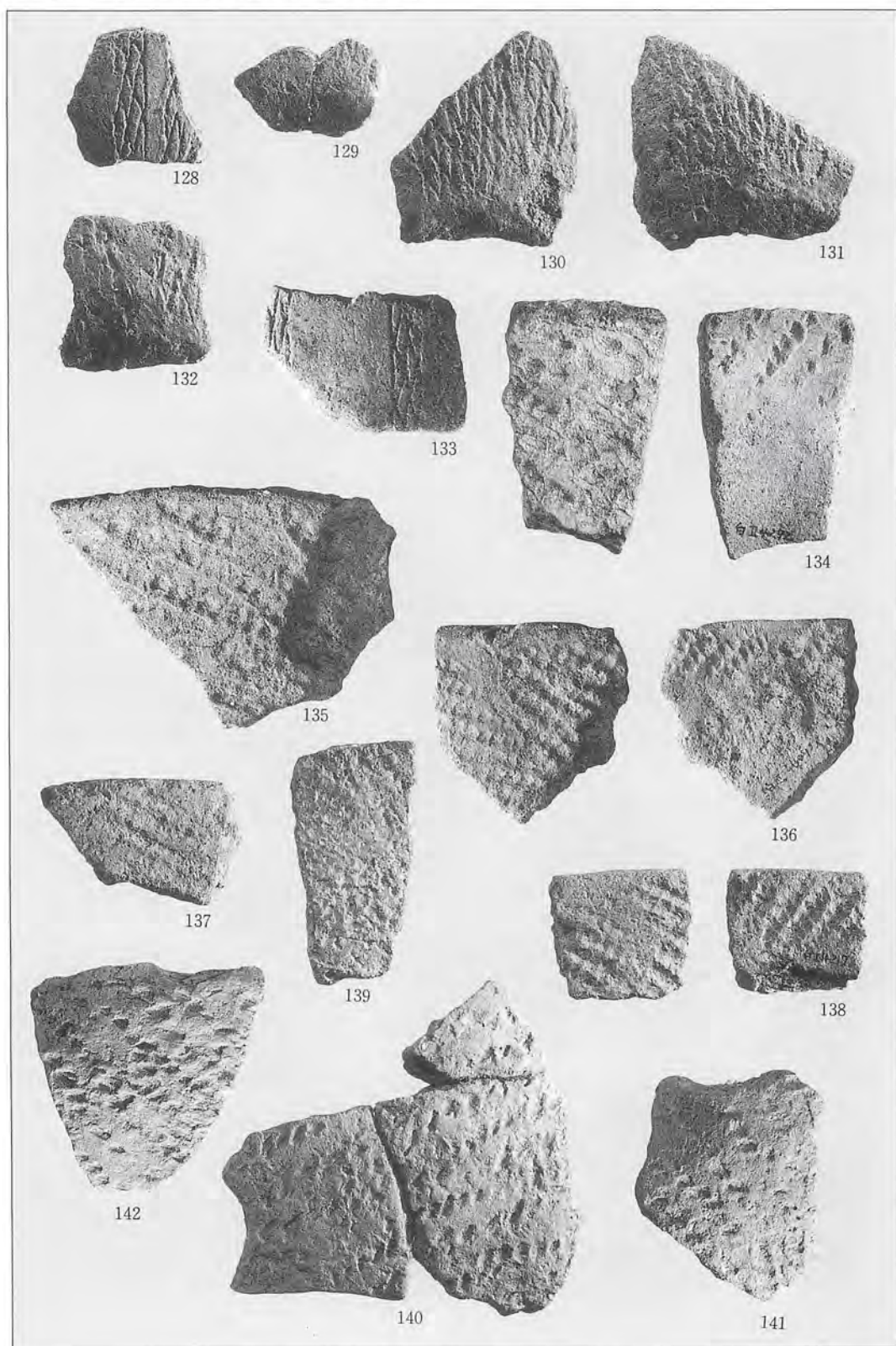
図版22 縄文時代早期の土器 (S=1/2)



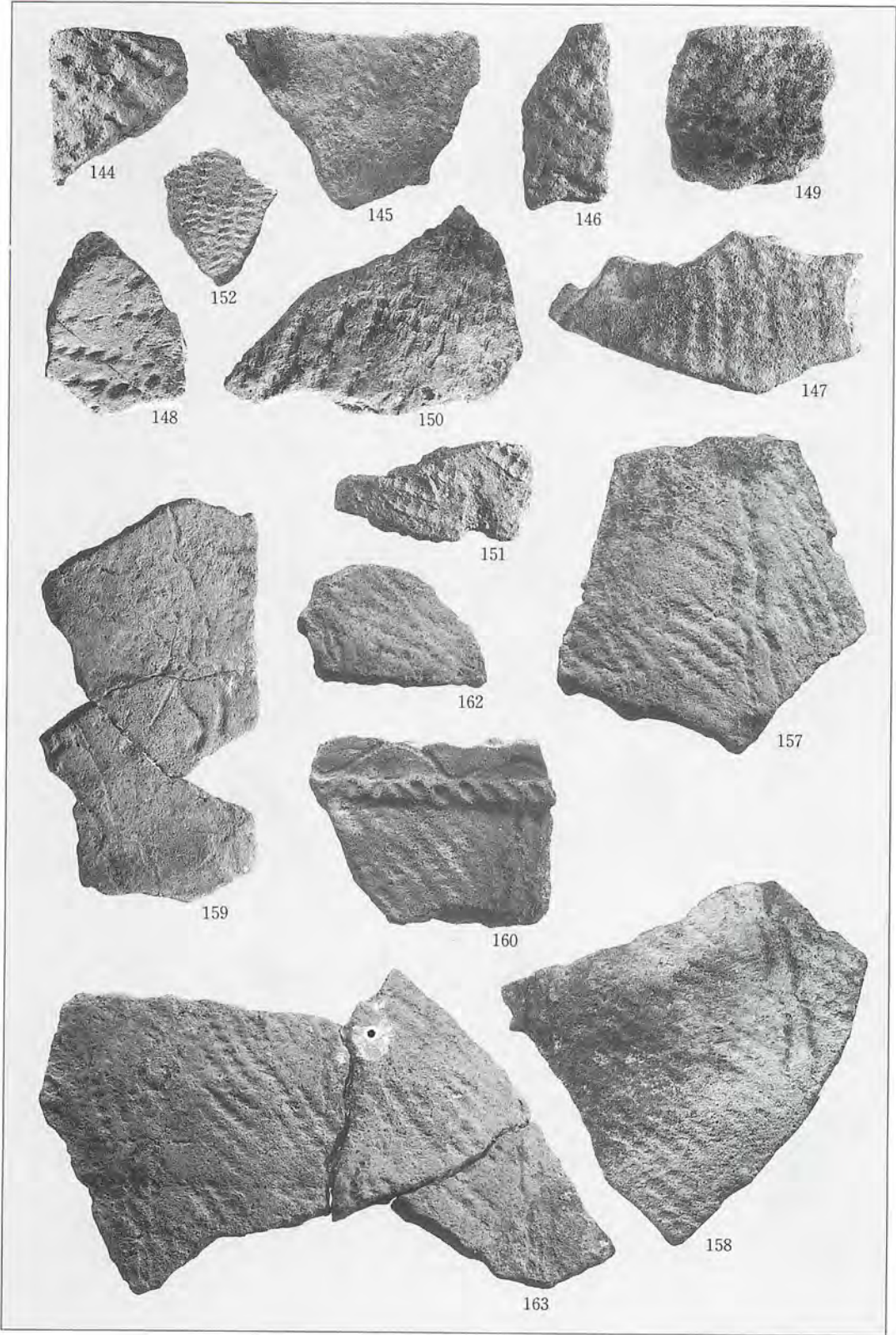
図版23 縄文時代早期の土器 (S=1/2)



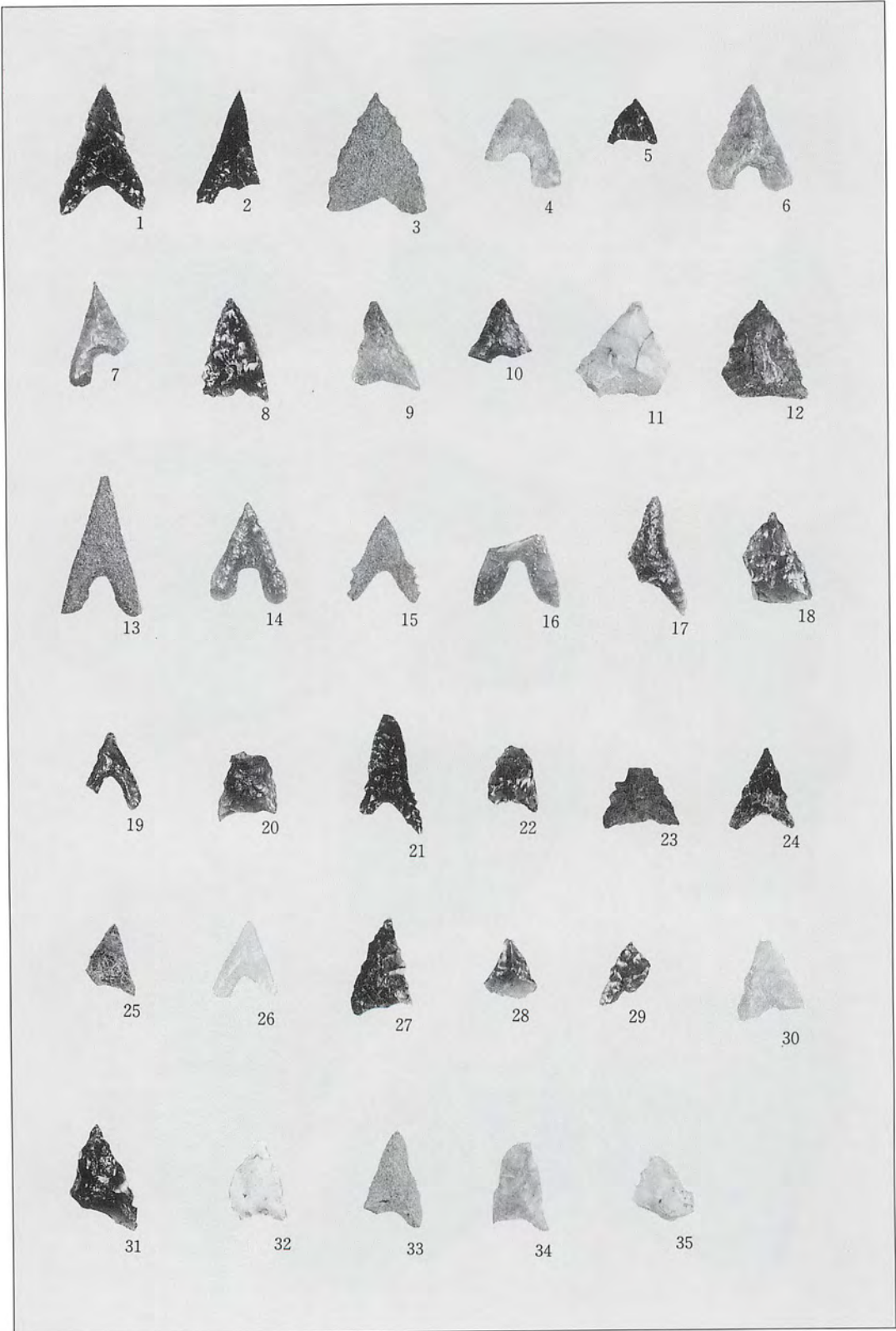
図版24 縄文時代早期の土器 (S=2/3)



図版25 縄文時代早期の土器 (S = 2/3)



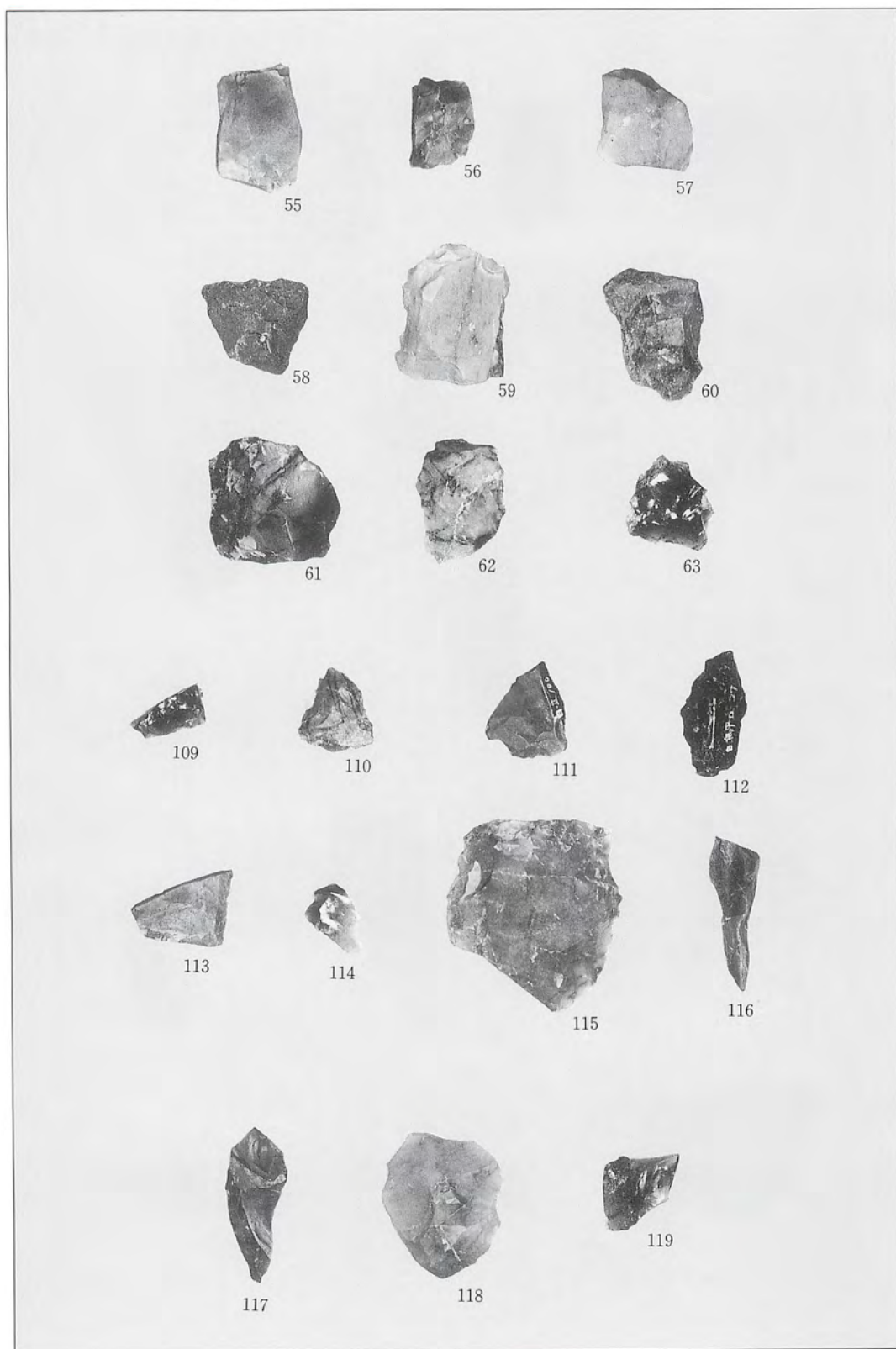
図版26 縄文時代早期の石器



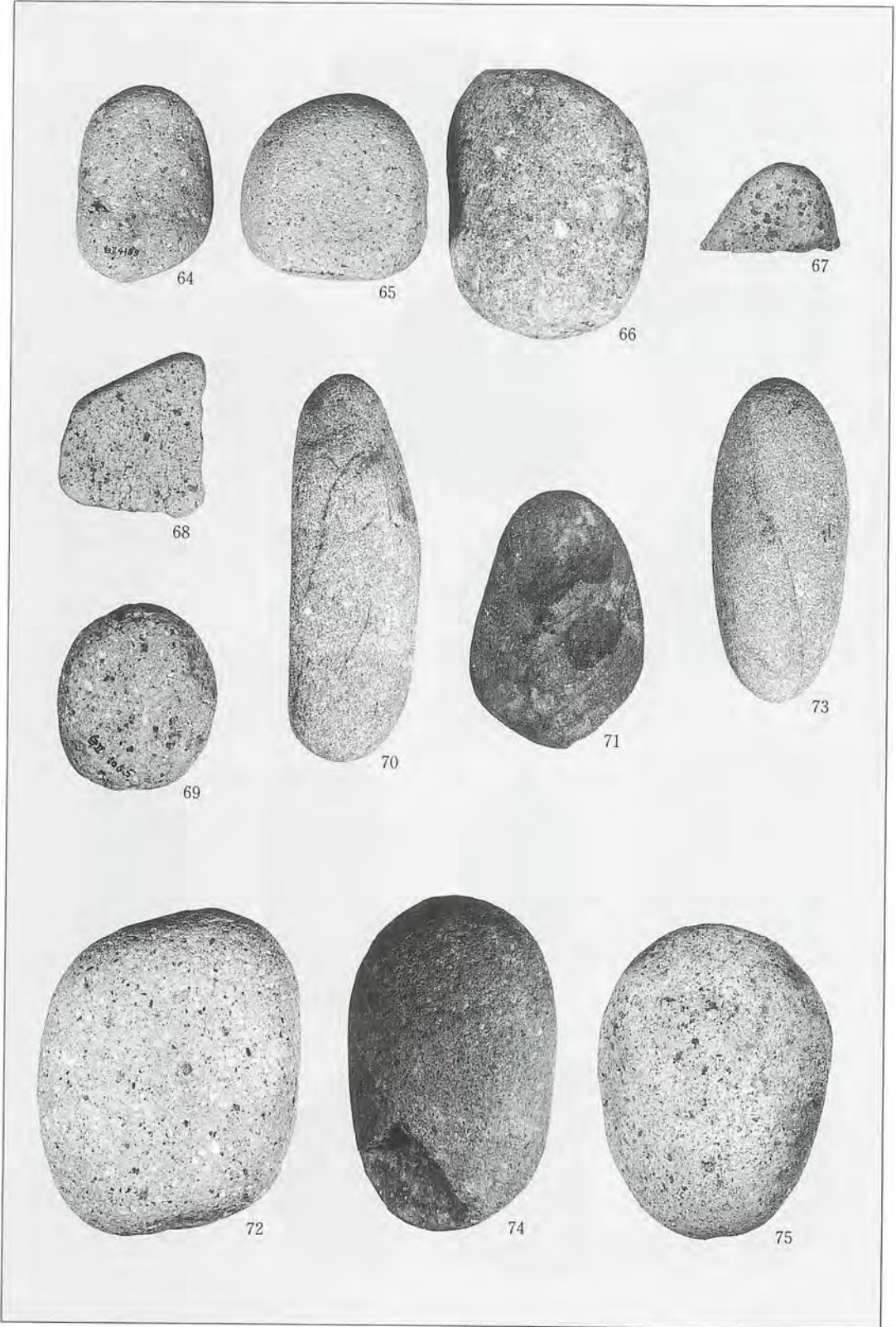
図版27 縄文時代早期の石器



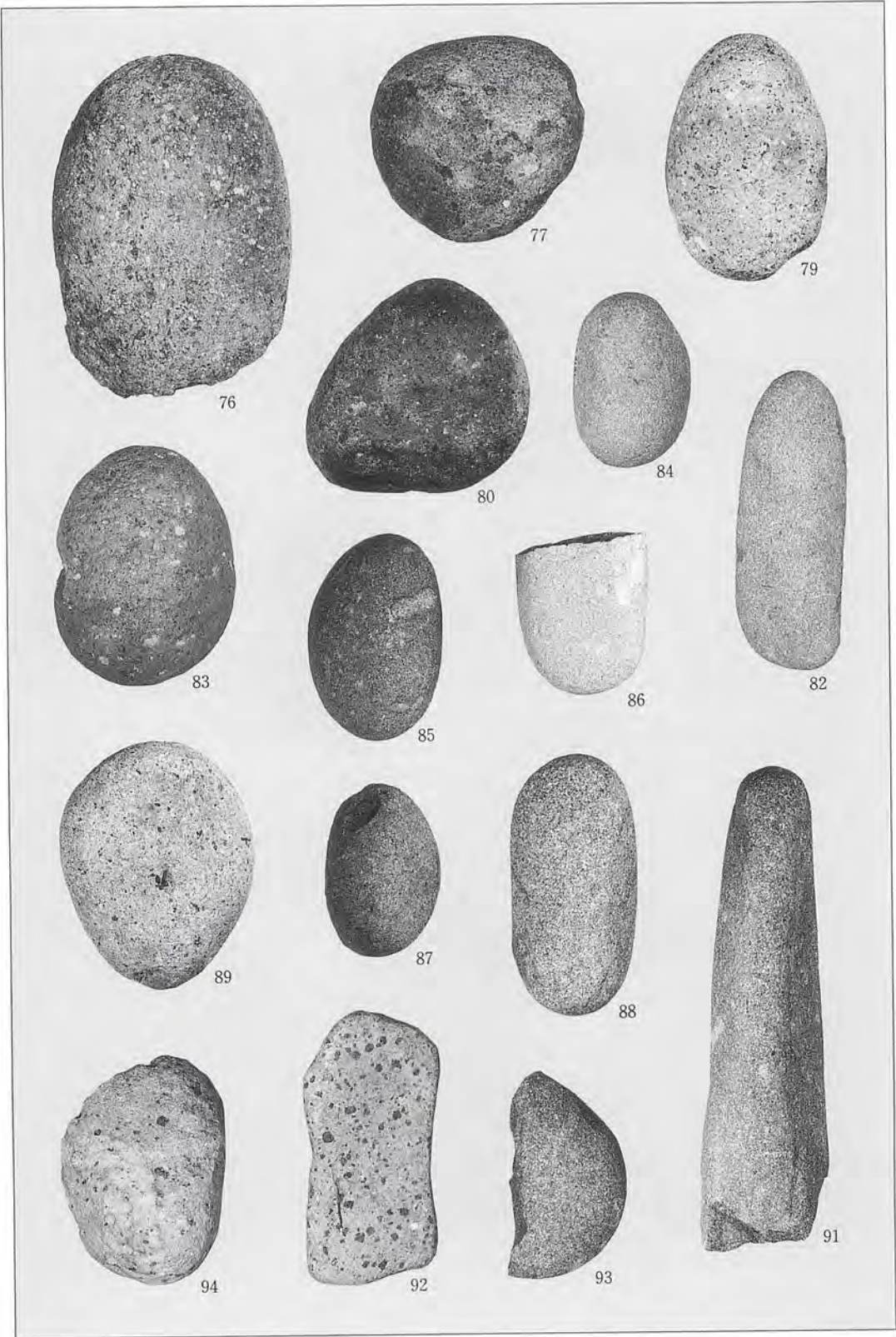
図版28 縄文時代早期の石器



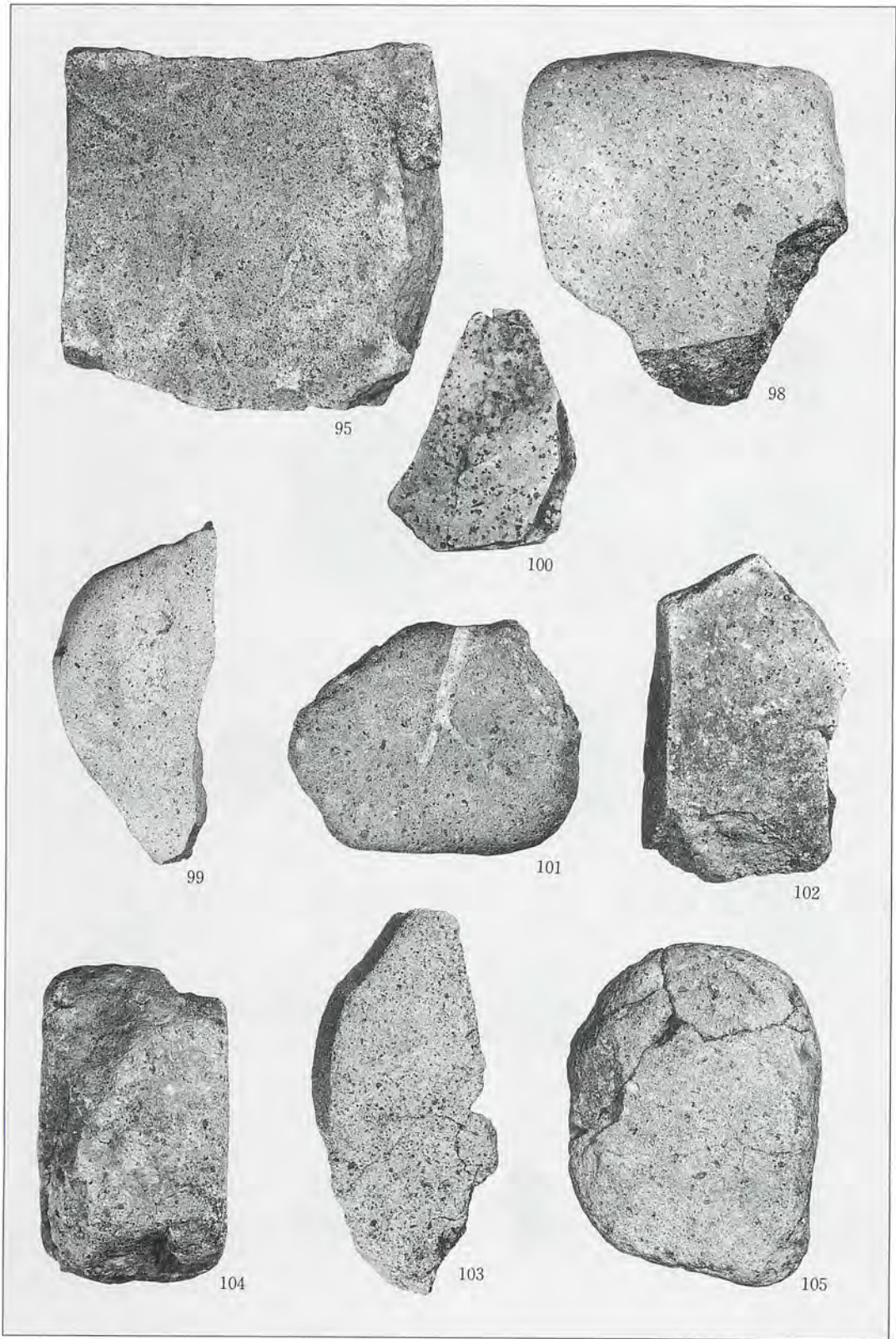
図版29 縄文時代早期の石器



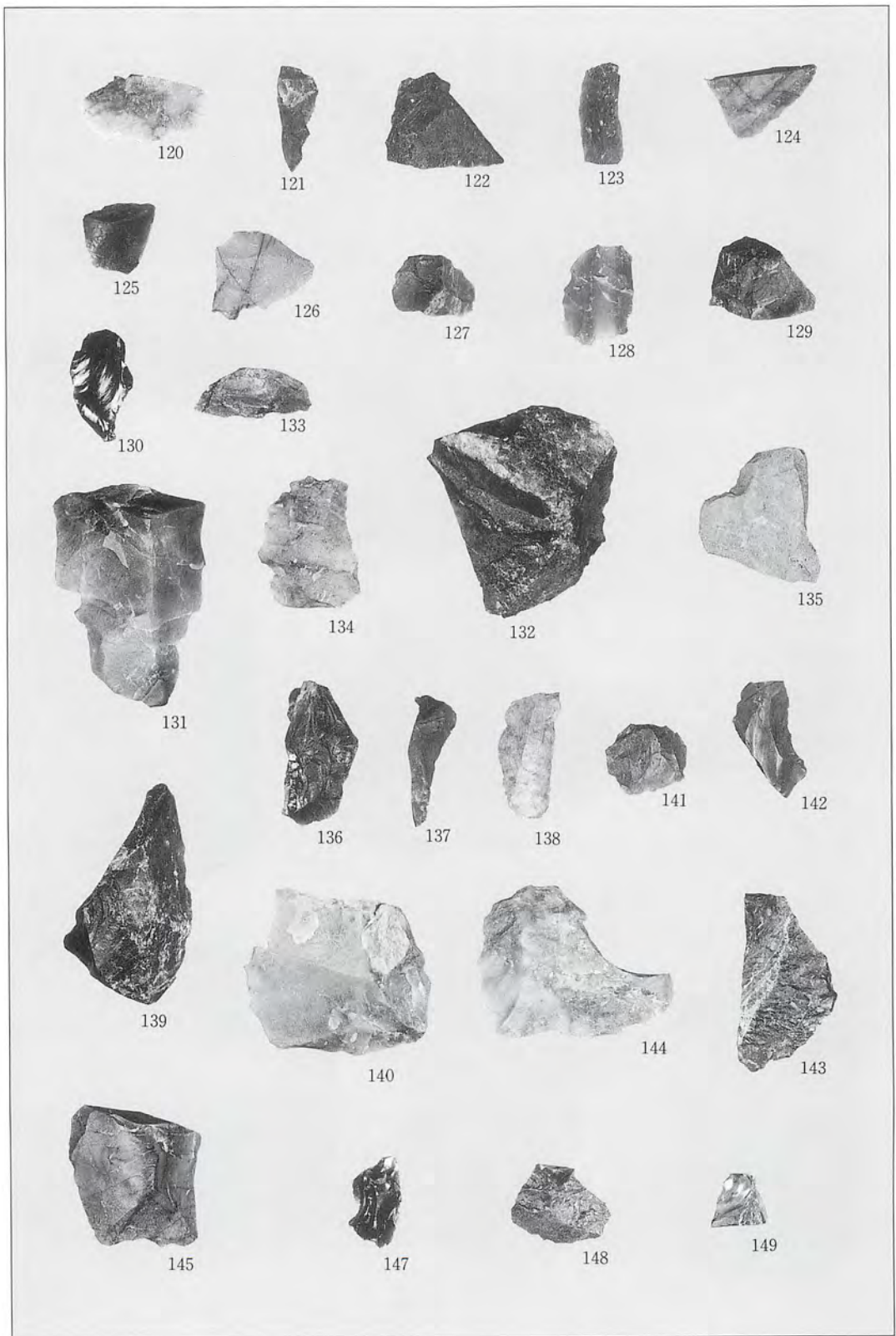
図版30 縄文時代早期の石器



図版31 縄文時代早期の石器



図版32 縄文時代早期の石器



図版33 縄文時代早期の石器



150



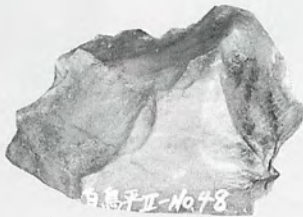
151



152



153



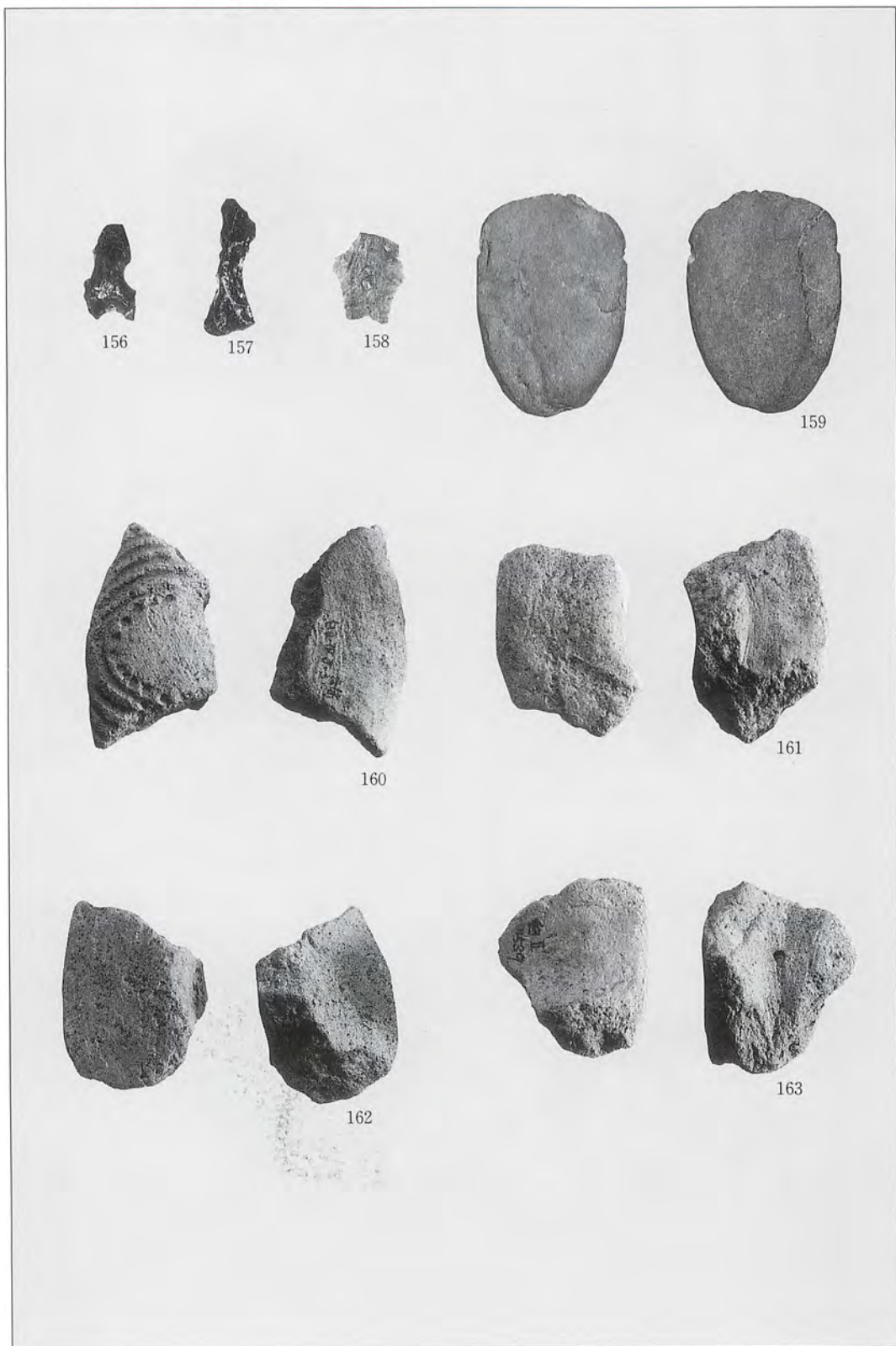
154

白鳥平Ⅱ-No.78

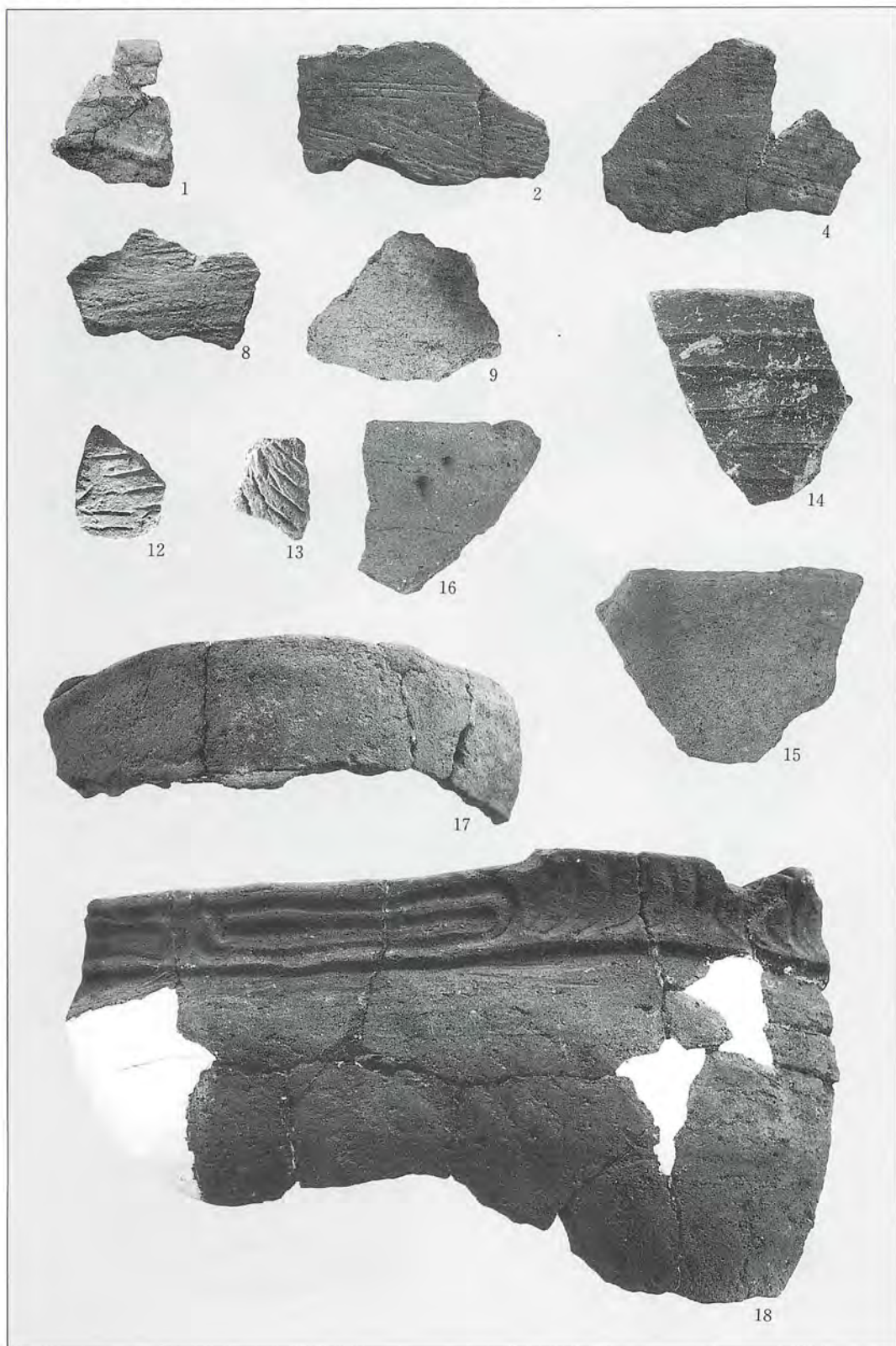


155

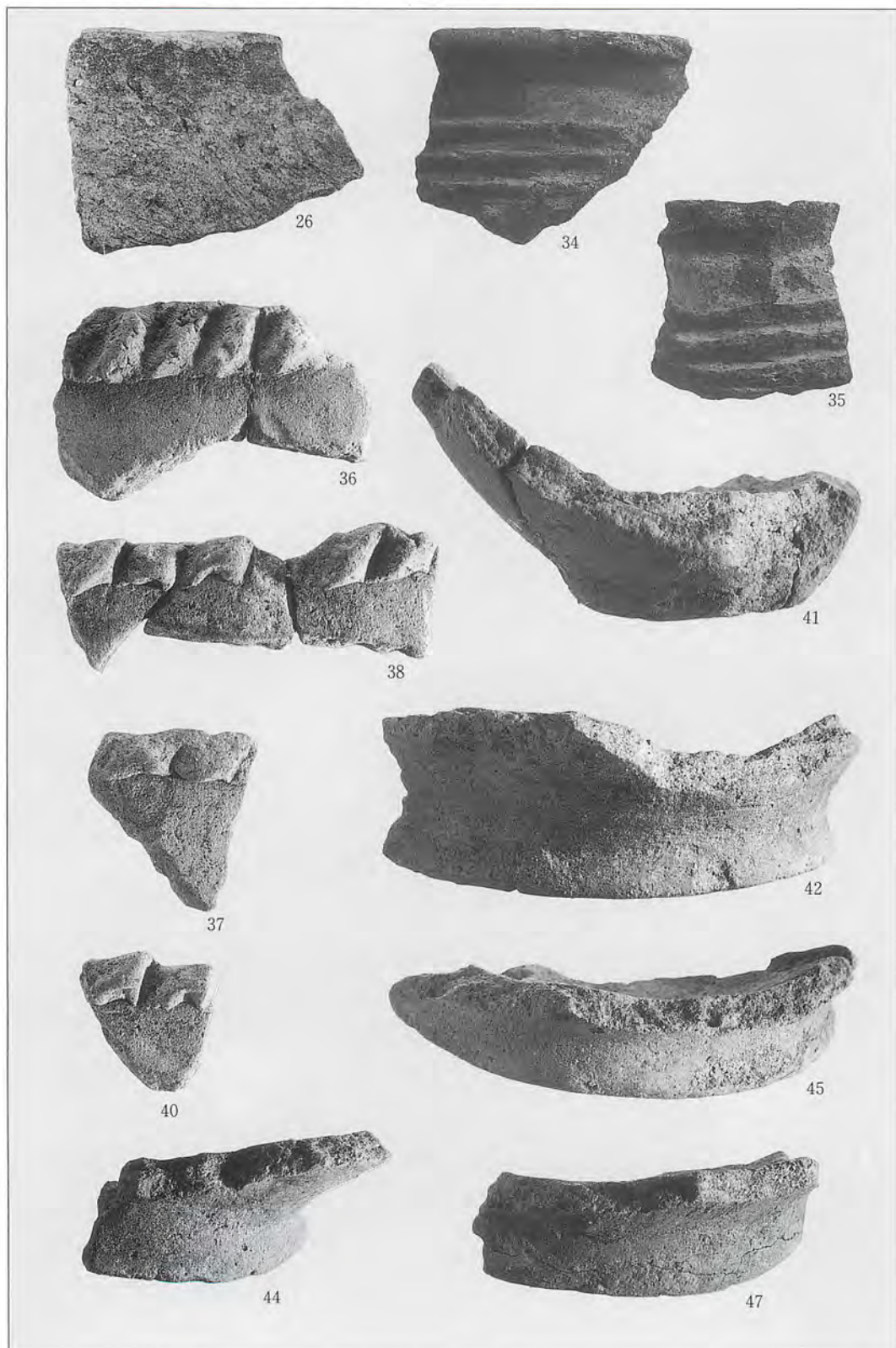
図版34 縄文時代早期の石製品，土製品



図版35 縄文時代前期～古墳時代の土器 (S=1/2)



図版36 縄文時代前期～古墳時代の土器 (S = $\frac{2}{3}$)



図版37 縄文時代前期～古墳時代の石器



あ と が き

ようやく、「白鳥平B遺跡」の調査報告書を発行することができました。

この1冊の報告書が出来上がるまでには、多くの方の御協力と御努力がありました。

そこで、その方々の御芳名を記して感謝の意を表します。

[発掘作業] 松村 弘、坂本勝喜、牛塚利行、松村ハツ子、坂本信子、福川シマエ
上村信子、山口カメ子、宮原立代、石山ヒトエ、松村和代、石工タツト
赤池ハルエ、赤池サツキ、赤池みちえ、赤池睦子、赤池サトミ、赤池文子
赤池オミエ、赤池ミエ子、赤池スミ子、赤池美根子、赤池京枝、宮原チヨノ
花木キエノ、平林婦字子、丸尾栄子、西 和子、山本せい子、中村 恵
中村美香、赤池貴寛、大塚俊彦

[整理作業] 石工みゆき、溝口真由美、尾方信子、迫田洋子、林 枝三、高田ユリ子
佐田ミヨ子、小山正子、水本寿美子、後藤ちず子、宇野玲子、山元友子
荒牧陽子、丸尾克美

熊本県文化財調査報告 第142集

白鳥平B遺跡

平成6年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 (株) 秀 巧 社

〒861-22 熊本県上益城郡益城町古閑106

05 教委·教文

② 004

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 142 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：白鳥平B遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日